千葉県文化財センター調査報告第300集

県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書1

大網白里町一本松遺跡・山田台No.6－2遺跡

東金市山田水呑遺跡・山田新田III遺跡・山田新田所在馬土手

平成9年3月

千　葉　県　土　木　部

財団法人千葉県文化財センター

県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書１

大網白里町一本松遺跡・山田台No.６－２遺跡

東金市山田水呑遺跡・山田新田Ⅲ遺跡・山田新田所在馬土手

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第300集として、千葉県土木部の県道山田台大網白里線事業に伴って実施した大網白里町一本松遺跡、東金市山田水呑遺跡を初めとした5遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居、掘立柱建物跡や、土師器・須恵器など、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理まで御苦労をおかけした補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長　中村好成

凡　例

1　本書は、千葉県土木部による県道山田台大網白里線に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、以下のとおりである。

一本松遺跡	千葉県大網白里町大字餅の木字八幡台541-1ほか（遺跡コード402-003）
山田台№6－2遺跡	大網白里町大字小西字一本松（遺跡コード402-005）
山田水呑遺跡	東金市山田水呑台1,217-6ほか（遺跡コード213-003）
山田新田Ⅲ遺跡	東金市山田新田1,155ほか（遺跡コード213-018）
山田新田所在馬土手	東金市山田新田1,155（遺跡コード213-009）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、成田調査事務所芝山分室長鳴田浩司が第1章・2章、3章第1・2節を担当し、主任技師小林信一が第3章第3節、第4章・5章・6章を担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御指導、御協力を得た。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、山武土木事務所、大網白里町教育委員会、東金市教育委員会

倉田義広、椎名信也、田所　真、山口直人、渡辺修一（敬称略）

7　本書に使用した地形図は、下記のとおりである。

第2図　　国土地理院発行　1/25,000「東金」（NⅠ－54－19－11－4）

第3図　　大網白里町発行　1/2,500　都市計画図

第120・134図　　東金市発行　1/2,500　都市計画図

8　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和56年に撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10　本書で使用しているスクリーントーンは、以下のとおりである。

赤色塗彩

黒色処理

旧石器出土平面図の記号凡例（器種・石材）

器種

ナイフ形石器　小石刃　楔形石器　削器　斧状石器

石核　敲石　磨石　R剥片　U剥片

剥片　砕片　礫・破損礫

石材(小さいドットは礫・破損礫)

硬質頁岩　珪質頁岩　黒曜石　ホルンフェルス　砂岩

緑泥片岩　流紋岩　安山岩　凝灰岩　メノウ

チャート　石英斑岩　粘板岩　頁岩　泥岩

本文目次

第１章　はじめに …… 1
第１節　調査の概要 …… 1
1　調査の経緯と経過 …… 1
2　調査の方法 …… 3
第２節　遺跡の位置と環境 …… 5
第２章　一本松遺跡 …… 8
第１節　立地及び調査の概要 …… 8
第２節　遺構と遺物 …… 8
1　旧石器時代 …… 8
（１）概要 …… 8
（２）石器集中 …… 10
2　縄文時代 …… 46
（１）縄文土器 …… 46
（２）縄文時代石器 …… 56
3　弥生時代 …… 61
4　古墳時代から奈良・平安時代 …… 65
（１）古墳時代 …… 65
（２）奈良・平安時代 …… 92
（３）所属時期不明の遺構 …… 134
5　中世以降 …… 140
6　遺構に伴わない遺物 …… 140
第３節　まとめ …… 143
1　旧石器時代 …… 143
2　縄文時代・弥生時代 …… 144
3　古墳時代～平安時代 …… 144
第３章　山田台No.６－２遺跡 …… 150
第１節　立地及び調査の概要 …… 150
第２節　遺構と遺物 …… 151
1　奈良・平安時代 …… 151
2　遺構に伴わない遺物 …… 155
第３節　まとめ …… 156
第４章　山田水呑遺跡 …… 158
第１節　立地及び調査の概要 …… 158
第２節　遺構と遺物 …… 159

1　旧石器時代 ……159
（1）概要 ……159
（2）石器集中 ……159
2　縄文時代 ……165
3　奈良時代 ……165
4　中・近世 ……172
5　遺構に伴わない遺物 ……172
第3節　まとめ ……173
1　旧石器時代 ……173
2　奈良時代 ……173
第5章　山田新田III遺跡 ……176
第1節　立地及び調査の概要 ……176
第2節　遺構と遺物 ……176
1　平安時代 ……176
2　遺構に伴わない遺物 ……176
第3節　まとめ ……181
第6章　山田新田所在馬土手 ……182
第1節　立地及び調査の概要 ……182
第2節　検出された遺構 ……182
第3節　まとめ ……184
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1図　グリッド分割図…… 3
第2図　遺跡分布図…… 4

一本松遺跡

第3図　一本松遺跡・山田台No.6－2遺跡
周辺地形図…… 7
第4図　下層調査区と石器集中区…… 9
第5図　石器集中地点の平面分布……11
第6図　石器集中地点別の垂直分布……11
第7図　石器集中1・2・9の器種別分布……13
第8図　石器集中3・4・5の器種別分布……14
第9図　石器集中6・7・8の器種別分布……15
第10図　石器集中1・2・9の石材別分布……16
第11図　石器集中3・4・5の石材別分布……17
第12図　石器集中6・7・8の石材別分布……18
第13図　母岩別分布概念図……19
第14図　石器集中地点毎の器種別・石材別
垂直分布……19
第15図　出土石器（1）……22
第16図　出土石器（2）……23
第17図　出土石器（3）……24
第18図　出土石器（4）……25
第19図　出土石器（5）……26

第20図　出土石器（6）……27
第21図　出土石器（7）……28
第22図　出土石器（8）……29
第23図　出土石器（9）－接合資料（1）……30
第24図　出土石器（10）－接合資料（2）……31
第25図　出土石器（11）－接合資料（3）……32
第26図　出土石器（12）－接合資料（4）……33
第27図　出土石器（13）－接合資料（5）……34
第28図　遺構外出土縄文土器（1）……47
第29図　遺構外出土縄文土器（2）……49
第30図　遺構外出土縄文土器（3）……49
第31図　遺構外出土縄文土器（4）……51
第32図　遺構外出土縄文土器（5）……53
第33図　遺構外出土縄文土器（6）……55
第34図　土器片錘……55
第35図　縄文時代石器（1）……57
第36図　縄文時代石器（2）……58
第37図　縄文時代石器（3）……59
第38図　縄文時代石器（4）……60
第39図　遺構外出土弥生土器……61
第40図　遺構配置図……63
第41図　SI 2（1）……66
第42図　SI 2（2）……67
第43図　SI 3……68
第44図　SI 5（1）……70
第45図　SI 5（2）……71
第46図　SI 13（1）……72
第47図　SI 13（2）……73
第48図　SI 15……74
第49図　SI 18……75
第50図　SI 19（1）……76
第51図　SI 19（2）……77
第52図　SI 19（3）……78
第53図　SI 19（4）……79
第54図　SI 20（1）……80
第55図　SI 20（2）……81
第56図　SI 21……81
第57図　SI 22（1）……83
第58図　SI 22（2）……84
第59図　SI 25（1）……85
第60図　SI 25（2）……86
第61図　SI 30……87
第62図　SI 36……88
第63図　SI 40……89
第64図　SI 42……90
第65図　SI 43……91
第66図　SI 45（1）……92
第67図　SI 45（2）……93
第68図　SI 11……94
第69図　SI 14……95
第70図　SI 17……96
第71図　SI 26……97
第72図　SI 32……98
第73図　SI 35……100
第74図　SI 37……101
第75図　SI 39……102
第76図　SI 4……104
第77図　SI 6……105
第78図　SI 7……106
第79図　SI 8……107
第80図　SI 16……108
第81図　SI 23……109
第82図　SI 24……110
第83図　SI 27……112
第84図　SI 33……113
第85図　SI 38……114
第86図　SI 41……115
第87図　SI 44……116
第88図　SI 46（1）……117
第89図　SI 46（2）……118
第90図　SI 47……118
第91図　SB 1・2……120
第92図　SB 3・4……121
第93図　SB 5……122

第94図　SB 7 ……123
第95図　SB 8 ……124
第96図　SB 9 ……125
第97図　SB 10 ……126
第98図　SB 11 ……127
第99図　SB 14・12 ……128
第100図 SB 13・16 ……130
第101図 SB 15 ……131
第102図 SB 19 ……131
第103図 SB 17・18 ……132
第104図 SX 4 （1） ……133
第105図 SX 4 （2） ……134
第106図 SI 1・9・10 ……136
第107図 SI 28・29……137
第108図 SI 31・34……138
第109図 SX 1・5・7 ……139
第110図 SX 6、SD 1 ……141
第111図 遺構外出土遺物・表採遺物 ……142

山田台No.6－2遺跡

第112図 下層確認調査グリッド配置図 ……150
第113図 遺構配置図 ……152
第114図 SI 1 ……153
第115図 SI 2～5 ……154
第116図 SI 2 ……155
第117図 SI 3 ……155
第118図 SI 4 ……155
第119図 表採遺物 ……156

山田水呑遺跡

第120図 山田水呑遺跡周辺地形図 ……157
第121図 上層確認調査グリッド配置図 ……158
第122図 下層確認調査グリッド及び下層
本調査グリッド配置図 ……158
第123図 器種別・石材別分布と出土石器 ……160
第124図 出土石器（1） ……161
第125図 出土石器（2） ……162
第126図 遺構配置図 ……164
第127図 陥穴 ……165
第128図 SI 1 ……166
第129図 SI 2 （1） ……168
第130図 SI 2 （2） ……169
第131図 SI 2 （3） ……170
第132図 SX 1、SD 1・2 ……171
第133図 遺構外出土遺物 ……172

山田新田III遺跡

第134図 山田新田III遺跡・山田新田所在
馬土手周辺地形図 ……175
第135図 上層確認調査及び本調査グリッド
配置図 ……177
第136図 下層確認調査グリッド配置図 ……177
第137図 遺構配置図 ……177
第138図 SX 1・2 ……178
第139図 SD 1 ……178
第140図 3区遺構外出土遺物（1） ……179
第141図 3区遺構外出土遺物（2） ……180
第142図 5区遺構外出土遺物 ……180

山田新田所在馬土手

第143図　遺構配置図……182
第144図　馬土手……183

表目次

一本松遺跡

第１表　一本松遺跡遺構番号新旧対応表 …… 3
第２表　周辺の遺跡 …… 5
第３表　石材と器種組成 …… 35
第４表　石器集中地点と石材組成 …… 36
第５表　石器集中地点と器種組成 …… 37
第６表　旧石器観察表（１） …… 38
第７表　旧石器観察表（２） …… 39
第８表　旧石器観察表（３） …… 40
第９表　旧石器観察表（４） …… 41
第10表　旧石器観察表（５） …… 42
第11表　旧石器観察表（６） …… 43
第12表　旧石器観察表（７） …… 44
第13表　旧石器観察表（８） …… 45
第14表　縄文時代石器属性表 …… 62
第15表　竪穴住居跡計測表 ……147
第16表　遺構別出土土器破片数及びその比率 …148
第17表　墨書土器一覧 ……149
第18表　ヘラ記号土器一覧 ……149

山田水呑遺跡

第19表　石材と器種構成 ……163
第20表　旧石器観察表 ……163
第21表　SI １土器数量表 ……174
第22表　SI ２土器数量表 ……174

土器観察表

第23表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代１）…185
第24表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代２）…186
第25表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代３）…187
第26表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代４）…188
第27表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代５）…189
第28表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代６）…190
第29表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代１）……190
第30表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代２）……192
第31表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代３）……193
第32表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代４）……194
第33表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代５）　…195
第34表　一本松遺跡土器観察表（遺構外出土土器）　……196
第35表　山田台No.６－２遺跡土器観察表 ……196
第36表　山田水呑遺跡土器観察表１ ……197
第37表　山田水呑遺跡土器観察表２ ……198
第38表　山田新田III遺跡土器観察表１ ……199
第39表　山田新田III遺跡土器観察表２ ……200

図版目次

図版１　一本松遺跡・山田台No.６－２遺跡周辺航空写真
図版２　山田水呑遺跡・山田新田III遺跡・山田新田所在馬土手周辺航空写真

一本松遺跡

図版３　一本松遺跡空撮
図版４　一本松遺跡空撮
図版５　一本松遺跡空撮
図版６　１　調査前
　　２　表土除去後
　　３　確認調査状況

図版７　1　旧石器
2　旧石器Ｂ２－63グリッド周辺
3　旧石器土層断面
図版８　1　SI １～５・８～10、SB ３、SX １
2　SI １～５・８～10、SB ３、SX １
3　SI ６・７、SB ４
図版９　1　SI ５～７・11・13～20、SB ２・４～８
2　SI ２
3　SI ４かまど
4　SI ５
図版10　1　SI ６
2　SI ７馬歯出土状況
3　SI ７遺物出土状況
4　SI ７かまど
図版11　1　SI ６・11・13～15・17～20
SB ５・６・８
2　SI ６・11・13～15・19・20
3　SI 11・13・14・16・20
図版12　1　SI 14・15
2　SI 14かまど
3　SI 15かまど
4　SI 14・15・19・26、SB 10
図版13　1　SI 11・16・20、SB ２
2　SI 15かまど
3　SI 17かまど
4　SI 18・19、SB ５・６
図版14　1　SI 19・22・26
2　SI 19遺物出土状況
3　SI 19かまど内遺物出土状況
4　SI 19かまど
図版15　1　SI 11・20、SB ９
2　SI 20かまど
3　SI 22かまど
4　SI 22・23
図版16　1　SI 23
2　SI 23かまど
3　SI 24かまど
4　SI 25かまど
5　SI 24かまど
図版17　1　SI 22・23・26、SB 10
2　SI 22・26
3　SI 26かまど
図版18　1　SI 27・28
2　SI 29、SB 14・15
3　SI 29・30
図版19　1　SI 35・36・43
2　SI 44かまど
3　SI 46かまど
4　SI 46
図版20　1　SI 30～32
2　SI 32かまど
3　SI 29～33、SX ４
図版21　1　SI 32・33、SB 15
2　SI 33かまど
3　SI 34、SB 15・18
図版22　1　SI 34・35
2　SI 35かまど
3　SI 35かまど
4　SI 34・5・42・43、SB 18
図版23　1　SI 35・36
2　SI 36かまど
3　SI 36・42・43
図版24　1　SI 37
2　SI 37かまど
3　SI 38かまど
4　SI 38
図版25　1　SI 40
2　SI 42かまど
3　SI 39かまど
4　SI 35・42、SB 18
図版26　1　SI 47
2　SB 14
3　SB 15
図版27　1　SB 10

2　SX 2
3　SX 6
図版28 出土石器（1）
図版29 出土石器（2）
図版30 出土石器（3）
図版31 出土石器（4）
図版32 出土石器（5）
図版33 出土石器（6）
図版34 遺構外出土縄文土器（1）
図版35 遺構外出土縄文土器（2）
遺構外出土縄文土器（3）
図版36 遺構外出土縄文土器（4）
図版37 遺構外出土縄文土器（5）
土器片錘
遺構外出土弥生土器
図版38 遺構外出土縄文土器（6）
図版39 SI 2出土遺物
図版40 SI 3・5出土遺物
図版41 SI 5・13出土遺物
図版42 SI 13出土遺物
図版43 SI 13・15・18・19出土遺物
図版44 SI 19出土遺物
図版45 SI 19出土遺物
図版46 SI 19出土遺物
図版47 SI 19出土遺物
図版48 SI 19・20出土遺物
図版49 SI 20～22出土遺物
図版50 SI 25・30出土遺物
図版51 SI 36・40・42・43・45出土遺物
図版52 SI 45出土遺物
図版53 SI 11・17・26出土遺物
図版54 SI 26・35・37・39出土遺物
図版55 SI 4・6出土遺物
図版56 SI 6～8出土遺物
図版57 SI 16・23・24出土遺物
図版58 SI 24・27出土遺物
図版59 SI 33・38・44出土遺物
図版60 SI 41・44・46・47出土遺物
図版61 SI 46、SB 2・10、SX 4出土遺物
図版62 SX 4出土遺物
図版63 遺構外・表採遺物
図版64 墨書土器
図版65 金属製品
図版66 金属製品
図版67 砥石・硯

山田台No.6－2遺跡

図版68 1　SI 1
2　SI 1かまど
3　SI 2
図版69 1　SI 3
2　SI 4
3　SI 4・5
図版70 SI 1～4出土遺物・表採遺物

山田水呑遺跡

図版71 1　発掘調査前風景
2　旧石器時代石器集中地点全体 東から
3　旧石器時代石器集中地点西地区 北から
図版72 1　旧石器時代石器集中地点東地区 北から
2　SX 2
3　SX 3
4　SX 1半裁
5　SX 1
図版73 1　SI 1・2
2　SI 2
3　SI 2かまど
4　SI 2鉄製紡錘車出土状況
図版74 1　SI 1
2　SI 1かまど
3　SD 2
4　SD 1

図版75 出土石器（1）正面
出土石器（2）
図版76 出土石器（3）裏面
出土石器（4）
図版77 SI 1・2出土遺物
図版78 SI 2出土遺物
図版79 SI 1・2出土遺物・金属製品

山田新田Ⅲ遺跡

図版80 1 発掘調査前風景
2 SX 1・2
3 SD 1
図版81 3区・5区出土遺物

山田新田所在馬土手

図版82 1 発掘調査前風景
2 溝検出状況
3 溝断面

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

県道山田台大網白里線は、東金有料道路山田インターと大網白里町の中心部を結ぶ幹線道路で、近年の交通量の増加と周辺の大規模宅地開発に伴い道路の整備が急がれていた。そこで、千葉県土木部は県道山田台大網白里線の道路改良を計画し、事業に先立って昭和59年６月13日付けで千葉県土木部長から事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会あて提出した。これを受けて千葉県教育委員会は、昭和59年７月13日付け教文第１号の251で「縄文土器散布地１か所」がある旨回答した。協議の結果、現状保存が困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県文化財センターが担当することとなった。

年度別の事業名は、以下のとおりである。

昭和63年度　一般県道大網停車場丘山線住宅宅地関連事業に伴う埋蔵文化財調査

平成３年度　一般県道大網停車場丘山線住宅宅地関連公共施設整備促進事業に伴う埋蔵文化財調査

平成４年度　同上

平成６年度　住宅宅地関連(山田台大網白里線)事業に伴う埋蔵文化財調査

平成７年度　住宅宅地関連(山田台大網白里線)に伴う埋蔵文化財調査

平成８年度　同上

対象となった遺跡は合計５遺跡あり、調査の古い順から山田水呑遺跡、一本松遺跡、山田新田Ⅲ遺跡、山田新田所在馬土手、山田台№６－２遺跡となる。昭和63年７月の山田水呑遺跡発掘調査に始まり、その後一時中断したものの、平成３年から調査が再開され、平成５年１月の山田台№６－２遺跡の発掘調査をもって終了した。概要は以下の通りである。

調査経歴

(発掘調査)

１　一本松遺跡(遺跡コード　402－003)

所 在 地　　山武郡大網白里町大字餅の木字八幡台541－１ほか

調査期間　　平成４年１月７日～同年３月30日

　　平成４年６月１日～同年９月30日

調査面積(平成３年度)

　　調査対象面積　3,000㎡

　　確認調査上層　300㎡／3,000㎡

　　下層　60㎡／1,500㎡

　　本調査　上層　1,500㎡

　　下層　０㎡

調査組織　　調査部長　天野努　部長補佐　阪田正一　班長　深澤克友

調査担当者　　技師　沖松信隆

（平成４年度）

調査対象面積　4,000㎡

確認調査上層　250㎡／2,500㎡

下層　160㎡／4,000㎡

本調査　上層　4,000㎡

下層　500㎡

調査組織　調査部長　天野努　部長補佐　深澤克友　班長　鈴木定明

調査担当者　　技師　豊田秀治

2　山田台No.６－２遺跡（遺跡コード　402－005）

所 在 地　山武郡大網白里町小西字一本松

調査期間　平成５年１月８日～同年１月29日

調査面積　調査対象面積　172㎡

確認調査下層　７㎡／172㎡

本調査上層　172㎡

調査組織　調査部長　天野努　部長補佐　深澤克友　班長　鈴木定明

調査担当者　　技師　豊田秀治

3　山田水呑遺跡（遺跡コード　213－003）

所 在 地　東金市山田水呑台1,217－６ほか

調査期間　昭和63年７月１日～同年７月29日

調査面積　調査対象面積　580㎡

確認調査上層　58㎡／580㎡

下層　24㎡／580㎡

本調査　上層　580㎡

下層　70㎡

調査組織　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　岡川宏道　班長　矢戸三男

調査担当者　　調査研究員　新田浩三

4　山田新田Ⅲ遺跡（遺跡コード　213－018）

所 在 地　東金市山田新田1,155ほか

調査期間　平成４年12月１日～平成５年１月29日

調査面積　調査対象面積　1,700㎡

確認調査上層　170㎡／1,700㎡

下層　68㎡／1,700㎡

本調査上層　115㎡

調査組織　調査部長　天野努　部長補佐　深澤克友　班長　鈴木定明

調査担当者　　技師　豊田秀治

5　山田新田所在馬土手(遺跡コード　213－009)

所 在 地　　東金市山田新田1,155ほか

調査期間　　平成４年12月14日～同年12月25日

調査面積　　調査対象面積　50㎡

確認調査下層　２㎡／50㎡

本調査上層　　50㎡

調査組織　　調査部長　天野努　部長補佐　深澤克友　班長　鈴木定明

調査担当者　　技師　豊田秀治

(整理作業)

平成６年４月から平成８年３月まで

調査組織　　調査研究部長　西山太郎　事務所長　矢戸三男（平成６年度)、石田広美（平成７年度)

整理担当者　　芝山分室長　鳴田浩司

平成８年８月から平成９年１月まで

調査組織　　調査部長　西山太郎　事務所長　石田広美

整理担当者　　主任技師　小林信一

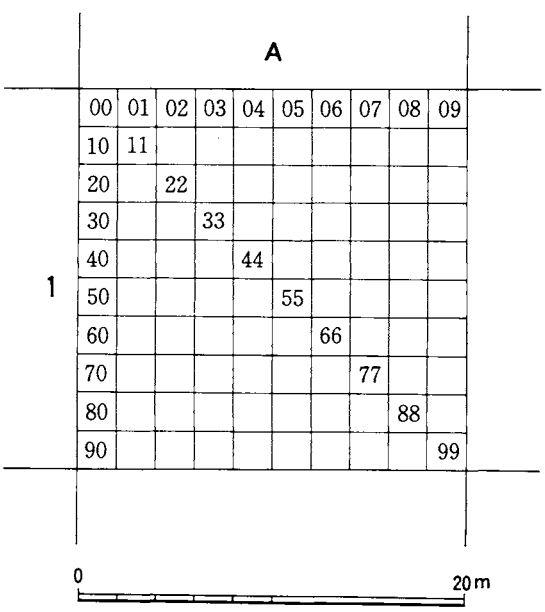
2　調査の方法

一本松遺跡・山田台No.６－２遺跡・山田水呑遺跡・山田新田Ⅲ遺跡の発掘調査では、それぞれの遺跡ごとに公共座標に基づく20m単位の方眼を大グリッドとしている。大グリッドは、南北方向に北から１・２・３……、東西方向を西からA・B・C……とした(一本松遺跡については、南北方向をA・B・C、東西方向を１・２・３としている)。さらに大グリッド内を２m単位の小グリッドとして00～99の番号(第１図)を付した(山田新田Ⅲ遺跡を除く)。このため各小グリッドは、A１－00、B２－55等のように呼称した。

上層の確認調査は、遺構・遺物の分布状況・密度等を把握するため対象面積に対して10%実施し、確認グリッドの規模は２m×２mを基本とした。

下層の確認調査においてもグリッドの規模は同様とし、全体の約４%を実施した。

なお、一本松遺跡については、発掘調査終了後に整理の都合により、竪穴住居跡と土坑の一部の遺構番号を変更している(第１表)。



第１図　グリッド分割図

第１表　一本松遺跡遺構番号新旧対応表

新	旧	新	旧	新	旧
SI 14	SI 13	SI 11	SI 13	SI 3	SI 2
SX 1	SI 3	SI 9	SI 5	SI 4	SI 9
SI 10	SI 1	SI 18	SI 15	SI 24	SI 25

第２図　遺跡分布図（1／25,000）

第２節　遺跡の位置と環境

JR外房線は土気駅を過ぎ、まもなくトンネルを抜けると谷津田を横に見ながら眼前に海岸平野が広がる大網駅に到着する。大網駅から県道山田台大網白里線を谷津田に沿って北西方向に約２キロメートルほど行くと、谷津が終わり山の急斜面を大きく蛇行しながら急坂を登っていく。登り詰めると標高80mの台地上にたどり着く。この登り詰めた台地の先端に一本松遺跡がある。振り返って台地上から見おろすと、細尾根の山並みの中に谷津田があり、その先に九十九里平野が広がり、天気の良い日にははるか遠く太平洋が見渡せる。山田台No.６－２遺跡は、この台地先端に立地する一本松遺跡から北方向に約0.2km行ったところにある。遺跡の西側では北から入り込む浅い谷に面する。地形的には一本松遺跡と同一の遺跡として括られる。山田新田III遺跡と、山田新田所在馬土手は更に1.8km北方にあり、また、更に0.9km北方に山田水呑遺跡がある。各々の遺跡の位置関係は以上のようになるが、特に一本松遺跡や山田台No.６－２遺跡の隣接地は、宅地開発による大規模な発掘調査が財団法人山武郡市文化財センターによって実施され、現在その膨大な資料の整理のただ中にある。この遺跡群は東金市と大網白里町にまたがり、大網山田台遺跡群と呼ばれる。合計12地点から成り、それぞれNo.１からNo.12までの番号が与えられている。山田台No.６－２遺跡はそのうちの大網山田台遺跡群No.６遺跡の一角に位置し、また、一本松遺跡はNo.６遺跡に包含されなかった台地先端の新発見の遺跡である。

調査された各遺跡の立地は各章で説明することとし、ここでは周辺遺跡の概要を述べる(第２図)。

旧石器時代の遺跡では沓掛貝塚、東金市大網山田台No.１・３遺跡、大網白里町大網山田台No.４・６遺跡がある。沓掛貝塚ではVI層中から２つのブロックが検出され、彫器、剝片、砕片などが、大網山田台No.１遺跡ではIII層からポイント、スクレーパー、ナイフ形石器等が、同No.３遺跡からはポイント、スクレーパー等が出土している。大網山田台No.４遺跡からはIII層からブロック２か所が検出され、礫が多数出土している。同No.６遺跡では３か所のユニットが検出され、VI層からナイフ、スクレーパー、剝片などが出土している。

縄文時代の遺跡では東金市山田水呑遺跡、大網山田台No.１・２・３・４・６・９遺跡、沓掛貝塚などがある。大網山田台No.１遺跡では早期撚糸文系土器がまとまって出土している。同No.３遺跡では中期阿玉台式土器の出土が目立つ。同No.２遺跡では早期撚糸文系土器、貝殻条痕文系土器、後期堀之内式土器の出土が目立つ。同No.４遺跡では早期の土器が多い。同No.９遺跡では早期撚糸文系土器と中期加曽利Ｅ式土器が多い。同No.６遺跡では加曽利ＥIII式期の竪穴住居跡が検出されている。沓掛貝塚では早期田戸下層式から晩期千網式まで長期間にわたって遺物が出土している。特に、加曽利Ｂ期、安行期の遺物が多く出土している。総じて、早期と後期の遺物を多く出土する地域である。

弥生時代の遺跡では周辺には大きな遺跡は見当たらないが、やや離れた所では東金市で弥生時代全期にわたっての遺構・遺物が発見されている道庭遺跡が挙げられる。特に中期から後期にかけての大規模な集

第２表　周辺の遺跡

1	一本松遺跡	7	大網山田台No.２遺跡	13	大網山田台No.８遺跡	19	宮谷横穴群
2	山田台No.６－２遺跡	8	大網山田台No.３遺跡	14	大網山田台No.９遺跡	20	土気城
3	山田水呑遺跡	9	大網山田台No.４遺跡	15	大網山田台No.10遺跡	21	大網城
4	山田新田III遺跡	10	大網山田台No.５遺跡	16	大網山田台No.11遺跡	22	沓掛貝塚
5	山田新田所在馬土手	11	大網山田台No.６遺跡	17	大網山田台No.12遺跡（小西城）		
6	大網山田台No.１遺跡	12	大網山田台No.７遺跡	18	餅木横穴群		

落やそれに伴う方形周溝墓など当地域における弥生時代の標識遺跡となっている。

古墳時代の遺跡では大網山田台№4・6・10遺跡、東金台遺跡などの大規模な集落遺跡や餅木横穴群、瑞穂横穴群、県神社古墳群などの墓地遺跡が挙げられる。大網白里町大網山田台№6遺跡では一本松遺跡に近い地点に7世紀代を中心に集中的に集落が営まれた。一本松遺跡から谷津部に向かうと平坦部はなくなり、河川の浸食により造られた細い馬の背状の尾根が続く。この尾根の海岸平野を見渡せる南側斜面に、数十基からなる餅木横穴群が展開する。餅木横穴群は、平成3年7月から7年3月まで断続的に財団法人千葉県文化財センターによって合計21基の横穴墓の調査が行われた。その成果は未整理であるが、当地域独特の高壇を有し、コの字形の棺台を持つ横穴墓や7世紀半ば頃の須恵器などが発見されており、一本松遺跡の集落との関連が注目される。

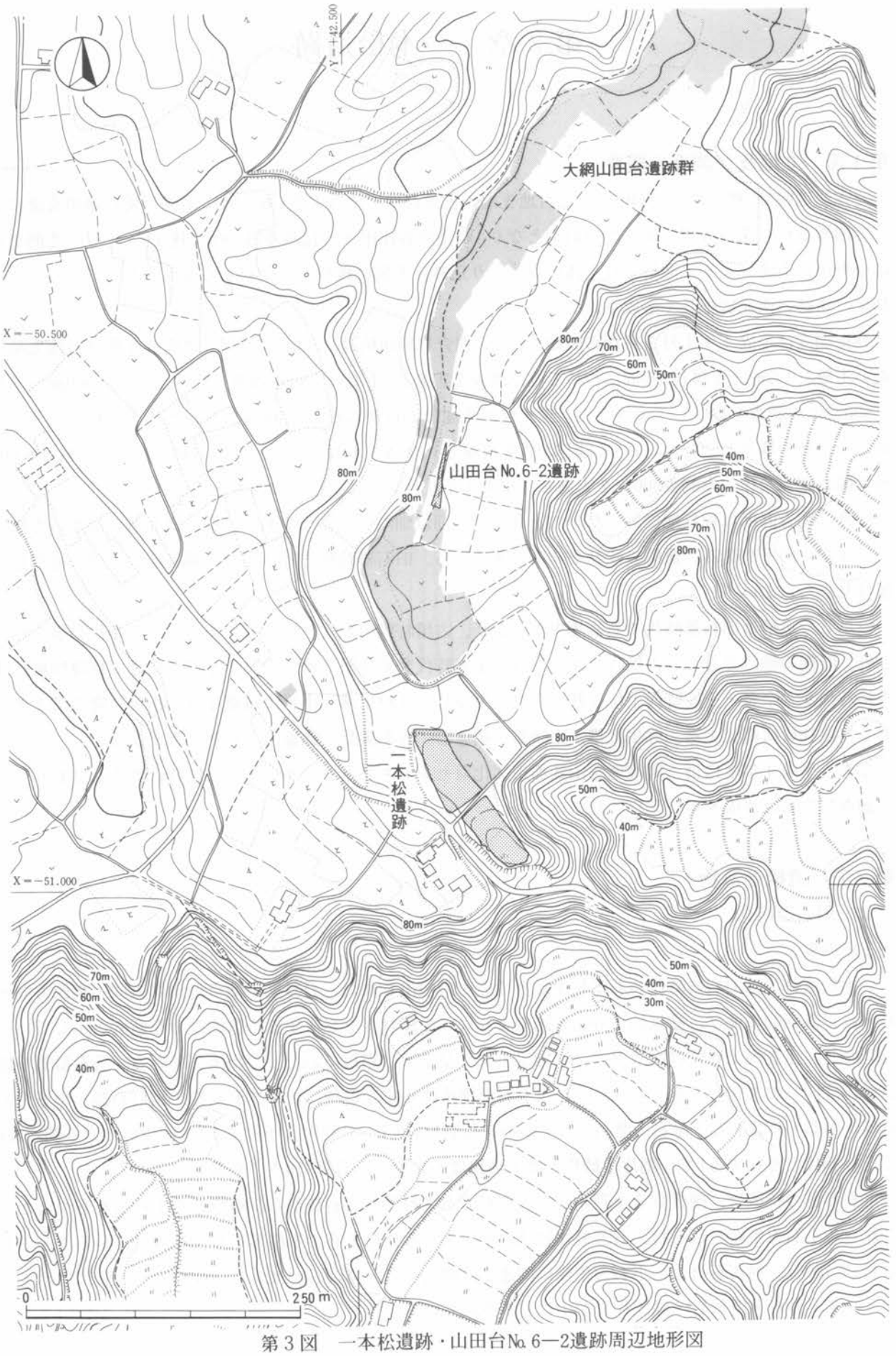
奈良・平安時代の遺跡では大網山田台№3・6遺跡、東金市山田水呑遺跡などが挙げられる。大網山田台№3遺跡、山田水呑遺跡からは「山口」の墨書土器が出土しており、この地域が「和名抄」に記載された上総国山辺郡山口郷に比定されることが実証された。また、大網山田台№3遺跡では8世紀から9世紀代の寺院跡と考えられる四面庇付掘立柱建物や香炉蓋、瓦鉢、銅製托など寺院に関連する遺物が発見され、村落内寺院の存在が明らかとなった。№6遺跡からは全国的にも珍しい青銅製の分銅が発見され注目された。一方、山田水呑遺跡では8世紀前半頃に成立した大規模集落が発見された。この遺跡の堀立柱建物跡は山口郷の筆頭ともいえる有力者の家あるいは山口郷にある役人の宿舎と考えられる。なお、周辺の遺跡地図から外れるが、東金市久我台遺跡は古墳時代から中世にかけての大集落遺跡であり、今回の整理に当たっては出土遺物の近似性から非常に参考になった遺跡である。

古代末期には、桓武平氏が東国に下向し、開発領主として各地で武士団を形成し、10世紀前半には平将門の乱が勃発する。11世紀前半には平忠常が大椎城(千葉市大椎町)を拠点に上総・安房国府を攻撃し朝廷に対抗するが、当地域も忠常の影響下にあったと考えられる。忠常の子孫は下総で千葉氏、上総で上総氏を名乗り、さらに両総各地に分散し、鎌倉時代の大網白里地域には、幕府創立時に頼朝を助けた上総広常の系統の大椎氏や印東氏が領主として存在していたことが推測されている。また、南北朝期の当地域の動向は不明な点が多いが、山武郡は南郡と北郡に分かれ、多くの郷村は国衙領となっていたようである。

15世紀前半には、上杉氏の内紛や将軍家の継嗣問題も絡んだ鎌倉公方と上総国を本拠地とした関東管領上杉禅秀の対立、さらに武射郡の埴谷氏(山武町)を首謀者とする禅秀の余党の反乱(上総本一揆)が起こる。また、鎌倉公方持氏と関東管領上杉憲実・室町幕府の対立から永享の乱、結城合戦が起こり、房総の武士団も両者に分かれて争い、当地域も巻き込まれたことが考えられる。

戦国時代の始まる15世紀半ばには、千葉宗家をめぐる内紛が起こるが、当地域は京都から下総に下向した東常縁とその臣浜春利の支配下に移った。しかし、その後に登場する土気城・東金城の両酒井氏の出自は明らかではない。酒井氏の去就は時に応じて、千葉・原氏方、後北条氏方、里見氏方と流動的であったが、天正18年(1590)、後北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされて酒井氏も滅亡した。

本遺跡のすぐ南に展開する金谷郷の集落は、南西約1.5kmの土気城北方の谷内にあり、永禄8年(1565)後北条氏の土気城攻めの際の戦場として「金谷口」が登場すること(河田長親宛酒井胤治書状)、南東約2.5kmには土気城の支城と推測される板倉氏の大網城が存在することなどから、土気酒井氏領内であったことが考えられる。なお、北東約1.7kmには原氏の居城と推測される小西城跡が存在する。同城も16世紀後半の縄張りを有するが、土気酒井氏との関係は不明である。



第3図　一本松遺跡・山田台No.6—2遺跡周辺地形図

第２章　一本松遺跡

第１節　立地及び調査の概要

一本松遺跡は、標高82m～84mの下総台地先端の舌状台地に位置する(第３図)。南側は南白亀川支流によって開析された深い谷津に面した急斜面となり、眼下の谷津田との比高差は50mに達する。一方、北側からは小野川の支流によって開析された浅い谷が入り込み、北側に緩やかに傾斜する地形となっている。その結果、遺跡は南北に細長く形成されている。

発掘調査は平成４年１月７日から開始された。調査対象面積は5,500m²である。平成３年度は台地先端に近い上層3,000m²と下層1,500m²について確認調査を実施し、上層は全域本調査となったため3,000m²のうち1,500m²の本調査を継続して実施した。翌平成４年度は６月から残り1,500m²の上層本調査を行うとともに、新たに上層の残り2,500m²について確認調査を実施し、全域の本調査を行った。下層については残り4,000m²の確認調査及び、本調査500m²を実施し、平成４年９月30日にすべての調査を完了した。

現地は調査直前は荒れ地であったが、それより以前は畑だったようである。遺跡は北側に向かって傾斜し、また、削平が進み、遺構の残りが非常に悪くなる。旧石器時代を除いては、縄文時代以降の遺物包含層は見当たらない。

検出した遺構は旧石器時代の石器集中が９か所、古墳時代の竪穴住居16軒、奈良・平安時代の竪穴住居22軒、時期の確認できない古墳時代から奈良・平安時代竪穴住居７軒、奈良・平安時代掘立柱建物跡18棟、古墳時代から奈良・平安時代土坑３基、奈良・平安時代井戸１基、中世土坑墓１基、中世以降の溝１条である。遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、青銅製品、鉄製品、石製品等がある。

なお、平成４年度には、隣接地を山武郡市文化財センターが県センターと共に同時に調査しており、この調査報告書は平成８年に刊行されている。

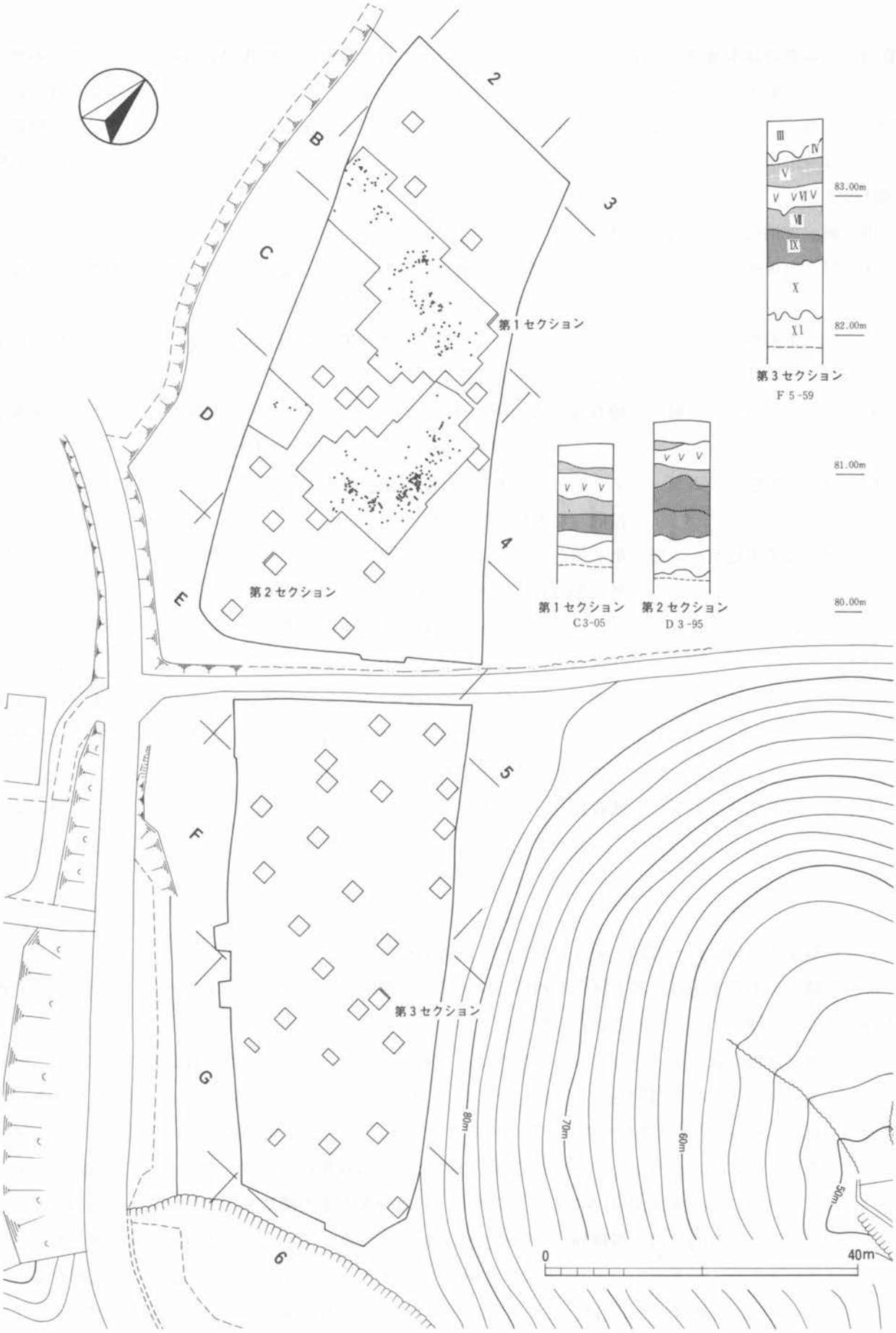
第２節　遺構と遺物

１　旧石器時代

（１）概要

一本松遺跡では旧石器時代の石器集中が９地点から検出された。石器集中地点は南北方向・東西方向それぞれに直線的に並び、結果的に谷頭を囲むように「半環状」を形成する特徴的な分布傾向を示している(第４図)。主な出土層位はⅨ層上部からⅦ層上部、ひろくはⅥ層にわたって出土している。各石器集中地点はほぼ同一の文化層と捉えられる。出土石器を構成する主な器種はナイフ形石器・楔形石器・小石刃・石核・削器・斧状石器・敲石・磨石・加工痕のある剥片(以下、R剥片と呼称する)・使用痕のある剥片(以下、U剥片と呼称する)で、剥片・砕片・礫・破損礫を含めると合計319点の石器が出土した。

本石器群の特徴は、硬質頁岩を利用した大形石刃を素材とする石核から剥離された小石刃をもつことと、これらの小石刃生産とは石材、石器製作技法の上で異なる性格を有する楔形石器を組成していることである(矢本1996)。利用石材は、小石刃生産に関連して硬質頁岩・黒曜石が使われ、楔形石器生産にはホルンフェルス・砂岩・流紋岩・緑泥片岩が主に利用されている。



第4図　下層調査区と石器集中区

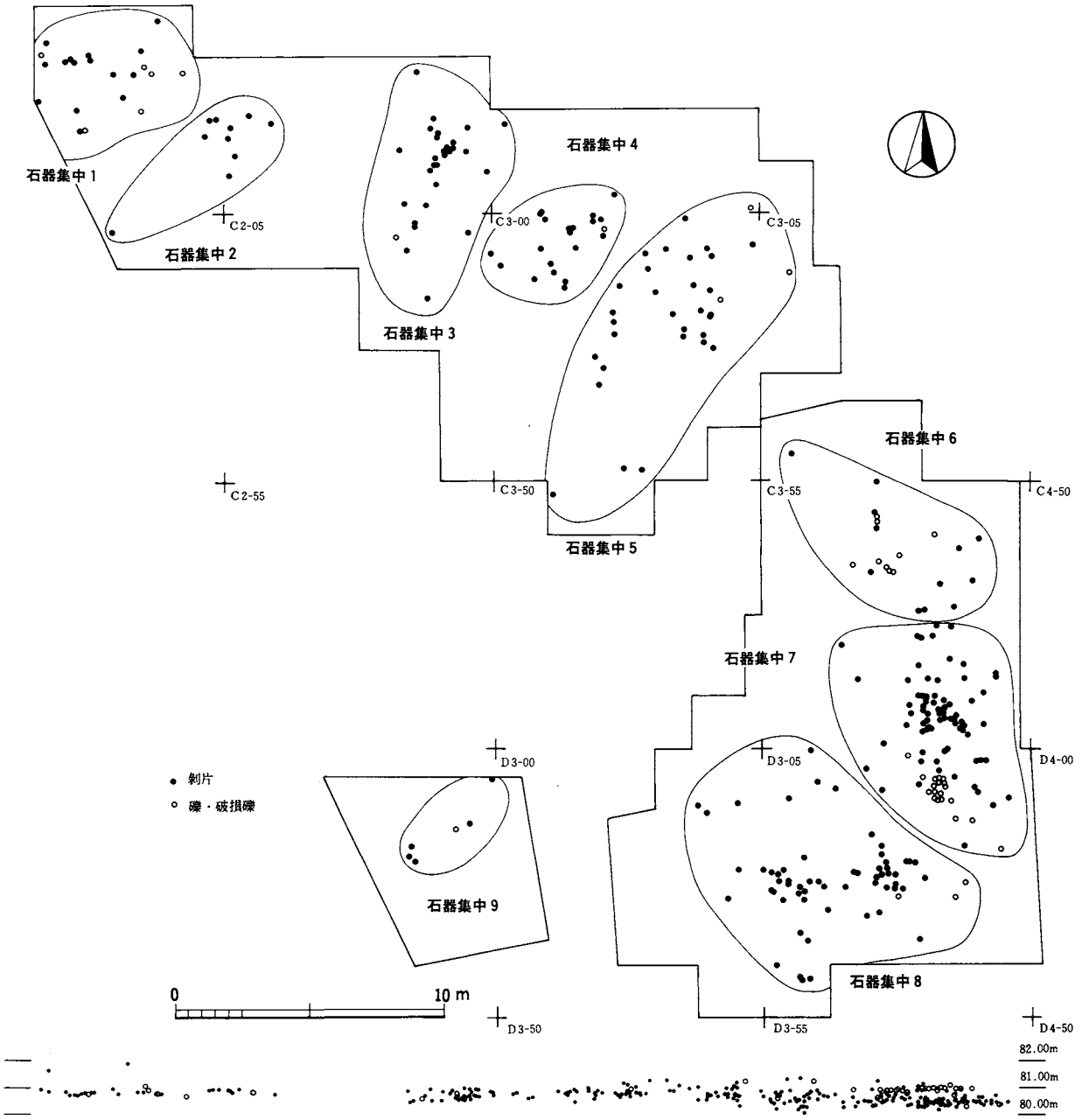
立川ローム層の基本層序　第４図に３地点の立川ローム層を分層した柱状図を掲載した。３地点のセクションの中で第３セクションの標高が際だって高いのは、第１・２セクションは北方向から走る谷頭に当たる北斜面に位置するためであり、結果として第３セクションとの比高差が約２mに及んでいる。同様に地形的な理由から立川ローム層自体の層厚も第１・２セクションに比べ、第３セクションの方が倍近い堆積状況を示している。

Ⅲ　層	黄褐色ローム層	ソフトローム
Ⅳ　層	明黄褐色ローム層	以下ハードローム層　Ⅳ層はソフト化によってあまり検出されていないか、若しくはⅤ層に含まれている可能性がある。
Ⅴ　層	黄褐色ローム層	第１黒色帯　黒色帯はあまり黒い色調を呈していない。一部、Ⅳ層が混在している可能性がある。
Ⅵ　層	明褐色ローム層	姶良丹沢火山灰(AT)包含層　径1mm～3mmの赤色・青色スコリアを多く含む。ATは径3mm～5mmのスコリア状に含まれる。
Ⅶ　層	暗黄色ローム層	第２黒色帯上半部　第２黒色帯上半部もあまり黒い色調を呈しておらず、拡散したATを多く含む。
Ⅸ　層	暗黄褐色ローム層	第２黒色帯下半部　やや黒み帯びる。また、場所によってはⅨa層とⅨc層に細分可能である。径1mm～2mmの赤色・青色スコリアを多く含む。
Ⅹ　層	暗黄色ローム層	立川ローム最下層　石器集中地点付近の、谷津に面する斜面では多くが「水つきローム」によって本来のⅩ層の層厚や層状を呈していない。また、色調もかなり暗めとなっている。第３セクションで見られるように、本来のⅩ層の堆積が見られるところではかなり層厚があり、武蔵野ローム層と接する面も波状を呈している。
ⅩⅠ層	濃茶色ローム層	武蔵野ローム最上層　通常は青灰色の色調を呈するが、水の影響によって色調が変化している。よって、本層のすべてがⅪ層に限定されるものでないことには注意を要する。

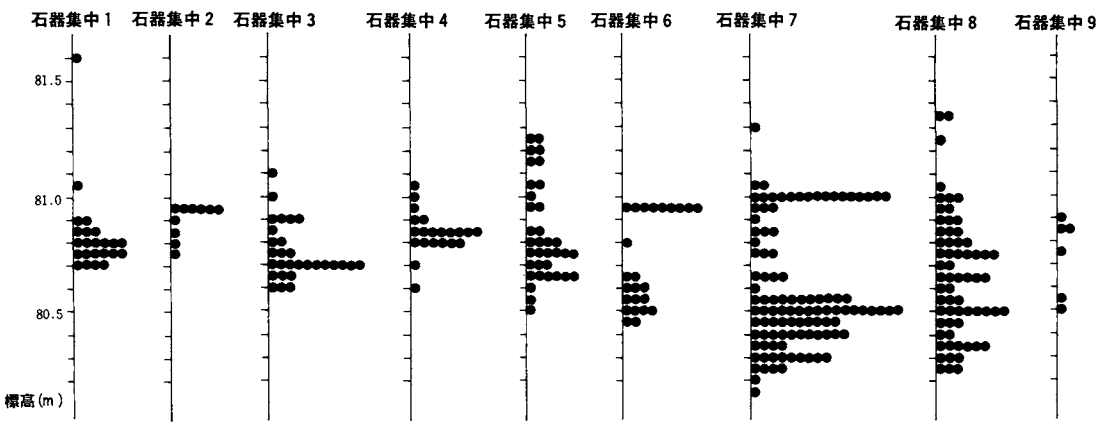
（２）石器集中（第４図～27図、第３表～13表、図版７・28～33）

旧石器時代の石器集中は、調査区の北西側に位置する。台地上での立地は、北方向からのびてくる「田中谷」の谷頭を囲むように、石器群が分布している。

調査当時、遺物を取り上げる際に、石器群を第１～第４「ユニット」の４つの石器集中区に分離している。よって遺物の注記番号(観察表の遺物番号）は各「ユニット」毎の通し番号となっている(つまり、観察表の項目の「ユニット」は調査時に付けた名称のことである)。そして整理段階で、石器の平面分布図を作成した際に、便宜的に石器集中１から石器集中９の９つの石器集中区を最小単位として分離した(第５図)。これはあくまで視覚的に線引きしただけであり、石器分布本来の構造や内容を示すものではない。意味ある線引きは、理想的には、器種別分布、石材別分布、接合関係等の石器自体の属性を反映した分布と照らして問題とされるべきものであり、それらの検討を踏まえた上で行われるものであると思われる。したがって、便宜的に分離させた石器集中1～９に基づいて、出土石器の属性の検討を行った上で、その後に意味ある線引きの可能性を模索したい。



第5図　石器集中地点別の分布



第6図　石器集中地点別の垂直分布

礫　群　　石器集中１・石器集中６・石器集中７の３地点で礫の集中箇所が見られる(第５図)。石器集中１は散漫な出土状況を呈し、検討に耐えない。一方、石器集中６と石器集中７にある礫群は小規模ながらまとまりが見られるが、垂直分布を見ても分かるように他の石器群の分布と遊離しており、時期的に異なるものである可能性がある(第５・14図)。

接合関係　　接合関係が見られる剥片石器の母岩は11母岩に及び、14の接合資料が抽出できた。各接合資料の分布範囲の多くは、各石器集中区内で収束し、石器集中区間に広がるものは、接合資料10・11・13のみである。広がるといっても、これらはいずれも隣接した石器集中区における接合関係であり、これらの接合関係からは石器集中１・２・３・４間と石器集中６・７間の関連性が指摘できる(第10～12図)。

接合資料１（第23図61＋62）　石器集中５に属し、折面同士の接合資料である。流紋岩２。

接合資料２（第23図63＋64）　石器集中８に属し、やや幅広の剥片同士の接合資料である。かなり風化が激しく、剥離面観察が困難であるが、打面調整が施されているようである。ホルンフェルス10。

接合資料３（第23図16＋17）　石器集中５に属し、楔形石器同士(第16図16・17)の接合資料である。本来は一つの楔形石器として機能していたが、使用中に分割され、その後も両者は使用を続けている。流紋岩３。

接合資料４（第23図65＋66）　石器集中７に属し、U剥片同士の接合資料である。両者共に被熱のために赤変・黒変し、一部にハジケている箇所も見られる。65は複剥離打面であり、打面調整が施されている。66は平坦打面である。同一母岩でもう１点縦長剥片が出土している。硬質頁岩６。

接合資料５（第23図52＋67）　石器集中８に属し、R剥片とその調整剥片の接合資料である。凝灰岩２。

接合資料６（第24図36＋68＋69）　石器集中８に属し、石核と剥片２点の接合資料である。平坦な礫面を打面として小剥片を剥離している。凝灰岩１。

接合資料７（第24図25＋70）　石器集中７に属し、楔形石器と剥片の接合資料である。剥片はかなり早い段階で剥離されたものであり、剥離後も、石核形状が大きく変化していることが接合状況から観察される。25の楔形石器は、他の楔形石器と異なり、礫面を残した大形のものである。見方を変えれば、両極技法を駆使した剥片剥離石核とすることも可能であろう。緑泥片岩１。

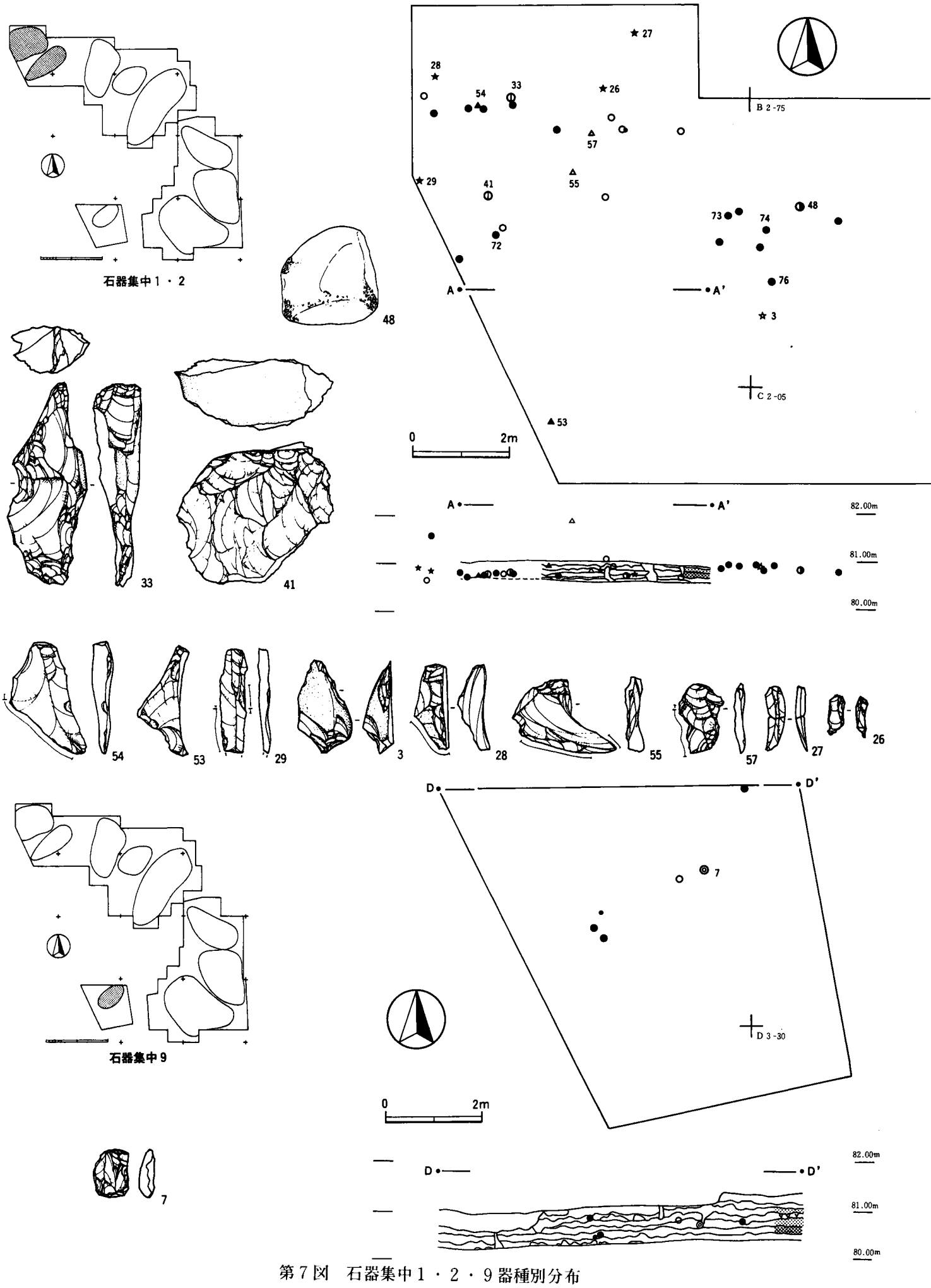
接合資料８（第25図39＋40）　石器集中８に属し、石核同士の接合資料である。接合面は節理面であり、そのほかに同一剥離面をもつ接合面はないことから、かなり早い段階で分割されたことが窺える。分割された一方は、打面調整が施されず内湾した節理面を打面として幅広の剥片を剥離している(40)。もう一方は剥片剥離面を打面とし、打面転位を頻繁に行うことによって盤状石核状を呈している(39)。珪質頁岩３。

接合資料９（第25図37＋71）　石器集中５に属しているが、分布はやや独立している。石核と剥片の接合資料である。やや大形の円礫を節理面によって分割したものを素材とし、平坦な礫面を打面として剥片剥離を行っている。メノウ１。

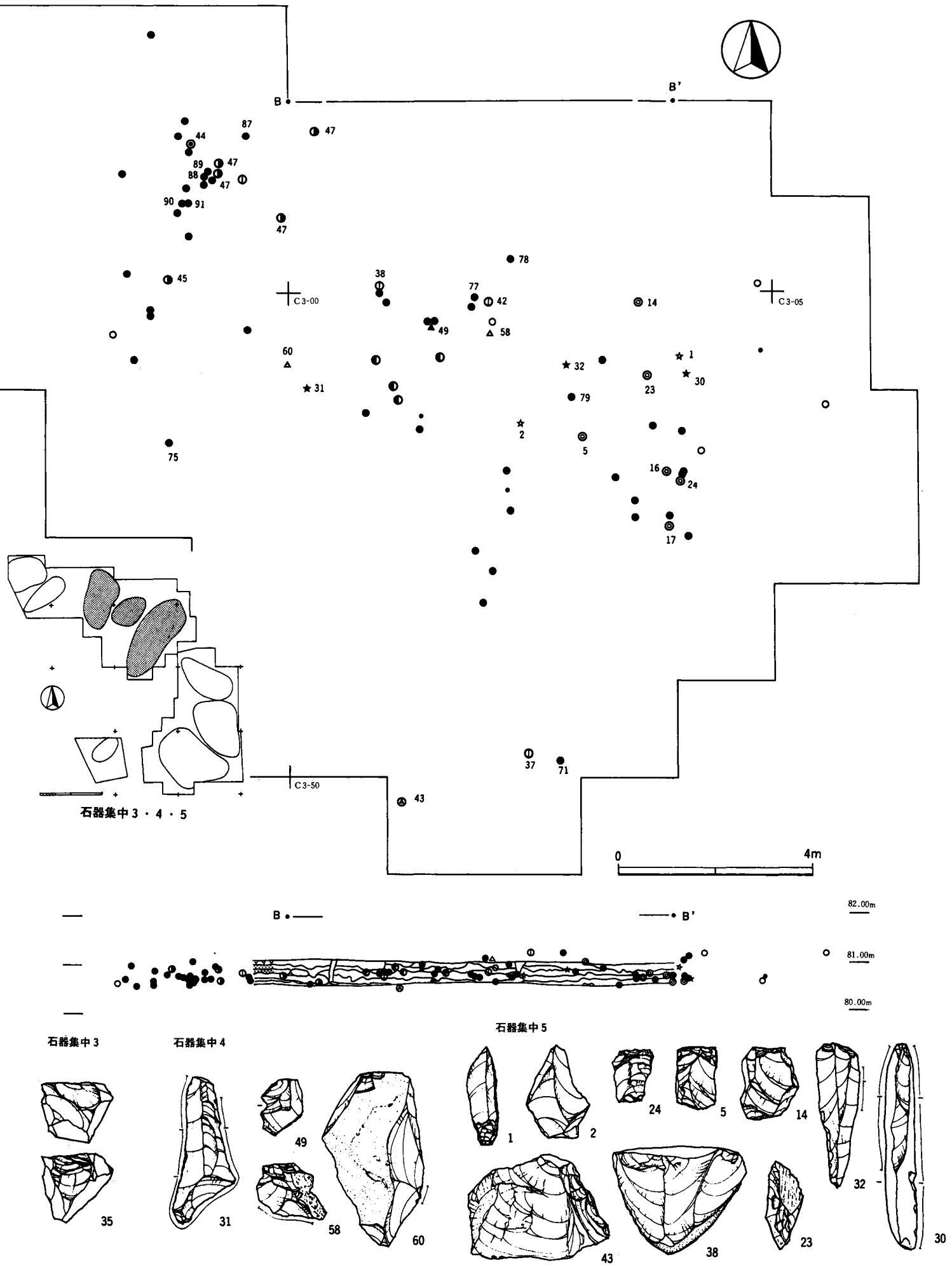
接合資料10（第26図72＋73＋74＋75）　石器集中１と石器集中２と石器集中３に分布している。72には明確な主要剥離面が見られるが、73・74・75は節理による分割を繰り返していることが窺える。流紋岩１。

接合資料11（第26図42＋76＋77＋78＋79）　石器集中２と石器集中４と石器集中５に分布している。扁平な大形の円礫を大きく分割、若しくは大形剥片(77＋78)の剥離によって残された素材をさらに分割し整えた上で、自然面を打面に設定し剥片剥離を行っている(42＋76)。流紋岩１。

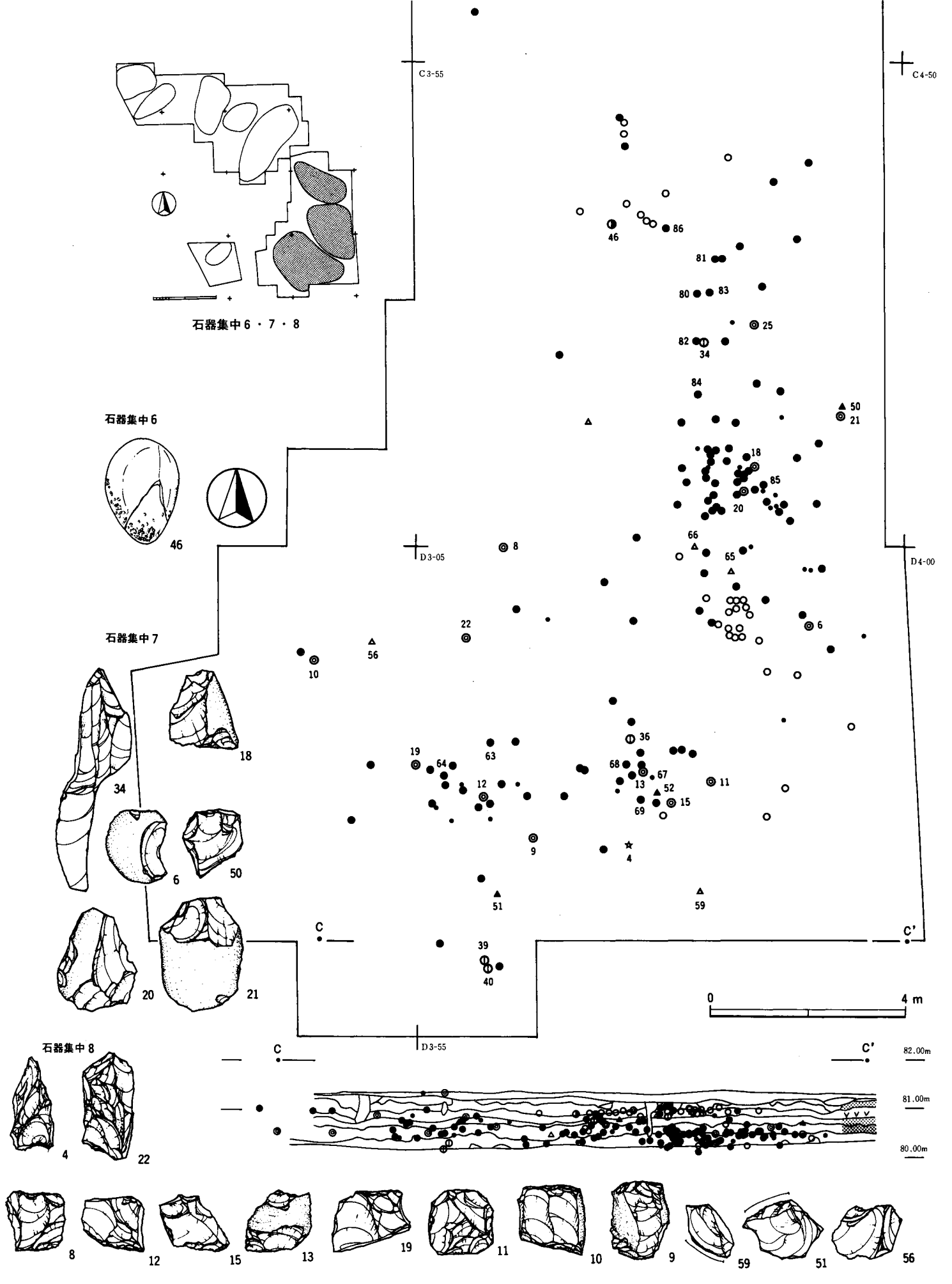
接合資料12（第27図80＋81）　石器集中６に属し、剥片同士の接合資料である。打面は平坦な節理面であり80を剥離する以前に同一打面から複数の剥片が剥離されている。緑泥片岩１。



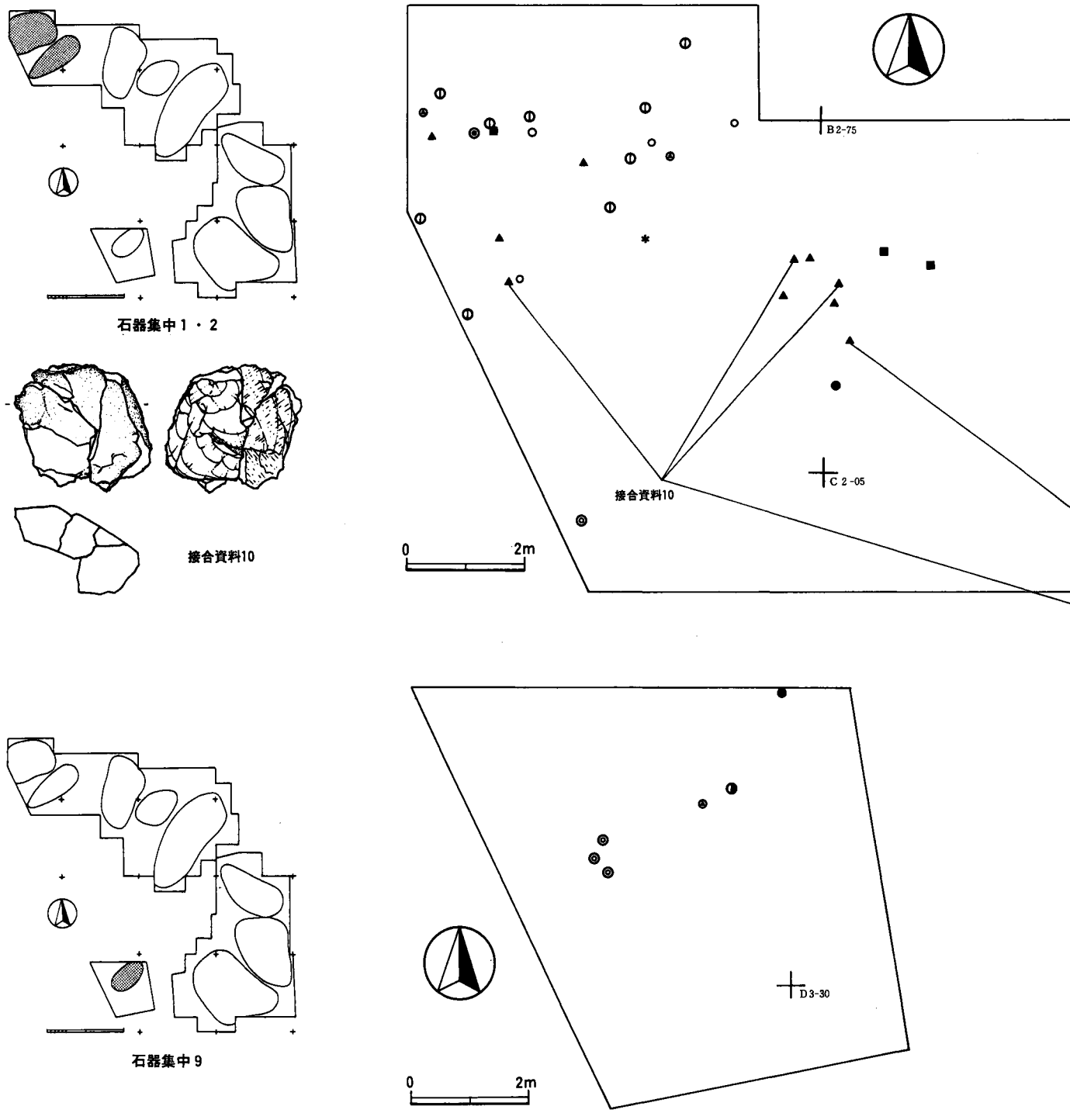
第7図　石器集中1・2・9器種別分布



第8図　石器集中3・4・5器種別分布



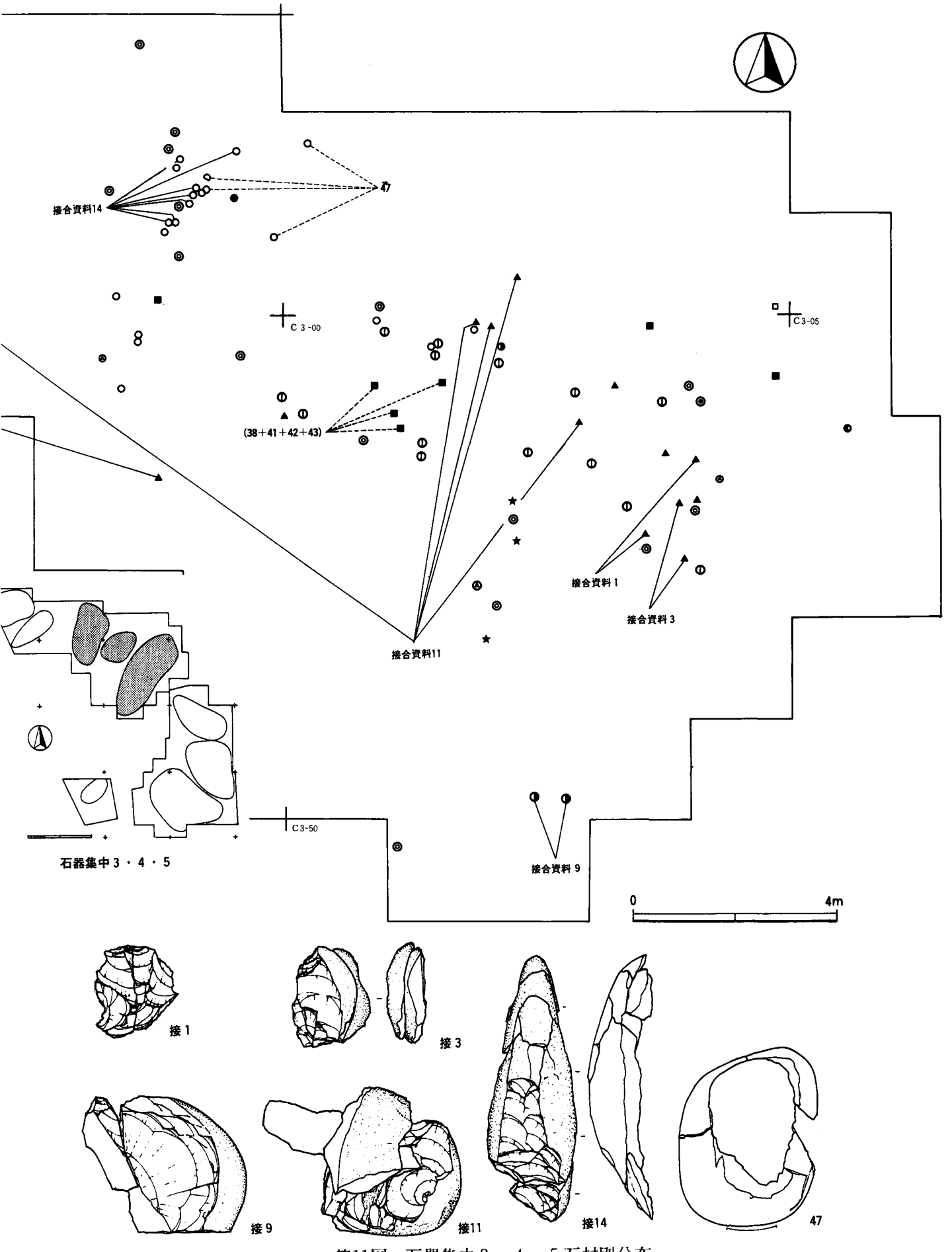
第9図　石器集中6・7・8器種別分布



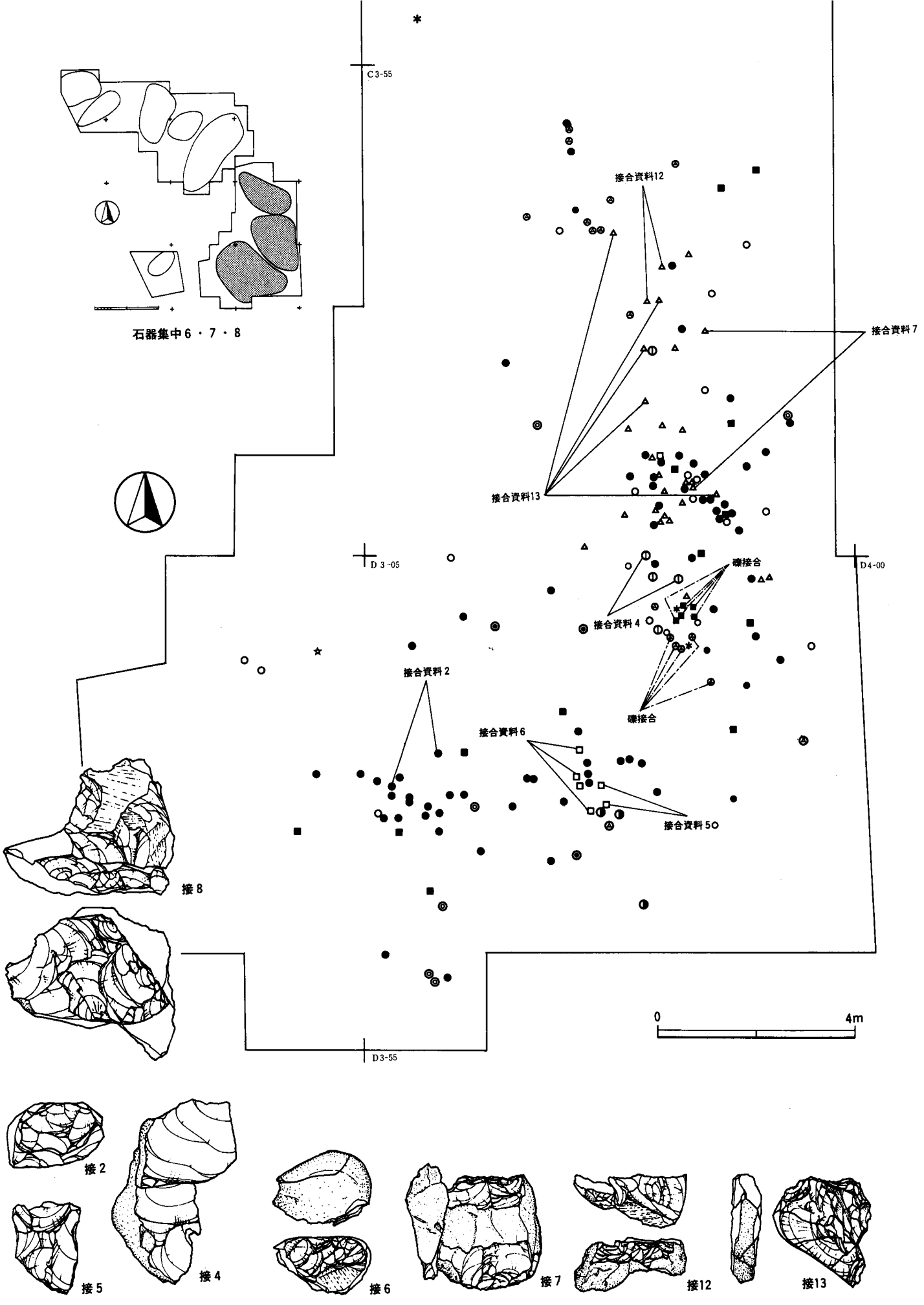
第10図　石器集中１・２・９石材別分布

接合資料13（第27図82＋83＋84＋85＋86）　石器集中６と石器集中７に属し、剥片の分割面同士の接合資料である。一部幅広で寸詰まりの剥片を剥離した痕跡が見られ、石核として利用されている可能性も指摘できる。緑泥片岩１。

接合資料14（第27図44＋87＋88＋89＋90＋91＋92）　すべて石器集中３に属し、斧状石器の製作に関する接合資料である。92以外はすべて同一の剥片であり、斧状石器の刃部調整(加工)のための剥片が接合している。砂岩１。



第11図　石器集中3・4・5石材別分布



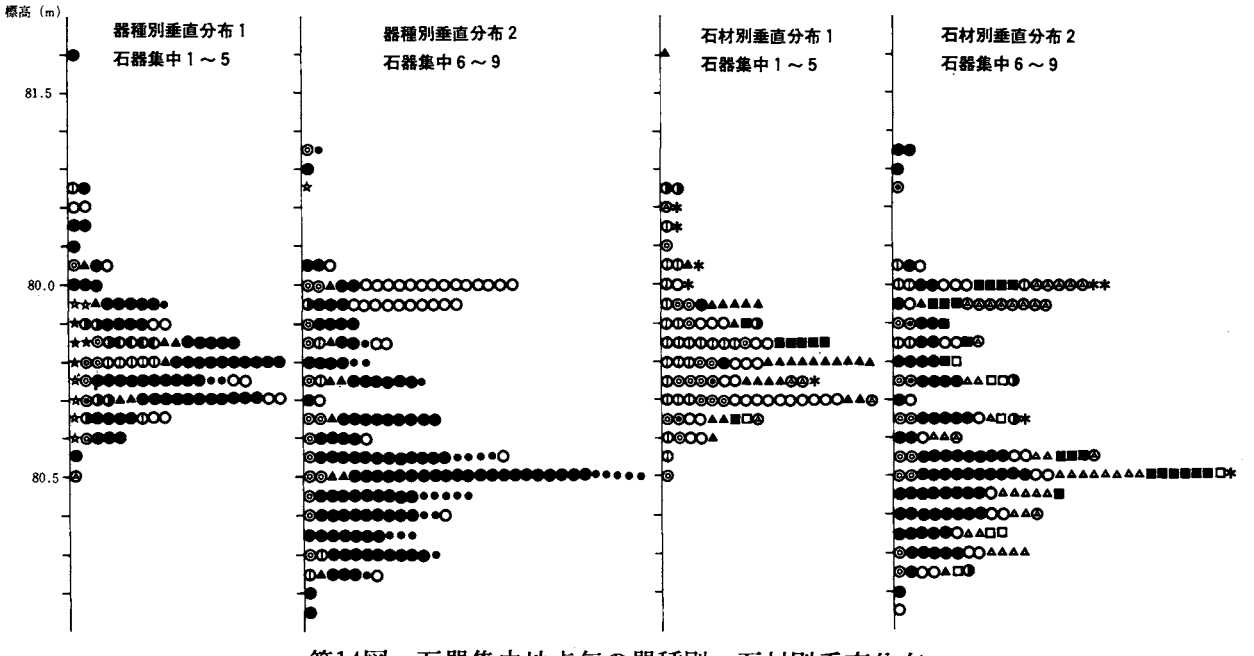
第12図　石器集中6・7・8石材別分布

ホルンフェルス
メノウ
安山岩
凝灰岩
珪質頁岩
硬質頁岩
黒曜石
砂岩
粘板岩
流紋岩
緑泥片岩

C2-05
C3-05
D3-00
D3-05
D4-00

0 10m

第13図　母岩別分布概念図



第14図　石器集中地点毎の器種別・石材別垂直分布

器種別分類　本石器群の器種構成はナイフ形石器４点、小石刃７点、楔形石器21点、削器１点、斧状石器１点、加工痕のある剥片(R剥片)６点、使用痕のある剥片(U剥片)９点、石核10点、剥片172点、砕片30点、磨石１(４)点、敲石４(７)点、礫・破損礫47点の合計319点が出土した(第３表)。

器種毎にその分布域を見ると、小石刃・ナイフ形石器が石器集中１・２・４・５に、楔形石器が石器集中５・７・８に、砕片が石器集中７・８に、それぞれ偏在している。小石刃生産のための硬質頁岩製の大形石刃素材の石核は、石器集中１と石器集中７に分布し、特に小石刃と分布の異なる後者は特異である(第７～９図)。

ナイフ形石器(第15図1～4)　１は珪質頁岩の単独母岩である。右側縁と左側縁基部端に主要剥離面側から急角度調整が施されている。２は単独母岩であるがチョコレート色を呈した硬質頁岩であるため、母岩分類はかなり困難である。したがって、同一母岩の存在も否定できない。左側縁に背面側からの調整痕が観察される。同様の形態で右側縁に背面側から調整痕の見られる第22図54も、ナイフ形石器と言えるかも知れない。しかし、背面側からの調整痕が剥片剥離以前のもの、つまり打面調整ととらえて、U剥片と分類している。３はホルンフェルスの単独母岩である。平坦打面をもち、右側縁先端側に主要剥離面側からの調整痕が観察される。４はやや厚めの剥片を素材に用いているが、大振りな粗い調整が施されているため、素材となった剥片の主要剥離面は断定できない。

楔形石器(第15図５～15・第16図16～25)　合計21点が出土し、本石器群で主要な構成器種となっている。利用石材はホルンフェルス(6・9・11・12・13・18・19・21・22)、メノウ(7・15)、安山岩(14)、硬質頁岩(5・23)、砂岩(8・10・20)、流紋岩(16・17)、緑泥片岩(25)、珪質頁岩(24)とバラエティに富み、小石刃生産に利用される硬質頁岩や黒曜石が本石器群で客体的な存在とするならば、楔形石器製作に利用される石材は質量共に主体的なあり方を示す。

楔形石器の素材の多くはやや幅広な寸詰まりの剥片であり小礫素材のものは見られない。素材剥片の背面には自然面を残すものが多い(9・10・13・16・17・18・20・21・25)。両極からの打撃は、上下・左右端に及ぶものと上下のみのものとがあり、当然、剥離の進んだ小形のものに前者が多い。

小石刃(第17図26～32)　合計７点が出土している[1]。硬質頁岩を主体として(26・27・28・29・31・32)、黒曜石も若干含む(30)。26は頭部が欠損しているため打面形状は明らかでない。腹面左側縁には微細な剥離痕が観察される。石核主要剥離面の残置は不明。27は形態的にややねじれているが端部はフェザー状を呈している。複剥離打面ではあるが打面への細調整は確認できない。左側面は石核主要剥離面の可能性はあるが断定はできない。28は右側面に石核主要剥離面を残し、石核主要剥離面から石核背面への調整痕も観察される。石核の素材石刃は通常縦位に用いられることが多いが、この石核主要剥離面の方向からは、横位に用いていることが分かる。小石刃生産のための打面形成剥片であるかもしれない。29は背面側に石核主要剥離面を残し、両側縁には明確な使用痕(微細剥離痕を含む)が観察される。30は黒曜石製の小石刃で、右側面に石核主要剥離面を残している。背面の稜上に残された小石刃剥離痕に切られるかたちで石核主要剥離面から石核背面への稜調整が観察される。31の背面には石核主要剥離面が残っているか明確に述べることは困難な資料である。打面には背面側から細かい調整が施され、左右両側縁には微細な剥離痕が観察される。32は背面右側縁に石核主要剥離面を残し、微細剥離痕が一部に観察される。

石核(第17図33・34、第18図35～42)　小石刃生産のための石核が２点出土している(33・34)[1]。いずれも良質な硬質頁岩を利用している。幅広で分厚い大形石刃を素材とし、大形石刃の末端部を上位に

して打面を形成し小石刃を剥離している。33は大形石刃の側縁に末端側に向って打撃を加え、打面を形成している。打撃点は、石核主要剥離面から石核背面への調整と打面からの石核背面への調整によって失われている。小石刃剥離作業面には素材時の大形石刃の厚さを残している。一部に自然面がみられる。打面には作業面側からの調整が施され、作業面に対してかなり鋭角な角度にある打面を調整している。作業面には4条の小石刃剥離痕が残っている。

34は小石刃剥離面を打面として設定し、交互に小石刃を剥離している。石核主要剥離面以外は小石刃剥離痕で覆われていることから、素材となった石刃はかなりの大形と推測される。大形石刃の形態を大きく変形させた、上・下方からの小石刃剥離は結果的に鋭利な稜を生じさせたが、それらには使用痕と思われる微細剥離痕が観察される。

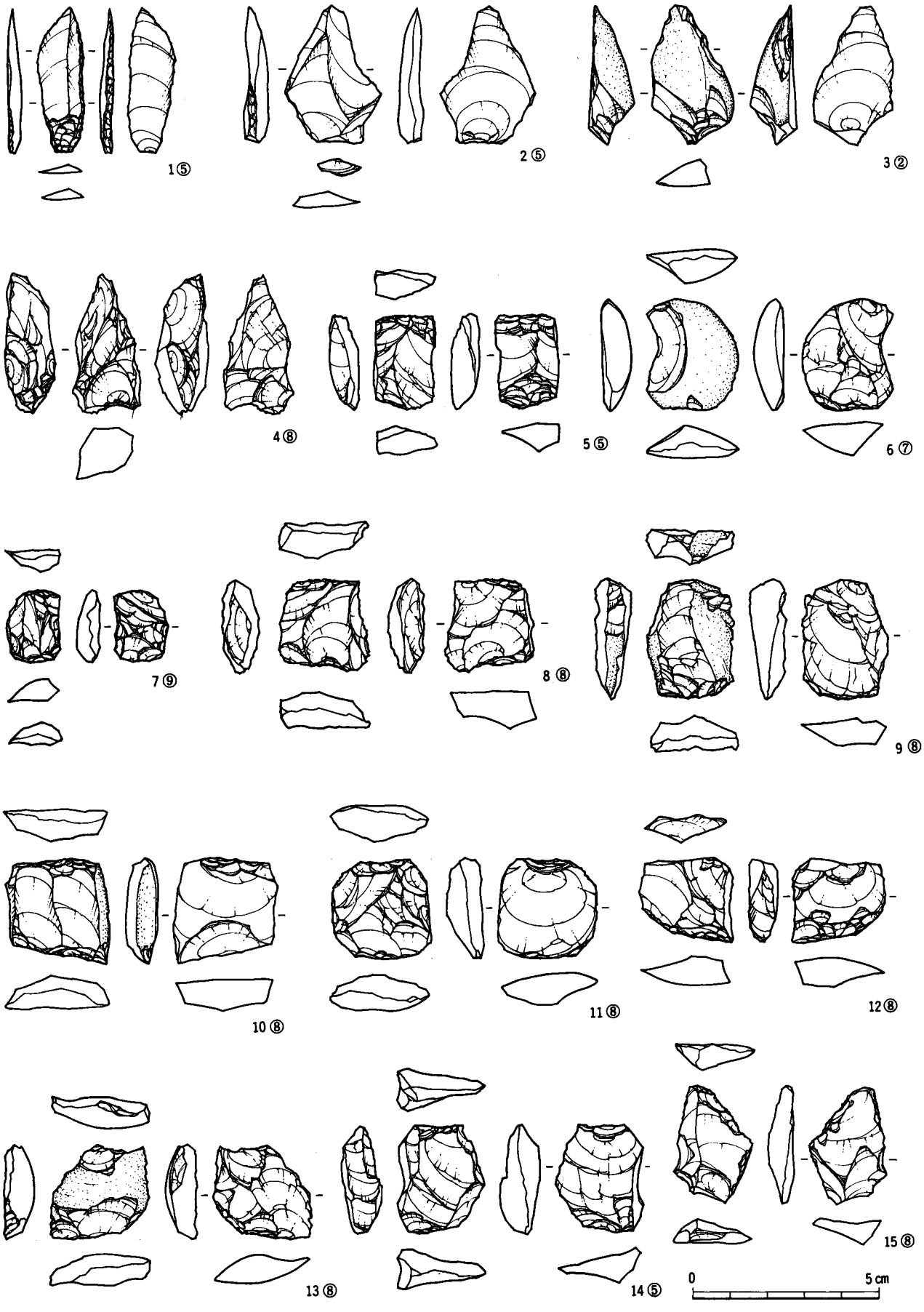
小石刃生産に関連する石核は上述の2点のみであるが、そのほかにも7点の石核が出土している。サイコロ状のもの(35)、小～中円礫を素材にした打面調整の顕著でないもの(36～38)、剥片若しくは分割によって得られた素材を利用したもの(39～42)などバラエティに富む。

削　　器（第21図43）　節理面等によって素材の形状は把握できないが幅広の剥片の一部を分割したものと思われる。刃部は主要剥離面側に施された調整によって形成される。分割によって形成された鋭角な稜には微細剥離痕が顕著に観察される。

斧状石器（第21図44）　節理面で分割された素材の上下端を折断し、調整を施すことによって刃部を形成している。刃部を折断調整した剥片との接合関係が明らかとなっている(接合資料14)。

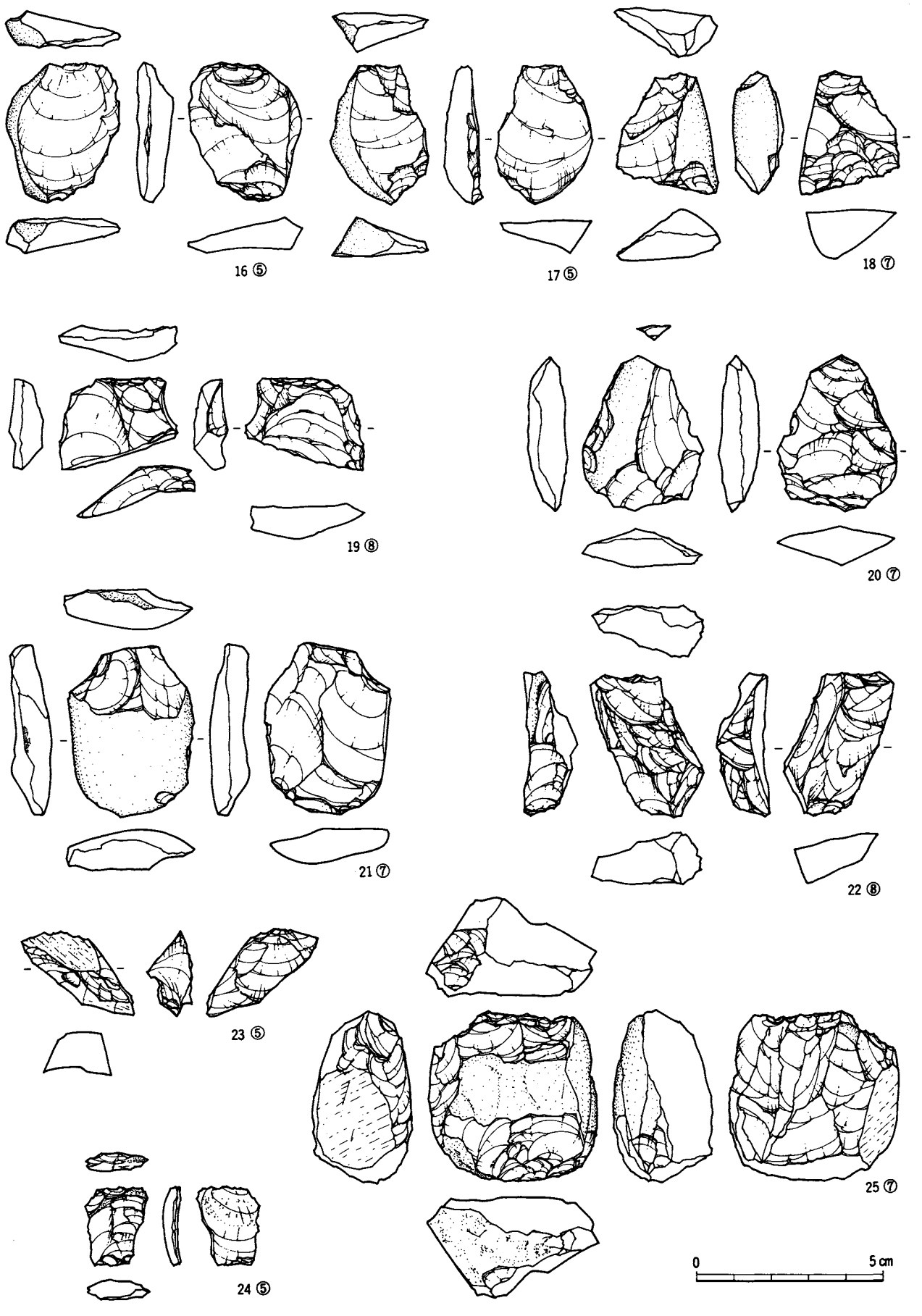
磨石・敲石（第21図45～48）　磨石1点、敲石4点が確認された。やや軟質な安山岩を利用した敲石は敲打痕が全体的に顕著であるが、硬質な砂岩を利用した敲石の敲打痕は小範囲で限定的である。

R剥片・U剥片（第22図49～60）　加工痕のある剥片・使用痕のある剥片を示すが、いずれも微細剥離痕を剥片の縁辺にもつ石器であり、分類の困難なものもある。微細剥離痕は、小石刃や小石刃を剥離する大形石刃素材の石核にも顕著に見られるが、ここで図示したものは特定の器種に分類されないいわゆる「剥片」に微細剥離痕をもつ資料である。顕著に利用される石材は、やはり、硬質頁岩が多く(49・54・55・57・58・60)、それらは、恐らく小石刃生産に伴う資料と考えられる。

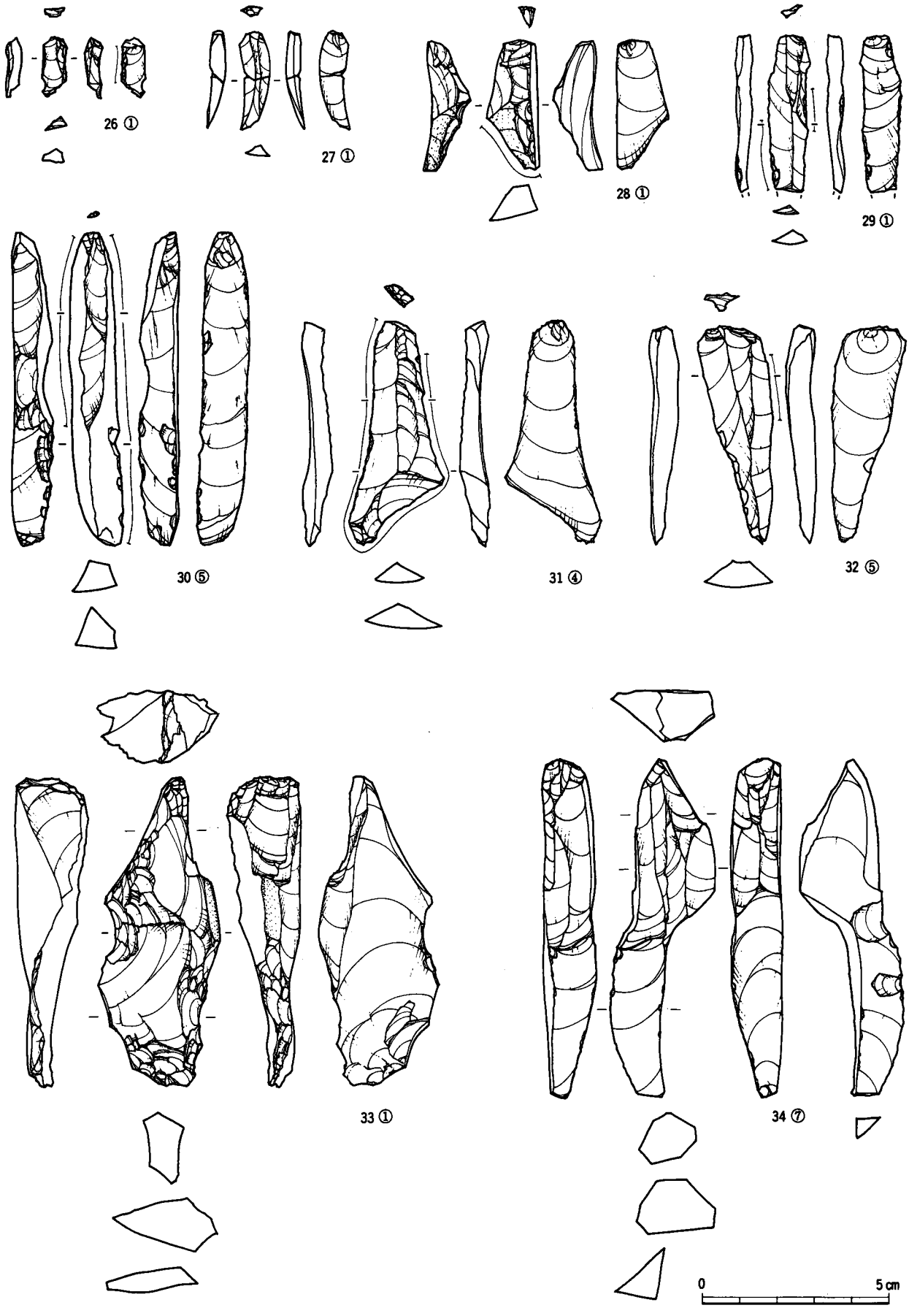


※○内の数字は石器集中地点を示す

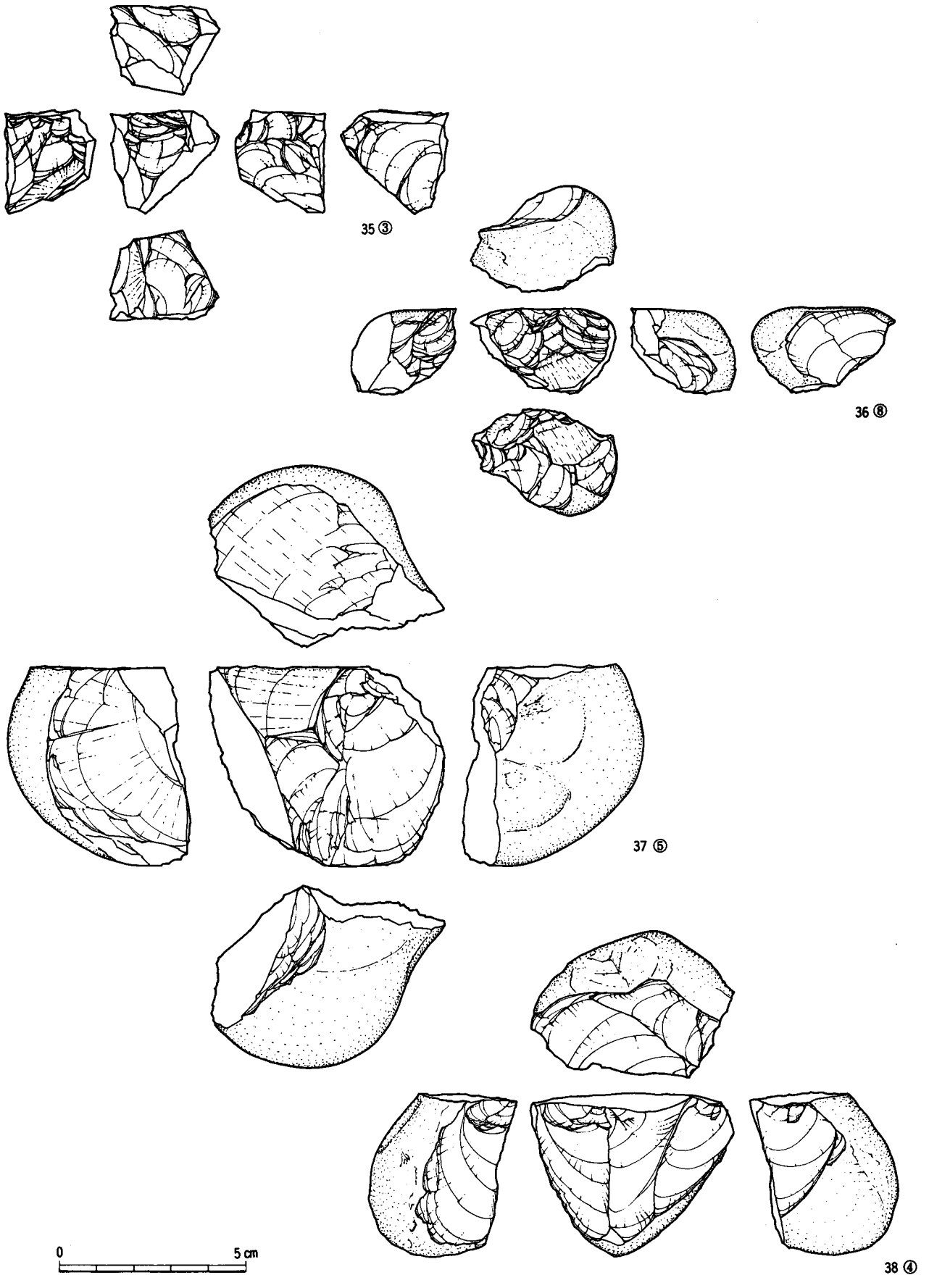
第15図　出土石器（1）



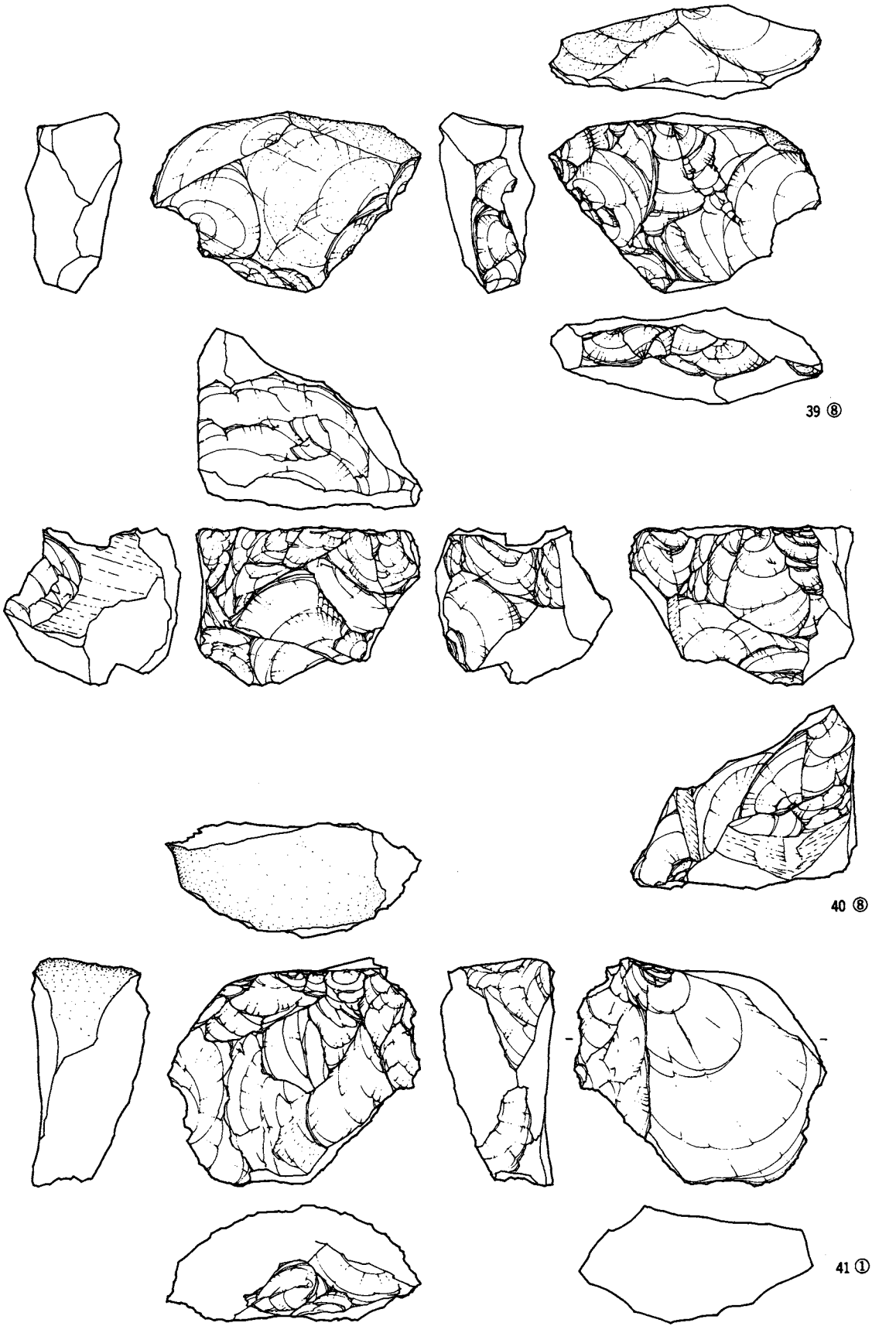
第16図　出土石器(2)



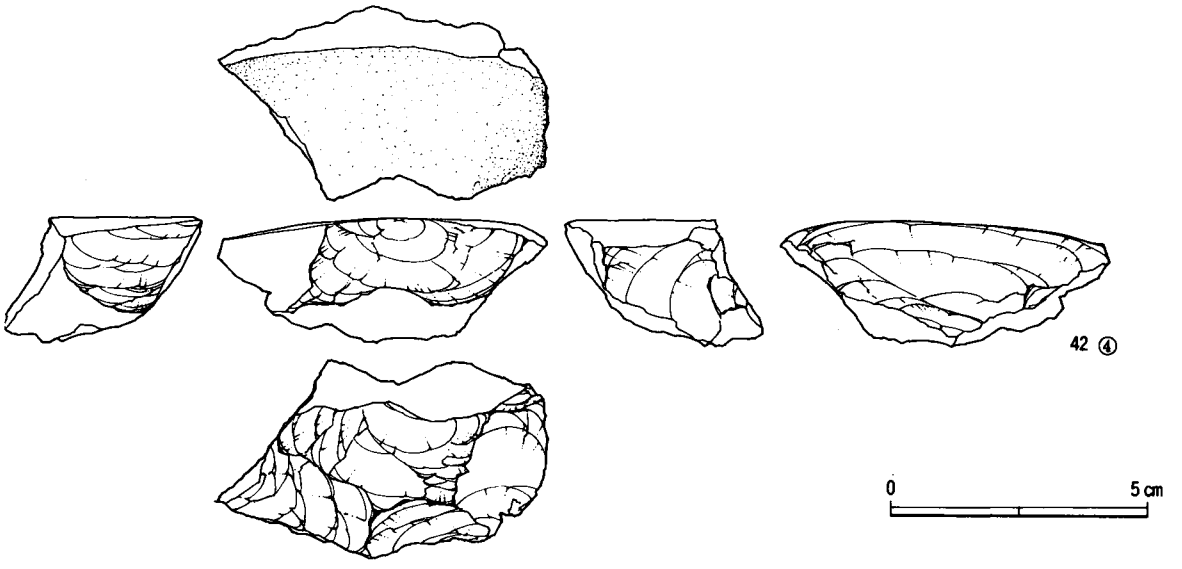
第17図　出土石器（3）



第18図　出土石器（4）



第19図　出土石器（5）



第20図　出土石器（6）

母岩別分類　石材別の分布において、硬質頁岩が石器集中1・4・5に、ホルンフェルスが石器集中7・8に、流紋岩が石器集中1・2・5に、緑泥片岩が石器集中6・7に分布域が集中している（第10～12図）。

このように全体の傾向として石器集中1～5と石器集中6～8は石材分布の上でもその性格が異なることが分かる。第13図には母岩分類の可能な資料について、各母岩毎の分布範囲を示してある。これを見ても、両者にまたがって分布しているのは硬質頁岩1と砂岩2のみで、しかもそれらは各1点のみの分布となっている。つまり、これらの例外を除けば全て石器集中1～5と石器集中6～8に母岩毎の分布が収束していることが分かる。

以下に、主要な石材である、硬質頁岩・珪質頁岩・ホルンフェルスについて若干概要を説明する。

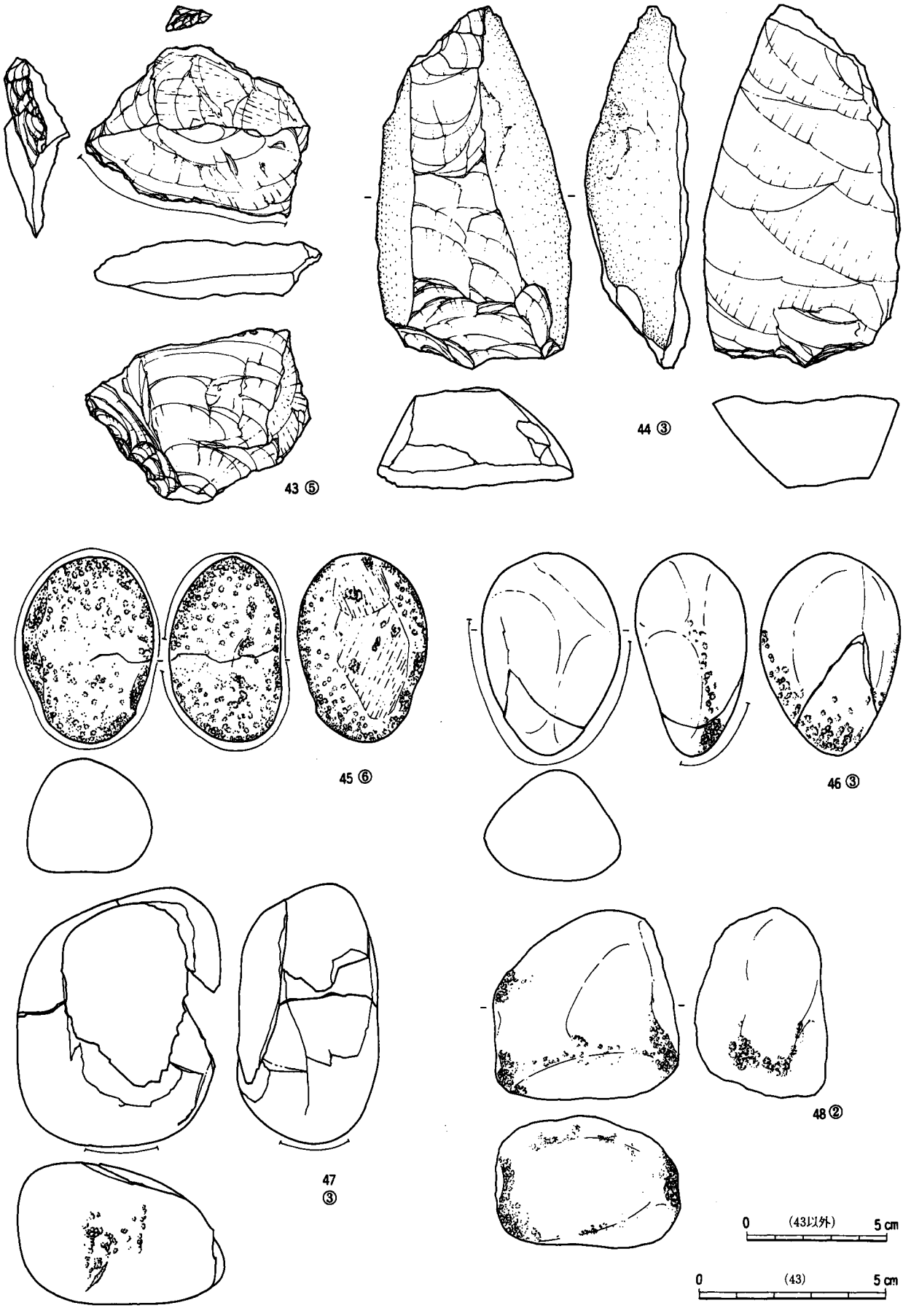
硬　質　頁　岩　　28点が出土し、6母岩が抽出できた。石材全体の8.8%を占める。基本的にはチョコレート色の色調を呈する[2)]。母岩の分類は明確に分離されないものもあり十分な細分はできなかった。ナイフ形石器1点、小石刃6点、楔形石器2点、石核2点が属する。石核は大形石刃素材の石核で小石刃生産を行っている。全体として小石刃生産に関係する母岩ということができる。

珪　質　頁　岩　　26点が出土し、3母岩が抽出できた。石材全体の8.2%を占める。ナイフ形石器1点、楔形石器1点、削器1点、石核3点が属する。硬質頁岩がチョコレート色を基調とするのに対し、珪質頁岩はそれ以外のやや粗雑な節理の入るものを便宜的に呼んだ。珪質頁岩1は自然面が黄土色でツルツルした面を呈し、千葉県でも南部の遺跡から特徴的に検出されているものと思われる。

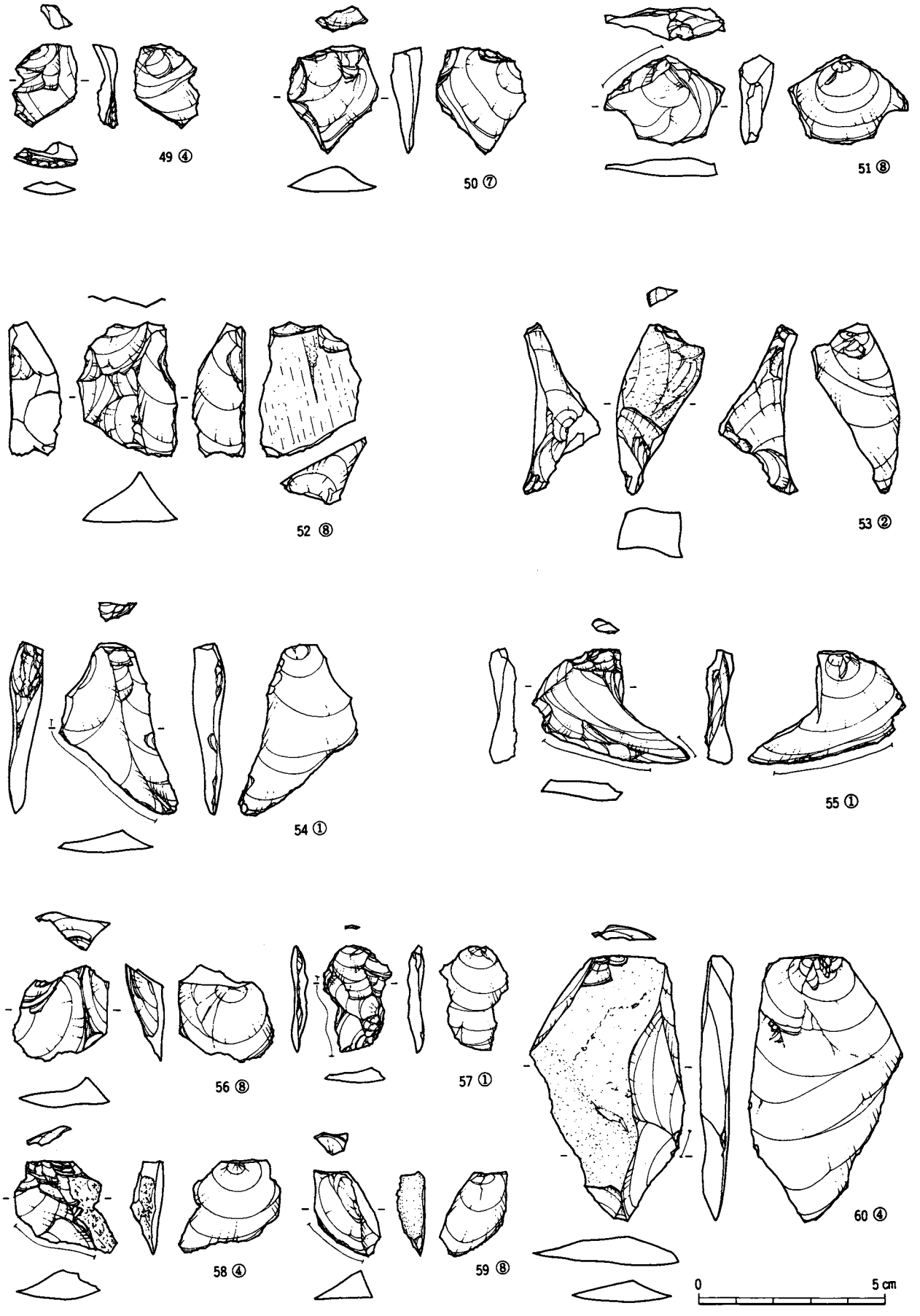
ホルンフェルス　　75点が出土し13母岩が抽出できた。石材全体の23.5%を占める、本石器群の中で主体的な石材である。ナイフ形石器1点、楔形石器9点、石核1点が属する。楔形石器の素材として用いられることが多いが、素材剥片の剥離工程を検討する十分な資料は検出されていない。

注

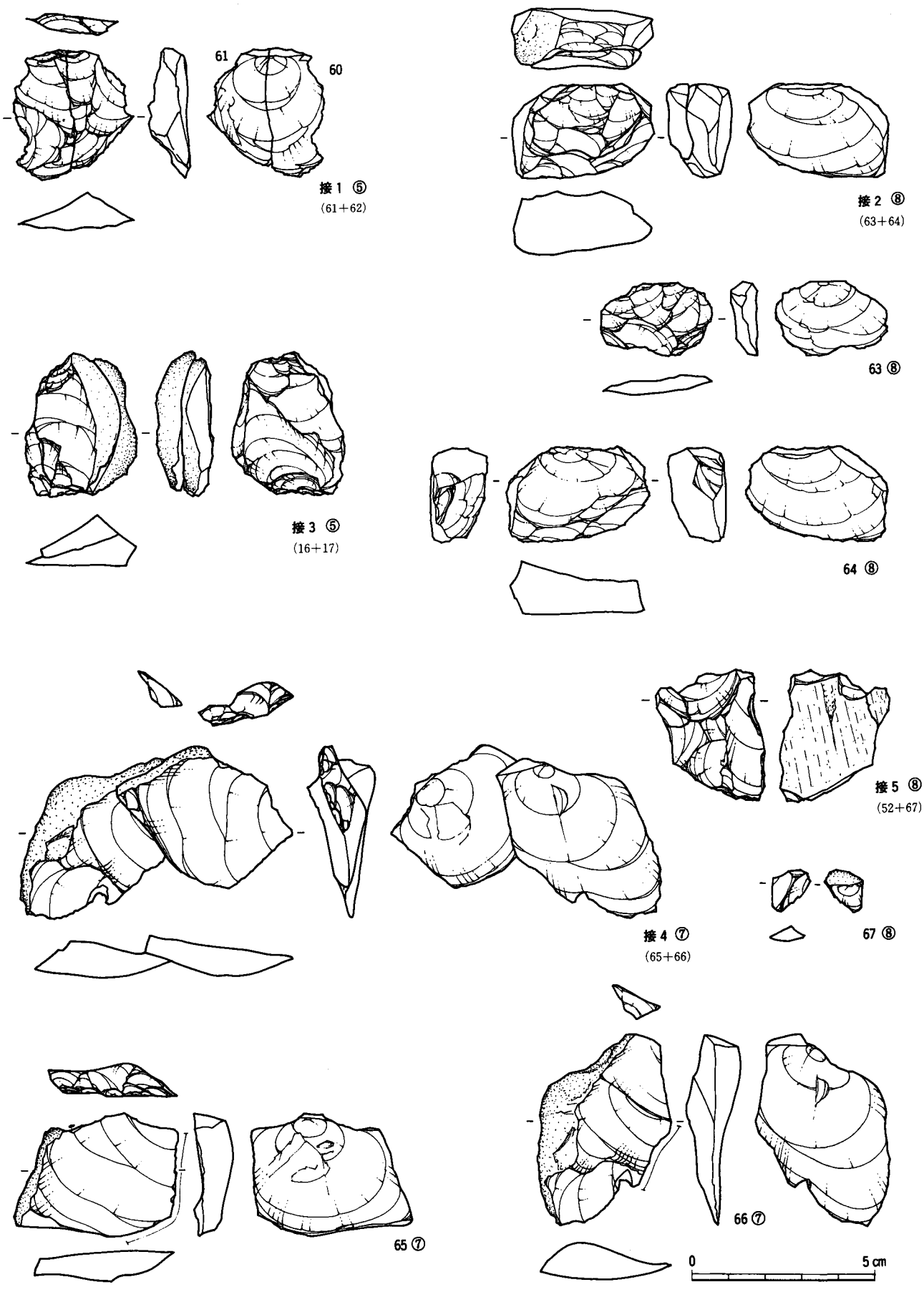
1　本報告では(大形)石刃素材の石核から剥離されたものを「小石刃」と呼称した。通常の石刃石核から剥離された「石刃」と区別するには、剥離された石刃の背面に石核の素材として利用された(大形)石刃の主要剥離面を残しているか否かを基準にするのが一番分かりやすい。ここでは、このような小石刃の背面に残された、剥離面(痕)を「石核主要剥離面(痕)」と呼称した。同様に、石刃素材の石核についても、素材石刃時の主要剥離面と背面をそれ



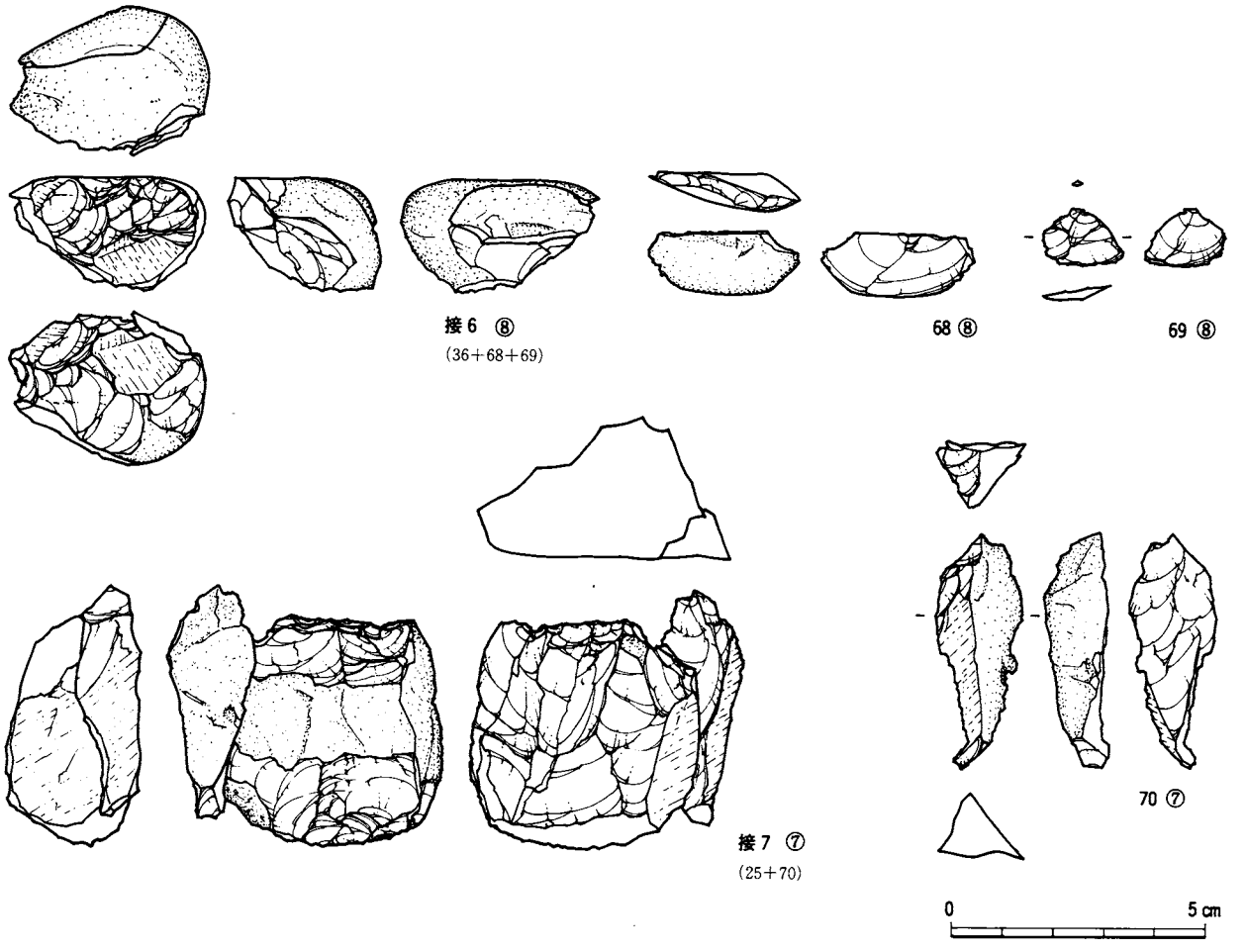
第21図　出土石器（7）



第22図　出土石器（8）



第23図　出土石器（9）－接合資料（1）

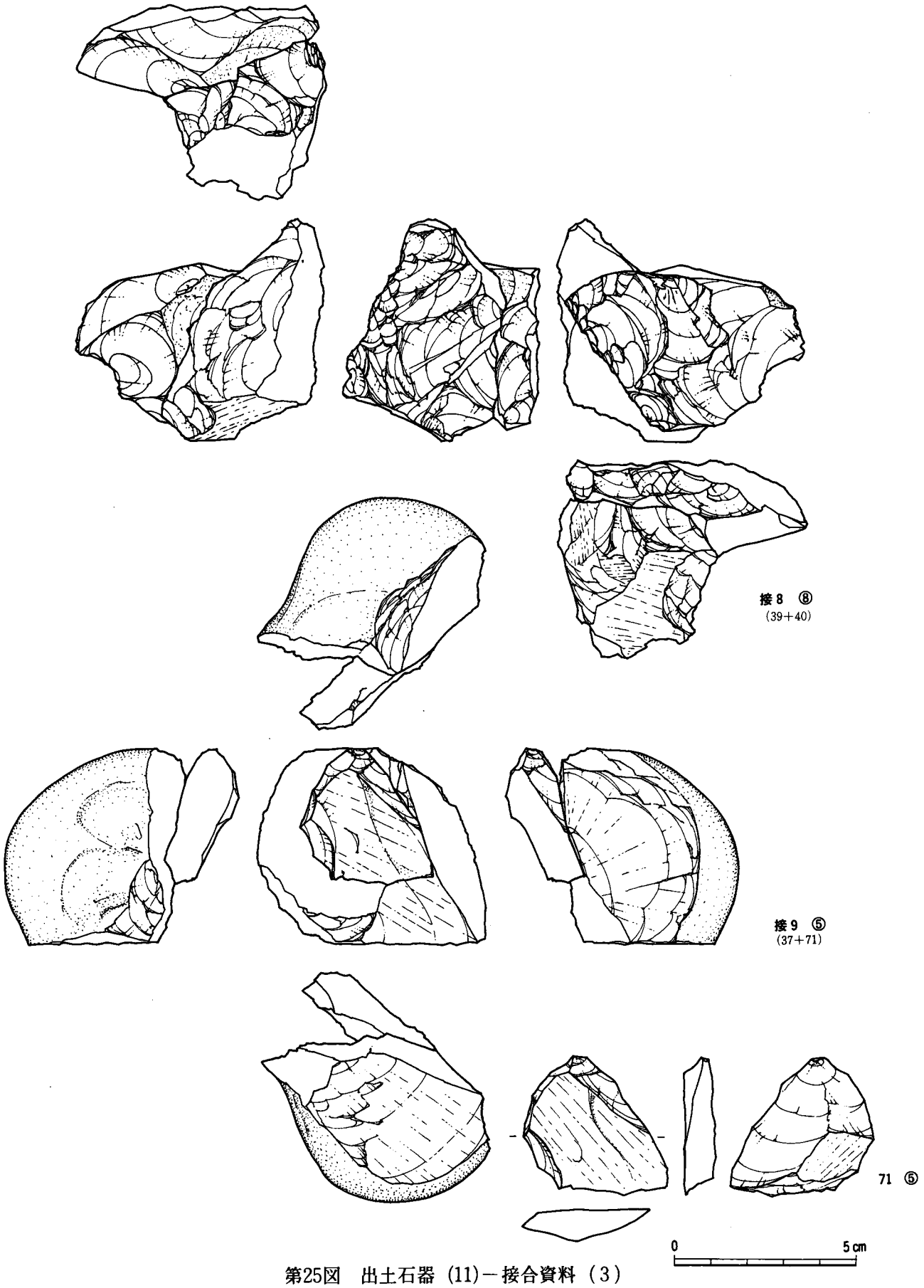


第24図　出土石器（10）－接合資料（2）

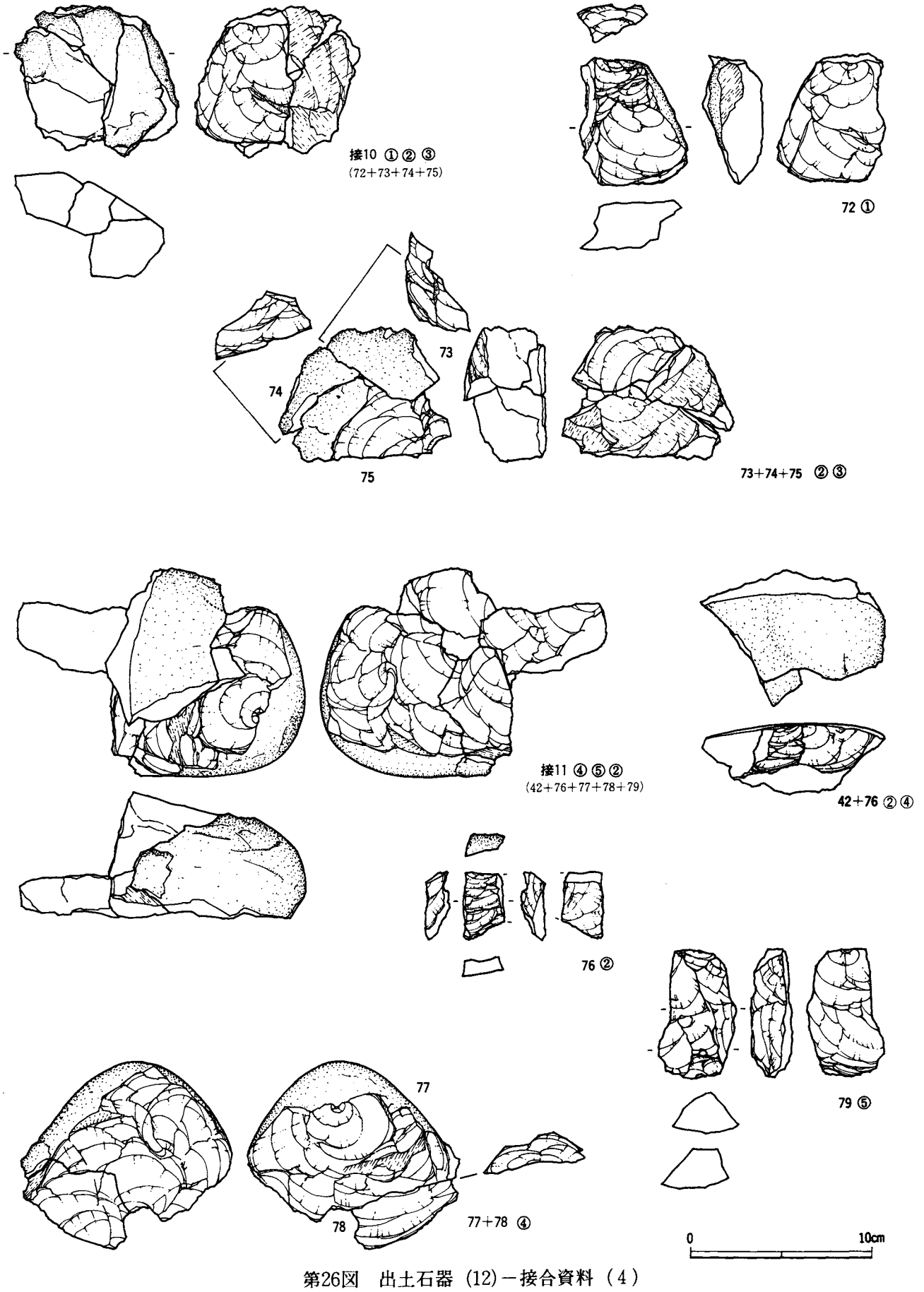
ぞれ石核主要剥離面・石核背面と呼んだ。しかしながら、小石刃の背面に石核主要剥離面を残さない資料の存在も当然考えられよう。そのような小石刃については、判別が困難となるが、打面状況・末端形状・ねじれの度合い等を総合的にとらえ器種決定を行った。

小石刃を剥離するための石核は「彫器」と呼ばれることがある。当然、小石刃は「削片」という分類になる。これは、報告者の認識によるものであるので、特に問題とはしない。本報告ではもちろん、小石刃を剥離するものは石核と分類しているが、ただ「石核」として分類すると小石刃生産のためのものであるのかそうでないのか区別がつかないので、観察表には備考の欄に大形石刃素材と記載した。このように「彫器」「削片」という名称は他の器種との分離には便利ではある。

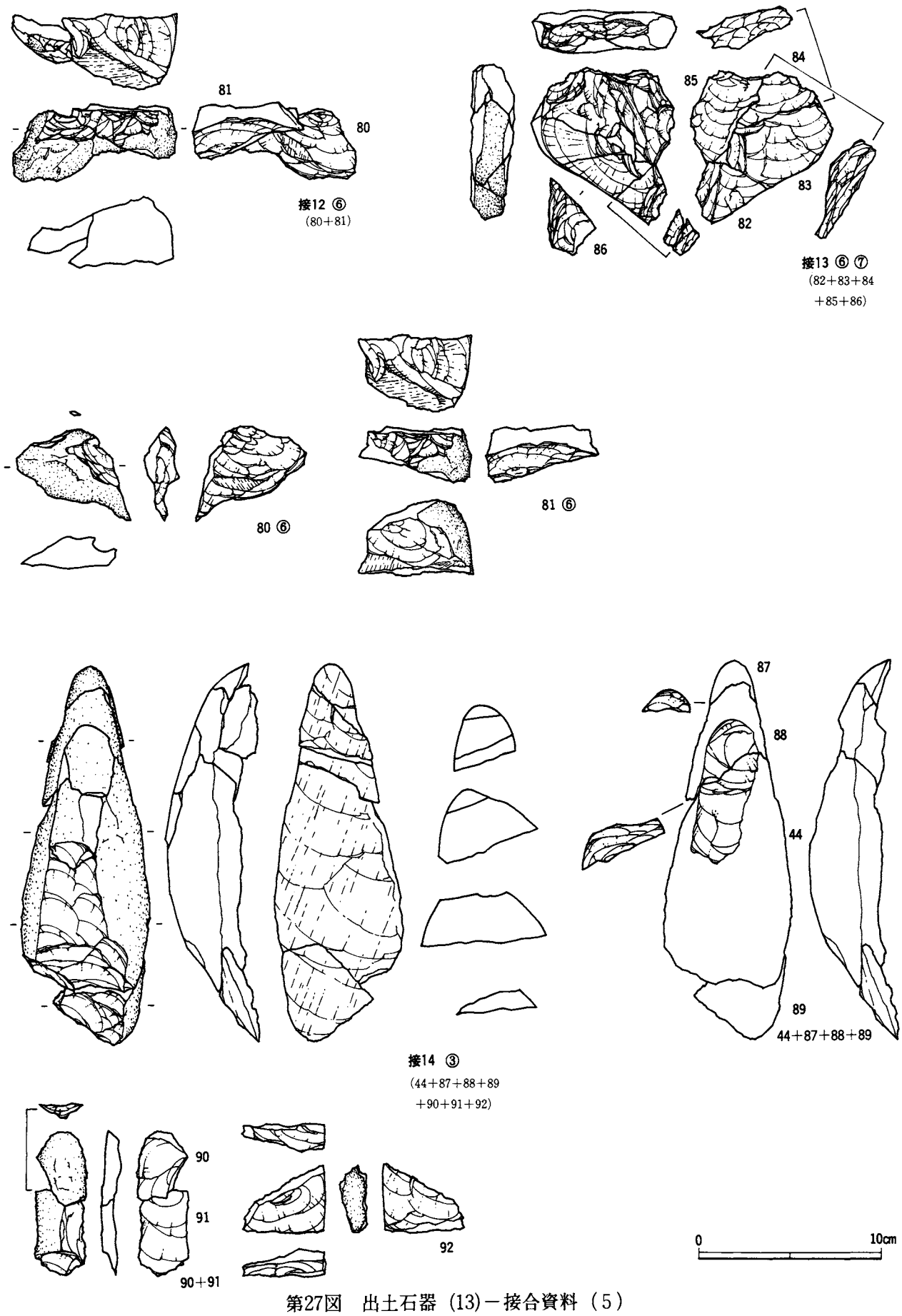
2　下総台地において、このような質の良いチョコレート色を呈した硬質頁岩を主体的・特徴的に用いている石器群は後期旧石器時代のなかで、3時期にわたって流行していることが明らかとなっている。一番古い時期は、「下総型石刃再生技法」「千田台技法」と呼称される小石刃生産を基調とするⅦ層～Ⅵ層段階の石器群である。本石器群の一部はこの一群に含まれる。次に登場するのが「東内野型尖頭器」を主体とする、ATより上位に位置する石器群である。更に新しくなると、荒屋型彫刻刀形石器を特徴的に組成するいわゆる荒屋系細石刃石器群である。いずれも東北から北陸地方に産する良質の硬質頁岩という「遠隔地石材」を利用するという共通点をもつが、その共通点以外にも「再生」「削片」というキーワードで石器群を位置付けることができる。それぞれのキーワードは独立した意味をもつのではなく、「遠隔地石材」「再生」「削片」はそれぞれ密接な関係でもって存在することに重要な意味をもつと思われる。つまり、それ自体が千葉県（下総台地）の特質であり他の地域と明確に峻別される重要な要素と位置付けられよう。



第25図　出土石器 (11)－接合資料（3）



第26図　出土石器 (12)－接合資料（4）



第27図　出土石器（13）－接合資料（5）

第3表　石材と器種組成

	ナイフ	小石刃	楔形	削器	斧状	石核	敲石	磨石	R剝	U剝	剝片	砕片	礫	計	%(石材毎)	%(全体)
硬質頁岩	1	1	1			1			1	2	1			8	28.57	2.51
硬質頁岩1		1				1					1			3	10.71	0.94
硬質頁岩2		3									2			5	17.86	1.57
硬質頁岩3		1							1	2				4	14.29	1.25
硬質頁岩4											1	1		2	7.14	0.63
硬質頁岩5			1								1			2	7.14	0.63
硬質頁岩6										2	2			4	14.29	1.25
小計	1	6	2			2			2	6	8	1		28	100.00	8.78
珪質頁岩	1		1	1		1			3	1	7	1		16	61.54	5.02
珪質頁岩1											6			6	23.08	1.88
珪質頁岩2											1	1		2	7.69	0.63
珪質頁岩3						2								2	7.69	0.63
小計	1		1	1		3			3	1	14	2		26	100.00	8.15
黒曜石	1	1									1			3	60.00	0.94
黒曜石1											1	1		2	40.00	0.63
小計	1	1									2	1		5	100.00	1.57
ホルンフェルス	1		1			1					2	5	2	12	16.00	3.76
ホルンフェルス1											7	1		8	10.67	2.51
ホルンフェルス2											6	3		9	12.00	2.82
ホルンフェルス3											2			2	2.67	0.63
ホルンフェルス4			1								4			5	6.67	1.57
ホルンフェルス5											4			4	5.33	1.25
ホルンフェルス6											2			2	2.67	0.63
ホルンフェルス7			1								5			6	8.00	1.88
ホルンフェルス8											4			4	5.33	1.25
ホルンフェルス9			2											2	2.67	0.63
ホルンフェルス10											9	1		10	13.33	3.13
ホルンフェルス11			4											4	5.33	1.25
ホルンフェルス12											4			4	5.33	1.25
ホルンフェルス13											2	1		3	4.00	0.94
小計	1		9			1					51	11	2	75	100.00	23.51
砂岩			1				5				4		7	17	37.78	5.33
砂岩1					1						9			10	22.22	3.13
砂岩2			1								1			2	4.44	0.63
砂岩3											4			4	8.89	1.25
砂岩4											2			2	4.44	0.63
砂岩5											4	2		6	13.33	1.88
砂岩6											2			2	4.44	0.63
砂岩7			1								1			2	4.44	0.63
小計			3		1		5				27	2	7	45	100.00	14.11
緑泥片岩1			1								27	3		31	100.00	9.72
小計			1								27	3		31	100.00	9.72
流紋岩													2	2	7.41	0.63
流紋岩1						2					13			15	55.56	4.70
流紋岩2											8			8	29.63	2.51
流紋岩3			2											2	7.41	0.63
小計			2			2					21		2	27	100.00	8.46
安山岩			1				2	4			7	8	6	28	87.50	8.78
安山岩1											1	1		2	6.25	0.63
安山岩2											2			2	6.25	0.63
小計			1				2	4			10	9	6	32	100.00	10.03
凝灰岩											1		1	2	22.22	0.63
凝灰岩1						1					2			3	33.33	0.94
凝灰岩2									1		2	1		4	44.44	1.25
小計						1			1		5	1	1	9	100.00	2.82
メノウ			1										1	2	28.57	0.63
メノウ1						1					1			2	28.57	0.63
メノウ2			1							1	1			3	42.86	0.94
小計			2			1				1	2		1	7	100.00	2.19
チャート											1		23	24	100.00	7.52
小計											1		23	24	100.00	7.52
石英斑岩											1		3	4	100.00	1.25
小計											1		3	4	100.00	1.25
粘板岩1											3			3	100.00	0.94
小計											3			3	100.00	0.94
頁岩										1			1	2	100.00	0.63
小計										1			1	2	100.00	0.31
泥岩													1	1	100.00	0.31
小計													1	1	100.00	0.31
計	4	7	21	1	1	10	7	4	6	9	172	30	47	319		100
組成比%	1.25	2.19	6.58	0.31	0.31	3.13	2.19	1.25	1.88	2.82	53.92	9.40	14.73	100.00		

第４表　石器集中地点と石材組成

	石器集中1	石器集中2	石器集中3	石器集中4	石器集中5	石器集中6	石器集中7	石器集中8	石器集中9	出土位置不明	合計
硬質頁岩	2			3	3						8
硬質頁岩1	1			1			1				3
硬質頁岩2	3			1	1						5
硬質頁岩3	3			1							4
硬質頁岩4				2							2
硬質頁岩5					2						2
硬質頁岩6							4				4
小計	9			8	6		5				28
珪質頁岩		1	1	2	4		3	2	3		16
珪質頁岩1			6								6
珪質頁岩2					2						2
珪質頁岩3								2			2
小計		1	7	2	6		3	4	3		26
黒曜石	1				1			1			3
黒曜石1							1	1			2
小計	1				1		1	2			5
ホルンフェルス		1	1				6	3	1		12
ホルンフェルス1						1	7				8
ホルンフェルス2						1	4	4			9
ホルンフェルス3						1		1			2
ホルンフェルス4							5				5
ホルンフェルス5							4				4
ホルンフェルス6							2				2
ホルンフェルス7							2	4			6
ホルンフェルス8							3	1			4
ホルンフェルス9							1	1			2
ホルンフェルス10								10			10
ホルンフェルス11								4			4
ホルンフェルス12								4			4
ホルンフェルス13								3			3
小計		1	1			3	34	35	1		75
砂岩	3		4	1		1	6	2			17
砂岩1			10								10
砂岩2	1							1			2
砂岩3			4								4
砂岩4				2							2
砂岩5						1	5				6
砂岩6						1	1				2
砂岩7								2			2
小計	4		18	3		3	12	5			45
緑泥片岩1						6	25				31
小計						6	25				31
流紋岩						1		1			2
流紋岩1	4	6	1	3	1						15
流紋岩2					8						8
流紋岩3					2						2
小計	4	6	1	3	11	1		1			27
安山岩	2	2	1	4	2	1	12	3		1	28
安山岩1						1	1				2
安山岩2								2			2
小計	2	2	1	4	2	2	13	5		1	32
凝灰岩					1		1				2
凝灰岩1								3			3
凝灰岩2								4			4
小計					1		1	7			9
メノウ				1					1		2
メノウ1					2						2
メノウ2								3			3
小計				1	2			3	1		7
チャート	2		1		2	8	7	1	1	2	24
小計	2		1		2	8	7	1	1	2	24
石英斑岩	1					1	2				4
小計	1					1	2				4
粘板岩1					3						3
小計					3						3
頁岩								1		1	2
小計								1		1	2
泥岩					1						1
小計					1						1
計	23	10	29	21	35	24	103	64	6	4	319

第5表　石器集中地点と器種組成

	ナイフ	小石刃	楔形	削器	斧状	石核	敲石	磨石	R剝	U剝	剝片	砕片	礫	計	数量比(%)
石器集中1		4				2			1	2	7	1	6	23	7.21
石器集中2	1						1		1		7			10	3.13
石器集中3					1	1	5				21		1	29	9.09
石器集中4		1				2		4	1	2	9	1	1	21	6.58
石器集中5	2	2	6	1		1					18	2	3	35	10.97
石器集中6							1				14		9	24	7.52
石器集中7			5			1			1	3	57	17	19	103	32.29
石器集中8	1		9			3			2	2	36	8	3	64	20.06
石器集中9			1								3	1	1	6	1.88
出土位置不明													4	4	1.25
合計	4	7	21	1	1	10	7	4	6	9	172	30	47	319	100.00
数量比（%）	1.25	2.19	6.58	0.31	0.31	3.13	2.19	1.25	1.88	2.82	53.92	9.40	14.73	100.00	

観察表について

1．挿図番号　実測図として掲載した遺物の通し番号。この番号は遺物の出土平面図と写真図版の番号に一致する。

2．ユニット　遺物を取り上げる際に分離した石器分布のまとまり。

3．石器集中　整理段階で分離した石器分布のまとまり。

4．遺物番号　遺物の取り上げ番号（注記番号）。

5．打面調整　打面調整が施されているものに「○」、顕著に施されているものに「多」、頭部調整が施されているものに「頭部」とした。

6．背面構成　主要剝離面の剝離方向を基準として、背面を構成する剝離面の種類と数を示した。素材を大きく変形させたものは書かないが、素材の背面構成が窺われるものに関しては、観察される範囲で書く。Cは自然面、Sは節理面、Iは頭部側、IIは背面を正面にして右方、IIIは尾部側、IVは左方からの剝離面数を示す。

7．調整部位・折断部位　主要剝離面の剝離方向を基準として、調整部位と折断部位の位置を示した。Hは頭部側、Bは尾部側、Rは背面を正面にして右側、Lは左側を示す。

8．末端形状　Fは通常の末端（フェザーエンド）、Hはちょうつがい状（ヒンジフラクチャー）、Oはアーチ状（ウートラパッセ）を示す。

9．母岩番号　石材の種類と、母岩別資料の分類を示す。同一母岩として分類不能、若しくは単独母岩については石材名に後続してアラビア数字を付していない。

第6表　旧石器観察表(1)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
1	2	5	95	ナイフ形石器	39.3	11.5	3.3	1.4						3				75	L,H	H	F	珪質頁岩		頭部切断
2	2	5	29	ナイフ形石器	36.4	25.4	5.8	3.7	2		106	○		2		1		113	R		F	硬質頁岩		小石刃素材？
3	2	2	97	ナイフ形石器	37.8	21.8	12.0	7.6	平坦		130	○						85	L		F	ホルンフェルス		
4	3	8	138	ナイフ形石器	36.9	18.0	13.7	7.9										70	H,B			黒曜石		
5	2	5	22	楔形石器	25.7	16.3	7.4	2.9														硬質頁岩5		
6	3	7	85A	楔形石器	29.7	24.2	8.3	6.7				○			1							ホルンフェルス9		
7	4	9	5	楔形石器	19.4	14.4	5.9	1.8											H,B,R,L			メノウ		
8	3	8	1	楔形石器	25.2	26.2	10.1	7.1														砂岩2		
9	3	8	135	楔形石器	32.1	24.3	9.0	7.4				○										ホルンフェルスII		
10	3	8	197	楔形石器	28.1	26.7	8.1	8.2				○										砂岩7		
11	3	8	157	楔形石器	26.6	27.3	10.4	8.8											H,B,R,L			ホルンフェルス7		
12	3	8	174	楔形石器	20.9	26.8	7.8	5.0												HR		ホルンフェルス9		
13	3	8	146	楔形石器	25.4	26.7	9.1	6.5				○										ホルンフェルスII		
14	2	5	18	楔形石器	28.4	22.9	10.3	5.9														安山岩		
15	3	8	145	楔形石器	21.9	26.8	6.5	3.1														メノウ2		
16	2	5	13	楔形石器	37.2	30.4	9.3	9.2				○										流紋岩3	3	
17	2	5	9	楔形石器	37.5	25.7	9.7	7.9				○										流紋岩3	3	
18	3	7	185	楔形石器	33.2	26.8	12.7	10.6				○										ホルンフェルス4		
19	3	8	114	楔形石器	32.4	21.8	8.8	7.3												BR		ホルンフェルスII		
20	3	7	72	楔形石器	41.9	32.3	10.5	12.3				○										砂岩		
21	3	7	190	楔形石器	45.6	33.6	10.0	18.2				○										ホルンフェルス		
22	3	8	109	楔形石器	42.5	21.4	12.1	11.2				○										ホルンフェルスII		
23	2	5	17	楔形石器	27.3	25.3	11.5	4.1					○			2						硬質頁岩		
24	2	5	11	楔形石器	21.1	16.4	4.0	1.1	線状					3		2						珪質頁岩		
25	3	7	27	楔形石器	42.6	45.4	29.2	76.8	節理			○	○	3					B,H			緑泥片岩1	7	
26	1	1	16	小石刃	16.3	6.5	4.7	0.5						4					R	H，B		硬質頁岩2		
27	1	1	17	小石刃	26.0	8.0	4.0	0.4	剥離面		110			3							F	硬質頁岩1		調査時に欠損
28	1	1	15	小石刃	34.8	14.1	11.8	3.9	平坦	頭部	127	○		3		1					F	硬質頁岩3		
29	1	1	11	小石刃	42.4	11.0	5.0	1.9	平坦	頭部	102			4						B		硬質頁岩2		
30	2	5	94	小石刃	83.9	12.3	11.1	10.9	点状					5							F	黒曜石		
31	2	4	49	小石刃	58.3	26.6	6.8	4.8	剥離面	多	110			1		7					F	硬質頁岩		
32	2	5	20	小石刃	58.4	18.3	7.1	5.7	平坦	頭部	105			3							F	硬質頁岩2		
33	1	1	23	石核	82.1	31.3	16.6	31.9	平坦	頭部	102	○										硬質頁岩		大形石刃素材
34	3	7	30	石核	88.5	27.0	14.0	25.1														硬質頁岩1		大形石刃素材
35	2	3	56	石核	26.8	29.0	22.9	22.2														ホルンフェルス		
36	3	8	151	石核	23.0	39.7	23.8	23.0														凝灰岩1	6	
37	2	5	2	石核	53.5	67.4	54.1	188.6														メノウ1	9	
38	2	4	46	石核	44.0	52.5	33.5	92.9														珪質頁岩		
39	3	8	194	石核	46.9	68.0	24.5	62.5														珪質頁岩3	8	
40	3	8	195	石核	41.5	57.7	47.8	92.0														珪質頁岩3	8	
41	1	1	4	石核	57.5	64.2	27.6	99.9														流紋岩1		

第７表　旧石器観察表(2)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
42	2	4	32	石核	38.7	101.1	62.3	232.3														流紋岩１	11	
43	2	5	1	削器	48.7	60.5	14.6	32.5	平坦	頭部	100	○			1		1	82	L，B	B		珪質頁岩		
44	2	3	72	斧状石器	129.1	69.4	34.1	344.9										50				砂岩１	14	
45	3	6	5 A・B	敲石	64.1	43.6	37.7	131.5														砂岩		
46	2	3	60	敲石	59.9	42.4	38.6	114.7														安山岩		赤化
47	2	3	54	敲石	81.2	65.8	44.1	189.0														砂岩		
47	2	3	57	敲石				26.0														砂岩		54と接合
47	2	3	69	敲石				29.9														砂岩		54と接合
47	2	3	71	敲石				102.9														砂岩		54と接合
48	2	2	82	敲石	60.3	59.7	41.7	200.8														安山岩		赤化
49	2	4	53	R剥片	21.7	17.0	6.2	1.6	平坦	頭部	99			3				103	B	B		硬質頁岩３		
50	3	7	40	R剥片	28.5	23.6	7.7	4.1						1			2		L			珪質頁岩		
51	3	8	133	R剥片	23.7	32.0	9.1	4.9	平坦		118			1	1		1		H		H	珪質頁岩		
52	3	8	143	R剥片	36.1	26.4	13.5	10.8						2	2		2	50	L			凝灰岩２	5	石核？
53	2	2	96	R剥片	45.7	20.0	19.0	11.6	平坦	頭部	106		○	2	2				R			珪質頁岩		
54	1	1	21	R剥片	46.4	32.2	8.4	7.2	剥離面	○				4							F	硬質頁岩		ナイフ形石器？
55	1	1	5	U剥片	31.3	41.8	6.0	4.7	平坦	頭部	100			3	1				B		F	硬質頁岩３		
56	3	8	196	U剥片	26.5	25.3	7.8	3.6	平坦	頭部○	122			1	1				L		F，H	頁岩		
57	1	1	9	U剥片	28.1	18.5	3.9	1.9	平坦	多	106			3		1			R，L		H	硬質頁岩３		
58	2	4	30	U剥片	24.7	26.8	7.8	2.9	平坦	頭部	98			3	1						F	硬質頁岩		
59	3	8	156	U剥片	24.2	17.8	7.0	2.2	平坦		91	○			1	1					F	メノウ２		
60	2	4	50	U剥片	70.4	39.5	7.7	20.8	平坦	頭部	90	○		3	2	1					F	硬質頁岩		
61	2	5	15	剥片	33.2	18.0	11.0	5.8	平坦		117			2			2			L		流紋岩２	1	
62	2	5	24 A	剥片	35.7	18.8	9.0	5.3	平坦		117	○		1	1					R		流紋岩２	1	
63	3	8	122	剥片	20.1	30.3	5.8	4.8	2		98			3			1				F	ホルンフェルス10	2	
64	3	8	119	剥片	26.0	39.7	14.9	19.7	2		105			1	1							ホルンフェルス10	2	
65	3	7	79 A	U剥片	32.5	43.8	9.4	11.8	3	多	107	○		1							H	硬質頁岩６	4	
66	3	7	73	U剥片	51.8	35.3	12.9	14.1	平坦		121	○		1					R		F	硬質頁岩６	4	
67	3	8	173	砕片	12.7	9.6	4.3	0.4	節理		130				1		1				F	凝灰岩２	5	
68	3	8	148	剥片	12.9	30.0	6.8	2.9				○								H	F	凝灰岩１	6	
69	3	8	168	剥片	11.7	16.1	3.0	0.5	自然		106			3							H	凝灰岩１	6	
70	3	7	181	剥片	45.3	16.8	12.5	7.7	点状			○	○								F	緑泥片岩１	7	
71	2	5	3	剥片	38.7	41.8	9.7	13.2	自然		115		○	3			2				H	メノウ１	9	
72	1	1	2	剥片	79.6	60.0	31.5	132.1	平坦		123	○		2	1						F	流紋岩１	10	赤化
73	2	2	87	剥片	73.8	41.6	28.3	60.4				○								B		流紋岩１	10	
74	2	2	83	剥片	55.9	44.9	34.2	50.6				○								B，R		流紋岩１	10	
75	2	3	92	剥片	88.5	54.3	34.1	138.7				○				1				H		流紋岩１	10	
76	2	2	85	剥片	39.0	23.0	12.8	11.8	自然		110			2						R	F	流紋岩１	11	
77	2	4	34	剥片	92.6	118.4	55.3	474.0	自然		135	○				1				B	F	流紋岩１	11	
78	2	4	33	剥片	40.0	63.7	21.2	43.0							1					H		流紋岩１	11	
79	2	5	21	剥片	70.0	39.3	22.6	67.2	平坦		99			3	1	1					H	流紋岩１	11	

第８表　旧石器観察表(3)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
80	3	6	25	剥片	39.0	69.7	18.8	37.4	平坦		105	○		1							F	緑泥片岩１	12	
81	3	6	23 A	剥片	60.0	46.0	25.2	73.0	平坦		134	○		1	1							緑泥片岩１	12	
82	3	7	31	剥片	31.6	38.4	18.2	24.1						2	1					H		緑泥片岩１	13	
83	3	6	24	剥片	60.9	40.4	23.8	64.8				○	○	2						RM		緑泥片岩１	13	
84	3	7	34	剥片	36.7	45.0	20.0	39.9							1		1			RL		緑泥片岩１	13	
85	3	7	49	剥片	31.0	60.5	29.5	40.0						1	1					HRL		緑泥片岩１	13	
86	3	6	10	剥片	43.3	25.8	10.2	10.8	平坦		130	○	○							MR		緑泥片岩１	13	
87	2	3	55	剥片	26.0	25.7	12.8	7.0				○								B		砂岩１	14	
88	2	3	89	剥片	79.0	41.3	18.9	47.0				○		1						M		砂岩１	14	
89	2	3	70	剥片	43.5	54.7	12.7	28.4				○		2			1			H		砂岩１	14	
90	2	3	65	剥片	40.5	24.0	19.7	12.5				○								B		砂岩１	14	
91	2	3	90	剥片	47.8	27.8	7.5	11.3				○								M		砂岩１	14	
92	2	3	67	剥片	43.8	35.4	11.8	22.7	自然			○					1			M		砂岩１	14	
	1	1	1	剥片	20.6	10.1	2.8	0.4	剥離面	○		○		1		1					F	硬質頁岩２		
	1	1	3	礫	36.2	20.0	12.7	8.8														砂岩		
	1	1	6	礫	38.1	29.3	17.3	22.7														石英斑岩		赤化
	1	1	7	礫	19.8	12.1	8.2	2.2														砂岩		
	1	1	10	礫	27.5	26.7	20.4	13.2														砂岩		赤化
	1	1	8 A	礫	21.2	21.1	17.6	7.9														チャート		赤化
	1	1	8 B	砕片	12.1	10.7	5.1	0.6														安山岩		
	1	1	12	剥片	27.4	24.1	6.4	4.2	平坦		101	○									F	流紋岩１		
	1	1	14	礫	16.8	16.0	5.6	1.6														チャート		
	1	1	18	剥片	46.1	28.3	11.1	8.5	点状			○		2							F	砂岩２		
	1	1	19	剥片	46.8	36.2	18.5	17.0	2	多	124			3	2						H	黒曜石		
	1	1	22	剥片	19.0	11.3	4.4	1.0	線状					2		1						安山岩		
	1	1	24	剥片	26.1	10.4	7.3	1.5	点状			○		1							F	流紋岩１		
	2	2	81	剥片	16.4	14.9	5.5	1.1	点状					1								安山岩		
	2	2	84	剥片	48.2	25.4	14.0	16.6	平坦		92	○									F	流紋岩１		
	2	2	86	剥片	25.1	29.6	12.1	4.3	自然		110			1							F	流紋岩１		
	2	2	88	剥片	12.5	18.5	5.1	0.9				○		1						H,L,R		流紋岩１		
	2	3	51	剥片	23.5	12.8	7.6	1.7	平坦		102			1	1	1					F	珪質頁岩１		
	2	3	61	剥片	27.3	16.3	10.2	3.2	平坦		115			2	1						F	砂岩３		
	2	3	62	剥片	14.3	13.5	12.8	0.5	点状					3			1				F	珪質頁岩		
	2	3	64	剥片	25.9	18.0	8.6	4.0						1								砂岩１		
	2	3	66	剥片	16.5	25.1	4.4	1.3	点状					2						M		珪質頁岩１		
	2	3	68	剥片	39.2	21.7	14.4	9.5	自然			○			1							砂岩１		
	2	3	73	剥片	20.4	15.1	7.0	1.9	平坦		115			1	1						F	珪質頁岩１		
	2	3	74	剥片	43.5	23.1	12.4	12.1	平坦		88	○		1			1				F	珪質頁岩１		
	2	3	75	剥片	45.1	25.0	20.0	22.6	自然		124			1	1		1					珪質頁岩１		
	2	3	76	剥片	89.0	44.5	15.1	60.8				○								H		砂岩１		
	2	3	77	剥片	41.0	18.0	14.0	10.3	線状			○				1	1					珪質頁岩１		

第９表　旧石器観察表(4)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
	2	3	78	剥片	59.0	43.6	20.3	47.4	平坦		98		○	3			1			B		砂岩３		
	2	3	79	礫	21.3	10.1	8.0	2.6														チャート		
	2	3	80	剥片	29.5	41.2	8.2	6.7	線状				○	1			2				F	砂岩３		
	2	3	91	剥片	28.3	11.2	6.2	1.3	平坦		97						1					砂岩３		
	2	4	31	礫	16.2	13.0	7.7	2.8														メノウ		
	2	4	35	剥片	18.0	29.9	7.1	3.7	自然		97			3							H	砂岩４		
	2	4	36	剥片	18.3	11.4	7.5	1.3	剥離面					2	1							硬質頁岩１		
	2	4	37	剥片	29.1	48.0	12.5	17.5	自然	頭部	86	○		2	1		1				H	砂岩４		
	2	4	38	磨石	87.2	74.0	55.2	43.5														安山岩		
	2	4	39	剥片	27.4	14.2	6.4	1.2				○		1			1			M		硬質頁岩２		
	2	4	41	磨石				133.4														安山岩		38と接合
	2	4	42	磨石				165.6														安山岩		38と接合
	2	4	43	磨石				59.8														安山岩		38と接合
	2	4	44	剥片	12.0	13.1	11.7	0.3	平坦		108	○		3							F	硬質頁岩４		
	2	4	45	剥片	32.6	17.4	4.7	3.2	線状			○		1		3					F	砂岩		
	2	4	47	砕片	12.4	9.2	2.2	0.2	剥離面	頭部	103			2		1					F	硬質頁岩４		
	2	4	48	剥片	20.0	13.2	3.7	1.2	平坦		103			1						L,B,R		珪質頁岩		
	2	5	4	剥片	17.6	14.8	17.1	2.0						2						T		粘板岩１		
	2	5	5	剥片	31.1	29.8	8.4	8.0	自然		104			3		1				B，L		珪質頁岩２		
	2	5	6	剥片	20.1	24.5	4.6	2.2	自然	頭部	109			2								チャート		
	2	5	7	剥片	23.3	16.0	6.2	1.6	点状					3						B		硬質頁岩		
	2	5	10	剥片	29.5	23.7	16.9	4.6	平坦		94			3	1						F	流紋岩２		
	2	5	12	剥片	29.4	19.8	8.0	4.7	平坦		104				2	1				B	F	流紋岩２		
	2	5	14	礫	61.0	19.7	29.0	70.1														チャート		
	2	5	16	剥片	39.8	32.8	10.5	13.0	平坦		100	○		2						B		流紋岩２		
	2	5	19	剥片	41.1	33.2	13.5	14.4	平坦		105	○		2							H	流紋岩２		
	2	5	23	剥片	23.6	17.7	10.7	4.2	自然	頭部	103			2		1	1				H	硬質頁岩５		
	2	5	24 B・C	剥片	24.7	20.4	8.5		平坦		86			1	1		1				F	流紋岩２		
	2	5	25	剥片	21.9	12.8	9.8	1.9	線状			○		2			1				H	珪質頁岩		
	2	5	26	剥片	39.5	29.0	16.6	17.9				○								B		粘板岩１		
	2	5	27	砕片	13.5	5.2	1.5	0.2														珪質頁岩２		
	2	5	28	剥片	36.5	36.1	19.8	28.2						2						T，B		粘板岩１		
	2	5	58	剥片	30.2	37.9	7.5	9.0	線状			○		3	1						H	流紋岩２		
	2	5	59	礫	50.2	47.4	20.2	51.2														泥岩		
	2	5	93	砕片	6.5	3.4	2.2	0.1														安山岩		
	2	5	98	礫	31.0	25.2	12.0	9.7														凝灰岩		
	3	6	4	礫	22.0	17.6	15.0	7.2														チャート		
	3	6	6	礫	48.9	31.4	22.1	56.9														流紋岩		
	3	6	7	礫	61.2	35.8	29.9	86.5														チャート		赤化
	3	6	8	礫	43.8	32.9	23.1	39.1														チャート		赤化
	3	6	9	礫	17.4	15.0	5.5	1.6														チャート		

第10表　旧石器観察表(5)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
	3	6	11	礫	28.7	18.0	16.9	9.5														チャート		
	3	6	12	剥片	9.9	15.0	12.9	0.4	平坦		98			3							F	ホルンフェルス2		
	3	6	13	礫	31.4	27.4	22.6	19.1														チャート		赤化
	3	6	14	礫	28.2	30.5	14.9	11.3														チャート		
	3	6	15	剥片	24.7	17.8	10.5	3.0	平坦		128				1		3				F	ホルンフェルス3		
	3	6	16	礫	24.3	16.7	12.2	6.3														チャート		
	3	6	17	剥片	14.2	6.0	3.1	0.3						2						H		安山岩		
	3	6	18	剥片	66.4	57.0	20.0	88.8	自然		108	○		3			1				O	安山岩1		
	3	6	19	剥片	17.1	20.2	3.6	1.2	線状					2						R，B		砂岩6		
	3	6	21	剥片	18.8	21.9	7.6	2.6	平坦		95			1	1	1					H	緑泥片岩1		
	3	6	22	剥片	10.7	17.7	5.2	0.8	2		110			1			1				F	ホルンフェルス1		
	3	6	23 B	剥片	19.9	35.4	12.2	10.1	線状			○		2	2							緑泥片岩1		
	3	6	26	剥片	15.8	43.6	6.8	4.2	自然		109			1	1						F	砂岩5		
	3	6	200	剥片	23.0	31.2	6.2	4.0	平坦		118	○		1							F	石英斑岩		
	3	7	2	U剥片	13.1	8.4	2.0	0.4	-			○							B	B	H	珪質頁岩		
	3	7	3	剥片	34.5	33.4	11.1	10.2	点状					1		2	1				F	ホルンフェルス8		
	3	7	28	砕片	5.1	8.2	1.0	0.1	点状													ホルンフェルス2		
	3	7	29	剥片	28.0	11.5	9.2	2.7	—					1						H		緑泥片岩1		
	3	7	32	剥片	53.6	26.1	20.9	33.9				○				1				M		緑泥片岩1		
	3	7	33	剥片	34.0	14.0	6.8	3.0	点状					3		1					H	緑泥片岩1		
	3	7	36	剥片	28.2	17.4	5.6	2.8						1	1					H		緑泥片岩1		
	3	7	37	剥片	31.6	33.3	6.6	6.9	平坦		124	○		3							F	砂岩		
	3	7	38	剥片	39.8	31.7	17.3	15.8	平坦		120	○								B		ホルンフェルス1		
	3	7	39 A	砕片	4.3	10.8	5.1	0.1														安山岩		
	3	7	39 B	砕片	9.2	5.4	2.0	0.1														安山岩		
	3	7	41	剥片	14.5	16.1	7.0	1.2	平坦		107	○		3	1						F	ホルンフェルス4		
	3	7	42	剥片	25.2	14.1	5.4	1.6	線状			○		1						B，L		砂岩5		
	3	7	43	剥片	17.7	21.0	4.5	1.6	平坦		133			1	1						F	ホルンフェルス5		
	3	7	44	剥片	14.6	10.5	2.9	0.5	平坦		108			3						L	F	ホルンフェルス1		
	3	7	45	剥片	29.2	10.8	5.1	0.9	線状					2		1				M		砂岩5		
	3	7	47	砕片	9.5	5.3	3.4	0.2														ホルンフェルス		
	3	7	48	剥片	9.9	16.8	3.5	0.8	平坦					3						B		ホルンフェルス5		
	3	7	51	剥片	16.7	15.0	4.8	1.2	点状			○		1			2				H	ホルンフェルス2		
	3	7	53	剥片	14.0	14.4	3.0	0.8							1					H	F	安山岩		
	3	7	54	剥片	19.9	36.8	7.5	6.4	線状					3								ホルンフェルス7		楔形石器？
	3	7	55	剥片	19.0	13.5	4.2	1.1				○		2						H	F	ホルンフェルス2		
	3	7	56	剥片	44.1	31.1	12.9	16.5	自然	頭部	102			3							F	緑泥片岩1		
	3	7	57	剥片	16.7	14.2	7.0	1.4				○								B		緑泥片岩1		
	3	7	58 A	砕片	12.8	9.1	2.3	0.4														緑泥片岩1		
	3	7	58 B	砕片	4.4	9.9	1.0	0.1														緑泥片岩1		
	3	7	59	剥片	32.1	29.5	6.4	4.4	点状						1	3	1					ホルンフェルス4		楔形石器削片

第11表　旧石器観察表(6)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
	3	7	60	剥片	22.0	28.1	8.5	5.2				○		2			1			H	H	ホルンフェルス4		
	3	7	61	剥片	20.7	35.6	6.1	4.5	剥離面		123		○	1							H	緑泥片岩1		
	3	7	62	剥片	20.6	16.4	3.2	1.4	自然		93			1	1					R	F	ホルンフェルス1		
	3	7	63	剥片	43.5	23.3	12.5	14.2	点状			○		2						B	F	砂岩6		
	3	7	64	剥片	26.7	14.3	7.0	2.2	平坦		101			1	2						F	ホルンフェルス5		
	3	7	65	剥片	21.9	42.0	4.7	5.6						1	1					M	F	緑泥片岩1		
	3	7	66	剥片	23.3	29.2	5.9	5.8					○		1					M		緑泥片岩1		
	3	7	67	剥片	14.1	34.2	16.8	4.2						2						H		緑泥片岩1		
	3	7	68	剥片	24.6	17.3	6.1	2.4	線状					1	1						F	ホルンフェルス5		
	3	7	69	剥片	24.9	17.0	8.5	2.9	点状			○		1	1						F	緑泥片岩1		
	3	7	70	剥片	21.0	34.4	7.6	5.6					○							M		緑泥片岩1		
	3	7	71	剥片	18.1	18.4	8.5	3.6						2						L		緑泥片岩1		
	3	7	74	礫	31.1	33.9	10.7	10.8														砂岩		
	3	7	76	剥片	56.9	32.0	8.9	9.3	平坦		113	○		3							F	硬質頁岩6		
	3	7	77	剥片	17.6	20.1	2.5	0.9	線状					4								ホルンフェルス6		
	3	7	78	砕片	6.3	13.5	2.3	0.2														安山岩1		
	3	7	80	砕片	9.0	12.7	2.2	0.3														ホルンフェルス		
	3	7	81	砕片	7.3	12.4	3.4	0.2													F	緑泥片岩1		
	3	7	82	剥片	26.0	21.6	3.6	2.4						1	1					H，R	F	緑泥片岩1		
	3	7	83	砕片	12.4	12.2	3.9	0.8						1		1				H	F	砂岩5		
	3	7	84	剥片	36.5	34.1	9.8	14.1	自然			○		1		1					F	ホルンフェルス7		
	3	7	86	剥片	18.3	21.7	8.4	3.3	平坦		113			2							O	ホルンフェルス8		
	3	7	87	礫	48.2	30.8	6.2	23.6														安山岩		赤化
	3	7	88	礫	65.9	32.5	11.5	12.6														砂岩		
	3	7	89	礫	61.1	24.6	19.1	35.3														安山岩		赤化
	3	7	90	礫	67.1	47.8	25.0	83.9														安山岩		赤化
	3	7	91	礫	47.5	39.6	21.1	43.4														安山岩		赤化
	3	7	92	礫	53.7	53.4	24.0	50.8														石英斑岩		
	3	7	93	礫	43.3	35.8	31.7	40.9														ホルンフェルス		
	3	7	94	礫	29.7	25.2	19.9	17.0														チャート		赤化
	3	7	95	礫	74.3	82.1	31.7	222.6														石英斑岩		赤化
	3	7	96	礫	70.2	59.2	28.7	140.3														チャート		赤化
	3	7	97	礫	74.1	48.2	38.6	158.0														チャート		赤化
	3	7	98	礫	48.8	40.3	35.7	62.5														チャート		赤化
	3	7	99	礫	67.6	21.8	14.2	23.9														砂岩		
	3	7	100	剥片	25.8	19.4	7.1	2.3	点状			○		2							F	硬質頁岩6		
	3	7	102	剥片	27.8	32.1	12.0	9.2	平坦		121	○		1							F	砂岩		
	3	7	103	礫	24.0	14.8	8.2	2.6														チャート		
	3	7	104	剥片	14.8	13.3	3.6	0.4	点状					2			2				F	黒曜石1		
	3	7	105A	剥片	25.9	31.4	7.9	4.0	自然		99			2	1						F	ホルンフェルス1		
	3	7	105B	剥片	8.5	19.2	4.5	0.8						2						R，L	F	珪質頁岩		

第12表　旧石器観察表(7)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
	3	7	160A	砕片	5.9	11.9	5.9	0.9														安山岩		
	3	7	160B	砕片	11.9	5.6	3.6	0.2														安山岩		
	3	7	163	礫	17.5	14.1	15.6	3.3														チャート		
	3	7	164	礫	37.6	22.7	18.8	20.5														安山岩		赤化
	3	7	165	礫	67.4	55.5	34.9	151.5														ホルンフェルス		
	3	7	166	礫	25.7	16.2	9.5	3.8														チャート		赤化
	3	7	167	剥片	17.2	23.8	9.4	2.1						3						H	F	緑泥片岩1		
	3	7	169	剥片	21.4	26.7	5.8	3.4	線状					2	1		2					ホルンフェルス6		楔形石器削片
	3	7	176	剥片	33.5	13.3	6.6	3.2	自然		83			1	1							緑泥片岩1		
	3	7	177	砕片	9.3	14.6	1.7	0.3												H	F	ホルンフェルス2		
	3	7	178	砕片	9.7	3.3	1.9	0.1														安山岩		
	3	7	179	砕片	9.1	13.2	1.7	0.3													F	ホルンフェルス1		
	3	7	180	剥片	18.1	21.0	2.9	1.5	平坦		91	○									H	ホルンフェルス1		
	3	7	182	剥片	31.8	27.7	6.5	6.4	平坦		116	○		1		1				R	F	ホルンフェルス1		
	3	7	183	剥片	33.3	14.0	5.3	3.2	線状			○		2						R	F	砂岩5		
	3	7	184	砕片	11.1	8.9	4.0	0.4														砂岩5		
	3	7	186	剥片	25.8	13.6	3.8	1.5	線状			○									F	ホルンフェルス4		
	3	7	187	剥片	24.3	20.7	7.2	3.2	点状			○			1							凝灰岩		
	3	7	188	剥片	15.6	6.3	4.5	0.3	平坦		100			1	1		1				F	緑泥片岩1		
	3	7	189	砕片	9.4	8.5	2.9	0.3														ホルンフェルス		
	3	7	192	剥片	6.5	16.6	3.9	0.4	線状					2						B		安山岩		
	3	7	199	剥片	18.3	8.1	4.8	0.7	線状					1	1							ホルンフェルス8		
	3	8	106	砕片	11.4	9.4	2.0	0.1												H	F	黒曜石1		
	3	8	107	剥片	26.8	25.7	11.2	7.0	平坦		92			1						L	F	ホルンフェルス10		
	3	8	112	剥片	31.0	35.0	14.3	14.9	3		119			3			1				F	ホルンフェルス8		
	3	8	113	剥片	22.9	22.9	11.2	4.4	平坦		125			1	1							安山岩2		
	3	8	115	剥片	32.6	37.8	10.7	15.2	線状					2	1					B		ホルンフェルス10		
	3	8	116	剥片	33.0	51.6	13.2	24.2	2	○		○		2	2						H	砂岩7		
	3	8	117A	剥片	10.2	14.5	5.2	1.0	平坦		104			1								ホルンフェルス10		
	3	8	117B	砕片	14.0	10.2	3.2	0.4												S	F	ホルンフェルス		
	3	8	118	剥片	14.6	20.0	5.3	2.2	線状					1	1	1						ホルンフェルス10		
	3	8	120	剥片	30.7	21.6	18.9	4.8	点状					1		1				L		ホルンフェルス7		
	3	8	121	剥片	17.7	21.5	4.9	2.7	平坦		121			2	1		1					ホルンフェルス10		
	3	8	123	剥片	13.3	16.9	6.1	0.7	平坦		114						1					安山岩		
	3	8	125	剥片	9.5	17.8	6.2	1.2	平坦		116			1			1			M		ホルンフェルス2		
	3	8	126	砕片	11.8	10.1	2.6	0.2	線状												F	ホルンフェルス2		
	3	8	127	剥片	15.9	17.7	6.1	1.2	平坦		119	○					1					珪質頁岩		
	3	8	128	剥片	24.4	15.8	12.1	4.1	点状					2	1	1						ホルンフェルス7		
	3	8	129	剥片	39.3	40.0	11.8	15.7	平坦		122			1	1		1				F	ホルンフェルス2		
	3	8	130	剥片	35.2	29.3	5.1	9.4	平坦		107				3							ホルンフェルス10		
	3	8	131	砕片	7.8	9.2	6.7	0.6														ホルンフェルス10		

第13表　旧石器観察表(8)

挿図番号	ユニット	石器集中	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角 °	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角 °	調整部位	折面部位	末端形状	母岩番号	接合資料	備考
	3	8	132	剥片	23.1	28.1	8.6	3.8	自然		95			1	2						F	ホルンフェルス12		
	3	8	134	剥片	26.9	25.3	6.9	4.1	線状			○		1							F	安山岩		
	3	8	137	剥片	19.9	30.0	10.4	6.1	自然		86				2						F	ホルンフェルス12		
	3	8	139	剥片	22.0	39.9	8.8	6.9	自然		101				2					B		ホルンフェルス12		
	3	8	140	砕片	9.8	10.1	4.4	0.5														ホルンフェルス13		
	3	8	142	剥片	21.7	13.0	5.0	1.5	平坦		94				1		1			R		メノウ2		
	3	8	144	礫	23.4	15.3	12.0	4.9														チャート		
	3	8	147	剥片	13.6	11.0	5.0	0.8				○		1	1					H		凝灰岩2		
	3	8	149	剥片	30.7	19.4	7.5	3.7	点状					1	1	1	1					ホルンフェルス7		
	3	8	150	剥片	18.1	15.7	10.4	1.9	平坦		98			2								ホルンフェルス3		
	3	8	152	剥片	12.7	17.5	3.6	0.9						1						H		ホルンフェルス		
	3	8	153	剥片	17.5	18.4	10.7	3.0	平坦					2	1		1					安山岩2		
	3	8	154	剥片	21.7	19.6	5.8	2.7	平坦		121			2	1						F	ホルンフェルス10		
	3	8	155	剥片	20.7	21.2	5.5	2.2	剥離面	○				1						B		ホルンフェルス2		
	3	8	158	剥片	38.3	52.6	15.7	28.5	平坦		130	○		2			1					ホルンフェルス12		
	3	8	161	礫	24.9	16.7	2.9	6.0														流紋岩		
	3	8	162	礫	33.3	25.5	23.5	16.1														砂岩		
	3	8	170	砕片	9.2	8.0	2.9	0.2														安山岩		
	3	8	171	砕片	9.4	10.4	3.3	.0.4														ホルンフェルス		
	3	8	172	剥片	41.3	25.9	7.1	5.8	平坦		130	○		1	2		1				H	ホルンフェルス13		
	3	8	175	剥片	11.3	14.8	5.6	0.7	自然		103	○		2								凝灰岩2		
	3	8	193	剥片	11.8	23.0	5.5	1.5	線状			○								B		ホルンフェルス13		
	3	8	198	剥片	44.0	25.0	7.0	8.1	線状			○			1						F	砂岩		
	4	9	1	砕片	9.7	11.3	4.1	0.4	平坦	頭部	91			3			1					珪質頁岩		
	4	9	2	剥片	24.0	8.7	5.4	0.9	線状	頭部				3			1					珪質頁岩		微細剥離痕有り？
	4	9	3	剥片	16.1	10.2	6.6	0.9						1	1		1			M		珪質頁岩		
	4	9	4	礫	32.7	19.6	15.7	13.3														チャート		
	4	9	6	剥片	23.5	13.5	7.0	2.3	平坦								1				F	ホルンフェルス		
	2		100A	礫	39.8	19.2	18.5	20.8														チャート		赤化　出土位置不明
	2		100B	礫	22.3	29.6	26.0	18.1														チャート		出土位置不明
	2		100C	礫	30.8	22.0	19.9	18.2														安山岩		出土位置不明
	2		100E	礫	19.3	11.4	5.6	2.0														頁岩		出土位置不明

2　縄文時代

調査区内から検出された縄文時代の遺構はなく、出土した遺物も量的にはわずかなものである。遺物の出土状況は、調査区内から検出された古墳時代後期以降の竪穴及び掘立柱建物跡の覆土から出土したものがほとんどである。よって、ここでは遺物ごとに分類して述べることとする。調査時の所見では、いわゆる遺物包含層が確認されておらず、耕作土の直下がローム層となる層序であったことから、かつては存在していた遺物包含層が後世の耕作などで消失してしまったものと考えられる。出土した遺物には土器と石器があるが量的には少ない。

（1）縄文土器（第28～33図、図版34～38）

出土した縄文土器は早期から後期に及ぶ。各時期とも量は少ないものの複数の型式にわたって出土している。出土した縄文土器を以下のように大きく4群に分け、更に各群ごとに類別を行って各時期の様相についてふれていくことにする。

第Ⅰ群土器　早期の土器を一括する。撚糸文系土器、田戸下層式、田戸上層式、子母口式、野島式、鵜ケ島台式、茅山式などがこの中に含まれる。

第Ⅱ群土器　前期の土器を一括する。黒浜式、諸磯・浮島式などがこの中に含まれる。

第Ⅲ群土器　中期の土器を一括する。五領ケ台式、阿玉台式、加曽利E式などがこの中に含まれる。

第Ⅳ群土器　後期の土器を一括する。堀之内式、加曽利B式、安行式などがこの中に含まれる。

第Ⅰ群土器

早期の土器は、470点出土している。数型式に及ぶが、土器の主体は条痕文系土器である。

第1類（第28図1・2）

撚糸文系土器を一括した。出土点数は2点である。共に胴部下半の破片であるが別個体である。1はRの撚糸施文で胎土、焼成は良い。2はLの撚糸施文で、胎土にやや砂粒が目立つ。

第2類（第28図3～15）

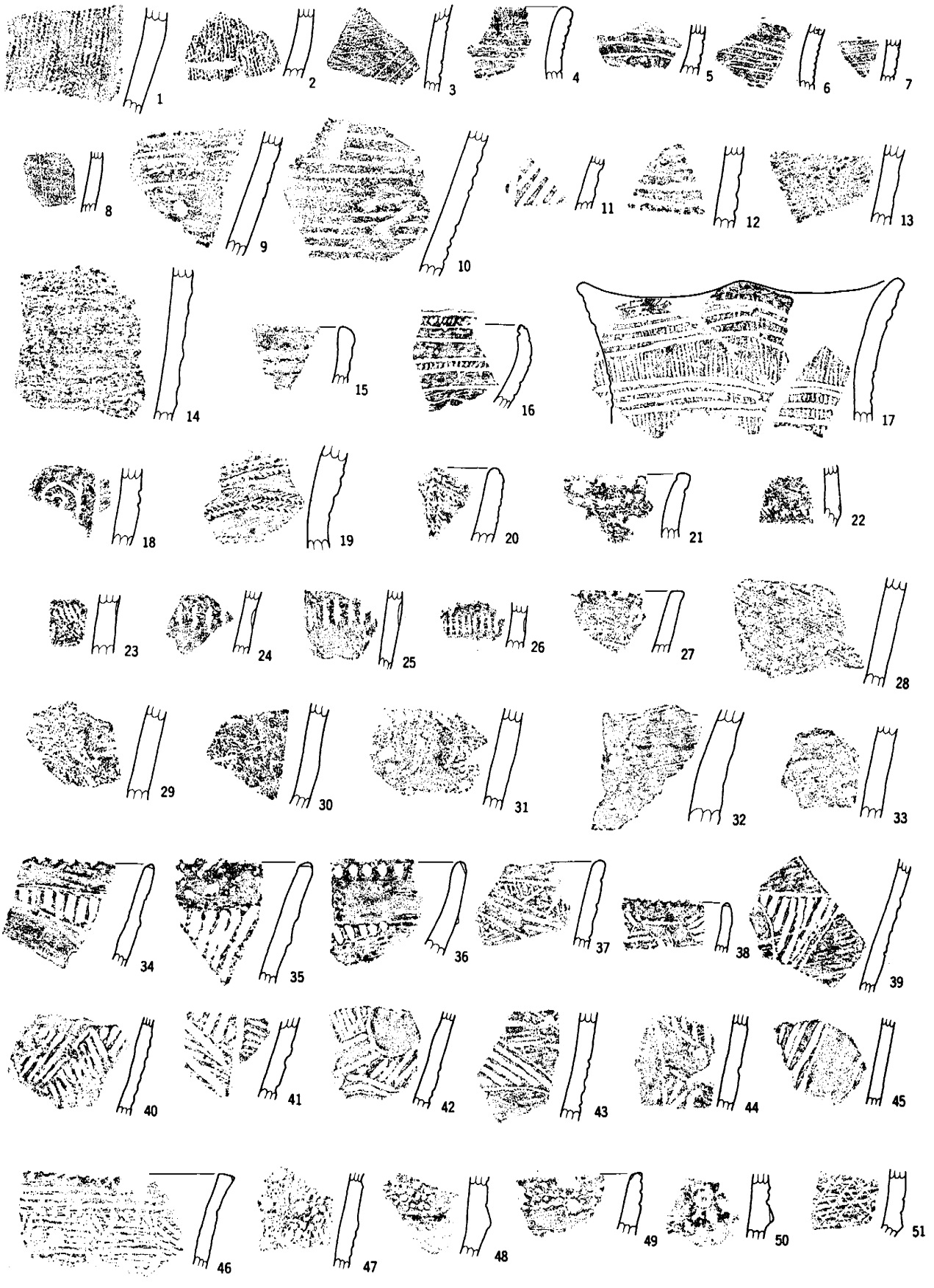
田戸下層式を一括した。3は細沈線の間に貝殻腹縁文が充填される。胎土、焼成共に良好で、内面の調整も良い。4～7の胎土はやや砂粒が目立つ。8は縦位の細沈線である。胎土は良好。9～12は沈線ないし太沈線が施文されいてる。9・10はやや器面が粗く砂粒が目立つ。9は繊維が微量混入している。11は縦位と斜位の太沈線が施されている。内面の調整が良く、砂粒は少ない。12は先端がささくれた棒状工具によって沈線が施されている。やや砂粒が多い。13～15は横位の凹線文が施されている。3点とも器面に石英砂が横位に移動した痕跡を明瞭に残している。内面は丁寧な調整によって胎土中の砂粒は目立たない。15の口縁部は外削ぎ状である。14・15は同一個体の可能性が高い。本類は田戸下層式でも比較的古い様相を呈していると言えよう。

第3類（第28図16～18）

田戸上層式を一括した。16は胎土、焼成共に良好。口唇部内面に沈線とキザミを伴う。17は4単位の波状口縁を呈し、外反する。口唇部は若干面取りされている。外面は縦方向の条痕を地文に4条の沈線が口縁と胴部上半に横走する。内面は若干の条痕を伴うが、横位のナデ調整が行われている。微量の繊維を含む。18は沈線の渦巻文が施されている。胎土に若干の繊維を含む。

第4類（第28図19・20）

明神裏Ⅲ式類似の土器である。2点しかなく、同一個体である。先端がV字形に尖る細いペン先状の工



第28図　遺構外出土縄文土器（1）

具で器面をなぞるように押し引いた有節沈線を主体とする。20は波状口縁の波頂部に当たる。4単位の波状と思われ、外反する器形である。内面の調整はヘラによる横位のナデである。胎土には砂粒の混入がほとんどなく、赤味の強い粘土粒が少量混ざる。

第5類（第28図21～26）

子母口式を一括した。胎土に若干の繊維を含む。21は口縁部が外反する。内面に横位の擦痕状の調整が行われている。口縁に沿って連続の刺突文が施される。胎土に繊維を混入する。22は斜位の絡条体圧痕文が施されている。胎土にはやや砂粒が多い。23～26は胴部中位に施文された連続のキザミ文である。24～26には1㎜程度の長石砂が混入する。

第6類（第28図27～33）

無文土器を一括した。量的には本類に含まれる点数は多かったが、図示し得る破片は少なかった。内外面共に擦痕状の調整痕を伴うものが多い。図示した個体にはすべて繊維が混入している。時期的には田戸上層式から子母口式に比定されよう。

第7類（第28図34～46）

野島式を一括した。沈線ないしは微隆帯によって区画し、その中を密な沈線で充塡するものがほとんどである。内面には条痕文を伴う。胎土には微量の繊維が混入している。34・35・36・38の口唇部の断面形は丸味があり、連続のキザミが施されている。37は沈線の区画文の中に押し引き刺突文が充塡されている。沈線の交差部に刺突文を伴わないため、本類に含めた。46は内外面共に条痕を地文とし外面に沈線による区画文を施し、その中を沈線で埋めている。口唇部外面にはキザミを伴う。

第8類（第28図47～51）

鵜ケ島台式を一括した。47は微隆帯による区画文の中に押し引き刺突文を充塡している。交叉部に刺突文を施している。胎土に雲母を含み、砂粒が多い。48・49は刺突による充塡文である。49は貝殻背圧痕を伴う。51は条痕を地文とし沈線による斜格子文が施されている。

第9類（第29図52～54）

茅山下層式から上層式を一括した。本型式と判断できる個体は図示した3点のみである。3点とも単純な沈線文が施されている。内面は横位の条痕が施されている。胎土に繊維を混入している。

第10類（第29図55～68）

内外面条痕のみの土器を一括した。早期後半に位置付けられるが、有文土器の出土割合から主体は野島式から鵜ケ島台式の時期と考えられる。胎土には繊維を混入する。

第II群土器

前期の土器は量的には少なく67点出土している。主体は前期後半の土器である。

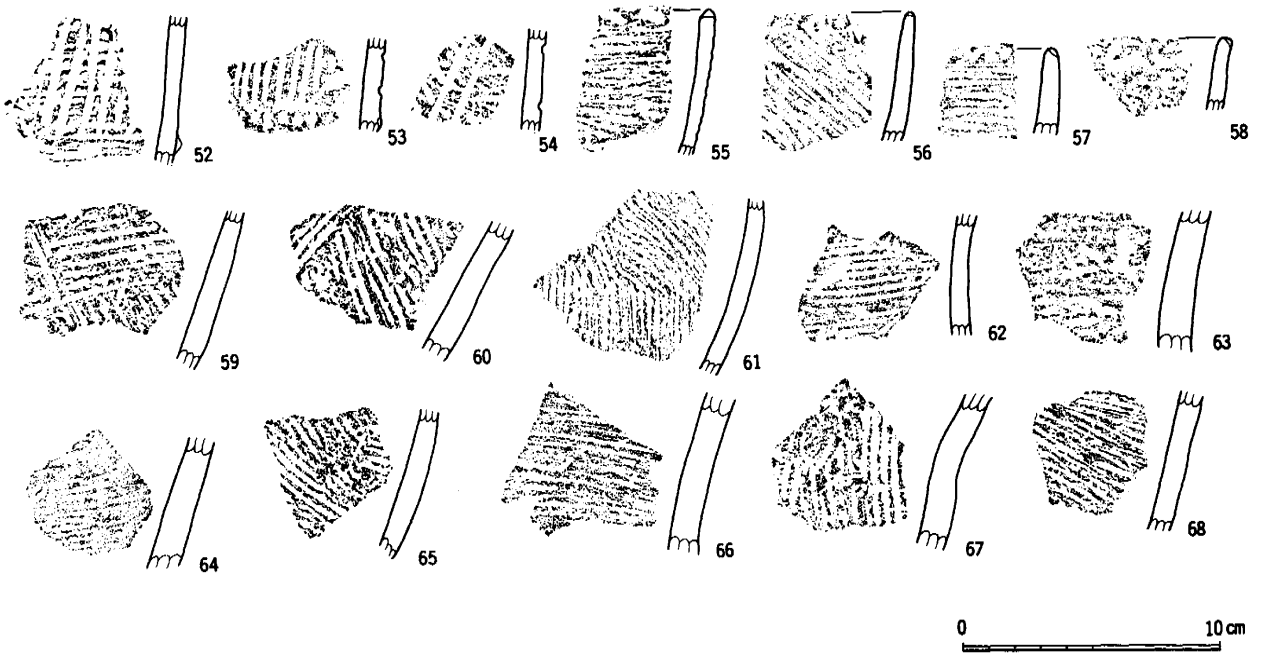
第1類（第30図69～71）

黒浜式土器を一括した。本型式と判断できる個体は図示した3点のみである。胎土に多量の繊維を混入している。70はLRとRLの羽状縄文である。71はRL、72はLRの縄文である。

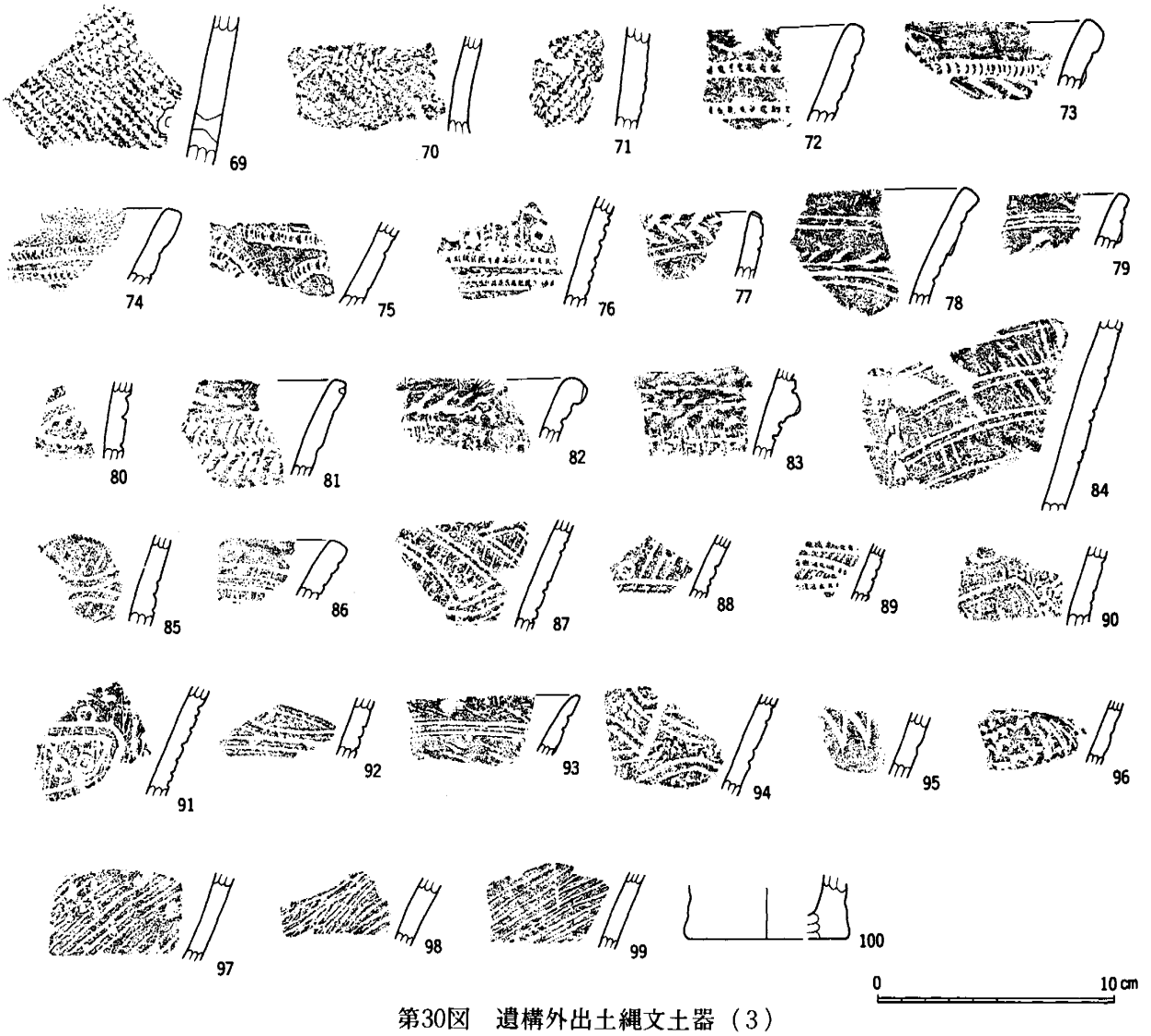
第2類

浮島式系土器を一括した。64点出土しているが、文様構成などが判別可能なものは少ない。半截竹管による並行沈線を主体に文様が施文されるものが多い。地文の有無などから4種に細分される。

a種（第30図72～80）



第29図　遺構外出土縄文土器（2）



第30図　遺構外出土縄文土器（3）

地文に縄文等を伴わず、竹管及び半截竹管によってのみ文様が施されるものを一括した。72～75は半截竹管による押し引き文である。胎土に大きな砂粒を混入する。76は半截竹管による押し引き文と竹管による刺突文を伴う。地文に縄文等を伴う可能性もあるが不明瞭である。77は口唇部に綾杉状の連続したキザミが施される。78・79は口縁部下に段を伴いその上にキザミを施し、半截竹管による沈線文を施している。80は弧状の沈線文である。

ｂ種（第30図81）

幅の広い、いわゆる変形爪形文が施文された土器である。１点のみである。半截竹管による施文と思われる。口唇部外面に押し引きの刺突文が施されている。

ｃ種（第30図82～93）

地文に撚糸文を施文し、半截竹管によって文様を施すものを一括した。82・83は同一個体である。Rの撚糸を地文とする。半截竹管による列点状の押し引き文である。84は垂下する押し引き文によって分割し、その間を半截竹管による肋骨状の沈線文で埋めるものである。86・88・93を除いては半截竹管によって弧線文や曲線を組み合わせた沈線文が施されている。

ｄ種（第30図94）

地文に縄文を施文し、半截竹管によって文様を施すもの。１点のみである。ＲＬの単節縄文を地文とし、半截竹管による弧状の沈線文を施している。

ｅ種（第30図95・96）

貝殻文及び三角形文を伴うもの。それぞれ各１点のみの出土である。95は貝殻波状文、96は貝殻波状文と三角形文の両方を伴う。

ｆ種（第30図97～100）

そのほかのものを一括した。みな撚糸文を施した胴部下半の破片である。Rの撚糸を原体とする。内面の調整はいずれも丁寧である。100は底部である。底辺部分がやや開く。胎土・焼成からこの時期に含めた。

第Ⅲ群土器

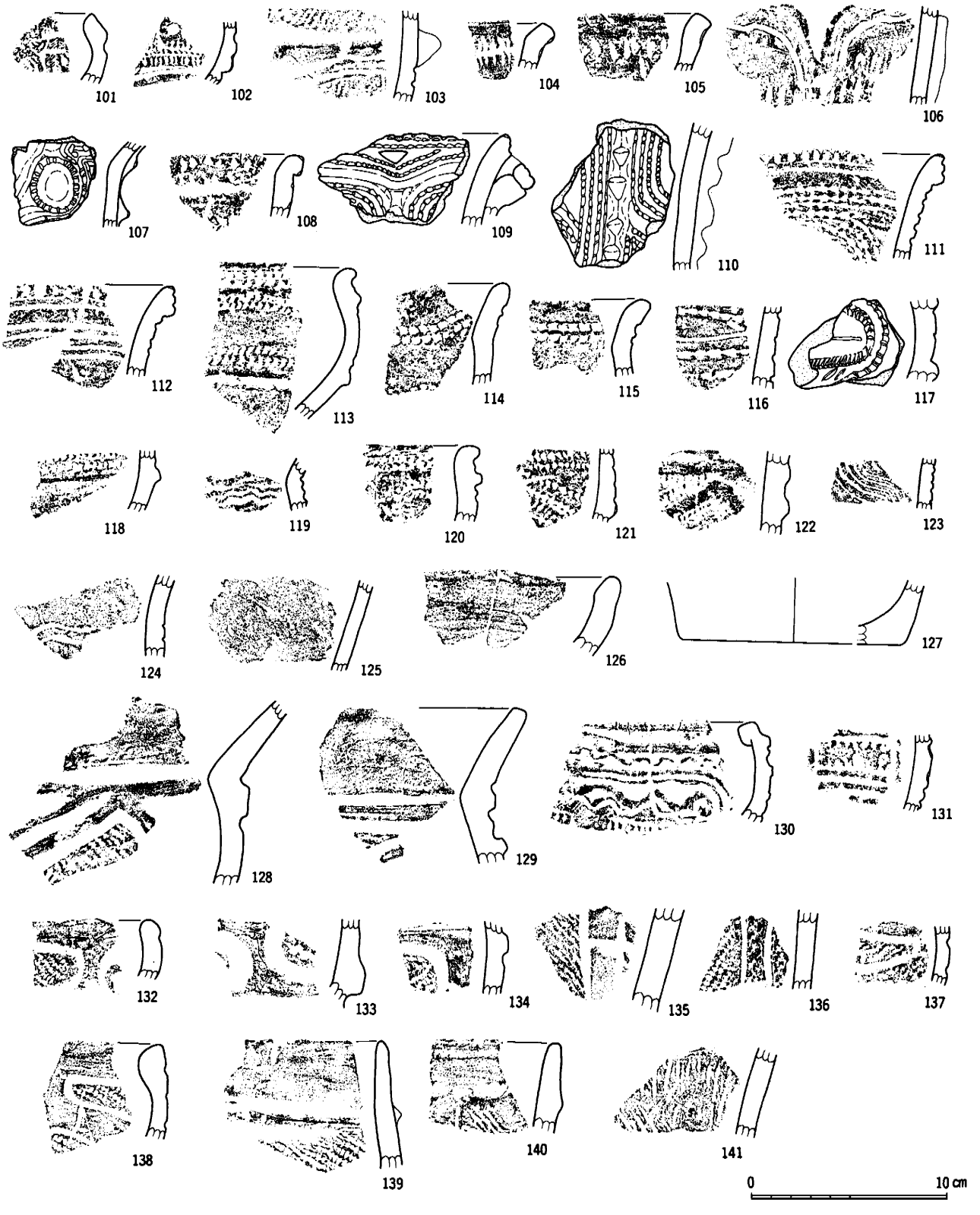
中期の土器は、101点出土している。五領ケ台式は微量である。阿玉台式及び加曽利Ｅ式が同量程度出土している。

第１類（第31図101～103）

五領ケ台式土器を一括した。101は先の尖ったへら状の工具による押し引き文で、三叉状の沈線文も施されている。102は円形の陰刻文と押し引き文が施されいてる。２点とも胎土に雲母を微量混入する。103は横位の隆帯が付けられ、RL単節縄文が施文されている。胎土に雲母と粗い砂粒が多量に混入する。

第２類（第31図104～128）

阿玉台式を一括した。阿玉台式前葉の時期を主体としている。胎土には雲母を混入し、一部をのぞき粗い砂粒が多量に混入している。104・105は口唇部が外傾し、外面には横位のへらによる押し引き文が施されている。106は左右からの横位貼付隆帯が垂下して合流し、縦のキザミが施されている。107は円形の貼付文である。縁にキザミが施されている。108は口唇部が肥厚し、連続したキザミが施されている。109～112は同一個体である。器形は円筒状の胴部で口縁部近くで外反し開く器形である。口唇部にキザミが施され、109のような貼付隆帯文が部分的に付けられる。110は109から垂下する隆帯である。重層的に角押文が施文されている。113は区画隆帯文の中に２列の角押文が施されている。118も同様である。114・115は波状縁



第31図　遺構外出土縄文土器（4）

である。口唇部は外傾している。2条の角押文が施されている。116は胎土に雲母を含まない。沈線及び角押文が施されている。117は窓枠状の隆帯に角押文を施している。119は半截竹管による波状文である。粗い砂粒が目立つ。120～122は二重の角押文を施している。123・124は条線文である。125は胴部中段の破片である。126は浅鉢の可能性がある。内面に稜線を伴い、細かい雲母を混入する。127の底部は粗い砂粒を多量に混入する。128は三角形状の隆帯文であろう。口縁部が外傾し無文となる。LR単節縄文が施文される。123・124・128は阿玉台III～IV式に比定されよう。

第3類（第31図129～141）

中峠式から加曽利E式を一括した。129は幅広の無文帯が口縁部にあり、外傾する。竹管による太い沈線で隆帯が強調されている。130はキャリパー状の口縁部形態である。交互刺突によって蛇行する隆帯を描出している。その下に隆帯の区画文、内部に蛇行する隆帯を貼り付けている。131は半截竹管によって四角い区画文を施し、内部に連続する刺突文を施している。129～131は中峠式に比定されよう。132～141は加曽利E式後半の土器である。132～134は隆帯の区画文の中に縄文を充塡する。135・136は胴部の垂下沈線の間を磨り消している。137は沈線文による楕円状の区画文である。138は波状縁を呈すると思われる。楕円状の区画文内部に縄文を充塡している。139・140は隆帯によって幅の狭い口縁部無文帯を形成している。RL縄文が施文されている。141はRの撚糸文である。

第IV群土器

後期の土器は、393点出土している。主体は堀之内式である。

第1類

堀之内式土器を本類とする。本型式が最も多く346点出土している。型式的には堀之内I式の古い段階のものが主体であるが、一部は称名寺式に含まれる可能性がある。文様等から6種に細分される。

a種（第32図142～147）

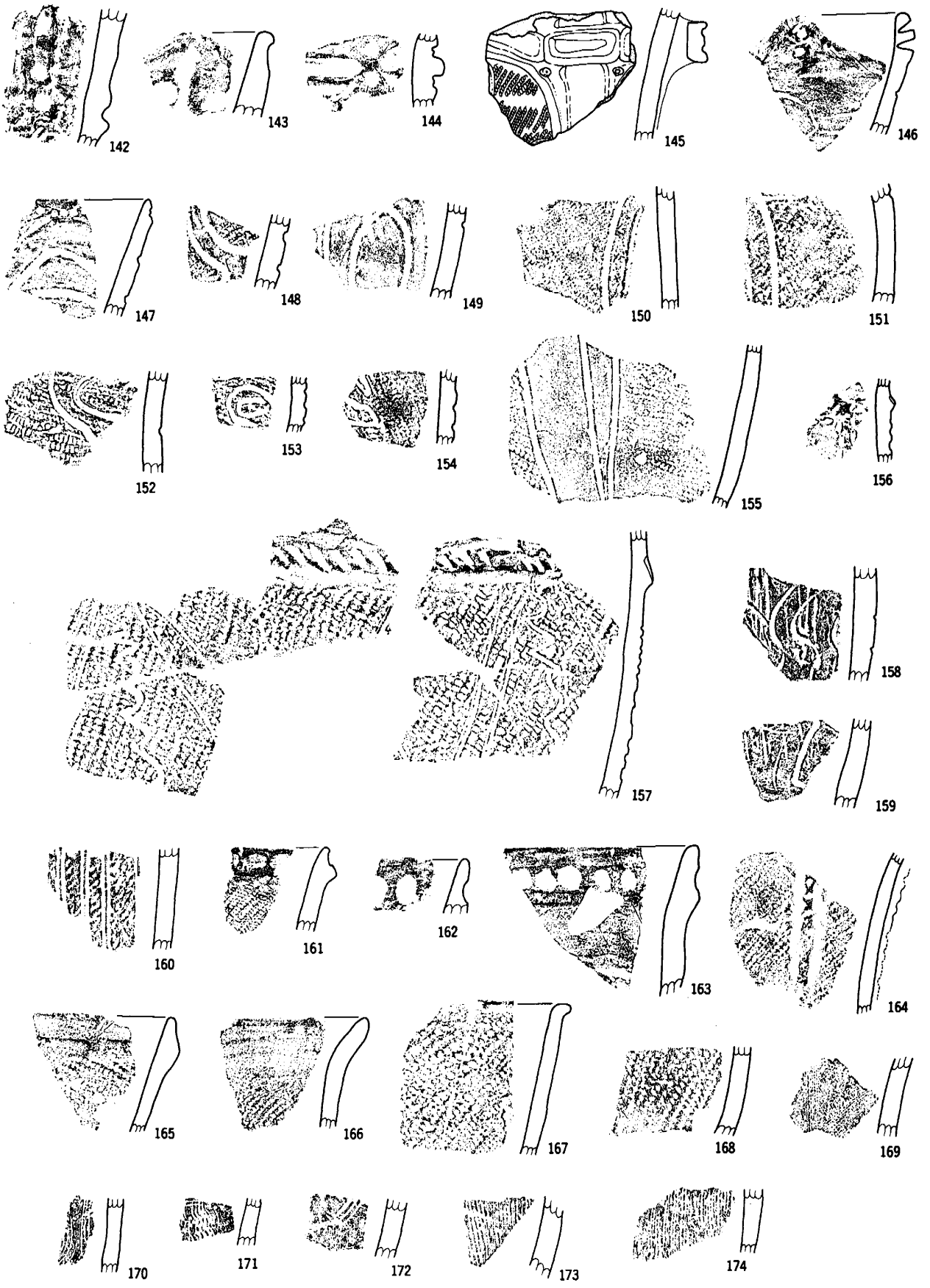
刺突文ないしは凹文を伴うもの。142は口縁部に無文帯があり口唇部から弧状の隆帯が垂下するものであろう。143は波状口縁の波頂部に当たる。太い沈線によるC字状文と刺突文が付されている。144は上下の刺突によって8の字状の文様になっている。横位2本の隆帯によって、口縁部の無文帯と胴部文様帯を分けている。145は把手を伴っている。144と同様に上下文様帯を横位の隆帯によって分割している。地文はLR縄文である。146・147は地文に縄文を伴わず、沈線文のみであろう。146の刺突文は先端の尖った棒状工具による。

b種（第32図 148～160）

胴部に単位文様を施すもの。148～151はJ字状文ないしは単純な弧線文が施されている148は沈線で区画された内部の縄文を磨り消している。152～155は単純な蕨手文と思われる。155は蕨手文を施文した後に縄文を施している。156は地文の縄文を伴わない。キザミを伴う横位の隆帯と垂下する列点文が施されている。157は隆帯によって上下の文様帯を分けている。胴部には簡略化した蕨手文が付されている。地文はLR縄文である。158・159は同一個体である。太い半截竹管によって蛇行する沈線文が施されている。160は蕨手文の左右に重層的に施される沈線文である。半截竹管によって深い沈線が施されている。

c種（第32図161～163）

口縁部に連続する指頭圧痕文を伴うもの。161・163は指頭圧痕文の下が突帯状になっている。162は下方に縄文を伴うと思われる。



第32図　遺構外出土縄文土器（5）

第４種（第32図164）

隆帯を伴うもの。１点のみである。地文はLR縄文で垂下する隆帯上にはキザミが施されている。

ｄ種（第32図165～168）

縄文のみのもの。量的には少ない。165・166は口縁部に若干の無文帯を伴う。167は口唇部が外面に突出する。165はＲＬ、166～168はLR単節縄文を施文している。

ｅ種（第32図169～174）

条線による文様を伴うもの。量的には図示したものがそのほとんどである。169は７本の櫛状工具によって斜格子状の文様を描いている。170～174は条線が蛇行又は垂下している。胎土の状態から当該時期に含まれると思われる。

第２類

後期後半の土器を本類とする。47点出土している。図示できる量は少ない。文様等から９種に分けられ、加曽利B式から安行１式に比定される。

ａ種（第33図175～178）

沈線によって区画された中に縄文を充塡するもの。175は内外面共によく調整されている。177･178は注口土器と思われる。加曽利Ｂ２～３式に比定される。

ｂ種（第33図179）

沈線文のみのもの。１点のみである。179は口縁部内面に沈線を伴う。

ｃ種（第33図180）

横位の沈線の間にキザミを施すもの。１点のみである。浅鉢と思われる。外面に丹が付着している。

ｄ種（第33図181）

コブ状の貼付文を伴うもの。181は口縁部が内湾する深鉢である。内外面の調整は丁寧である。ＲＬ縄文が充塡されている。安行１式に比定されよう。

ｅ種（第33図182・183）

紐線文を伴うもの。181は口唇部に、182は口唇部から若干下がった位置に紐線文が付けられている。共に口縁部内面に沈線を伴う。加曽利Ｂ２～３式に比定される。

ｆ種（第33図184～187）

縄文のみのもの。内面の調整は丁寧に行われている。187は推定口径22.2cmの浅鉢である。横位のＲＬ単節縄文が全面に施文されている。口縁部内面に明瞭な沈線が走る。

ｇ種（第33図188～191）

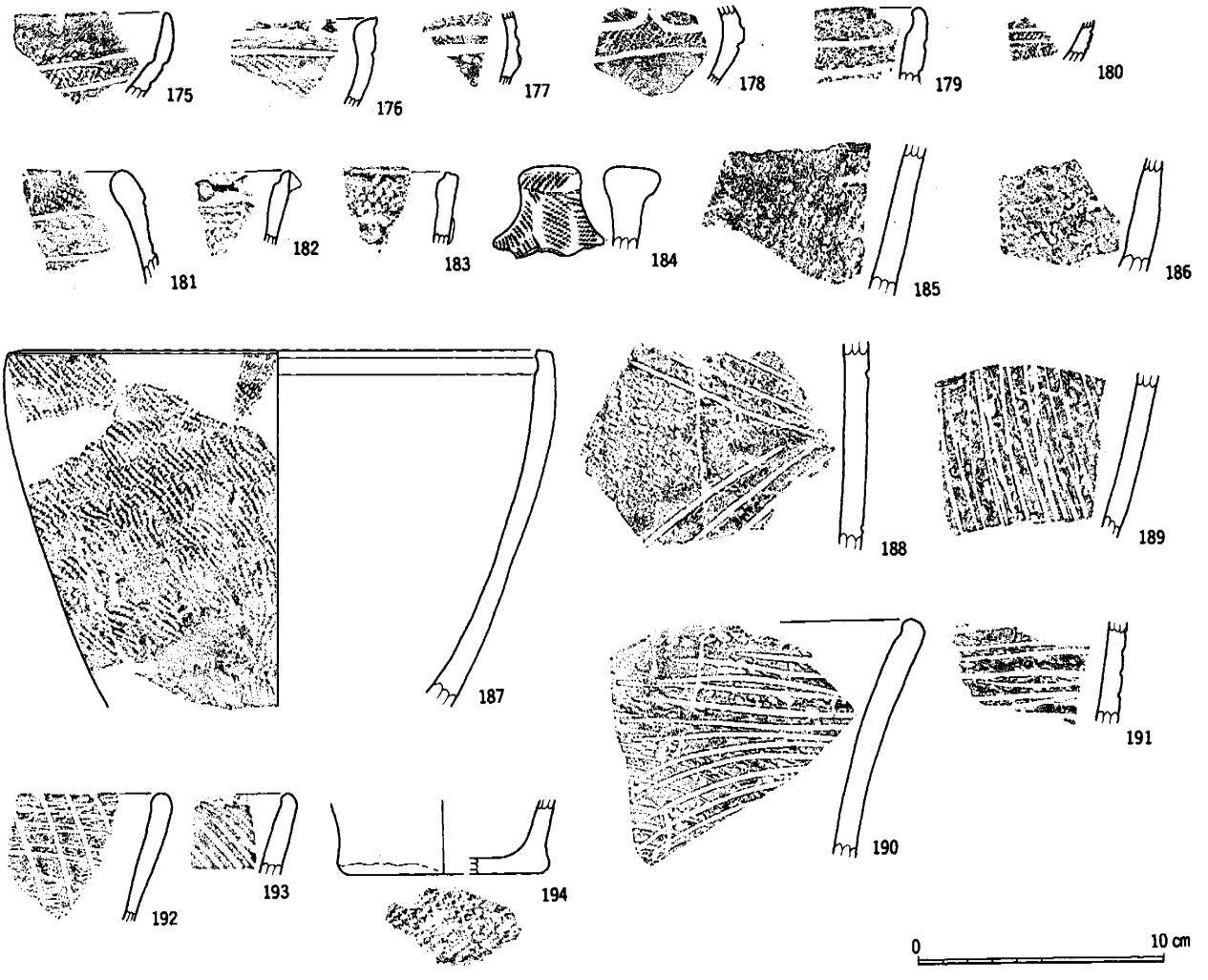
地文に縄文を施した後、沈線ないし条線を施すもの。まばらに縄文が施文され、押捺の状態も浅いものである。190は口縁部内面に沈線を伴う。

ｈ種（第33図192・193）

斜行する条線のみのもの。192は波状口縁を呈すると思われる。

ｉ種（第33図194）

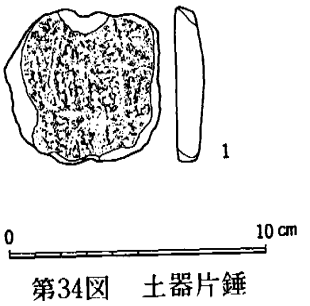
底部である。図示できたのは１点のみである。底面に網代痕を伴う。加曽利B式に含まれよう。



第33図　遺構外出土縄文土器（6）

土器片錘(第34図１)

１点のみである。加曽利B式土器と思われる深鉢胴部破片を利用している。上下の切り込みは比較的深く、若干磨滅している。重量は38.3gである。



第34図　土器片錘

（2）縄文時代石器（第35～38図）

出土した石器は全部で260点である。土器と同様、すべて古墳時代以降の遺構の覆土から出土したものである。図に掲載した石器の属性は、第14表の通りである。それ以外の石器は、石鏃の破片が4点出土しているほかは、石鏃などの制作で生じたとみられる剥片類がほとんどである。全部で185点出土しているが、そのうち黒曜石が144点と圧倒的多数を占める。また、磨石や石皿の破片と見られる礫片なども21点出土したが、全体形状が復元できないものについては省略した。そのほか、礫が多量に出土しており、そのうち熱を受けた痕跡の見られる礫片が約360点を数えるが、縄文時代のものかどうかは不明である。また、雲母片岩の扁平な礫が6点出土しているが、これらは板碑の破片の可能性が強い。

第35図の1～21は石鏃及びその未成品である。1～8は平面形が正三角形かそれに近い形態になるもので、長さ、幅とも20㎜以下の小形のものを選んだ。1～6は基部に円弧状の抉りが入るものである。3は側縁が円弧状に加工されるもので、6は一旦破損したものの再加工品である。7・8は基部に抉りが入らないものである。9～16は平面形が二等辺三角形になるもので、長さ若しくは幅が20㎜を越えるやや大形のものを選んだ。9～11は基部に抉りが入らないものである。10・11は先端が破損しているが、10は再加工が観察されるのに対し、11は再加工が施されない。12は基部に深い抉りが入り、明瞭な脚を形成するものであるが、一方の脚が破損している。

13は長さが50㎜近い大型品で、基部に抉りが入らない。精緻な加工が目を引く優品である。14は基部に大きく抉りが入り、脚を形成するものであるが、一方の脚が破損しており、そこに再加工が施されているのが観察される。15は基部に円弧状の抉りが入るもので、右側縁に再加工が観察される。17～21は石鏃未成品あるいは素材と見られるものである。17・18は両側縁に若干の二次加工が見られる。18は基部が折断してしまったため加工が断念されたものか。19はほとんど二次加工が見られないものである。20は腹面側の加工が中途で終わっているもので、21は横長剥片の先端部に加工痕が見られるものである。

22はスクレイパーである。元は円形に近い形状を呈していたと見られるが、中途より破損している。折れ面にも加工痕が観察される。

23～27は器種が特定できないので、R剥片として一括した。23・24・26・27は縦長剥片の側縁部に二次加工が施されるもので、25は横長剥片の末端部に二次加工が見られるものである。27は石鏃未成品とも考えられるが、この段階から制作していくと完成品は小さくなりすぎると思われるので、単なるR剥片とした。

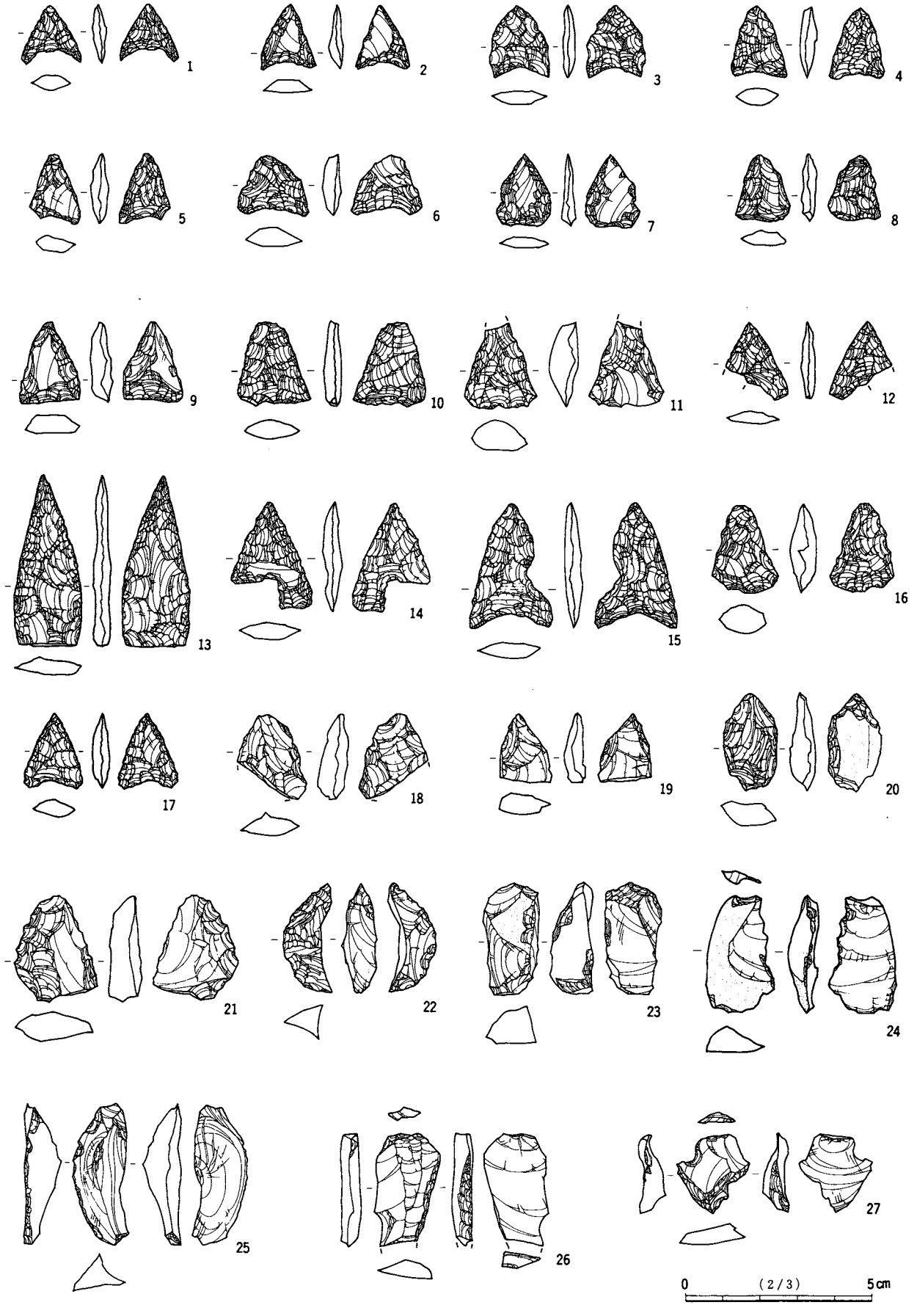
第36図の28は玉髄の剥片で、火打ち石として利用されたとみられる。

29～32は楔形石器である。29は黒曜石の横長剥片の両側縁から両極剥離が行われている。30は一旦両極剥離が行われた楔形石器の打面を90度転位して、改めて両極剥離が行われている。31は敲石として利用された礫を素材として、改めて両極剥離を行っている。

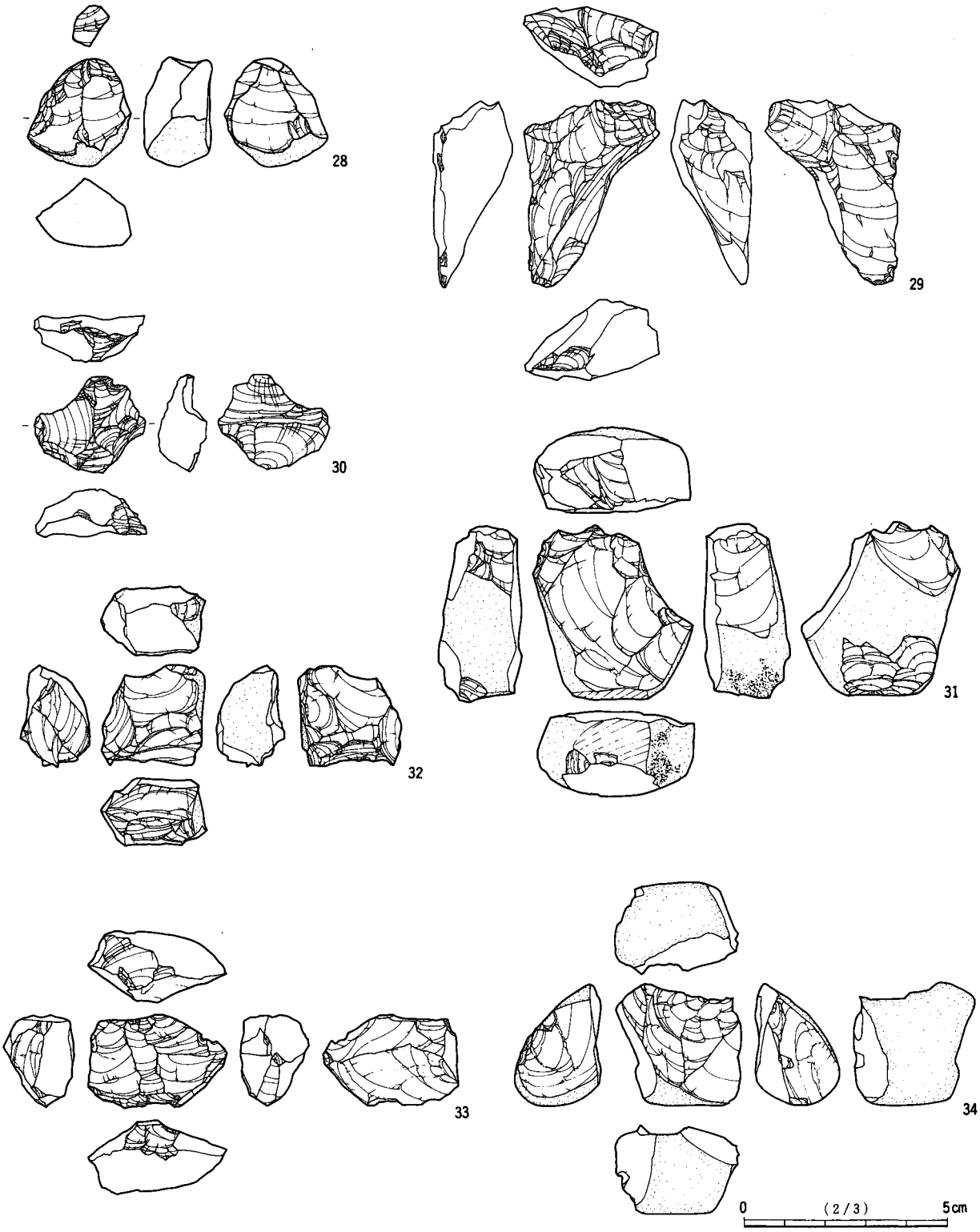
33・34は石核である。33は裏面側で縦長剥片を剥離した後、打面を90度転位して正面側で縦長剥片を剥離している。34は円礫を素材として使用し、自然面を打面として打点を移動しながら剥片剥離を行っている。

第37図の35は磨製石斧である。断面がやや丸みを帯びた定角式石斧である。

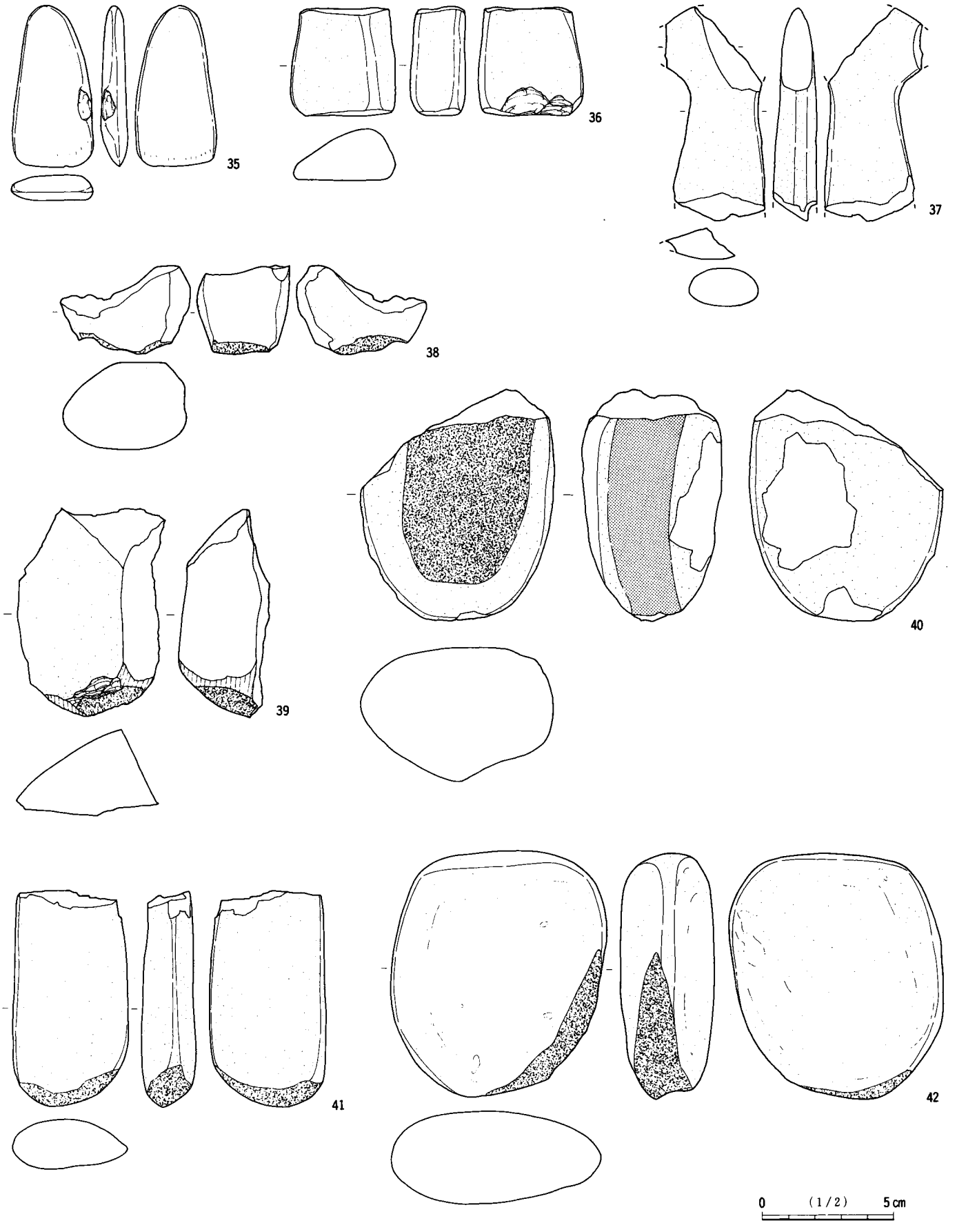
36は断面三角形になるように研磨されているもので、石棒ないし石剣の可能性があるが、両端が破損しているためはっきりした器種名は不明である。37もはっきりとした器種は不明であるが、断面が扁平な楕円形を呈することや、平面形態などから石剣の一種とみられる。しかし、あまり類例を見ない形態をして



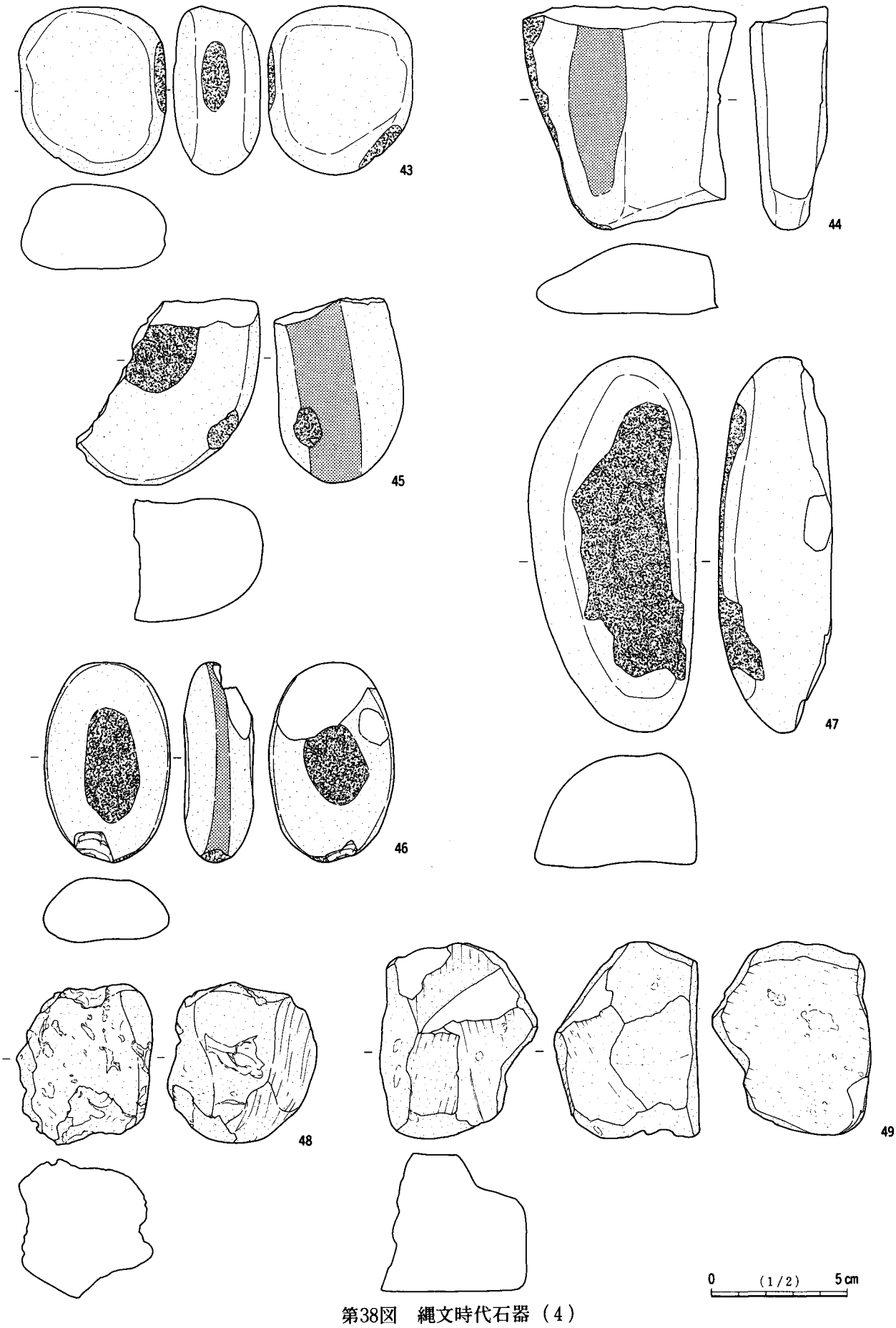
第35図　縄文時代石器（1）



第36図　縄文時代石器（2）



第37図　縄文時代石器（3）



第38図　縄文時代石器（4）

おり、特に先端部は復元するのが困難である。

38・39・41～43は敲石である。38は先端部に敲打痕が見られるが、ほとんど破損しているため全体形状は不明である。39は表面が研磨されており、石皿若しくは磨石として利用された可能性があるが、先端部に敲打痕があるため、最終的に敲石として利用されたとみなした。41は断面楕円形になるように成形されており、石棒ないし石剣の製作を意図していた可能性があるが、先端部に著しい敲打痕が見られるため、敲石とした。42は扁平な礫を使用しているもので、著しい敲打痕が見られる。

40・45・46は磨石である。いずれも扁平な礫で、平坦面中央部には敲打された痕跡（押圧痕？）が見られる。46は熱を受けている。

44は砥石とみられる。左側縁部には著しい敲打痕が見られる。表面全面に研磨痕が観察され、トーンを掛けた部分は特に著しい。

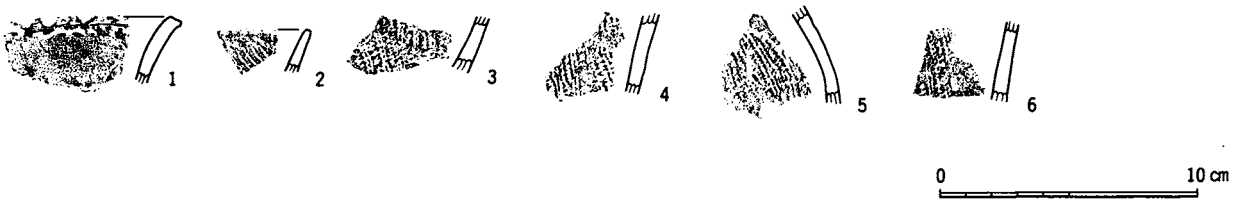
47は台石とみられる。断面かまぼこ型で裏面は節理割れによりほぼ平坦になっているため、この平坦面を下側にして使用されたとみられる。表面は敲打された痕跡が著しい。

48・49は軽石である。研磨痕が観察されるため砥石とみなした。しかし、はっきりとした形をなさないが整形の痕跡らしき傷も見られ、浮子の未成品の可能性もある。

3　弥生時代

調査区内から検出された遺構はなく、出土した遺物は微量の土器片に限られている。遺物の出土状況は、調査区内から検出された古墳時代後期以降の竪穴住居跡覆土からの出土に限られている。

土器片はわずか6点である(第36図1～6、図版37)。図示したものがすべてである。時期は後期後半と思われる。1は甕の口縁部である。口唇部に連続したキザミが施されている。2は口唇部にも縄文が回転施文されている。3～6は胴部破片である。いずれも附加条縄文と思われる。みな胎土は良好で、内面は丁寧なナデが行われている。



第39図　遺構外出土弥生土器

第14表　一本松遺跡縄文時代石器属性表

挿図番号	番号	遺物番号	器種	石材	長さ (mm) ×	幅 (mm) ×	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第35図	1	SI 6 −19Y	石鏃	黒曜石	16.0 ×	16.0 ×	4.0	5.1	
〃	2	SI 2 −371	石鏃	黒曜石	17.5 ×	15.0 ×	4.0	0.7	
〃	3	SI 4 −59Y	石鏃	黒曜石	19.0 ×	16.0 ×	4.0	0.9	
〃	4	SI 7 −42K	石鏃	黒曜石	19.0 ×	15.0 ×	5.0	1.0	
〃	5	SI12−12I	石鏃	黒曜石	19.0 ×	13.5 ×	5.0	0.7	
〃	6	SI12−14H	石鏃	黒曜石	16.0 ×	19.0 ×	5.0	1.1	
〃	7	SI13−98E	石鏃	黒曜石	19.0 ×	15.0 ×	4.0	0.9	
〃	8	SI 2 −87M	石鏃	黒曜石	17.5 ×	15.0 ×	4.0	0.8	
〃	9	SI 5 −189C	石鏃	黒曜石	23.0 ×	15.5 ×	6.5	2.1	
〃	10	SI15−1S	石鏃	黒曜石	22.5 ×	20.0 ×	5.0	1.7	
〃	11	SI59−42	石鏃	黒曜石	23.0 ×	20.0 ×	8.0	2.6	
〃	12	SI 1 −87	石鏃	黒曜石	20.5 ×	17.0 ×	4.5	0.8	
〃	13	SI16−1E	石鏃	黒曜石	46.0 ×	18.0 ×	5.0	3.9	
〃	14	SI43− 3	石鏃	黒曜石	29.0 ×	21.0 ×	5.5	1.9	
〃	15	SI 6 −19R	石鏃	黒曜石	33.0 ×	12.5 ×	5.0	2.3	
〃	16	SI 5 −189D	石鏃	チャート	23.5 ×	17.5 ×	7.5	2.2	
〃	17	SI 8 −7G	石鏃未成品	安山岩	18.5 ×	14.0 ×	6.0	1.4	
〃	18	SI 2 −110C	石鏃未成品	黒曜石	23.0 ×	18.0 ×	8.0	2.3	
〃	19	SI 3 −56A	石鏃未成品	黒曜石	20.0 ×	15.0 ×	6.0	1.2	
〃	20	SI 5 −191U	石鏃未成品	安山岩	26.0 ×	14.5 ×	7.0	1.8	
〃	21	SI13−97C	石鏃未成品	黒曜石	28.0 ×	23.0 ×	8.5	5.4	
〃	22	SI31−2A	スクレイパー	黒曜石	29.5 ×	13.0 ×	9.5	2.0	
〃	23	SI 4 −59P	R剥片	黒曜石	30.0 ×	15.0 ×	12.0	5.4	
〃	24	SI 2 −87	R剥片	珪質頁岩	30.3 ×	18.0 ×	8.8	3.6	
〃	25	SI 5 −189B	R剥片	黒曜石	37.5 ×	15.0 ×	11.0	2.8	
〃	26	SI11−291	R剥片	珪質頁岩	30.0 ×	18.0 ×	6.0	3.1	
〃	27	SI 5 −189U	R剥片	黒曜石	21.0 ×	20.0 ×	7.0	1.4	
第36図	28	SI38−20	剥片	玉髄	27.0 ×	25.0 ×	17.0	12.8	火打ち石
〃	29	SI 7 −44B	楔形石器	黒曜石	46.0 ×	33.0 ×	20.0	17.7	
〃	30	SI 5 −189X	楔形石器	黒曜石	27.0 ×	24.0 ×	12.0	4.5	
〃	31	SI39−12C	楔形石器	砂岩	43.0 ×	39.0 ×	21.0	43.3	敲石としても使用
〃	32	SI45−31A	石核	珪質頁岩	17.0 ×	25.0 ×	25.0	12.0	
〃	33	SI37−1C	石核	チャート	22.5 ×	34.0 ×	17.5	13.7	
〃	34	SI 5 −191	石核	珪質頁岩	30.0 ×	31.2 ×	21.0	21.0	
第37図	35	SI 6 −10	磨製石斧	硬砂岩	62.5 ×	31.0 ×	10.0	28.1	
〃	36	SI 5 −92	石棒？	雲母片岩	42.0 ×	40.0 ×	21.0	54.4	
〃	37	SI35−12	石剣？	凝灰岩	82.0 ×	37.5 ×	17.0	56.5	
〃	38	SI 5 −189B	敲石	石英ハン岩	34.0 ×	49.0 ×	35.0	58.7	
〃	39	SI11−29A	敲石	硬砂岩	78.5 ×	57.0 ×	35.0	146.6	石皿としても使用？
〃	40	SI42−5A	磨石	石英ハン岩	87.4 ×	73.5 ×	53.0	443.5	
〃	41	SI22−11	敲石	雲母片岩	82.0 ×	44.0 ×	21.0	113.0	石剣未成品？
〃	42	SI20−10	敲石	流紋岩	94.0 ×	82.0 ×	36.0	435.4	
第38図	43	SI45−28	敲石	チャート	63.0 ×	53.2 ×	32.0	173.6	
〃	44	SI 2 −44	砥石	硬砂岩	83.5 ×	78.0 ×	29.0	234.9	
〃	45	SI 2 −4	磨石	流紋岩	68.0 ×	67.0 ×	48.0	258.9	
〃	46	SI12−12	磨石	石英ハン岩	73.5 ×	46.0 ×	26.0	117.2	敲石としても使用
〃	47	SI13−17B	台石	凝灰岩	137.5 ×	63.0 ×	42.0	505.4	
〃	48	SI19−79	砥石	軽石	59.0 ×	49.0 ×	54.0	47.5	浮子未成品？
〃	49	SI 5 −60	砥石	軽石	72.0 ×	58.0 ×	54.0	51.0	浮子未成品？

Y=42,600
X=-50,900
山武郡市文化財センター調査区域
0
25m
50m
55m
60m
65m
70m
75m
80m
SI 1
SI 2
SI 3
SI 4
SI 5
SI 6
SI 7
SI 8
SI 9
SI 10
SI 11
SI 13
SI 14
SI 15
SI 16
SI 17
SI 18
SI 19
SI 20
SI 21
SI 22
SI 23
SI 24
SI 25
SI 26
SI 27
SI 28
SI 29
SI 30
SI 31
SI 32
SI 33
SI 34
SI 35
SI 36
SI 37
SI 38
SI 39
SI 40
SI 41
SI 42
SI 43
SI 45
SI 46
SI 47
SI 48
SB 1
SB 2
SB 3
SB 4
SB 5・6
SB 7
SB 8
SB 9
SB 10
SB 11
SB 12
SB 13
SB 14
SB 15
SB 16
SB 17
SB 18
SB 19
SX 1
SX 5
SX 6
SX 7
C5-00
R3-00
H2-00
C2-00
E3-00
E4-00
E5-00
F4-00
G5-00
H6-00
H7-00

第40図　遺構配置図

4　古墳時代から奈良・平安時代

（1）古墳時代

今回の調査で古墳時代と特定できる遺構は竪穴住居16軒である。その分布状況を見ると調査範囲内に散在しており、特に狭い範囲に集中することはない。山武郡市文化財センターで調査した大網山田台No．6遺跡全体の遺構配置から見ると、古墳時代の竪穴住居は遺跡南端に集中する傾向にあるということであり、今回検出した住居跡群はこれらと一体のものと考えられる。当時期の竪穴住居遺構は奈良時代以降の竪穴住居に比べて大型のものが多い。また、新しい時期の竪穴住居や掘立柱建物跡とかなりの範囲で切りあっているため、住居全体の規模を正確に把握できていない場合もある。なお、必要に応じて柱穴にピット番号を付して記載した。

竪穴住居跡

SI 2（第41・42図、図版8・9・39・65）

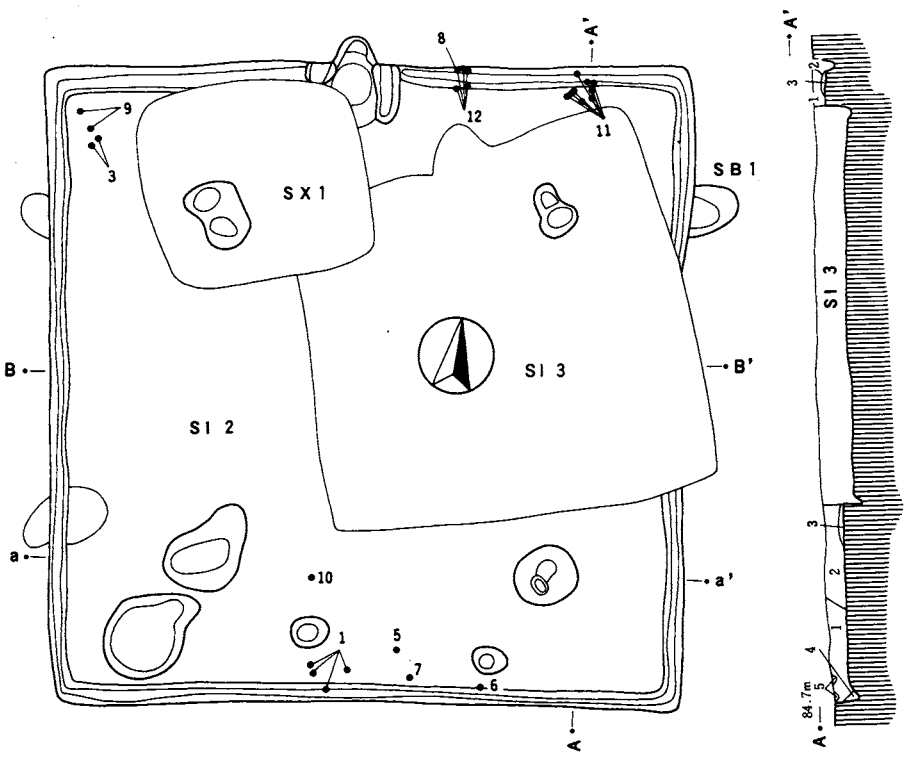
SI 3、SX 1とかなりの範囲で重複し、攪乱を受けるが、主柱穴の掘込みが深いため、柱穴の底面はかろうじて残っていた。主軸長6.8m、横軸長6.7m、主軸方位N－10°－Wである。床面積は45.56㎡、壁高10㎝～28㎝を測り、非常に浅い。覆土にはローム粒、炭化物粒が含まれる。主柱穴は4本で、それぞれの柱穴で底面を2つずつ検出しているので、柱の立て替えがあったようである。また、最終の柱は抜き取られているようである。柱穴の深さは10㎝～28㎝を測る。そのほか、南側壁面近くに小ピット2つと浅い貯蔵穴状ピット1つを検出しているが、住居に伴うかどうかは不明である。かまどは北西壁中央にあるが、SX 1に左袖を切られる。右袖は黄褐色のロームをつき固めて基底部とし黄白色の砂で袖を構築している。かまどからは土製支脚と土師器甕（8）が出土した。

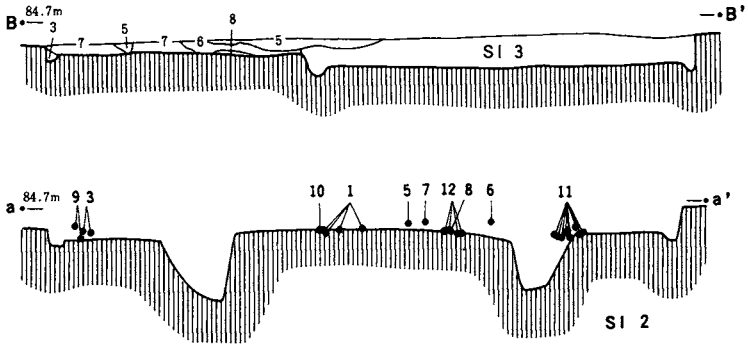
出土土器は破片を含め総点数893点で当遺跡にあっては比較的多いが、その中で須恵器はわずか11点にすぎない。1～5が土師器杯で、6・7が土師器高杯、8～11が土師器甕、12がほぼ完形の土師器甑である。1・2は稜部より上部が内傾するタイプで、3・4・5は直線的に外側に延びるタイプである。また、7は稜部上部が肉厚となる。1・5・6・7は内面を黒色処理後ヘラミガキを施す。使用により突端部がかなり磨滅している。2は精選された胎土の杯である。杯製品はほとんどのものに磨滅痕や剥離痕が見られかなり使用されていたことがうかがわれる。4の内面にはヘラミガキ痕は確認できない。8は肩部のやや張る甕、9・10は胴部中央が張る甕、11は球形に近い甕で、外面は縦方向のヘラ削り、内面はナデ調整を施す。12は口頸部に段を有する甑で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデを施す。SI 19出土の土師器甑の内面がいずれもヘラミガキ調整を施すのと対照的である。13は鉄製の鎌で、先端部は欠損している。

SI 3（第43図、図版8・40・65）

北西端をSX 1によって切られる。主軸長3.7m、横軸長4.1m、主軸方位N－21°－Wである。床面積は15.17㎡、壁高は14㎝～38㎝を測る。覆土中にはローム粒、焼土粒、炭化物を含む。主柱穴は4本で、深さは14㎝～38㎝を測る。かまどは北西壁中央にあるが、袖は壊されたためかほとんど残っていない。火床部は比較的掘込みが深く赤色に被熱している。

出土土器は総点数391点で、そのうち須恵器片はわずかに5点のみである。1は土師器の無頸壺、2・3は土師器甕と考えられる。1はボール状の形態で、外面は横方向のヘラ削り、内面は丁寧なナデ調整を施す。2は内面横方向のヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削り調整を施す。3は内面は丁寧なナデ調整で、下





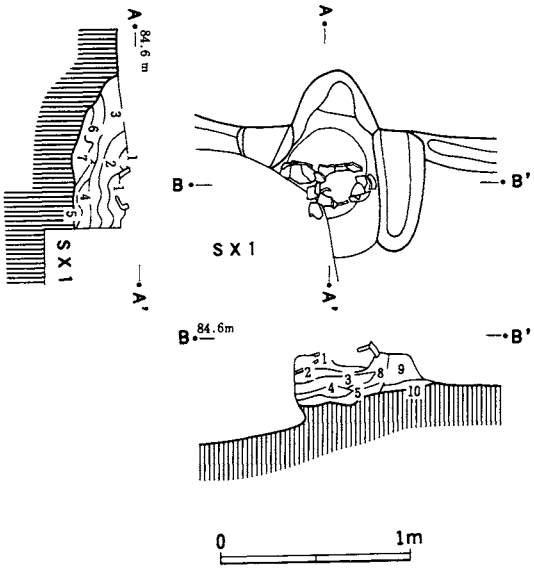
SI2　土層説明

1層　暗褐色土　ローム粒若干含む
2層　暗褐色土　ローム多く含む
3層　黄褐色土　ソフトローム分
4層　黄褐色土　ソフトローム、ハードローム
5層　暗褐色土　ローム粒、焼土若干含む
6層　褐色土　ローム粒
7層　　ロームブロック含む
8層　暗褐色土

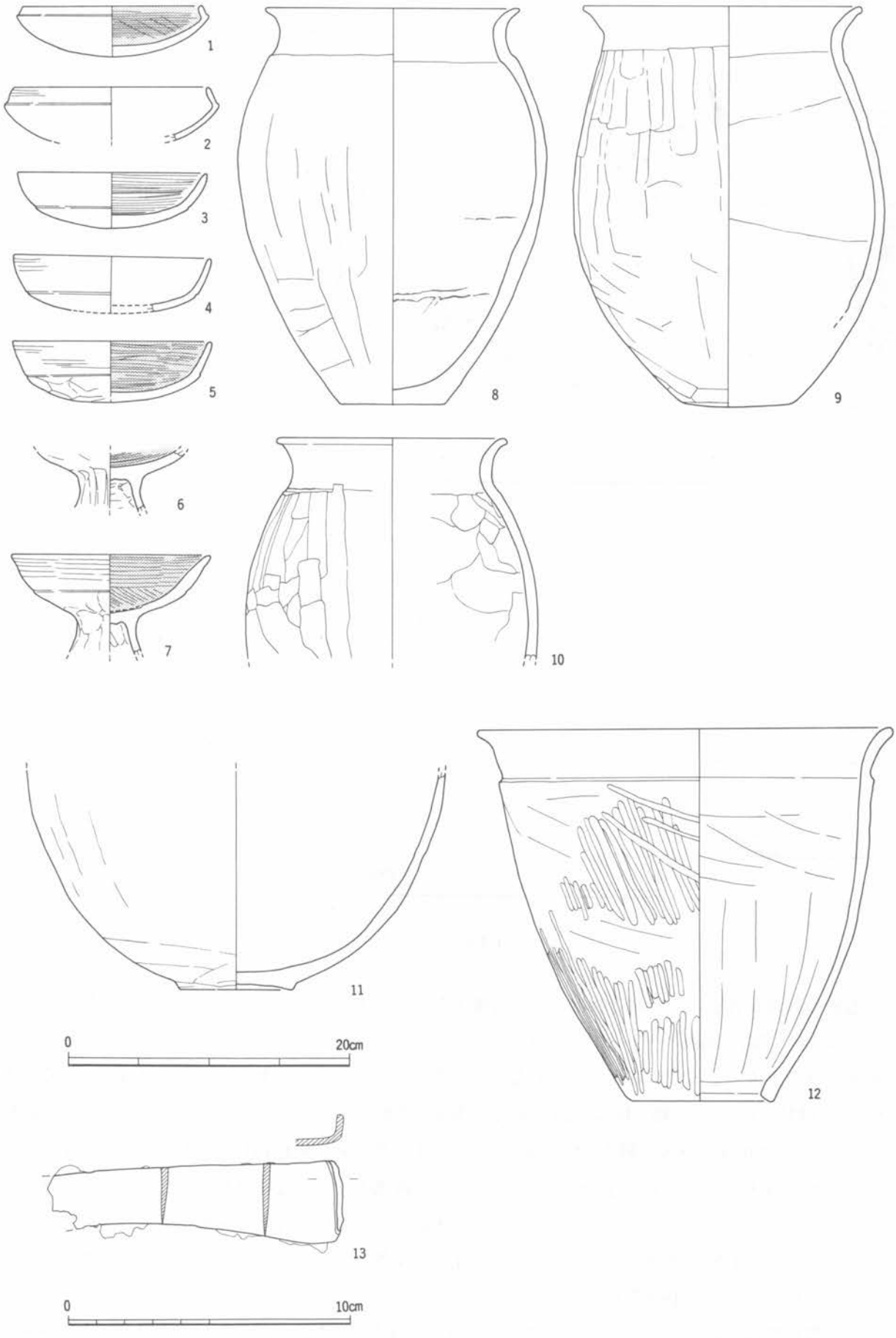
0　4m

SI2　かまど土層説明

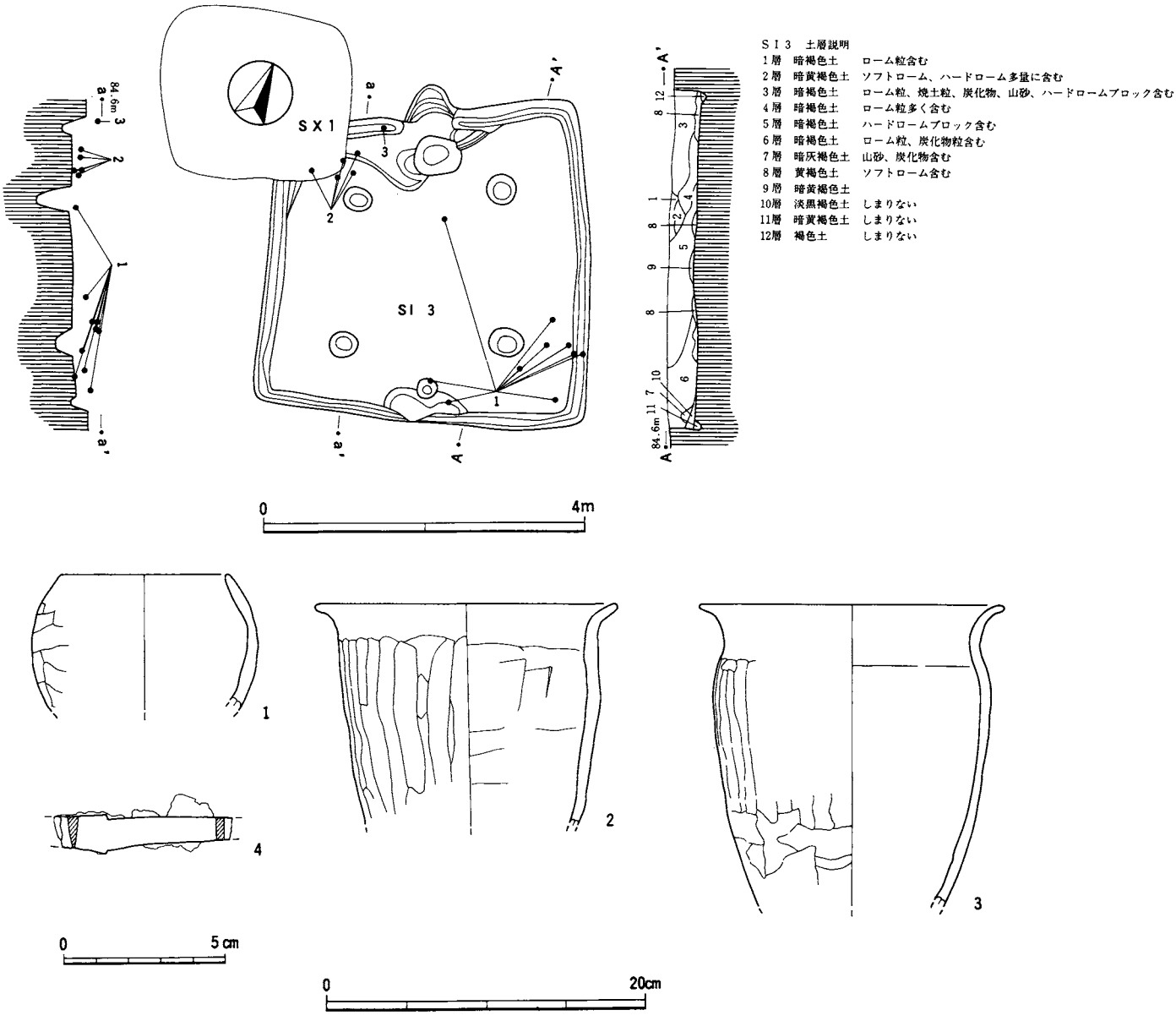
1層　暗褐色土　砂質
2層　暗灰褐色土　焼土、山砂含む
3層　褐色土　焼土、ロームブロック含む
4層　赤褐色焼土
5層　褐色土　山砂、粘土含む
6層　暗灰褐色土　山砂含む
7層　褐色土　ロームブロック、粘土粒含む
8層　　粘土（ソデの崩落）
9層　黄白色粒　カマド、ソデ
10層　黄褐色土　ソデの基礎



第41図　SI 2 (1)



第42図　ＳＩ２（２）



第43図　SI 3

半は器面の剥離が著しい。実測遺物はいずれも覆土中からの出土である。4は鉄製刀子の破片である。

SI 5（第44・45図、図版8・9・40・41・65）

SI 8・9や土坑によって切られて、南東端がはっきりしない。また、南西端が調査区域外になる。主軸長9.4m、横軸長8.4m、主軸方位N－25°－Wで、南側壁が幅広くなりちょうど台形状を呈する。床面積は78.96m²、壁高は10cm～28cmを測る。住居覆土はローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む。主柱穴は4本であるが、内1本が西側壁中央に変則的に位置する。また、北西隅の柱穴では柱材が炭化して底部から深さの半分ほどが残存し、その上に焼土の分布が見られた。床面近くでは広く焼土の分布が見られるので、柱の一部を切断撤去後、家屋を焼却したと判断される。柱穴の深さは43cm～66cmである。かまどは北西壁中央にあるが、左袖については不明である。

出土土器点数は総数2,052点で、当遺跡にあってはかなり多い部類に入る。うち須恵器は50点で全体の2

%を占める。1～6は土師器杯で、1は稜部より上部が直立するタイプで、2・3・4・5は口縁端が外反するタイプである。5は内面黒色処理を施すが、口縁端が磨滅している。7～9は小型の須恵器杯である。7の体部下半は回転ヘラ削り調整を施す。10・11は土師器高杯の脚部と杯部との接合部破片で、外面は縦方向に細かくヘラナデ調整を施し、11には杯部内面黒色処理が見られる。12は須恵器甕の口縁部破片である。胎土は0.5mm～2mmの白色粘土を多く含み緻密で、硬質である。13～19は土師器甕で、14は器面の剥落が著しい。16は内面にヘラナデ調整、頸部接合部には粘土紐接合痕が残存する。外面には使用によるものか、ススが多量に付着している。また、一部器面の剥落が見られる。17はほぼ完形になる小形瓶で口頸部が長いのが特徴である。内面はヘラによる丁寧な横方向の調整を施している。口縁端内側にスス状のものが付着している。20は土師器甕片を再利用した土製円盤、21・22は土製支脚で、下部が欠損している。いずれも砂粒主体でボロボロして壊れやすい。23・24は鉄製品で、23は一部欠損し、形態不明で、用途も不明である。24は刀子の基部片と考えられる。

SI 13（第46・47図、図版9・11・41・42・43）

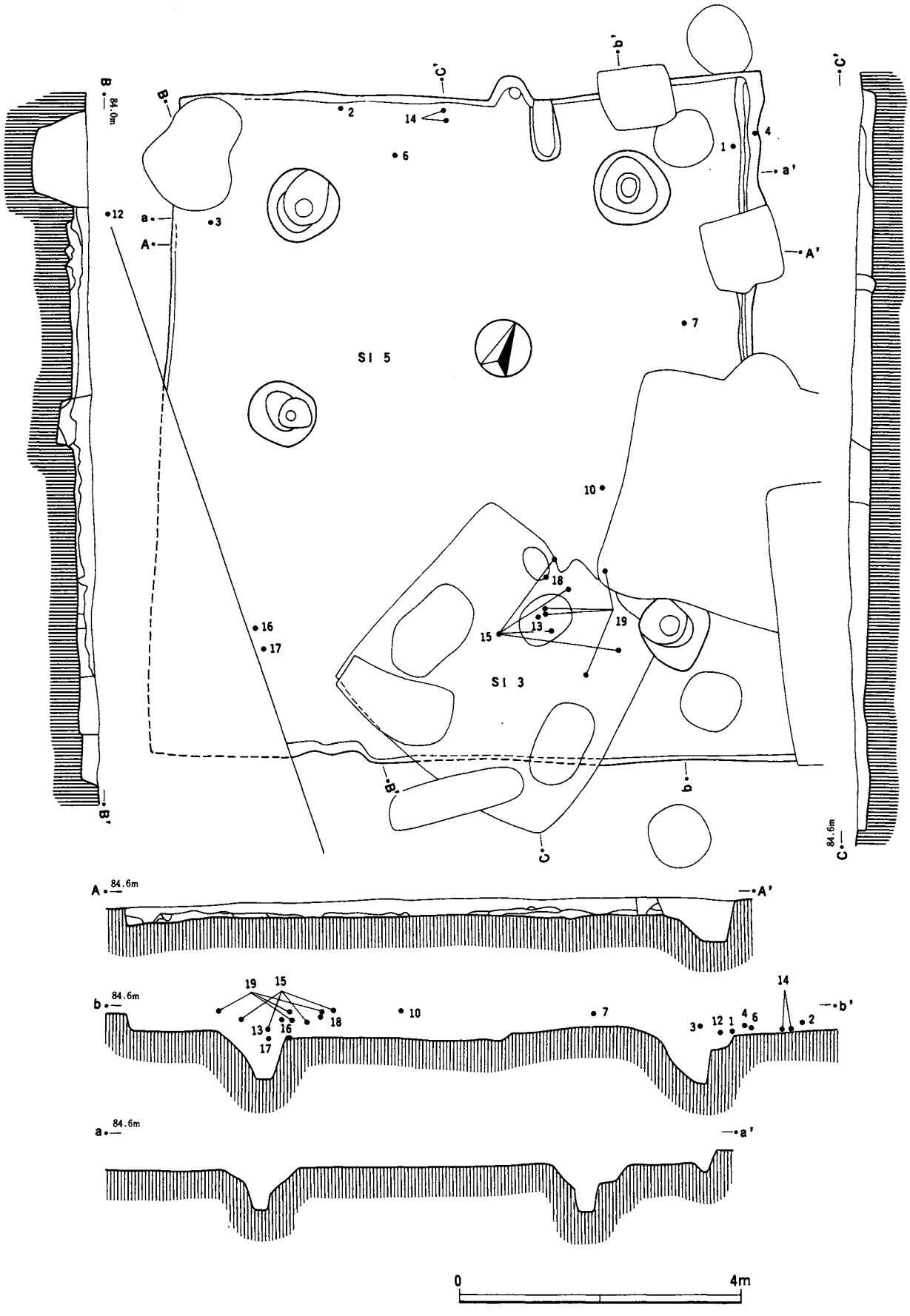
SI 11・14・15と重複し、約2/3が攪乱を受けている。主軸長7.5m、横軸長7.6m、主軸方位N－30°－Wである。床面積は57.00m²、壁高は34cm前後を測る。住居覆土はローム粒と腐植土を含む単一層で構成される。主柱穴は3本のみ確認している。深さは80cm前後を測る。出入口ピットを1つもつ。かまどは北西壁中央にあったと思われるが、SI 14によって攪乱を受け完全に消滅している。

床面や覆土中から原型を復元できる多量の遺物を検出している。出土状況から見て住居廃絶後すぐに土器等の廃棄場となったと思われる。出土土器は総点数1,603点である。1～22は土師器杯である。稜より上部が内傾するもの(1・2・4・8・11)、稜部より直立するもの(3・10)、外反するもの(5・6・9・12・15)、稜部を持たず緩やかに内湾するもの(7・13・14・16・21・22)、底部が平坦で口縁端が緩やかに外反するもの(18・19・20)などに分類できる。6は内外面とも赤彩、17は外面のみ赤彩、13は内面黒色処理、20は内外面とも黒色処理を施す。口縁端が使用により磨滅が著しいものが多い。23～26は土師器高杯である。23は完形で、口縁端及び脚部端を特に2か所で著しく磨滅している。いずれも同位置であるので、2次的に何かに転用されたのであろうか。24は脚部がほぼ直線的に開き、中央部の器厚が薄くなる。27は須恵器蓋、28は須恵器杯身、29は須恵器高台付盤である。30は手づくねのミニチュア土器坩である。31は土師器壺で、内外面とも粗いヘラミガキ調整を施す。32から50は土師器甕の口縁部と底部の破片で、完全に復元できる個体はない。特に46は器表面に数条の細い鋭角の溝が残り、砥石として再利用されている。51は土製紡錘車で、一部欠損している。52の土製支脚は表面が非常になめらかで、下部を欠損している。

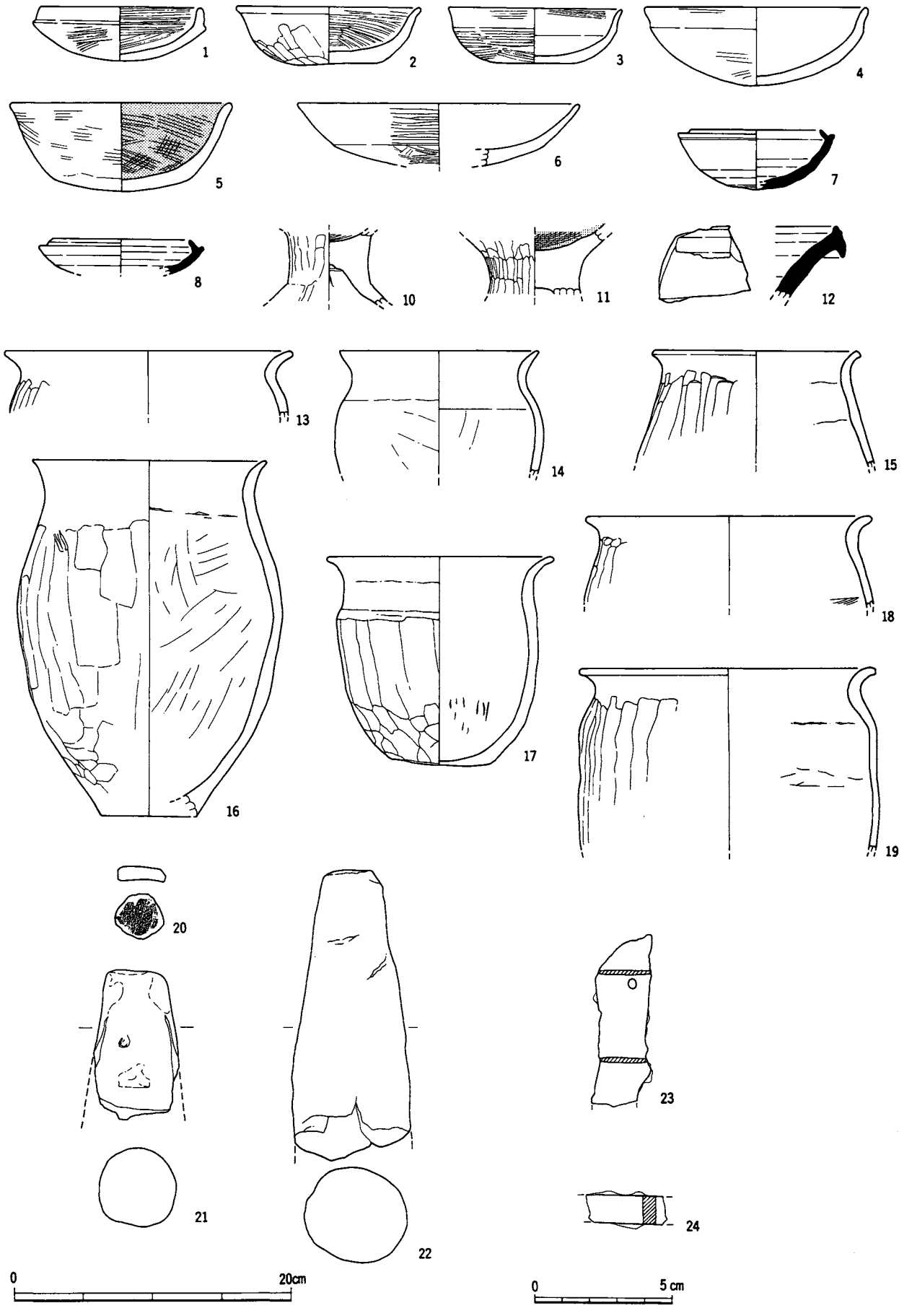
SI 15（第48図、図版9・11・12・13・43）

南東端をSI 14によって切られる。東側側壁を掘立柱建物跡によって切られる。北東コーナーはほとんど壁面が残存しない。全体に住居の残りが悪い。主軸長4.8m、横軸長4.8m、主軸方位N－32°－Wである。床面積は23.04m²、壁高は2cm～10cmを測る。主柱穴は4本である。出入口ピットを1つ有する。かまどは北西壁中央にある。

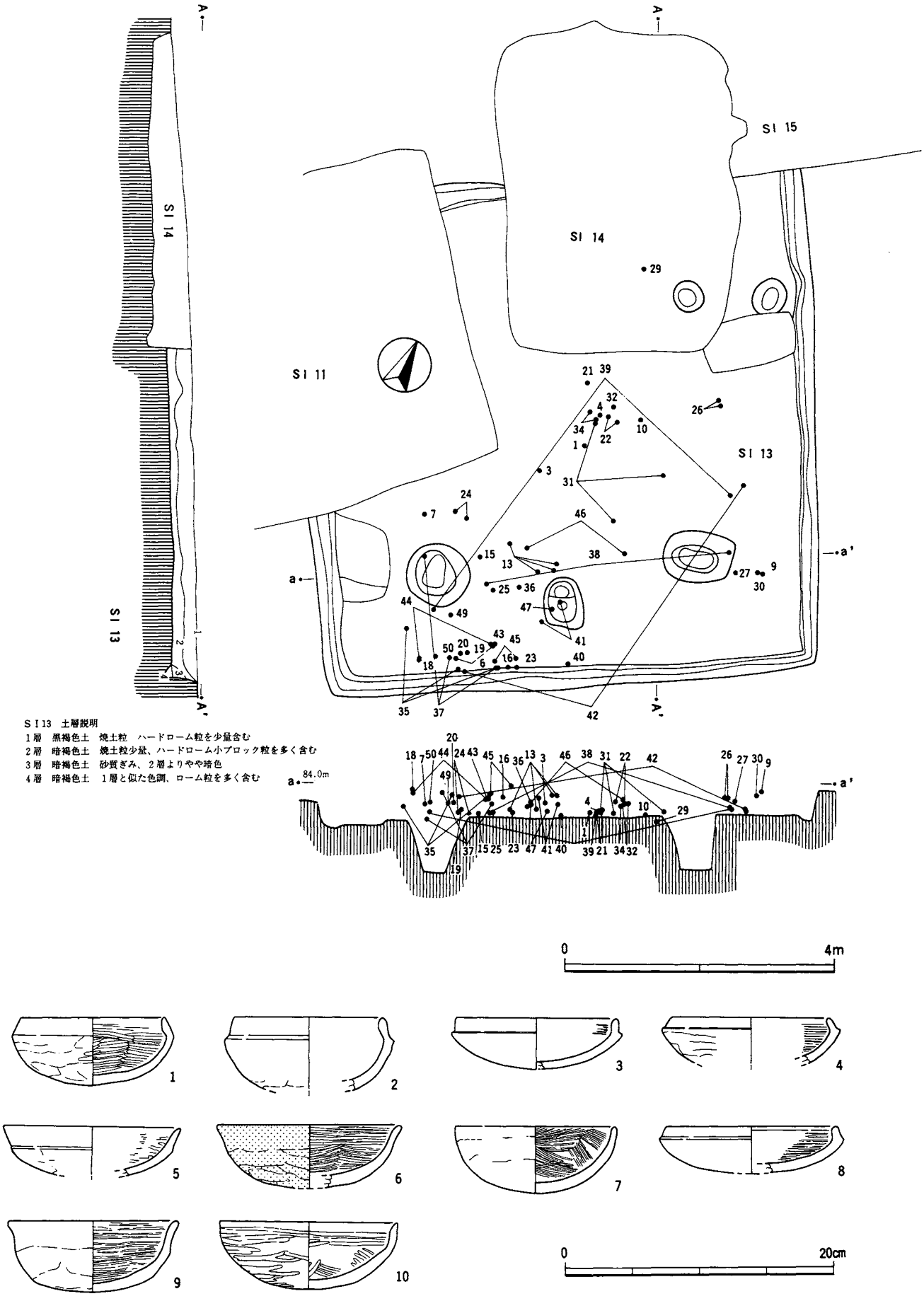
出土土器は総点数473点で、比較的少ない。実測可能な土器は2点のみである。1は土師器杯で器面があまり乾かないうちにヘラミガキしたようで光沢が余りない。内面を赤彩しているようである。2は土師器甕の底部で、木葉痕が底部に、籾殻圧痕が立ち上がり部に残っている。



第44図　SI 5 (1)

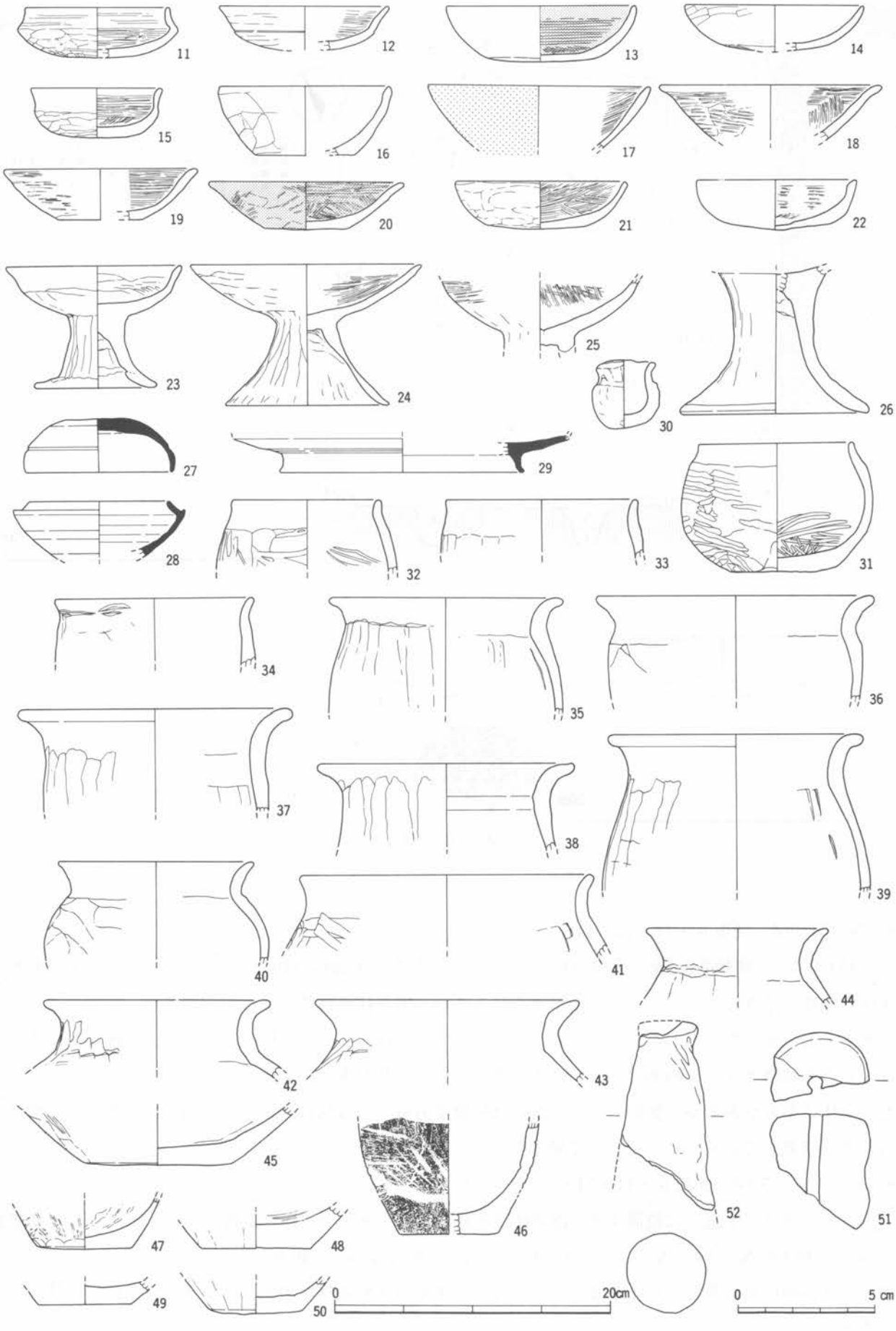


第45図　SI 5 (2)

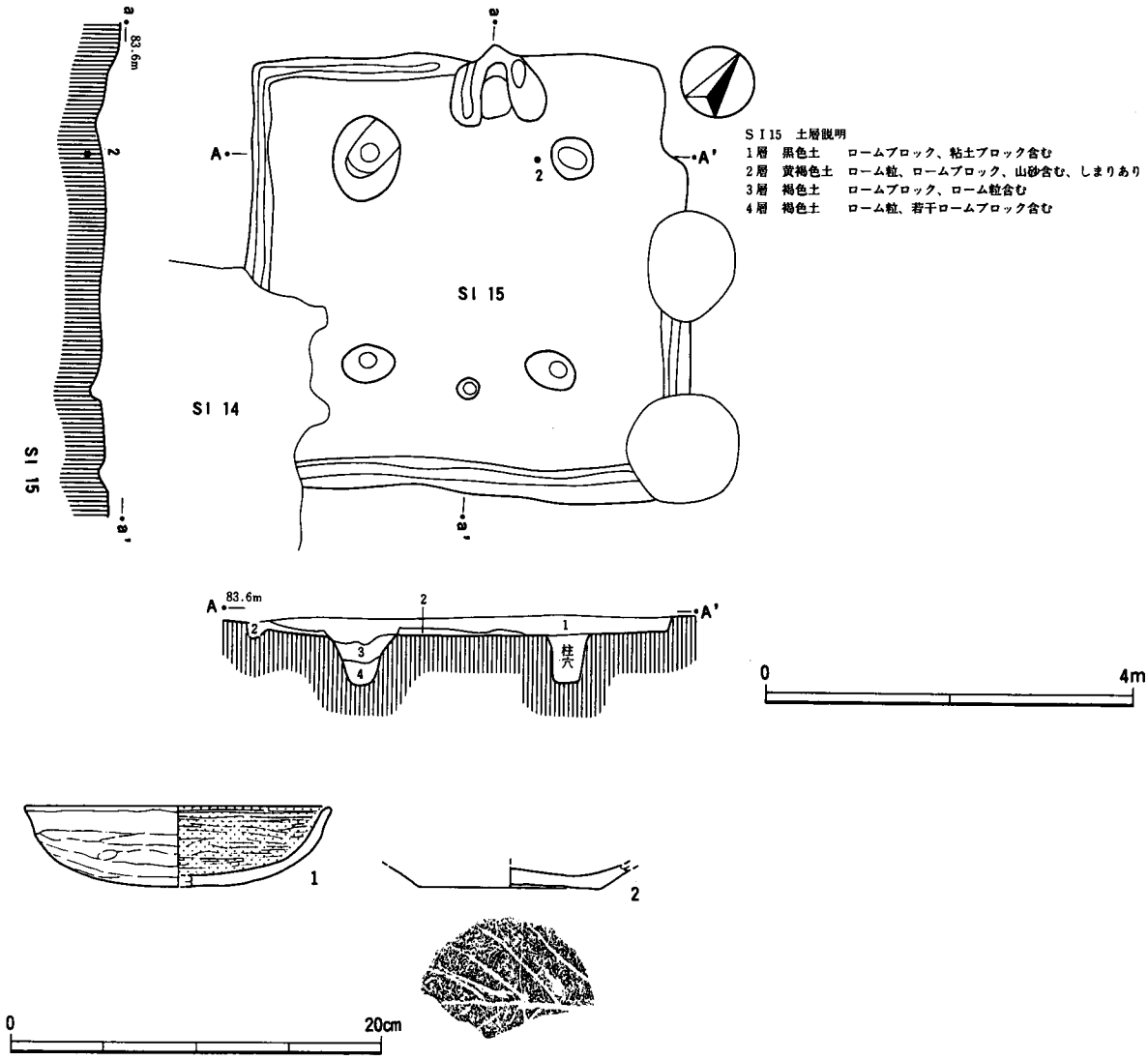


SI13 土層説明
1層 黒褐色土 焼土粒 ハードローム粒を少量含む
2層 暗褐色土 焼土粒少量、ハードローム小ブロック粒を多く含む
3層 暗褐色土 砂質ぎみ、2層よりやや暗色
4層 暗褐色土 1層と似た色調、ローム粒を多く含む

第46図 SI13 (1)


11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
0
20cm
0
5 cm

第47図　SI 13（2）



第48図 SI 15

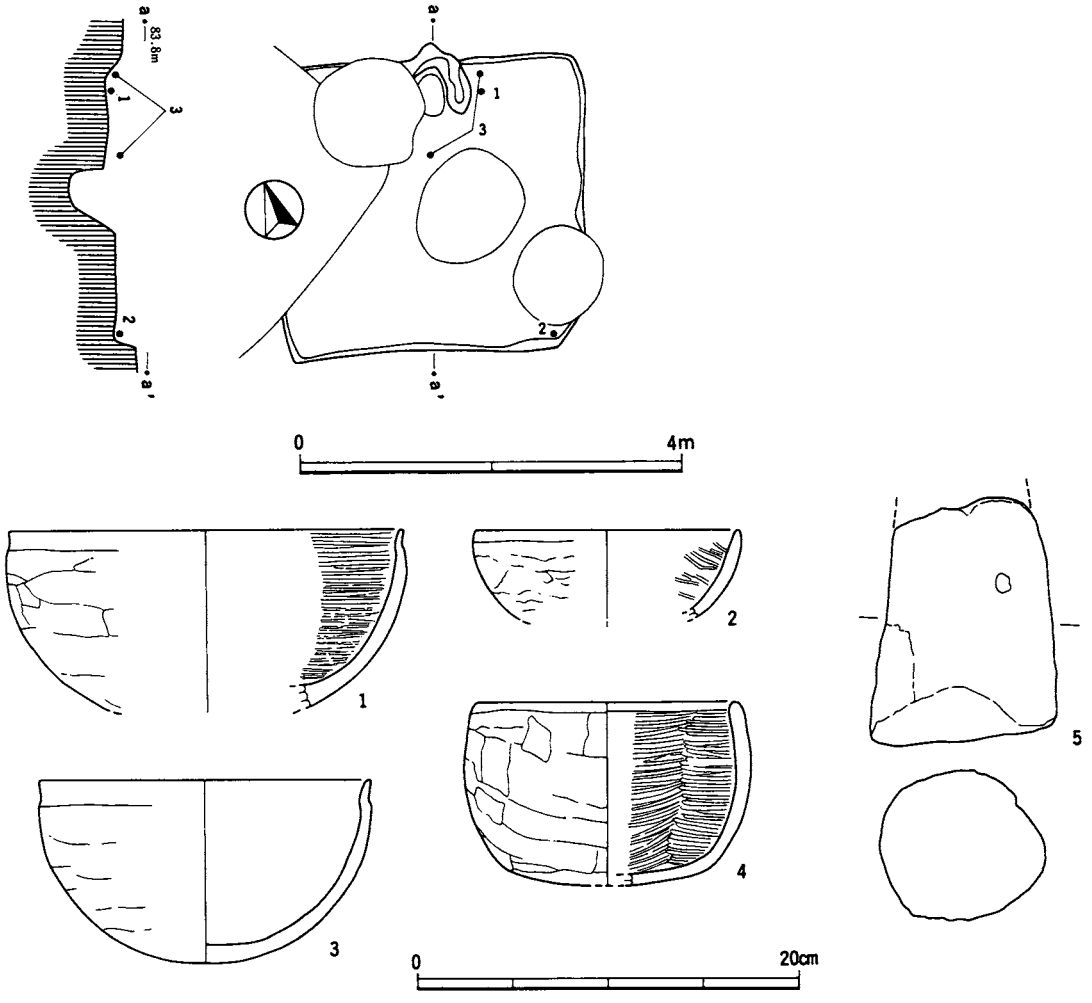
SI 18（第49図、図版9・11・13・43）

主軸長3.1m、横軸長3.3m、主軸方位N－20°－Eである。床面積は10.23m²、壁高は14cm～20cmを測る。主柱穴は確認できない。かまどは北西壁中央にあるが、掘立柱建物跡によって切られる。

出土土器は総点数75点と非常に少ない。1・2・3は半球形の土師器杯で底が深く、口縁端が小さく外反するのを特徴とする。内面はヘラミガキ、外面はヘラ削りを施す。4はやや胴部が膨らむタイプのもので、全体に歪みがあるが、底部の立ち上がりは明瞭である。5は軟質砂岩を削り出した支脚で、表面は面取り後、磨滅しており、ザラザラして崩れやすい。

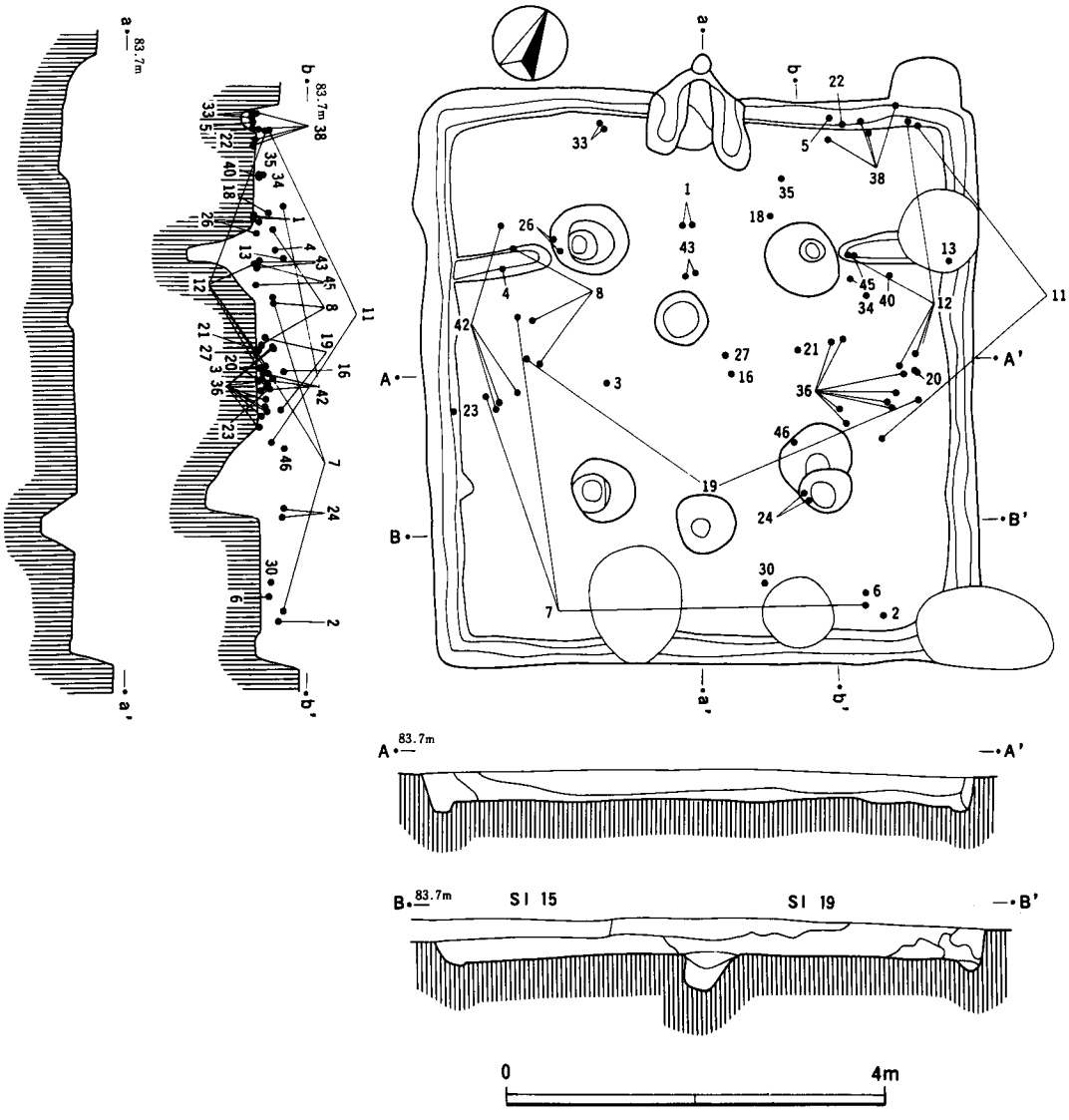
SI 19（第50～53図、図版9・11～14・3～48・67）

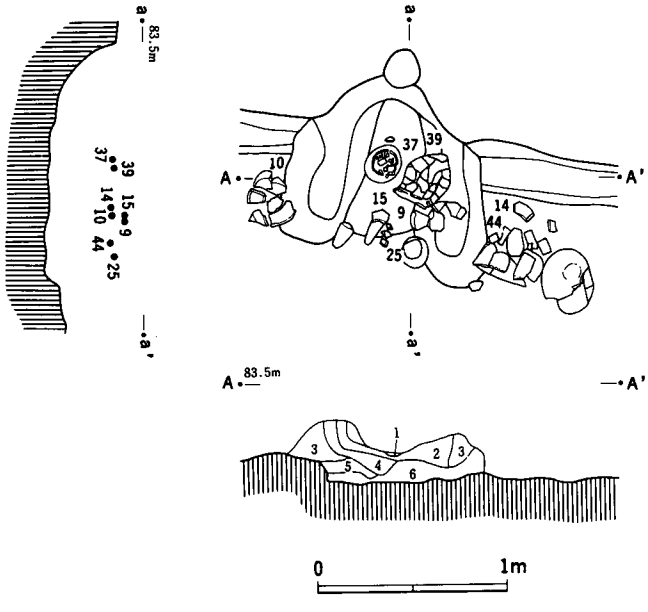
F5－55グリッド近くに位置する。掘立柱建物跡(SB 5・8)、SI 15と重複する。主軸長6.0m、横軸長5.9m、主軸方位N－25°－Wである。床面積は35.4m²、壁高は25cm～40cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央にある。かまど及びその周辺から多量の完形遺物が出土しており、この住居に伴うものと思われる。



第49図　SI 18

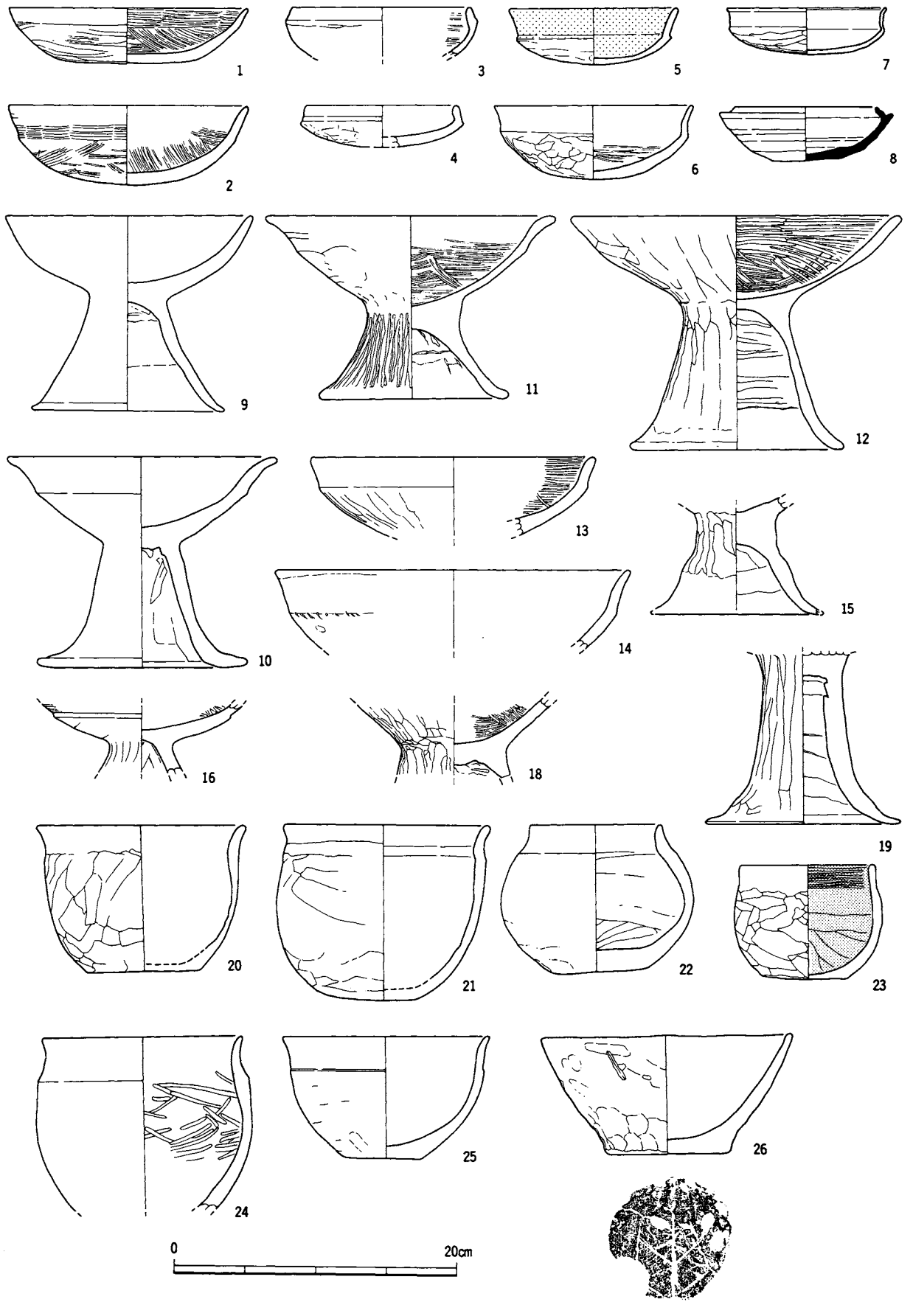
出土土器は総点数1,275点で、須恵器はそのうち21点を数える。土師器のほとんどに器面の磨滅が見られる。1～7は土師器杯である。2の口縁部にはカキ目状の波を打った規則的な条痕が残る。稜部から直線的に外傾するもの(1・2)、稜部から内傾するもの(3・4)、稜部から外湾するもの(5・6・7)に大きく分類できる。1・2は外面は粗いヘラ削り後ヘラミガキ調整を施す。7は完形で器厚が一様に薄く内面全体及び外面上半に赤彩を施す。8は須恵器杯で、内面中央には焼成時の剝離痕が残る。胎土は微砂粒を含み緻密である。9～19は土師器高杯で、9はほぼ完形品であるが、器面の剝落が多く、調整が分からない。10は焼成不良のため器面が磨滅しやはり調整痕が分からない。11・12は杯部内面を丁寧にヘラミガキしている。15は接合部下の脚部がやや膨らむタイプのものである。20・21・23・24は土師器小型甕で、内面調整がヘラナデのみのものと、ヘラミガキするもの(24)がある。21は口縁端及び底部が使用により著しく磨滅している。23は内面を黒色処理しているようだ。小型甕は全体に歪みが大きい。22は完形の土師器短頸壷である。器面が剝落し、ボロボロしている。小型ではあるが重い。25・26・27は土師器鉢で26は手づくねタイプで外面には指頭痕が顕著に残る。内面は丁寧なナデ、底部には木葉痕を残す。27は焼成不良のため著しく器面が磨滅している。28はミニチュアの手づくね土器杯である。29は土製の勾玉である。30・31・32はいずれも土製支脚である。33から42は土師器甕で、33は口縁部が最大径となるもの、34は胴部が



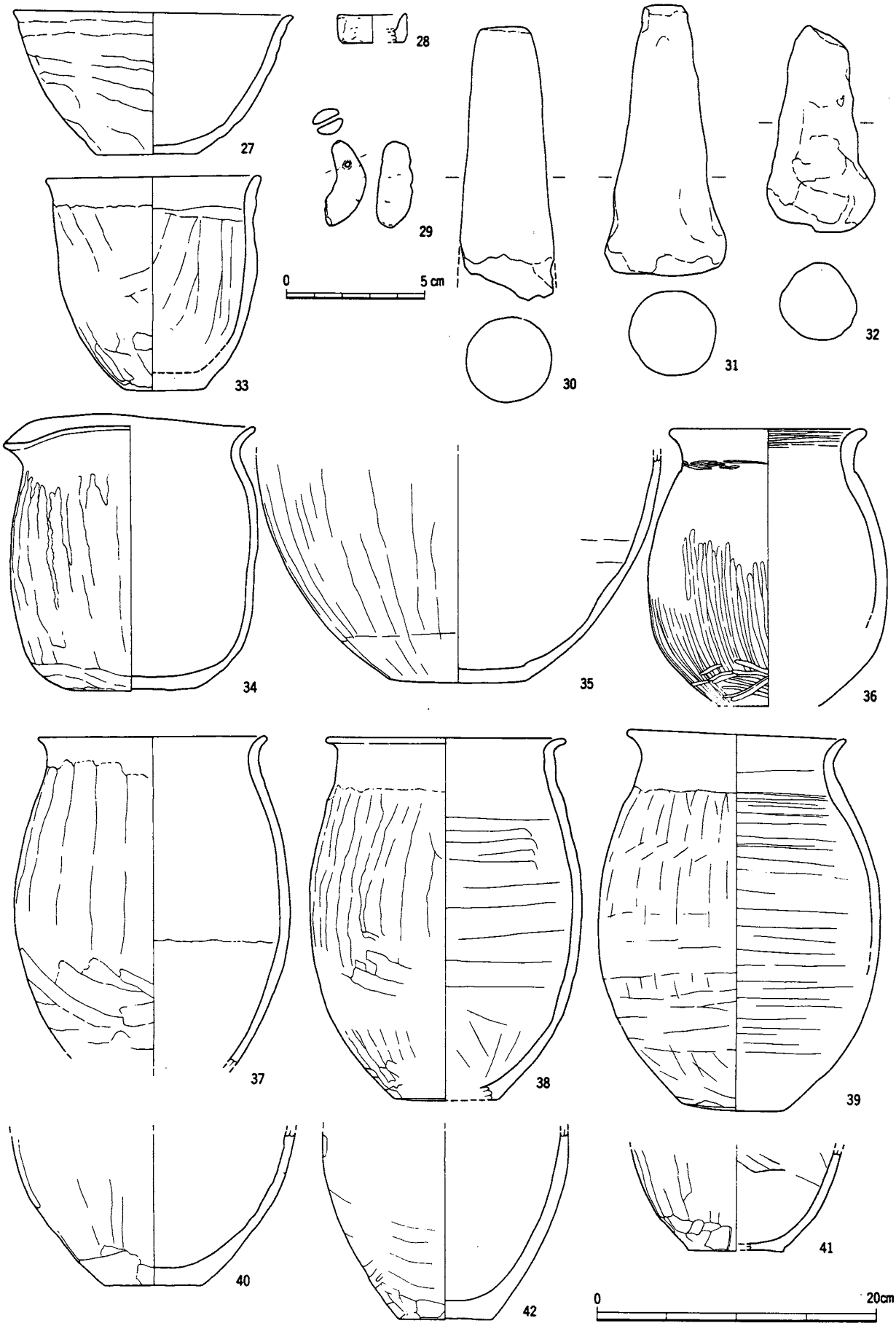


SI19 かまど土層説明
1層 灰
2層 焼土
3層 灰白色砂質土 粘性ややつよい
4層 焼土 山砂
5層 黒灰色土 ハードローム粒をしきつめている
6層 不明

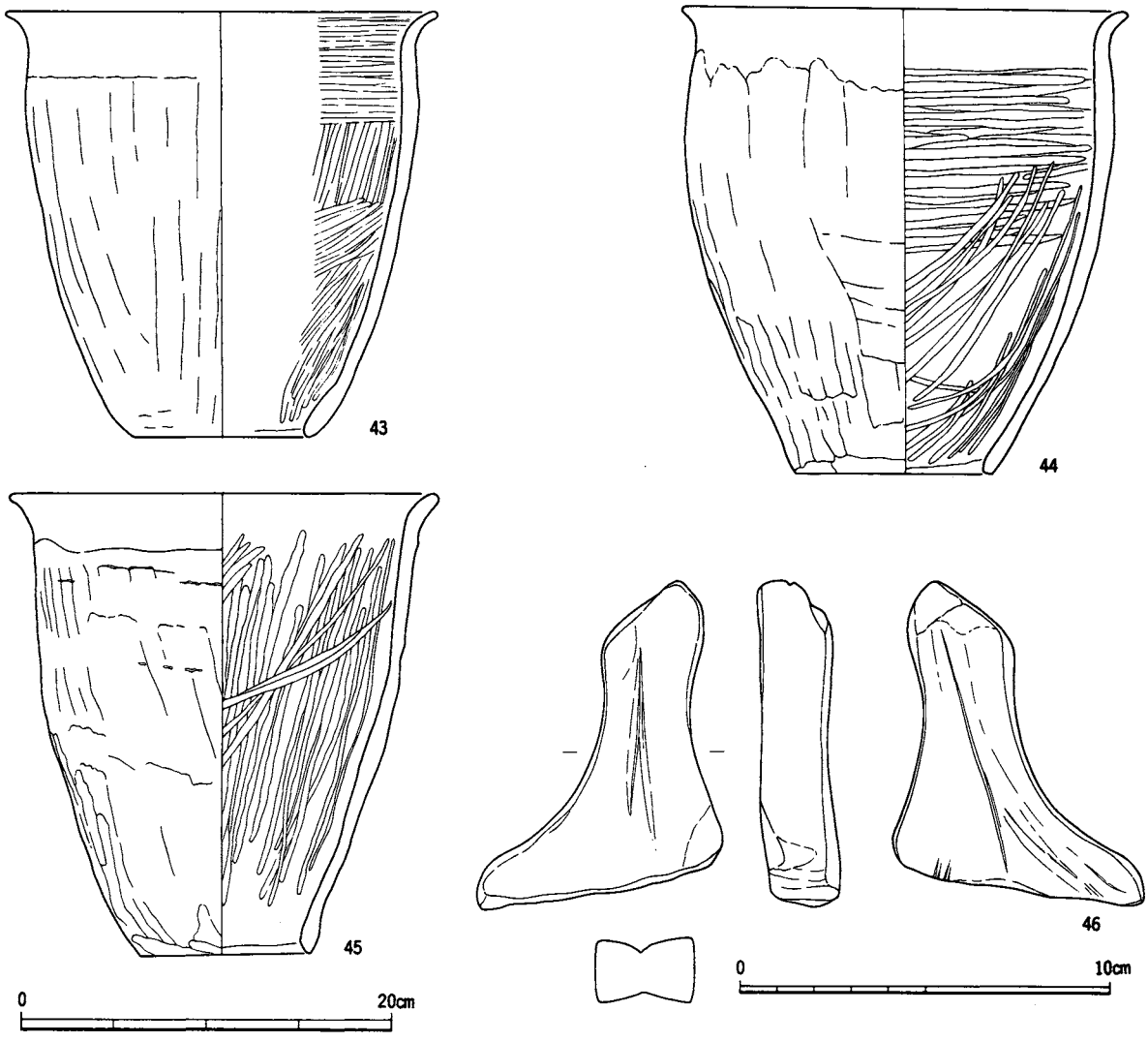
第50図 SI 19(1)



第51図　SI 19(2)



第52図　SI 19(3)



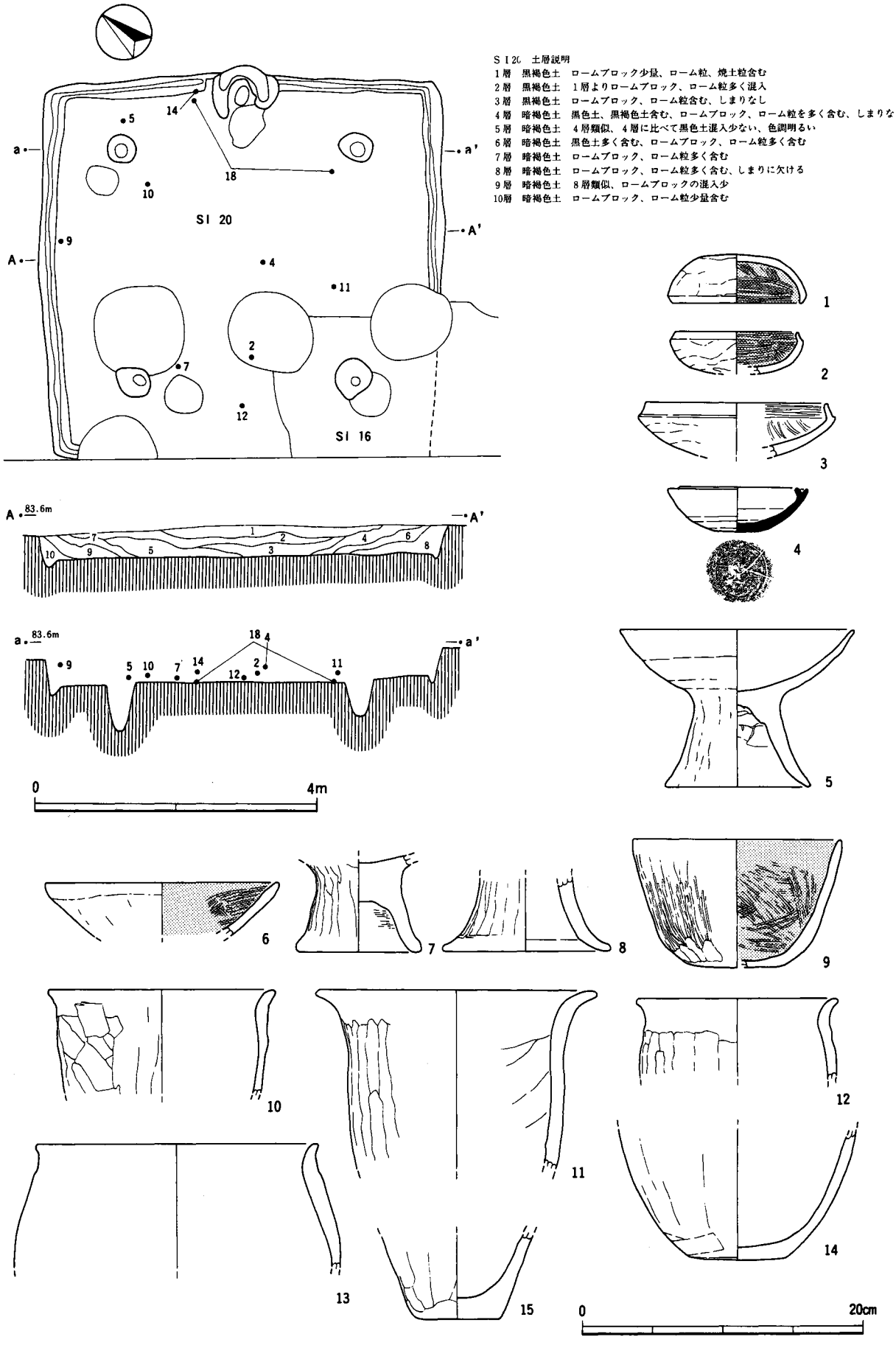
第53図　SI 19(4)

樽型になるものである。他は長胴型である。36は外面を縦方向にヘラミガキするタイプである。33は全体に歪んでいる。焼成不良のため器面が磨滅している。34は口縁部が著しく歪んでいる。外面は器面が乾かないうちにヘラ削りをしている。また、内面はヘラナデである。39は外面のヘラ削りのパターンが細かく変化する。縦、横、斜めの組み合わせとなる。

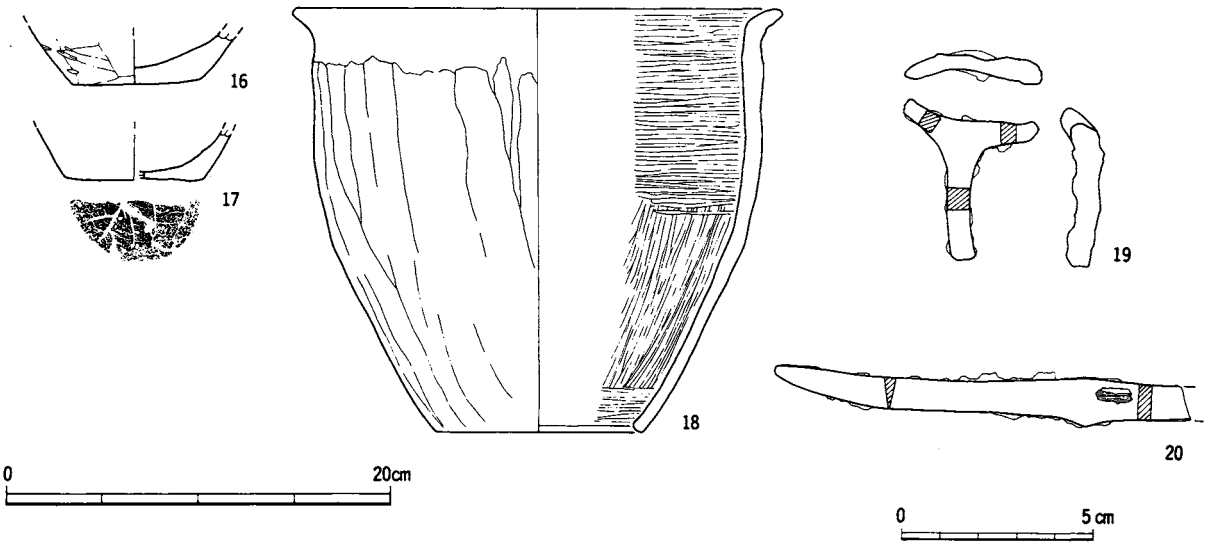
43・44・45は土師器甑で、いずれも内面に縦方向から斜め方向のヘラミガキ調整を施し、ヘラによる底部の切り離し痕を明瞭に残す。そのうち44・45はほぼ完形である。46は砂岩の砥石である。中央に縦方向に鋭角の筋が入り、また、側面も研面として使用されている。

SI 20（第54・55図、図版9・11・13・15・48・49・65）

G5－00グリッド北側に位置し、掘立柱建物跡(SB 2)、SI 16と重複する。主軸長(5.8)m、横軸長5.8m、主軸方位N－51°－Eである。床面積は33.64m²、壁高は40cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北東壁中央にある。

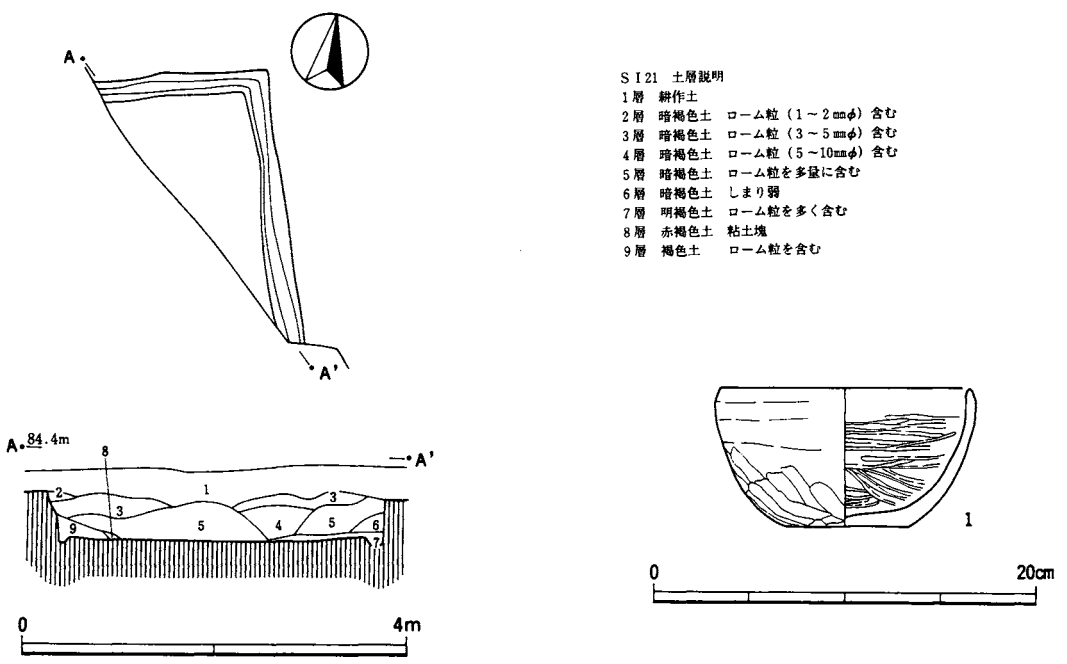

SI20 土層説明
1層 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒、焼土粒含む
2層 黒褐色土 1層よりロームブロック、ローム粒多く混入
3層 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒含む、しまりなし
4層 暗褐色土 黒色土、黒褐色土含む、ロームブロック、ローム粒を多く含む、しまりなし
5層 暗褐色土 4層類似、4層に比べて黒色土混入少ない、色調明るい
6層 暗褐色土 黒色土多く含む、ロームブロック、ローム粒多く含む
7層 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒多く含む
8層 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒多く含む、しまりに欠ける
9層 暗褐色土 8層類似、ロームブロックの混入少
10層 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む
SI 20
SI 16
a
a'
A
A'
83.6m
0
4m
0
20cm

第54図 SI20(1)



第55図　ＳＩ20(２)

出土土器は総点数597点で、須恵器はそのうちわずか６点のみである。１は土師器杯蓋、２・３は土師器杯身で、１と２は口径が合いセットとなる。いずれも内面黒色処理、外面ヘラ削り調整を施している。４は須恵器杯で、外面下半はヘラ削り調整である。また、底部にはヘラ記号が見られる。５・６・７・８は土師器高杯で、杯部内面が薄く剝離し、ザラザラしている。器表面が残っている部分に赤彩が残っているようにも見えるが、はっきりとしない。６は杯部の内面を黒色処理する。７は杯部接合部が分厚くなっている。９は内面黒色処理の土師器鉢で、立ち上がり部はヘラミガキ後ヘラ削りを施す。10・11・18は土師器甑で、18は全体の3/4が残存している。内面は細かなヘラミガキである。12～17は土師器甕である。17の底部には木葉痕を残す。19・20は鉄製品で、19は三つ又状の用途不明製品、20は刀子である。



第56図　ＳＩ21

SI 21（第56図、図版49）

住居の大半が調査区外に入るためその規模は不明である。主軸方位は推定でN－17°－Wとなる。壁高は40cmを測る。柱穴は不明である。かまどは調査範囲内には確認できない。

調査が遺構の一部であったためもあってか、遺物は総点数19点と極端に少ない。実測できたのは土師器鉢で、内面は丁寧なヘラミガキ、外面はヘラ削り調整を施す。内面は黒色。口縁の2/3を欠損するのみである。

SI 22（第57・58図、図版14・15・17・49・65）

掘立柱建物跡(SB 11・12)と重複する。主軸長7.4m、横軸長6.7m、主軸方位N－44°－Wである。床面積は49.58m²、壁高は15cm～20cmを測り、浅い。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央にある。

出土土器は総点数341点である。そのうち須恵器は16点で、総点数の5％を占める。1は土師器杯で、使用によるためか口縁端の磨滅が著しく、平滑になっている。2は須恵器杯で、外面に何かを研いだ痕跡の筋が見える。内面は指ナデ痕が残る。3は土師器高杯で、完形に近い。口縁端、脚部端は磨滅が見られる。4は高杯杯部片で、内面中央部付近は磨滅が見られる。歪みのない丁寧な作りである。5・6は土師器甕で、6は口縁及び器体全体に歪みがあり、成形がやや粗雑である。外面に剝落が見られる。7・9は土製勾玉、8は土製小玉である。10から12はいずれも土製の支脚である。10・12は縦方向にヘラで面取りをしている。13・14・15は鉄製品で、13は刀子、14は釘、15は中空で用途不明である。

SI 25（第59・60図、図版16・50・65・67）

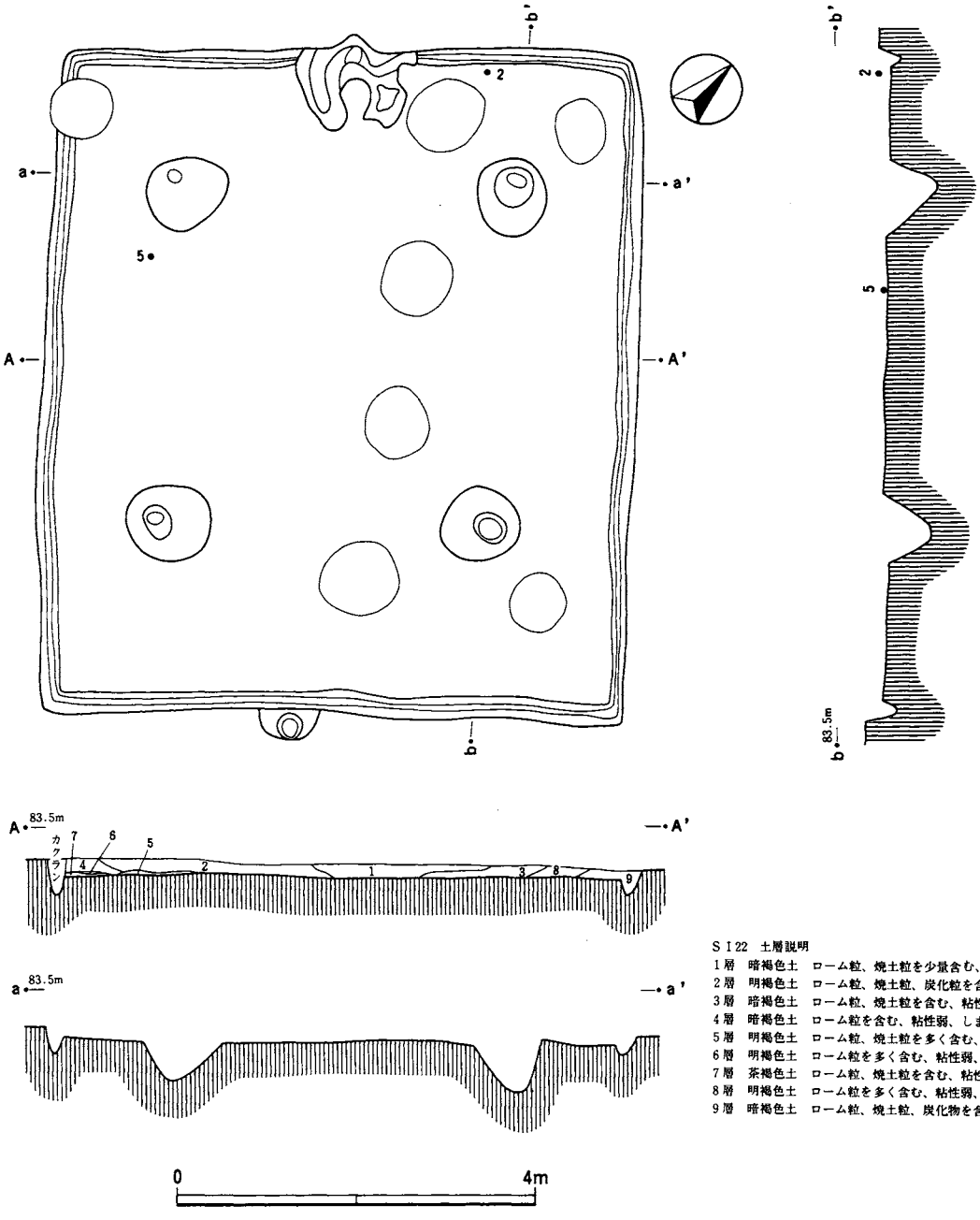
南西端がSI 24と重複する。主軸長(7.5)m、横軸長7.2m、主軸方位N－24°－Eである。床面積は(54)m²、壁高は22cm～32cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北東壁中央にある。

出土土器の総点数は2,567点である。遺物はかまど左側からまとまって出土している。1は土師器杯で、内面を丁寧にヘラミガキしている。外面はヘラ削り後磨滅している。2・3は須恵器杯で、胎土中には砂粒を含まず緻密である。底部は平坦面を作り出している。4・5は須恵器杯蓋で、4は宝珠形のつまみが付くもので、5の胎土中には多量に砂粒を含む。6は土師器高杯の杯部で、内面を黒色処理している。7・8は土師器高杯の脚部で内面は指ナデ、外面はヘラ削り調整を施す。9は須恵器高杯で、口縁端を小さく外側に折り曲げている。また、細い沈線が1から2本入る。10は土師器甑で、内面はすべてヘラミガキ調整を施す。11～15は土師器甕で、13は内面はヘラによる削りやナデ調整を施す。14の器面はボロボロとなっている。16は滑石製紡錘車で、約1/2を欠損している。上面、下面とも研磨、側面は削り調整されている。17～24は鉄製品である。17・24は釘、21・22・23は刀子、19・20は同一個体であるが用途不明である。18の断面は方形で、下方が厚くなっているので基部となるようだが、用途不明である。25は砂岩製の砥石である。

SI 30（第61図、図版18・20・50）

調査区最北端に検出された住居である。東側でSI 29と重複する。この周辺は削平が著しい。主軸長6.4m、横軸長6.6m、主軸方位N－9°－Wである。床面積は42.24m²、壁高は0cmで、周溝のみ確認された。主柱穴は4本である。出入口ピットを1つ有する。かまどは北西壁側にあったと考えられる。

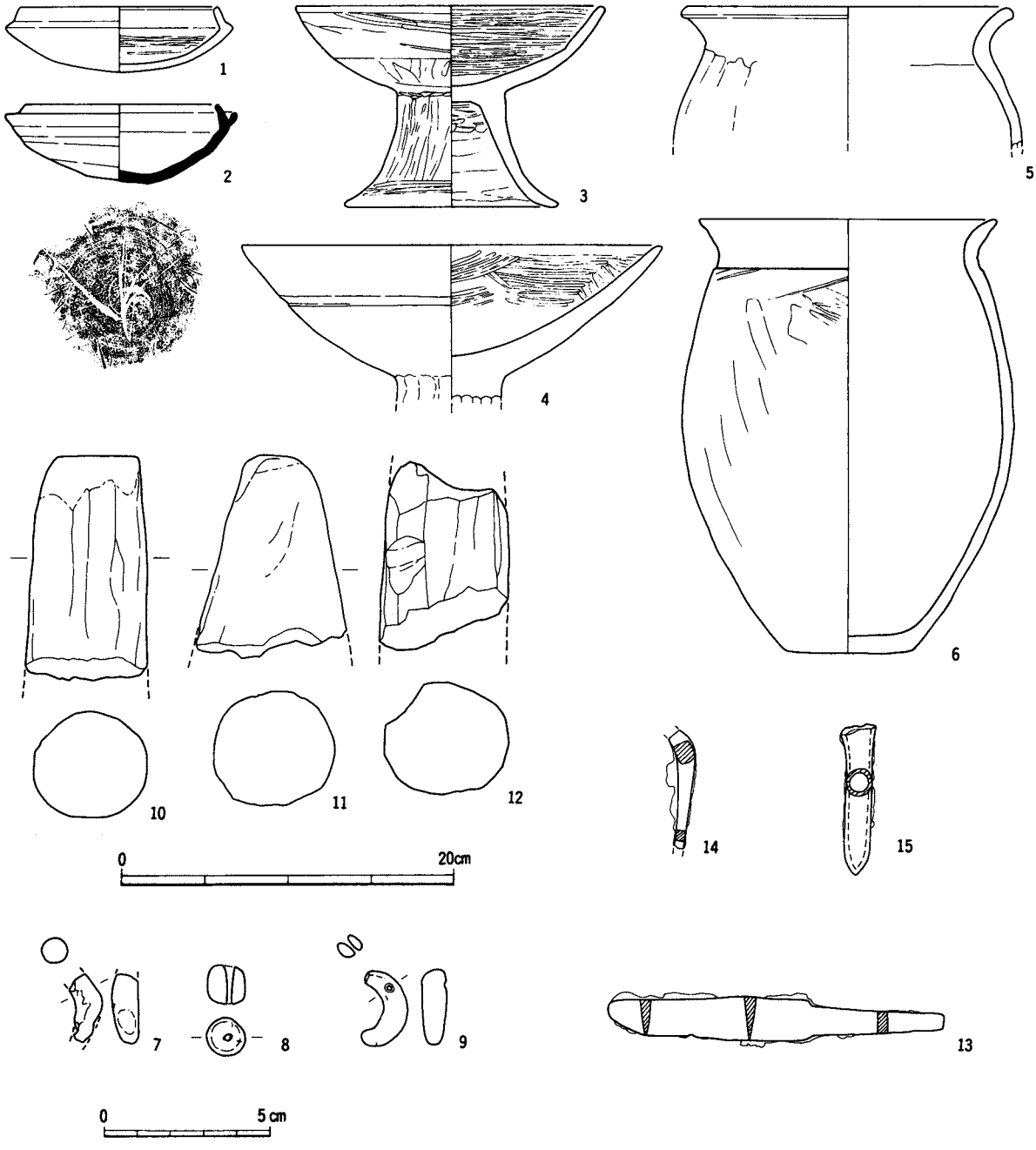
土器の総点数は63点である。住居がほとんど削平されていたため遺物量は極端に少ない。1は柱穴覆土中から出土した土師器である。内面はヘラミガキ、外面は器面がかなり磨滅し、ヘラミガキ痕を部分的に残す。



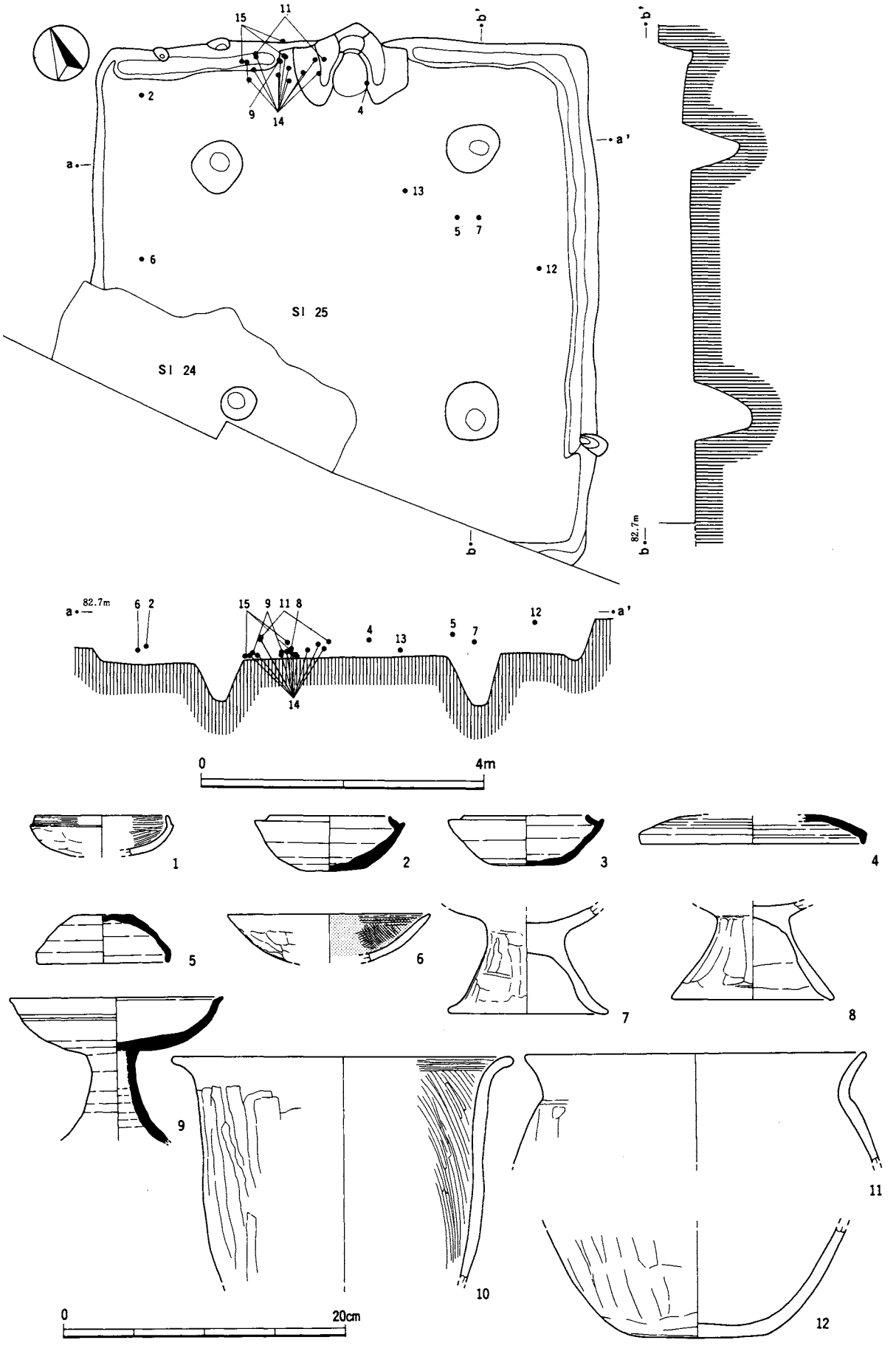
SI22　土層説明

1層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む、粘性弱、しまりあり
2層　明褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む、粘性弱、しまりあり
3層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を含む、粘性弱、しまりあり
4層　暗褐色土　ローム粒を含む、粘性弱、しまりあり
5層　明褐色土　ローム粒、焼土粒を多く含む、粘性弱、しまりあり
6層　明褐色土　ローム粒を多く含む、粘性弱、しまりあり
7層　茶褐色土　ローム粒、焼土粒を含む、粘性弱、しまりあり
8層　明褐色土　ローム粒を多く含む、粘性弱、しまりあり
9層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を含む、粘性弱、しまりあり

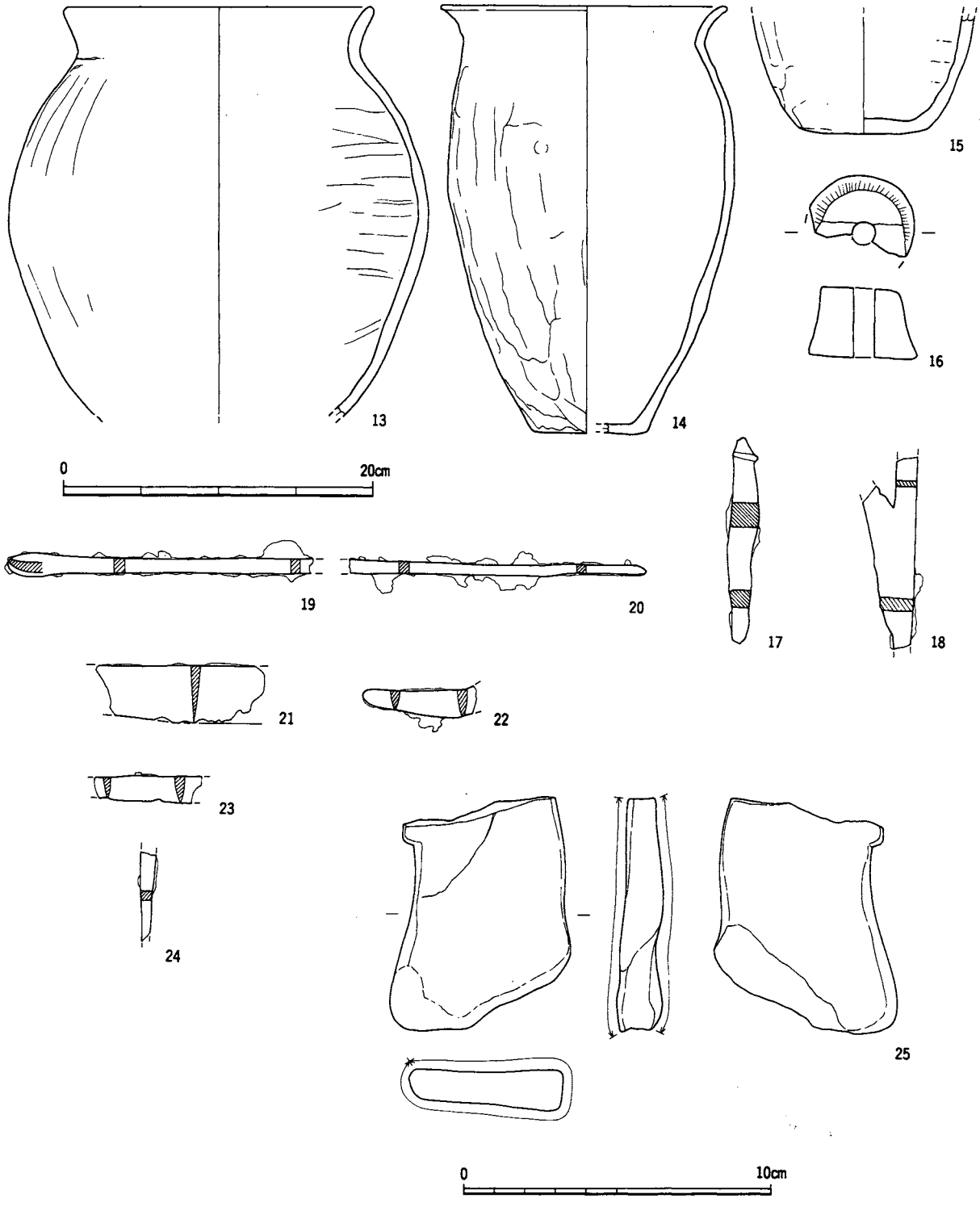
第57図　SI22(1)



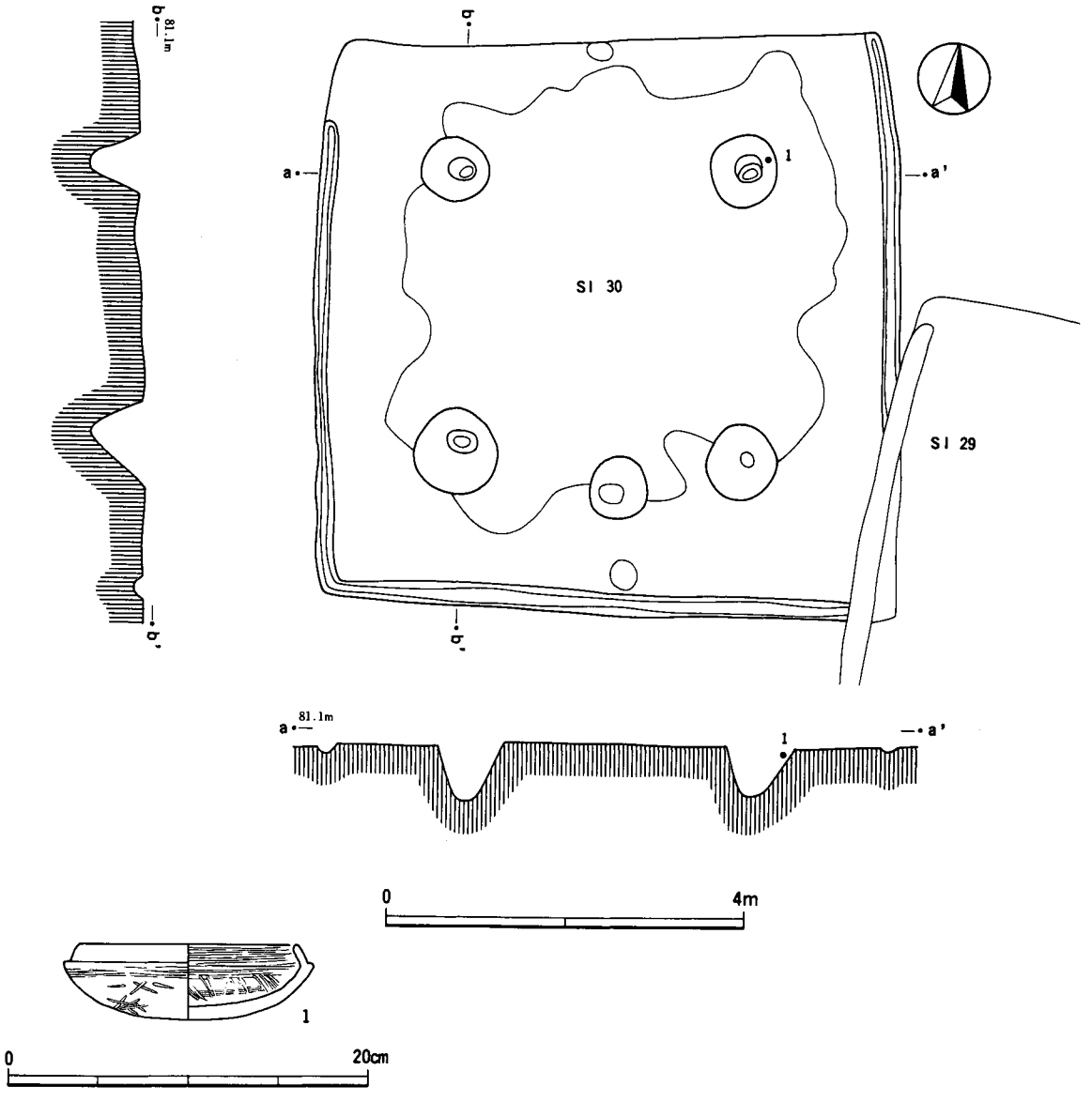
第58図　SI 22(2)



第59図　SI 25(1)



第60図　SI 25(2)

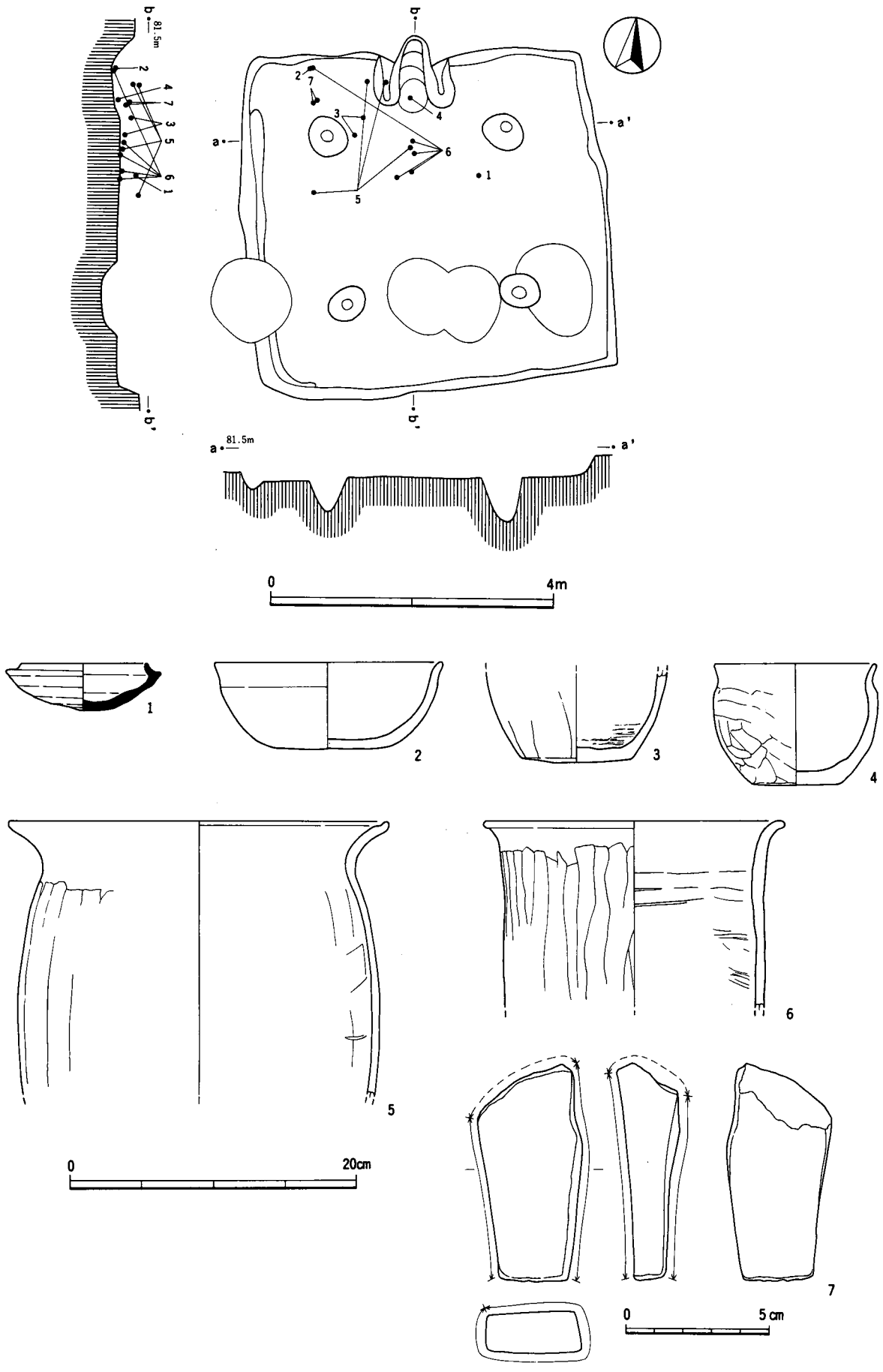


第61図　SI 30

SI 36（第62図、図版19・23・51・67）

南側でSB 17と北側でSI 42・43と重複する。主軸長4.8m、横軸長5.2m、主軸方位N－13°－Wである。床面積は24.96m²、壁高は10cm～30cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央にある。

出土土器は総点数613点で、うち須恵器は39点である。1は完形の須恵器杯で底部近くはヘラ削り調整を施す。また、外面にはゴマふり状に自然釉が付着する。胎土は緻密で砂っぽく、東海産と考えられる。2は土師器杯で、焼成不良のため器面が軟質で荒れている。3の土師器甕の外面ヘラ削り調整は横方向である。4は土師器甕で、外面は磨滅している。内面は剝落がある。5は土師器甕の一部の破片である。6は土師器甑片と考えられる。内面は横方向のヘラナデ調整を施す。7は凝灰岩質の砥石である。

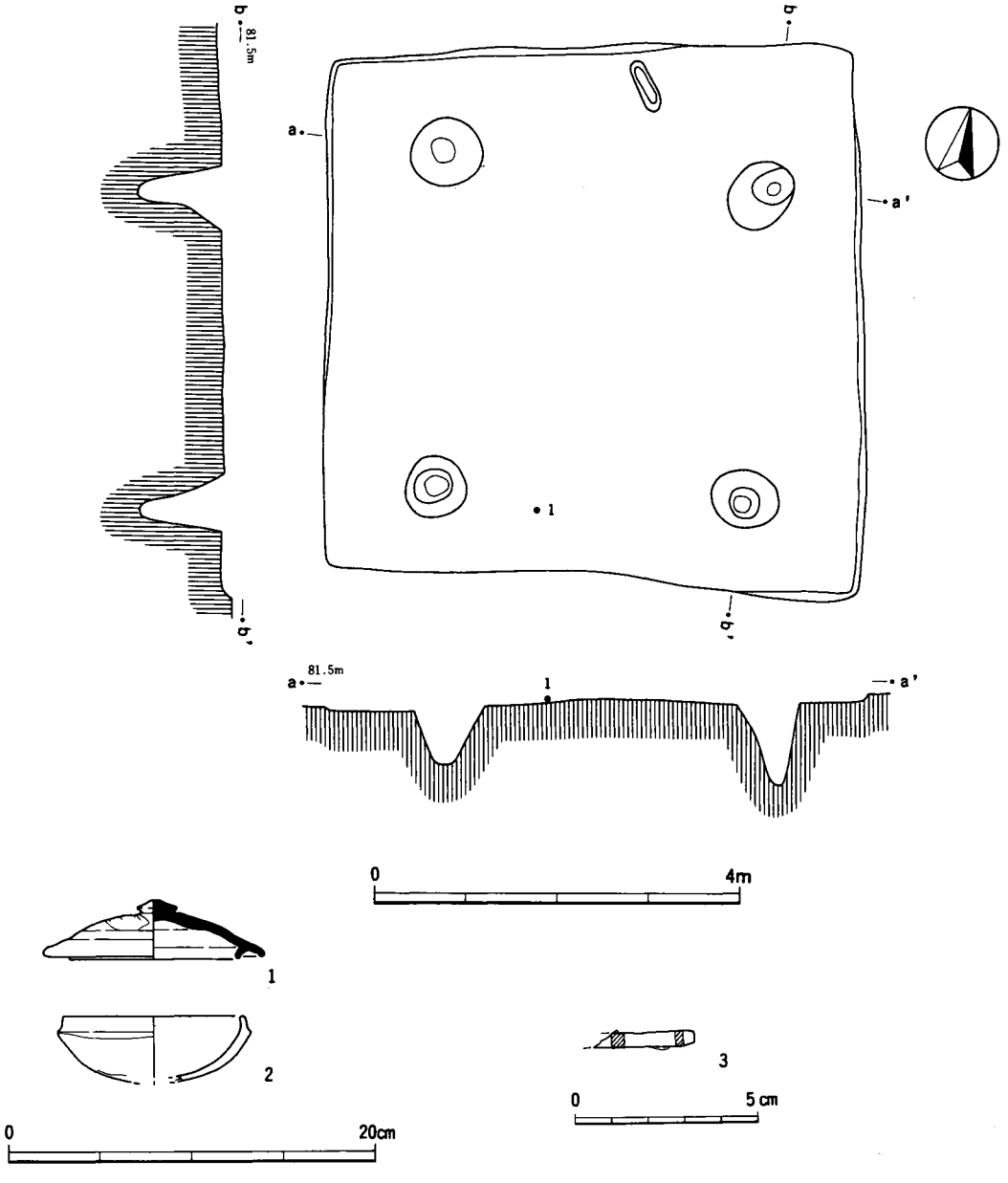


第62図　SI 36

SI 40（第63図、図版25・51・65）

壁の立ち上がりがやっと確認できる程度の残存状況である。主軸長5.8m、横軸長5.9m、主軸方位N－11°－Wである。床面積は34.22m²、壁高は0cm～10cmを測る。主穴は4本である。かまどは北西壁中央にあるが、左袖は完全に削平されている。

出土土器の総量は264点である。1は須恵器杯蓋で、胎土中には微砂粒を多く含み、砂質、軽量である。外面の一部を砥石として使用している。2は須恵器杯で胎土は精選されている。外面は淡黄色、内面は黄灰色で、口縁端は磨滅している。3は鉄製品で小型の刀子の基部片であろうか。

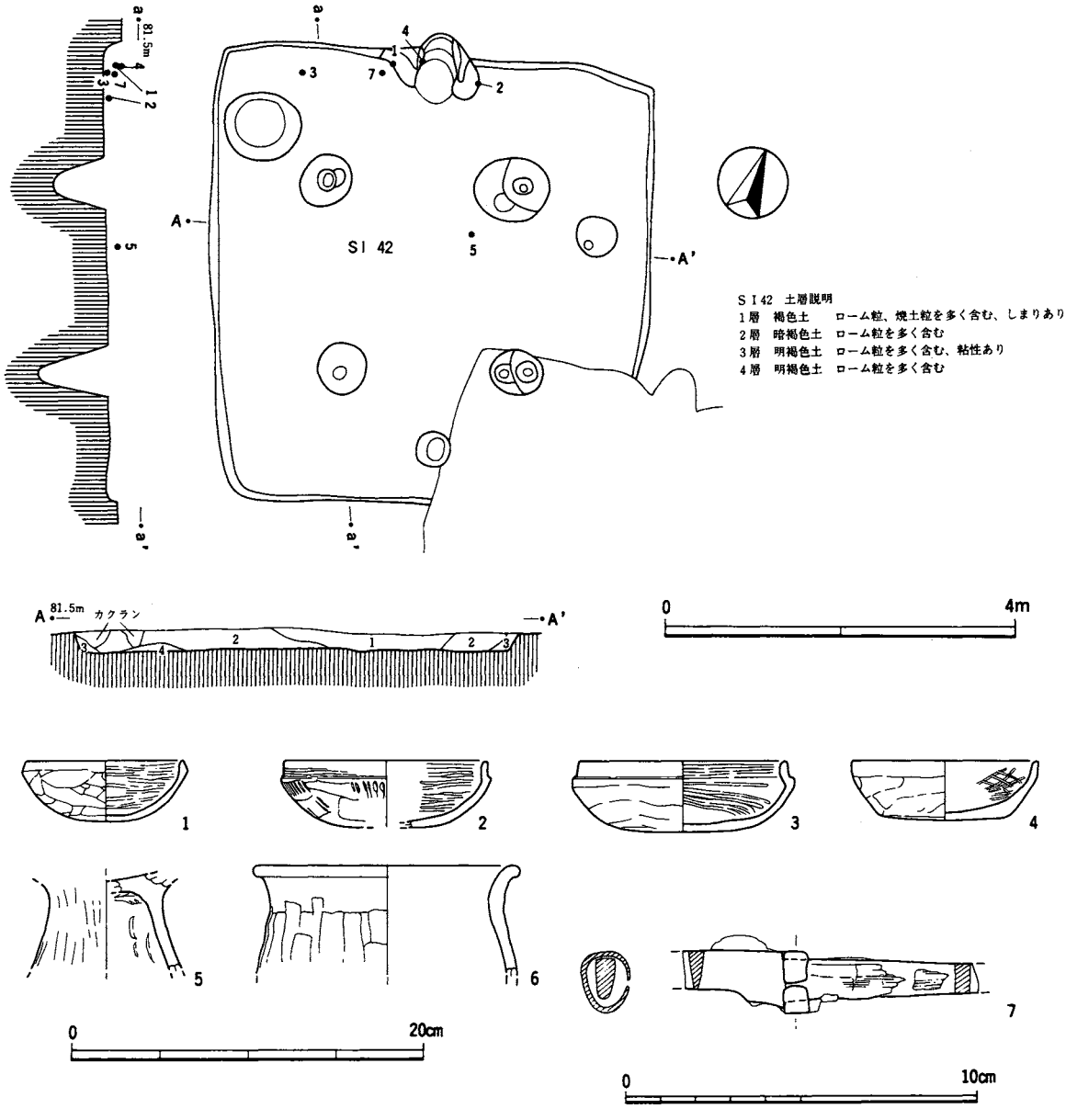


第63図　SI 40

SI 42（第64図、図版22・23・25・51・65）

SI 36と南東端で重複する。主軸長5.2m、横軸長5.1m、主軸方位N－22°－Wである。床面積は26.52㎡、壁高は10cm～25cmを測る。主柱穴は４本である。出入口ピットを１つ有する。かまどは北西壁中央にある。

出土土器は総点数269点である。１は土師器杯で、内面は丁寧なヘラミガキで、口縁端が磨滅している。２は土師器杯で、外面には轆轤上で回転させた際にヘラの歯を立たせてヘラ削りをしたような痕跡が残る。４は内面が緩やかに立ち上がり、一方で外面は底部が平坦で立ち上がりの明瞭な器形である。口縁端に煤状のものが薄く付着している。内面はヘラ削り、外面はヘラ削り調整である。５は土師器高杯、６は土師器甕片である。７は鉄製刀子である。木質も一部で残存している。



第64図　ＳＩ42

SI 43（第65図、図版22・23・51・67）

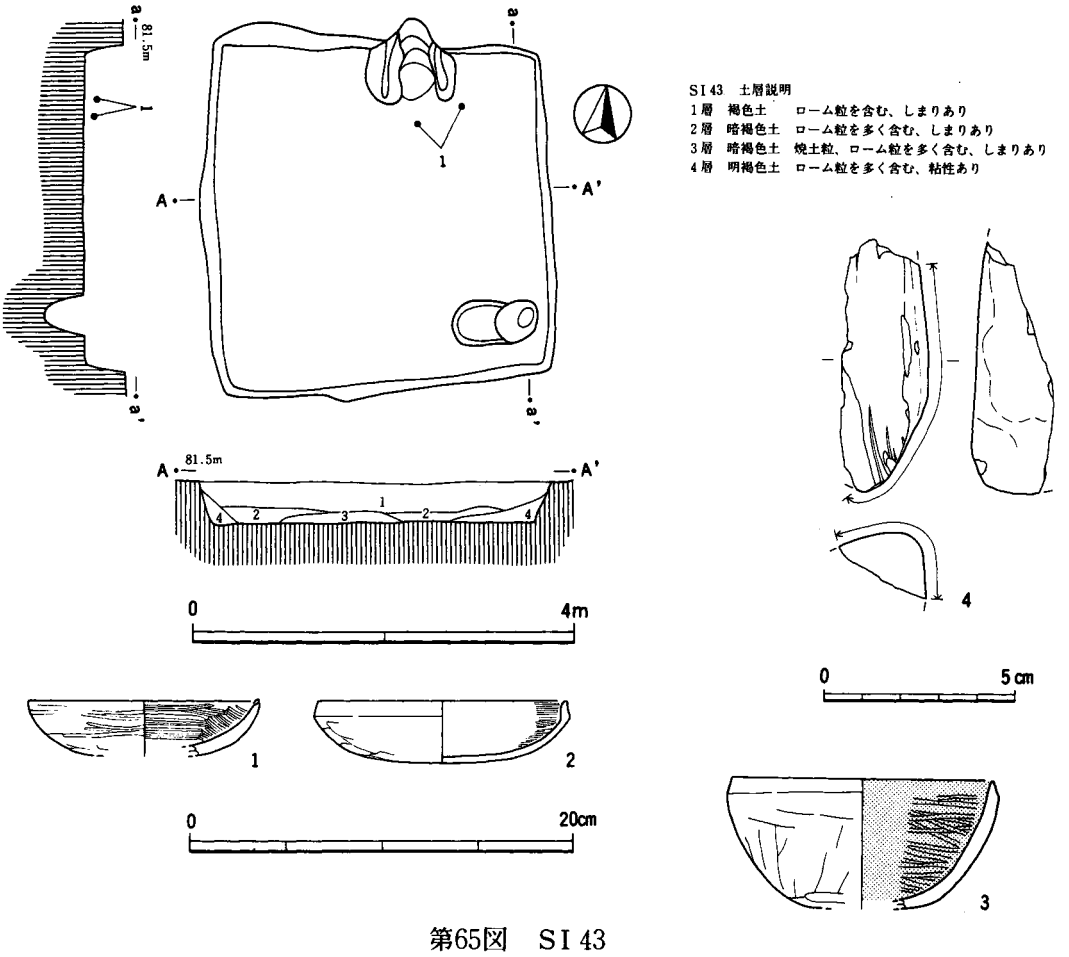
南西端でSI 36と重複する。主軸長3.7m、横軸長3.7m、主軸方位N－11°－Wである。床面積は13.69㎡、壁高は40cmを測る。主柱穴は確認できなかったが、東南隅に小ピットが確認された。かまどは北西壁中央にある。

出土土器は総点数171点である。1は土師器杯で外面はヘラ削り後、粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端は磨滅している。2は薄手で丁寧な作りの土師器杯である。内外面とも黄土色を呈する。3は土師器碗か杯で、内面は黒色処理を施しているようである。

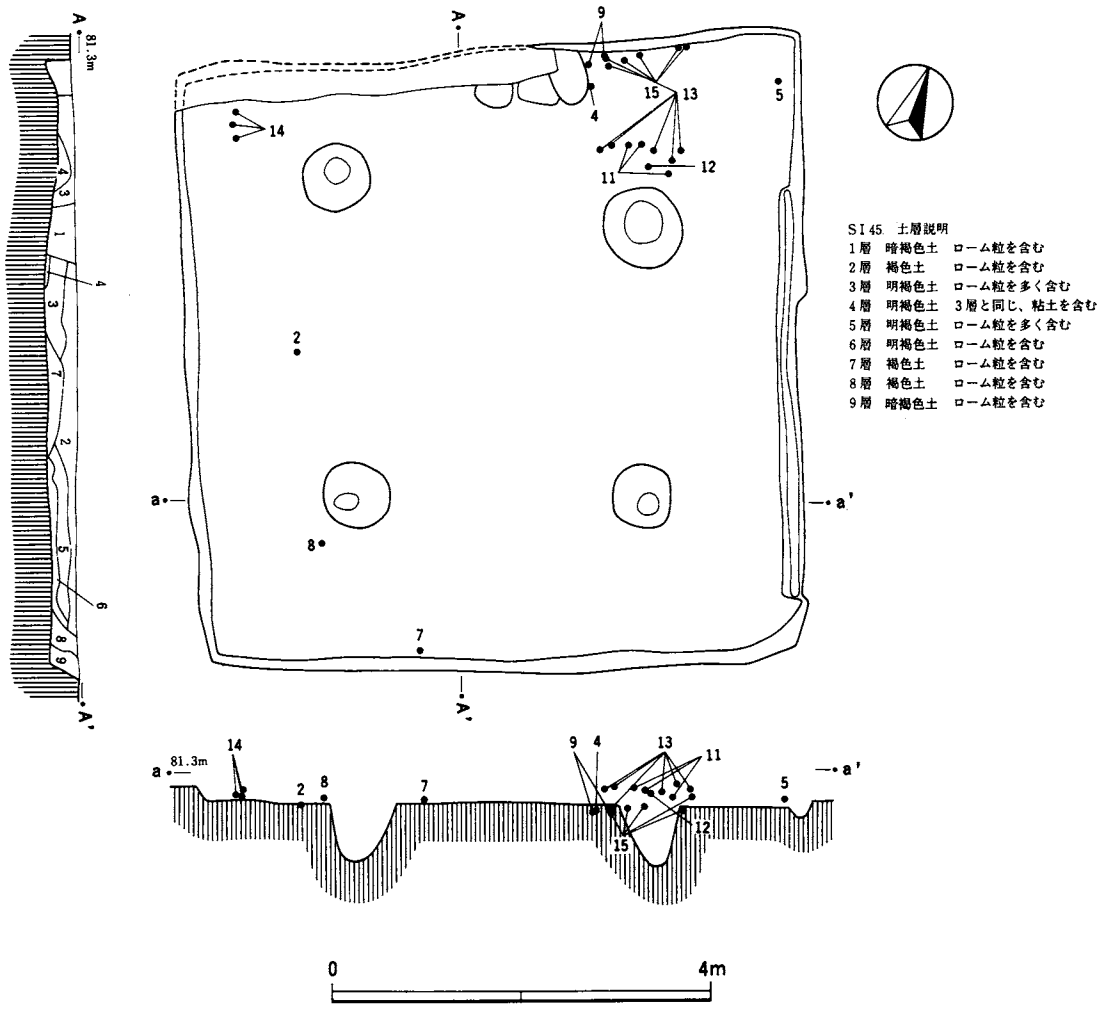
SI 45（第66・67図、図版51・52）

SI 44と東側で重複する。かまど左袖と西側壁が削平されて残っていない。主軸長6.6m、横軸長6.5m、主軸方位N－21°－Wである。床面積は42.9㎡、壁高は5cm～30cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央にある。遺物はかまど右側から多く出土している。

出土土器の総点数は856点である。1は土師器杯で内外面とも全面漆塗りを施しているようで、光沢を帯びる。稜線上に磨滅痕が認められる。5も同様に全面漆塗りである。2の土師器杯の内外面には鉄分が付着している、特に内面に顕著である。3及び4の底部には焼成後に入れたヘラ記号がある。8の土師器高杯の口縁端は使用によりかなり磨滅している。7の脚部内面には横方向の刷毛目痕が残る。9は土師器短頸壺で器面が細かく凸凹して調整不明。覆土中には白色砂粒を多量に含む。10は須恵器瓶類の底部で、胎



第65図　SI 43



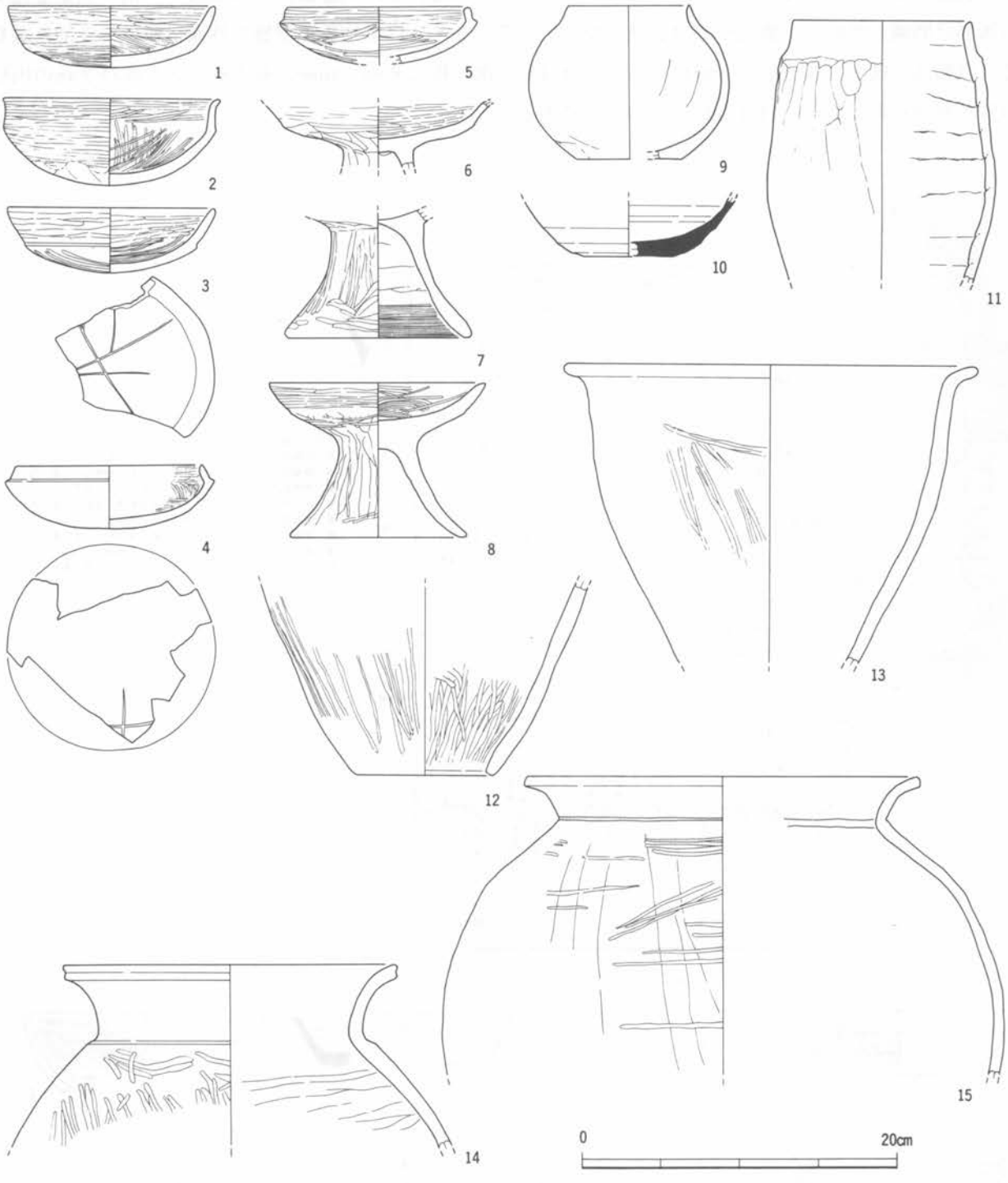
第66図　SI 45(1)

土中には大粒の砂は含まないが、少々砂っぽい。黒色粒子の吹き出しが見られる。内面にはゴマ振り状の自然釉が付着する。

11は蛸壺状の土師器甕で内面には粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。外面は口縁部を除き縦方向のヘラ削りを施す。胎土中には1㎜前後の砂粒を多量に含み粘性弱い。12・13は土師器甑片、14・15は土師器甕片である。どの器面にも粗いヘラミガキを施しているのが大きな特徴である。12の内面にはヘラミガキ痕が残る。

（2）奈良・平安時代

奈良時代以降平安時代までの遺構は竪穴住居22軒、掘立柱建物18軒を数えるが、特に8世紀代の竪穴住居は調査範囲の北側に集中する。掘立柱建物跡は遺物が少なく時期は特定できないが、調査時の観察ではいずれの場合も重複する竪穴住居よりも新しいと判断された。また、調査範囲北端の擂鉢状の井戸状遺構（SX 4）からは多量の完形遺物が出土している。



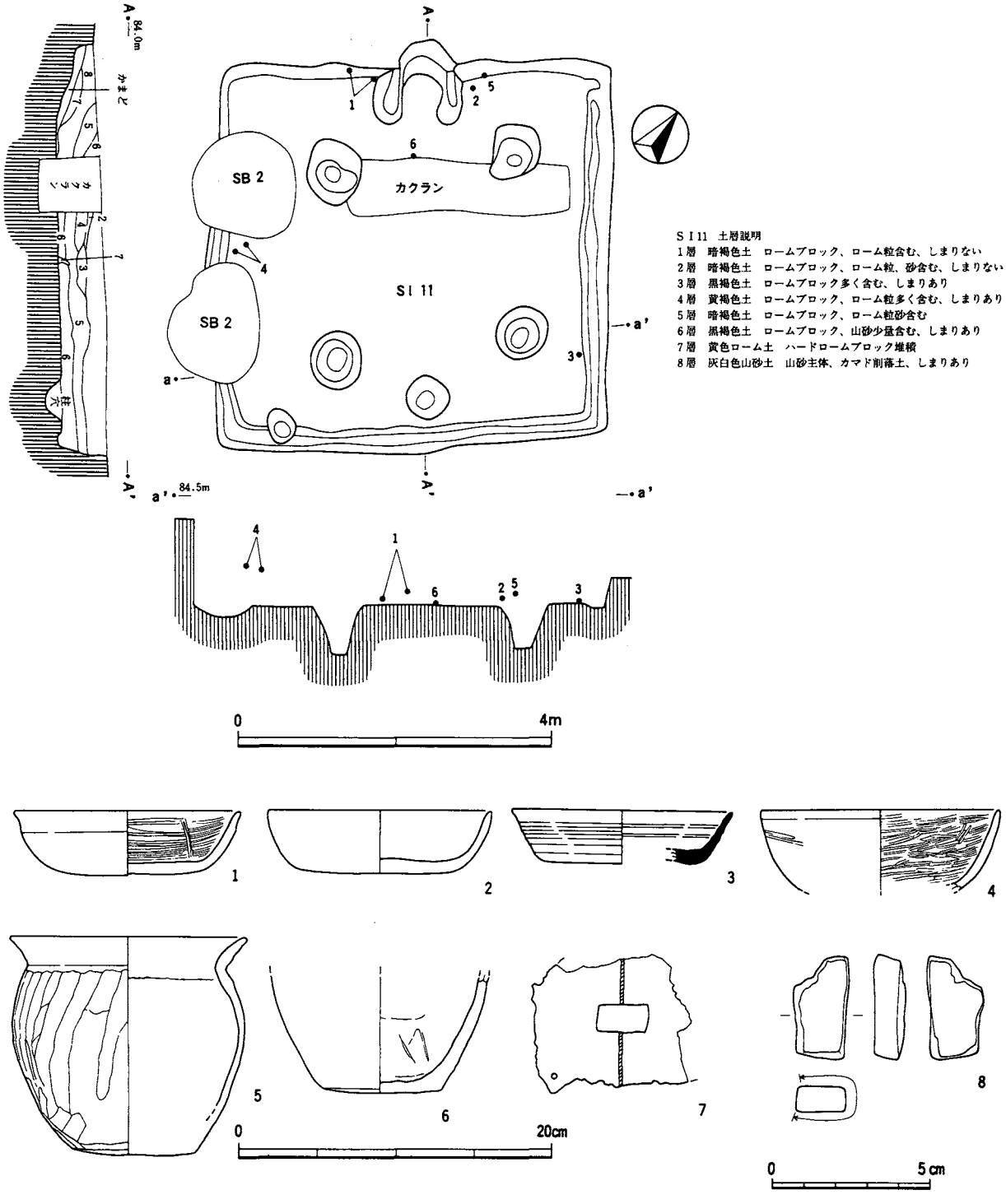
第67図　SI 45(2)

竪穴住居跡

SI 11（第68図、図版9・11・13・15・53・66・67）

SB 2と西側で重複する。かまど前面の床面が攪乱を受けている。主軸長4.9m、横軸長5.2m、主軸方位N－41°－Wである。床面積は25.48m²、壁高は30cm～54cmを測る。主柱穴は4本である。出入口ピットを1つ有する。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総点数は907点である。1・2・4は土師器杯で内面をヘラミガキ調整する。2は内面の磨滅のため調整がよく分からないが、ヘラミガキ調整と考えられる。3は須恵器杯で底部はヘラ削り調整を施す。口縁部は磨滅している。底部が上げ底状になっている。5・6は土師器小型甕で外面は粗いヘラ削り調整で、口頸部の粘土の接合痕が明瞭に残る。7は鉄製の薄い板に8㎜×16㎜の長方形の穴と直径2㎜の円形の穴があけられている。11は凝灰岩質の砥石である。



第68図 SI 11

SI 14（第69図、図版９・11・12）

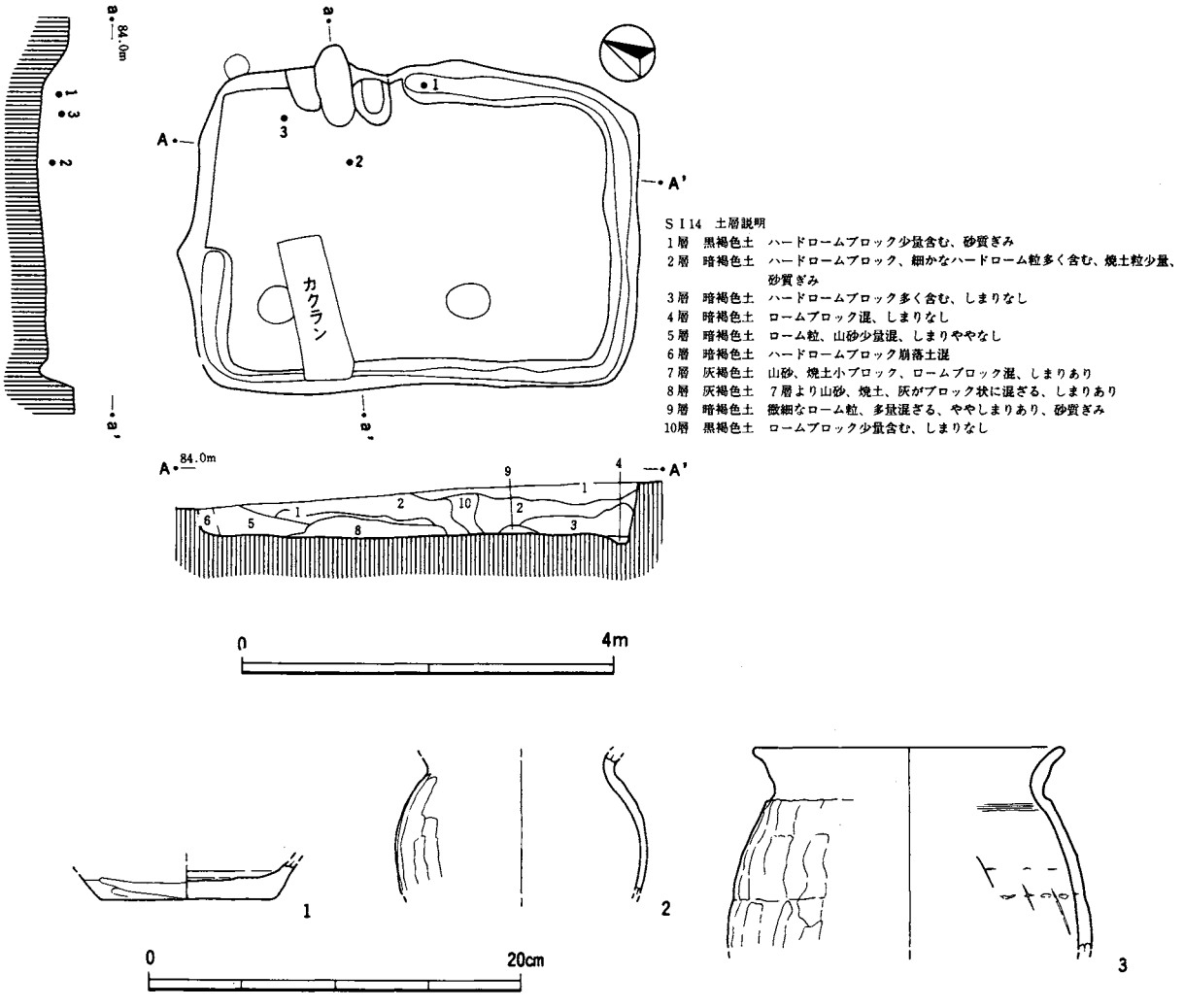
SI 13・15と重複する。主軸長3.4m、横軸長4.8mで横方向に長い形態である。主軸方位はN－61°－Eである。床面積は16.32m²、壁高は30cm～54cmを測る。主柱穴は確認できない。かまどは北西壁中央より北側に偏っている。

出土土器総点数は327点である。１は土師器杯の底部片で、底部はヘラ削り調整を施す。２・３は土師器甕の破片であるが、３は粘土紐の痕跡が明瞭に残り、器面がうねっている。

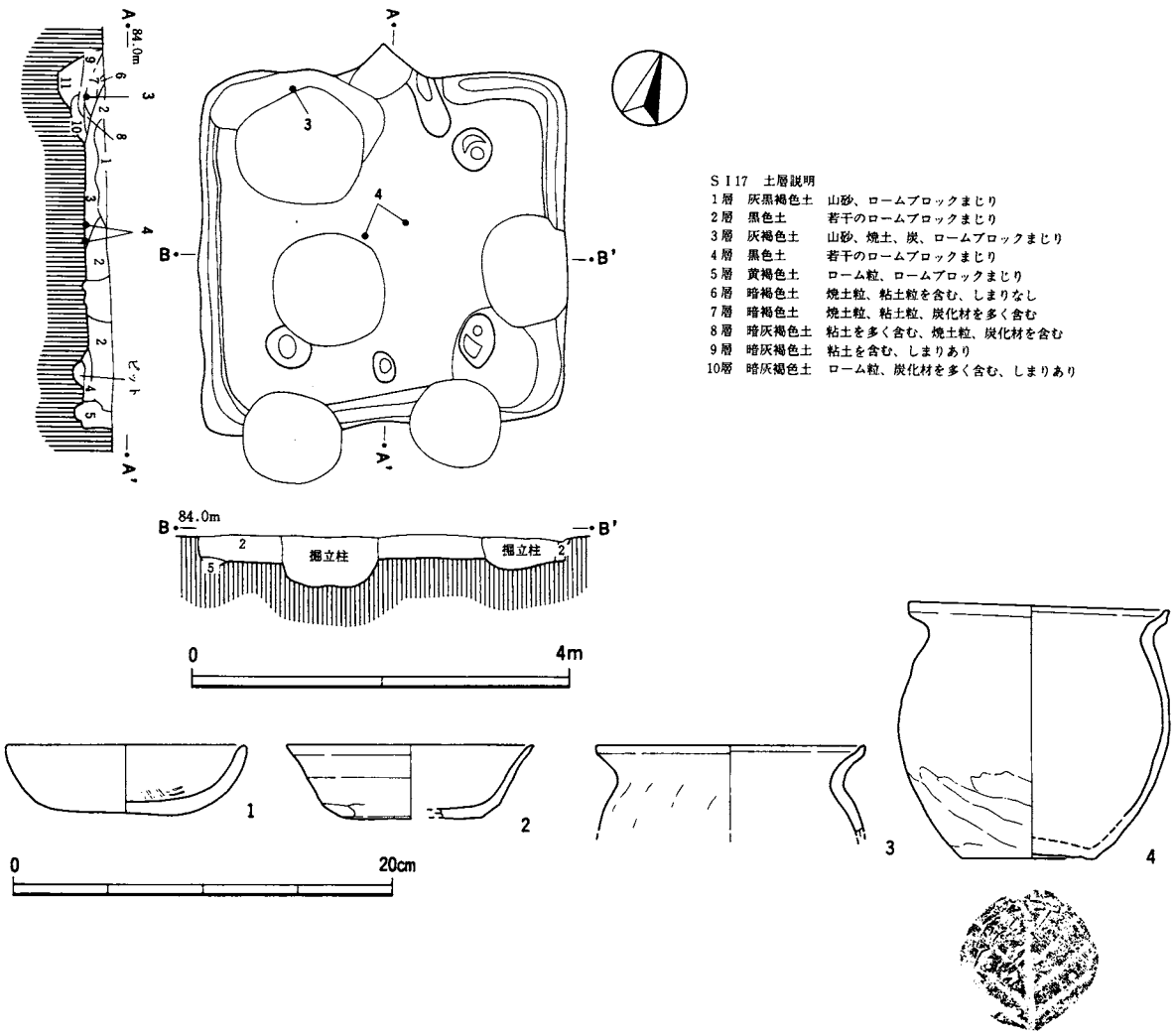
SI 17（第70図、図版９・11・13・53）

SB ５・６と重複する。主軸長3.8m、横軸長3.8m、主軸方位N－20°－Wである。床面積は14.44m²、壁高は20cm～30cmを測る。主柱穴は３本のみ確認している。出入口ピットを１つ有する。かまどは北西壁中央にある。

出土土器は総点数945点であるが、実測可能な土器は極めて少ない。１は土師器杯で、内外面とも磨滅が著しい。２は土師器杯で口縁部が外側に広がるタイプである。３は土師器甕で、口縁端を上方につまみ上げる。胴部下半はヘラ削りで、底部に木葉痕を残す。４も同様に口縁端を上方につまみ上げている。



第69図　SI 14

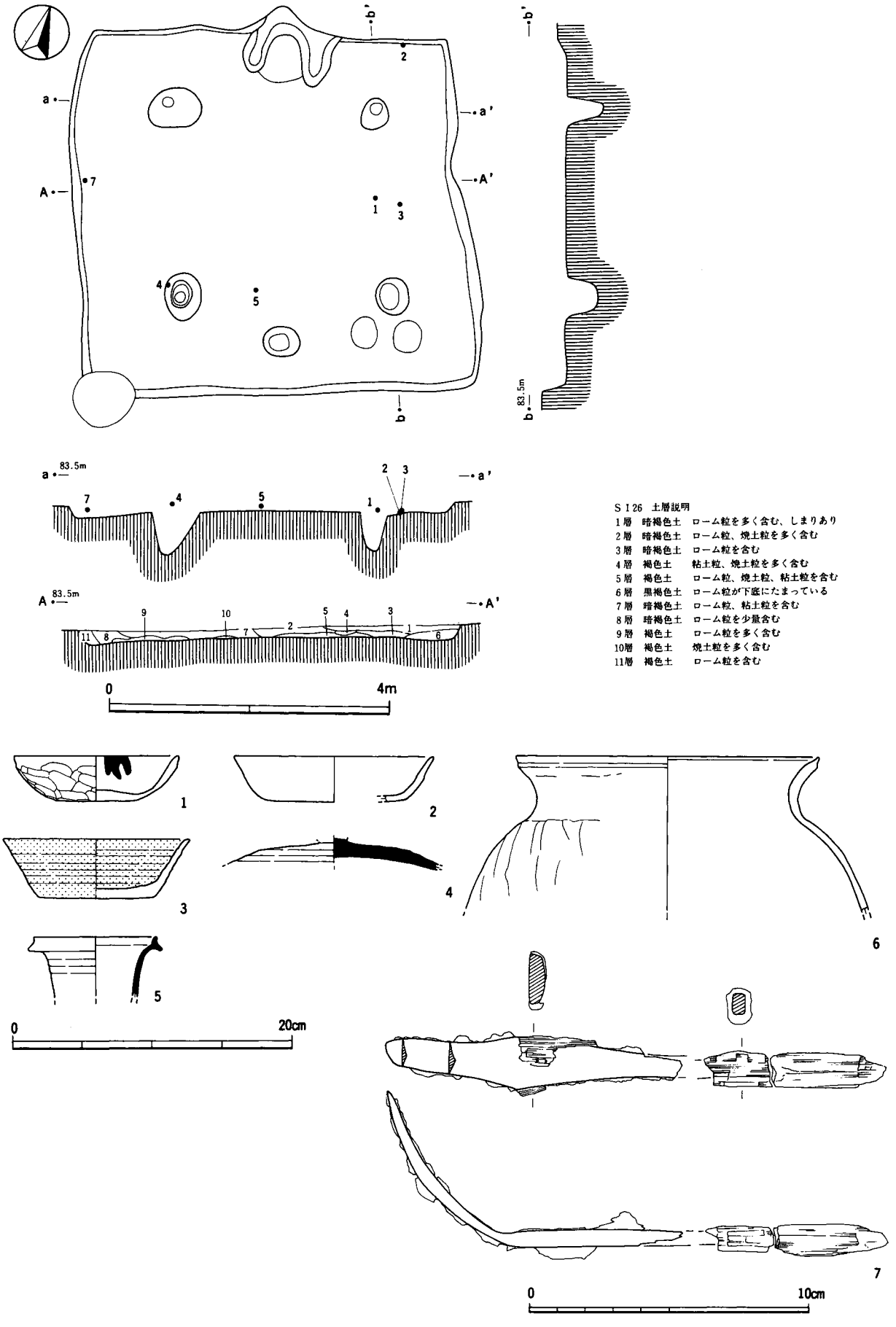


第70図　SI 17

SI 26（第71図、図版12・14・17・54・66）

南側でSB 10と重複する。主軸長5.3m、横軸長5.7m、主軸方位N－15°－Wである。床面積は30.21m²、壁高は12cmを測る。主柱穴は4本である。出入口ピットを1つ有する。かまどは北西壁中央に位置する。

出土土器は総点数476点である。1は土師器杯で、外面は粗いヘラ削り調整、内面はナデ調整である。また、内面にはタールの付着が見られ、灯明具として使用されていたものである。焼成は良好で硬質である。2は土師器杯で軟質で器面が剝落している。外面口縁端が黒色であるが、他は浅黄橙色である。3は箱形の土師器杯で、内外面とも赤彩を施す。底部と立ち上がり部は回転ヘラ削り調整を施す。4は須恵器杯蓋で、宝珠つまみが付くタイプである。胎土中には3㎜前後の大粒砂と銀雲母片を多量に含み、在地産と考えられる。5は長頸瓶の頸部破片で、口縁端を上下につまみ出す。胎土は灰色で砂っぽく、鉄分粒子を含む。内外面とも厚く灰釉が掛かる。6は土師器甕で、口縁端を小さくつまみ上げ、胴部はヘラケズリし、器厚を薄く仕上げている。7は鉄製の槍鉋で、かなり腐食が進みボロボロであるが、木質部を残している。



SI26 土層説明

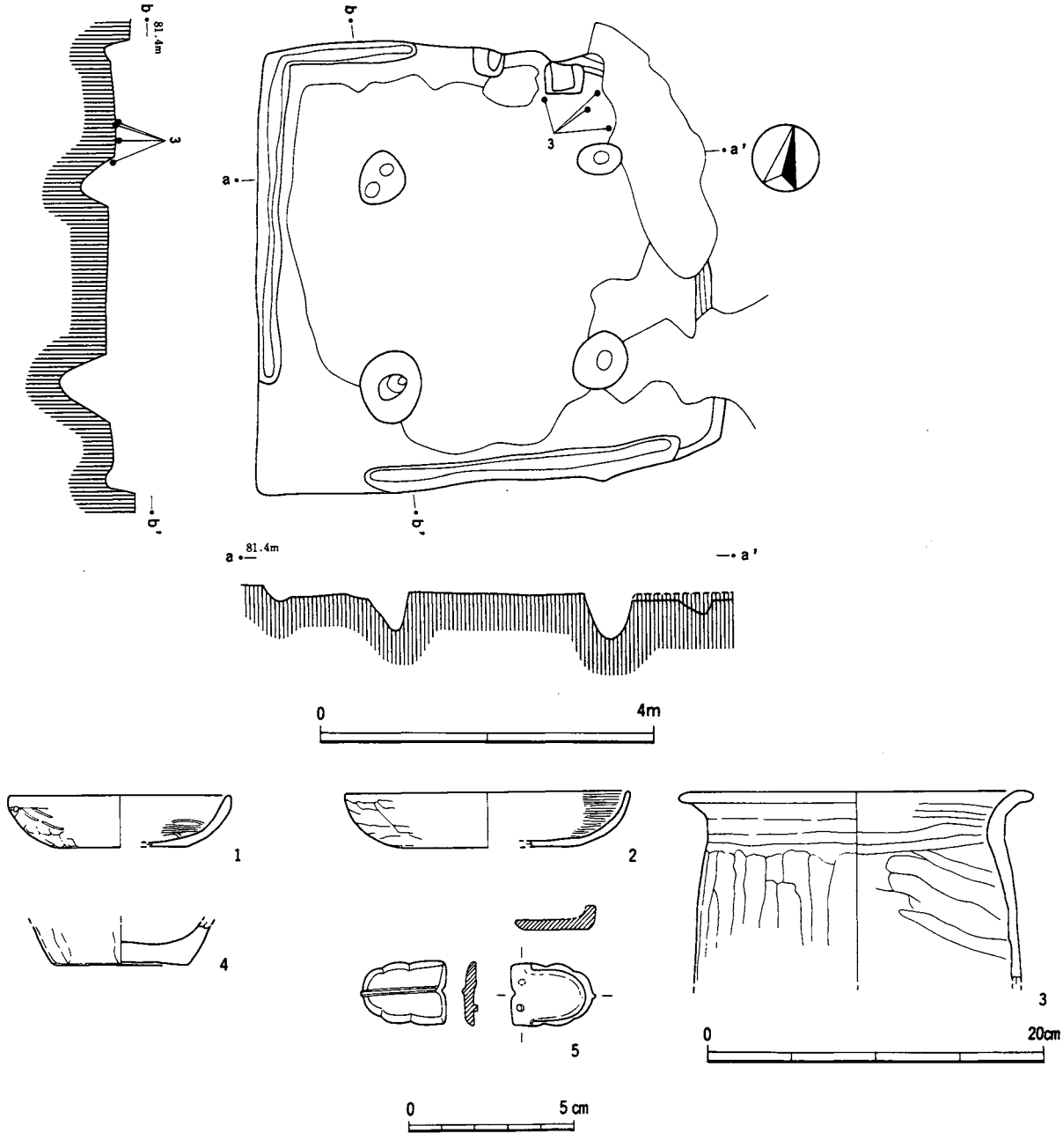
1層	暗褐色土	ローム粒を多く含む、しまりあり
2層	暗褐色土	ローム粒、焼土粒を多く含む
3層	暗褐色土	ローム粒を含む
4層	褐色土	粘土粒、焼土粒を多く含む
5層	褐色土	ローム粒、焼土粒、粘土粒を含む
6層	黒褐色土	ローム粒が下底にたまっている
7層	暗褐色土	ローム粒、粘土粒を含む
8層	暗褐色土	ローム粒を少量含む
9層	褐色土	ローム粒を多く含む
10層	褐色土	焼土粒を多く含む
11層	褐色土	ローム粒を含む

第71図　SI 26

SI 32（第72図、図版20・21・66）

北東コーナーで攪乱を受けていて、周溝の状態がはっきりしない。また、SI 33と重複する。主軸長5.1m、横軸長5.5m、主軸方位N－13°－Wである。床面積は28.05m²、壁高は10cm～25cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央に位置する。

出土土器は総点数591点である。2は土師器杯で、内面は非常に丁寧なヘラミガキ調整を施す。微砂粒と鉄分を含みやや軟質である。3は土師器甑又は甕で、内面は斜め方向の指ナデ調整を施し、全体に歪みが大きい。4は土師器甕の底部片で、底部はヘラ削り調整を施す。5は青銅製の蛇尾で、長さ26mm、幅19.5mm、重さ7.6gを測る。表面中央に細い隆帯があり、全体が宝珠形をしている。



第72図　SI 32

SI 35（第73図、図版19・22・23・25・54・65・67）

北東コーナーの周溝は確認できない。主軸長5.0m、横軸長5.3m、主軸方位N－5°－Wである。床面積は26.5m²、壁高は30cm～40cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北側壁中央に位置する。

出土土器は総点数902点である。1・2・3はいずれも土師器杯で内外面全体に赤彩を施す。胎土中には微砂粒を多く含み、内面はヘラミガキ、外面はヘラ削りを施す。いずれも口縁端が磨滅している。1の底部には赤彩後につけられたヘラ記号が認められる。4～8は土師器甕である。いずれも内面をヘラナデし、口縁部が外湾するタイプである。9は鉄製の釘の破片である。10は鉄製の刀子である。11は砂岩の砥石で、両面が中央部でくぼんでいる。

SI 37（第74図、図版24・54・67）

SB 16・17と重複する。主軸長4.5m、横軸長4.4m、主軸方位N－8°－Wである。床面積は19.8m²、壁高は20cmを測る。かまどは北西壁中央に位置するが、攪乱が著しく左袖を残すのみである。

出土土器は総点数966点である。1・2・3は土師器杯で外面は大きくヘラ削り調整を施す。総じて器面を薄く仕上げている。3は一部に赤彩痕が認められ、恐らく全面に赤彩されていたものと考えられる。1は器面が磨滅している。4は灰釉陶器段皿の口縁部破片で、胎土は灰白色で砂粒を含み鉄分のシミ出しが見られる。5は須恵器高杯の杯部片である。胎土中には銀雲母粒と鉄分粒を多く含む。脚部との接合跡には櫛がき状の痕跡が見られる。6から10は土師器甕片で、口縁部の形態は上下につまみ出して縁帯状になるもの(6)や上方につまみ上げるもの(8・9・10)とがある。いずれも器面が薄く仕上げられている。9の体部には内側より2か所で穴があけられている。この目的については不明である。11は砂岩製の砥石である。上部が欠損しているほかは全面を研面として使用している。

SI 39（第75図、図版25・54・67）

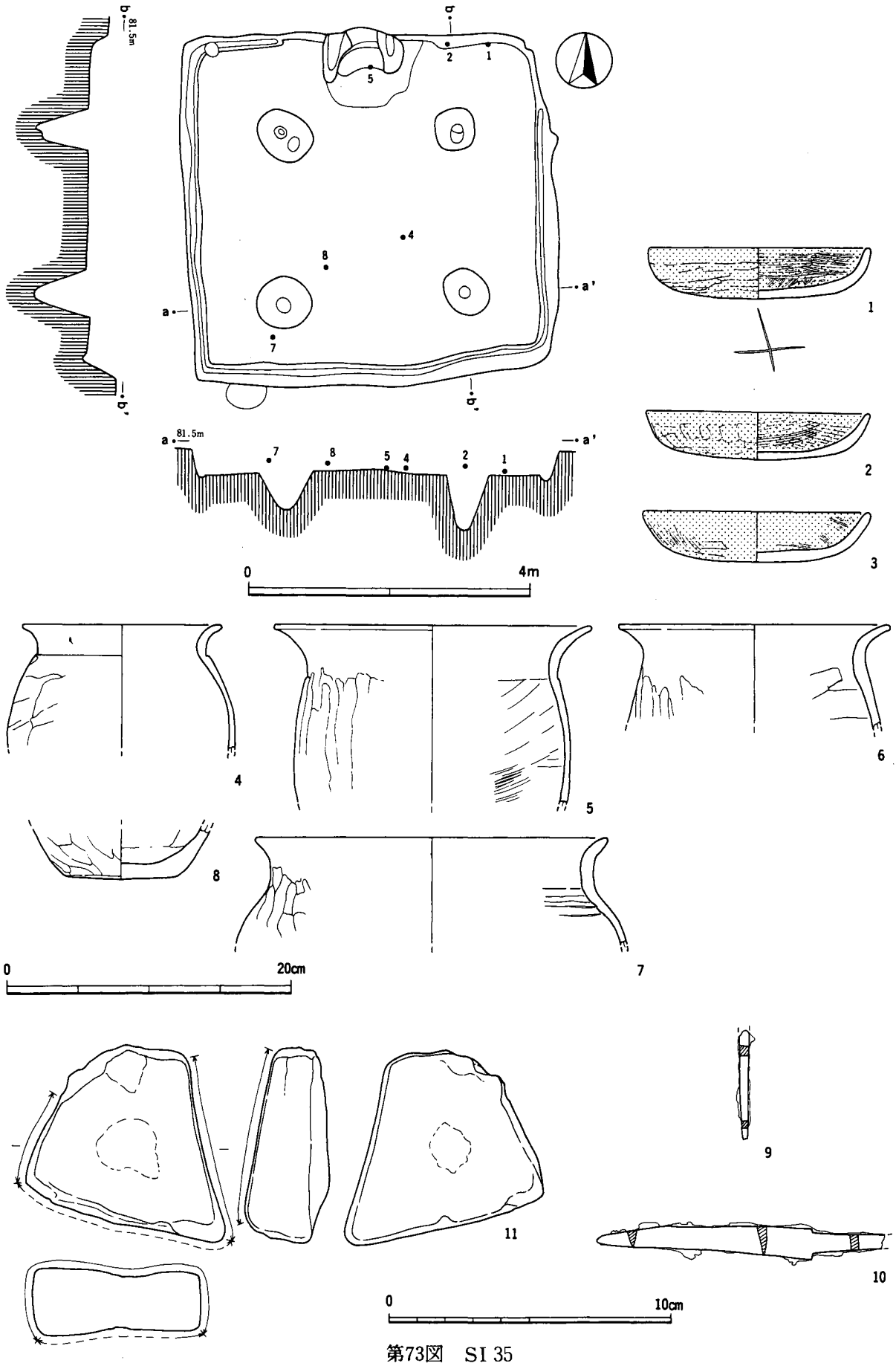
SI 38と南西コーナーで重複する。SI 38の方が新しい。主軸長4.9m、横軸長5.6m、主軸方位N－20°－Wである。床面積は27.44m²、壁高は30cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央に位置する。

出土土器は総点数540点である。1・2・3は土師器杯で、2は内面橙色、外面明赤褐色で、内面を粗くヘラミガキする。3は全面に赤彩を施すが、口縁端は磨滅のため色落ちしている。4は須恵器稜碗で胎土中に白色微砂粒を含む。内外面とも器面が磨滅しなめらかになっている。5・6は土師器甕で、6の肩部には非常に深く鋭利なヘラ削り痕が残る。内面はヘラナデ調整で器厚は非常に薄く仕上げられている。口縁は朝顔状に大きく外反する。7は土製支脚でボロボロとして崩れやすい。下半が欠損している。

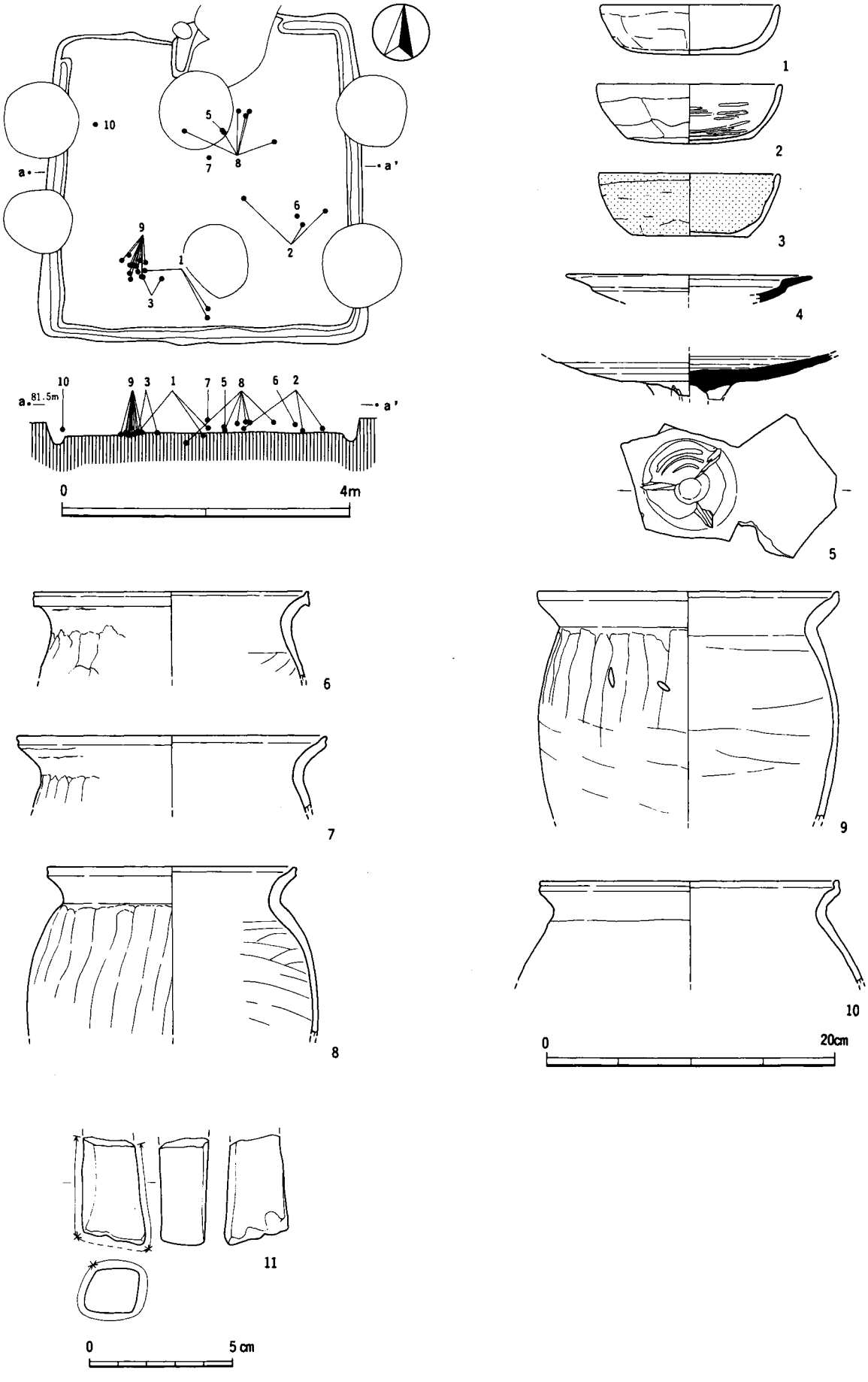
SI 4（第76図、図版8・9・55・65）

SI 5・9と重複する。主軸長3.7m、横軸長4.1m、主軸方位N－62°－E である。床面積は15.17m²、壁高は4cm～30cmを測る。主柱穴は確認できない。出入口ピットを1つ有する。かまどは北西壁中央にある。

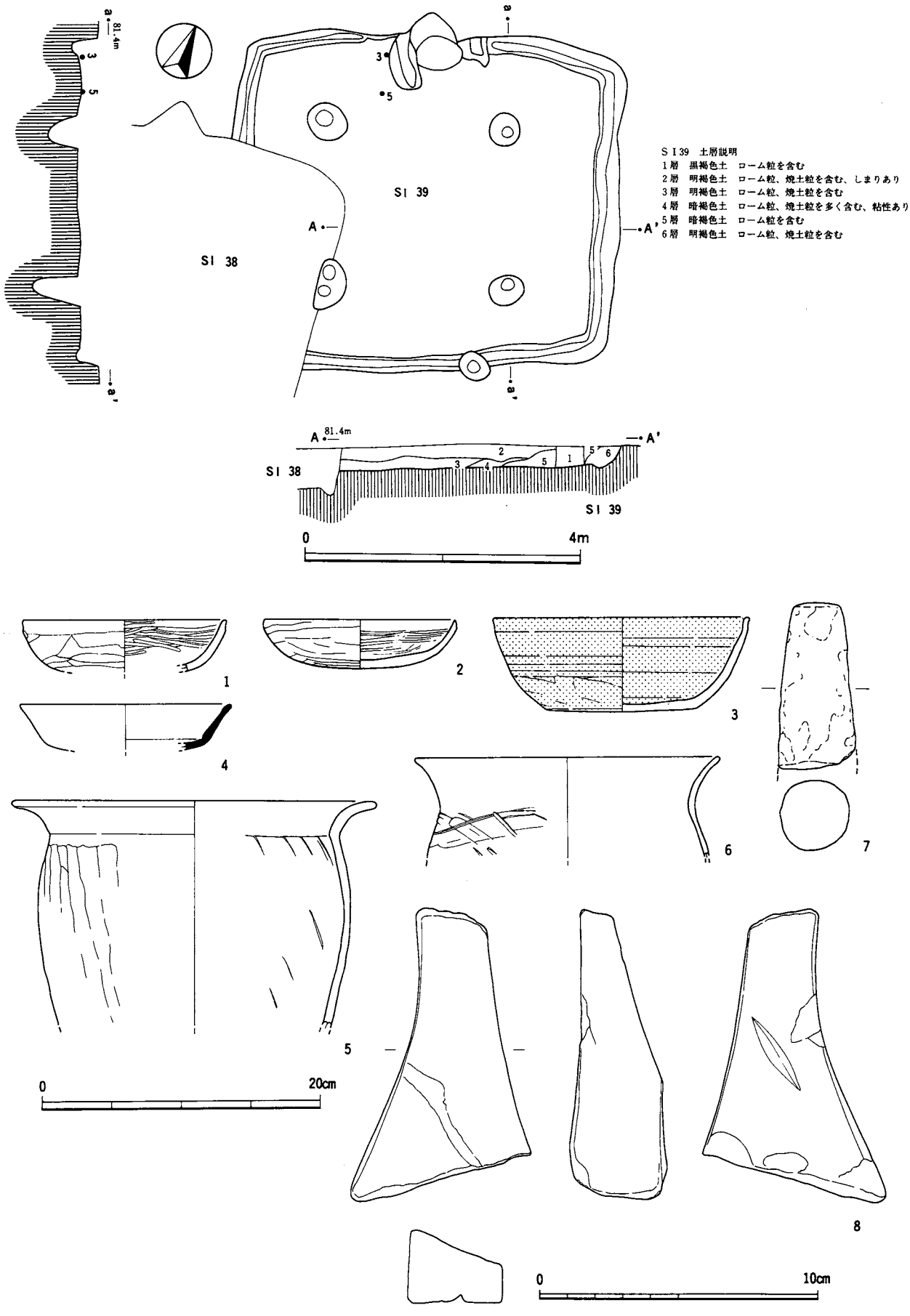
出土土器は総点数685点になる。うち須恵器片は91点（13%）で、須恵器の占める割合が非常に高い。1～10は土師器杯で、1～3は内面をヘラミガキ調整する。1・2は、外面立ち上がり部は回転ヘラケズリで、内面は黒色処理を施す。2の底部は回転糸切り離しである。3の底部は静止糸切り後周辺及び立ち上がり部をヘラ削り調整する。10は体部が緩やかに外反するタイプである。8の底部は回転糸切り離し後周辺をヘラ削り調整、9の体部には「万所」の墨書名が認められる。土師器杯の底部中心にはすべて回転糸切り、又は静止糸切りの痕跡を残す。11～17は須恵器杯で底部はいずれもヘラ削り調整である。15の底部中心には回転糸切り痕がはっきり残っているので、これら須恵器杯はすべて回転糸切り離し後、ヘラケズ



第73図　SI 35



第74図　SI 37


SI 39 土層説明
1層 黒褐色土 ローム粒を含む
2層 明褐色土 ローム粒、焼土粒を含む、しまりあり
3層 明褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
4層 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含む、粘性あり
5層 暗褐色土 ローム粒を含む
6層 明褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
SI 38
SI 39
81.4m
0
4m
20cm
10cm

第75図 SI 39

り調整されたと考えられる。胎土には白色砂粒を多く含んでいる。13・17は体部が途中で内傾し再び外反するタイプである。18は土師器甕で、内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。19は須恵器甑で胎土中に鉄分をかなり多く、また雲母細粒を少々含み、ざらざらした感じである。内面下半は横方向のナデ調整、上半は手の圧痕が明瞭に残る。20・21は鉄製品で、20は環頭の釘、21は先端の断面が鋭角の細長い形状のものである。

SI 6 (第77図、図版8～11・55・56・65)

G6－00グリッド南側に位置する。主軸長4.1m、横軸長4.1m、主軸方位N－60°－Eである。床面積は16.81㎡、壁高は22cm～40cmを測る。主柱穴は確認できない。かまどは北東壁中央にある。

出土土器は総点数261点で、うち須恵器は33点(13%)と多い。1～4は土師器杯で、1は底部回転糸切り後周辺をヘラ削り調整、2は回転ヘラ削り、3は内面を丁寧なヘラミガキ後、赤彩を施す。5～9は須恵器杯で、胎土中には白色砂粒が多量に含まれる。5の体部外面には墨書「[illegible]」が見られる。底部はいずれも回転ヘラ削り調整を施す。9の底部にはヘラ記号が認められる。10は土師器小型の甕か壺と考えられるが、底部に静止糸切り痕を残す。11は滑石製紡錘車で、直径がそれぞれ37㎜と42㎜で、厚さ11㎜、中央の孔の直径は7㎜を測る。12は鉄製の刀子で2つに割れているが、ほぼ完形である。

SI 7 (第78図、図版8～10・56・66)

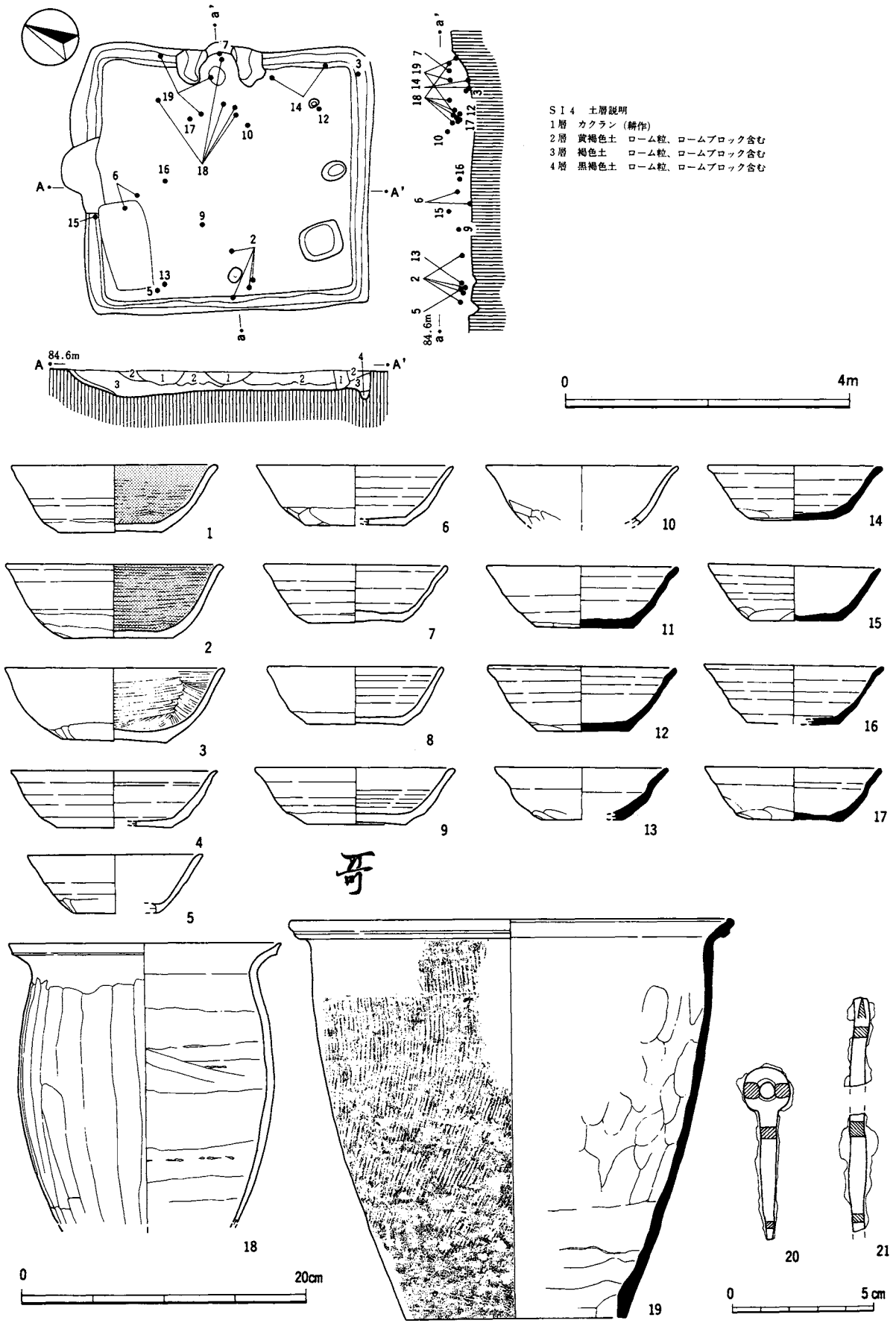
南西側でSB 4と重複する。主軸長4.4m、横軸長4.6m、主軸方位N－59°－Eである。床面積は20.24㎡、壁高は30cm～45cmを測る。主柱穴は6本を確認している。北側コーナーの周溝中に小ピットを確認している。また、かまどは北東壁中央にある。

出土土器の総点数は569点で、うち須恵器は31点(5%)である。実測遺物はすべて覆土中の出土である。1は土師器杯で、2・3・4・5は須恵器杯である。4の底部にはヘラ記号が確認できる。胎土は粘性が弱いためか器面全体にヒビがはいる。5は内面に粘土紐の接合に伴う凹凸が認められるが、凸部が磨滅している。6・7・8・9は土師器甕で、6の口縁部は須恵器に顕著に見られるタイプである。7及び9には口頸部に粘土接合痕が明瞭に認められる。9は総じて薄手で粗雑な作りである。10は須恵器甕の肩部片である。胎土は白色で異物を含みザックリした感じである。焼成は良好でかなり硬質である。11は須恵器杯蓋で、扁平の宝珠つまみが付く。12は青銅製の丸鞆で幅35㎜、高さ21㎜、厚さ10㎜で、裏側に鋲が2つ確認できる。

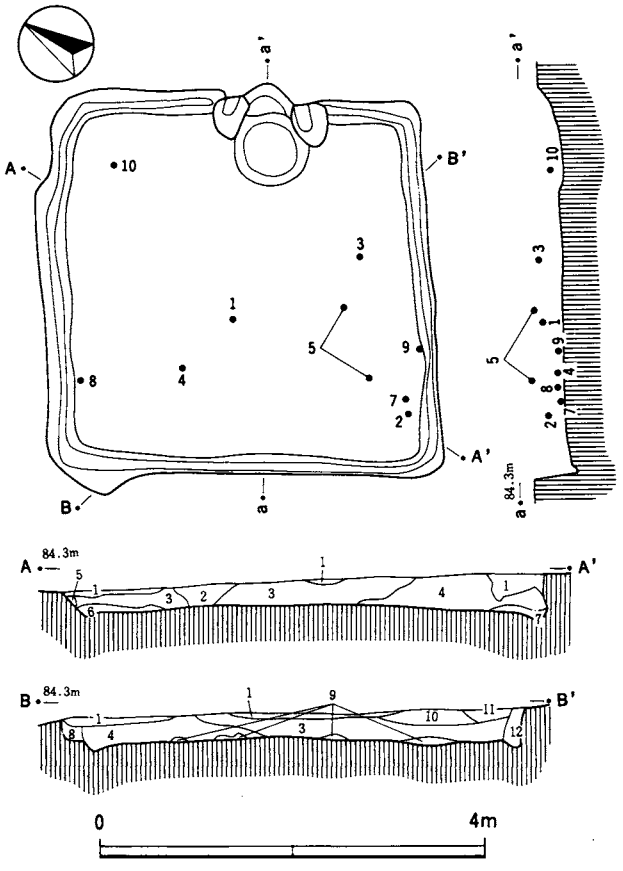
SI 8 (第79図、図版8・56・66)

SI 5中に包含され、床の輪郭がかろうじて判別できる程度である。SI 5より新しいが、調査段階では同時に調査したため、壁の状態は全く分からない。主軸長3.6m、横軸長3.6m、主軸方位N－12°－E である。床面積は12.96㎡を測る。かまどは北西壁中央にある。

出土土器の総点数は506点で、うち須恵器は38点(8%)である。1は土師器杯、底部は回転糸切り離しで、内面は器面がボロボロになっている。2は須恵器杯で、底部は回転糸切り離し、色調は赤褐色～赤色を呈する。3は須恵器杯で底部はヘラ削り調整で、底部及び口縁部は磨滅している。4は須恵器長頸瓶の口縁部破片で内面には灰釉が付着している。5は須恵器高台付杯で、高台は付け高台である。胎土は非常に緻密で陶器質である。6～12は土師器甕又は甑の上部片である。いずれも口頸部を体部より直角に外側に折り曲げている。9は土師器甕で、口縁部は高回転の轆轤を使用しているためか、非常に鋭い印象である。12は須恵器模倣の土師器甕で、微砂粒を含み器面はザラザラしている。内面は器面の剥離が著しい。

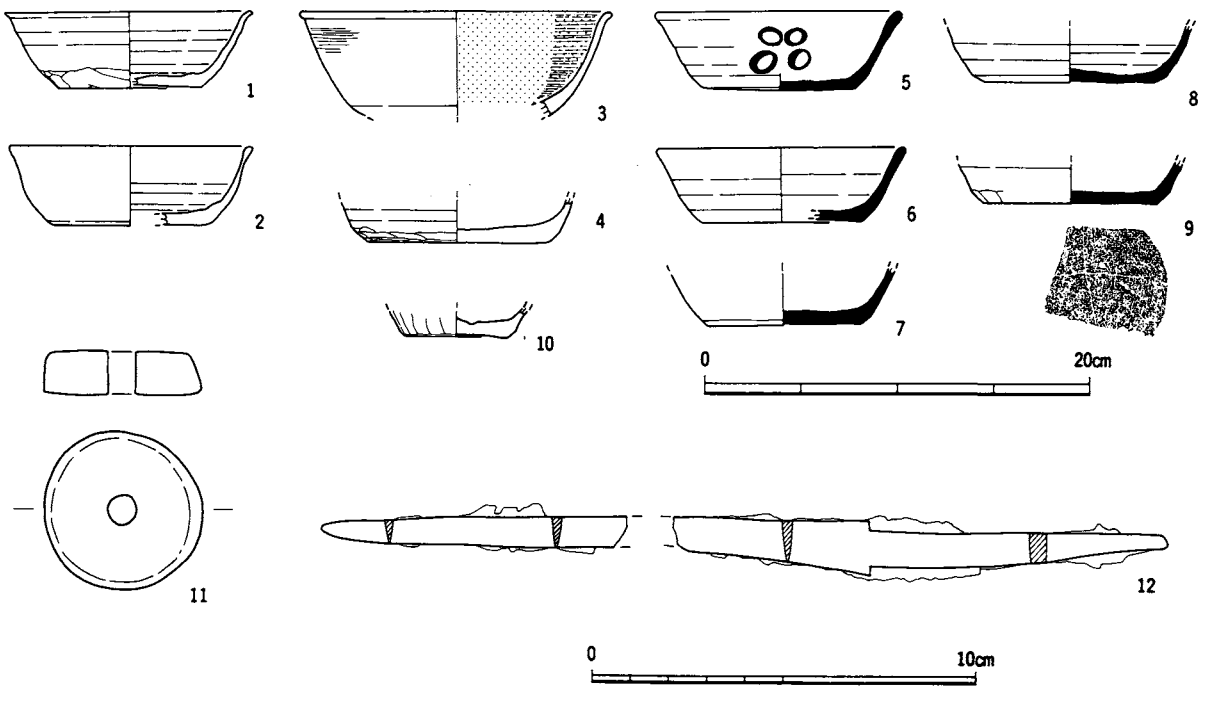

SI4 土層説明
1層 カクラン（耕作）
2層 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
3層 褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
4層 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
84.6m
0
4m
0
20cm
0
5cm

第76図 SI 4

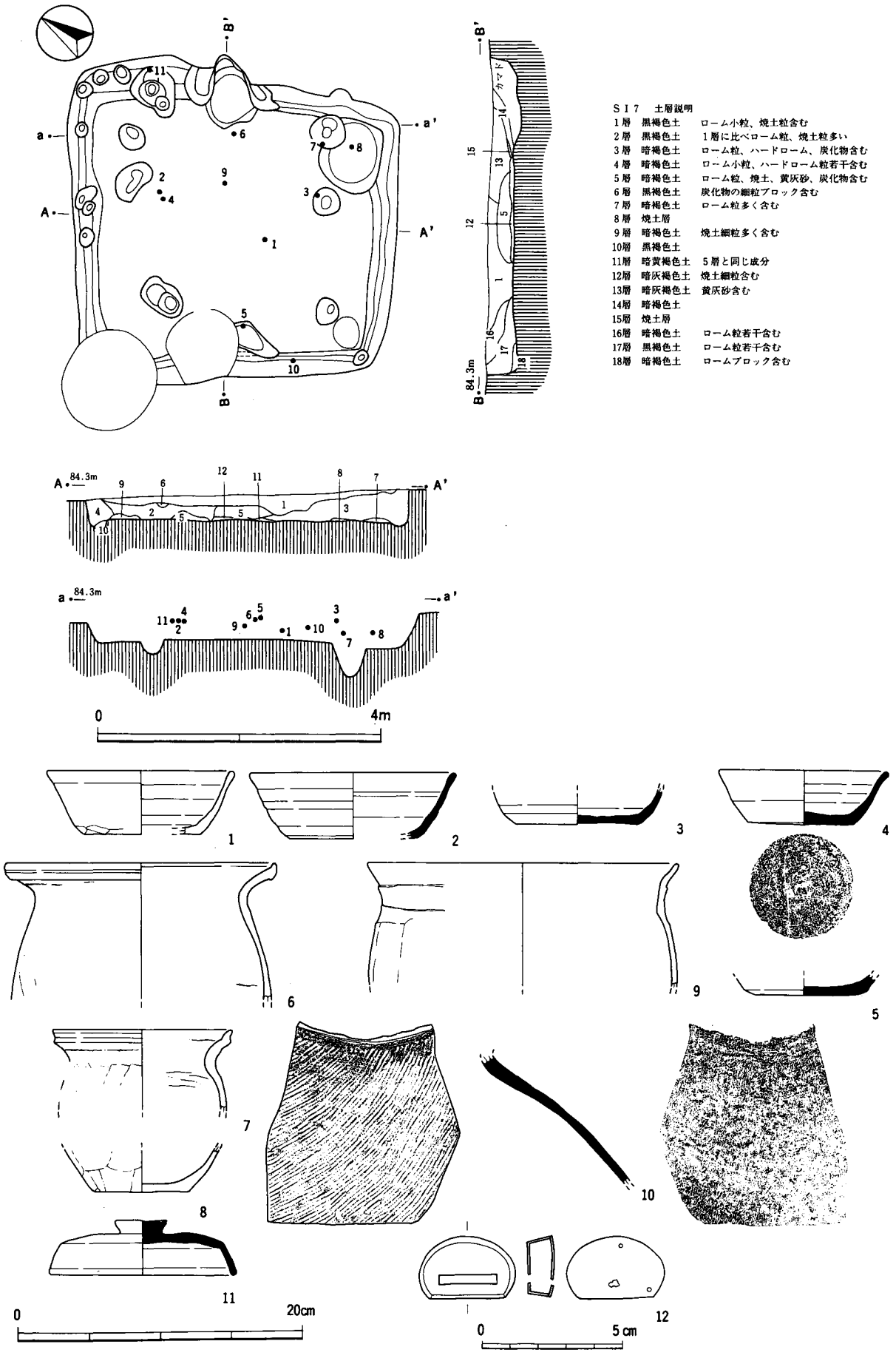


ＳＩ６　土層説明

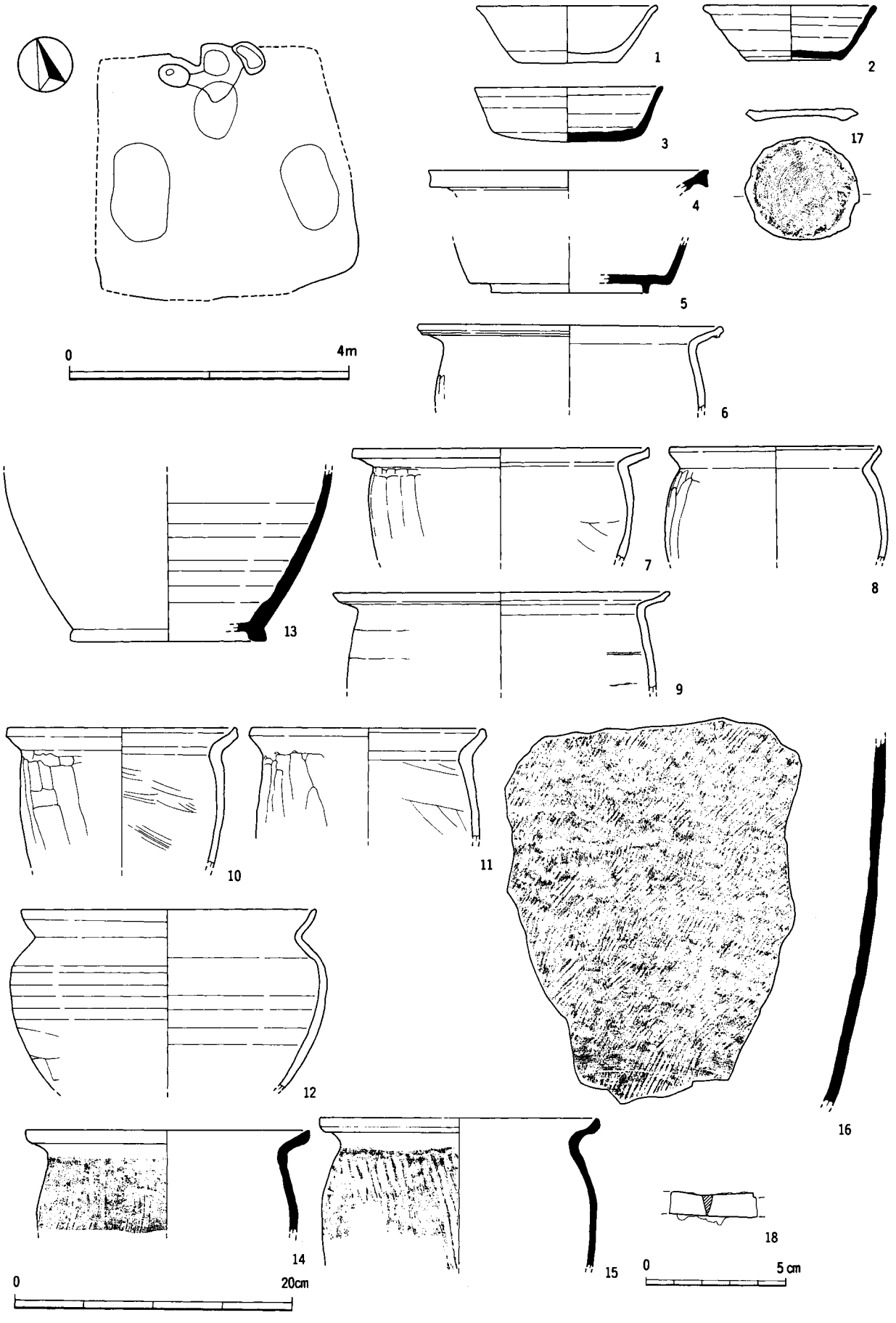
1層	暗灰褐色土	黄白色土粒含む、しまり甘い
2層	暗褐色土	ローム塊、炭化物粒含む
3層	暗褐色土	ローム塊、炭化物粒含む
4層	褐色土	ローム塊、ローム粒含む
5層	暗黄褐色土	ローム塊含む
6層	暗黄褐色土	ローム塊含む
7層	明褐色土	ローム粒多く含む
8層	明褐色土	ローム塊、ローム粒含む
9層	暗黄褐色土	ローム塊、ローム粒多く含む
10層	黒褐色土	ローム粒若干含む
11層	明褐色土	焼土塊、白灰色粘土含む
12層	不明	



第77図　ＳＩ６


S I 7　土層説明
1層　黒褐色土　ローム小粒、焼土粒含む
2層　黒褐色土　1層に比べローム粒、焼土粒多い
3層　暗褐色土　ローム粒、ハードローム、炭化物含む
4層　暗褐色土　ローム小粒、ハードローム粒若干含む
5層　暗褐色土　ローム粒、焼土、黄灰砂、炭化物含む
6層　黒褐色土　炭化物の細粒ブロック含む
7層　暗褐色土　ローム粒多く含む
8層　焼土層
9層　暗褐色土　焼土細粒多く含む
10層　黒褐色土
11層　暗黄褐色土　5層と同じ成分
12層　暗灰褐色土　焼土細粒含む
13層　暗灰褐色土　黄灰砂含む
14層　暗褐色土
15層　焼土層
16層　暗褐色土　ローム粒若干含む
17層　黒褐色土　ローム粒若干含む
18層　暗褐色土　ロームブロック含む
カマド
84.3m
0
4m
20cm
5cm

第78図　SI 7



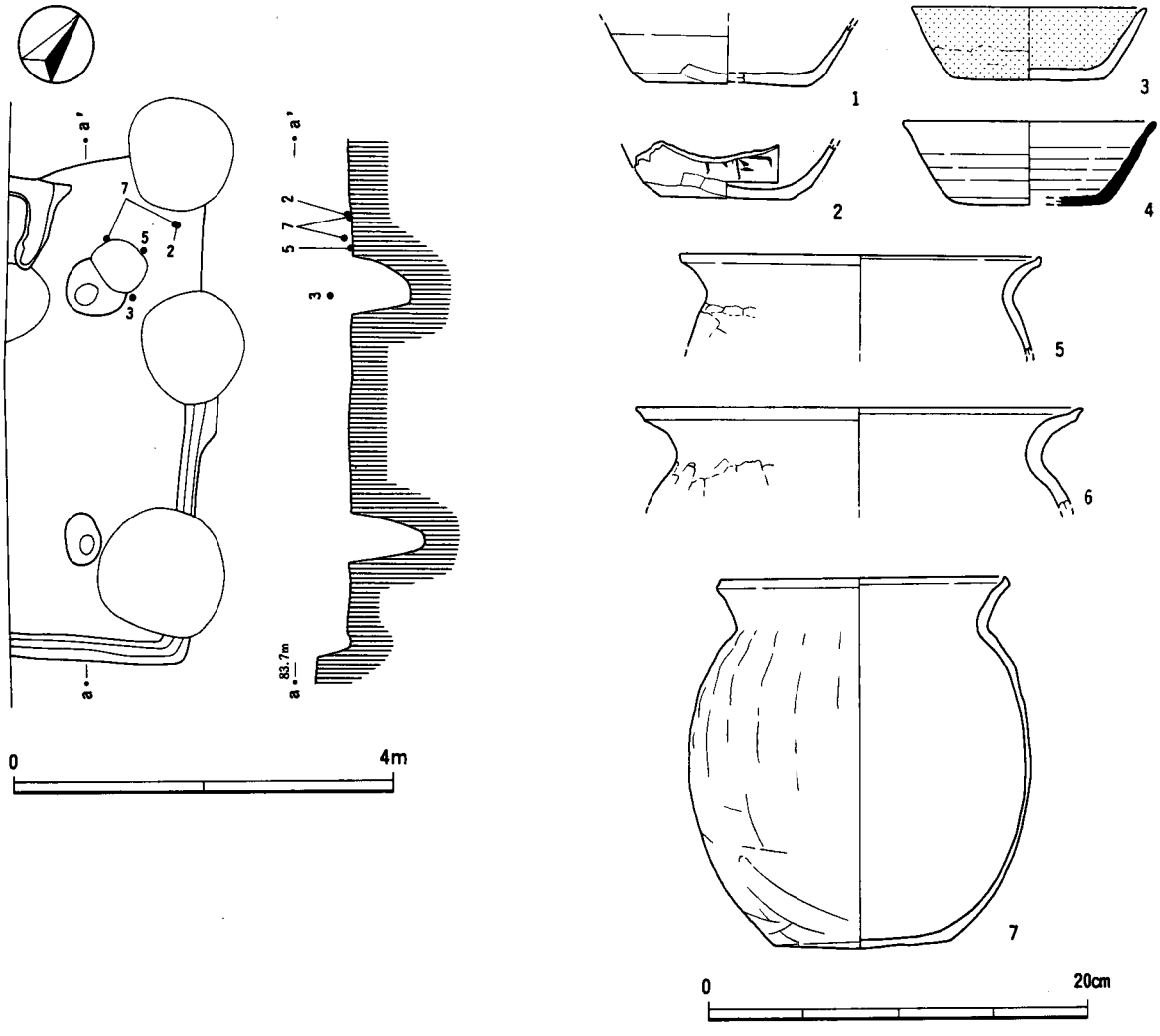
第79図　SI 8

14・15は須恵器甕である。外面に平行タタキメを残す。13は須恵器長頸瓶の胴部から底部の破片である。4と胎土が似ているため同一個体の可能性がある。16は須恵器甕の胴部片で、胎土中には大粒の砂粒を多量に含み、県内産と考えられる。内外面とも黒色を呈する。17は土師器杯底部片を再利用した円盤で、底部には回転糸切り痕を残す。18は鉄製の刀子片である。

SI 16（第80図、図版11・13・57）

G5－00グリッドに位置する。調査区の境界に当たり、大部分は調査区外になる。SB 2と重複する。主軸長5.2m、横軸長5.2m、主軸方位N－34°－Wである。床面積は27.04m²、壁高は0cm～30cmを測る。主柱穴は2本のみ確認した。かまどは北西壁中央にある。

出土土器の総点数は638点で、そのうち須恵器は15点（2％）になる。実測可能な土器数は比較的少ない。2は土師器杯で体部外面に「万所」の墨書の一部を確認できる。3は土師器杯で、全面を刷毛で赤彩している。底部はヘラ削り調整である。4は須恵器杯で胎土中に白色砂粒を多量に含み粗質である。5・6・7は土師器甕で、7は器厚が非常に薄い作りである。いずれも胴部は丸形で口縁端を上方に鋭角的につまみ上げる。

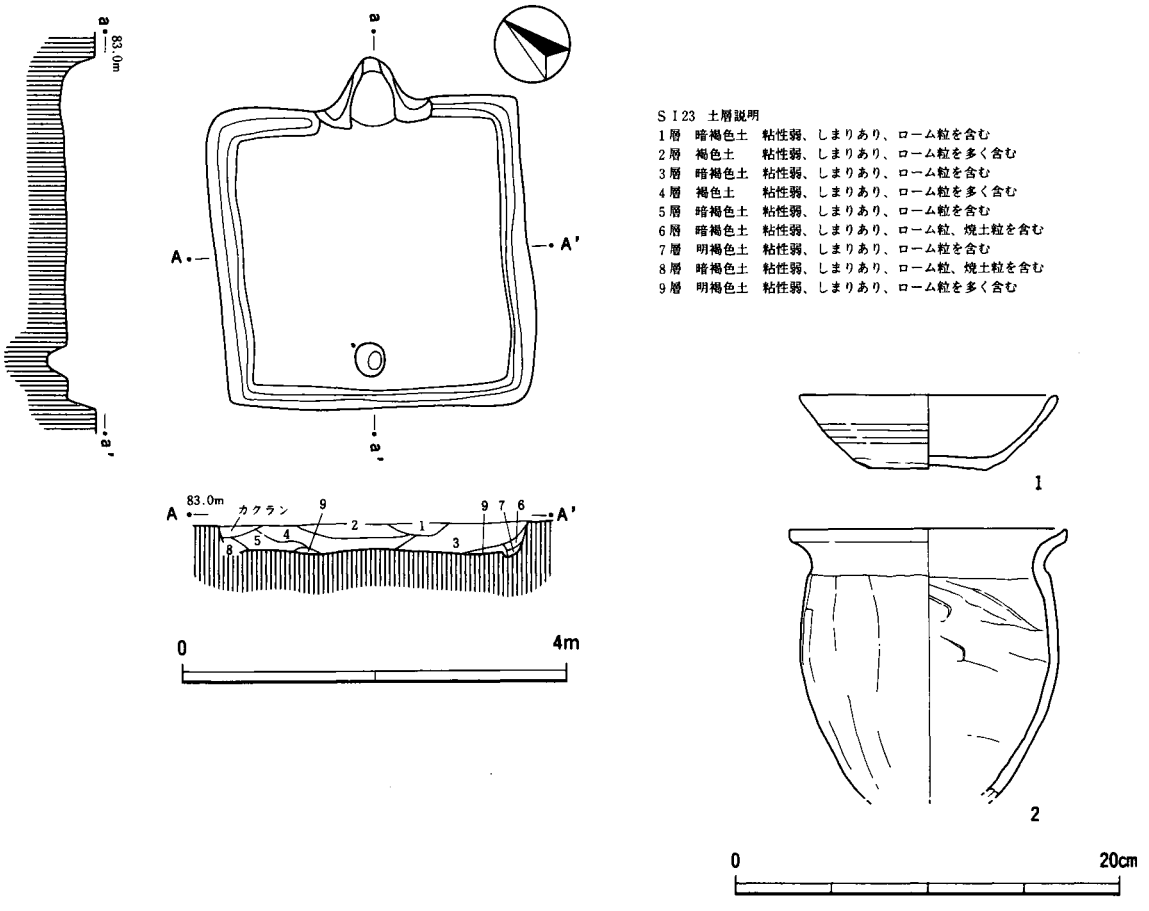


第80図　SI 16

SI 23（第81図、図版15～17・57）

主軸長3.1m、横軸長3.2m、主軸方位N－48°－Eである。床面積は9.92m²、壁高は30cmを測る。主柱穴はない。出入口ピットが1つある。かまどは北西壁中央に位置する。

出土土器総点数は123点である。1は須恵器又は土師器杯で胎土は砂粒を多量に含み、粘性弱い。底部は回転糸切り後立ち上がり部をヘラ削り調整する。2は土師器甕で胎土中には白色砂粒を多量に含む。焼成は良好で硬質である。

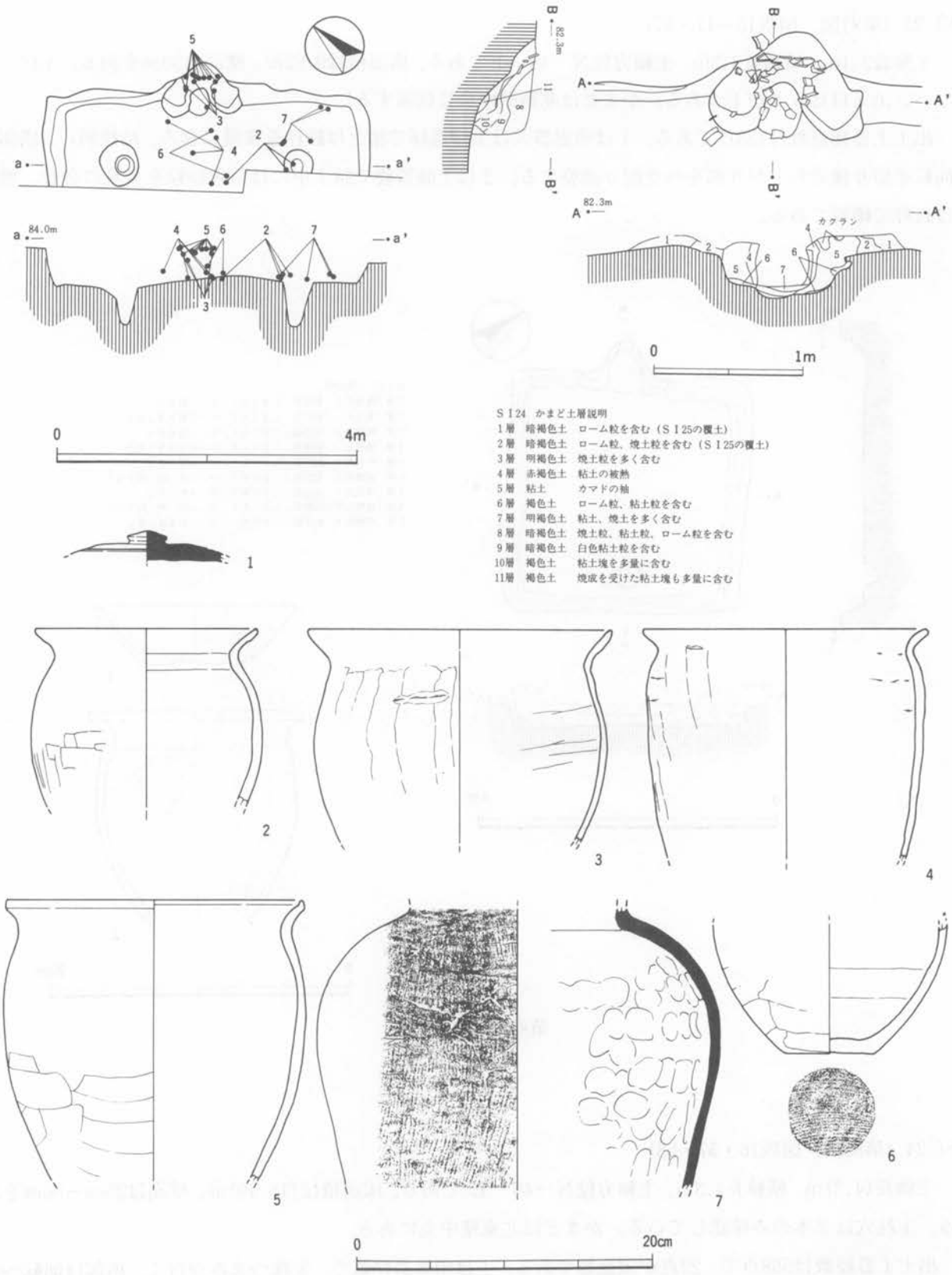


第81図　SI 23

SI 24（第82図、図版16・57・58）

主軸長(4.3)m、横軸長4.3m、主軸方位N－48°－E である。床面積は(18.49)m²、壁高は25cm～50cmを測る。主柱穴は2本のみ確認している。かまどは北東壁中央にある。

出土土器総数は558点で、22点が須恵器である。1は須恵器杯蓋で、宝珠つまみが付く。頂部は回転ヘラ削り調整である。2・3・4・5・6は土師器甕である。4は粘土紐痕が随所に残り、口縁端を含めかなり歪みがある。6の底部は静止糸切り痕を残す。7は須恵器甕片で、内面には細かな指圧痕が入る。胎土中には白色微砂粒を多量に含み、粘性は弱い。外面は灰褐色から褐灰色、内面は灰褐色を呈する。県内産と考えられる土器である。5はかまど上部よりまとまって出土している。



SI24 かまど土層説明

1層	暗褐色土	ローム粒を含む（SI25の覆土）
2層	暗褐色土	ローム粒、焼土粒を含む（SI25の覆土）
3層	明褐色土	焼土粒を多く含む
4層	赤褐色土	粘土の被熱
5層	粘土	カマドの袖
6層	褐色土	ローム粒、粘土粒を含む
7層	明褐色土	粘土、焼土を多く含む
8層	暗褐色土	焼土粒、粘土粒、ローム粒を含む
9層	暗褐色土	白色粘土粒を含む
10層	褐色土	粘土塊を多量に含む
11層	褐色土	焼成を受けた粘土塊も多量に含む

第82図　SI 24

SI 27（第83図、図版18・58）

SI 28と完全に重複し、一回り小さくなる。主軸長2.6m、横軸長3.0m、主軸方位N－25°－Wである。床面積は7.8m²、壁高は20cmを測る。主柱穴はない。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総点数は539点である。1・2・3・4は高台のない土師器皿でかなり扁平である。いずれも残りがよく、1・2は完形品である。底部はヘラ削り調整を施す。胎土中には砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。5・6は土師器杯で、6の内面立ち上がりは緩やかで口縁はやや外反する。いずれも底部はヘラ削り調整を施す。かまどより出土している。7・8・9は土師器甕である。7はほぼ完形品で内面は縦方向のナデ調整である。10は土製紡錘車で、最小径3.1cm、最大径4.1cm、高さ2.9cm、軸径0.6cmを測る。完形品である。

SI 33（第84図、図版20・21・59）

SI 32と重複し、また攪乱も見られる。主軸長3.7m、横軸長3.7m、主軸方位N－26°－Wである。床面積は13.69m²、壁高は30cmを測る。主柱穴はない。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総数は133点で、うち須恵器が15点(11%)を占める。1・2・3・4は土師器杯で、1及び4は立ち上がり部にヘラ削りを施し、明瞭な稜を形成する。1は内面に、2は外面にロクロ目が顕著である。3は体部中位まで粗いヘラ削りをする。4の体部外面には墨書「所」がある。5・6は須恵器杯で、5が口縁部が直線的に延びるのに対し、6は口縁部が外反する。5は器面のひび割れが著しい。底部には粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。6の底部はヘラ削り調整を施す。7・8・9は須恵器甕片で、8の内面には指圧痕が残る。また、体部外面上半部は叩き、底部近くは叩き後ヘラ削り調整を施す。9の底部にはヘラ記号を残す。須恵器中には微砂粒を多量に含み、すべて県内産と考えられる。

SI 38（第85図、図版24・59）

D3－00グリッド東側に位置する。北東コーナーでSI 39と重複する。主軸長4.9m、横軸長4.7m、主軸方位N－11°－Wである。床面積は23.03m²、壁高は50cmを測る。主柱穴は4本である。出入口ピットを1つ有する。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総数は1,673点と多く、うち須恵器は191点(11%)を占める。1・2・3・4・5・6は土師器杯で、4を除き底部はヘラケズリ調整を施す。6は内面を丁寧なヘラミガキ調整を施し、中心部がやや盛り上がっている。また、内外面に焼成後につけられたヘラ記号が認められる。7は土師器甕であるが、肩部付近は器面が剝落している。8は鉄製の刀子片である。

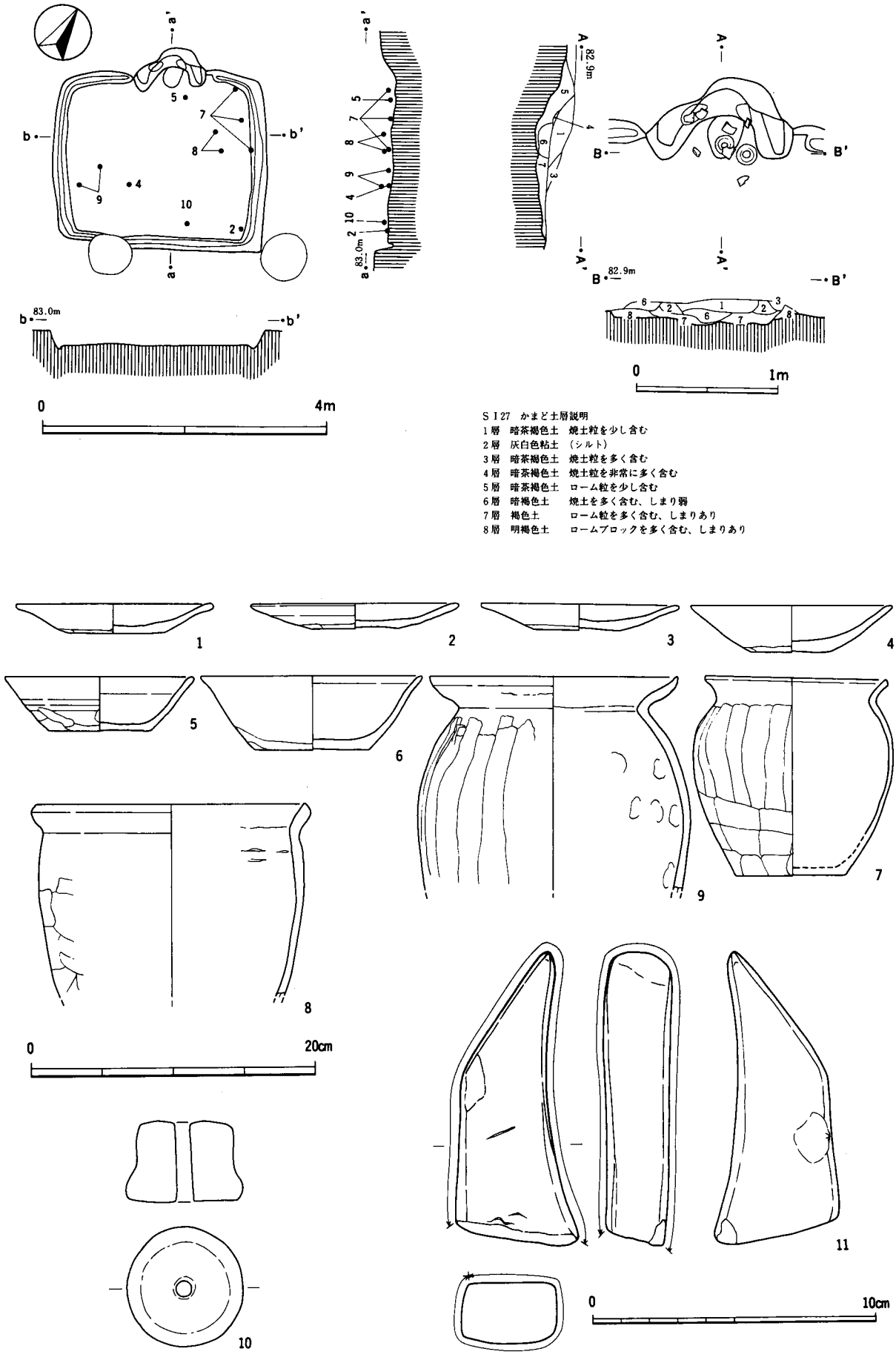
SI 41（第86図、図版60）

北西コーナーが攪乱しており、かまども確認できない。主軸長6.5m、横軸長6.5m、主軸方位N－30°－Wである。床面積は42.25m²、壁高は35cm～40cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央にあったと考えられる。

出土土器総数は1,152点で、うち須恵器は50点である。1・2は土師器杯で、1は外面を口縁部近くまでヘラ削り調整を施す。内面にヘラミガキはないが、丁寧なナデ仕上げである。2は内面をヘラミガキ調整する。3は土師器碗の底部で、半球形を呈する。4は土師器高台付杯で、足の開く非常に高台の高い器形である。他の遺物に比べて新しい。

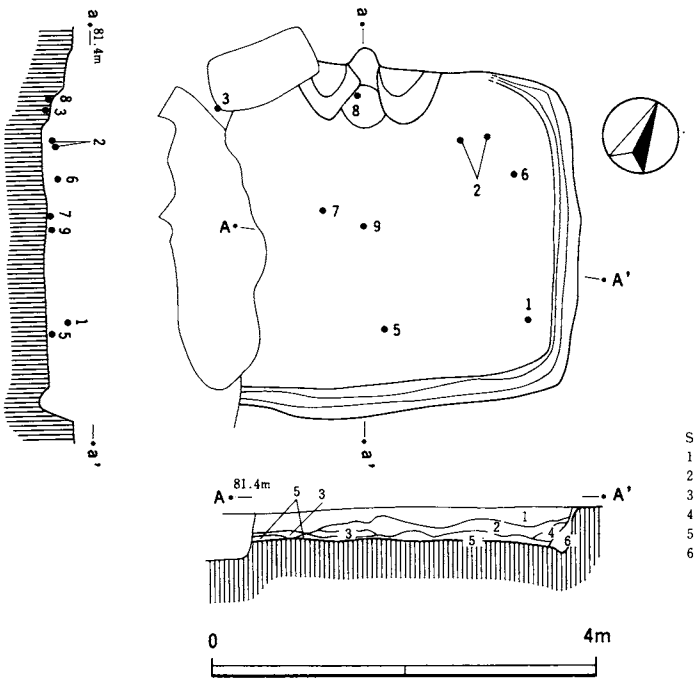
SI 44（第87図、図版19・59・60）

SI 45と重複する。主軸長3.1m、横軸長3.5m、主軸方位N－10°－Wである。床面積は10.85m²、壁高は

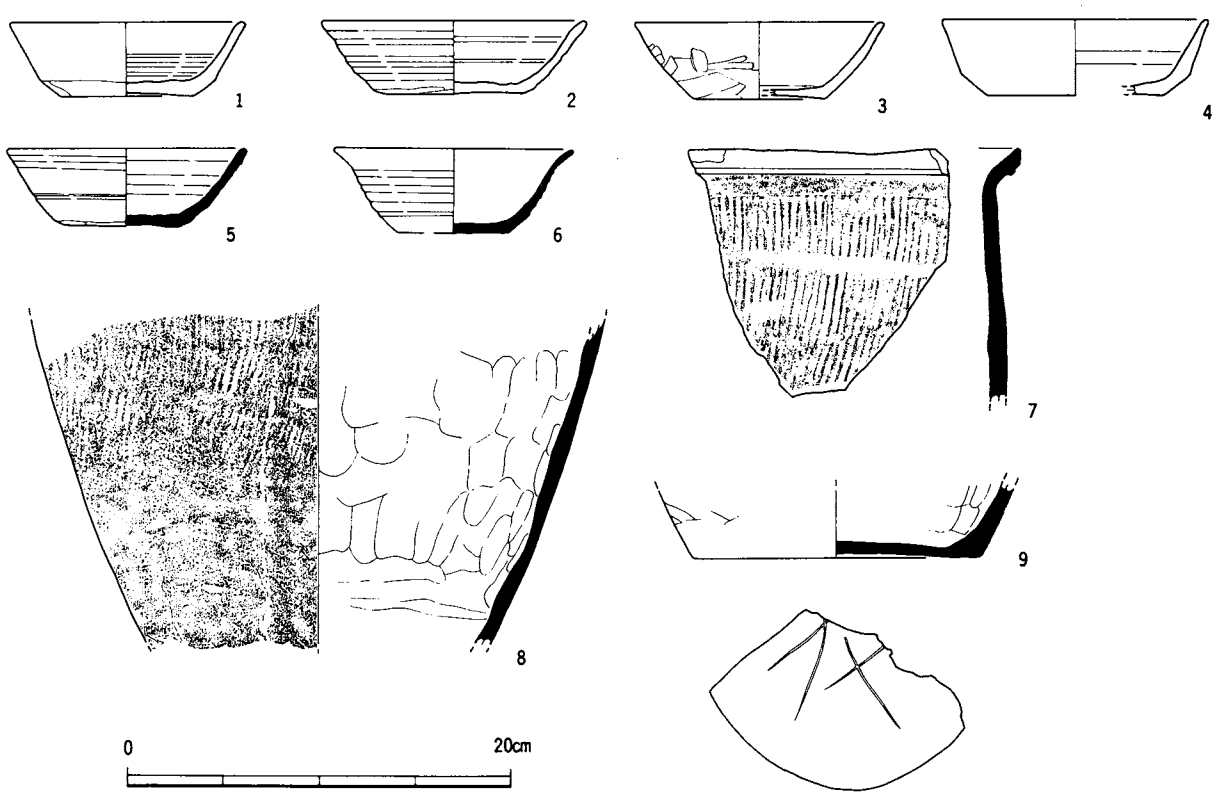


SI27 かまど土層説明
1層 暗茶褐色土 焼土粒を少し含む
2層 灰白色粘土 (シルト)
3層 暗茶褐色土 焼土粒を多く含む
4層 暗茶褐色土 焼土粒を非常に多く含む
5層 暗茶褐色土 ローム粒を少し含む
6層 暗褐色土 焼土を多く含む、しまり弱
7層 褐色土 ローム粒を多く含む、しまりあり
8層 明褐色土 ロームブロックを多く含む、しまりあり

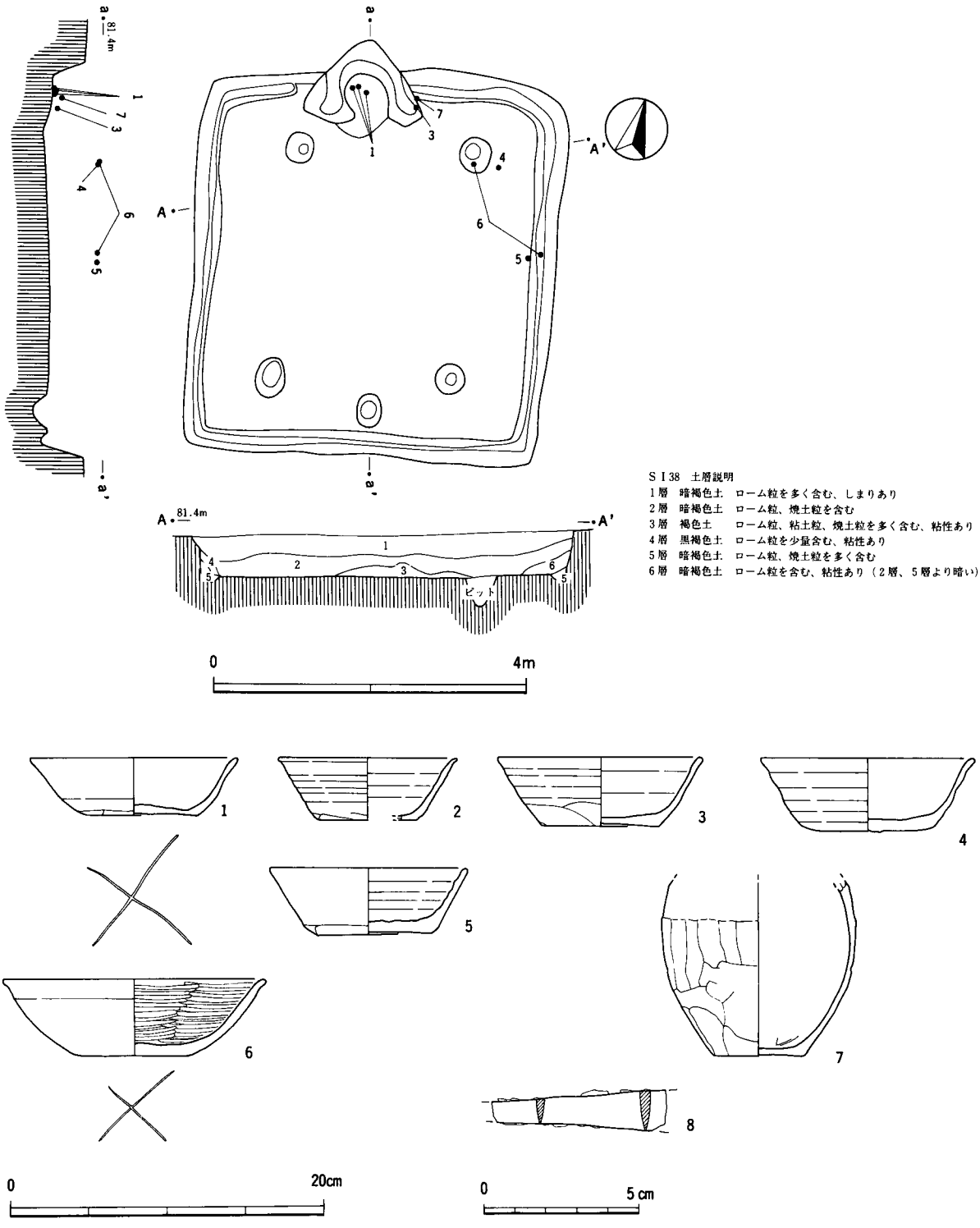
第83図 SI 27



S I 33　土層説明
1層　褐色土　　ローム粒を多く含む、しまり強
2層　黒褐色土　ローム粒、粘土粒を含む
3層　暗褐色土　ローム粒、粘土粒を多く含む
4層　褐色土　　ローム粒を多く含む
5層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を含む
6層　明褐色土　ローム粒を多く含む

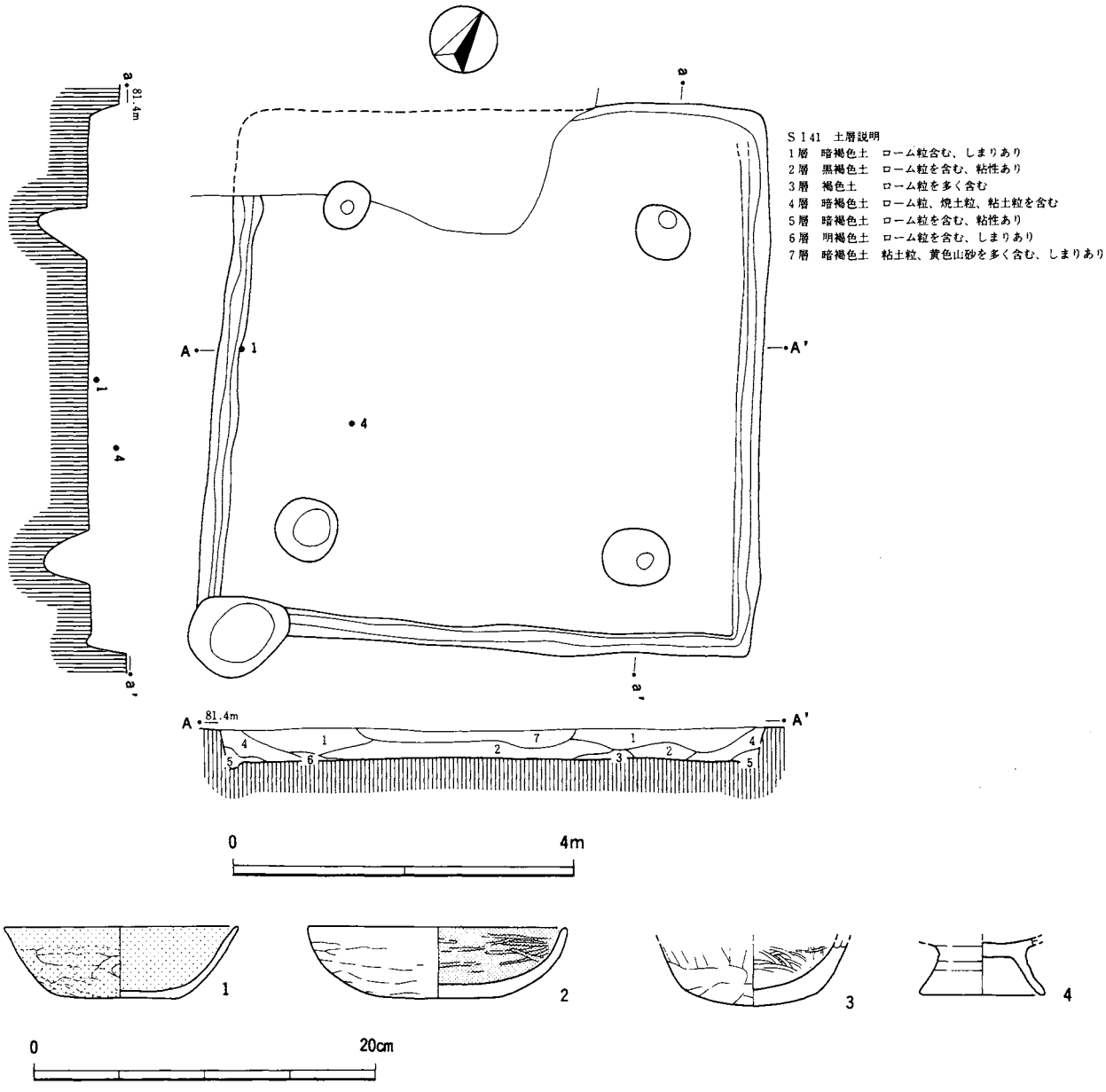


第84図　SI 33



SI38 土層説明
1層 暗褐色土 ローム粒を多く含む、しまりあり
2層 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
3層 褐色土 ローム粒、粘土粒、焼土粒を多く含む、粘性あり
4層 黒褐色土 ローム粒を少量含む、粘性あり
5層 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含む
6層 暗褐色土 ローム粒を含む、粘性あり（2層、5層より暗い）

第85図 SI 38



第86図 SI 41

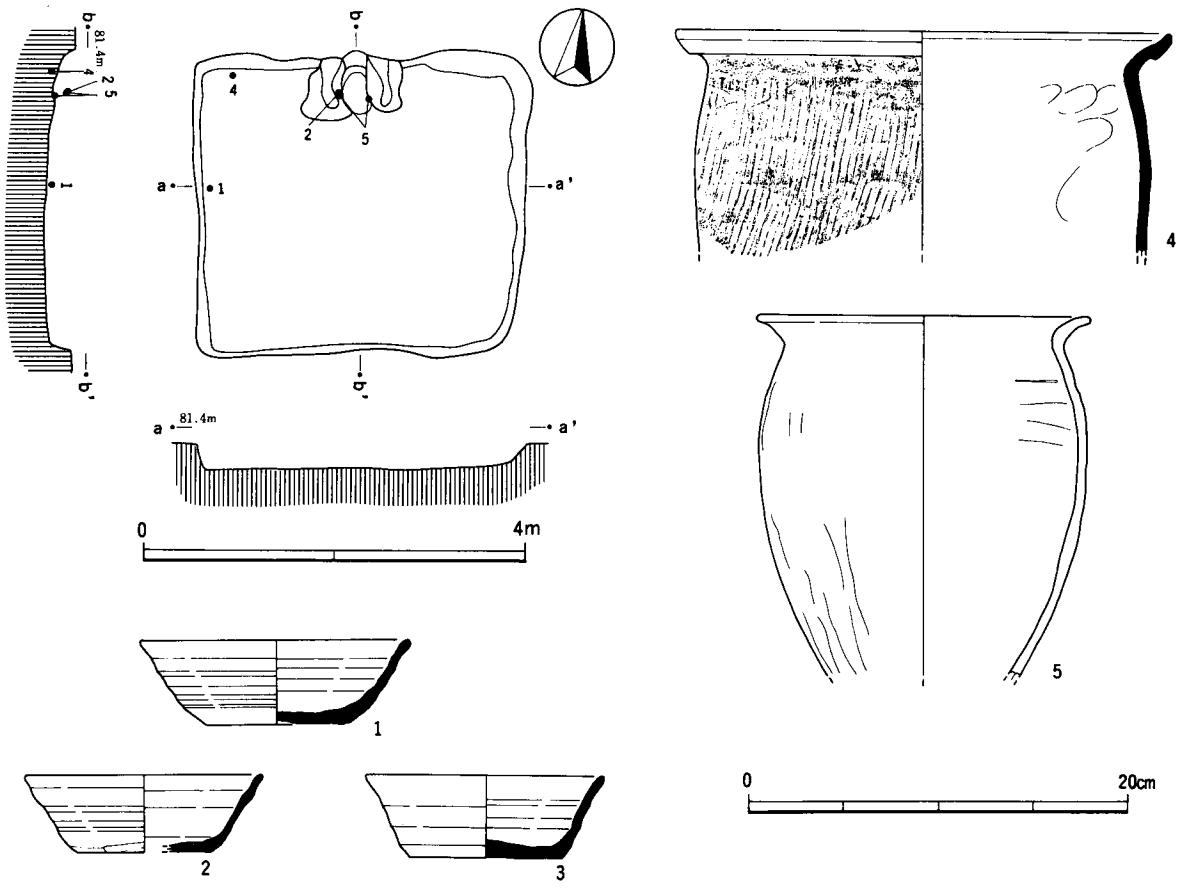
25cmを測る。主柱穴はない。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総数は257点で、うち須恵器が31点で全体の12%を占める。1・2・3とも須恵器杯で、底部立ち上がり部とも回転ヘラ削りである。いずれも県内産と考えられる。4は須恵器甕で、内面には指圧痕が明瞭に残る。5は土師器甕で外面はヘラ削り後ナデているのでなめらかである。

SI 46（第88・89図、図版19・60・61）

一部調査区域外になる。主軸長4.9m、横軸長5.1m、主軸方位N－13°－Wである。床面積は24.99m²、壁高は30cm～40cmを測る。主柱穴は4本である。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総数は857点で、うち須恵器は104点(12%)を占める。1・2・3・4・5は土師器杯で体部が立ち上がりから口縁部にかけて緩やかに外反する。3は内面に粗いヘラミガキ調整を施す。外面には口縁部が外反する位置に明瞭な段差を形成する。5は内面ヘラミガキ調整、外面には「所」の墨書が残る。恐



第87図　SI 44

らく「万所」と記されていたのであろう。6・7・10は須恵器甕である。6は外面には平行叩き目を間隔を空けて擦り消している。また、下半部はヘラケズリ調整を施す。内面には指圧痕を残す。7も6同様内面は底部が指ナデ、上部は指圧痕を残す。10はバケツ状の器形で、内面にはヘラミガキを施す。9の土師器甕の底部には編み物状の下敷き痕が残る。11は軟質砂岩を削り出した支脚片である。被熱しているため、表面は鈍い橙色を呈する。12・13は鉄製の刀子片である。

SI 47（第90図、図版26・60）

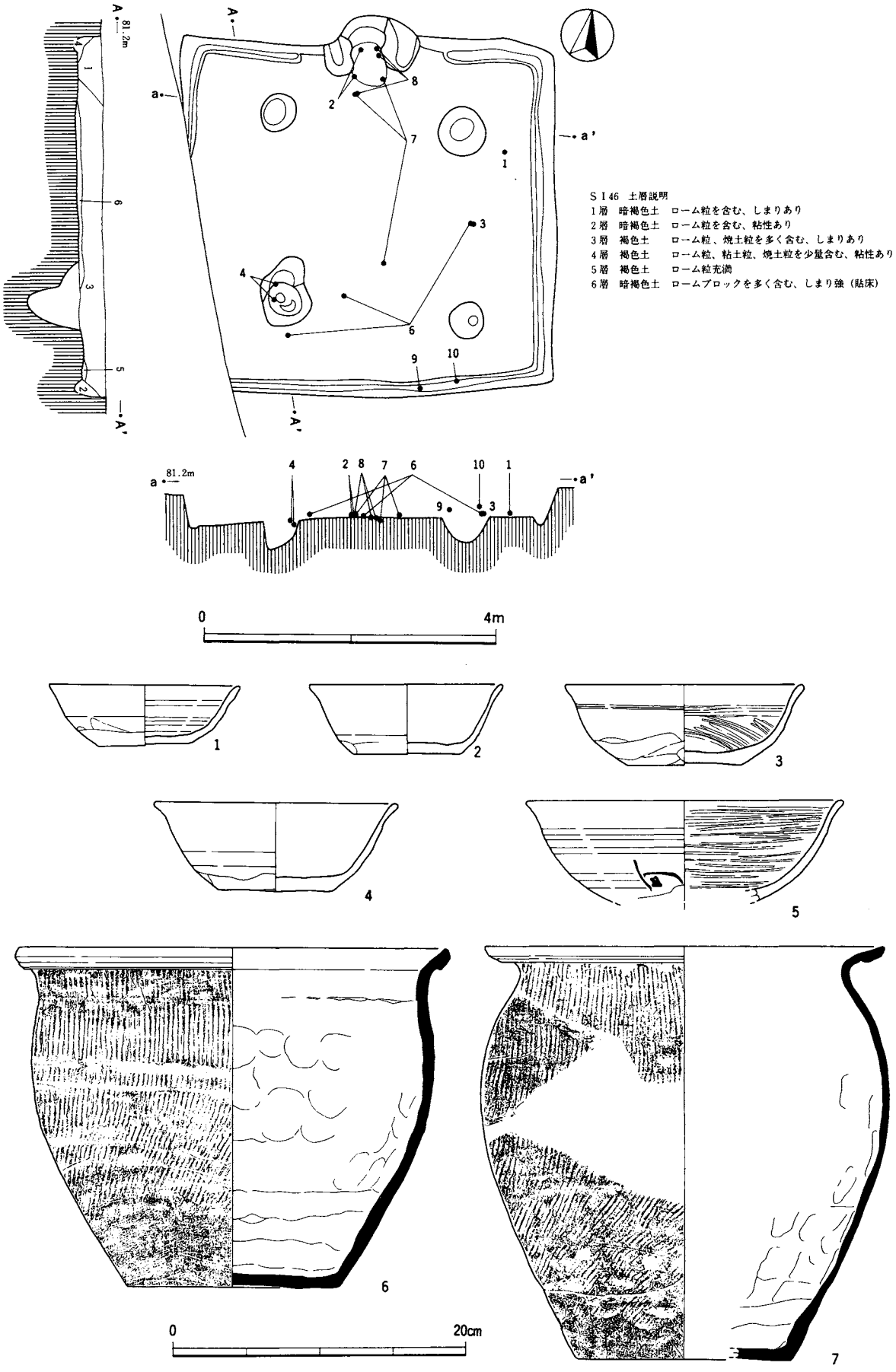
E4－00グリッドの東側に位置する。大半が調査区外になる。北東コーナーは攪乱されている。主軸長4.2m、横軸長4.2m、主軸方位N－13°－Wである。床面積は17.64m²、壁高は15cmを測る。主柱穴は確認されない。かまどは北西壁中央にある。

出土土器総数は247点で、うち須恵器は21点である。1・2・3は土師器杯で、1は直線的に体部が延びるもの、3は内面をヘラミガキ調整、外面は底部ヘラ削り調整、2は底部回転ヘラ削り調整を施す。

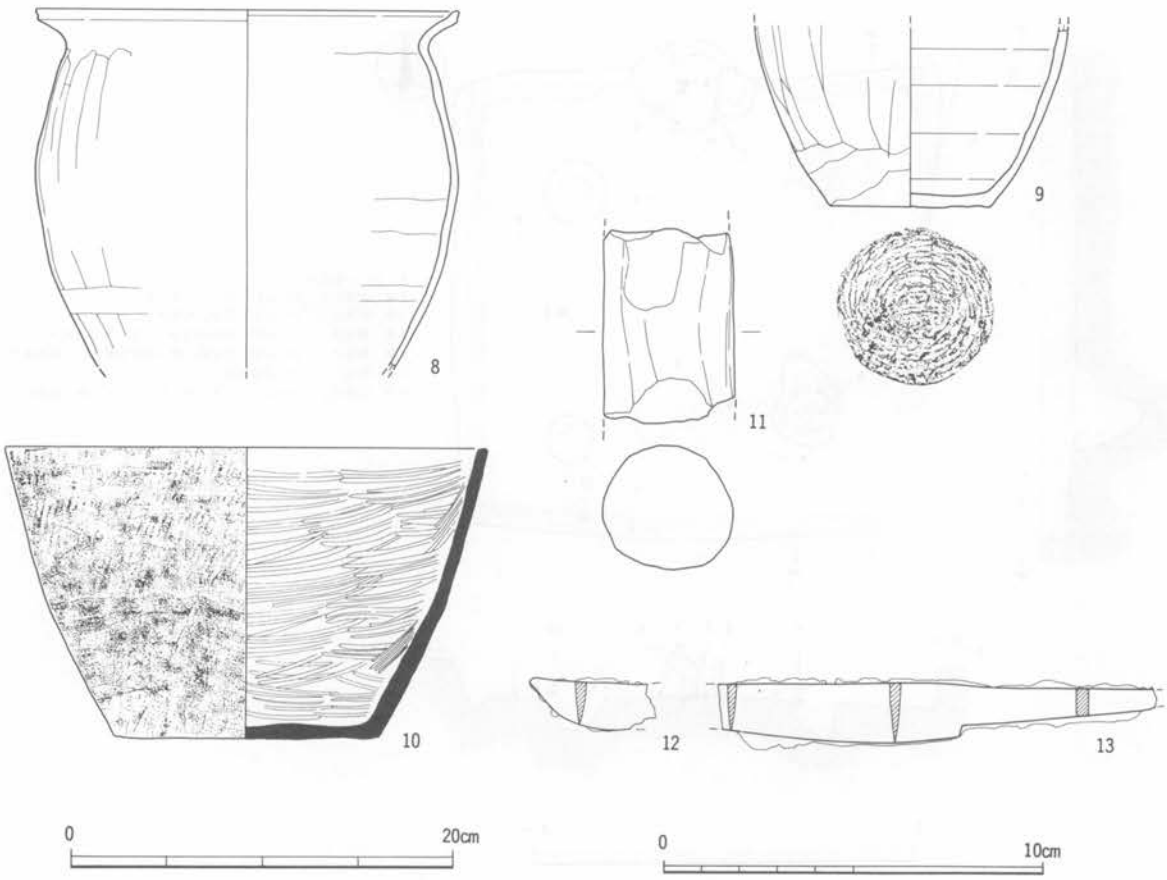
掘立柱建物跡

SB 1（第91図）

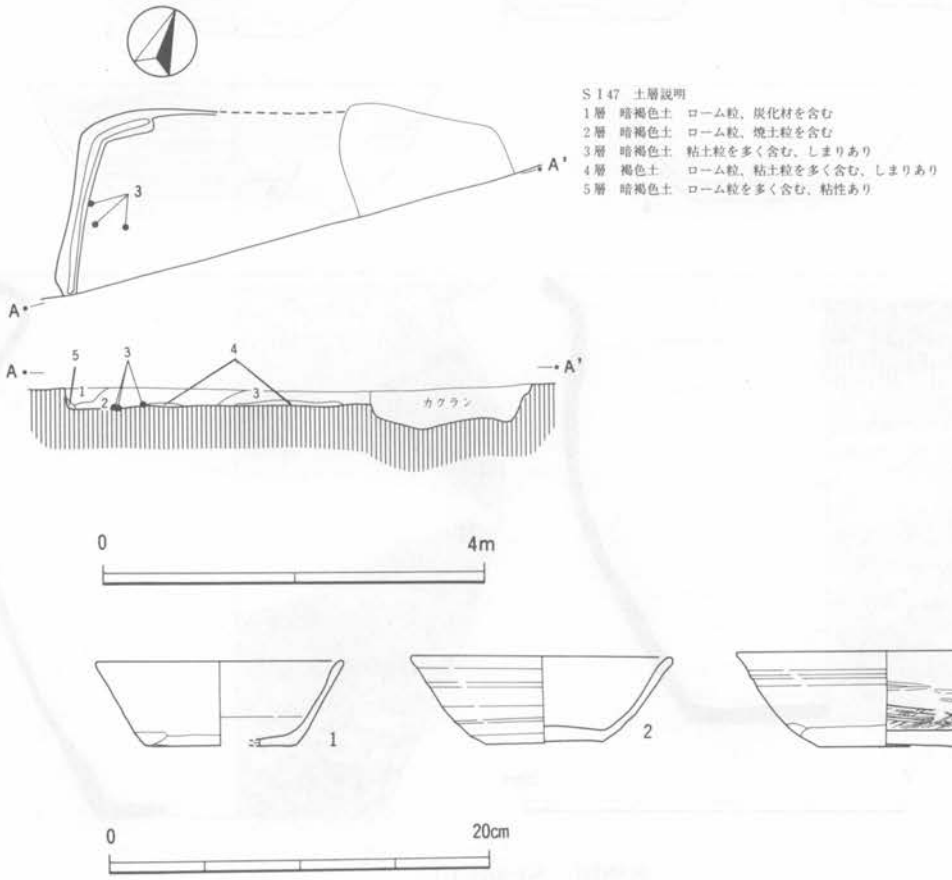
遺跡最南端の斜面際に位置する。一部調査区域外になるのではっきりしたことは言えないが、柱穴の大きさにかなり幅があり、柱穴の並び方もかなり不規則なので、掘立柱建物跡とならない可能性もある。南


SI46 土層説明
1層 暗褐色土 ローム粒を含む、しまりあり
2層 暗褐色土 ローム粒を含む、粘性あり
3層 褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含む、しまりあり
4層 褐色土 ローム粒、粘土粒、焼土粒を少量含む、粘性あり
5層 褐色土 ローム粒充満
6層 暗褐色土 ロームブロックを多く含む、しまり強（貼床）
81.2m
0
4m
20cm

第88図　SI 46(1)



第89図　ＳＩ46(2)



第90 図　SI 47

側梁行１間（2.3m）×西側桁行２間（3.6m）の小規模な建物である。面積は推定8.3㎡である。長軸方位はN－８°－Eである。西側桁行きの柱間寸法は1.8mを測る。柱穴の掘方は円形若しくは楕円形で、直径15㎝～60㎝、深さ15㎝～60㎝を測る。

SB ２（第91図、図版９・13・61）

調査地区南側のG５－00グリッド近くに位置する。南西側が一部調査区域外になるのではっきりしたことは言えないが、北西側梁行２間(4.2m)×北東側桁行４間(8.2m)の総柱建物である。面積は34.44㎡である。桁行主軸方位はN－60°－E である。北東側桁行きの柱間寸法は1.8m～2.4mを測る。柱穴の堀方は円形で、直径110㎝～130㎝、深さ50㎝～60㎝を測り、底面レベルは各柱穴でほぼ一致する。かなり大規模なものである。２つの柱穴で柱痕を確認している。

出土遺物には土師器などがある。１は土師器高台付杯で白色微砂粒や鉄分粒を多く含む。外面下半及び底部は回転ヘラ削り調整を施し、その後高台を接合している。内面は丁寧なヘラミガキ調整である。２は１同様作りが丁寧な土師器杯で、底部は静止糸切り痕を残している。また、外面の立上がり部分はヘラ削り調整を施している。１・２共に焼成は良好で、硬質である。３は須恵器大甕の口縁部破片で、外面に櫛描波状文を残す。胎土には白色微粒子と黒色粒子(鉄分)の吹出しが見られる。県外(東海)産である。

SB ３（第92図、図版８）

遺跡最南端に位置する。一部調査区域外になるのではっきりしたことは言えないが、西側梁行１又は２間（1.8m又は3.6m）×北側桁行２間(4.2m)の総柱建物と考えられる。面積は7.6㎡又は15.1㎡である。桁行主軸方位はN－10°－Wである。北側桁行きの柱間寸法は２m～2.2mを測る。柱穴の配置は南側でやや歪んだ台形である。柱穴の堀方は円形で、直径60㎝～90㎝、深さ20㎝～60㎝を測る。底面に更に小ピットを残すものが３か所見られる。２つの柱穴で柱痕を確認している。

SB ４（第92図、図版８・９）

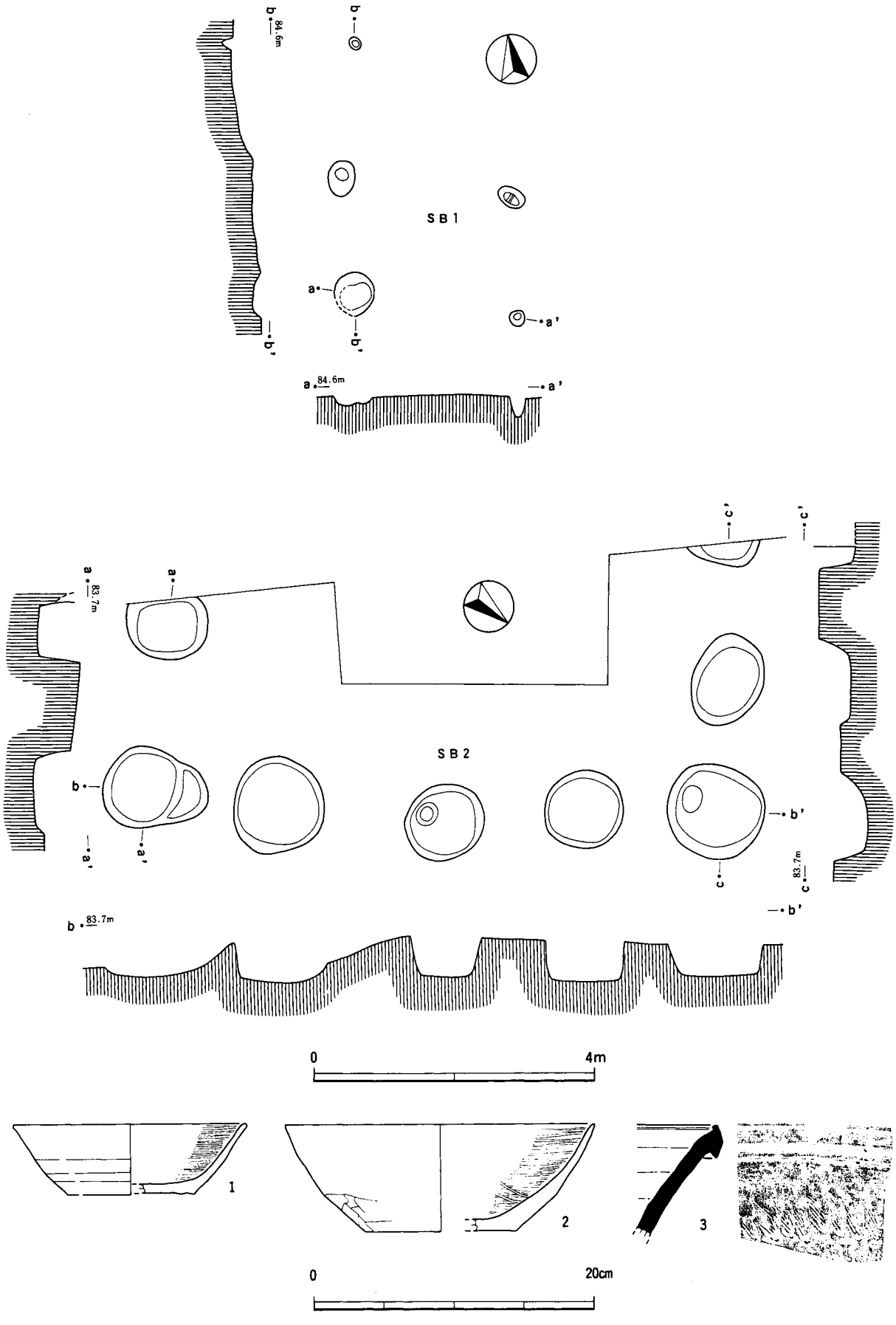
G６－00グリッドの南側に位置する。北側でSI ７と重複し、SI ７よりも新しい。調査時に竪穴住居を先に掘ってしまったため、その規模が不明であるが、かろうじて柱穴の底部を残している。梁行２間(4.2m～4.6m)×桁行３間(5.7m)の総柱建物と考えられる。面積は25.1㎡である。桁行主軸方位はN－60°－Eである。南東側桁行きの柱間寸法は２m～2.6mを測る。柱穴の堀方は円形で、直径70㎝～100㎝、深さ20㎝～60㎝を測る。２つの柱穴で柱の抜取り痕が確認された。

SB ５（第93図、図版９・11）

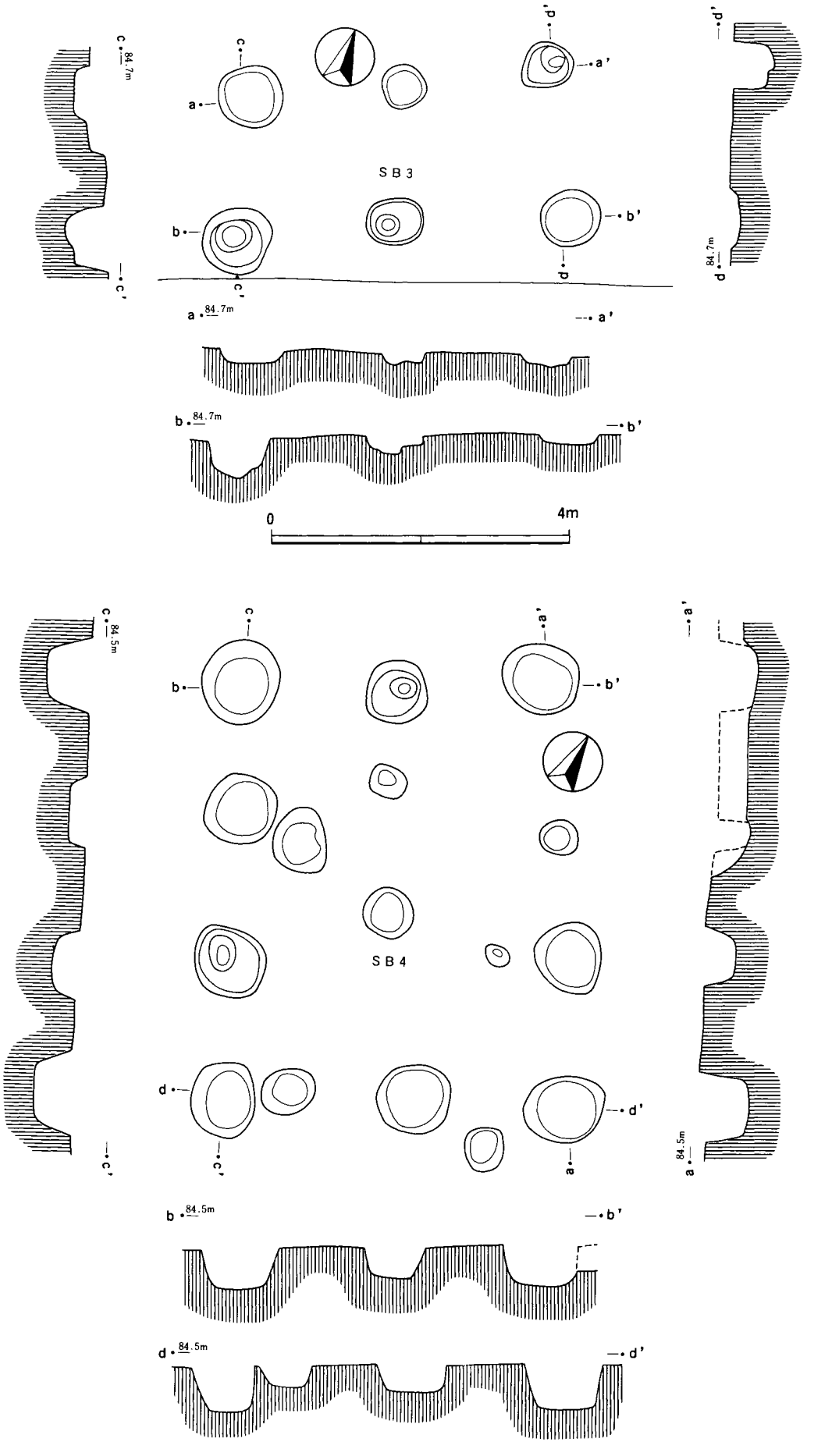
G６－00グリッドの北側に位置する。梁行２間(4.4m)×桁行４間(６m)の身舎と北、東、南各方向に庇を有する比較的規模の大きな建物である。面積は26.4㎡である。桁行主軸方位はN－63°－Eである。桁行きの柱間寸法は2.2m、梁行の柱間寸法は1.5mで、かなりの相違がある。庇の柱穴の位置は身舎のそれとは並ばず、北及び南側庇は４本柱で東側は５本柱となる。柱間距離は南側で1.8m～2.4m、東側で２m～2.5mを測る。身舎柱穴の堀方は円形若しくは楕円形で、直径90㎝～130㎝、深さ30㎝～70㎝を測る。庇の堀方は一つの柱穴を除いて円形で、直径70㎝～100㎝、深さ40㎝を測る。各柱穴から明瞭に柱痕を確認できた。

SB ７（第94図、図版９）

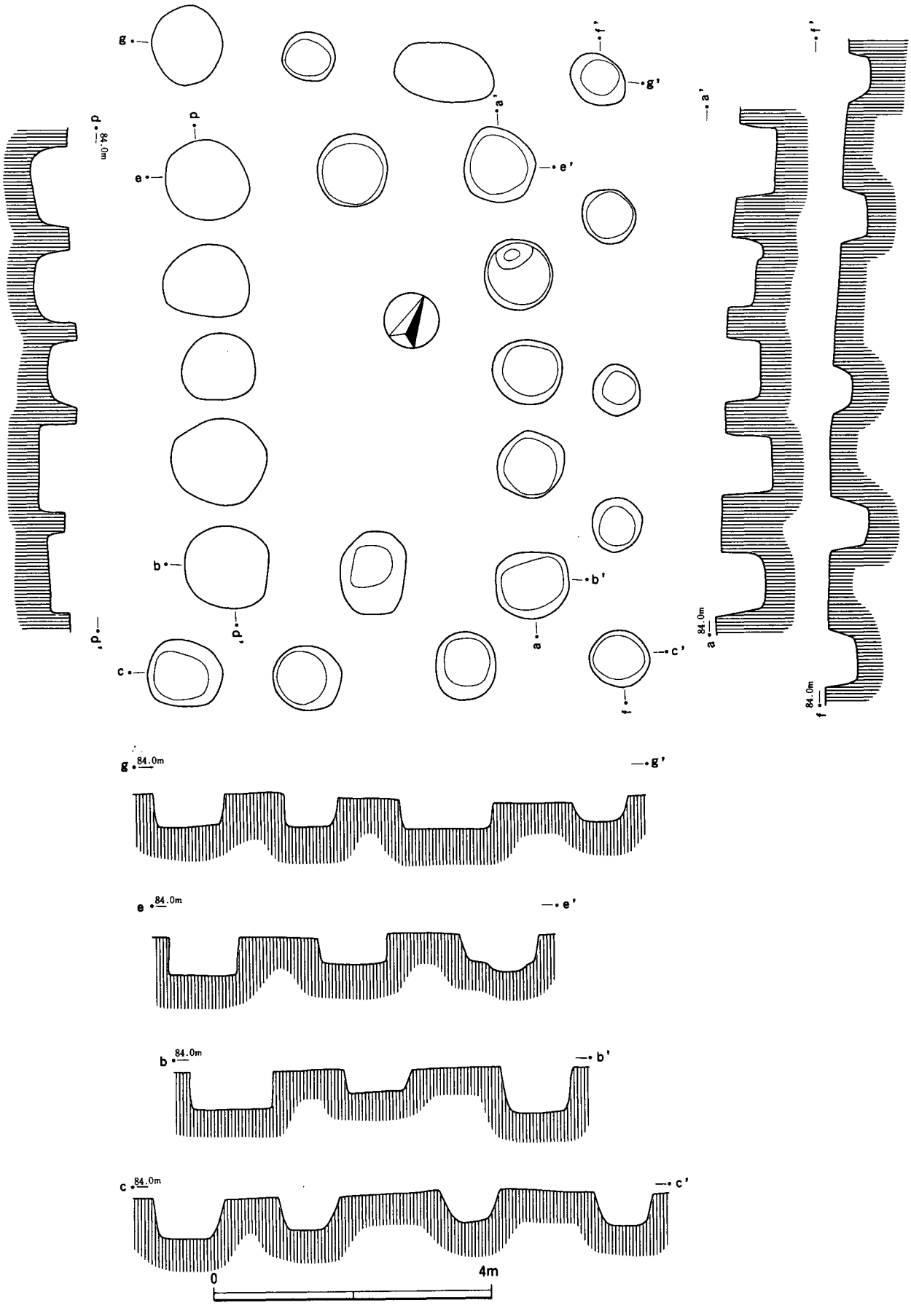
F６－50グリッドに位置する。梁行２間(４m)×桁行３間(６m)の建物である。面積は24㎡である。桁行主軸方位はN－60°－Eである。南側梁行の柱間寸法は２mを測る。柱穴の堀方は円形若しくは不正円形で、直径30㎝～90㎝、深さ15㎝～60㎝を測る。周囲に別の組み合わせのピットがあり、堀方は明瞭ではない。



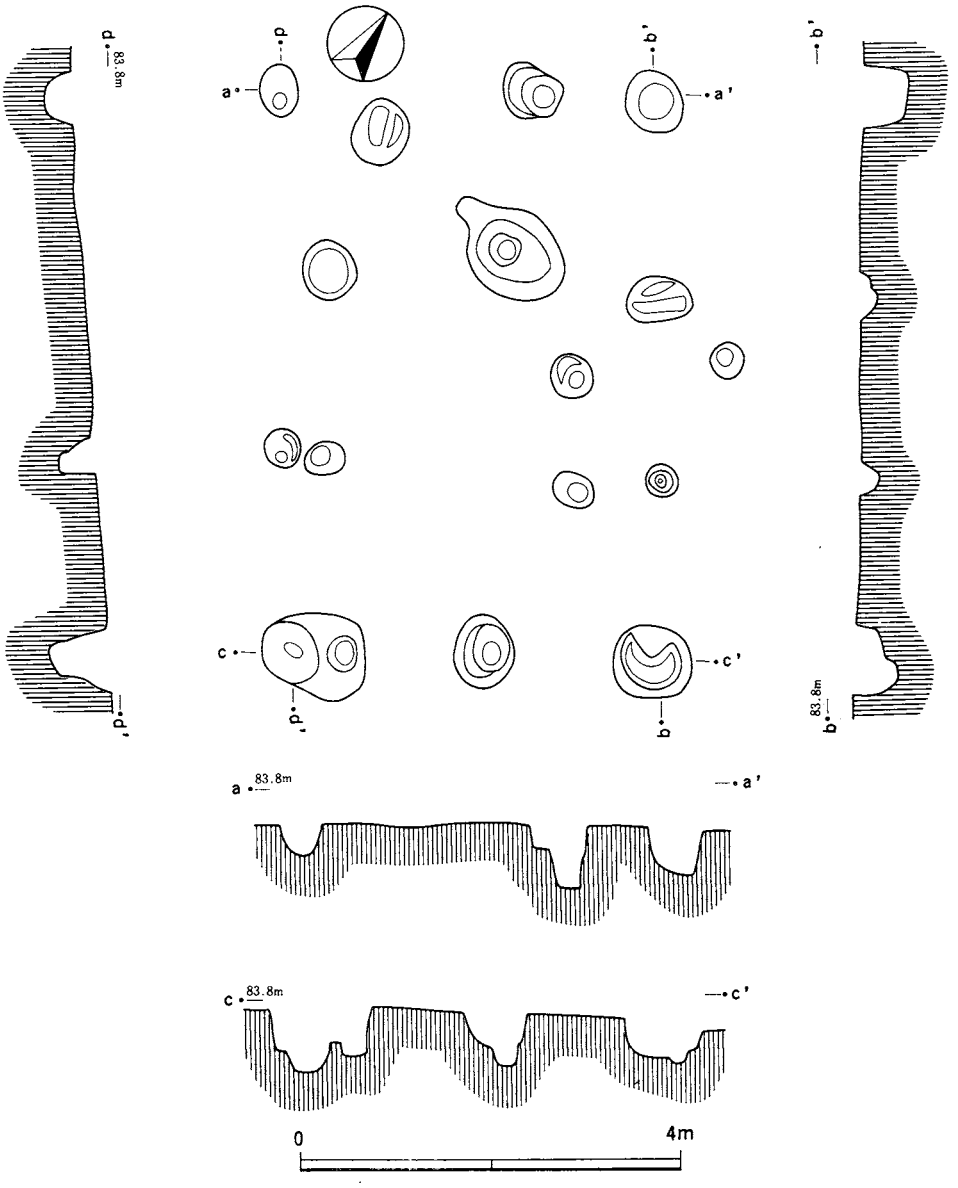
第91図　SB 1 ・ 2



第92図　SB 3・4



第93図　SB 5



第94図　SB 7

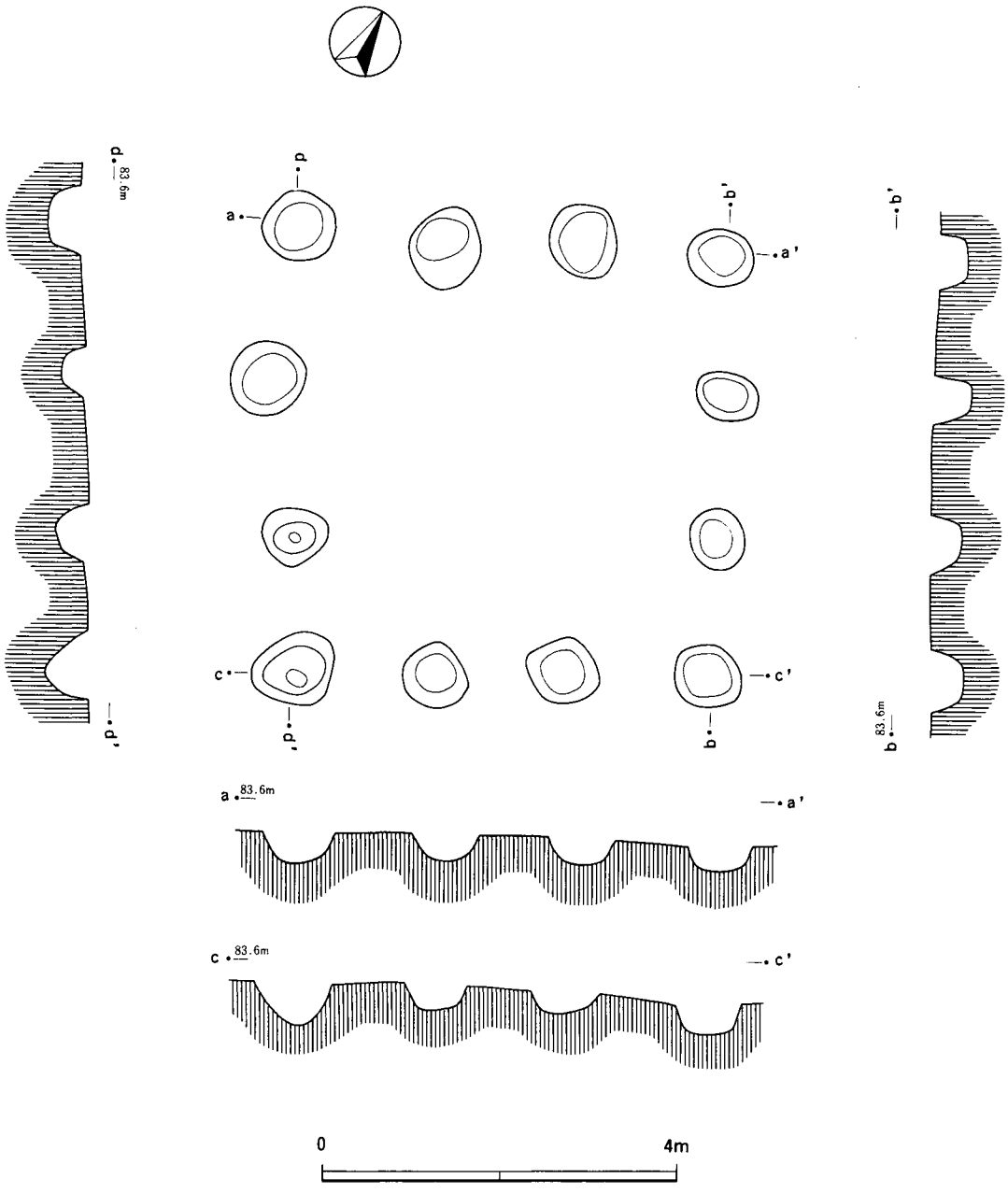
2か所の柱穴から柱抜取り痕が確認できた。

SB 8（第95図、図版9・11）

SB 7のすぐ北側にそれとほぼ主軸をあわせるように位置する。SB 19と南端で重複する。梁行3間(4.8m)×桁行3間(4.8m)の建物である。面積は23.0m²である。桁行主軸方位はN－60°－Eである。南側桁行きの柱間寸法は1.6mを測る。柱穴の配置は南西桁行方向にややずれを確認できるものの、ほぼ一直線上に並びきれいな正方形となる。柱穴の堀方は円形もしくは楕円形で、直径50cm～80cm、深さ30cm～50cmを測る。断面観察から底面の立上がりはやや丸みを帯びている。各柱穴から柱痕を確認している。

SB 9（第96図、図版15）

F4－50グリッド西側の調査区境界に位置する。梁行2間(4m)×桁行3間(5.2m)の建物である。面積は20.8m²である。桁行主軸方位はN－58°－Eである。柱穴の配置は南西桁行方向にややずれを確認できるも



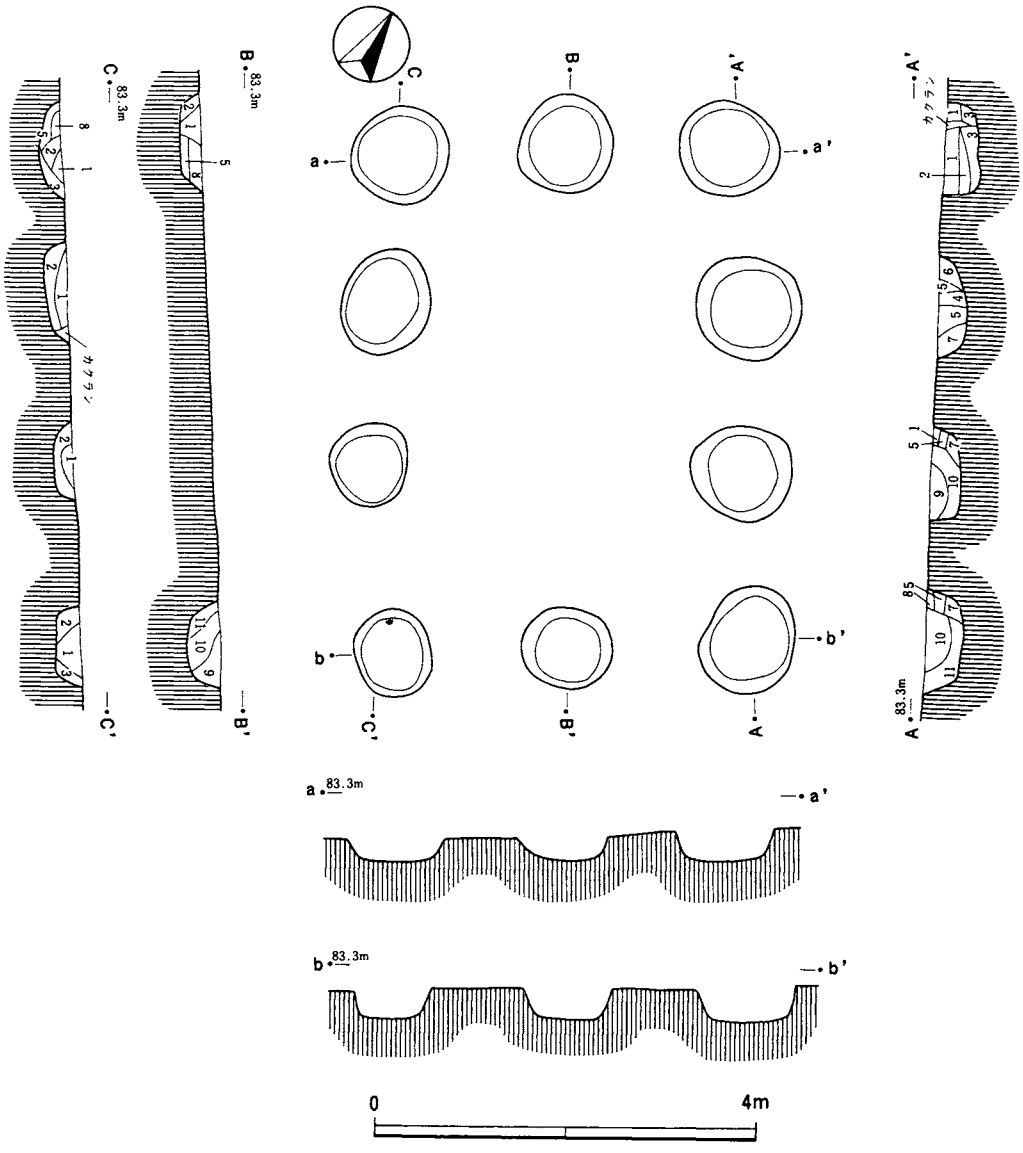
第95図　SB 8

のの、ほぼ一直線上に並ぶきれいな長方形である。柱穴の堀方は円形で、直径90cm～100cm、深さ20cm～30cmを測る。覆土断面観察からは柱痕は確認できない。

SB 10（第97図、図版12・17・27）

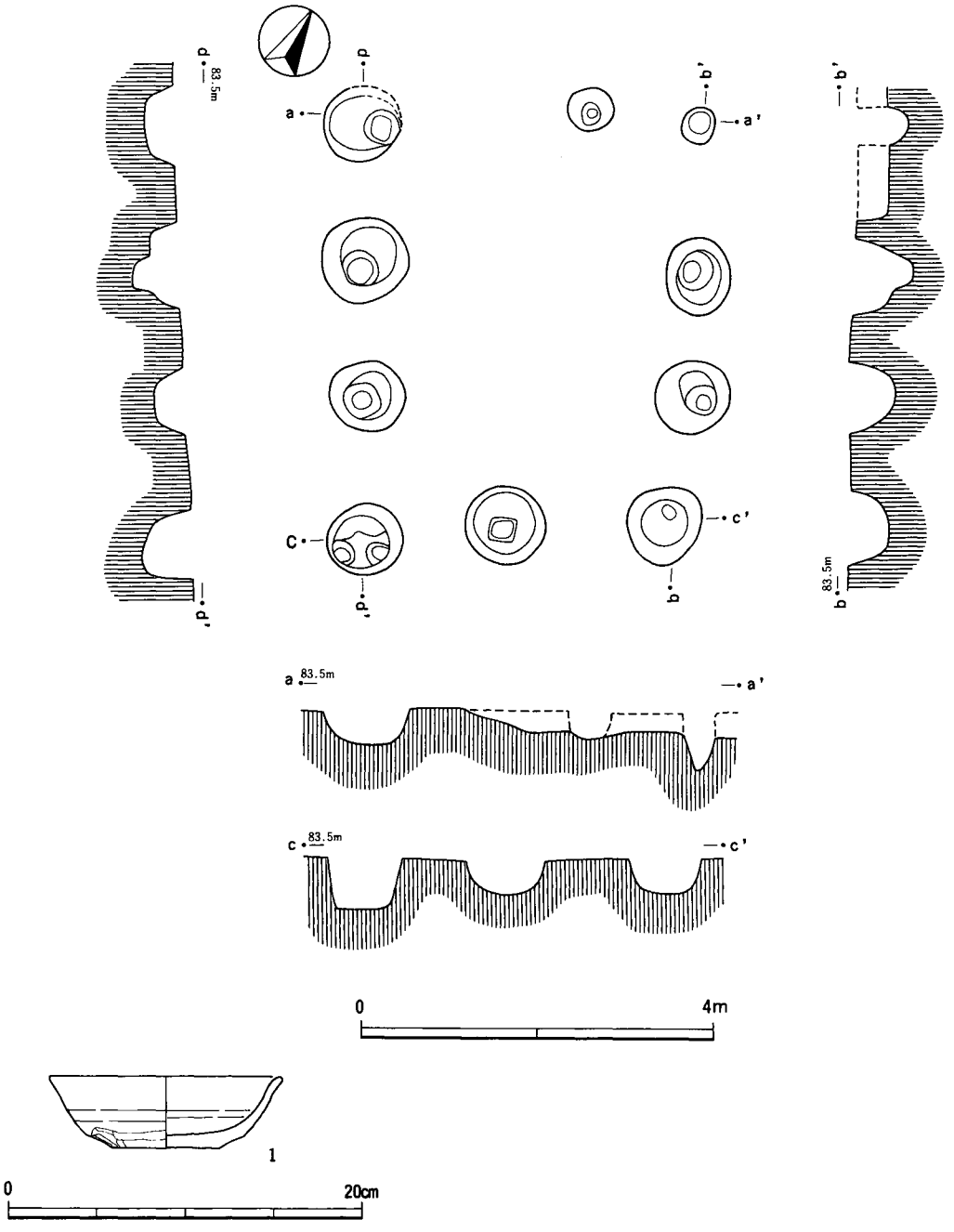
北側でSI 26と重複する。遺物は出土していないのではっきりしたことは言えないが、調査時の観察ではSB 10の方が新しいと判断できたようだ。南東側梁行2間(3.6m)×南西側桁行3間(4.8m)の建物である。面積は17.3m²である。桁行主軸方位はN－55°－Eである。南西側桁行きの柱間寸法は1.6mを測る。SI 26と重複する部分は柱穴の間隔が不揃いであるが、ほぼ整った長方形となる。柱穴の堀方は円形で底面に更に小さな掘込みを有するものがある。直径40cm～90cm、深さ40cm～60cmを測る。

出土遺物1は土師器杯で、体部外面立上がり部を大きく抉るようにヘラ削り調整を施す。外面上半から



ＳＢ９　土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒を含む。粘性弱。しまり有。
2層　黒褐色土　ローム粒を少量含む。粘性有。しまり弱。
3層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性強。しまり弱。
4層　暗褐色土　（3層より暗い）ローム粒を少量含む。粘性。しまり弱。
5層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性弱。しまり有。
6層　暗褐色土　（4層より明るい）ローム粒を含む。粘性弱。
7層　黒褐色土　ローム粒を多く含む。粘性弱。しまり有。
8層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性弱。しまり有。
9層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性弱。しまり有。
10層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性弱。しまり有。
11層　暗褐色土　ローム粒・粘土粒・焼土粒含む。粘性有。しまり弱。

第96図　SB 9

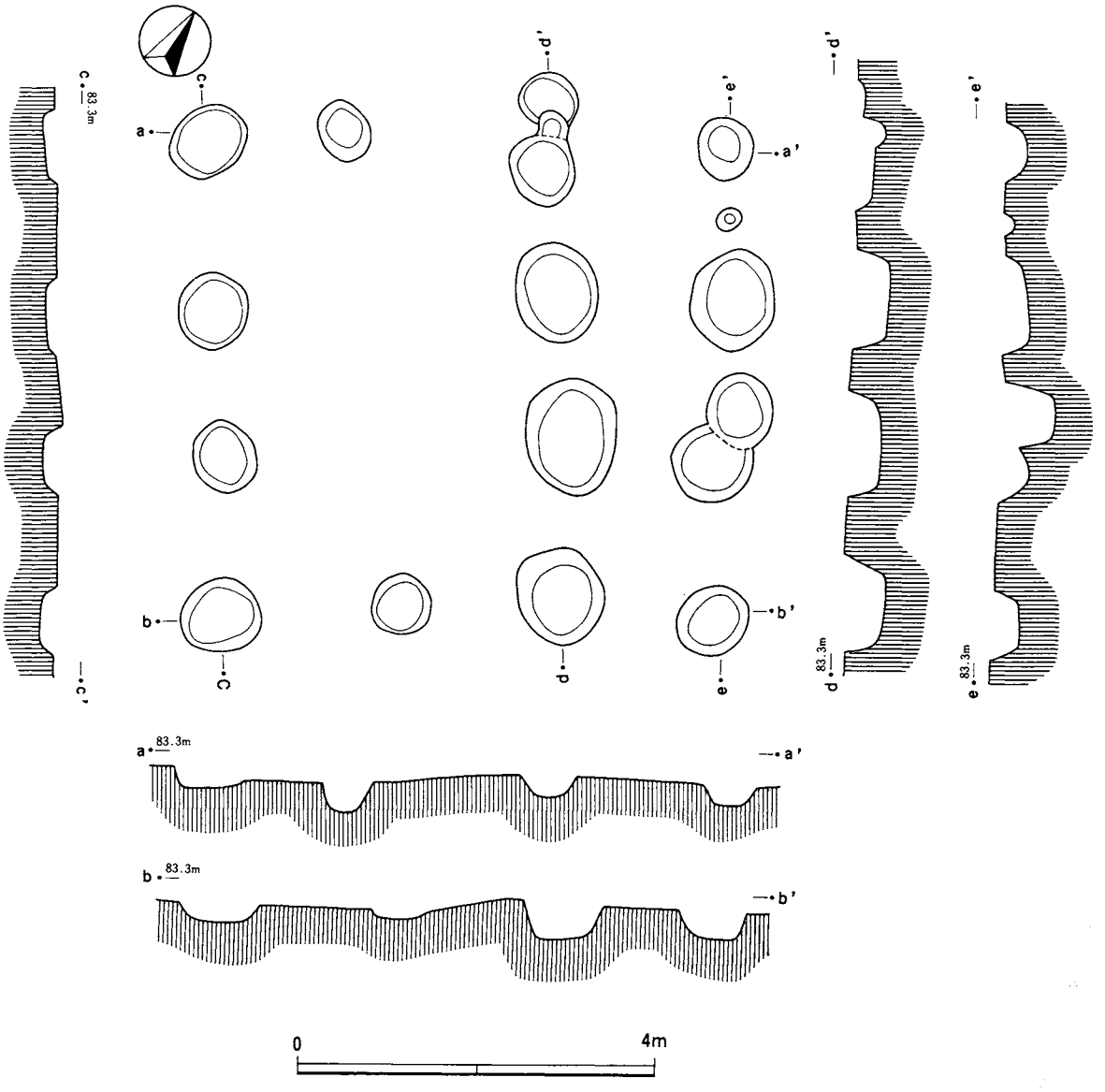


第97図　SB10

内面はヨコナデ調整である。口径13.0cm、底径6.0cm、器高4.0cmを測る。

SB 11（第98図）

E5－55グリッド南側で、SI 22と重複する。北東側が調査区域外に接するのではっきりしたことは言えないが、梁行2間(3.8m)×桁行3間(5.4m)の身舎で、北東側に庇をもつ建物である。北東側の柱穴列は調査区外に別の組合わせの掘立柱建物跡の南西側柱穴列とも考えられる。面積は20.5m²である。桁行主軸方位はN－54°－Eである。南西側桁行きの柱間寸法は0.9m～1.0mを測る。大棟持柱は他に比べて小型の堀方である。庇の柱穴の堀方と配置は不規則である。柱穴の堀方は円形で、直径60cm～130cm、深さ10cm～30cmを測る。断面からは柱痕は確認できない。



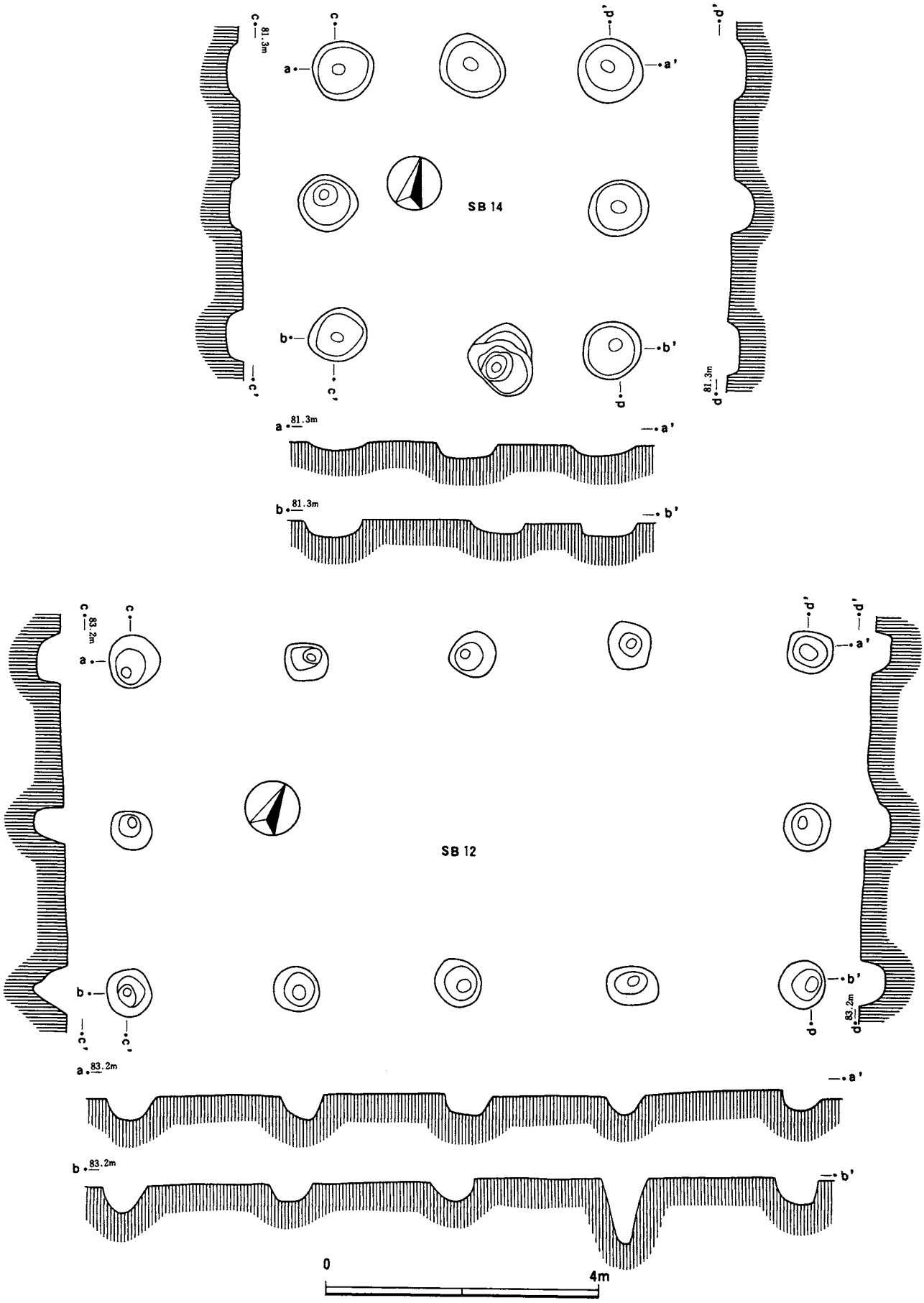
第98図　SB11

SB 12（第99図）

F5－00グリッドを中心に位置する。梁行2間(5.0m)×桁行4間(10.0m)の比較的大きな規模の建物である。面積は50m²である。桁行主軸方位はN－25°－Wである。南西側梁行きの柱間寸法2.4m～2.6m、南東側桁行の柱間寸法はほぼ2.5mを測る。柱穴の配置は整った長方形となる。柱穴の堀方は円形で、直径70cm前後、深さ30cm～40cmを測る。覆土中からは柱痕を確認している。柱痕の直径は20cm～25cmである。

SB 13（第100図）

E5－50グリッドの西側に位置する。梁行2間(5.3m)×北側桁行3間(6.8m)、南側梁行1間(6.4m)の建物である。面積は35.0m²である。桁行主軸方位はN－25°－Wである。柱穴の配置は東西方向にやや歪んだ台形になる。柱穴の堀方は円形で、直径60cm～70cm、深さ15cm～40cmを測る。各柱穴の断面観察で、柱痕を確認している。



第99図　SB 14・12

SB 14（第99図、図版18・26）

調査区北端、SI 29及びSB 15と重複する。梁行２間(4.1m)×桁行２間(4.1m)の小規模な建物である。面積は16.8㎡である。桁行主軸方位はN－72°－Eである。柱間寸法はほぼ２m前後を測る。柱穴の配置はほぼ正方形になる。柱穴の堀方は円形で、直径80cm～90cm、深さ20cm～30cmを測る。覆土中からは柱痕を確認している。柱穴の直径は20cm前後である。

SB 15（第101図、図版18・21・26）

調査区北端、SI 34・14・18と重複する。梁行２間(5.0m)×桁行２間(6.6m)の建物である。面積は33㎡である。桁行主軸方位はN－16°－Eである。柱穴の配置はほぼ整った長方形である。柱穴の堀方は円形で、直径60cm～100cm、深さ15cm～35cmを測る。各柱穴は平面観察で柱痕を確認している。柱痕の直径は20cm前後である。

SB 16（第100図）

D４－00グリッドの南西側に位置する。SB 17と主軸が一致し、かつ重複するのではっきりしたことは言えないが、南側梁行２間（４m)×西側桁行３間（5.4m）の建物である。面積は21.6㎡である。桁行主軸方位はN－79°－Eである。西側桁行きの柱間寸法は1.5m～2.1mを測る。柱穴の配置は西側桁行と東側桁行で寸法がかなり異なり、歪みが著しい台形となる。柱穴の堀方は円形で、底面に小さなピットを有するものがある。直径70cm～110cm、深さ10cm～30cmを測る。

SB 17（第103図）

D４－00グリッドの西側に位置し、SI 36・37、SB 16と重複する。南側梁行２間(4.5m)×西側桁行３間(6.0m)の建物である。面積は27.0㎡である。桁行主軸方位はN－80°－Eである。西側桁行きの柱間寸法は1.5m～2.5mを測る。柱穴の配置はほぼ整った長方形である。柱穴の堀方は円形もしくは楕円形で、直径60cm～110cm、深さ20cm～50cmを測る。各柱穴は断面観察から柱痕を確認している。

SB 18（第103図、図版21・2・25）

SB 15の東側、SI 34の南側に位置し、両者と重複する。西側梁行２間(4.8m)×南側桁行３間(6.2m)の建物である。面積は29.8㎡である。桁行主軸方位はN－20°－Wである。西側梁行の柱間寸法は2.2m～2.7mを測る。柱穴の配置はやや歪んだ台形となる。柱穴の堀方は円形で、直径70cm～90cm、深さ10cm～60cmを測る。

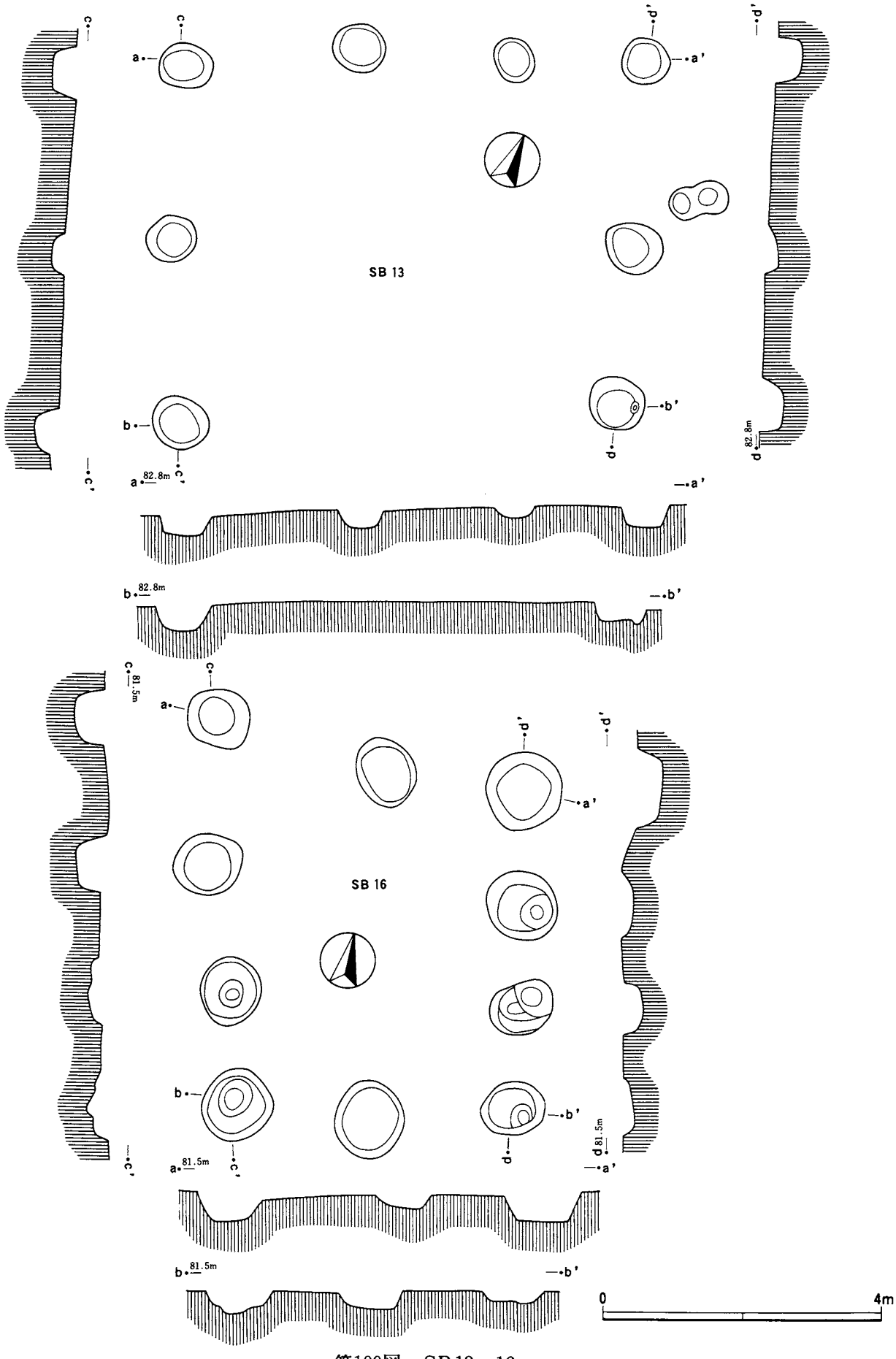
SB 19（第102図）

SI 41の南側、ちょうど調査区を南北に分断する道路際に位置する。３つの柱穴のみの調査であり、個々の柱穴の堀方が全く異なるので、掘立柱建物跡でない可能性もある。柱間寸法は２mを測る。柱穴の堀方は円形、隅丸方形、正方形で、それぞれ順番に直径100cm、深さ35cm、一辺90cm×120cm、深さ20cm、一辺100cm×110cm、深さ40cmを測る。

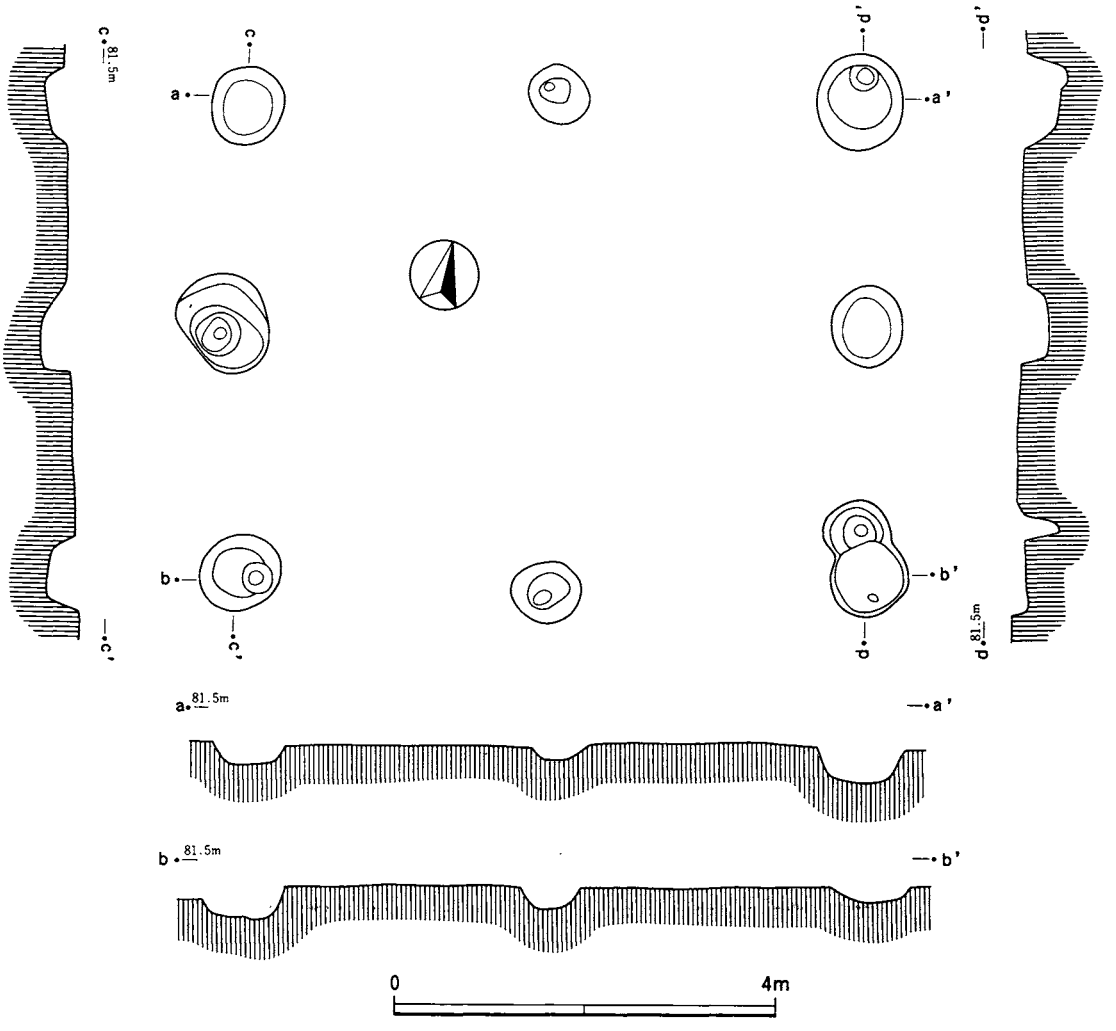
井戸

SX ４（第104・105図、図版20・61・62）

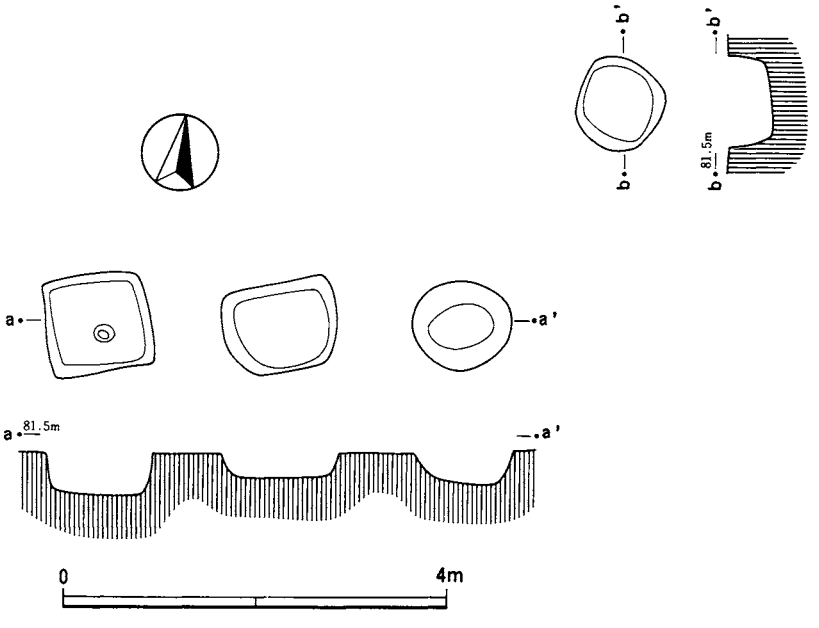
調査地区の最北端に位置する。堀方上端直径3.5m、下端直径0.4m、深さ1.8mの擂鉢形の形態である。覆土は最下部にローム粒子、白色粘土粒子を含み、下層に行くほど粘性が強い。中層には、人為的埋土と、自然堆積層が見られる。覆土中には焼土は見られない。地山は、上端から0.65mの厚さで武蔵野ローム、0.45mの厚さで白色粘土層、その下が黄色の岩盤となる。



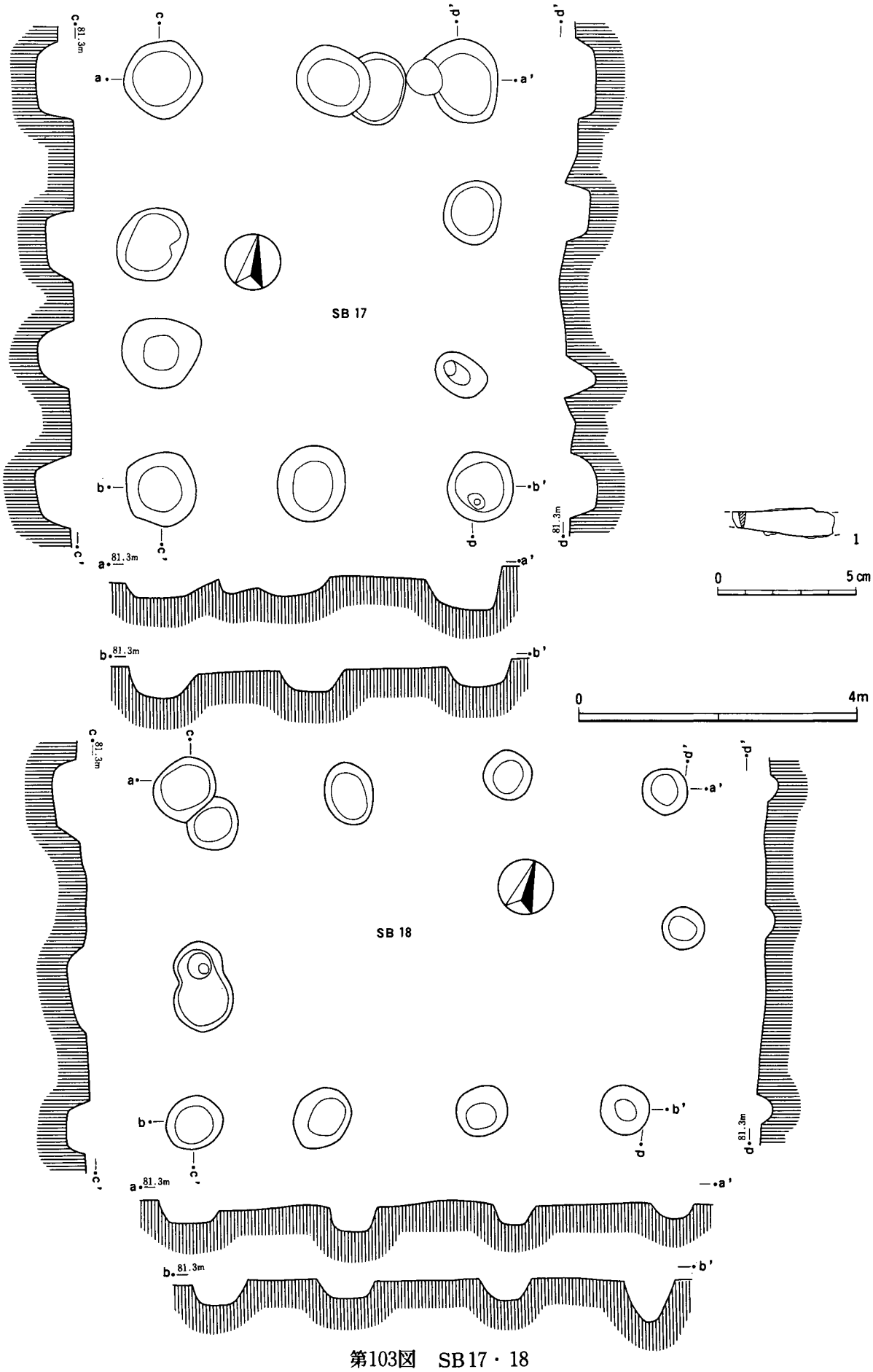
第100図　SB13・16



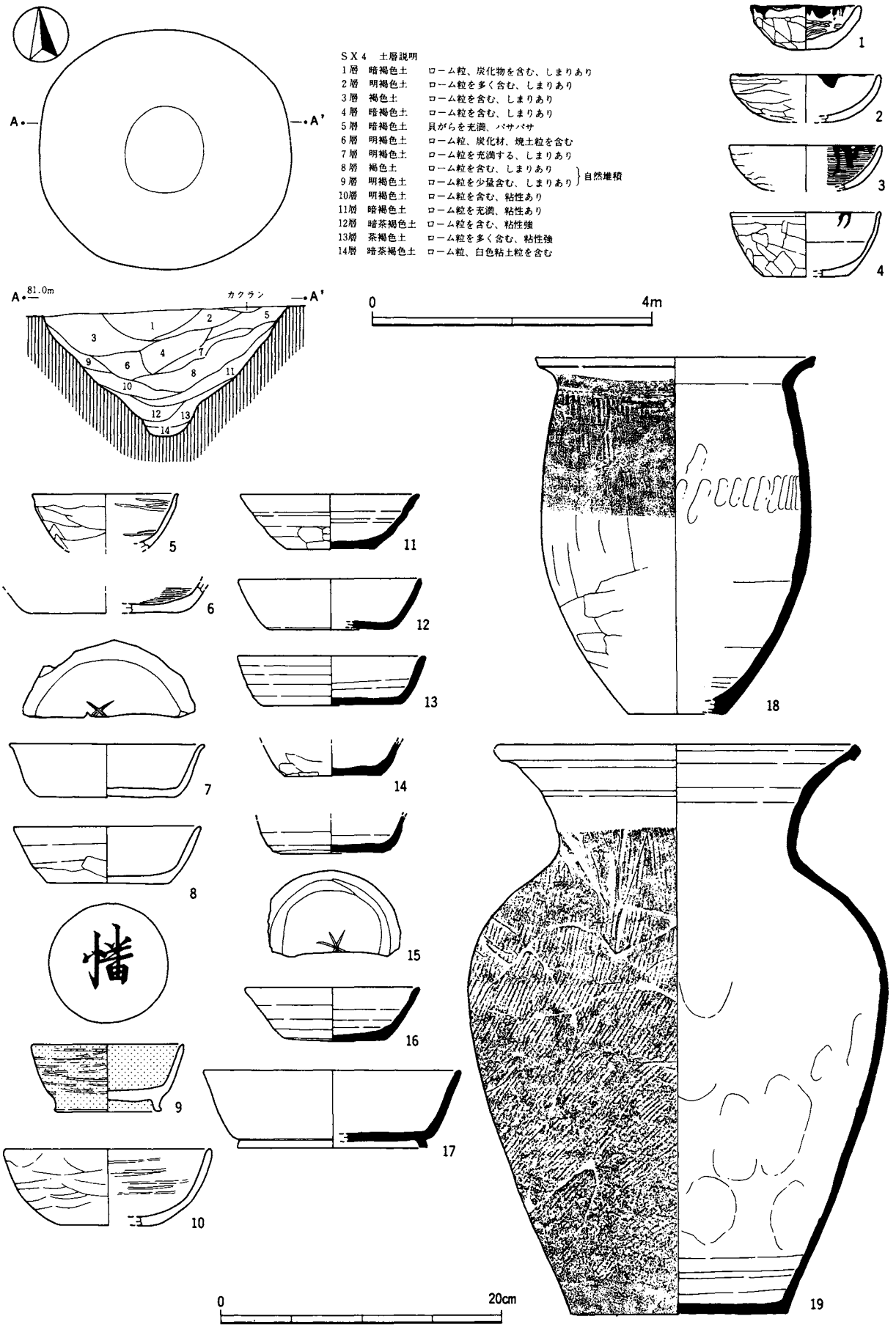
第101図　SB 15



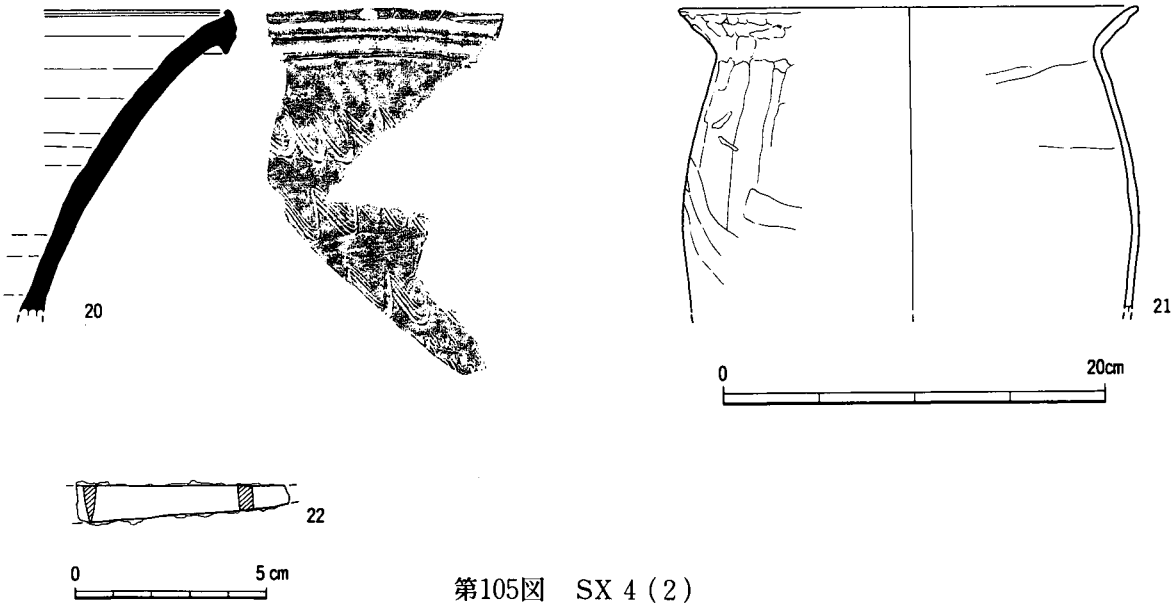
第102図　SB 19



第103図　SB17・18


A
A'
SX4　土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒、炭化物を含む、しまりあり
2層　明褐色土　ローム粒を多く含む、しまりあり
3層　褐色土　ローム粒を含む、しまりあり
4層　暗褐色土　ローム粒を含む、しまりあり
5層　暗褐色土　貝がらを充満、パサパサ
6層　明褐色土　ローム粒、炭化材、焼土粒を含む
7層　明褐色土　ローム粒を充満する、しまりあり
8層　褐色土　ローム粒を含む、しまりあり
9層　明褐色土　ローム粒を少量含む、しまりあり
自然堆積
10層　明褐色土　ローム粒を含む、粘性あり
11層　暗褐色土　ローム粒を充満、粘性あり
12層　暗茶褐色土　ローム粒を含む、粘性強
13層　茶褐色土　ローム粒を多く含む、粘性強
14層　暗茶褐色土　ローム粒、白色粘土粒を含む
81.0m
カクラン
0
4m
0
20cm

第104図　SX 4 (1)



第105図　SX 4（2）

遺物の出土層位は不明だが、ほぼ完形の土器類が多数出土している。1は手づくね土器杯で、外面を粗くヘラ削り調整、内面をヘラミガキ調整を施す。口縁端には煤が付着する。2は土師器杯で口縁端が黒色に変色している。3は土師器杯で内面に煤が付着している。4は土師器杯で同様に内面に煤が付着している。6は土師器杯底部でヘラ記号が見られる。8は土師器杯で、底部外面に「幡」の墨書が見られる。9は土師器高台付杯で、高台裏含め全面赤彩である。体部外面は粗いヘラミガキで、口縁端及び高台端部が磨滅している。高台裏に「上」の墨書が見られる。11～17は須恵器杯で、15の底部外面にはヘラ記号が見られる。17は高台付き杯で、12・13・17は県外産である。12・13の内面には火襷が見られる。18は外面上端に平行タタキ目下半にヘラ削りを残す須恵器甕である。内面には中位に指圧痕が残る。須恵器技法と、土師器の形態が融合した特殊な器種である。県内産と考えられる。19は県内産須恵器甕で、ほぼ完形である。口径26.1cm、底径15.4cm、器高40.2cmを測る。20は県外産の須恵器大甕の口縁破片で、櫛描き波状文が施される。21は土師器甕の上半で、口縁外面には細かな指圧痕が残る。全体に灯明具の多さが目立つ。22は鉄製刀子片である。

（3）所属時期不明の遺構

出土遺物が極めて少なく小片であるため時期が判断できないが、古墳時代から奈良・平安時代に属すと考えられる。

竪穴住居

SI 1（第106図、図版8）

SI 10と重複する。ほとんどが調査区域外になる。主軸長推定4.8m、横軸長4.8m、主軸方位N－10°－Wである。床面積は23.04m²、壁高は28cm～34cmを測る。かまどは北西壁中央にある。柱穴は不明である。

SI 9（第106図、図版8）

SI 4・5・8と重複する。主軸長3.2m、横軸長3.6m、主軸方位N－11°－Wである。床面積は11.52m²、壁高は6cm～22cmを測る。かまどは北西壁中央にある。

SI 10（第106図、図版8）

SI 1と重複する。ほとんどが調査区域外になる。主軸長3.7m、横軸長3.7m、主軸方位N－64°－Eである。床面積は13.69㎡、壁高は32cmを測る。主柱穴は不明、かまども不明である。

SI 28（第107図、図版18）

F 5－00グリッドの北側に位置する。SI 27が完全に重複する。SI 27の方が新しいため、遺物がかなり少ない。主軸長3.5m、横軸長3.5m、主軸方位N－62°－Eである。床面積は12.25㎡、壁高は8cm～20cmを測る。主柱穴は不明である。かまどは北東壁中央にある。

SI 29（第107図、図版18・20）

SI 30、SB 14と一部重複する。主軸長5.0m、横軸長5.0m、主軸方位N－3°－Eである。床面積は25.00㎡、壁高は0cmで、周溝を残すのみである。主柱穴は4本である。かまどは北東壁中央にあるが、ほとんど痕跡を残すのみである。

SI 31（第108図、図版20）

主軸長3.7m、横軸長3.7m、主軸方位N－20°－Wである。床面積は13.69㎡、壁高は10cmを測る。主柱穴はない。かまどは北西壁中央にある。

SI 34（第108図、図版22）

SB 15・18と重複する。主軸長4.5m、横軸長3.9m、主軸方位N－10°－Wである。床面積は17.55㎡、壁高は5cmを測る。主柱穴はない。かまどは北西壁中央にある。

土坑

SX 1（第109図、図版8）

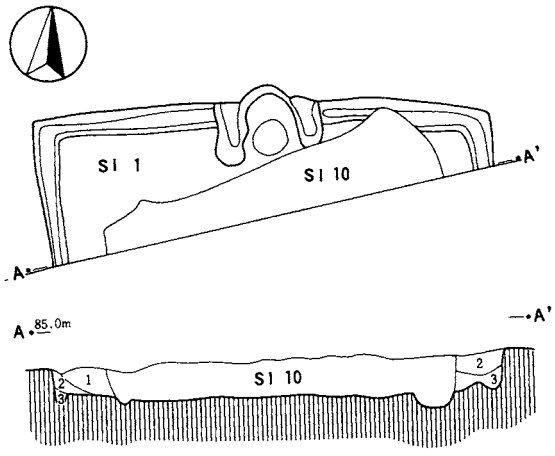
SI 2と完全に重複する。上端一辺2.4m×2.1mの隅丸方形で、深さは30cmを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土でハードロームブロックを大量に含む。これは新たな住居構築時の排土を埋めたものであろう。SI 3よりも新しい。鉄製の刀子の基部片が出土している。

SX 5（第109図）

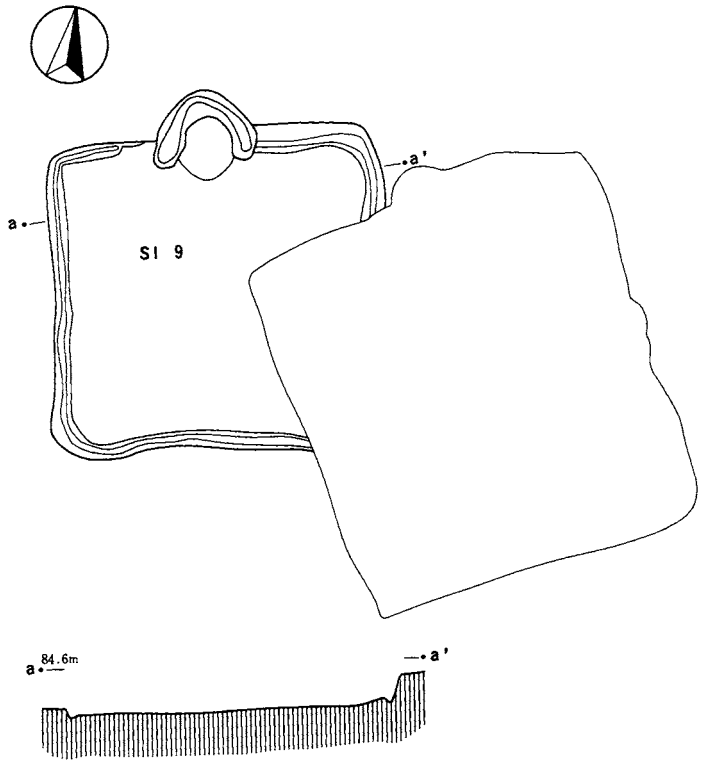
D 3－09グリッドに位置する。平面形態は不整円形で、堀方上端では最も長い所で直径4.5m、最も短いところで4.1mを測る。深さは35cmで、底面は平坦である。覆土はしまりがあり、炭化材や焼土粒を含む。遺物には鉄製品がある。

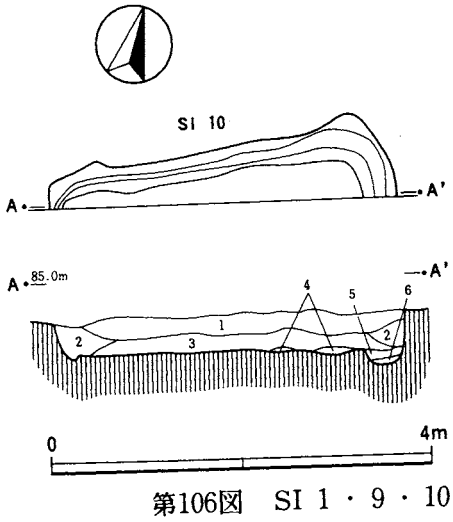
SX 7（第109図）

D 4－20グリッドに位置する。平面形態は不整円形で、堀方上端で最大長4.4m、下端で3.5m、深さ30cmを測る。また、更に底面を掘りくぼめて楕円形の浅いピットがあり、その底面は硬化している。覆土は褐色から暗褐色で、ローム粒を含む。出土遺物には鉄製品があり、1は刀子片、2は先端部は扁平だが、基部は丸みをもっている。前後で欠損している。



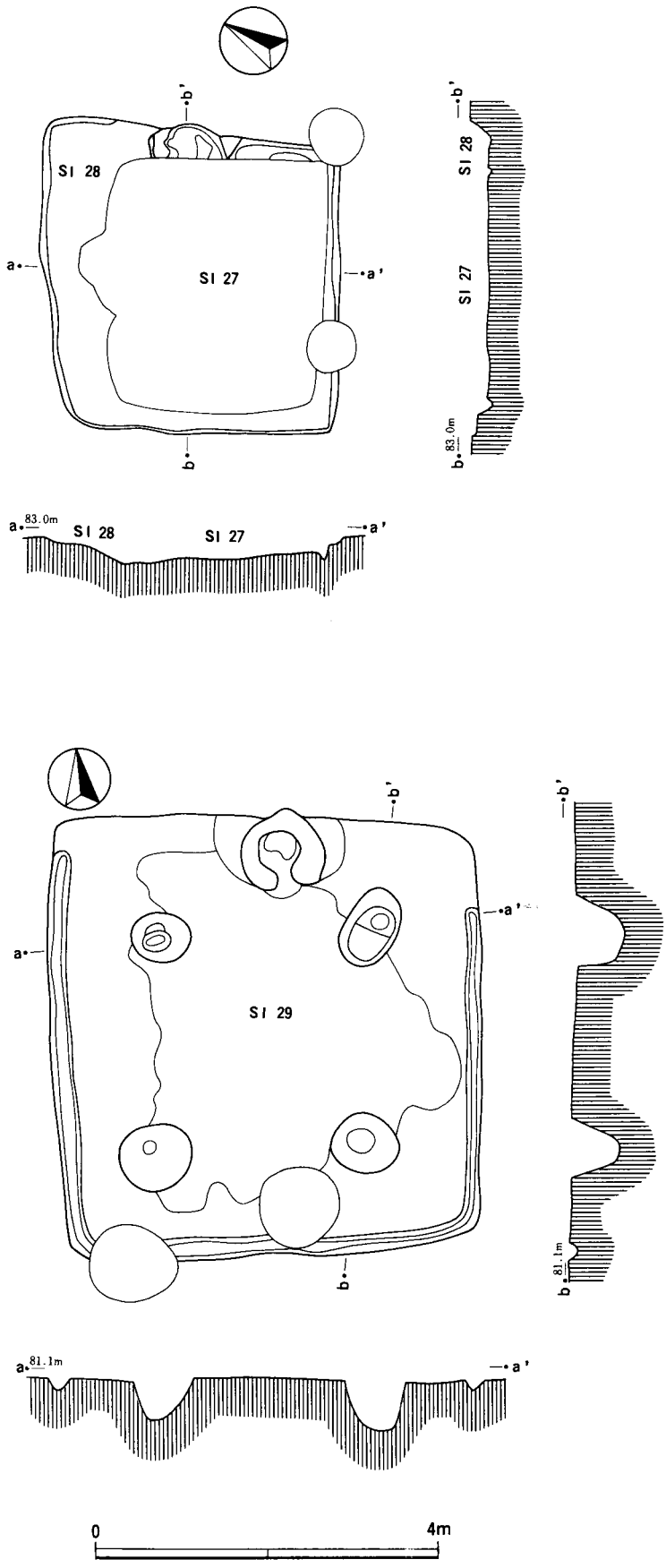
SI1　土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒含む
2層　褐色土　ローム粒含む
3層　明褐色土　ローム粒多く含む



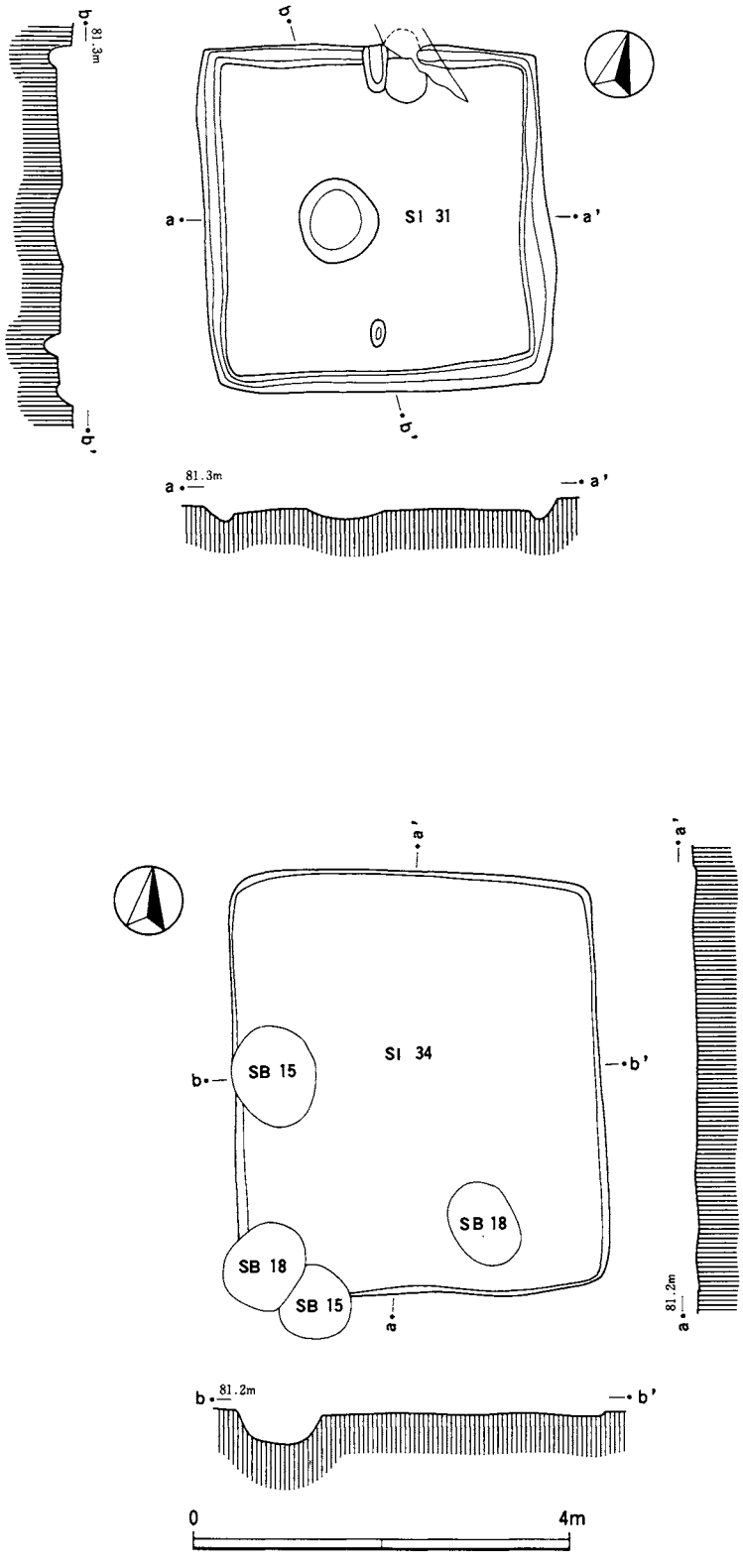


SI10　土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒含む
2層　暗褐色土　ローム粒若干含む
3層　褐色土　ローム粒、炭化物、焼土含む
4層　明褐色土　ローム粒多く含む
5層　明褐色土　ローム粒多く含む
6層　明褐色土　ローム粒含む

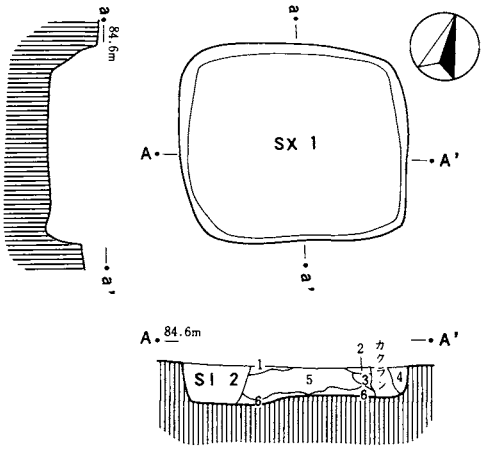
第106図　SI 1・9・10



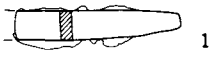
第107図　SI 28・29

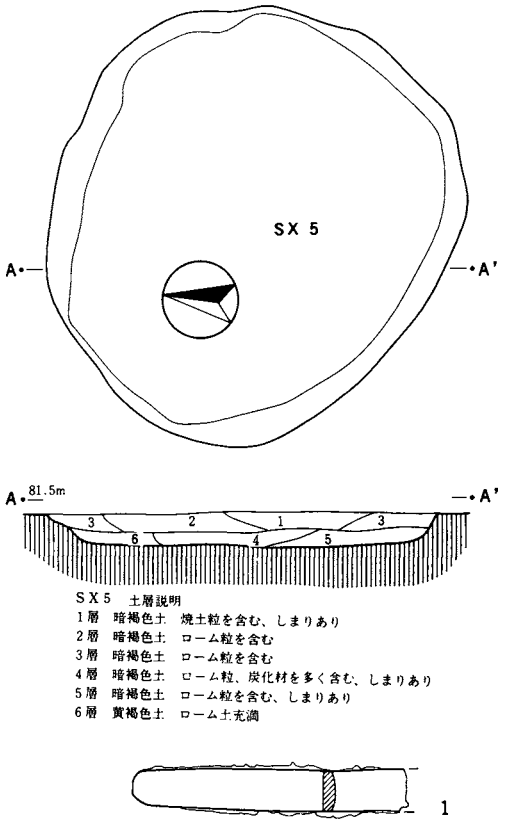


第108図　SI 31・34

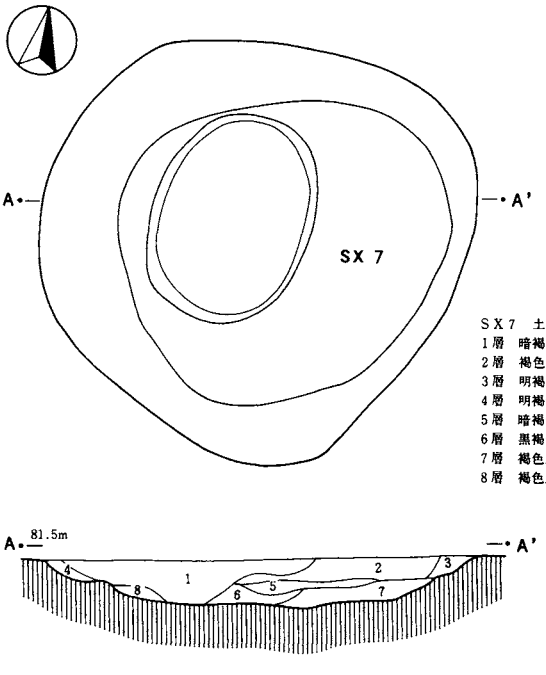


SX1　土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒少ない
2層　暗褐色土　ローム粒少ない
3層　暗褐色土　ローム粒少ないが、2層よりやや多い
4層　暗褐色土　ローム粒少ないが、ハードロームブロックを若干含む
5層　暗褐色土　ハードロームブロック大量
6層　暗褐色土　ローム粒少ない

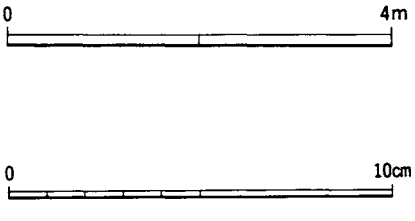


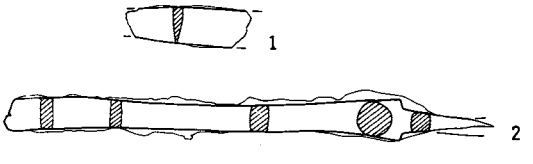


SX5　土層説明
1層　暗褐色土　焼土粒を含む、しまりあり
2層　暗褐色土　ローム粒を含む
3層　暗褐色土　ローム粒を含む
4層　暗褐色土　ローム粒、炭化材を多く含む、しまりあり
5層　暗褐色土　ローム粒を含む、しまりあり
6層　黄褐色土　ローム土充満



SX7　土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を含む、しまりあり
2層　褐色土　ローム粒を含む、粘性あり
3層　明褐色土　ローム粒を含む、しまりあり
4層　明褐色土　ローム粒を含む
5層　暗褐色土　ローム粒を含む、しまりあり
6層　黒褐色土　ローム粒を含む、粘性あり
7層　褐色土　ローム粒を多く含む
8層　褐色土　ローム粒を多く含む、しまりあり





第109図　SX 1・5・7

5　中世以降

土坑

SX 6（第110図、図版27）

いわゆる粘土貼土坑と呼ばれるもので、堀方面に厚さ10cmほどの白色粘土を貼り付けている。D 4 －02グリッドに位置する。平面形態は堀方上端長軸2.5m、短軸1.9m、下端長軸1.6m、短軸 1 mの楕円形で、底面は平坦である。深さは粘土を貼った底面から40cmを測る。出土遺物には鉄製の刀子の破片がある。一般に中世の墓坑として認識されているもので、周辺に中世墓坑群が発見されていないので、単独に造られたものであろうか。

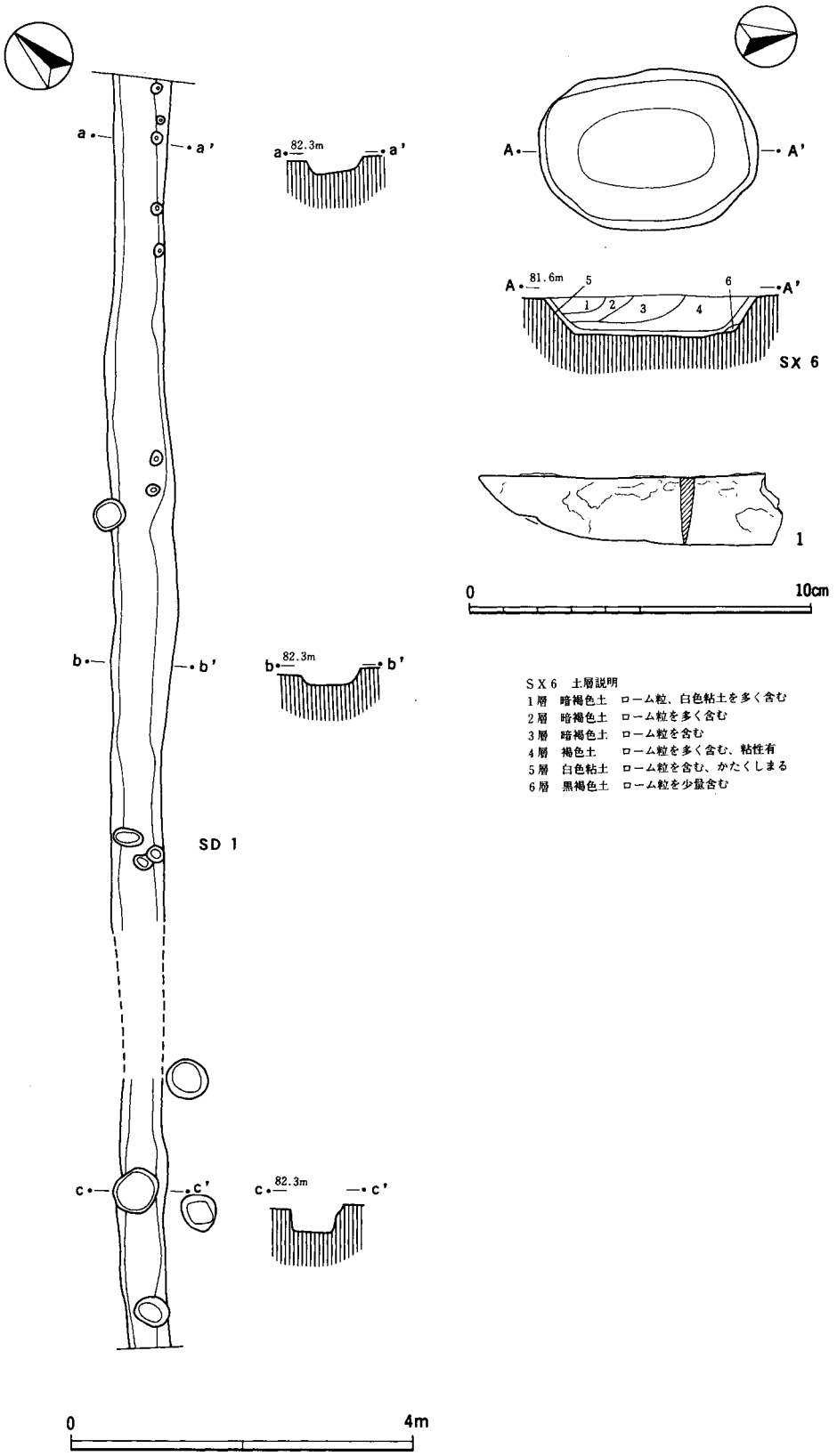
溝

SD 1（第110図）

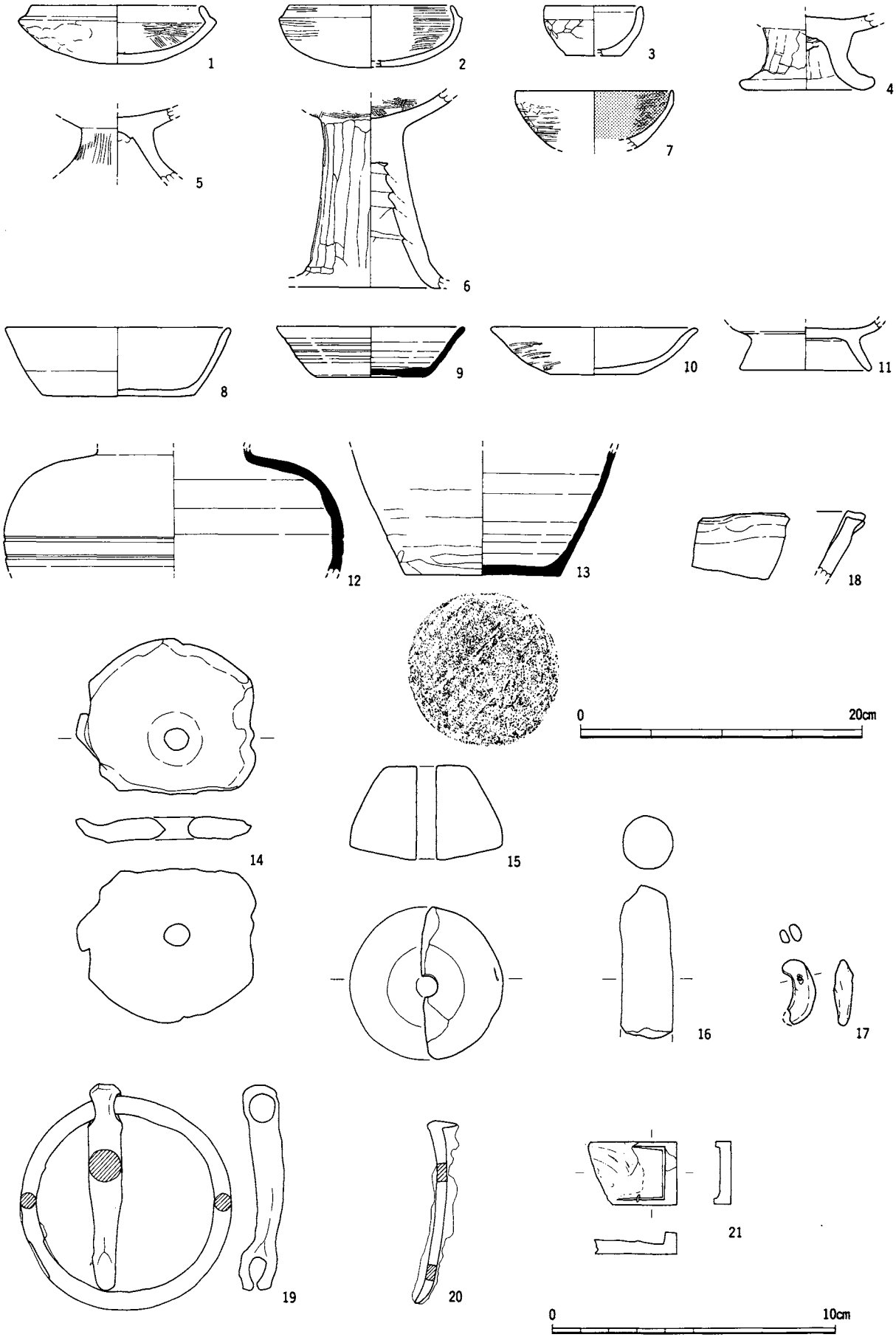
調査地区を南北に分断する道路に沿うように、その南側に平行に直線的に走る。断面形態は逆台形で、堀方上端幅1.4m、下端幅0.8m～1.2m、深さ25cm前後を測る。底面の南側立上がりには直径30cm前後、深さ15cmほどの小ピットが不規則に並ぶ。これは柵列の木杭の痕跡であろう。覆土はローム粒を含む暗茶褐色を呈している。道路として使用された硬化面などの痕跡は認められない。時期は中世末期以降と考えられる。

6　遺構に伴わない遺物（第111図、図版63）

ここでは住居などの遺構の覆土中から出土した遺物でも、他の遺物と著しく時期が異なるものや、調査途中で一括して取り上げたものをまとめて紹介する。 1 は土師器杯で、約1/2が残存している。口径12.0cm、最大径13.8cm、器高3.2cmを測る。内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリしているが、その後磨滅している。 2 は土師器杯で、口径推定11.6cm、器高4.5cmを測る。内面は丁寧なヘラミガキ、外面はヘラケズリ後粗いヘラミガキ調整を施す。 3 は手づくね杯形の土器片である。口径推定7.0cm、底径推定4.0cm、器高3.6cmを測る。 4 は土師器高杯の脚部のみ完存している。歪みが著しいが堅牢な作りで、重量感がある。脚径9.5cm、脚高は4.4cmを測る。 5 は土師器高杯の接合部片で焼成が不良のため器面調整がはっきり分からない部分あり。 6 は土師器高杯脚部で外面には明瞭にヘラケズリ痕が残る。内面には粘土紐巻き上げ痕と、ヘラケズリ痕が残る。脚部接地面が平坦に磨滅しており、別の用途で再利用されていた可能性がある。 7 は土師器杯片で、内面を黒色処理する。口径は推定11.2cmである。 8 は土師器杯で、2/3が残存している。口径推定16.0cm、底径11.7cm、器高4.9cmを測る。底部は静止糸切り後ヘラケズリ調整、立ち上がりは回転ヘラケズリである。表面は赤色を主体としており、赤彩土器の可能性もある。 9 は白色砂粒を多量に含む在地産の須恵器杯である。SI 36の覆土中から出土している。口径推定13.3cm、底径推定7.6cm、器高3.6cmである。10は土師器杯で、内面は非常に丁寧なヘラミガキのためミガキの方向及び単位は分からない。外面は底部を含めてヘラケズリ後ヘラミガキ調整を施す。口径推定14.6cm、底径6.2cm、器高3.3cmである。11は土師器高台付杯の底部及び高台部である。高台径9.4cm、高台高2.3cmを測る。12は肩部のかなり張る須恵器短頸壷の破片である。最大径は24.0mmを測る。肩よりやや下に 2 条の沈線が巡っている。胎土は白色砂粒を含み、黒色粒子の吹き出しが見られる。また、外面には厚く自然釉が付着している。東海産と考えられる。13は須恵器甕の底部のみ完存している。胎土中には微砂粒多量に含み、在地産と考えられる。底部には板目痕が残る。14は土師器底部を再利用した紡錘車と考えられる。片面に回転糸切り痕を残して



第110図　SX 6 ・ SD 1



第111図　遺構外出土遺物・表採遺物

いる。15は土製紡錘車片で、最小径28㎜、最大径56㎜、高さ32㎜を測る。約1/2が残存する。胎土中には0.5㎜前後の砂粒を多量に含む。16は直径18㎜の棒状土製品で、表面は滑らかに仕上げられている。17は土製の勾玉である。色調は赤褐色である。18は常滑産擂鉢の口縁片である。内面には自然釉が付着している。19は環状の鉄製品である。かなりボロボロしている。20は鉄製の釘である。21はSI35覆土中から出土した粘板岩製の硯である。陸より下が欠損している。背面には「亥」の線刻がある。

第3節　まとめ

1　旧石器時代

発掘調査時に第1～第4ユニットに分割された石器集中地区は、本報告において便宜的に石器集中1～9に細分を行った。器種別分類・母岩別分類・石器群の様相等を勘案すると石器集中1～5と石器集中6～8と石器集中9の3ブロック内での関連性が浮彫りになった。各ブロックを概観してまとめに代える。なお、第3ブロックは質量共に小規模であるので割愛する。

○第1ブロック　　石器集中1～5に相当する。石器群はほぼ東西に直線的に並び、その分布範囲は長軸30m、短軸10mに広がる。器種組成はナイフ形石器3点、小石刃7点、楔形石器6点、削器1点、斧状石器1点、石核6点、敲石3点、磨石1点、R剥片3点、U剥片4点、剥片62点、砕片4点、礫11点の合計118点である。石材の構成は硬質頁岩23点、珪質頁岩16点、黒曜石2点、ホルンフェルス2点、砂岩25点、流紋岩25点、安山岩11点、その他14点である。第2ブロックとの比較で注目される器種・石材は、やはり小石刃と硬質頁岩の偏在性であろう。しかしながら、そのような小石刃生産と密接した関係にある硬質頁岩の剥片・砕片類は少なく、またそれに関係する接合関係も確認できないことは、遺跡内での小石刃生産は活発ではなかったのかもしれない。以上のように器種別・母岩別分類を概観したところ、本ブロックは遺跡外からの搬入品を中心として、小石刃生産に関係する石器群を主体としていることが分かった。

○第2ブロック　　石器集中6～8に相当する。石器群は南北に延び、長軸約20m、短軸約12mの範囲に広がる。器種は、ナイフ形石器1点、楔形石器14点、石核4点、敲石1点、R剥片3点、U剥片5点、剥片107点、砕片25点、礫31点で構成され、合計191点が検出された。石材は硬質頁岩5点、珪質頁岩7点、ホルンフェルス72点、砂岩20点、緑泥片岩31点、安山岩20点、凝灰岩8点、チャート16点、その他12点で構成される。第2ブロックでは楔形石器が特に多く、石材も同石器製作に関係するホルンフェルス、砂岩等が目立って出土している。さらに剥片・砕片も第1ブロックと比較しても多量に検出され、実際に楔形石器の製作作業を行った状況を示している。破損礫を中心とした礫群が2基存在するが、それらは剥片・砕片の垂直分布から遊離しているようで、同時期であるのか即断はできない。

上述したように、第1ブロックは大形石刃素材を利用した小石刃生産を特徴とする石器群であった。このような石器群は一鍬田甚兵衛山西遺跡(空港No.16遺跡)、香山新田中横堀遺跡[1](空港No.7遺跡)、滝東台遺跡、宮内遺跡[2]などで、「純粋な形」で検出されている。「純粋な形」と述べたのは、利用石材に質の良い硬質頁岩を主体的に用いているということである。対して、一本松遺跡の石材組成は、硬質頁岩はその他の石材と比較して突出した割合を示さず、逆に客体的な存在であるといえる。また、硬質頁岩を主体とする前述の石器群では石器組成も小石刃生産に関係するものが主体を占め、それらの接合関係も顕著に見られる。硬質頁岩が客体的に存在する一本松遺跡の石器組成は、小石刃生産に関するもの以外には剥片素材の楔形石器が組成に加わる現象が見られる。このような一本松遺跡と同様な石材構成・石器組成のあり方

を示す石器群に多古町の千田台遺跡[3]がある。千田台遺跡は当該石器群のみで構成され、同一文化層に属する石器集中地点が27か所検出されている。石器はナイフ形石器39点、台形石器15点、尖頭器１点、彫器２点、削器10点、掻器13点、楔形石器78点、石核59点を初めとして、合計1590点が出土している。利用される石材は、珪質頁岩35%、安山岩25%、黒曜石12%が主体を占め、チャート・ホルンフェルス等がそれ以外を補っている。珪質頁岩とそれ以外の石材との比率において後者の方が主体を占め、楔形石器が特徴的に組成する点では一本松遺跡と千田台遺跡は強い類似性が指摘できる。しかしながら、千田台遺跡では、台形石器や特徴的な円形のエンドスクレイパー等が伴ったり、石材構成で黒曜石が多く組成したりと両遺跡の相違性も見ることができる。

層位的には、一鍬田甚兵山西・香山新田中横堀・滝東台・宮内遺跡等の純粋な石器群はⅦ層を中心としており、千田台遺跡がⅥ層下部～Ⅶ層上面を中心とした石器群であり、石器組成・石材組成の変遷を追うことができるとされている(新田1995[4]、矢本1996[3])。しかし、千田台遺跡にその様相の一端が近似する一本松遺跡では、Ⅶ層～Ⅸ層を中心に石器群が検出されており、層位的な連続性を見ることができない。

それを説明する一つの理由として、やはり山武から東総地域における原石利用の特殊性が挙げられよう。当該地域では近隣で採取が可能と思われるチャートや砂岩、メノウの小円礫を利用し、両極技法を駆使して剥片剥離を行う石器群がⅦ層中から検出されている（高橋・奥田1986[5]、新田1991[6]）。千田台遺跡や、一本松遺跡では小円礫素材の石器はあまり見られないが、楔形石器が石器組成の主体を占めることは再三述べてきた通りであり、石材環境に連動した両極剥離技術が当該地域における重要な石器製作技術の一つであることを物語っている。また、山武郡市文化財センターによって調査された、近接する「大網山田台遺跡群」からは、各地点において同様な石器群がまとまって検出されている（山武郡市文化財センター1996)。今後は、それらとの比較検討が必要となろう。

2　縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺構は今回の調査範囲内では検出されなかったが、山武郡市文化財センターが調査を行った一本松遺跡[7]内では、竪穴住居跡（中期）を初め、炉穴、陥穴、小竪穴などが検出されている。特に今回の調査区の東側に隣接する台地縁辺部では縄文時代後期（堀之内期）の粘土採掘坑が調査されている。これは南側の谷から掘り始め順次掘り進み、粘土層面を円形に竪堀りし、粘土層の厚さに添って手（道具）の届く範囲まで横掘するという特徴を有している。また、近くには加曽利B、安行期を主体とし、早期から晩期までの土器を出土する沓掛貝塚が所在し、これらのことから台地一帯に広く該期の遺構が展開していると想定される。

弥生時代では、後期後半の甕片が若干ではあるが出土しているが、本調査区内からは遺構は全く確認されていない。

3　古墳時代から平安時代

山武郡市文化財センターによって報告されている一本松遺跡（以下山武一本松遺跡）報告書[8]の成果を援用して、今回の調査地点の結果を時代ごとに簡単に分析し、加えて特徴のある遺物を紹介してみる。

古墳時代以降では合計45軒の竪穴住居跡が検出された。内訳は古墳時代に含まれるものが16軒、奈良・平安時代に含まれるものが22軒で、時期不明が７軒である。古墳時代の竪穴住居はすべて古墳時代後期で、

山武一本松遺跡の年代観でいうところの第Ⅴ期（古墳時代後期の、須恵器の杯身・杯蓋模倣の土師器杯が杯の主体となる時期で、概ね5世紀の末葉から7世紀の中葉までの年代)、一部Ⅵ期(奈良平安時代1期：丸底を呈するロクロ未使用の杯が主体、7世紀後葉から8世紀の前半）に該当すると考えられる。古墳時代後期の特徴は、住居によっては多量の土器が埋土中に含まれ、また、杯の口縁端が著しく磨滅しているものが多数見られることから、住居がごみ捨て場として使用されていたことはもとより、供膳具類の使用頻度の高さを読みとることができるとともに、安定的に集落が営まれていたことがうかがえる。

一方、奈良・平安時代の竪穴住居は、山武一本松遺跡第Ⅵ期の途中、第Ⅶ期（奈良平安時代2期：ロクロ使用、未使用の杯があり、箱形赤彩土師器杯や皿が現れる、年代は8世紀の後半から9世紀の前半)、第Ⅷ期（奈良平安時代3期：土師器杯がほとんどロクロ使用のもので、高台が付くものや、内面を黒色処理するものが含まれる、年代は9世紀後半以降）に含まれる。

そこで、今回の調査区検出遺構の遺物からその竪穴住居の時期を山武一本松遺跡の年代観に当てはめてみると次のようになる。

山武一本松遺跡第Ⅴ期　SI 2・3・5・13・15・18・19・20・21・22・25・30・36・40・42・43・45

山武一本松遺跡第Ⅵ期　SI 14・26・32・35・37・39

山武一本松遺跡第Ⅶ期　SI 4・6・7・8・11・16・17・24・38・44

山武一本松遺跡第Ⅷ期　SI 23・27・33・41・46・47

この結果から調査区内の遺構の分布状況を見ると、第Ⅴ期の竪穴住居は調査区全域に分布するが、特に台地突端部に多く見られるようである。住居の規模は一辺が9m以上の大形住居から一辺4mに満たない小形住居まで存在する。第Ⅵ期の竪穴住居は第Ⅴ期に比べやや台地奥に位置する。住居の規模は一辺4m～4.5m前後とほぼ一定である。第Ⅶ期の竪穴住居は再び台地縁辺に造られるようになる。小形で柱穴を持たないものが半数を占める。第Ⅷ期の竪穴住居は逆にやや台地奥よりに見られるようになる。住居の規模は一辺5m前後のものもあるが、一辺3m前後とかなり小型化し柱穴を持たないものが主体を占める。

ところで、調査区内の竪穴住居の終焉については、東金市久我台遺跡[9]の成果を援用するならば次のように考えられる。つまり、調査区内からは久我台奈良平安時代Ⅷ期（10世紀後半から11世紀代）に相当する土師器高台付杯の足高の高台部片が出土しているので、少なくとも10世紀以降まで連綿として当遺跡が存続していたことは確実だろうが、出土量が極端に少なく高台付皿もほとんど見られないので、主体となる時期はその直前のほぼ9世紀代までのようである。掘立柱建物跡についても出土遺物が極めて少ないので、はっきりしたことは言えないが、切り合うすべての竪穴住居より新しいので、奈良・平安時代に含まれることは確実であり、その性格や竪穴住居との関連も今後検討しなければならないであろう。

遺物の特徴としては特に県内産須恵器杯・甕・甑類の出土量が比較的多いことが挙げられる。久我台遺跡では千葉市所在の中原窯や宇津志野窯を初めとした製品と考えられるものが多数存在するということから、当地にも中原窯や宇津志野窯といった千葉市域産の須恵器が一定量供給されたものと考えられる。

また、山武一本松遺跡報告書でもふれられているように、文字資料が多いのが当遺跡の一つの特徴である。出土墨書資料は記号や判読できないものを含めて写真図版64及び第17表に掲載した合計23点である。最も多いのが「万所」又は「所」で、「万所」が3例、「所」が3例確認できる。そのほか「大立」2例、「山」、「幡」、「上」が各1例挙げられる。

最後に今回の一本松遺跡の調査範囲はすでに調査された山武一本松遺跡の面積から比べれば圧倒的に狭

く、また、遺構数についても比較にならないほどである。すなわち、今回の調査は極めて限定された範囲内の調査であるため、そこから一本松遺跡全体の評価をするには大変危険であり、そのため今回の調査の詳細な分析を述べることはあえてしなかった。今回の調査成果を既に成果が公表されている山武一本松遺跡を含めた一本松遺跡全体の研究・評価の基礎的資料として提示するにとどめたい。

注

1　西口　徹　1984　「No.7遺跡」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VI』(財)千葉県文化財センター

2　吉林昌寿　1994　「先土器時代」『宮内遺跡発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター

3　矢本節朗　1996　『多古町千田台遺跡』(財)千葉県文化財センター

4　新田浩三　1995　「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16－20周年記念論集－』(財)千葉県文化財センター

5　高橋博文・奥田正彦　1986「遠山天ノ作遺跡」『主要地方道成田松尾線III』(財)千葉県文化財センター

6　新田浩三　1991　「出口遺跡」「佐原市出口遺跡第１文化層出土の楔形石器」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI』(財)千葉県文化財センター

7　青木幸一・吉田直哉・阿部信一郎　1994　『大網山田台遺跡群Ｉ』(財)山武郡市文化財センター

8　小林清隆・石本俊則　1995　『大網山田台遺跡群II』(財)山武郡市文化財センター

9　萩原恭一・小林信一　1988　『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター

第15表　竪穴住居跡計測表　（　）内推定値

遺構番号	主軸長×横軸長	方位	カマドの有無	カマド位置	床面積	壁高 浅～高	主柱穴数	柱穴深 浅～深	その他	時　期
SI 1	(4.8m)×4.8m	N－10°－W	有	北西	(23.04m²)	28cm～34cm	不明	——	——	不明
SI 2	6.8m×6.7m	N－10°－W	有	北西	45.56m²	10cm～28cm	4	64cm～68cm	出入口ピット1	古墳
SI 3	3.7m×4.1m	N－21°－W	有	北西	15.17m²	14cm～38cm	4	38cm～50cm	出入口ピット1	古墳
SI 4	3.7m×4.1m	N－62°－E	有 新旧1基ずつ	東(北)	15.17m²	4cm～30cm	0	－	出入口ピット2	奈良・平安
SI 5	9.4m×8.4m	N－25°－W	有	北西	78.96m²	13cm	4	43cm～66cm	——	古墳
SI 6	4.1m×4.1m	N－60°－E	有	北東	16.81m²	22cm～40cm	0	——	——	奈良・平安
SI 7	4.4m×4.6m	N－59°－E	有	北東	20.24m²	30cm～45cm	4 or 5	16cm～57cm	所属不明ピット有	奈良・平安
SI 8	3.6m×3.6m	N－12°－E	有	北東	12.96m²	0	0	——	——	奈良・平安
SI 9	3.2m×3.6m	N－11°－W	有	北西	11.52m²	6 cm～22cm	0	——	——	不明
SI 10	(3.7m)×3.7m	N－64°－E	不明	——	(13.69m²)	32cm	不明	——	——	不明
SI 11	4.9m×5.2m	N－41°－W	有	北西	25.48m²	30cm～54cm	4	57cm～63cm	出入口ピット1	奈良・平安
SI 12	(遺構図なし)									古墳
SI 13	7.5m×7.6m	N－30°－W	不明	——	57m²	34cm	3	80cm	出入口ピット1	古墳
SI 14	3.4m×4.8m	N－61°－E	有	北東	16.32m²	30cm～54cm	0	——	——	奈良・平安
SI 15	4.8m×4.8m	N－32°－W	有	北西	23.04m²	2 cm～10cm	4	54cm～56cm	出入口ピット1	古墳
SI 16	5.2m×(5.2m)	N－34°－W	有	北西	(27.04m²)	0cm～30cm	(2)	62cm～80cm	——	奈良・平安
SI 17	3.8m×(3.8m)	N－20°－W	有	北西	14.44m²	20cm～30cm	(3)	34cm～55cm	出入口ピット1	奈良・平安
SI 18	3.1m×(3.3m)	N－20°－E	有	北東	10.23m²	14cm～20cm	0	——	——	古墳
SI 19	6.0m×5.9m	N－25°－W	有	北西	35.4m²	25cm～40cm	4	56cm～71cm	出入口ピット1	古墳
SI 20	(5.8m)×5.8m	N－51°－E	有	北東	33.64m²	40cm	4	45cm～66cm	——	古墳
SI 21	———	(N－17°－W)	不明	——	——	40cm	不明	——	——	古墳
SI 22	7.4m×6.7m	N－44°－W	有	北西	49.58m²	15cm～20cm	4	45cm～53cm	——	古墳
SI 23	3.1m×3.2m	N－48°－E	有	北東	9.92m²	30cm	0	——	出入口ピット1	奈良・平安
SI 24	(4.3m)×4.3m	N－48°－E	有	北東	(18.49m²)	25cm～50cm	(2)	——	——	奈良・平安
SI 25	(7.5m)×7.2m	N－24°－E	有	北東	(54m²)	22cm～32cm	4	56cm～79cm	——	古墳
SI 26	(5.3m)×5.7m	N－15°－W	有	北西	(30.21m²)	12cm	4	40cm～73cm	出入口ピット1	奈良・平安
SI 27	2.6m×3.0m	N－25°－W	有	北西	7.8m²	20cm	0	——	——	奈良・平安
SI 28	3.5m×3.5m	N－62°－E	有	北東	12.25m²	8 cm～20cm	不明	——	——	不明
SI 29	5.0m×5.0m	N－3°－E	有	北東	25.00m²	0 cm	4	47cm～75cm	——	不明
SI 30	6.4m×6.6m	N－9°－W	不明	——	42.24m²	0 cm	4	48cm～78cm	出入口ピット1	古墳
SI 31	3.7m×3.7m	N－20°－W	有	北西	13.69m²	10cm	0	——	出入口ピット1	不明
SI 32	5.1m×5.5m	N－13°－W	有	北西	28.05m²	10cm～25cm	4	37cm～68cm	——	奈良・平安
SI 33	3.7m×(3.7m)	N－26°－W	有	北西	13.69m²	30cm	0	——	——	奈良・平安
SI 34	4.5m×3.9m	N－10°－W	有	北西	17.55m²	5 cm	0	——	——	不明
SI 35	5m×5.3m	N－5°－W	有	北西	26.5m²	30cm～40cm	4	55cm～73cm	——	奈良・平安
SI 36	4.8m×5.2m	N－13°－W	有	北西	24.96m²	10cm～30cm	4	42cm～67cm	——	古墳
SI 37	4.5m×4.4m	N－8°－W	有	北西	19.8m²	20cm	0	——	——	奈良・平安
SI 38	4.9m×4.7m	N－11°－W	有	北西	23.03m²	50cm	4	43cm～58cm	出入口ピット1	奈良・平安
SI 39	4.9m×5.6m	N－20°－W	有	北西	27.44m²	30cm	4	34cm～66cm	壁柱穴1	奈良・平安
SI 40	5.8m×5.9m	N－11°－W	有	北西	34.22m²	0 cm～10cm	4	60cm～92cm	——	古墳
SI 41	6.5m×6.5m	(N－30°－W)	不明	——	42.25m²	35cm～40cm	4	42cm～57cm	——	奈良・平安
SI 42	5.2m×5.1m	N－22°－W	有	北西	26.52m²	10cm～25cm	4	62cm～77cm	出入口ピット1	古墳
SI 43	3.7m×3.7m	N－11°－W	有	北西	13.69m²	40cm	0	——	ピット1 or 2	古墳
SI 44	3.1m×3.5m	N－10°－W	有	北西	10.85m²	25cm	0	——	——	奈良・平安
SI 45	6.6m×6.5m	N－21°－W	有	北西	42.9m²	5 cm～30cm	4	53cm～66cm	——	古墳
SI 46	4.9m×5.1m	N－13°－W	有	北西	24.99m²	30cm～40cm	4	34cm～78cm	——	奈良・平安
SI 47	(4.2m×4.2m)	N－13°－W	有	北西	(17.64m²)	15cm	不明	——	——	奈良・平安

第16表　遺構別出土土器破片数及びその比率　(　)内数値は土器総数に対する比率

遺構	土師器 (高)杯・皿	土師器 甕・甑・壺	土師器 その他	土師器 総数	須恵器 杯・皿・椀類	須恵器 甕・甑類	須恵器 その他	須恵器 総数	総数	土師／全体 (%)	須恵／全体 (%)	時期
SI 1	0(0)	12(100)	0(0)	12(100)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	12	100	0	不明
SI 2	258(29)	624(70)	0(0)	882(99)	11(1)	0(0)	0(0)	11(0)	893	99	1	古墳
SI 3	40(10)	346(89)	0(0)	386(99)	4(1)	1(0)	0(0)	5(0)	391	99	1	古墳
SI 4	211(31)	383(56)	0(0)	594(87)	56(8)	35(5)	0(0)	91(13)	685	87	13	奈良・平安
SI 5	366(23)	1186(74)	0(0)	1552(97)	20(1)	30(2)	0(0)	50(3)	1602	98	2	古墳
SI 6	62(24)	166(63)	0(0)	228(87)	18(7)	15(6)	0(0)	33(13)	261	87	13	奈良・平安
SI 7	115(20)	423(75)	0(0)	538(95)	12(2)	19(3)	0(0)	31(5)	569	95	5	奈良・平安
SI 8	122(24)	346(68)	0(0)	468(92)	5(1)	33(7)	0(0)	38(8)	506	92	8	奈良・平安
SI 9									遺物なし			不明
SI 10	15(25)	44(73)	0(0)	59(98)	0(0)	1(2)	0(0)	1(2)	60	99	1	不明
SI 11	198(22)	686(76)	1(0) (紡錘車)	885(98)	11(1)	11(1)	0(0)	22(2)	907	98	2	奈良・平安
SI 12	120(15)	668(84)	0(0)	788(99)	5(1)	0(0)	0(0)	5(1)	793	99	1	古墳；遺構図なし
SI 13	469(29)	1113(70)	2(0) (手づくね・紡錘車)	1584(99)	13(1)	6(0)	0(0)	19(1)	1603	99	1	古墳
SI 14	62(19)	256(78)	0(0)	318(97)	4(1)	5(2)	0(0)	9(3)	327	97	3	奈良・平安
SI 15	99(21)	367(78)	0(0)	466(99)	5(1)	2(0)	0(0)	7(1)	473	99	1	古墳
SI 16	58(9)	565(89)	0(0)	623(98)	9(1)	6(1)	0(0)	15(2)	638	98	2	奈良・平安
SI 17	135(14)	782(83)	0(0)	917(97)	21(2)	7(1)	0(0)	28(3)	945	97	3	奈良・平安
SI 18	16(21)	53(71)	0(0)	69(92)	6(8)	0(0)	0(0)	6(8)	75	92	8	古墳
SI 19	228(18)	1023(79)	3(1) (手づくね・勾玉)	1254(98)	5(1)	16(2)	0(0)	21(2)	1275	98	2	古墳
SI 20	102(17)	489(82)	0(0)	591(99)	5(1)	1(0)	0(0)	6(1)	597	99	1	古墳
SI 21	6(32)	13(68)	0(0)	19(100)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	19	100	0	古墳
SI 22	128(38)	197(57)	0(0)	325(95)	13(4)	3(1)	0(0)	16(5)	341	95	5	古墳
SI 23	17(14)	99(80)	0(0)	116(94)	4(3)	3(3)	0(0)	7(6)	123	94	6	奈良・平安
SI 24	112(20)	424(76)	0(0)	536(96)	6(1)	11(2)	5(1)	22(4)	558	96	4	奈良・平安
SI 25	577(22)	1861(73)	0(0)	2438(95)	79(3)	50(2)	0(0)	129(5)	2567	95	5	古墳
SI 26	89(19)	373(78)	0(0)	462(97)	13(3)	1(0)	0(0)	14(3)	476	97	3	奈良・平安
SI 27	110(20)	397(74)	0(0)	507(94)	11(2)	21(4)	0(0)	32(6)	539	94	6	奈良・平安
SI 28	2(33)	1(17)	0(0)	3(50)	1(17)	2(33)	0(0)	3(50)	6	50	50	不明
SI 29	0(0)	1(50)	0(0)	1(50)	1(50)	0(0)	0(0)	1(50)	2	50	50	不明
SI 30	6(10)	54(85)	0(0)	60(95)	2(3)	1(2)	0(0)	3(5)	63	95	5	古墳
SI 31	6(6)	87(91)	0(0)	93(97)	3(3)	0(0)	0(0)	3(3)	96	97	3	不明
SI 32	102(17)	462(78)	0(0)	564(95)	15(3)	12(2)	0(0)	27(5)	591	95	5	奈良・平安
SI 33	25(19)	93(70)	0(0)	118(89)	10(7)	5(4)	0(0)	15(11)	133	89	11	奈良・平安
SI 34	140(39)	186(53)	0(0)	326(92)	13(3)	16(5)	0(0)	29(8)	355	92	8	不明
SI 35	161(18)	691(77)	5(0)	857(95)	6(1)	36(3)	3(1)	45(5)	902	95	5	奈良・平安
SI 36	94(15)	480(79)	0(0)	574(94)	19(3)	20(3)	0(0)	39(6)	613	94	6	古墳
SI 37	172(18)	725(75)	0(0)	897(93)	47(5)	22(2)	0(0)	69(7)	966	93	7	奈良・平安
SI 38	387(23)	1095(65)	0(0)	1482(88)	106(7)	85(5)	0(0)	191(12)	1673	89	11	奈良・平安
SI 39	70(13)	434(80)	0(0)	504(93)	15(3)	21(4)	0(0)	36(7)	540	93	7	奈良・平安
SI 40	75(28)	178(68)	0(0)	253(96)	9(3)	2(1)	0(0)	11(4)	264	96	4	古墳
SI 41	193(17)	909(79)	0(0)	1102(96)	13(1)	37(3)	0(0)	50(4)	1152	96	4	奈良・平安
SI 42	56(21)	201(75)	0(0)	257(96)	2(1)	10(3)	0(0)	12(4)	269	96	4	古墳
SI 43	62(36)	95(56)	0(0)	157(92)	2(2)	12(6)	0(0)	14(8)	171	92	8	古墳
SI 44	40(16)	184(72)	0(0)	224(88)	18(7)	13(5)	0(0)	31(12)	255	88	12	奈良・平安
SI 45	258(30)	573(67)	0(0)	831(97)	7(1)	13(1)	5(1)	25(3)	856	97	3	古墳
SI 46	256(30)	489(57)	4(1)	749(88)	38(4)	66(8)	0(0)	104(12)	853	88	12	奈良・平安
SI 47	182(73)	43(17)	1(1)	226(91)	4(2)	17(7)	0(0)	21(9)	247	91	9	奈良・平安

第17表　墨書土器一覧

番号	遺　　構	挿図番号	器　　種	墨書文字	墨書位置	遺物番号	備　　考
1	SI 4	9	土師器・杯	万所	底部外面	41・59	
2	SI 43		土師器・皿	万所	体部外面	5	
3	SI 16	2	土師器・杯	万所	体部外面	3	
4	SI 13		土師器・杯	所	体部	206	
5	SI 33	4	土師器・杯	所	体部・底部	10	
6	SI 46	5	土師器・杯	所	体部外面	3・8	
7	SX 4	8	土師器・杯	幡	底部外面	1	
8	SX 4	9	土師器・高台付杯	上	高台裏	1	
9	SI 37		土師器・杯	大立	底部外面	1	
10	SI 39		土師器・杯	大立	底部外面	10	
11	F 4－64		土師器・杯		体部外面	1	
12	SB 18		土師器・杯		底部外面	1	
13	SB 10		土師器・杯	山	体部	1	
14	F 4－68		土師器・杯		底部外面	1	
15	SB 9		土師器・杯		底部外面	10	
16	SI 46		土師器・杯		底部外面	2	
17	SB 6		土師器・杯		底部外面	7	
18	SI 39		土師器・杯		体部内面	11	
19	SB 17		須恵器・杯		底部外面	2	
20	SI 17		土師器・杯		体部外面	1	
21	SI 47		土師器・杯	所	体部	1	
22	SI 13		土師器・杯		体部	206	4と同一
23	SI 6	5	須恵器・杯	88	体部外面	2・15・19	

（図版64に対応する）

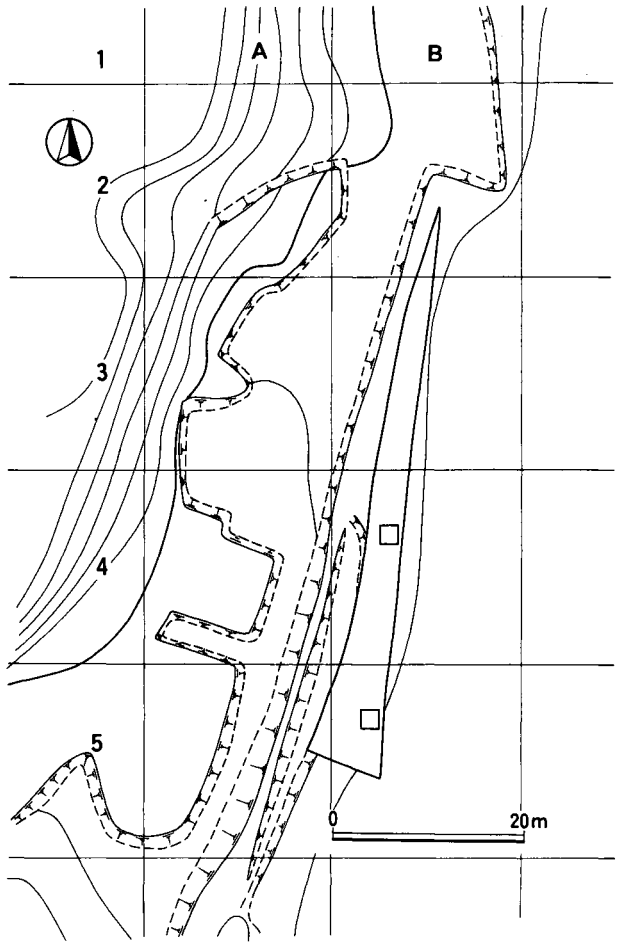
第18表　ヘラ記号土器一覧

遺構	挿図番号	記号	器　種	遺物番号
SI 6	9	╳	須恵器・杯	12
SI 7	4	⅄	須恵器・杯	34
SI 20	4	╳	須恵器・杯	11
SI 45	3	⅄	土師器・杯	12
SI 45	4	╳	土師器・杯	17・19・46
SI 35	1	╳	土師器・杯	1
SI 33	9	⅄	須恵器・甕	8・13

第３章　山田台No.６－２遺跡

第１節　立地及び調査の概要

調査区は、一本松遺跡調査区北端から北へ210mの所に位置し、同一台地上にあるため遺跡としては連続した同一遺跡と考えられる。調査地区周辺は調査前は畑であった。平成５年１月11日から表土除去を開始し、遺構精査及び遺物取上げを同年１月29日まで行い終了した。調査範囲は道路路線内でしかも地形との関係で南北長さ59m、東西底辺長さ８mの南北方向に極めて細長い三角形状を呈する。調査対象面積は172㎡である。遺構は調査区南端で竪穴住居１軒、調査区北端で重複して４軒の合計５軒検出した。また、調査区全体に著しい攪乱を受けているため、遺構の残存状況や、重複関係がはっきりしない箇所もある。よって遺物も比較的少ない。下層は２か所計７㎡の確認調査を実施したが（第112図）、遺物・遺構は確認できなかった。



第112図　下層確認調査グリッド配置図

第２節　遺構と遺物

１　奈良・平安時代

竪穴住居

SI １（第114図、図版68・70）

調査区南端で一部調査区外にかかるように検出した。主軸はＮ－16°－Ｗである。主軸長は4.4m×4.4mである。床面積は19.6m²である。壁高は42cmである。かまどは北側壁中央近くにあり、左袖外側から壁にかけて攪乱を受けている。周溝は調査範囲内では確実に全周している。主柱穴は確認できない。

遺物は土師器杯５点、同高台付杯１点、須恵器杯５点(県内産３、常陸産１、その他１)、土師器甕26点、同鉢１点、須恵器甕６点(すべて県内産)、同瓶１点で総点数45点になる。１は土師器杯で、底部は丸底に近いが、立上がりは明瞭である。外面底部にはヘラによる「十」字の記号が認められる。口縁端が内面に傾斜するように磨滅している。また、内面には細かな傷がついている。全体に磨滅が進み調整単位がはっきり分からない。２は土師器鉢で、体部中央よりやや上が最大径となる。口縁はヨコナデ調整で、口縁端は磨滅している。外面はヘラ削り調整、内面はヘラナデによる器面調整後丁寧なヨコナデ調整を施す。３はいわゆる常総型甕の体部片で、体部外面に縦方向の粗いヘラミガキ調整を施す。胎土には雲母細粒や0.5mm～２mmの白色砂粒を多量に含む。

SI ２（第115・116図、図版68・70）

かまどは右袖一部を残し、ほぼ全体に攪乱を受けている。北西コーナーは調査区域外になる。柱穴はない。かまどは北側壁中央に位置する。床面の中央部は硬質の床面である。主軸3.6m、直交する軸は推定3.8mを測る。面積は13.68m²である。壁高は30cmを測る。

土器類は土師器杯２点、須恵器杯３点、土師器か須恵器かはっきり判断ができない杯２点、土師器甕40点、土師器甑１点、須恵器甕12点(県内産10、不明２)の計60点である。１～３は須恵器であり、１は杯の口縁部片である。２は甕片で、外面に平行タタキメが明瞭に残る。内面には指の圧痕がある。３も甕であり、同様に外面に平行タタキメが残る。

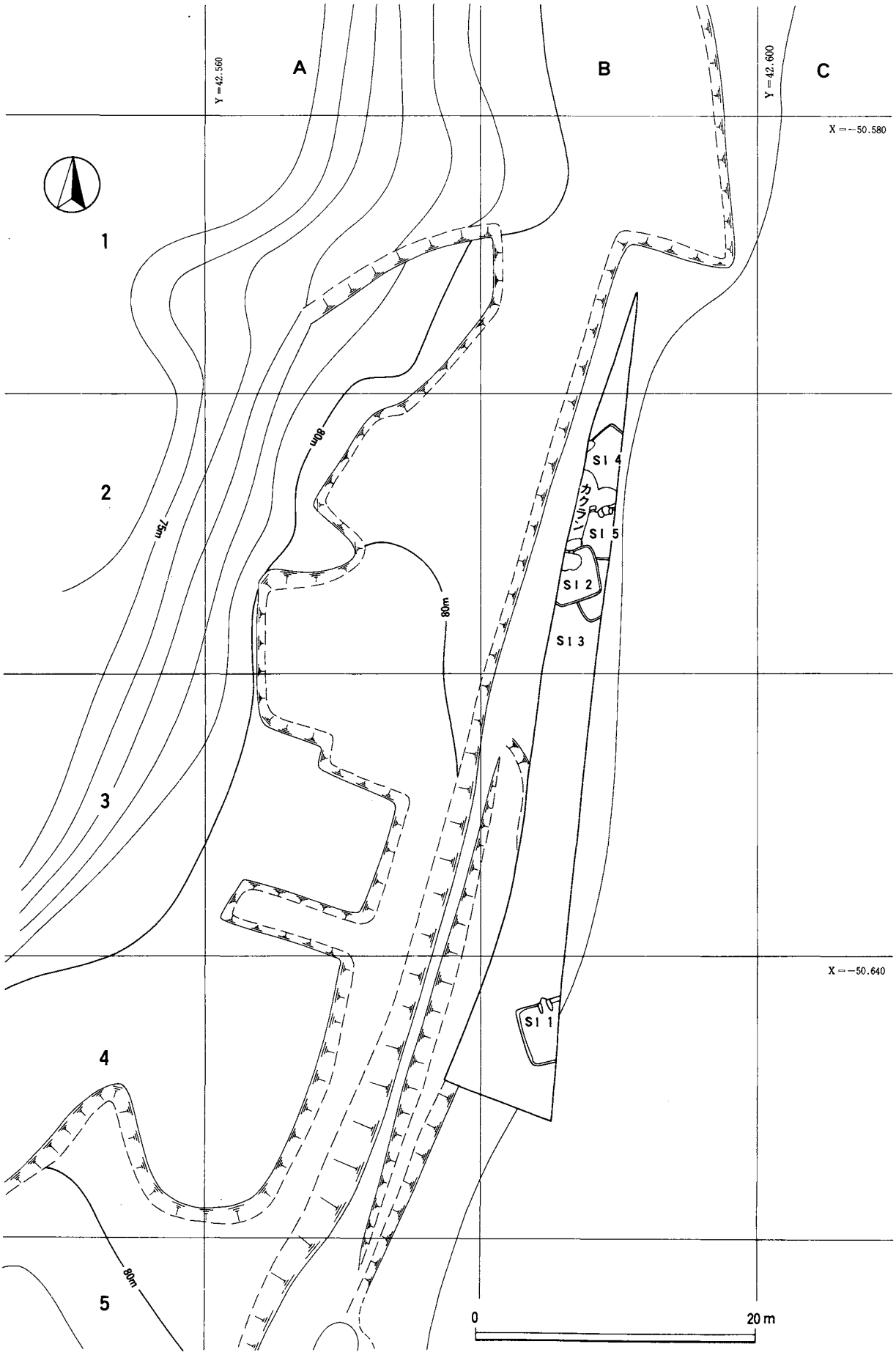
４は滑石製紡錘車で、上面直径31mm、底面直径35mm、中央に直径７mmの孔を穿つ。孔端部からは放射状に無数の傷が付く。上面の孔横には鋭利なもので器面を削って「千」という文字を彫っている。重量21.7gである。５は鉄製紡錘車である。

SI ３（第115・117図、図版69・70）

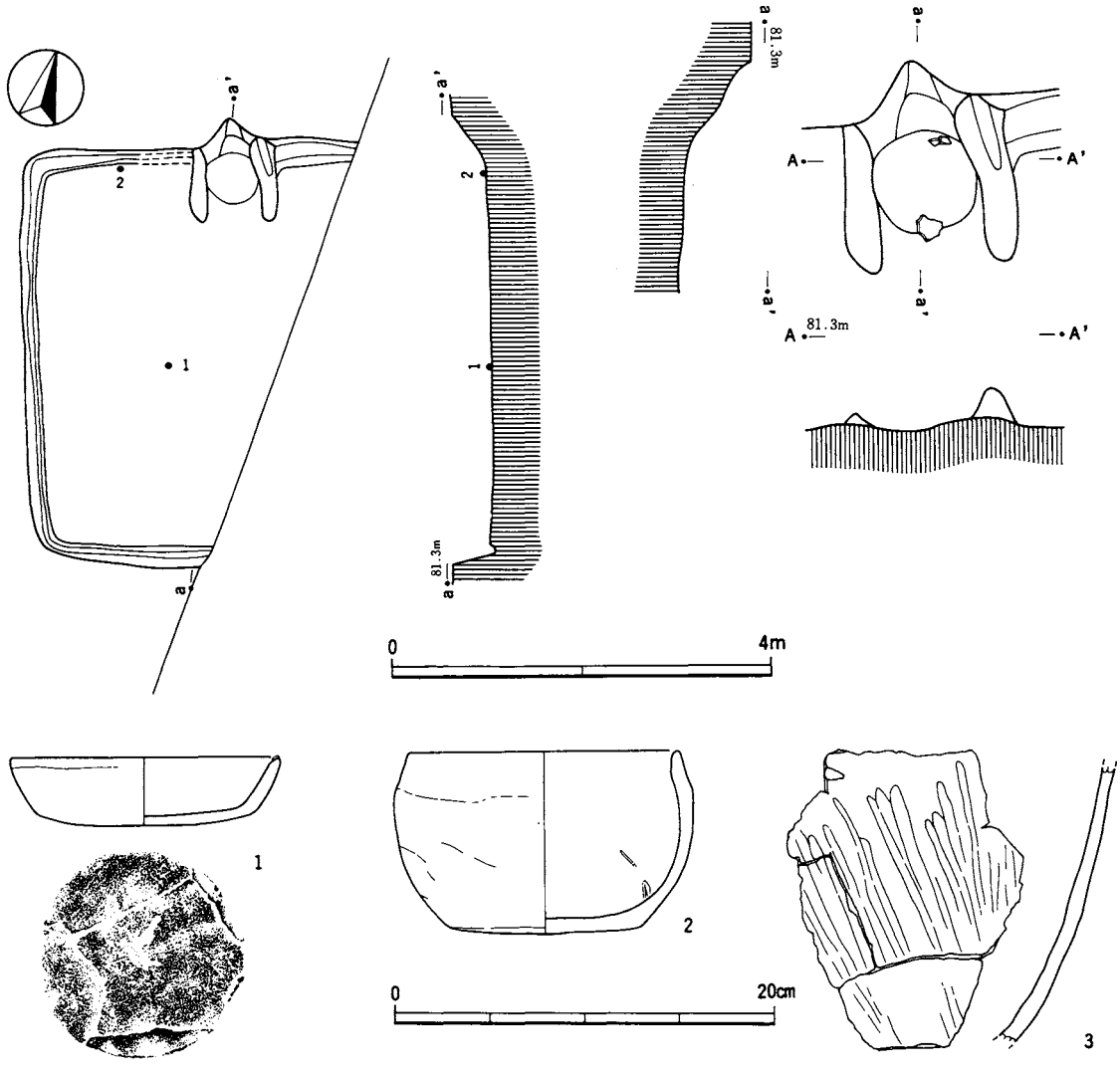
SI ２及びSI ５と重複する。かまど位置不明。SI ２・SI ５の方が新しい。住居一辺の長さは重複によりはっきり分からないが、５mを超えることはない。

遺物は総点数106点で、内訳は須恵器杯23点(県内産14、常陸産５、他地域産３、不明１)、土師器杯22点で、外面体部をヘラ削りするものや、赤彩するものを含む。須恵器甕は18点(県内産17点、不明１点)、土師器甕は52点である。

１はロクロ土師器杯で、底部には粘土が縞状に見え、粘土紐巻上げ痕がはっきりと観察できる。口縁端は少々磨滅している。内面には焼成時にひびが入る。底部と立上がり部分はヘラ削り調整である。体部は直線的に延びる。底部中央部が器厚が最も厚くなる。全体に器厚が厚くしっかりとした作りである。２はロクロ土師器杯であり、内外面に赤色塗彩が施されている。３は土師器杯で、内面には粗いヘラミガキ、外面には粗いヘラ削り調整を施す。４はロクロ土師器杯であり、底部外周と体部下端に回転ヘラ削りが施


A
B
C
Y=42.560
Y=42.600
X=−50.580
X=−50.640
1
2
3
4
5
75m
80m
80m
80m
SI 1
SI 2
SI 3
SI 4
SI 5
カクラン
0
20 m

第113図　遺構配置図



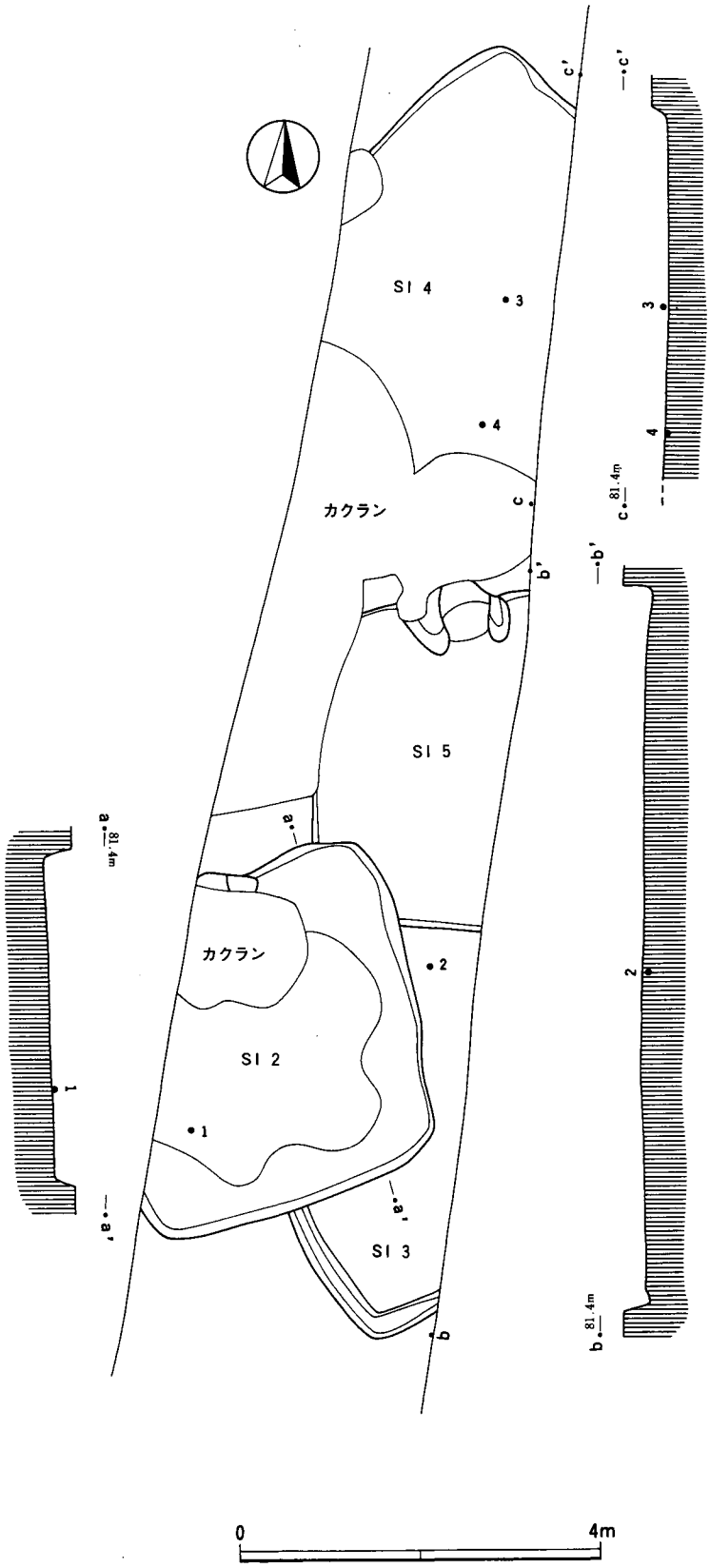
第114図　SI 1

され、底部中央に回転糸切り離し痕跡が残存する。5は須恵器甕であり、外面に平行タタキメが見られる。6は土師器甕で、外面は上方が縦方向のヘラ削り、下方が横方向のヘラ削りである。内面はヘラによる横方向のナデ。口縁端が2段になる。

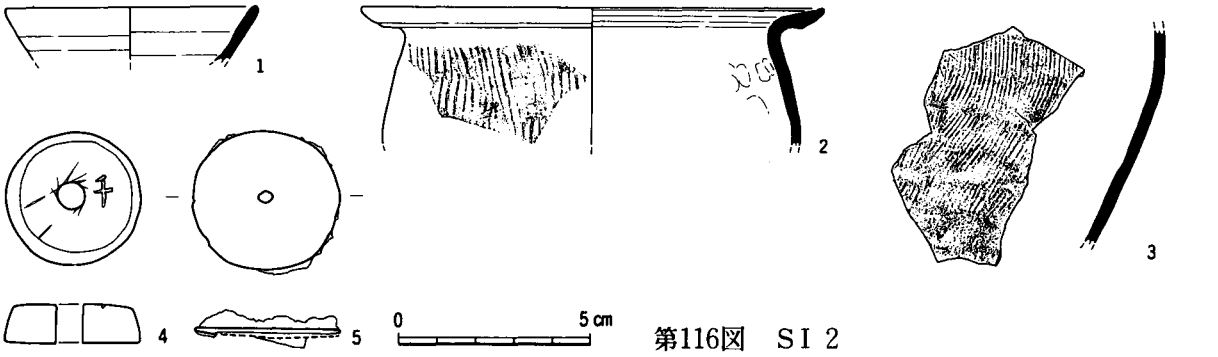
SI 4 (第115・118図、図版69・70)

住居南側に大きく攪乱を受けている。それによって住居の規模ははっきり分からないが、5mを超えることはない。

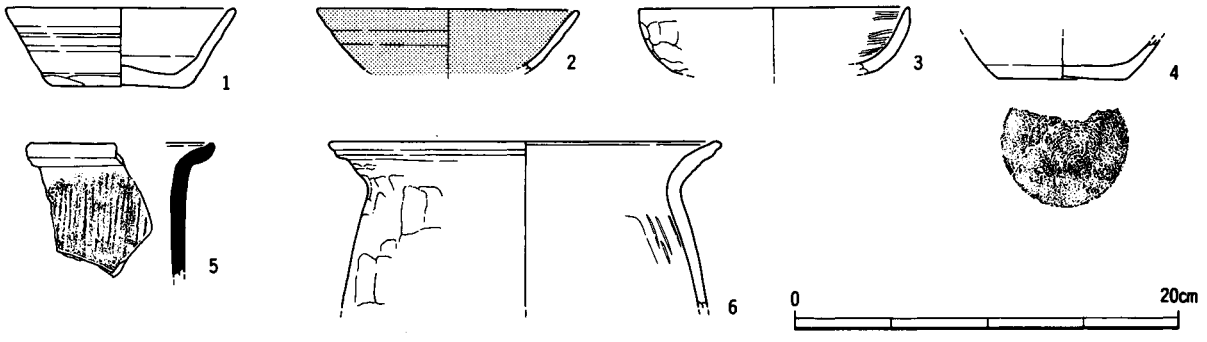
遺物は土師器杯1点、須恵器杯2点(常陸産1、その他1)、須恵器甕4点(県内産)、土師器甕小片42点の計49点である。1は須恵器杯で、口径13.0cmを測る。底部及び立上がり部は回転ヘラ削り調整を施す。立上がりの稜線は明瞭である。内外面とも火襷が見られる。胎土には白色微砂粒を多量、白色針状物質を少量含み、緻密である。底部には「十」字のヘラ記号が刻まれている。生産地は県内と考えられる。2は土師器甕の破片で、口縁端が一条の沈線が入り、やや膨らむ感じがある。3は土師器甕で体部はヘラ削りによって、厚さ3mm～5mmに仕上げられている。口縁部に歪みがあり、胴径、口径にはかなり幅を持たせ



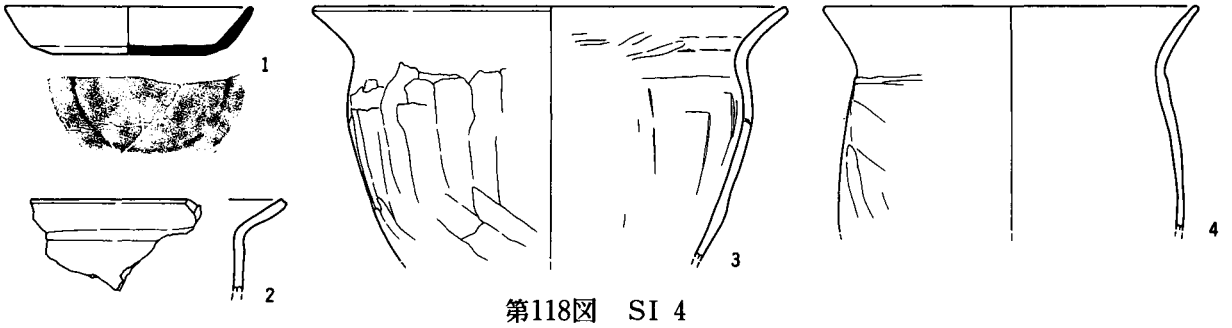
第115図　SI 2～5



第116図　SI 2



第117図　SI 3



第118図　SI 4

て考えた方が良い。口縁部内面には粘土の接合痕が見られる。4は土師器甕でヘラ削りによって器厚を著しく薄く整形している。内面はヘラナデ調整を施す。

SI 5（第115図、図版69）

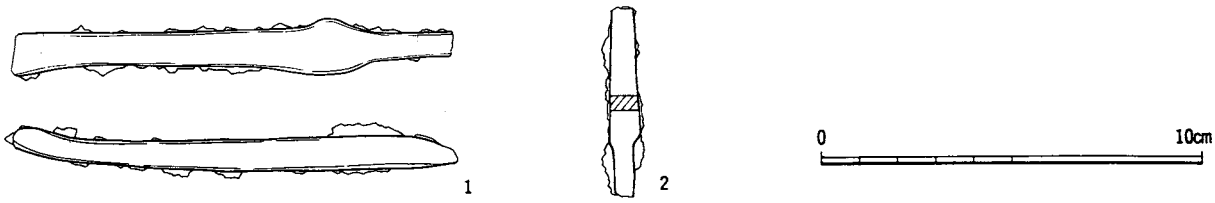
住居北側壁とかまど北側に攪乱を受ける。かまどは北側壁中央に位置する。主軸はN－2°－Wである。住居の東側約3分の2は調査区域外になる。一辺の長さ推定3.6mである。残存壁高30cmである。

遺物はほとんどない。

2　遺構に伴わない遺物（第119図、図版70）

遺構外出土遺物は須恵器甕16点、同杯4点、土師器甕41点、同杯1点及び鉄器である。

第119図1は鉄製のノミ状工具であり、刃部から茎部の上半部までが残存している。2は鉄鏃の棒状部の破片と考えられる。この中の須恵器は竪穴住居内から出土した遺物より時期的に遡るものが多い。



第119図　表採遺物

第3節　まとめ

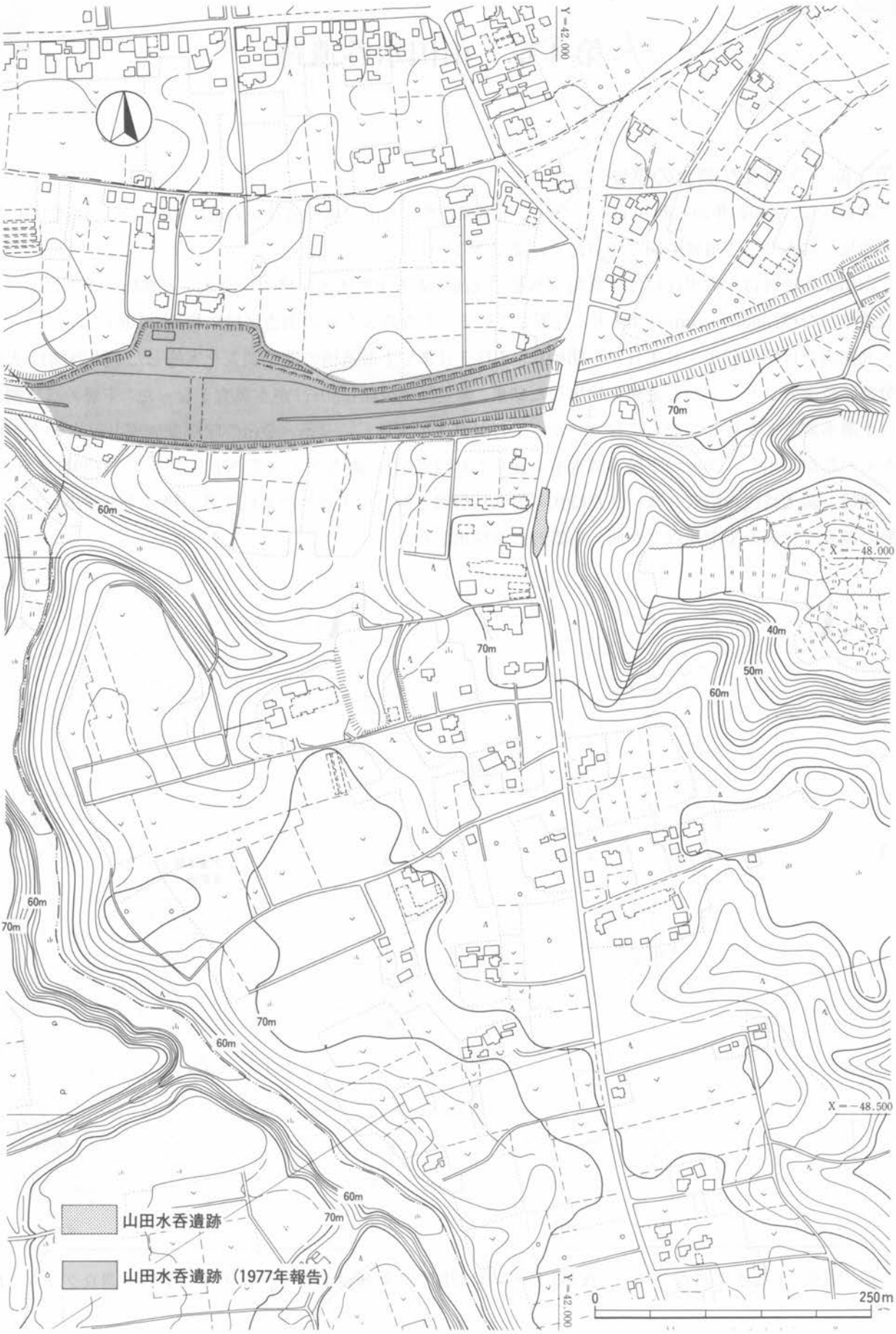
本遺跡からは5軒の竪穴住居跡が検出された。遺構の時期についてはSI 1は8世紀中葉、SI 2は9世紀前半、SI 3は8世紀後半、SI 4は8世紀代3四半期にそれぞれ比定でき、8世紀中葉から9世紀前半までの変遷を追うことが可能である(SI 5については正確な時期は不明であるが、住居跡の重複がSI 3よりも新しいことが判明している)。これらは前述の一本松遺跡と同様に山武一本松遺跡の中に包括されると考えられ、5軒という少ない竪穴住居数にもかかわらず本遺跡の遺構の時期に差があるのは、大遺跡の一端を発掘したからにほかならないであろう。ちなみに、山武一本松遺跡の時期区分[1)]ではVI期・VII期に当たるものと考えられる。

なお、遺物に関しては、SI 1出土の「千」字銘の線刻された石製紡錘車とSI 4出土の「十」のヘラ書きされた須恵器杯が特筆される。このSI 4出土の須恵器杯は胎土に白色針状物質が見られ、底部全面回転ヘラ削り、火襷の痕跡等技法上の特徴、細部の形態から、永田・不入窯の製品であると考えられる。現在までのところ、永田・不入窯跡の出土須恵器の中で焼成前にヘラ書きされたものの出土例はわずかであり、今回の出土は貴重な例と言えるであろう。なお、この須恵器杯は永田・不入編年のIII期[2)]に相当すると考えられる。

注

1　小林清隆・石本俊則　1995　『大網山田台遺跡群II』(財)山武郡市文化財センター

2　郷堀英司・小林信一　1993　「III　各論 」『千葉県文化財センター研究紀要』14　(財)千葉県文化財センター



第120図　山田水呑遺跡周辺地形図

第４章　山田水呑遺跡

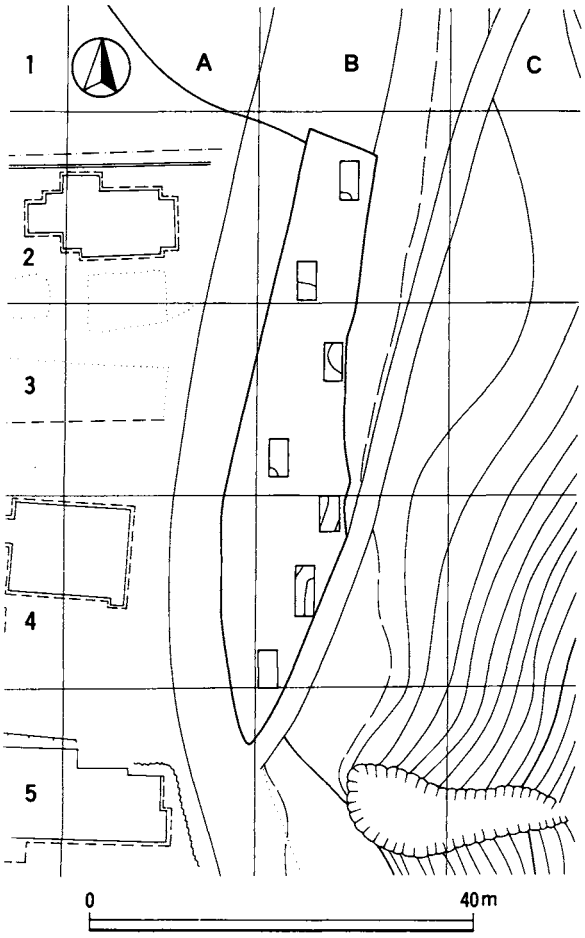
第１節　立地及び調査の概要

調査区は、昭和49年から昭和50年にかけて発掘調査された山田水呑遺跡から南に50mの所に位置する。同一台地上にあり、本遺跡も同一の遺跡と認識できる。

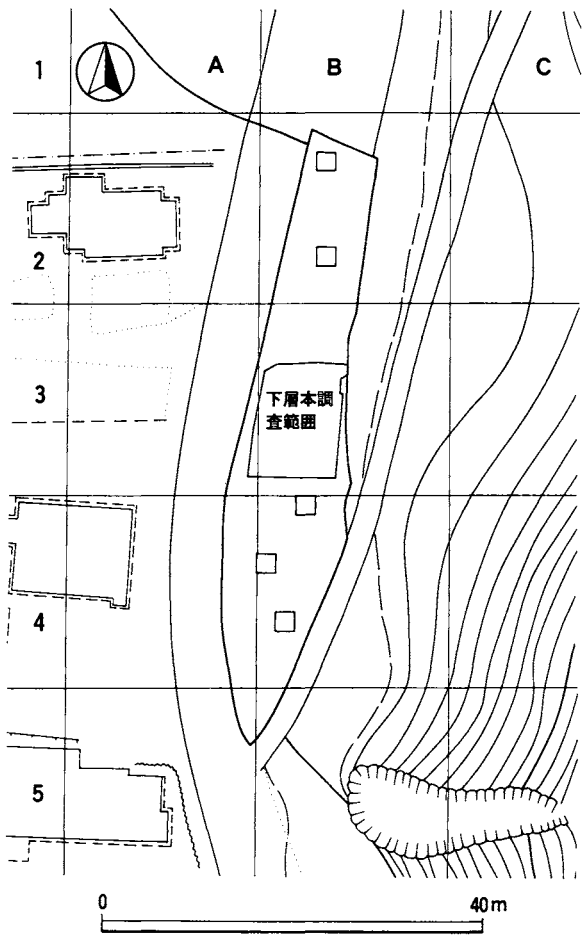
山田水呑遺跡は、太平洋に注ぐ真亀川水系の支流である小野川と印旛沼に流入する鹿島川水系によって浸食された標高60m～70mの台地上に位置している。ちなみに今回の調査区域の標高は70mである。

発掘調査は昭和63年７月１日から開始し、７月７日まで上層遺構の確認調査を実施した(第121図)。大部分の確認調査グリッドから遺構を検出した結果、調査区域全面(580m²)が本調査となった。下層の確認調査は上層本調査と並行しながら７月８日から７月21日まで実施し、２m×２mの確認調査グリッドの２か所から石器が出土し、70m²の下層本調査を実施した(第122図)。調査がすべて終了したのは７月29日である。

遺構は縄文時代の陥穴２基、奈良時代の竪穴住居跡２軒、中・近世の土坑１基、溝２条を検出した。下層の調査では石器集中地点２か所、石器27点を検出した。



第121図　上層確認調査グリッド配置図



第122図　下層確認調査グリッド及び下層本調査グリッド配置図

第2節　遺構と遺物

1　旧石器時代

（1）概要

山田水呑遺跡では2か所の石器集中地点が検出された。両者は隣接し、8m×4mの範囲に広がる(第123図)。出土石器の総点数は27点であり、質量ともに小規模なものである。特に主要な利器が検出されず、石器群の時間的位置付けが、発掘時の出土層位に頼らざるを得ない状況にあるが、剥片剥離技術、石材などから検討していきたい。

層序　調査時の立川ローム層の分層において、Ⅲ層・Ⅳ～Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅷ層が記されていた。各層序の明確な土層説明がなかったため堆積状況を調査担当者に確認した結果、今日一般的となっている立川ローム層の土層細分（島立・新田・渡辺　1992）と、以下のような対応関係にある（第123図)。

Ⅲ層はソフトロームである。ソフト化によって下位に位置するⅣ層・Ⅴ層の多くが、波状を呈する本層にとりこまれ確認が困難となっている。Ⅵ層はATを含み、上下の層と比較して相対的に明るい色調を呈している。層厚から、下位へ拡散しているATをも含んでいると思われ、今日一般的に言われているⅦ層がⅥ層の下半部分に含まれると考えられる。よって、調査当時にいうⅦ層の大部分はⅨ層に、Ⅷ層はⅩ層に対応するものと考えるのが妥当であろう。石器の出土層位は現在一般的な呼称でⅨ層上部に位置する。

再度、AT降灰以前の層序についてその対応関係を確認すると、Ⅵ層下半部からⅦ層上面(調査時)→Ⅶ層(第2黒色帯上半部)・Ⅶ層(調査時)→Ⅸ層(第2黒色帯下半部)・Ⅷ層(調査時)→Ⅹ層(立川ローム層最下層)となる。

（2）石器集中（第123図～第125図、第19・20表、図版71・75・76)

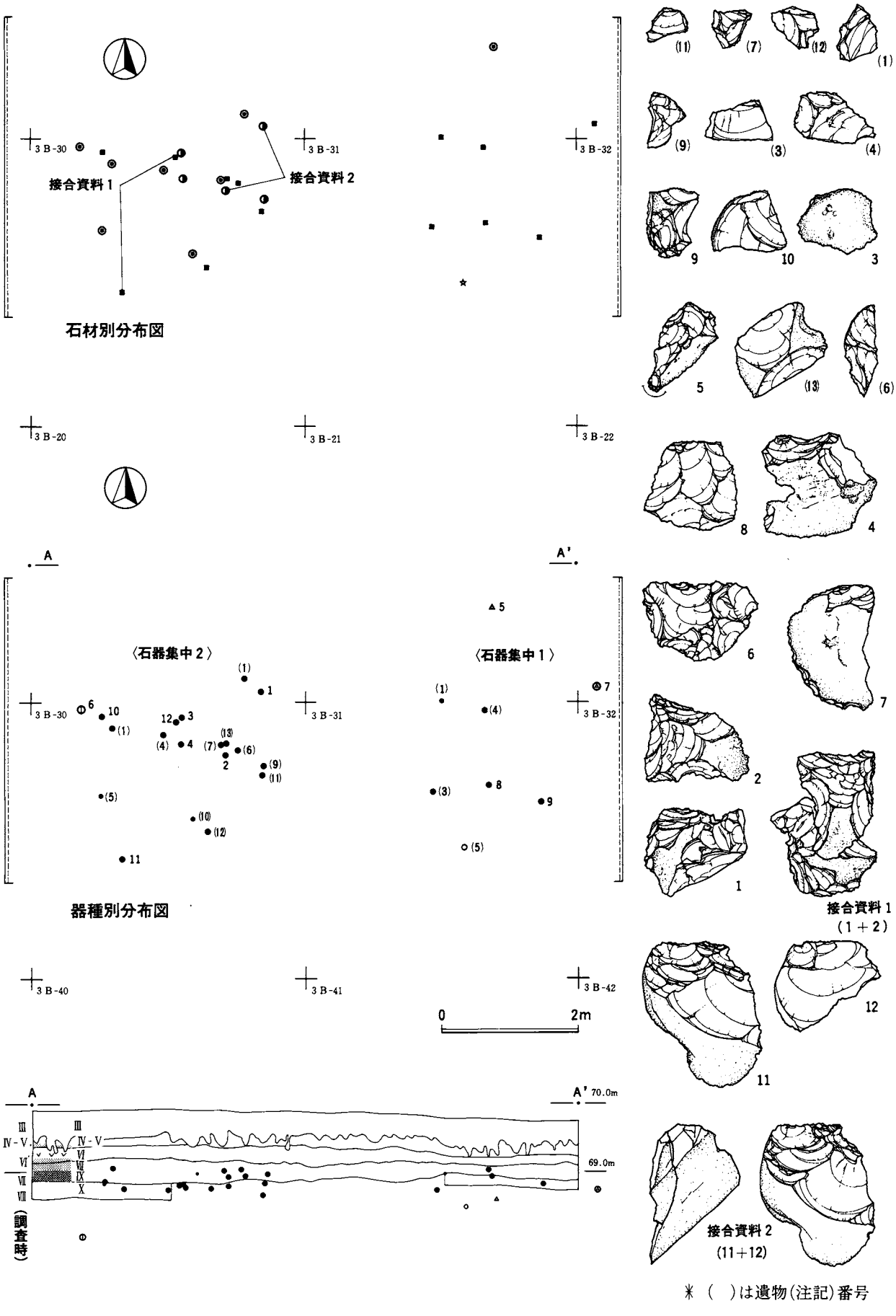
石器群は調査区中央に位置し、石器集中は視覚的に2か所認められる。東側に分布する石器集中は3m×3mの範囲に散漫に広がる。石器の出土点数も8点と小規模である。この石器集中に隣接して、もう一つの石器集中地点がある。これは3m×4mの範囲にやや集中して石器が広がるが、出土点数は19点とやはり小規模な石器集中地点である。今回は便宜的に前者を、石器集中1、後者を石器集中2と仮称する(第123図)。両石器群とも出土層位は調査時においてⅦ層上部とされ、同一文化層と捉えられる。Ⅶ層上部は第2黒色帯下半部のⅨ層上部段階に相当する。

器種構成　両石器集中から出土した石器は、削器1点、石核1点、使用痕のある剥片(以下、U剥片と呼ぶ)1点、剥片20点、砕片3点、礫1点の合計27点で構成され、主要な利器を欠いた貧弱な内容となっている。平面分布では、石器集中1に削器、微細剥離痕のある剥片が検出され、石器集中2では剥片・砕片・石核という剥片剥離に関するものがやや偏在して検出された。

削器（第125図7）の素材剥片は背面が自然面に覆われた幅広の剥片であり、縦位に折断されている。折断の時期は使用に伴うものか否か不明である。縁辺をやや不揃いに調整を施して刃部を形成している。

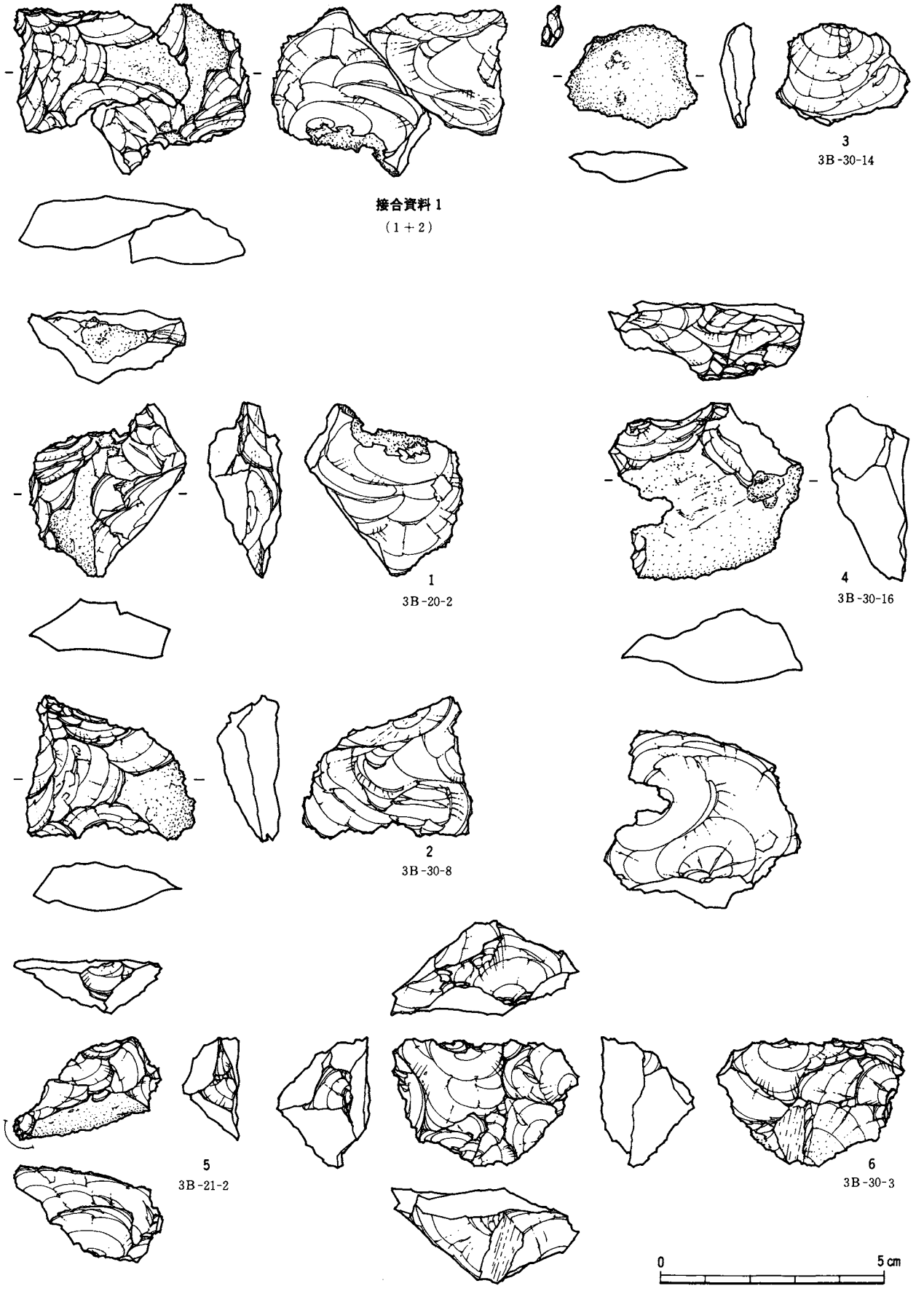
石核（第124図6）は打面転位を繰り返すことによって、作業面と打面が入れ替わり最終的に盤状石核状を呈する。いずれにしても、幅広で寸詰まりな剥片剥離を目的としたものと考えられる。黒曜石製である。石核と同一母岩と思われる剥片が出土しているが接合関係は確認できなかった。

母岩構成　黒曜石、安山岩、メノウの3種に限定される単純な石材構成を示している。黒曜石は1母岩に限られ、夾雑物を含み、余り透明感のないものである。メノウも1母岩に限られ、背面に自然面を持つものが主体的で、自然面は水磨を受けた痕跡を持ち、剥離面とも全体的に白色を呈する。一部には褐色を

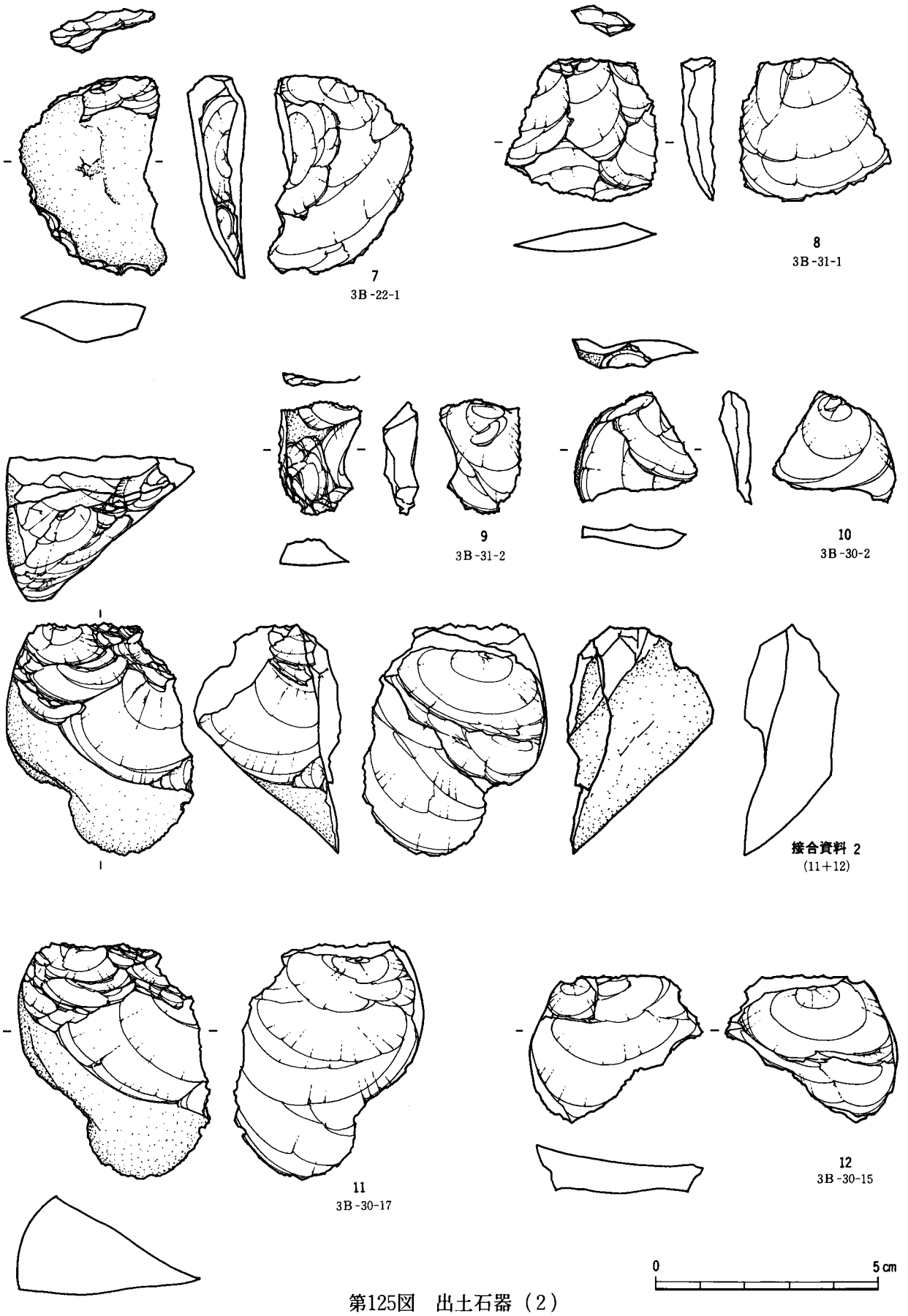


＊（　）は遺物(注記)番号

第123図　器種別・石材別分布図と出土石器（1／2）



第124図　出土石器（1）


7
3B-22-1
8
3B-31-1
9
3B-31-2
10
3B-30-2
接合資料 2
(11+12)
11
3B-30-17
12
3B-30-15
0
5cm

第125図　出土石器（2）

帯びた部分も見られる。安山岩は3つの母岩に分類される。安山岩1は風化剥離面・自然面ともに灰色を呈する。礫面はきめが細かい。安山岩2も同様な風化剥離面・自然面を持つが、安山岩1よりも色調はやや明るく白色の不純物を特徴的に含む。安山岩3はさらに白色を帯びた明るい灰色を呈し、縞状の模様をもつ特徴的な母岩である。

平面分布を見ると、明確に2つの石器集中毎に石材の偏在性が看取される。メノウ1と1点を除く黒曜石1、安山岩1の多くが石器集中2に集中し、安山岩1を含む安山岩2・3が石器集中1に分布している(第123図)。

第19表　石材と器種構成

	削器	石核	U剥片	剥片	砕片	礫	合計	組成率%
安山岩1				9	1		10	37.04
安山岩2	1			1			2	7.41
安山岩3				1			1	3.70
黒曜石1		1	1	4	2		8	29.63
メノウ1				5			5	18.52
頁岩						1	1	3.70
合計	1	1	1	20	3	1	27	100.00
組成率%	3.70	3.70	3.70	74.07	11.11	3.70	100.00	

第20表　旧石器観察表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打面調整	打角・	背面構成 C	S	I	II	III	IV	調整角・	調整部位	折面部位	末端	母岩番号	接合	備考
1	3B-20	2	剥片	38.5	31.5	15.3	16.60	平坦		106	○		2						R	F	メノウ1	1	
2	3B-30	8	剥片	38.5	31.7	13.8	12.22	線状					4			1				F	メノウ1	1	
3	3B-30	14	剥片	23.5	28.5	7.4	5.34	自然			○								B		メノウ1		
4	3B-30	16	剥片	39.4	42.8	17.9	25.20	2	多	113	○		3							F	メノウ1		
5	3B-21	2	U剥片	18.2	35.9	11.7	5.20				○								H	F	黒曜石1		
6	3B-30	3	石核	29.8	43.0	20.4	17.22														黒曜石1		
7	3B-22	1	削器	45.1	32.5	11.8	18.43	平坦	頭部	105	○		1						R		安山岩2		
8	3B-31	1	剥片	32.5	34.1	6.5	7.09	平坦		92			4		1					F	安山岩3		
9	3B-31	2	剥片	17.0	25.2	7.8	3.37	点状			○				1	2				F	安山岩1		
10	3B-30	2	剥片	22.2	27.5	6.5	3.48	平坦		66	○			1						H	安山岩1		
11	3B-30	17	剥片	52.5	40.7	22.6	41.77	平坦	頭部	110	○		6	1						F	安山岩1	2	
12	3B-30	15	剥片	32.9	38.9	11.8	12.13	平坦		129	○		2							H	安山岩1	2	
	3B-30	9	剥片	20.0	14.3	7.9	1.34	平坦		110				1		1			L	F	メノウ1		
	3B-21	1	砕片	4.0	9.2	2.2	0.15													F	安山岩1		
	3B-30	6	剥片	33.5	14.0	5.5	1.78	自然					1			1			R	F	安山岩1		
	3B-30	11	剥片	11.5	16.2	4.6	0.72	平坦		108			1							F	安山岩1		
	3B-30	12	剥片	16.2	15.5	4.3	0.87						1	1		1			H	F	安山岩1		
	3B-30	13	剥片	34.2	25.0	13.5	12.33	自然			○			1		1				F	安山岩1		
	3B-31	3	剥片	15.4	23.2	9.4	4.01						1						MRL		安山岩1		
	3B-31	4	剥片	17.0	30.3	7.1	3.91	平坦		116			2	1		1			B	H	安山岩2		
	3B-20	1	剥片	7.0	11.8	3.2	0.25						1						M		黒曜石1		
	3B-30	1	剥片	20.6	14.8	6.1	1.51	点状					1	1		3			B		黒曜石1		
	3B-30	4	剥片	10.1	16.0	3.2	0.44						2	1					H	F	黒曜石1		
	3B-30	5	砕片	9.8	10.3	7.8	0.54	点状		109		○								F	黒曜石1		
	3B-30	7	剥片	15.1	14.1	4.2	0.64						1	1	1	1			H	H	黒曜石1		
	3B-30	10	砕片	5.9	6.1	1.8	0.06													F	黒曜石1		
	3B-31	5	礫				0.90														頁岩		

1
2
3
4
5
A
B
C
Y=41.960
Y=42.000
X=−47.960
X=−48.000
SI 1
SI 2
SX 1
SD 2
SX 3
SD 1
SX 2
65m
60m
70m
0
20m

第126図　遺構配置図

2　縄文時代

縄文時代の遺構は、２基の陥穴を検出した。

陥穴

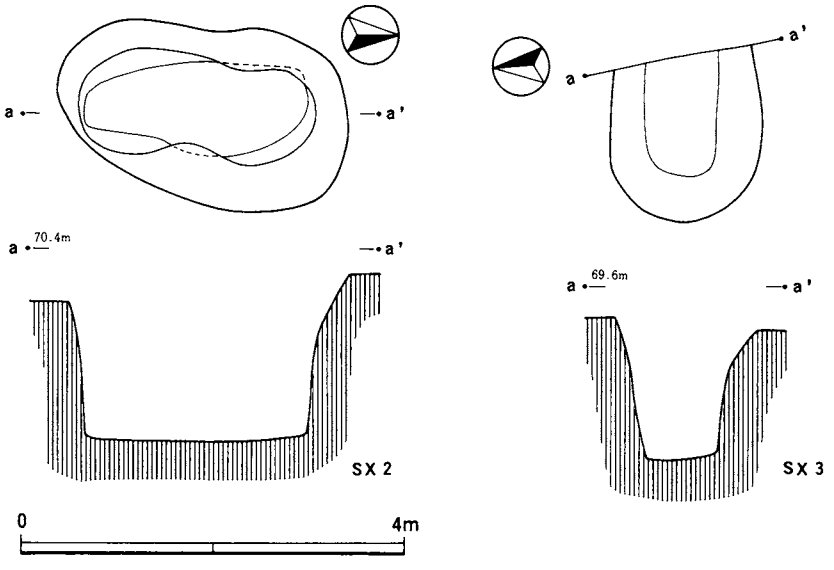
SX 2（第127図、図版72）

Ａ４グリッドから検出されており、SD １に切られていた。平面形は楕円形を呈し、長軸長は3.1m、短軸長は1.9mである。深さは1.7mを測り、底面は平坦であり、壁はわずかにオーバーハングしている部分も見られる。

SX 3（第127図、図版72）

Ｂ３グリッドにあり、SD １に切られて存在する。東側は調査区外に伸びる。平面形は長方形になるものと考えられ、横軸長は1.6mである。深さは1.4mを測り、底面は平坦である。

遺物については検出することはできなかった。



第127図　陥穴

3　奈良時代

発掘区の北部から、竪穴住居跡２軒を検出した。

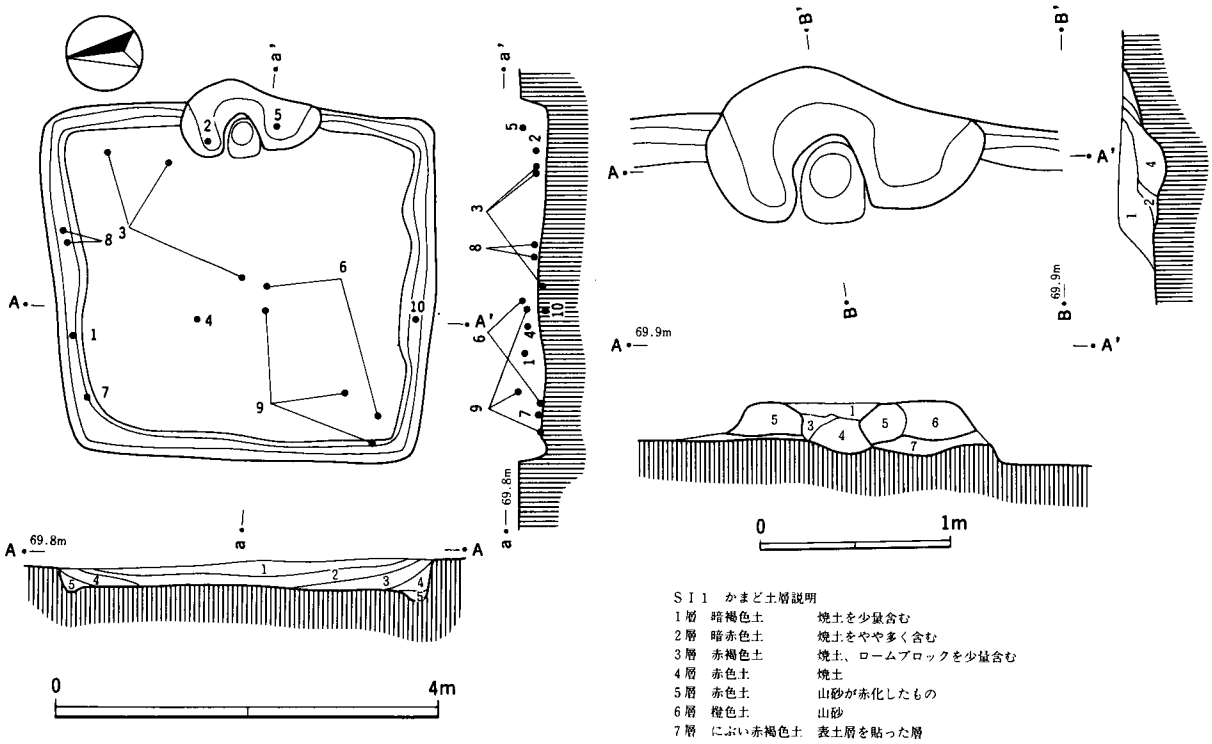
竪穴住居跡

SI 1（第128図、図版73・74・77）

主軸長3.7m、横軸長4.1m、主軸方位はＳ－84°－Ｅである。床面積は15.17m²、壁高は25cm～30cmである。覆土中にはロームブロックが含まれる。主柱穴は見られなかった。かまどは東壁中央にあり、袖部は山砂を主体とした土で造られている。

出土土器は破片を含め162片、2,021.8gが出土した。出土状況は覆土と床面直上のものがある。

１・２は須恵器杯である。１は口径が12.4cmで、底径が8.2cmの箱形に近い形態で、底部に手持ちヘラ削りが施され、胎土に白色針状物質が含まれている。３・４は土師器杯であり、外面には手持ちヘラ削りがなされ、３の内面にはミガキが施されている。５は土師器甕であり、胴部外面には縦方向のヘラ削りが見

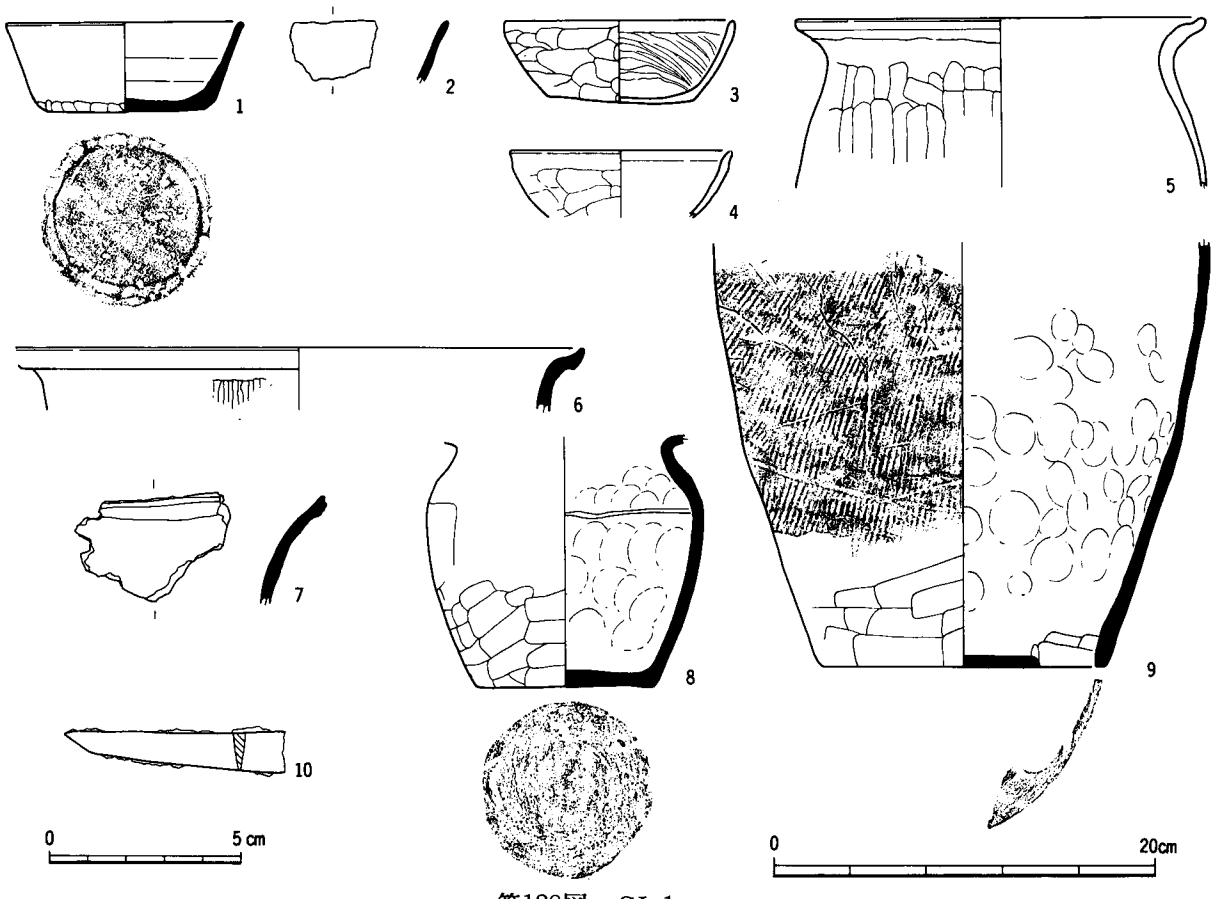


SI1　土層説明

1層	暗褐色土	ロームブロックをやや多く含む
2層	黒褐色土	ロームブロックを少量含む
3層	暗褐色土	橙色スコリア粒を少量含む
4層	にぶい赤褐色土	ソフトローム混入
5層	赤褐色土	ロームブロックを多く含む

SI1　かまど土層説明

1層	暗褐色土	焼土を少量含む
2層	暗赤色土	焼土をやや多く含む
3層	赤褐色土	焼土、ロームブロックを少量含む
4層	赤色土	焼土
5層	赤色土	山砂が赤化したもの
6層	橙色土	山砂
7層	にぶい赤褐色土	表土層を貼った層



第128図　SI 1

られる。6・7は須恵器甕の口縁部であり、6の外面には平行叩きが施されている。

8は須恵器小型甕である。色調は明褐色であり、胴部外面にナデと横方向のヘラ削りが施されているため、一見すると土師器のようであるが、内面に無文の当て具痕が顕著に見られ、底部外面には通有の須恵器甕に見られるような縄目の圧痕が残存していることから、須恵器と判断できた。9は五孔式の須恵器甑であり、胴部外面には縦方向の平行叩き、下端には横方向のヘラ削りがなされ、内面には無文の当て具痕跡が見られる。9はSI 2からも破片が出土している。これらの須恵器は県内の製品であると考えられる。

10は鉄製刀子の刃部片である。

SI 2（第129～131図、図版73・77～79）

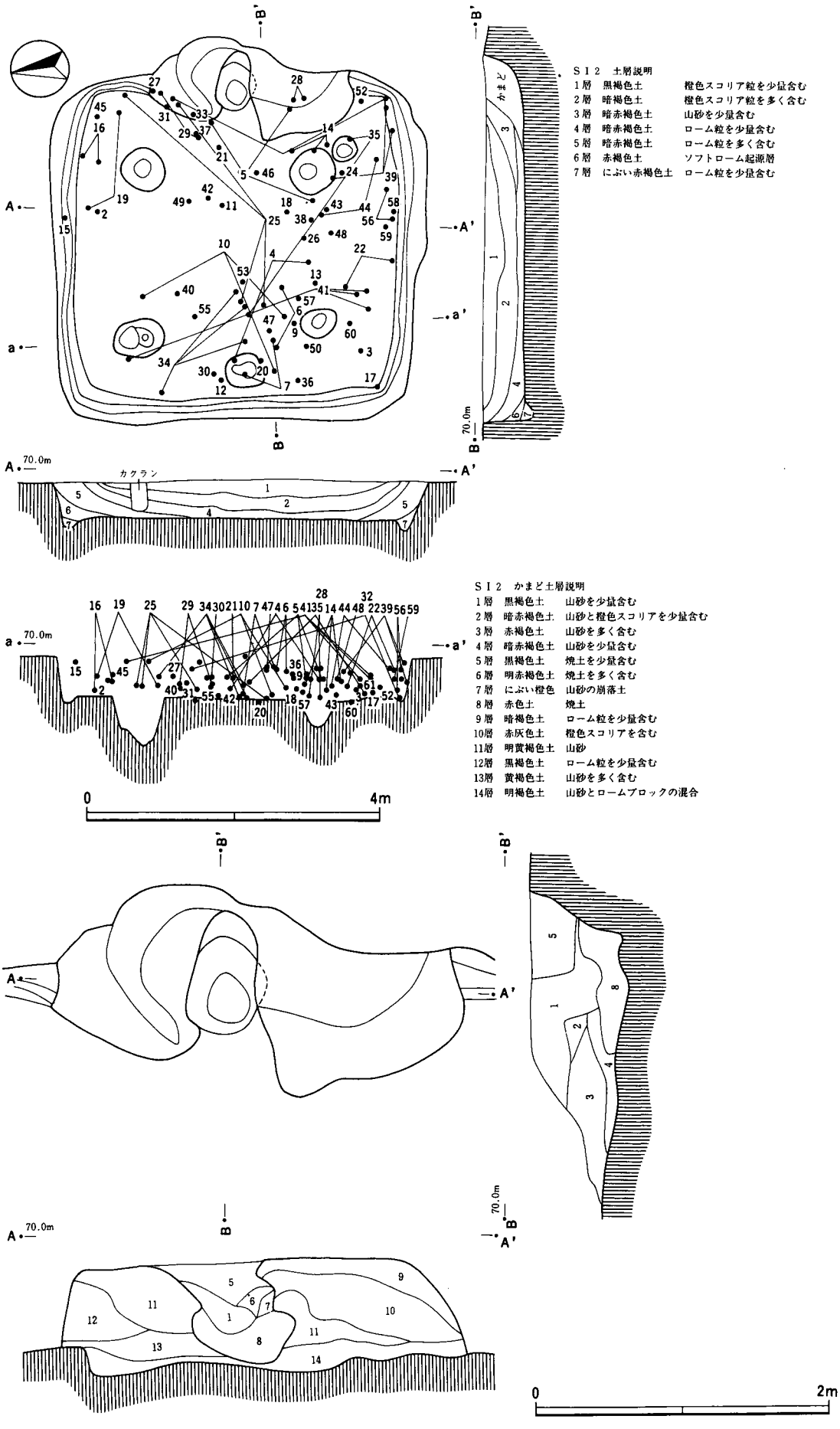
主軸長4.7m、横軸長5.2m、主軸方位はS－82°－Eである。床面積は24.44m²、壁高は50cm前後である。主柱穴は4本であり、ほかに出入口ピットが見られた。かまどは東壁中央にあり、袖部は山砂を主体として構築されている。煙道部は被熱で赤色となっていた。覆土は典型的なレンズ状堆積を示し、覆土中にはローム粒が含まれる。

出土土器は1軒の竪穴住居跡としては多く、2,868片、18,322.7gである。床面直上から覆土上層までの遺物が見られ、大半の遺物が流れ込み又は投棄によるものと判断できる。第130図の1～13は須恵器であり、いずれも県内産のものである。1は蓋の鈕部である。2～12は杯であり、2～9は底部外面と体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。10は底部及び体部下端に回転ヘラ削りが施され、外面には火襷痕が認められる。11も底部及び体部下端に回転ヘラ削りが施されており、底部外面には「井」のヘラ書きがなされている。12の底部には中央部に糸切り痕が残り、外周は手持ちヘラ削りが施されている。13は高台付杯であり、高台部は貼り付け高台である。

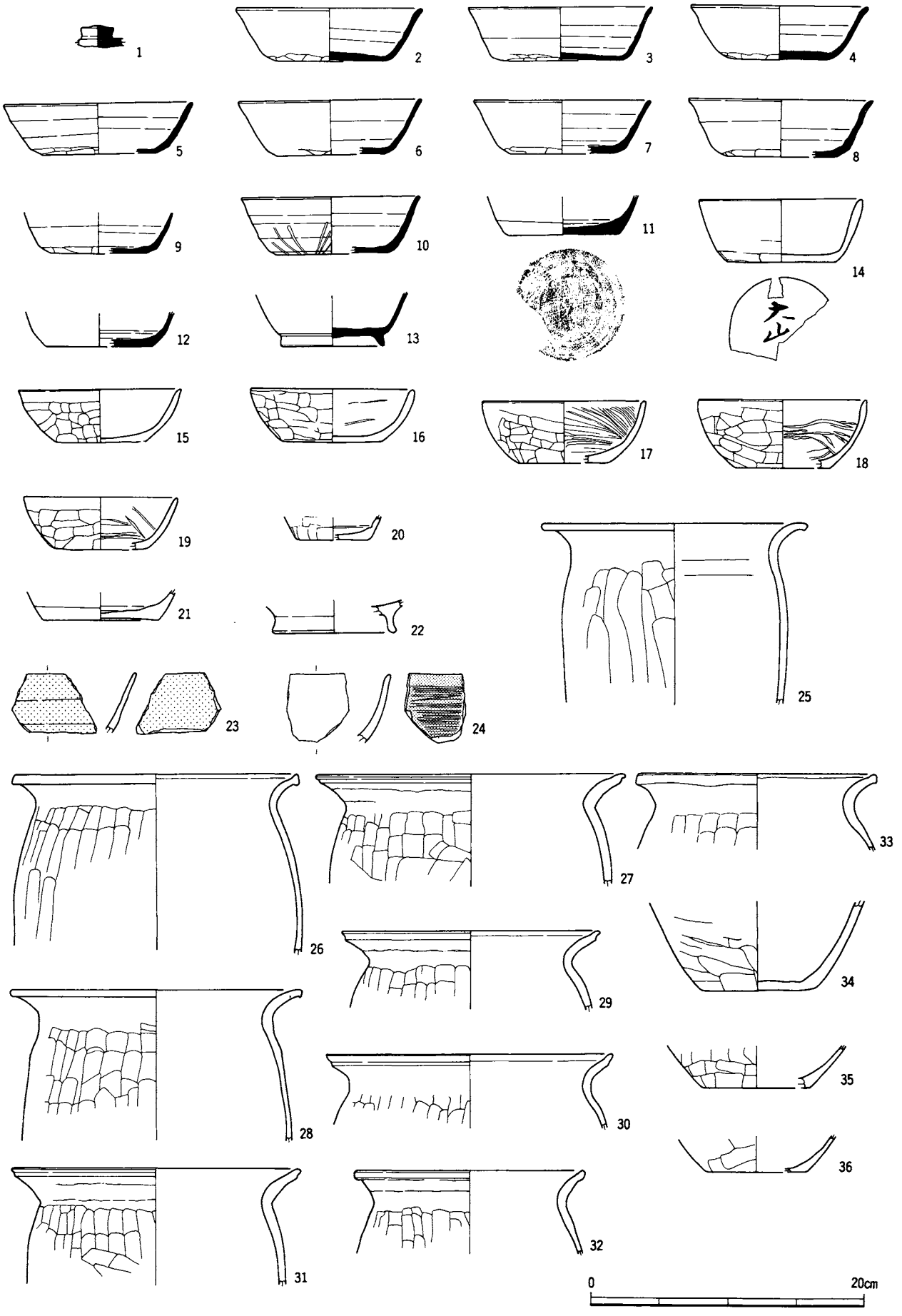
14はロクロ土師器杯であり、静止糸切り後に底部外周及び体部下端に手持ちヘラ削りを施している。底部の外面には「大山」の墨書が見られる。15～19は土師器杯であり、口縁部の上半まで手持ちヘラ削りがなされている。16～19の内面には横方向のミガキが施される。20・21はロクロ土師器である。20は小型品であり、底部及び体部下端を手持ちヘラ削り、体部内面のみこみ部に沈線を有する。21は底部及び体部下端に回転ヘラ削りが施されており、胎土に白色針状物質を含む。22はロクロ土師器高台付杯であり、高台部は貼り付けられている。この遺物は時期が他のものより下がる可能性がある。23・24は共にロクロ土師器の口縁部破片であり、23は内外面に赤色塗彩が施され、24は内黒である。

25～43は土師器の甕であり、25は口縁部に最大径を有する長胴の甕である。26～38はいわゆる常総型の甕であり、胴部外面には縦ヘラ削りが施されている。41・42は武蔵型の甕であり、41は口縁部が「コ」の字状を呈し、42は「く」の字状を呈しており、両者とも胴部上半は横方向のヘラ削りが施されている。43は胎土に雲母を含む常陸地域の甕である。

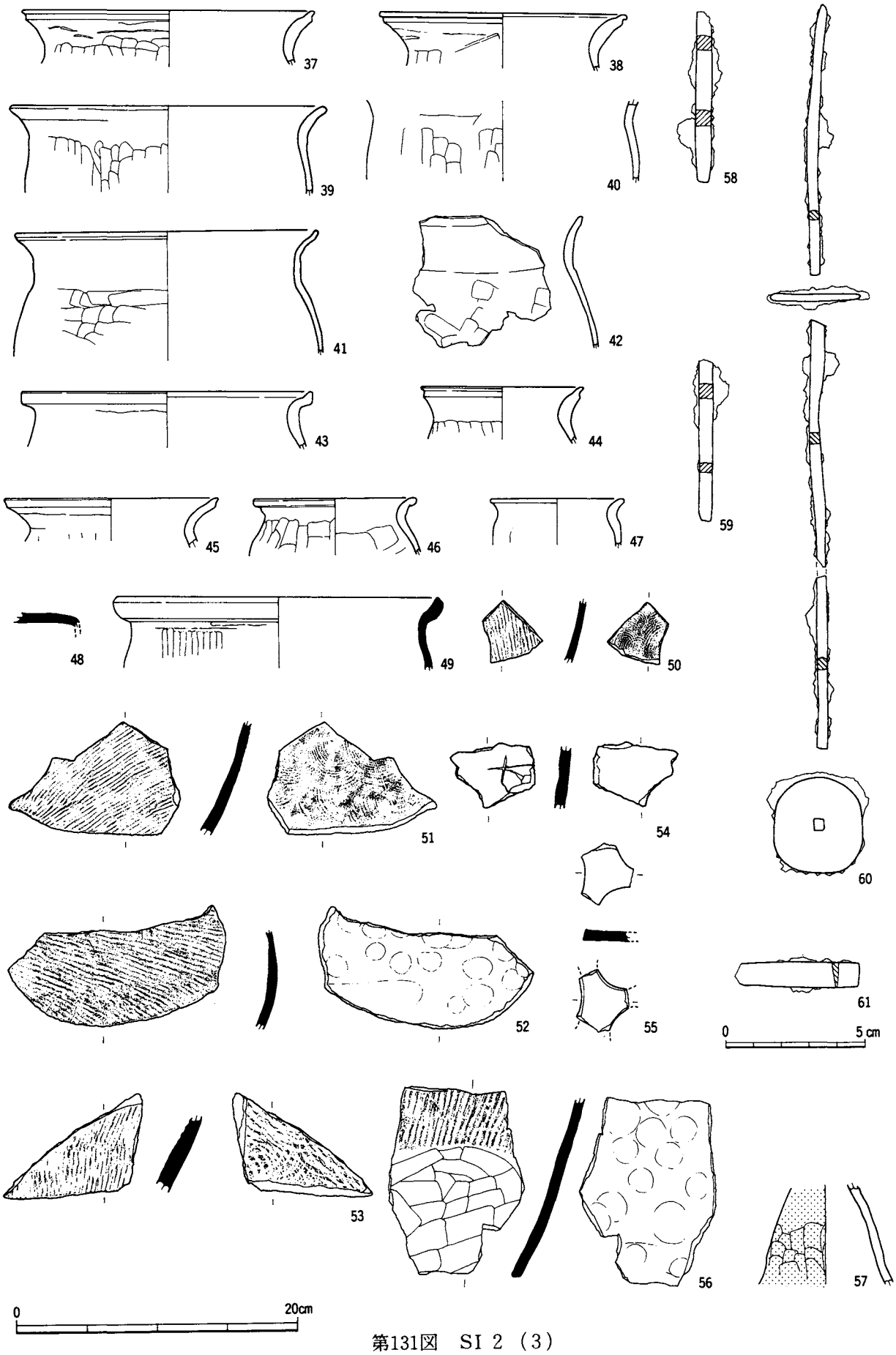
44～47は土師器小型甕であり、胴部上半外面はいずれも縦方向のヘラ削りが施されている。48は須恵器壷の肩部破片であり、東海地域産と考えられる。49～53は須恵器甕であり、49は千葉県産で、外面には粗い平行叩きの痕跡が見られる。50・51・53は東海地域産の甕であり、外面には平行叩き、内面には同心円の当て具痕跡が顕著に残る。特に53の当て具は単位が粗いものであったと考えられる。52は常陸地域産の甕の胴部破片であり、胎土に白色小石（1㎜～2㎜）を多量に含む。外面には横方向の平行叩きがなされており、内面は無文の当て具痕が見られる。55・56は須恵器甑であり、両者とも県内産のものである。55は五孔式の甑であり、56は外面に縦方向の平行叩きと横方向のヘラ削り、内面に無文の当て具痕が残存する。


SI2 土層説明
1層 黒褐色土 橙色スコリア粒を少量含む
2層 暗褐色土 橙色スコリア粒を多く含む
3層 暗赤褐色土 山砂を少量含む
4層 暗赤褐色土 ローム粒を少量含む
5層 暗赤褐色土 ローム粒を多く含む
6層 赤褐色土 ソフトローム起源層
7層 にぶい赤褐色土 ローム粒を少量含む
かまど
カクラン
70.0m
SI2 かまど土層説明
1層 黒褐色土 山砂を少量含む
2層 暗赤褐色土 山砂と橙色スコリアを少量含む
3層 赤褐色土 山砂を多く含む
4層 暗赤褐色土 山砂を少量含む
5層 黒褐色土 焼土を少量含む
6層 明赤褐色土 焼土を多く含む
7層 にぶい橙色 山砂の崩落土
8層 赤色土 焼土
9層 暗褐色土 ローム粒を少量含む
10層 赤灰色土 橙色スコリアを含む
11層 明黄褐色土 山砂
12層 黒褐色土 ローム粒を少量含む
13層 黄褐色土 山砂を多く含む
14層 明褐色土 山砂とロームブロックの混合
0
4m
2m

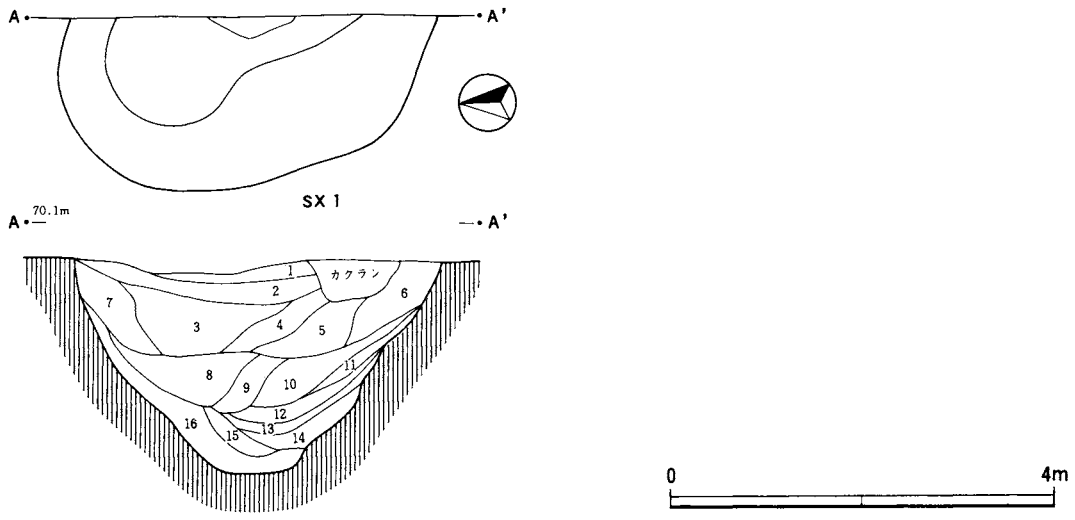
第129図 SI 2 (1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
14
12
13
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
33
29
34
28
30
35
36
31
32
0
20cm

第130図　SI 2 (2)

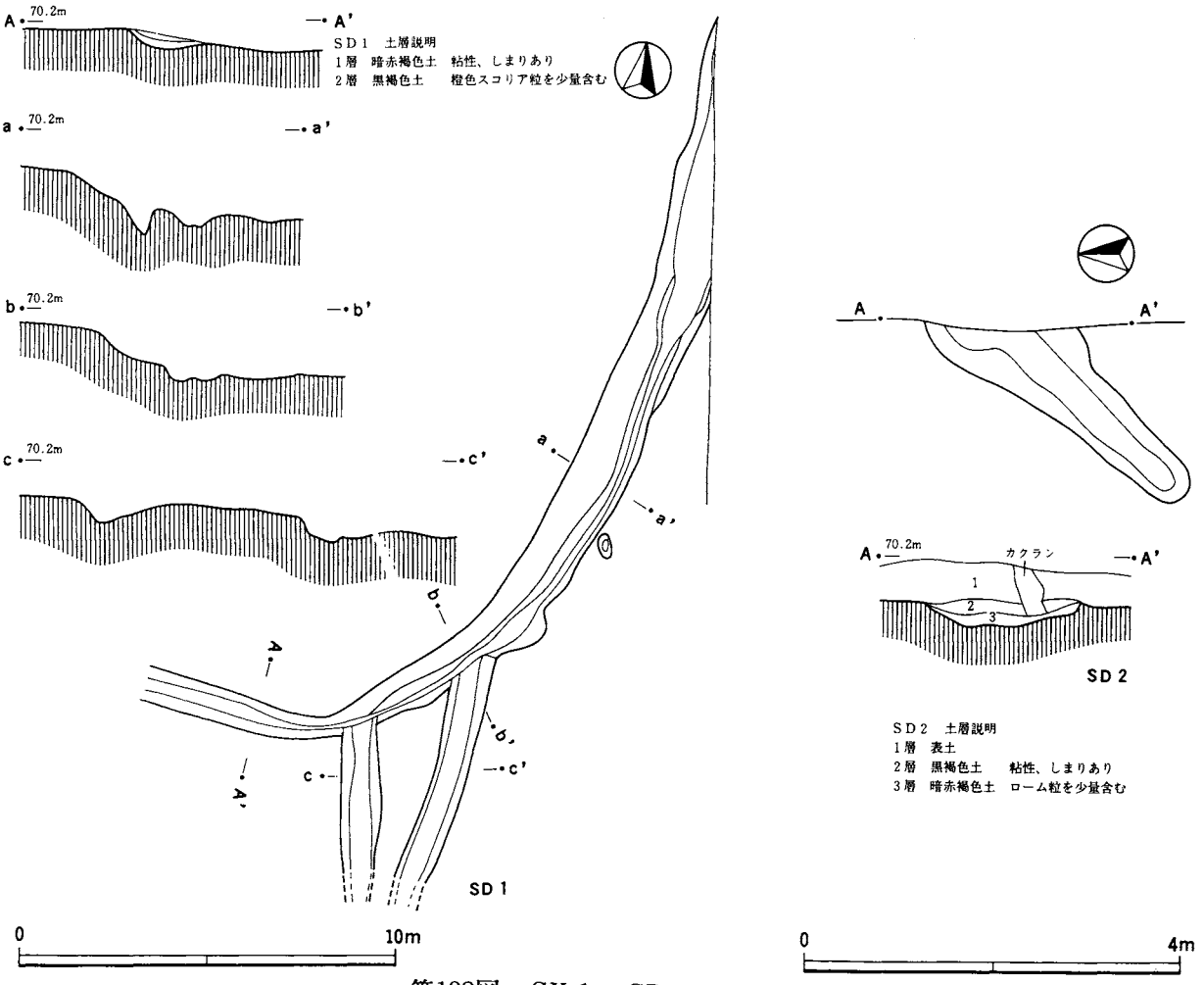

37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
5 cm
0
20cm

第131図　SI 2 (3)



SX1　土層説明

1層	にぶい赤褐色土	ローム粒を少量含む
2層	暗褐色土	橙色スコリア粒を多く含む
3層	赤褐色土	ローム粒を多く含む、しまりなし
4層	暗赤褐色土	ローム粒を少量含む
5層	黒褐色土	しまりややよい
6層	黒褐色土	しまり悪い、ロームブロックを含む
7層	褐灰色土	ローム粒と橙色スコリア粒を少量含む
8層	黒褐色土	しまり、粘性あり
9層	暗赤褐色土	ロームブロックを含む
10層	暗赤褐色土	ロームブロックを多く含む
11層	暗赤褐色土	ソフトローム起源層
12層	極暗赤褐色土	ローム粒を少量含む
13層	にぶい赤褐色土	ソフトロームとハードローム
14層	明赤褐色土	ハードローム起源層
15層	赤褐色土	ソフトローム起源層
16層	にぶい赤褐色土	表土層とソフトロームが混在



SD1　土層説明

1層	暗赤褐色土	粘性、しまりあり
2層	黒褐色土	橙色スコリア粒を少量含む

SD2　土層説明

1層	表土	
2層	黒褐色土	粘性、しまりあり
3層	暗赤褐色土	ローム粒を少量含む

第132図　SX 1、SD 1・2

57は７世紀代の土師器高杯の脚部であり、流込みの遺物と考えられる。縦方向のヘラ削りがなされ、外面に赤色塗彩が施される。58・59は棒状の鉄製品である。鉄鏃の棒状部から茎部の破片である可能性が強い。60は鉄製紡錘車であり、先端部は欠損している。61は鉄製刀子の刃部破片である。

4　中・近世

中・近世の遺構については、土坑１基、溝２条が検出された。

土坑

SX １（第132図、図版72）

Ｂ３グリッドから検出された。いわゆるシシ穴である。遺構の東側は調査区域外にかかっており、平面形は不明な点が多いが恐らくは楕円形となるであろう。長軸の長さは3.8mである。断面形は擂り鉢状を呈し、深さは最深部で2.2mを測る。覆土上層からは奈良時代の土器が出土しているが、これらは後世の開墾などによる流込みによるものと判断できる。

溝

SD １（第132図、図版74）

Ｂ３グリッドからＡ４、Ｂ４グリッドにかけて見られる弓なりの溝であり、調査区域の西壁及び東壁を超えて調査区外に伸びる。Ｂ４グリッド部分から更に南方向に２本の浅い溝が別れており、これらは現状では攪乱のため途中でとぎれているが、本来は調査区外の南まで伸びていたものと考えられる。断面形態はＵ字形やＶ字形であり、幅は0.5m～1.5mであり、深さは0.2m～0.6mである。

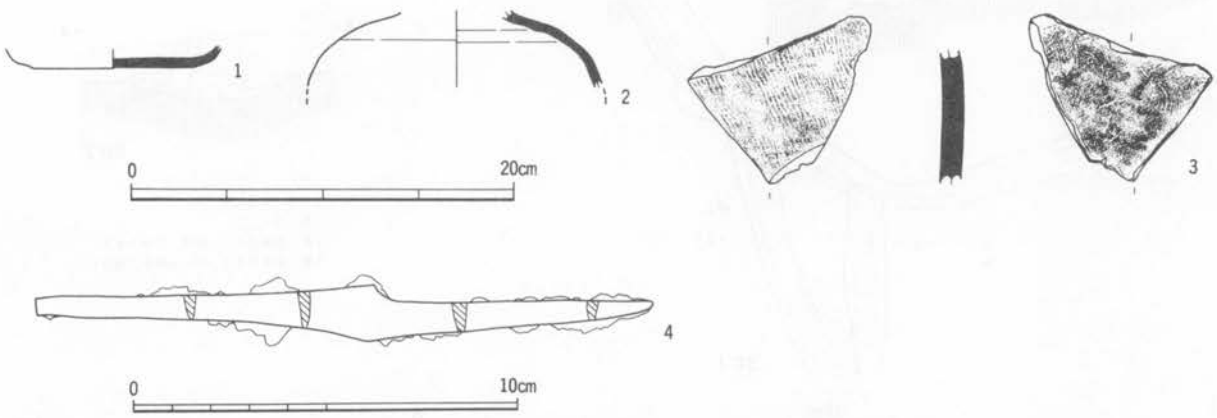
SD ２（第132図、図版74）

Ｂ３グリッドに所在し、調査区の東壁にぶつかる溝であり、SD １と重複する。両者の切合い関係は捉えられなかったが、溝の形態と覆土の状況から時期が異なるものであると考えられる。溝の幅は0.5m～1.5mであり、断面形態は皿状を呈する。覆土には少量のローム粒を含む。

これらの土坑・溝からは時期を決定できる遺物は検出することができなかった。

5　遺構に伴わない遺物　（第133図、図版79）

１は須恵器杯の底部であり、底部全面に回転ヘラ削りが施されており、胎土に白色針状物質が含まれる硬質のものであり、永田・不入窯跡の製品と考えられる。２は須恵器壷の肩部破片であり、外面にはオリ



第133図　遺構外出土遺物

ーブ灰色の自然釉が付着している。東海地域産と考えられる。3は須恵器甕の胴部片であり、外面は平行叩きが施される。内面には細かな同心円文の当て具痕が残存し、それを消すようにすり面が見られる。これについても胎土などから東海地域産の須恵器と考えられる。4は鉄製刀子であり、先端部を欠損している。

第3節　まとめ

1　旧石器時代

小規模な石器集中が2地点から検出された。調査時の出土層位は、Ⅶ層上部と認識されたが、現在、一般的に下総台地で使われている層名に直すとⅨ層上部とされる部分と考える。石器組成は削器・石核・U剥片・剥片・砕片・礫で構成され、出土総点数は27点であり、質量ともに貧弱であった。石材構成は黒曜石・安山岩・メノウの3種に限られる。

2　奈良時代

山田水呑遺跡は昭和49・50年の調査[1]では8世紀後半から9世紀後半の竪穴住居跡が143軒、掘立柱建物跡が52棟が検出されているが、今回は580m²の小規模な範囲の発掘調査であり、奈良時代の遺構については8世紀第4四半期の竪穴住居跡2軒を検出したのみであった。しかしながら、墨書土器については達筆な字体で「大山」と書かれたものが新たに出土し、成果を挙げることができた。また、出土した土器についても、8世紀後半代の上総国山辺郡の流通経済の一側面を考えるのに非常に有効な資料と言える。

ここでは、本遺跡の土器の様相を考えてみることにしたい。第21・22表は竪穴住居跡出土土器の器種別破片数と重量である。SI 1は全体で162片、2kg強の出土である。須恵器については茨城地域産のものは1点のみであった。SI 2の土器の出土量は、全体で、2,868片、18.3kg強の出土である。土師器については、甕類の出土が圧倒的であり、杯類の中ではロクロ土師器が2割強を占めている。須恵器は甕に比して杯の数量が多く、杯類の合計は296片、1,975gが出土している。

この中で特に注目されるのは、千葉地域産の須恵器の多さである。これらは具体的には千葉市を中心とする地域で生産されたのもと考えられるものであり、千葉市域産と考えられる杯類は267片、1,793.7gであり、破片数・重量ともに須恵器の杯の中の90%強を占める。

8世紀後半は千葉県内では遺跡によって多少の頻度の差はあるものの、茨城産がかなりの割合いで見受けられるにもかかわらず、今回の調査では破片数・重量ともに須恵器全体の5%前後というわずかなものとなっている。

この茨城地域産の土器がわずかであるという現象は、やはり遺跡の南西約6km強に南河原坂窯跡群[2]が存在することが大きいと考えられる。南河原坂窯跡群は8世紀代3四半期から9世紀前半まで操業がなされており、本遺跡の遺構の時期である8世紀第4四半期にはかなりの製品を供給していたと捉えられている。また、本遺跡と南河原坂窯跡群は上総国山辺郡内に所在しており、本遺跡がこの区域の拠点的な遺跡であるために、多く搬入された蓋然性が強いように考えられる。ただし、千葉市中原窯跡群[3]などでも8世紀後半まで遡る須恵器窯跡が存在する可能性があり、本遺跡出土の千葉市域産の須恵器が一概にすべて南河原坂窯の製品であると断定はできず、これについてはさらなる検討が必要になると考えられる。

また、遺構外から永田・不入窯の製品であると考えられる須恵器杯が出土したことも注目される。この

杯は永田編年のIII期に比定できるものである。第２章で前述した山田台№６－２遺跡でも３軒の奈良時代の竪穴住居跡中の１軒から永田・不入窯の製品と考えられる永田・不入編年[4]III期の杯が検出され、また、山武一本松遺跡にも少量ながら永田・不入窯のものが出土していることが判明している。このように山辺郡域においては、ある程度、永田・不入窯の製品流通が見られることが明確になったことも今回の成果の一つとして挙げられるであろう。

注

1　山田遺跡調査会　1977　『山田水呑遺跡』

2　村田六朗太・松原典明　1996　「南河原坂窯跡群」『土気南遺跡群VII　南河原坂窯跡群・鍾つき堂遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

3　関口達彦　1990　『千葉市中原窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

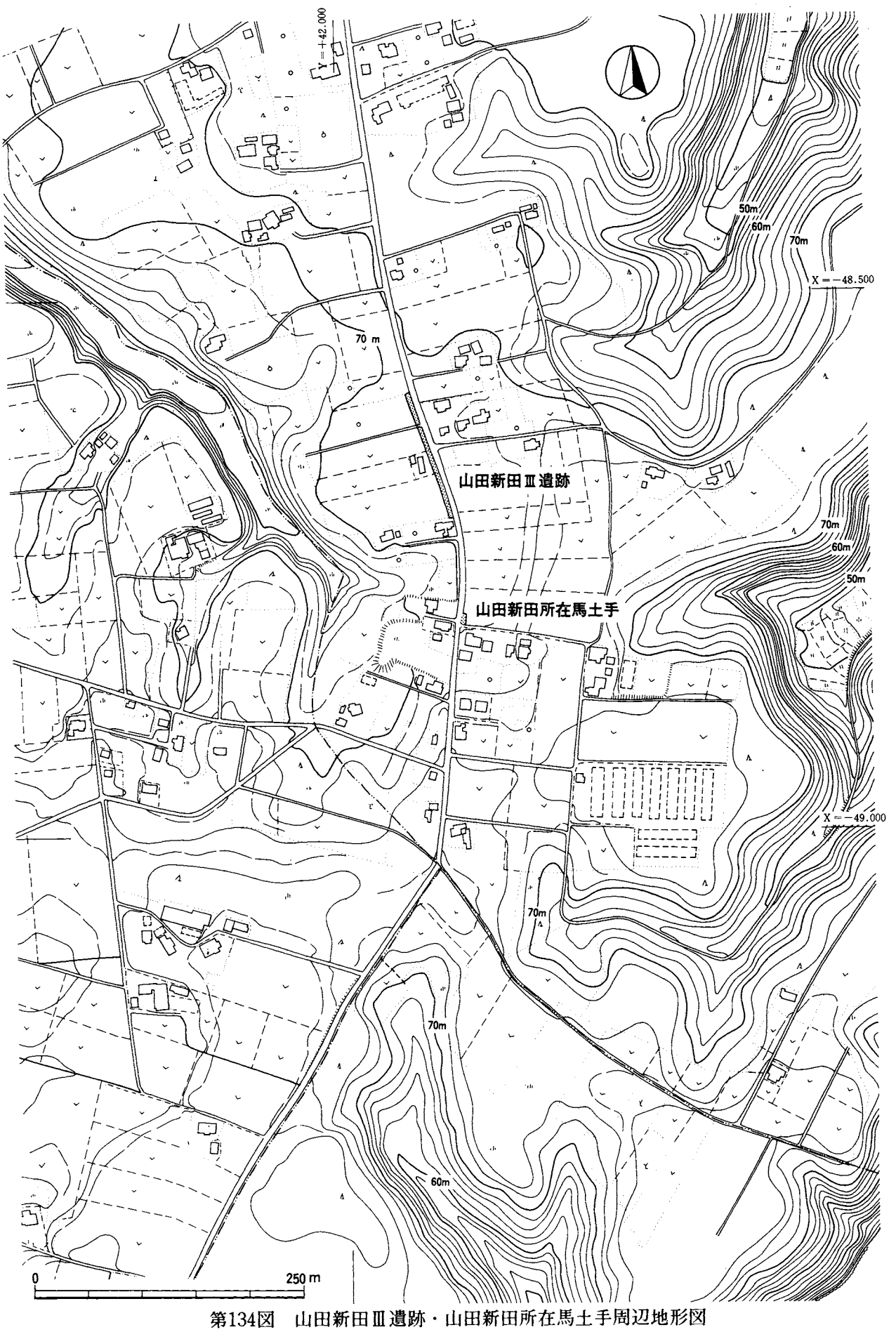
4　郷堀英司・小林信一　1993　「III　各論」『千葉県文化財センター研究紀要』14　(財)千葉県文化財センター

第21表　SI１土器数量表

土師器杯	43片	223.5g	須恵器杯（千葉地域産）	6片	196.8g
ロクロ土師器杯	2片	13.8g	須恵器甕（千葉地域産）	12片	140.3g
土師器甕	87片	853.7g	須恵器甕（茨城地域産）	1片	9.1g
土師器甕（雲母片を含む）	2片	15.5g	須恵器小型甕（千葉地域産）	2片	249.1g
土師器合計	134片	1,106.5g	須恵器甑（千葉地域産）	7片	320.0g
総　計	162片	2,021.8g	須恵器合計	28片	915.3g

第22表　SI２土器数量表

土師器杯	519片	2,477.5g	須恵器（千葉地域産）	268片	1,716.1g
ロクロ土師器杯	125片	770.8g	須恵器杯（茨城地域産）	14片	67.3g
ロクロ土師器高台付杯	2片	27.8g	須恵器杯（産地不明）	13片	114.0g
土師器高杯	2片	77.0g	須恵器高台付杯(千葉地域産)	1片	77.6g
土師器甕	1,690片	9,498.4g	須恵器蓋	3片	19.0g
土師器甕（雲母片を含む）	80片	1,024.3g	須恵器甕（千葉地域産）	107片	1,518.2g
土師器甑	1片	6.2g	須恵器甕（茨城地域産）	5片	220.4g
土師器器種不明	7片	35.4g	須恵器甕（東海地域産）	10片	240.0g
土師器合計	2,426片	13,917.4g	須恵器甕（産地不明）	7片	147.8g
総計	2,868片	18,332.7g	須恵器壺（東海地域産）	5片	89.9g
			須恵器甑（千葉地域産）	9片	195.0g
			須恵器合計	442片	4,405.3g



第134図　山田新田Ⅲ遺跡・山田新田所在馬土手周辺地形図

第５章　山田新田Ⅲ遺跡

第１節　立地及び調査の概要

山田新田Ⅲ遺跡は、真亀川のである支流小野川上流部の支谷に面する標高71m前後の台地上に位置し、山田水呑遺跡の南方650mの距離に所在する。後述する山田新田所在馬土手は、さらに本遺跡から南に100mの位置にある。また、本遺跡と同一台地上にあり、400m北方に所在する山田新田Ⅱ遺跡からは平安時代の６軒の竪穴住居跡が検出[1]され、そのうちの１軒からは土器製作に用いられたと考えられるロクロピットが見つかり、注目される。

発掘調査は平成４年12月１日から平成５年１月29日まで行った。調査対象面積1,700㎡のうち、上層の確認調査170㎡を行った結果(第135図)、３区に溝及び土坑を検出し、115㎡ の本調査を実施した。下層については68㎡の確認調査を実施したが、遺物が検出されず、確認調査のみで終了した(第136図)。

検出した遺構は土坑２基と溝１条である(第137図)。

第２節　遺構と遺物

１　平安時代

土坑（第138図、図版80）

２基の土坑を検出した。SX １は平面は145cm×145cmの不整円形であり、断面形は方形を呈し、深さは140cmである。SX ２は楕円形で規模は235cm×150cmで、断面形は逆台形を呈し、深さは80cmを測る。SX ２の覆土から須恵器杯の口縁部破片が出土している。

他に遺構は、溝SD １を検出した(第139図)。幅40cmで深さ25cm前後の浅い溝であり、調査区外に伸びている。時期は不明である。

２　遺構に伴わない遺物

縄文時代早期の胎土に繊維を含む土器の微細片があるほかは、すべて平安時代の土器である。

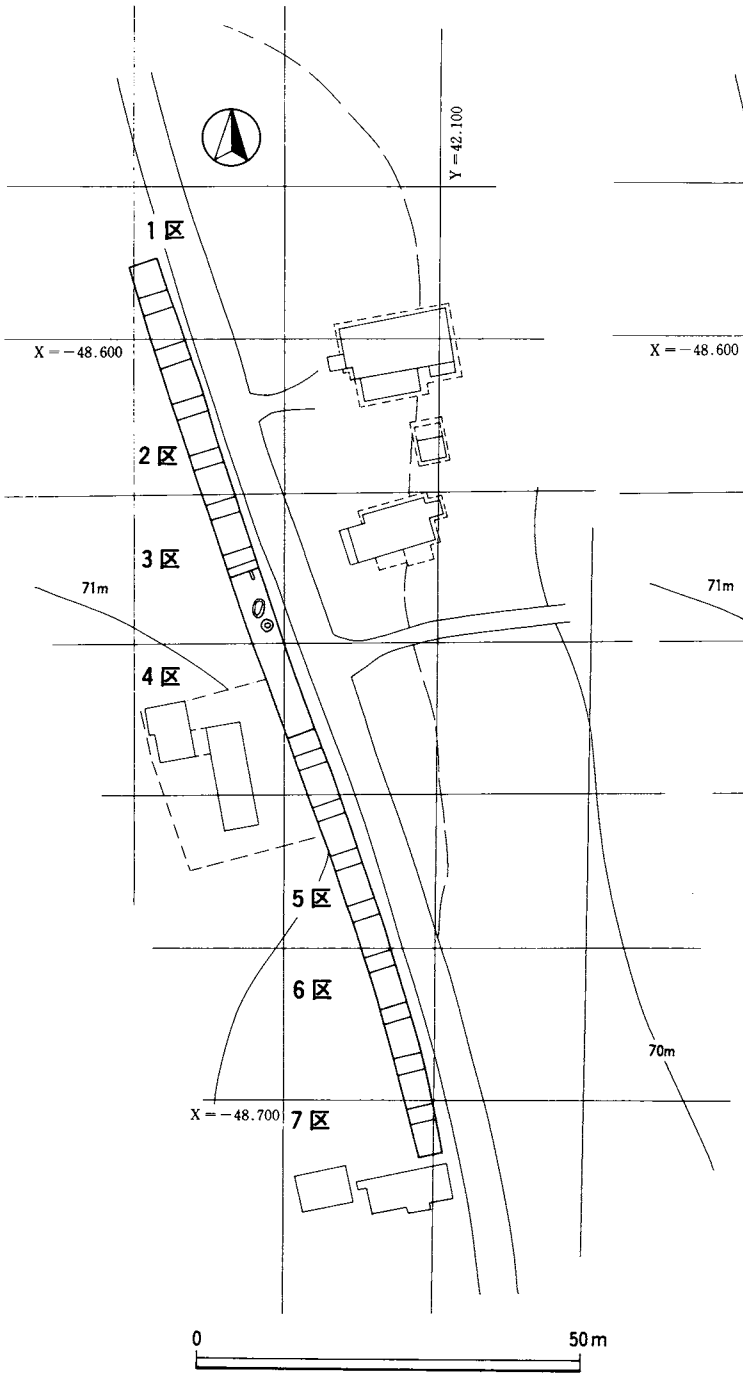
平安時代の土器は３区と５区から多く出土し、ロクロ土師器杯が大半を占め、同様の胎土・焼成のものが多い。３区のものについては溝SD １と土坑の間に多く見られ、一括で投棄されたものであると考えられる。しかし、３区・５区ともに接合する個体は少なかった。

３区出土遺物（第140・141図、図版81）

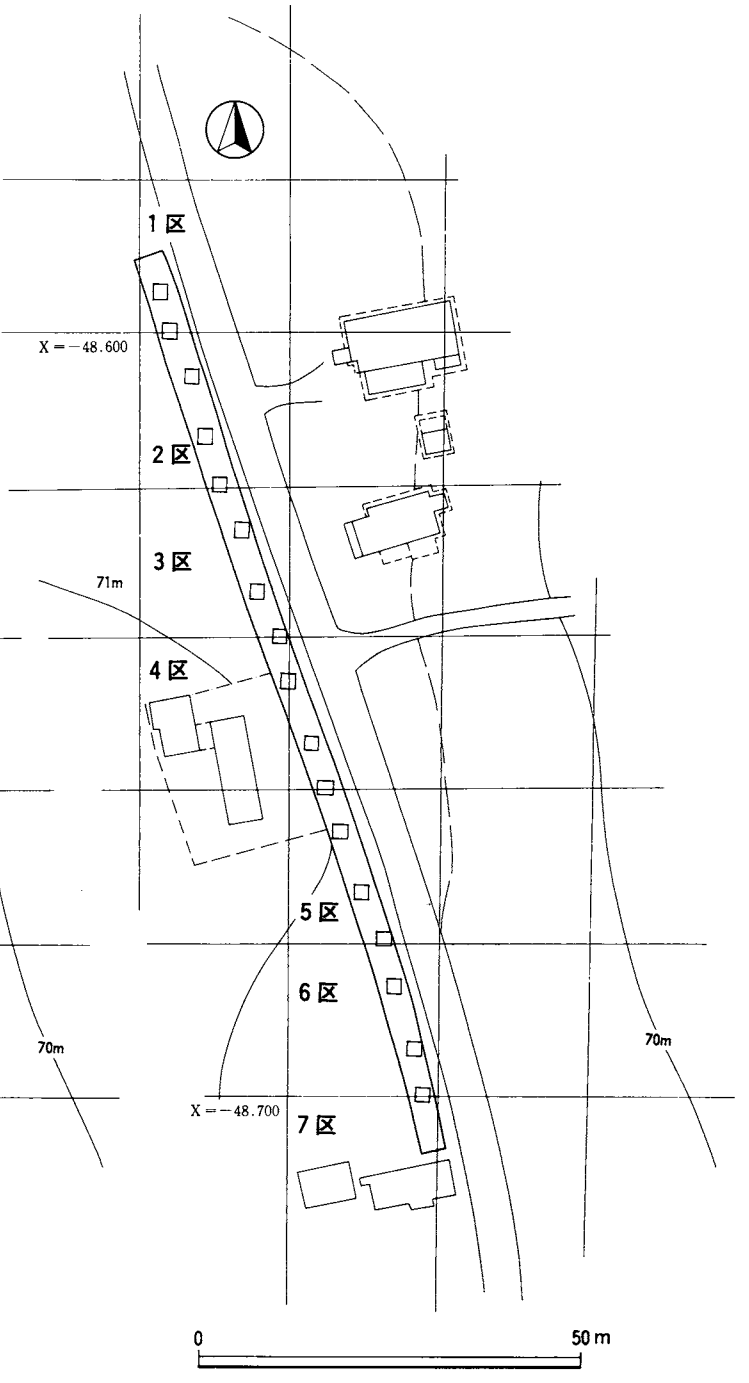
１はロクロ土師器蓋であり、天井部外面は回転ヘラ削りが施され、色調は赤褐色を呈する。須恵器の可能性も考えられる。

２～４は須恵器杯であり、２・３は底部及び体部下端にかけて回転ヘラ削りが施されており、４は底部に一定方向の手持ちヘラ削り、体部下端にも手持ちヘラ削りがなされている。３・４の須恵器については千葉市域産と考えられる。

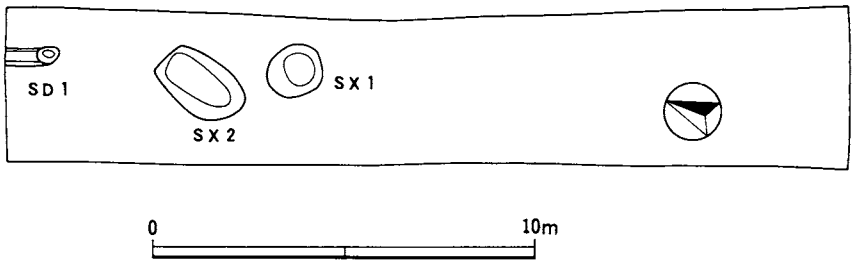
５～27はロクロ土師器杯である。破片が多く、形態が判別できるものはわずかであるが、７・20・24と形態的に同様なものが多いと考えられる。５には底部及び体部下端に回転ヘラ削りが施され、底部中央に



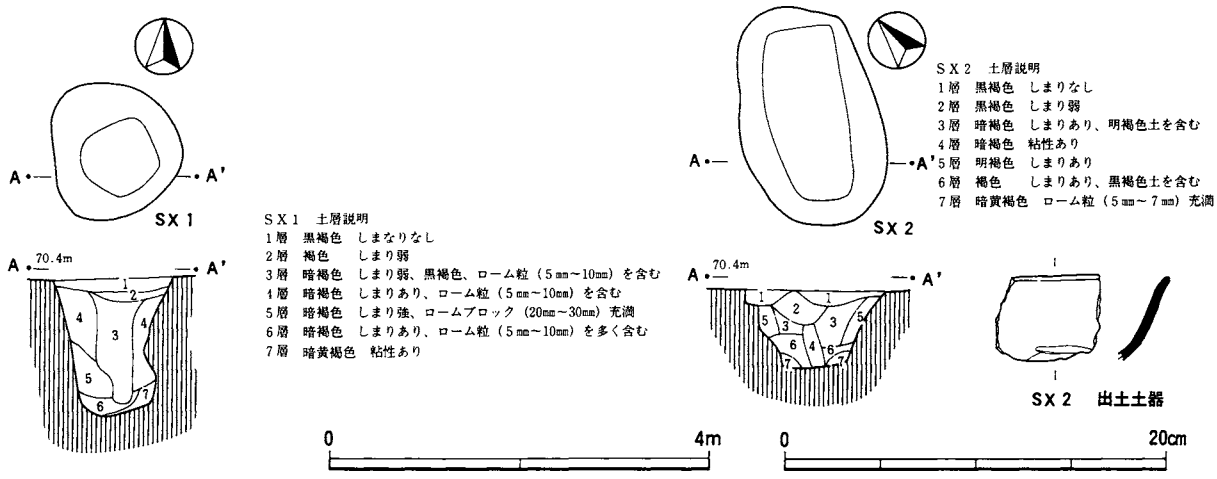
第135図　上層確認調査及び本調査グリッド配置図



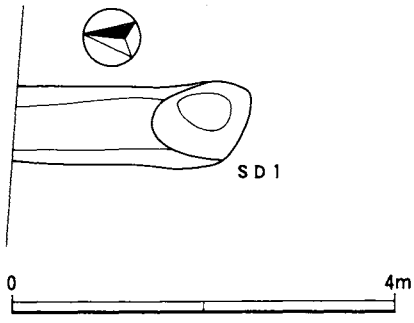
第136図　下層確認グリッド配置図



第137図　遺構配置図



第138図 ＳＸ１・２



第139図 SD１

は回転糸切り痕跡が残存する。６は底部に回転ヘラ削りがなされている。９は底部ヘラ切り後に底部と体部下端に手持ちヘラ削りを施している。７・８・11・15・17～19は底部及び体部下端に手持ちヘラ削りがなされ、11には内面に横方向のミガキが施されている。10・12～14・16は底部は一定方向の手持ちヘラ削り、体部下端にも手持ちヘラ削りが施されている。

20・21・23は底部中央に回転糸切り離し痕跡が残り、底部外周及び体部下端に手持ちヘラ削りが見られる。20の内面には横方向のミガキが入る。22は底部の半分に回転糸切り離し痕が残り、半分に一定方向の手持ちヘラ削りがなされ、体部下端にも削りが入る。24～27は底部回転切り離し無調整で、体部下端には手持ちヘラ削りが施されている。

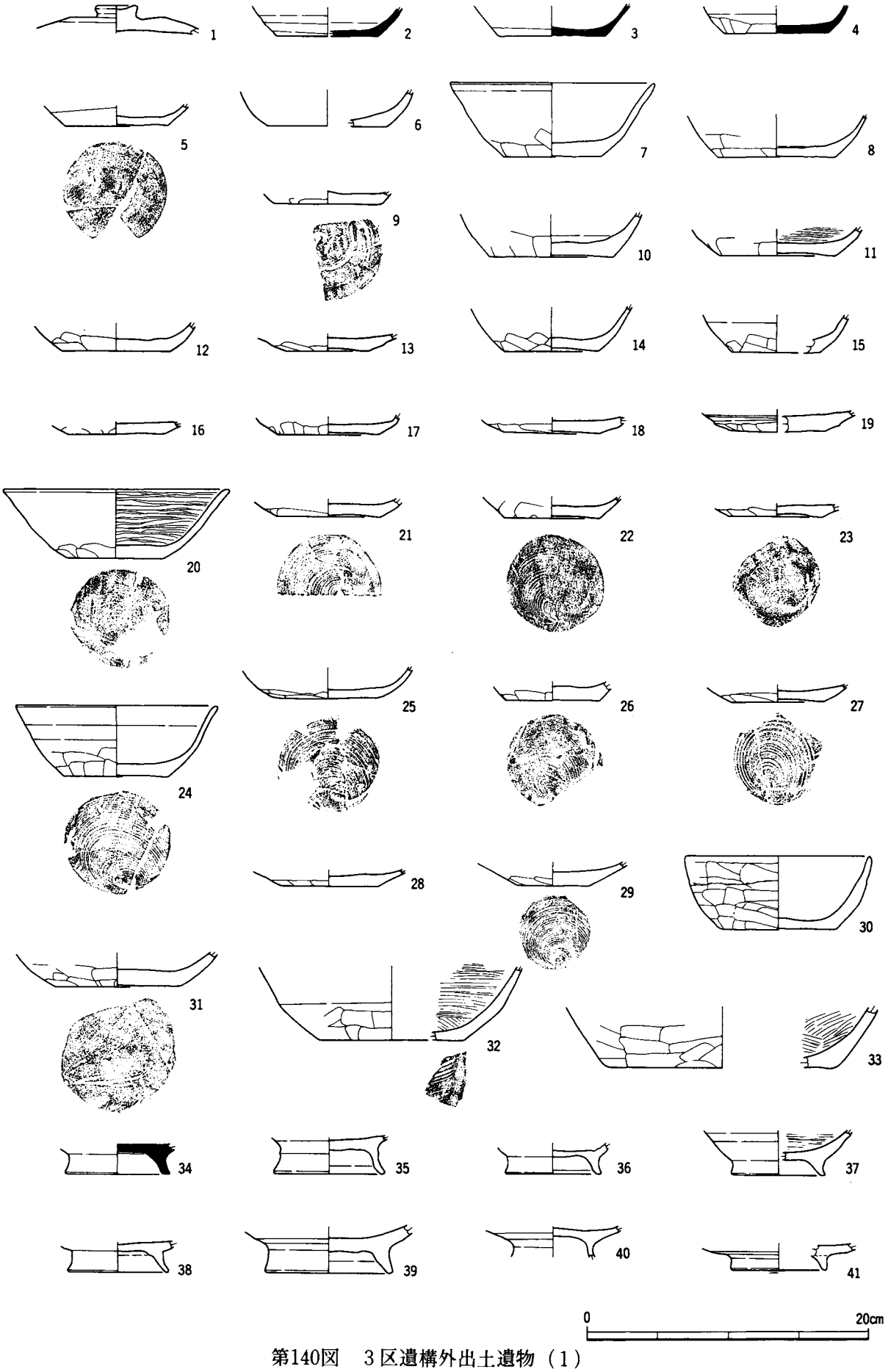
28・29はロクロ土師器皿であり、28は底部及び体部下端に手持ちヘラ削りがなされ、29は底部回転切り離し無調整で、体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。

30は土師器杯であり、口縁部の上半まで手持ちヘラ削りがなされ、外面に粘土紐接合痕が顕著に認められる。

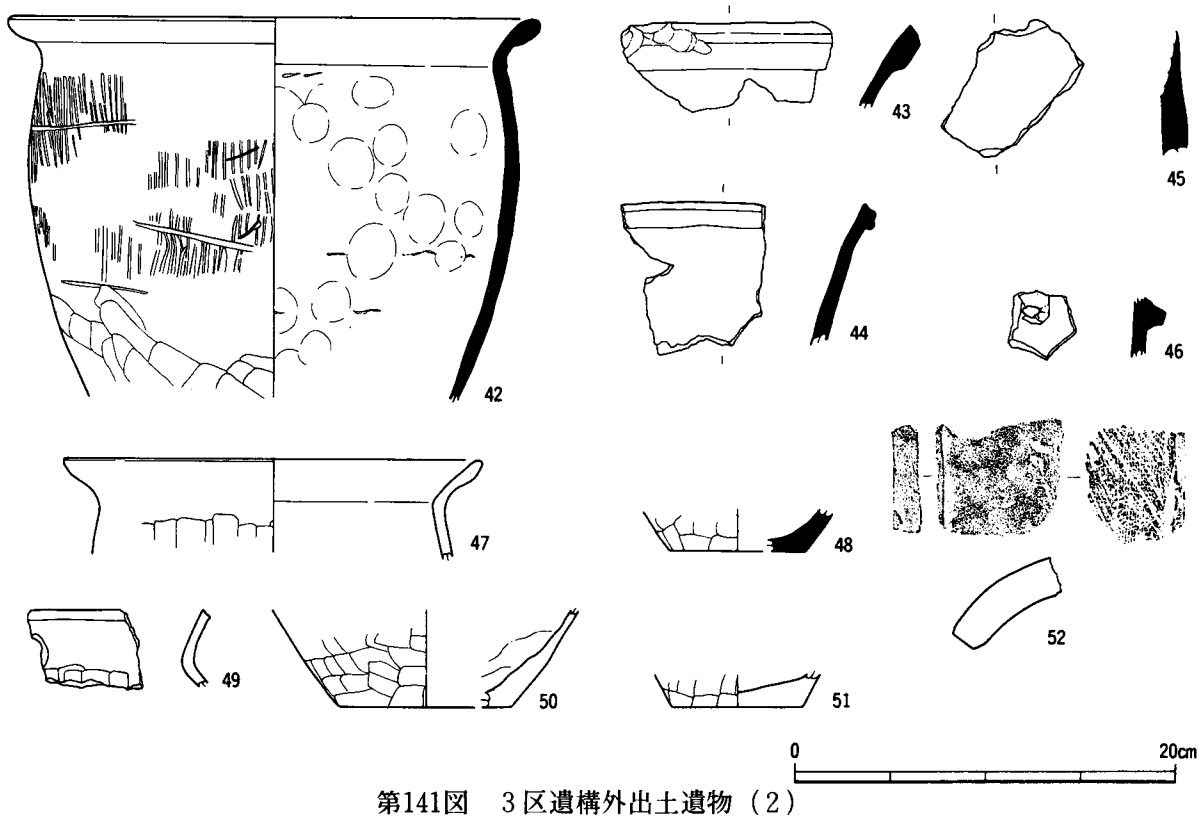
31・32はロクロ土師器椀であり、31は底部及び体部下端に手持ちヘラ削り、32は底部に静止糸切り痕跡が見られ、底部の外周と体部下端に手持ちヘラ削りを施しており、内面には横方向のミガキがなされている。

33はロクロ土師器鉢であり、おそらく口縁部は逆「ハ」の字状に開くものと考えられる。底部及び体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。

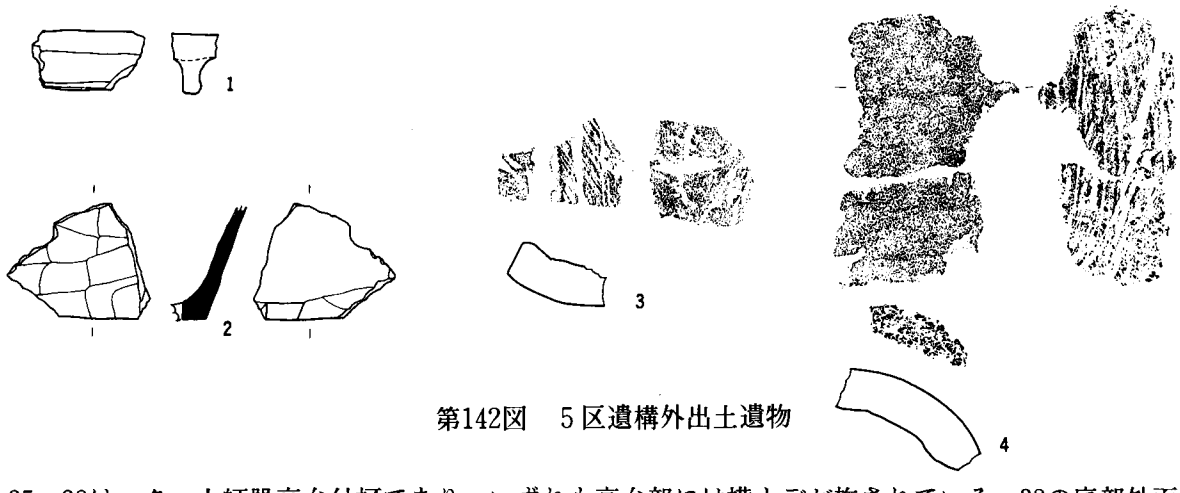
34は須恵器高台付杯であり、外面黒色で、内面は暗赤褐色であり、千葉市域産のものと考えられる。



第140図　３区遺構外出土遺物（１）



第141図　3区遺構外出土遺物（2）



第142図　5区遺構外出土遺物

35～38はロクロ土師器高台付杯であり、いずれも高台部には横ナデが施されている。38の底部外面にはエゴテ状工具の痕跡が見られる。36～38は内面にミガキが入っている。39はロクロ土師器高台付椀であり、底部中央に回転糸切り痕跡がわずかに残り、高台部は横ナデ、体部下端には回転ヘラ削りが施されている。

40・41はロクロ土師器高台付皿であり、40は回転糸切り後に底部外周及び体部下端に回転ヘラ削りを行い、高台を貼り付けている。41も底部及び体部下端に回転ヘラ削りを施した後に高台を貼り付けている。

42～45は須恵器甕であり、いずれも千葉市域産と考えられる。42の外面上半部は平行叩きが施され、下半部に斜方向のヘラ削りがなされている。外面上半部にはヘラ状工具で深くキザミが付けられているところが3か所見られる。内面には無文の当て具痕と粘土紐接合痕が認められる。43・44は口縁部片であり、45は頸部下半部の破片で、外面には平行叩きが見られる。48は須恵器小型甕であり、底部及び下端部にヘラ削りがなされている。46も千葉市域産と考えられる須恵器甑の把部である。

47・49・50は土師器甕であり、51は土師器小型甕である。

52は丸瓦片であり、凸面は無文で、内面には布目痕が見られる。

5区出土遺物（第142図、図版81）

1はロクロ土師器の高台部破片であり、高台付盤か椀の可能性がある。2は千葉市域産と考えられる須恵器甑の底部片であり、底部は五孔式であると考えられる。3は平瓦片であり、凹面に布目痕が残る。4は丸瓦であり、凸面は無文で、凹面には布目痕が残存し、布が重なっていた痕跡が認められる。

第3節　まとめ

今回の調査は遺跡の南端部であり、検出できた遺構もわずかであった。しかし、遺物に関してはわずか115m²の本調査範囲にも関わらず、ロクロ土師器杯を中心とした多数の遺物を検出することができた。

須恵器に関してはその数量は少なく、須恵器杯は14片、213.7gで千葉市域産のものが主体を占めていた。

土師器杯も9片、239.1gの出土で極端に少なかったが、ロクロ土師器の杯・椀類（高台を有するものを含む）は1,543片、10,719.7gが出土し、圧倒的数量であった。これらロクロ土師器杯の多くは胎土・焼成は類似しており、同一地域で製作された可能性が高く、ほぼ同時期のものと考えられる一括資料として評価できる。

このロクロ土師器杯の底部片で整形技法が判明するものは、407片、6,083.5gである。その内、底部回転糸切り離し無調整のものが、101片で、1,682.6g、底部に手持ちヘラ削りが施されるものが291片で、4,174g、底部に回転ヘラ削りが施されるものは15片で、226・2gが認められる。このように3対1の割合いで、回転糸切り離し無調整の遺物が認められることから、技法的には、底部のヘラ削りを省略する過程段階のものと考えられる。これらの遺物群については、形態・技法などから9世紀第3四半世紀を中心とする時期に比定しておきたい。

本遺跡の性格については不明な点が多いが、須恵器甑などの煮炊具も出土していることから、付近に住居跡群が点在することは確実であろう。

本遺跡の北側や西側に隣接する畑から多くの土師器片などが確認できるので、遺跡の中心は北西部にあると考えられる。

注

1　(財)山武郡市文化財センター　「ロクロピットについて・・・東金市山田新田II遺跡」『さんぶぐんしぶんかざいせんたーこうほうし　文化財かわら版』第6号

第６章　山田新田所在馬土手

第１節　立地及び調査の概要

調査区は山田新田Ⅲ遺跡調査区南端から南へ100mに位置し、標高は70mの台地上に立地する(第134図)。

東金市・八街市一帯には、野馬土手が数多く見られ、本遺跡から東南700mの所には新林馬の土手が存在している。本遺跡の馬土手は狭まった台地を塞ぐ形で見られ、東西に120m前後の規模で連なっている。今回は、その西側残存部先端を50㎡ほど調査したものである(第143図)。発掘調査期間は平成４年12月14日から平成４年12月25日である。

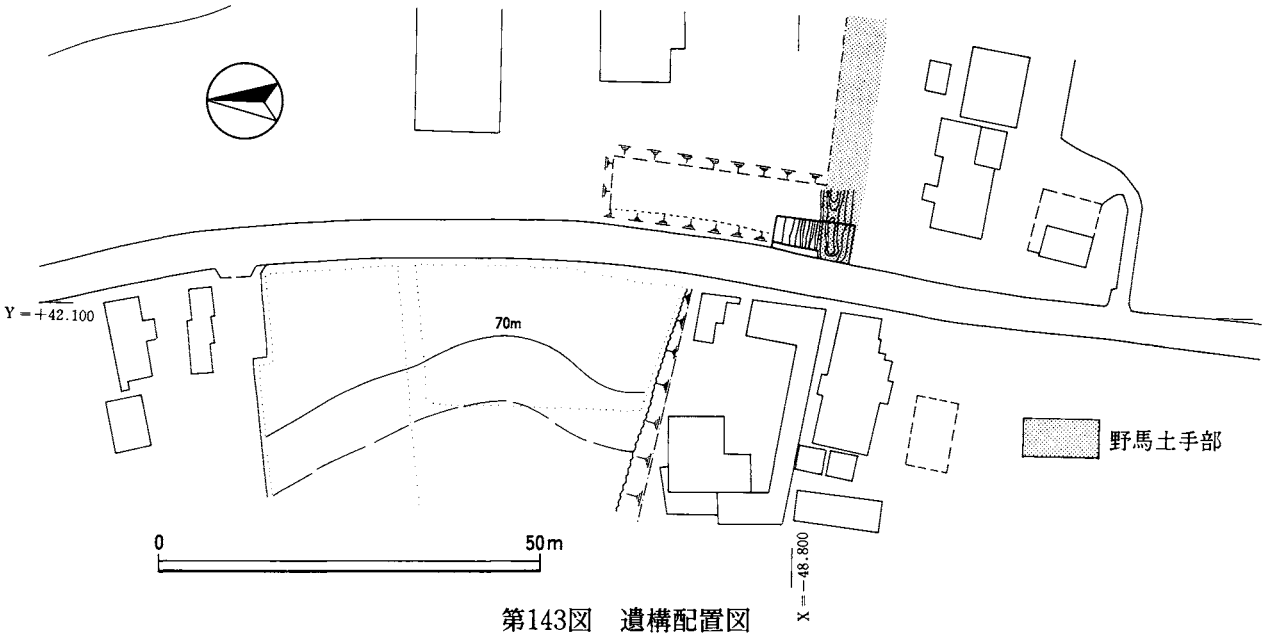
調査は、土手に対して直角にトレンチを設定し、土手部を裁ち割り、盛土堆積状況を観察した。その結果、土手のほかに溝１条を検出した。なお、土手部についてもその一部を地形測量した。

下層確認調査ついては、２㎡を調査したが、遺物は検出されず、確認調査で終了した。

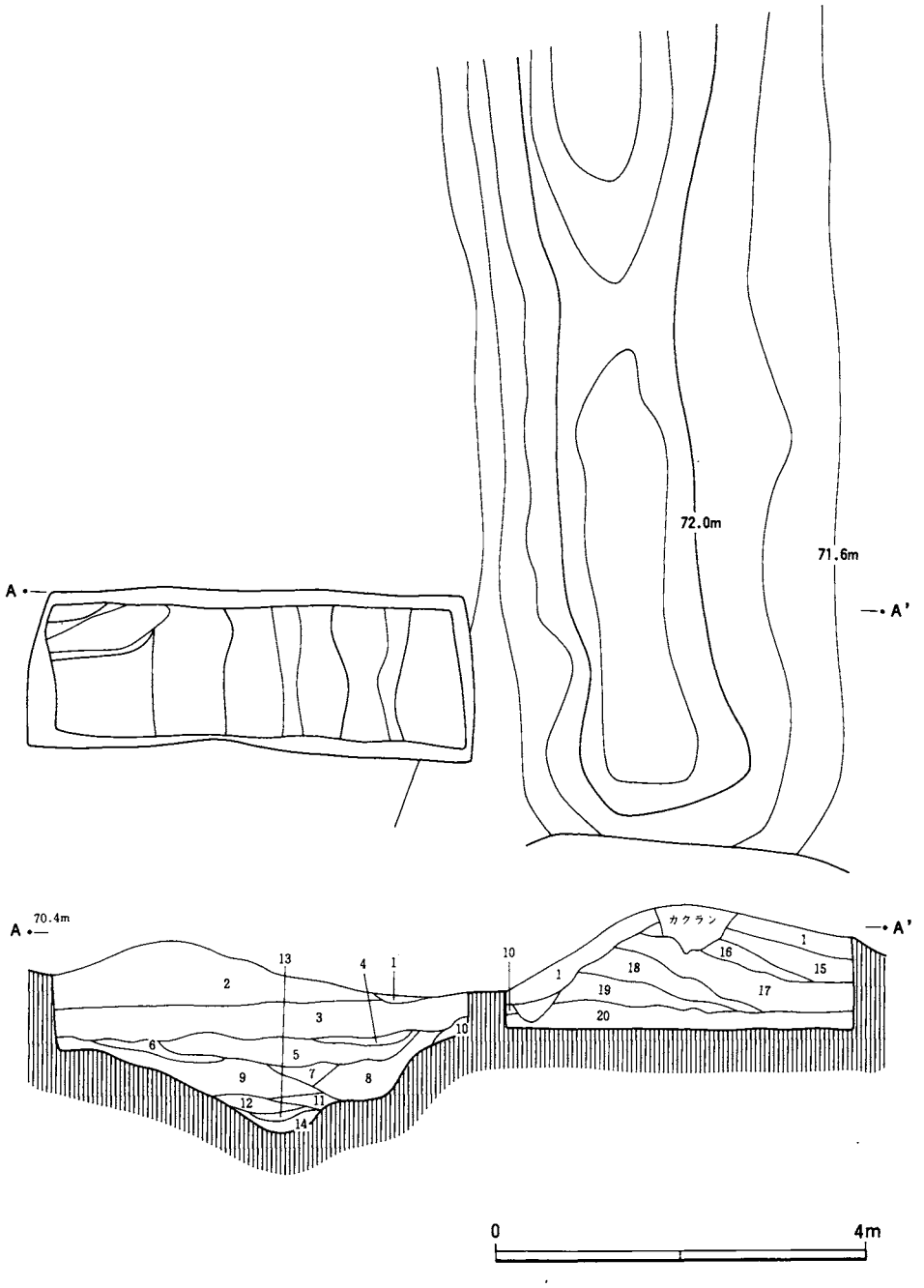
第２節　検出された遺構（第144図、図版82）

トレンチ調査を実施した結果、土手の下幅は調査区域外まで伸びていたため、正確な数値は不明であるが、５m以上と考えられる。残存の高さは旧表土面から90cmであり、旧表土の厚さは20cm～28cmである。土手の北側からは上場幅435cm、下場幅80cm前後で深さ105cmの溝が検出された。溝の南側部分は段が見られた。土手の盛土は、ロームブッロックが多く見られるため、溝を掘った土も盛土に利用したものと考えられる。盛土の構築方法ついては、溝に土がこぼれるのを防ぐためか、断面の北側部分を最初に高く積み上げ、南側部分に傾斜させていることが分かった。

遺物については残念ながら検出することはできなかった。



第143図　遺構配置図



馬土手　土層説明

1層　黒褐色土
2層　茶褐色土　盛土
3層　黒褐色土　粘性、しまりなし
4層　黒褐色土　しまりあり
5層　黒褐色土　粘性弱、2㎜～3㎜のローム粒子を含む
6層　暗褐色土　しまり弱、3㎜～7㎜のローム粒子を多く含む
7層　黒褐色土　粘性あり、3㎜～5㎜のローム粒子を含む
8層　黒褐色土　7層より暗く、下方に10㎜～20㎜のローム粒子がたまる
9層　暗褐色土　しまりあり、焼土、炭化物、5㎜～7㎜のローム粒子を含む
10層　暗褐色土　粘性あり、漸移層の土壌を含む
11層　暗褐色土　粘性あり、3㎜～5㎜のローム粒子、炭化物あり
12層　褐色土　粘性あり、3㎜～5㎜のローム粒子あり
13層　暗褐色土　粘性あり、3㎜～10㎜のローム粒子、炭化物あり
14層　暗褐色土　粘性あり、3㎜～5㎜のローム粒子、炭化物あり
15層　暗褐色土
16層　黒褐色土　しまりあり、10㎜～20㎜のロームブロックを含む
17層　暗褐色土　しまりあり、10㎜～50㎜のロームブロックを含む
18層　暗褐色土　しまりあり、粘性少しあり、5㎜～10㎜のローム粒子を含む
19層　暗褐色土　しまりあり、粘性少しあり、5㎜～7㎜のローム粒子、褐色土を少し含む
20層　暗褐色土　旧表土、しまり強

第144図　馬土手

第3節　まとめ

本遺跡については、遺物を検出することができなかったため、明確な時期を決定することは困難である。しかし、土手の盛土の積み方や溝を有する点など、江戸時代に形成されたと考えられる本遺跡周辺[1]の馬土手の構築方法と大差がないことから、当該期のものであると考えられる。

江戸時代には、東金市・八街市・山武町にかけての地域には幕府の直轄領の佐倉七牧の一つである小間子牧[2]が存在した。この牧は他の六牧と同様に幕府の軍馬の重要な供給源であった。本遺跡はこの広大な牧の南端部よりもさらに南に位置すると考えられ、享保年間の古地図から小間子牧の復元を行っている松下氏の地図[3]によれば、本遺跡は小間子牧から600m程離れた地点に位置することになる。しかしながら、小間子牧は時期によって多少の規模の拡大縮小があったと考えられるので、本遺跡と同牧との関連性を裏付けるものはないが、立地的に考えるならば、本遺跡は小間子牧に関連する馬土手である可能性が認められるであろう。

注

1　青木幸一　1993「込前馬土手」『平成4年度　東金市内遺跡発掘調査報告書－油井古塚原遺跡(丑子台地点)・込前馬土手－』　東金市教育委員会

　　喜多圭介　1993　『(財)印旛郡市文化財センター年報』9

2　田上　繁　1988　「3章　近世」『山武町史』通史編　山武町

3　松下邦夫　1988　「細井広沢の下総牧実測図－佐倉牧の復元図紹介」『房総の牧』第4号　房総の牧研究会

第23表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代１）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 2	第42図の1	土師器杯	口縁部１/２欠損	12.7		3.7	砂粒ほとんど含まない	内面黒色、外面鈍い赤橙色	黒色処理
SI 2	第42図の2	土師器杯	口縁部から体部１/５残存	13.7			大粒砂粒含まず	鈍い橙色	器面磨滅
SI 2	第42図の3	土師器杯	約１/２残存	13.4		4	鉄分少々含む、大粒砂含まず	橙色から黒褐色	焼成不良
SI 2	第42図の4	土師器杯	体部１/５残存	14		4	鉄分少々含む、大粒砂含まず	内面黒色、外面体部黒色	やや不良
SI 2	第42図の5	土師器杯	口縁一部欠損	14.1		4.4	鉄分少々含む、大粒砂含まず	内面黒色、外面浅黄橙色	内面黒色処理
SI 2	第42図の6	土師器高杯	脚接合部のみ残存				鉄分多く含み、大粒砂含まない	内面黒色、外面明褐色	内面黒色処理
SI 2	第42図の7	土師器高杯	脚部なし体部３/４残存	14.0～14.5			鉄分含む	内面灰赤色、外面橙色	内面黒色処理
SI 2	第42図の8	土師器甕	縦方向に１/２残存	18	7.3	28	直径１㎜前後の砂粒多く含む	内面橙色、外面赤褐色～黒褐色	上半は縦方向、下半は横方向のヘラ削り
SI 2	第42図の9	土師器甕	ほぼ完形	19.7		28	直径１㎜前後の砂粒多く含む	内面鈍い橙色、外面橙色～黒褐色	
SI 2	第42図の10	土師器甕	口縁から体部にかけて１/５残存	16.4			微砂粒多く含む、大粒砂含まず	内面鈍い橙色、外面橙色	内面指なで
SI 2	第42図の11	土師器甕	体部下半から底部残存		8		小砂粒多量に含む、鉄分多く含む	鈍い橙色	
SI 2	第42図の12	土師器甑	ほぼ完形	28.8～29.5	10	27	大粒の鉄分多量に含む	浅黄橙色～橙色	焼成やや不良、外面縦方向の粗いヘラミガキ
SI 3	第43図の1	土師器壷	体部１/６残存	10.2			直径0.5㎜前後の砂粒を多量に含む	内面黒色、外面赤褐色	
SI 3	第43図の2	土師器甕	体部上半３/４残存	18.7			直径0.5㎜～１㎜の砂粒を多量に含む	内面赤黒色、外面橙色	内面剥離著しい
SI 3	第43図の3	土師器甕	口縁から体部にかけて１/３残存	18.7			小砂粒多く含みザラザラしている	内面明赤褐色、外面赤褐色～黒色	
SI 5	第45図の1	土師器杯	１/２残存	11.8		4	微砂粒と鉄分含む、やや粗	内外面浅黄橙色～黒褐色	口縁端磨滅著しい
SI 5	第45図の2	土師器杯	口縁１/２欠損	13.4	7.2	4.3	0.5㎜～１㎜前後の砂多く含む	内面鈍い橙色～赤褐色	外面へら削り
SI 5	第45図の3	土師器杯	口縁１/２欠損	12.6		4.1	微砂粒含むザラザラした感じ	内面鈍い黄橙色、外面赤褐色	外面へら削り後粗いヘラミガキ
SI 5	第45図の4	土師器杯	口縁端１/２欠損	16.1		5.8	0.5㎜前後の砂粒と鉄分少々含む	内面橙色、外面橙～黒色	焼成不良のため調整がはっきりわからない
SI 5	第45図の5	土師器杯	体部１/３残存	16		6.4	砂粒ほとんど含まない、鉄分含む	内面黒色、外面鈍い橙色	焼成不良、内面黒色処理
SI 5	第45図の6	土師器高杯	杯部１/６残存	20.4			軟質砂粒少なく鉄分多く含む	内面黒褐色、外面鈍い橙色	内面非常に丁寧なヘラミガキ
SI 5	第45図の7	須恵器杯	１/２残存	9.4		4.4	0.5㎜前後の白色砂粒と微砂粒多く含む	灰色	気泡を含みザラザラして砂っぽい
SI 5	第45図の8	須恵器杯	口縁１/６残存	9.9			白色微砂粒含む、緻密やや砂っぽい	内面灰色、外面暗オリーブ灰色	硬質
SI 5	第45図の10	土師器高杯	脚部と杯部の接合部のみ残存				砂粒含まず気泡が多数みられる	橙色	軟質
SI 5	第45図の11	土師器高杯	脚部と杯部の接合部のみ残存				砂粒含まず鉄分含む	内面黒色、外面鈍い橙色	内面黒色処理
SI 5	第45図の12	須恵器甕	口縁部破片				0.5㎜～2㎜の白色砂粒多く含む	内面暗灰黄色、外面灰色	緻密硬質
SI 5	第45図の13	土師器甕	口縁１/６残存	20			微砂粒と鉄分多く含む	内面黒褐色、外面鈍い橙色	気泡あり比較的緻密
SI 5	第45図の14	土師器甕	体部から口縁にかけて１/２残存	14.4			0.5㎜以下の砂粒多量に含む	内面鈍い橙色～黒色、外面橙色～黒色	ザラザラした感じ、器面剥離著しい
SI 5	第45図の15	土師器甕	口縁１/３残存	15			0.5㎜前後の砂粒多量に含む	内面黒褐色、外面鈍い赤褐色～黒色	鉄分含む硬質歪み著しい
SI 5	第45図の16	土師器甕	底部２/３欠損	16.8	6.9	26	微砂粒多く含む	内面鈍い橙色、外面黄橙色～黒色	外面に煤が多量に付着、器面剥落みられる
SI 5	第45図の17	土師器甕	ほぼ完形	16.4	7.5	15	0.5㎜前後の砂粒多量に含む	内面鈍い橙色～黒色、外面橙～黒色	口縁内面端に煤付着
SI 5	第45図の18	土師器甕	口縁から体部にかけて１/８残存	20.5			微砂粒多く含み気泡多くみられる	内面黒褐色、外面鈍い橙色	口縁端一部器面剥落みられる
SI 5	第45図の19	土師器甕	口縁から体部にかけて１/５残存	21.3			0.5㎜～１㎜前後の砂粒含む	内面黒褐色、外面鈍い橙～黒褐色	全体に歪みあり、調整粗雑、鉄分含む
SI 5	第45図の20	土製円盤					微砂粒多量に含む		土師器甕片を加工
SI 5	第45図の21	土製支脚	基底部欠損				白色微砂粒多く含む		ボロボロしてもろい
SI 5	第45図の22	土製支脚	基底部欠損				砂粒主体で粘土分少ない	鈍い赤褐色	ボロボロしてもろい
SI 13	第46図の1	土師器杯	２/３残存	10.5		5	砂粒鉄分多く含む	内面鈍い赤褐色、外面橙色	外面磨滅してザラザラしている
SI 13	第46図の2	土師器杯	１/５残存	11		5.6	砂粒鉄分多量に含む	内面鈍い橙～黒褐色、外面明赤褐色	焼成やや不良、磨滅著しい、ザラザラしている

第24表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代２）　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 13	第46図の3	土師器杯	1/3残存	12		3.7	微砂粒鉄分含む	内面薄い赤～褐灰色、外面薄い赤～鈍い橙色	磨滅してザラザラしている
SI 13	第46図の4	土師器杯	1/7残存	11.5			砂粒少ない精選	灰白色～褐灰色	口縁端磨滅、丁寧な作り
SI 13	第46図の5	土師器杯	1/5残存	13			砂粒少ない、鉄分含む	鈍い黄橙色	焼成不良
SI 13	第46図の6	土師器杯	1/3残存	13.6		4.7	微砂粒多く含む、鉄分含む	内面外面とも鈍い橙～暗赤色	内外面全体に赤彩
SI 13	第46図の7	土師器杯	口縁1/3欠損	12		4.9	白色微砂粒鉄分含む	内面鈍い橙、外面橙～赤褐色	半球形、内面丁寧なヘラミガキ
SI 13	第46図の8	土師器杯	1/8残存	12.7		3.5	砂粒少ない、鉄分多量に含む	内面灰褐色、外面鈍い黄橙色	口縁端を著しく磨耗
SI 13	第46図の9	土師器杯	2/3残存	12.4		5.2	多量の鉄分含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒色	歪み著しい
SI 13	第46図の10	土師器杯	2/3残存	13.1		4.9	白色微砂粒鉄分多く含む	内面外面とも鈍い橙色	口縁端内側磨滅、漆塗り
SI 13	第47図の11	土師器杯	1/3残存	10.4		3.8	微砂粒多量に含む	内面外面とも鈍い橙色	口縁端磨滅、粗質
SI 13	第47図の12	土師器杯	1/5残存	12.2			砂粒少なく鉄分多量に含む	内面黒色、外面鈍い黄橙色	口縁端磨滅、軟質
SI 13	第47図の13	土師器杯	9/10残存	13.7		4.2	砂粒少ない、鉄分少々含む	内面鈍い黄橙～黒色、外面浅黄橙～黒色	内面黒色処理、外面不明
SI 13	第47図の14	土師器杯	1/4残存	12.9		3.4	砂粒ほとんど含まず鉄分含む	内面外面とも灰白色～黒色	口縁端磨滅、内面丁寧なヘラミガキ、軟質
SI 13	第47図の15	土師器杯	1/2残存	9.3		3.6	白色微砂粒鉄分多く含む	内面外面とも鈍い黄橙色～黒色	外面ヘラ削り後粗いヘラミガキ
SI 13	第47図の16	土師器杯	1/5残存	12.1	7	5.1	灰白色微砂粒多量に含む	内面鈍い橙色、外面黒色	ザラザラした感じ、内面ナデ
SI 13	第47図の17	土師器杯	口縁部1/7残存	16			微砂粒多く含む	内面鈍い橙～黒色、外面赤と黒色	外面赤彩、外面ヘラ削り後粗くヘラミガキ
SI 13	第47図の18	土師器高杯	杯部1/6残存	16			微砂粒多量に含む	内面灰褐色、外面黒褐色	断面ザラザラした感じ、口縁端波を打つ
SI 13	第47図の19	土師器杯	1/5残存	14	6	3.7	白色砂粒を多量に含む	内面灰褐色、外面にぶい橙色	内外面粗いヘラミガキ
SI 13	第47図の20	土師器杯	1/2残存	14	5.9	3.5	1mm以下の白色砂粒を多量に含む	内面外面とも黒色	内外面とも黒色処理
SI 13	第47図の21	土師器杯	口縁1/2欠損	12.5		3.5	砂粒少ない鉄分多く含む	内面外面とも鈍い橙色	内外面とも漆塗り
SI 13	第47図の22	土師器杯	6/7残存	11.5		3.6	微砂粒多く含む、気泡含みやや粗	内面鈍い橙波黒色、外面鈍い橙～黒褐色	
SI 13	第47図の23	土師器高杯	完形	12.6	8.8	8.8	微砂粒と鉄分多量に含む	杯部内面橙～黒色、外面鈍い褐色～鈍い橙色	口縁と脚部端2か所で著しく磨耗
SI 13	第47図の24	土師器高杯	杯部1/3、脚部完存	16.6	12	10	微砂粒含む、鉄分多く含む	杯部内面鈍い橙～黒色、外面鈍い橙色	杯部中央ややくぼみ磨滅
SI 13	第47図の25	土師器高杯	杯部1/2残存				0.5mm以下の砂粒多量に含む	内面鈍い赤褐色、外面黒色	2次的に蓋のような用途で使用していたのであろうか
SI 13	第47図の26	土師器高杯	脚部1/3残存		14		砂粒少ない、鉄分多く含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒褐色	
SI 13	第47図の27	須恵器杯蓋	3/4残存	10.5		4	微砂粒含む、ザラザラした感じ	灰色	項部回転ヘラ削り
SI 13	第47図の28	須恵器杯	1/5残存	10			砂粒若干含む、黒斑少し含む	灰色	気泡含みやや粗
SI 13	第47図の29	須恵器高台付盤	底部1/8残存		24		白色砂粒多量に含み全体にザラザラ	灰色	
SI 13	第47図の30	土師器手づくね坩	完形	4.3		5	白色微砂粒多く含む	鈍い橙色	
SI 13	第47図の31	土師器甕	口縁部1/4欠損	11.2	6.1	9.4	微砂粒含む	内面橙～黒色、外面橙色	焼成やや不良
SI 13	第47図の32	土師器甕	口縁部1/4残存	10.8			砂粒少ない、やや粗	内面黒色、外面橙色	外面部分的にヘラミガキ
SI 13	第47図の33	土師器甕	口縁部1/6残存	13.8			微砂粒と鉄分多量に含む	内面黒色、外面橙色	
SI 13	第47図の34	土師器甕	口縁部1/2残存	14.2			0.5mm～1mm前後の砂粒多量に含む	淡橙色～灰褐色	器面磨滅してザラザラしている、口縁端ヘラ削り
SI 13	第47図の35	土師器甕	口縁から胴部1/2残存	17			0.5mm以下の砂粒多量に含む	内面黒色、外面明赤褐色	
SI 13	第47図の36	土師器甕	口縁部1/8残存	20			0.5mm前後の砂粒多量に含む	鈍い赤褐色	気泡あり、やや粗
SI 13	第47図の37	土師器甕	口縁部1/3残存	19.8			砂粒少ない	内面鈍い赤褐色、外面明赤褐色	
SI 13	第47図の38	土師器甕	口縁部1/4残存	18.5			微砂粒多量に含む	鈍い橙～黒褐色	やや粗
SI13	第47図の39	土師器甕	口縁から胴部1/4残存	18.4			微砂粒多量に含む	内面鈍い橙色、外面黒色	内面ヘラナデ
SI13	第47図の40	土師器甕	口縁部1/4残存	14			微砂粒多量に含む	鈍い橙色	

第25表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代３）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 13	第46図の41	土師器甕	口縁部１/４残存	21.3			砂粒少ない、鉄分含む	鈍い橙色	
SI 13	第46図の42	土師器甕	口縁部１/３残存	16.2			１mm以下の白色砂粒多量に含む	橙～黒色	口縁磨滅ザラザラしている
SI 13	第46図の43	土師器甕	口縁部１/８残存	19			白色砂粒多量に含む	内面赤褐色、外面鈍い橙色	赤彩か
SI 13	第46図の44	土師器甕	口縁部１/３残存	13			微砂粒多く含む	内面黒色、外面橙色	器面剥落みられる
SI 13	第46図の45	土師器甕	底部１/２残存		11		0.5mm～２mmの白色砂粒多量に含む	内面橙色、外面黒褐色	ザラザラしている
SI 13	第46図の46	土師器甕	底部１/３残存		7.2		微砂粒多量に含み粗	鈍い橙色	外面を砥石として２次利用
SI 13	第46図の47	土師器甕	底部のみ残存		6.4		白色砂粒鉄分含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒色	内面に剥落あり
SI 13	第46図の48	土師器甕	底部のみ残存		7.5		0.5mm～１mm前後の砂粒多量に含む	内面橙色、外面鈍い黄橙色	比較的硬質
SI 13	第46図の49	土師器甕	底部７/８残存		6.6		微砂粒多量に含む	内面鈍い赤褐色、外面赤黒色	
SI 13	第46図の50	土師器甕	底部３/４残存		6.4		微砂粒と鉄分多く含む	灰褐色	
SI 13	第46図の51	土製紡錘車	１/３残存				砂粒少ない	黒褐色	ヘラ削り後粗いヘラミガキ
SI 15	第48図の1	土師器杯	１/２残存	16.3		4.3	大粒砂少々含む	内面明赤褐色～鈍い橙色、外面鈍い橙色	内面赤彩
SI 15	第48図の2	土師器甕	底部１/２残存		9.8		大粒の白色砂粒多量に含む	内面黒色、外面鈍い橙色	ザラザラした感じ
SI 18	第49図の1	土師器杯	１/４残存	20.4			微砂粒と鉄分多く含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒色	
SI 18	第49図の2	土師器杯	１/５残存	13.7			鉄分を多く含む	内面鈍い赤褐色、外面橙色	
SI 18	第49図の3	土師器杯	１/３残存	17.1		9.6	微砂粒と鉄分多く含む	鈍い橙～灰褐色	半球形
SI 18	第49図の4	土師器杯	１/２残存	13.4	9.5	9.6	微砂粒と鉄分粒多く含む	内面鈍い橙～黒褐色、外面鈍い橙～黒色	器面少々磨滅
SI 18	第49図の5	土製支脚	上部欠損						器面は面取りされている
SI 19	第51図の1	土師器杯	１/３残存	17		4	砂粒少ない鉄分含む	鈍い橙～黒色	内面ヘラミガキ、外面ヘラ削り後部分的にヘラミガキ
SI 19	第51図の2	土師器杯	完形	16.9		5.8	砂粒少ない鉄分含む	内面鈍い橙～黒褐色、外面鈍い橙～赤褐色	口縁外面カキ目
SI 19	第51図の3	土師器杯	１/３残存	12.5			微砂粒多く含む鉄分含む	鈍い黄橙色～黒色	
SI 19	第51図の4	土師器杯	１/４残存	10.7		3.1	砂粒少ない鉄分含む	鈍い黄橙色	口縁端磨滅
SI 19	第51図の5	土師器杯	完形	11.9		4.1	砂粒少々含む	橙色	焼成不良、軟質
SI 19	第51図の6	土師器杯	口縁１/４欠損	14		5.4	微砂粒多く含む	鈍い橙色	硬質
SI 19	第51図の7	土師器杯	完形	11.2		3.4	３mm以下の砂粒多量に含む	外面体部黒色、他は赤色	口縁外面と内面は赤彩
SI 19	第51図の8	須恵器杯	３/４残存	10		4	微砂粒を含む緻密	灰色	内面焼成前の剥離痕
SI 19	第51図の9	土師器高杯	完形	17.4	14	14	微砂粒多量に含む	橙色	器面剥落著しくボロボロしている
SI 19	第51図の10	土師器高杯	脚部１/２欠損	19	15	15	微砂粒多く含む、鉄分含む	橙色一部黒色斑あり	焼成不良のため器面磨滅
SI 19	第51図の11	土師器高杯	口縁部１/４残存脚部完存	20.3	13	13	微砂粒多く含む、鉄分含む	鈍い橙色	脚部粗いヘラミガキ
SI 19	第51図の12	土師器高杯	脚部１/３欠損杯部完存	23.2	15	17	大粒砂粒少々含む、鉄分含む	橙～黒色	
SI 19	第51図の13	土師器高杯	口縁のみ１/５残存	20			微砂粒多く含む	鈍い橙色	
SI 19	第51図の14	土師器高杯	口縁部１/６残存	25			１mm前後の砂粒多量に含む、鉄分含む	内面鈍い黄褐色、外面橙色	粘性不足
SI 19	第51図の15	土師器高杯	脚部のみ残存				白色砂粒多量に含む	明赤褐色～黒色	ザラザラする
SI 19	第51図の16	土師器高杯	杯と脚の接合部片				砂粒少ない、鉄分粒多量に含む	内面灰黄褐色、外面鈍い橙色	やや軟質
SI 19	第51図の18	土師器高杯	杯と脚の接合部片				砂粒少ない、鉄分多い	鈍い橙色	脚の破損部が磨滅しているので何かに２次利用している
SI 19	第51図の19	土師器高杯	脚部のみ２/３残存		13		微砂粒と鉄分粒含む	内面鈍い橙～明赤褐色、外面灰褐色	内面粘土紐輪積痕あり
SI 19	第51図の20	土師器甕	２/３残存	14.7	7.9	11	１mm以下の砂粒多量に含む	内面外面とも橙～灰褐色	全体に歪みあり、焼き歪みがはいる
SI 19	第51図の21	土師器甕	５/６残存	14.6		12	微砂粒と鉄分を多量に含む	内面鈍い橙～黒色、外面鈍い褐色～黒色	歪みあり、使用により底部かなり磨滅

第26表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代４）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 19	第51図の22	土師器壷	完形	9.4	6.7	11	微砂粒鉄分含む	内面鈍い黄褐色、外面浅黄橙色	器面剥落、器面厚く重い
SI 19	第51図の23	土師器壷	完形	9.5	6	8.1	１mm以下の砂粒多量に含む、鉄分含む	内面黒色、外面鈍い橙色	内面黒色処理
SI 19	第51図の24	土師器甕	１/５残存	14			白色微砂粒多量に含む	内面灰赤～黒色、外面橙色	器面剥落、内面粗いヘラミガキ
SI 19	第51図の25	土師器鉢	完形	14.6	5.5	8.5	白色微砂粒多量に含む	内面黒色、外面明赤褐色	外面器面剥落
SI 19	第51図の26	土師器鉢	３/４残存	17.6	8.8	8.3	砂粒鉄分多く含む	内面鈍い黄褐色、外面鈍い黄橙色	外面指頭痕、底部木葉痕
SI 19	第52図の27	土師器鉢	完形	19.8	7.2	11	砂粒鉄分多く含む	橙色、底部黒色斑あり	焼成著しく不良、器面磨滅
SI 19	第52図の28	手づくね土器	１/５残存	5	4.5	2.1	砂粒少ない、鉄分多く含む	灰赤色	
SI 19	第52図の29	土製勾玉	端部欠損				砂粒少ない	鈍い橙～灰褐色	
SI 19	第52図の30	土製支脚	基底部欠損				砂粒少なく鉄分多く含む	にぶい橙色	
SI 19	第52図の31	土製支脚	完形				砂粒主体で粘土少ない	にぶい赤褐色	ボロボロしてもろい
SI 19	第52図の32	土製支脚	ほぼ完形				砂粒主体で粘土少ない	灰黄褐色	ボロボロしてもろい
SI 19	第52図の33	土師器甕	ほぼ完形	15.3	5.7	16	微砂粒と鉄分多く含む	内面外面とも橙～灰褐色	外面焼成不良のため磨滅
SI 19	第52図の34	土師器甕	３/４残存	16.3～18	8.7	20	白色微砂粒と鉄分粒多く含む	橙～黒色	作り粗雑口縁の歪み著しい
SI 19	第52図の35	土師器甕	底部周辺のみ		9.4		砂粒少ないが鉄分多量に含む	内面橙色、外面橙～黒色	内面は焼成不良と使用により著しく剥落あり
SI 19	第52図の36	土師器甕	１/２残存	14.1	7.3	20	鉄分多量に含む、砂分少ない	鈍い橙色	器面なめらかでツルツルしている、厚手で重い
SI 19	第52図の37	土師器甕	底部のみ欠損	16.3			0.5mm以下の砂粒多量に含む	灰褐色	外面ヘラ削り、器面はなめらか
SI 19	第52図の38	土師器甕	胴部から底部３/４欠損	17.2	7.5	26	白色微砂粒多量に含む	内面鈍い橙色、外面橙～黒褐色	外面ヘラ削りの稜線が明瞭
SI 19	第52図の39	土師器甕	胴部一部欠損	15.6	7.1	27	１mm～２mmの砂粒多量に含む	橙～黒色	外面ヘラ削りは位置により削る方向が異なる
SI 19	第52図の40	土師器甕	底部１/２残存		6.8		砂粒鉄分多量に含む	内面赤橙～黒色、外面赤褐色	使用により内面剥落著しい
SI 19	第52図の41	土師器甕	底部１/４残存		6.8		白色微砂粒多量に含む、鉄分含む	内面明赤褐色～黒色、外面橙色	２次的に火を受けている
SI 19	第52図の42	土師器甕	底部～胴部にかけて１/３残存		6.8		微砂粒多量に含む	内面橙色、外面赤褐色～黒褐色	内面剥落にみられる
SI 19	第53図の43	土師器甑	１/３残存	23.2	9.1	23	微砂粒鉄分多量に含む	鈍い橙～黒色	外面全体に少し磨滅している
SI 19	第53図の44	土師器甑	口縁一部欠損	23.9	11	25	鉄分多量に含む	内面淡橙色、外面淡橙～黒色	焼成やや不良
SI 19	第53図の45	土師器甑	口縁一部欠損	23	9.2	25	鉄分多く含む	内面淡橙色、外面淡橙～黒色	焼成やや不良
SI 20	第54図の1	土師器杯蓋	２/３残存	9.2		3.4	微砂粒多量に含む	内面黒色、外面鈍い橙～黒色	内面黒色処理
SI 20	第54図の2	土師器杯	１/３残存	8.8		3	砂粒非常に少ない、精選	内面外面鈍い黄橙～黒色	内面黒色処理
SI 20	第54図の3	土師器杯	１/３残存	13			砂粒少なく鉄分含む	内面黒色	内面黒色処理
SI 20	第54図の4	須恵器杯	４/５残存	8.4		3.2	微砂粒多く含む、緻密	灰色	外面回転ヘラ削り
SI 20	第54図の5	土師器高杯	杯部１/４脚部完存	16.6	10	11	微砂粒多い、鉄分含む	橙色	２次焼成で器面剥落、赤彩か
SI 20	第54図の6	土師器高杯	口縁１/２残存	16.4			砂粒含まずやや粗	内面黒色、外面鈍い橙色	内面黒色処理
SI 20	第54図の7	土師器高杯	脚部のみ完存		9		白色微砂粒多量に含む、鉄分多く含む	鈍い橙色	２次使用により脚端部かなり磨滅
SI 20	第54図の8	土師器高杯	脚部のみ１/２残存		12		微砂粒多量に含み比較的硬質	鈍い橙色、脚端部部分的に黒色	
SI 20	第54図の9	土師器鉢	１/３残存	14.9	6.5	9	鉄分多量に含む	内面黒色、外面鈍い橙色	内面黒色処理
SI 20	第54図の10	土師器甕または甑	口縁部１/３残存	16			１mm以下の砂粒を多量に含む	内面暗赤灰色、外面橙色	ヘラ削りの単位が明瞭
SI 20	第54図の11	土師器甑	口縁から胴部１/５残存	20			１mm以下の砂粒鉄分多量に含む	内面鈍い黄橙色～褐灰色、外面褐灰色	内面ヘラナデ
SI 20	第54図の12	土師器甕	口縁部１/４残存	14.2			２mm以下の砂粒鉄分多量に含む	黒色	硬質
SI 20	第54図の13	土師器甕	口縁部４/５残存	19.9			鉄分粒多量に含む、砂粒少ない	鈍い橙～黒色	全体に軟質
SI 20	第54図の14	土師器甕	底部３/４残存		6.8		１mm以下の砂粒を多量に含む、比較的緻密	内面橙～黒色、外面赤褐色～黒褐色	器面剥離

第27表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代５）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 20	第54図の15	土師器甕	底部１/２残存		6		鉄分粒多量に含む	内面鈍い黄褐色、外面明赤褐色	器面ザラザラする
SI 20	第55図の16	土師器甕	底部５/６残存		6.7		微砂粒多量に含む、比較的緻密	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒色	硬質
SI 20	第55図の17	土師器甕	底部１/２残存		7		微砂粒多く含む	内面外面とも暗赤灰色	底部木葉痕
SI 20	第55図の18	土師器甑	３/４残存	25.5	11	22	鉄分多量に含む	鈍い褐色	外面全体に磨滅
SI 21	第56図の1	土師器鉢	口縁２/３欠損	13	6.5	7.2	微砂粒少々含む	鈍い黄橙色（断面黒色）	内面丁寧なヘラミガキ
SI 22	第58図の1	土師器杯	口縁部１/２欠損	11.8		4	砂粒ほとんど含まない	鈍い橙～黒色	気泡含みやや粗
SI 22	第58図の2	須恵器杯	ほぼ完形	11.5		4.8	白色微砂粒多く含む	灰色	底部歪みあり、底部条線入る
SI 22	第58図の3	土師器高杯	杯部２/３残存、脚部完存	18.8	13	12	鉄分多く含む大粒砂含まない、精選	橙～褐色	口縁部端・脚部端磨滅
SI 22	第58図の4	土師器高杯	杯部のみほぼ完存	25.1			微砂粒と鉄分多く含む	内面灰褐色、外面橙色	焼成やや不良、内面磨滅
SI 22	第58図の5	土師器甕	口縁部１/４残存	20			白色微砂粒多く含む、鉄分塊含む	灰褐色	
SI 22	第58図の6	土師器甕	１/２残存	17.8	7.4	26	微砂粒多量に含む、やや砂っぽい	内面橙色、外面鈍い橙～黒褐色	器面に磨滅剥離みられる
SI 22	第58図の7	土製勾玉							
SI 22	第58図の8	土製小玉							
SI 22	第58図の9	土製勾玉							
SI 22	第58図の10	土製支脚	基底部欠損				砂粒含まず粘土のみ	浅黄橙色	周囲面取り
SI 22	第58図の11	土製支脚	基底部欠損				植物繊維多量に含む	赤褐色	
SI 22	第58図の12	土製支脚	上部基底部欠損				砂粒含まず粘土のみ	浅黄橙色	周囲面取り
SI 25	第59図の1	土師器杯	１/３残存	9.3		3	砂粒少ない鉄分多く含む	明褐灰色	端部と外面磨滅
SI 25	第59図の2	須恵器杯	口縁端１/３欠損	8.5		3.9	砂粒含まず	灰色	底部周辺回転ヘラ削り
SI 25	第59図の3	須恵器杯	１/３残存	8.8		5	砂粒含まず緻密	灰色	底部周辺回転ヘラ削り
SI 25	第59図の4	須恵器杯蓋	１/６残存	15.7			やや砂っぽい黒色斑みられる	灰白色	宝珠つまみの付くタイプ
SI 25	第59図の5	須恵器杯蓋	１/２残存	9.4		3.5	白色微砂粒多量に含む	灰色	粘土紐巻き上げ痕あり
SI 25	第59図の6	土師器高杯	杯部１/４残存	14.2			微砂粒含む	内面黒色、外面鈍い橙色	内面黒色処理
SI 25	第59図の7	土師器高杯	脚部完存		11		白色微砂粒多く含む	橙色	脚部端が部分的に欠損したり磨滅
SI 25	第59図の8	土師器高杯	脚部２/３残存		11		微砂粒含む	鈍い橙色	杯部内面磨滅
SI 25	第59図の9	須恵器高杯	脚部先端欠損	15			少々砂っぽい、気泡みられる	灰色	杯部外面に沈線が１～２本入る
SI 25	第59図の10	土師器甑	体部１/５残存	24			白色微砂粒多く含む	黒褐色	内面ヘラミガキ
SI 25	第59図の11	土師器甕	口縁端１/４残存	24			砂粒多く気泡多くみられる	鈍い橙色	器面剥落著しい、作り粗雑
SI 25	第59図の12	土師器甕	底部のみ完存		10		砂粒、鉄分多く含む	鈍い黄橙色	内面ユビナデ、外面ザラザラしている
SI 25	第60図の13	土師器甕	１/３残存	20			大粒砂多量に含む、鉄分多く含む	橙色黒色斑点あり	器面剥落しザラザラしている
SI 25	第60図の14	土師器甕	口縁と胴部下半一部欠損	18.5	7.4	28	１㎜～４㎜の大粒砂多量に含む	橙色	器面の剥落著しい
SI 25	第60図の15	土師器甕	底部１/２残存		8.2		微砂粒多量に含む	内面黒褐色、外面鈍い橙色	器面磨滅しボロボロしている
SI 25	第60図の16	石製紡錘車	１/２残存						滑石製
SI 30	第61図の1	土師器杯	２/３残存	12		14	微砂粒鉄分粒多量に含む	内面灰黄褐色、外面鈍い黄橙色～黒色	外面磨滅
SI 36	第62図の1	須恵器杯	完形	8.9		3.3	緻密砂っぽい	灰色	外面ゴマフリ状に自然釉付着、東海産
SI 36	第62図の2	土師器杯	１/５残存	15.9	8.9	6	鉄分多く含む	橙色	焼成不良極めて軟質、トロトロ
SI 36	第62図の3	土師器甕	底部のみ完		7.3		微砂粒と鉄分多く含む	内面外面鈍い橙～黒褐色	やや軟質、外面横方向にヘラ削り
SI 36	第62図の4	土師器甕	１/３残存	11.3	6	8.4	白色微砂粒と鉄分多く含む	内面黒色、外面鈍い橙～黒色	外面磨滅、内面剥離あり

第28表　一本松遺跡土器観察表（古墳時代６）　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 36	第62図の5	土師器甕	口縁～胴部１/10残存	26.5			砂礫を多量に含む、ザラザラする	内面灰赤色、外面鈍い橙～黒色	薄手、外面ヘラ削り、ボロボロしている
SI 36	第62図の6	土師器甑	口縁～胴部１/２残存	21			微砂粒多量に含む、鉄分含む	内面薄明赤褐色、外面鈍い橙～黒色	内面横方向のヘラ削り
SI 40	第63図の1	須恵器杯蓋	５/６残存	9.1		3.2	微砂粒多く含む、粗質軽量	灰色	つまみ脇を砥石として流用、産地不明
SI 40	第63図の2	土師器杯	１/３残存	9.6		3.7	精選されて砂粒少ない	内面黄灰色、外面淡黄色	口縁端磨滅、内面調整不明、外面磨滅
SI 42	第64図の1	土師器杯	口縁１/２欠損	8.8		3.5	微砂粒多量に含む	内面鈍い赤褐色、外面鈍い橙色	口縁端外面磨滅、焼成良
SI 42	第64図の2	土師器杯	１/４残存	11.6		3.8	砂粒少ない、鉄分多く含む	内面橙色、外面浅黄橙色	外面に飛びガンナ風のヘラ削り痕跡
SI 42	第64図の3	土師器杯	１/２残存	11.8		4.1	砂粒少ないが鉄分多量に含む	内面灰褐色～黒色、外面浅黄橙色	外面軟質、剥離著しい
SI 42	第64図の4	土師器杯	１/２残存	10.6	7.1	3.4	砂粒少ないが鉄分多量に含む	内面鈍い橙～黒褐色、外面鈍い橙色	口縁端煤付着、器面剥落著しい
SI 42	第64図の5	土師器高杯	脚接合部１/２残存				微砂粒と鉄分多い、砂っぽい	橙色	焼成不良、器面の磨滅著しい
SI 42	第64図の6	土師器甕	口縁部１/３残存	15.2			１mm以下の砂粒多量に含む	内面黒色、外面鈍い橙～黒褐色	口縁端玉縁状
SI 43	第65図の1	土師器杯	１/３残存	12		3	砂粒少ない	内面灰褐色、外面鈍い橙～黒色	内面光沢あり、口縁端磨滅
SI 43	第65図の2	土師器杯	１/３残存	13		3.3	砂粒少ない	内面外面鈍い黄橙色	薄手丁寧な作り、断面灰色
SI 43	第65図の3	土師器杯	２/３残存	13.6		6.8	微砂粒含む	内面鈍い橙、黒色、外面鈍い橙色	内面黒色処理？
SI 45	第67図の1	土師器杯	口縁１/３欠損	13.1	11	4	砂粒少ない	内面外面鈍い橙～黒色	全面漆塗り光沢あり、立ち上がり・口縁端磨滅
SI 45	第67図の2	土師器杯	５/６残存	13.7		5.6	微砂粒含む	内面暗褐～黒色、外面鈍い褐色～暗褐色	内外面に鉄分付着、特に内面に顕著
SI 45	第67図の3	土師器杯	１/３残存	13.2		4.1	微砂粒鉄分含む	内面灰赤色～黒色、外面灰褐色～黒色	底面に焼成後のヘラがき沈線あり
SI 45	第67図の4	土師器杯	１/３残存	11.8		4	鉄分粒・塊多量に含む	鈍い橙色	底面に焼成後のヘラがき沈線あり
SI 45	第67図の5	土師器杯	底部欠損	12.4		3.7	砂粒少ない	鈍い橙～黒色	全面漆塗り光沢あり、端部磨滅
SI 45	第67図の6	土師器高杯	杯部１/２残存				白色微砂粒鉄分多く含む	内面鈍い赤褐色～暗赤灰色、外面明赤褐色	
SI 45	第67図の7	土師器高杯	脚部のみ完存		12		微砂粒含む	鈍い橙色（脚部内面褐灰色）	内面ハケメあり
SI 45	第67図の8	土師器高杯	ほぼ完形	13.6	11	9.8	砂粒少ない、鉄分多く含む	鈍い橙色～黒色	口縁端内側に傾斜してかなり磨滅
SI 45	第67図の9	土師器壷	１/２残存	7.8	6.5	9.9	白色微砂粒多量に含む	内面黒色、外面鈍い赤褐色～黒色	器面凸凹して調整不明
SI 45	第67図の10	須恵器壷	底部１/２残存				大粒砂少ない、黒色粒子吹き出しあり	灰色（断面灰黄色）	底部回転ヘラ削り、内面自然釉付着
SI 45	第67図の11	土師器甕	上部１/２残存	11.2			１mm前後の砂粒多量に含む、粘性弱い	内面灰褐～黒色、外面鈍い褐色～褐色	内面に粘土紐巻き上げ痕明瞭、口縁・器面歪みあり
SI 45	第67図の12	土師器甑	底部１/２残存		8.8		鉄分粒・塊多量に含む	橙色（外面黒色斑あり）	器面磨滅
SI 45	第67図の13	土師器甑	体部１/３残存	26.2			鉄分粒・塊多量に含む	橙色（外面黒色斑あり）	全体に軟質で器面磨滅
SI 45	第67図の14	土師器甕	上部１/３残存	21			極めて細かい、砂粒鉄分多量に含む	鈍い橙～灰褐色	内面ユビナデ、外面ヘラ削り後ヘラミガキ
SI 45	第67図の15	土師器甕	上部１/８残存	25.2			0.5mm以下の微砂粒多量に含む	内面鈍い橙色、外面橙～黒色	外面ヘラ削り後簡単なヘラミガキ

第29表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代１）　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 11	第68図の1	土師器杯	口縁端一部欠損	14.2		4.1	砂粒少なく鉄分非常に多い	鈍い橙色	口縁端と外面磨滅
SI 11	第68図の2	土師器杯	１/２残存	14.2	9.8	4	微砂粒と鉄分多く含む	橙色	口縁端と外面磨滅
SI 11	第68図の3	須恵器杯	１/５残存	14	10	3.3	白色砂粒多量に含む	灰白色	内外面とも磨滅、特に口縁端内側が著しく磨滅
SI 11	第68図の4	土師器杯	１/４残存	15.2			微砂粒多く含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒色	内面細かいヘラミガキ
SI 11	第68図の5	土師器甕	胴部一部欠損	14.9	7.7	14	0.5mm前後の白色砂粒多量に含む	内面黒褐色、外面明赤褐色～黒色	口径部内側に粘土紐接合痕みられる
SI 11	第68図の6	土師器甕	底部のみ完存		7.5		0.5mm～１mmの砂粒多量に含む	内面鈍い赤褐色、外面鈍い赤褐色～黒色	器面剥落著しい、内面ユビナデ

SI 14	第69図の1	土師器杯	底部のみ3/4残存		9.5		白色砂粒多量に含む	内面鈍い赤褐色、外面赤褐色	底部ヘラ削り
SI 14	第69図の2	土師器甕	胴部上半3/4残存				白色微砂粒多量に含む	内面明赤褐色～黒色、外面灰褐色	
SI 14	第69図の3	土師器甕	口縁～胴部1/4残存	16.5			0.5mm以下の白色砂粒多量に含む	内面黒褐色、外面赤褐色	粘土紐接合部が窪んでいる
SI 17	第70図の1	土師器杯	1/2残存	12.4		3.7	鉄分多く含む	内面橙色、外面鈍い褐色～黒色	器面磨滅
SI 17	第70図の2	土師器杯	1/5残存	13	7.5	3.9	砂粒と鉄分多く含む	橙色	底部回転糸切り後周辺ヘラ削り
SI 17	第70図の3	土師器甕	3/4残存	13.8	7.1	14	白色微砂粒多量に含む	灰褐色～黒色	底部木葉痕
SI 17	第70図の4	土師器甕	口縁1/3残存	14.2			0.5mm以下の砂粒多量に含む	内面暗赤灰色、外面橙色	内面ヘラナデ
SI 26	第71図の1	土師器杯	2/3残存	11.8	5.7	3.2	微砂粒含む橙色	橙色	口縁にタール付着、灯明具
SI 26	第71図の2	土師器杯	1/6残存	14.2	9.1	3.2	微砂粒含む	鈍い橙色	軟質で器面が剥落
SI 26	第71図の3	土師器杯	体部1/5底部完存	13.2	8.1	4.3	1mm前後の砂粒多量に含む	赤褐色（断面浅黄橙色）	内外面とも赤彩
SI 26	第71図の4	須恵器杯蓋	1/3残存				大粒砂・銀雲母片多く含む	灰白色	在地産
SI 26	第71図の5	須恵器長頸瓶	口頸部1/4残存	8.8～9.6			鉄分粒子少し含む	内面オリーブ黒色、外面オリーブ灰～オリーブ黒色	厚く灰釉掛かる
SI 26	第71図の6	土師器甕	口縁から肩1/6残存	21.6			白色砂粒多量に含む	内面灰褐色、外面鈍い橙色	口縁端細くつまみ上げる
SI 32	第72図の1	土師器杯	1/5残存	13.2	7.8	3	微砂粒と鉄分多く含む	鈍い褐色～黒褐色	内面ヘラミガキ
SI 32	第72図の2	土師器杯	1/8残存	17	10	3.2	微砂粒と鉄分含む	内面橙色、外面鈍い橙色	やや軟質、内面非常に丁寧なヘラミガき
SI 32	第72図の3	土師器甕	口縁から胴部1/3残存	21			1mm前後の砂粒多量に含む	橙～灰褐色	内面ユビナデ、外面ヘラ削り
SI 32	第72図の4	土師器甕	底部1/2残存		7.7		3mm以下の砂粒多量に含む	浅黄橙色	粗製・粗質、底部ヘラ削り
SI 35	第73図の1	土師器杯	ほぼ完形	15.7		3.6	微砂粒多く含む	内面外面赤色（断面橙色）	内外面赤彩
SI 35	第73図の2	土師器杯	口縁1/8欠損	15.8		3.3	色微砂粒多く含む	内面外面赤色（断面橙色）	内外面赤彩
SI 35	第73図の3	土師器杯	1/3残存	16		3.6	微砂粒と鉄分多く含む	内面外面赤色（断面淡橙色）	内外面赤彩
SI 35	第73図の4	土師器甕	口縁から胴部1/5残存	14			微砂粒と鉄分多く含む	内面褐灰色、外面橙色	軟質
SI 35	第73図の5	土師器甕	口縁から胴部1/4残存	22.6			砂粒多量に含み粗質	橙～灰赤色	内面ヘラナデ
SI 35	第73図の6	土師器甕	口縁から胴部1/5残存	19.2			鉄分微砂粒多く含む	内面鈍い橙色、外面薄橙色	
SI 35	第73図の7	土師器甕	口縁から肩部1/5残存	25			0.5mm以下の砂粒多く含む	鈍い橙色	
SI 35	第73図の8	土師器甕	底部2/3残存		7.8		白色微砂粒多量に含む	内面黒色、外面橙色	やや軟質
SI 37	第74図の1	土師器杯	2/3残存	12.4	9.8	3.5	微砂粒と鉄分多く含む	内面鈍い赤褐色、外面橙色	器面磨滅、内面丁寧なナデ
SI 37	第74図の2	土師器杯	2/3残存	12.8	8.7	4.2	白色微砂粒多量に含む、鉄分含む	内面外面とも橙～黒色	硬質
SI 37	第74図の3	土師器杯	口縁部1/2欠損	12.6	7.9	4.3	白色微砂粒多量に含む	橙～黒褐色一部赤褐色	内外面とも赤彩？
SI 37	第74図の4	灰釉陶器段皿	口縁部片	17			鉄分のしみだしあり、砂礫含む	灰白色	内面薄い灰釉掛かる、外面は自然釉か？
SI 37	第74図の5	須恵器高杯	杯部脚部の接合部片				銀雲母粒鉄分粒多く含む	灰色	表面なめらか3か所に透かしあり
SI 37	第74図の6	土師器甕	口縁部1/6残存	19			砂粒と鉄分多く含む	内面灰白色～鈍い橙色、外面灰白～灰褐色	薄手硬質口縁端を上下両端につまみ出す
SI 37	第74図の7	土師器甕	口縁部1/3残存	21.4			白色微砂粒を多量に含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～暗赤褐色	器面ザラザラして落ちやすい
SI 37	第74図の8	土師器甕	口縁から胴部1/2残存	17.2			砂粒多量に含む	内面褐灰色、外面鈍い橙～黒色	器面ザラザラして落ちやすい
SI 37	第74図の9	土師器甕	口縁から胴部完存	21			1mm以下の砂粒と鉄分多く含む	内面灰褐色、外面橙～黒褐色	肩に内面から穿った孔が3、外側からの孔が1あり
SI 37	第74図の10	土師器甕	口縁部1/4残存	20.6			白色砂粒多量に含む	内面橙色、外面鈍い橙色	硬質
SI 39	第75図の1	土師器杯	1/5残存	14.6			0.5mm以下の砂粒鉄分多く含む	鈍い橙色	ミガキの単位明瞭
SI 39	第75図の2	土師器杯	1/4残存	14		3.5	1mm以下の砂粒と鉄分多く含む	内面橙色、外面明赤褐色	軟質部あり
SI 39	第75図の3	土師器杯	4/5残存	18.5	11	6.5	白色砂粒と鉄分多く含む	内面外面赤～暗赤褐色	内外面とも赤彩、口縁端・立ち上がり部磨滅

第30表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代２）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI39	第75図の4	須恵器稜碗	1/4残存	15.2			白色微砂粒含む	灰色	無釉、器面なめらか
SI39	第75図の5	土師器甕	口縁から胴部1/5残存	26			1mm前後の砂粒多量に含む	内面鈍い赤褐色、外面鈍い赤褐色～暗赤褐色	内面ヘラナデ
SI39	第75図の6	土師器甕	口縁1/3残存	22			0.5mm～1mmの砂粒を多量に含む	橙色	肩部に非常に鋭利なヘラ削り
SI39	第75図の7	土製支脚	基底部欠損				白色微砂粒多く含む	灰白色～黒色	ボロボロして崩れやすい
SI4	第76図の1	土師器杯	2/3残存	14.4	7.2	4.6	微砂粒多く含む	内面黒色、外面鈍い橙～黒色	内面黒色処理、内面磨滅剥落あり
SI4	第76図の2	土師器杯	口縁1/10欠損	15.2	7.7	5.2	微砂粒含む	内面黒色、外面橙～黒色	内面黒色処理、底部回転ヘラ削り
SI4	第76図の3	土師器杯	完形	15.3	7.3	5.1	0.5mm以下の砂粒含む、鉄分含む	内外面とも鈍い赤褐色	底部静止糸切り
SI4	第76図の4	土師器杯	体部1/5残存	14.3	8	4	0.5mm以下の砂粒含む、鉄分含む	鈍い橙色	底部回転糸切り
SI4	第76図の5	土師器杯	体部1/3残存	12.2	6	4	0.5mm以下の砂粒含む、鉄分含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～明赤褐色	口縁端磨滅
SI4	第76図の6	土師器杯	体部1/3残存	13.8	6.9	4.2	0.5mm以下の白色砂粒含む、鉄分含む	内外面とも橙色	底部回転糸切り
SI4	第76図の7	土師器杯？	口縁1/3欠損	13	6.7	4	白色微砂粒・鉄分多量に含む	明赤褐～黒色	口縁端に煤付着、灯明具
SI4	第76図の8	土師器杯	1/3残存	12.4	6.8	4	微砂粒含む、鉄分含む	鈍い橙色（口縁端黒褐色）	底部静止糸切り
SI4	第76図の9	土師器杯	体部3/4欠損	14	7	4	小砂粒鉄分多含む	明赤褐色	底部「万所」墨書
SI4	第76図の10	土師器杯	体部1/5残存	13.6			0.5mm以下の砂粒鉄分含む	鈍い橙～褐灰色	
SI4	第76図の11	須恵器杯	口縁部1/5欠損	13.5	6.7	4.4	0.5mm以下の白色砂粒含む	黒～赤褐色	見込み剥離著しい
SI4	第76図の12	須恵器杯	口縁部1/3欠損	13.3	6.4	4.5	0.5mm以下の白色砂粒含む	黒～灰赤褐色	
SI4	第76図の13	須恵器杯	体部1/5残存	12.2	5.8	3.7	0.5mm～2mmの砂粒多量に含む	暗青灰色（断面鈍い黄橙色）	
SI4	第76図の14	須恵器杯	1/2残存	12.2	6	3.8	白色微砂多量に含む、ひび割れあり	灰色	
SI4	第76図の15	須恵器杯	完形	12.2	6.3	4	0.5mm以下の微砂粒鉄分含む	内面青灰色、外面青灰色、底部赤灰色	底部中央回転糸切り
SI4	第76図の16	須恵器杯	体部1/4残存	12.6	6.5	4.1	白色微砂多量に含む	赤褐色	
SI4	第76図の17	須恵器杯	完形	12.4	6.7	3.7	0.5mm以下の白色砂粒含む	青灰色	硬質、ひび割れあり
SI4	第76図の18	土師器甕	口縁から胴部2/3残存	18.9			0.5mm～1mmの砂粒多量に含む	内面黒～鈍い黄橙色、外面鈍い黄橙～明赤褐色	内面に粘土紐痕あり、硬質
SI4	第76図の19	須恵器甑	1/4残存	27.8	31.4	15.6	鉄分多く含む、雲母細粒含む	内面灰～黒色、外面灰～暗黄褐色	内面手圧痕あり
SI6	第77図の1	土師器杯	1/3残存	12.8	7.3	4	白色微砂多量に含む、鉄分含む	鈍い橙色	底部中央回転糸切り、作り丁寧
SI6	第77図の2	土師器杯	1/3残存	12.5	7.8	4.1	白色微砂多量に含む、鉄分含む	内面外面とも鈍い橙～黒色	底部回転ヘラ削り
SI6	第77図の3	土師器杯	体部1/8残存	16.2			砂粒なく精選	内面明赤褐色、外面橙色	内面赤彩
SI6	第77図の4	土師器杯	底部のみ		9.3		微砂粒多量に含む、鉄分含む	橙色	硬質、歪みない
SI6	第77図の5	須恵器杯	口縁1/6欠損	12.8	7.8	4.1	0.5mm前後の白色砂粒多量に含む	灰～黒色	体部外面墨書あり
SI6	第77図の6	須恵器杯	1/3残存	12.9	8.3	3.8	白色微砂多量に含む、鉄分含む	黒色	底部回転ヘラ削り、硬質
SI6	第77図の7	須恵器杯	底部1/2残存		8		白色微砂多量に含む、鉄分含む	橙色	底部回転ヘラ削り、火襷あり
SI6	第77図の8	須恵器杯	底部1/3残存		8.7		白色微砂多量に含む	黒色	底部回転ヘラ削り、硬質
SI6	第77図の9	須恵器杯	底部1/2残存		9		白色微砂多量に含む、鉄分含む	鈍い黄橙色	底部にヘラ記号あり
SI6	第77図の10	土師器甕	底部のみ3/4残存		5.4		微砂粒多く含む	橙色	底部静止糸切り
SI6	第77図の11	滑石製紡錘車	完形						
SI7	第78図の1	土師器杯	体部4/5残存	13.1	8.2	4.5	白色微砂多量に含む	鈍い橙色	硬質
SI7	第78図の2	須恵器杯	体部1/4残存	14.5	8.9	4.7	白色微砂多量に含む	黒色	断面浅黄橙色
SI7	第78図の3	須恵器杯	底部3/4残存		8.6		0.5mm前後の白色砂粒多量に含む	黒色	底部中央回転ヘラ削り

第31表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代３）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 7	第78図の４	須恵器杯	口縁１/５欠損	12	7.5	3.9	１㎜前後の砂粒含む、粘性弱い	灰色	底部ヘラ記号あり、器面にひびあり
SI 7	第78図の５	須恵器杯	底部４/５残存		8.8		１㎜前後の砂粒含む、粘性弱い	褐灰色	断面鈍い橙色
SI 7	第78図の６	土師器甕	口頸部１/５残存	19.2			白色微砂多量に含む	内面橙～黒褐色、外面鈍い褐色	
SI 7	第78図の７	土師器甕	口頸部１/４残存	12.6			砂粒多く含む	内面黒褐色、外面赤褐色	成形粗雑、粘土紐接合痕あり
SI 7	第78図の８	土師器甕	底部のみ完存		6.5		砂粒多量に含む、鉄分含む	内面極暗赤褐色、外面赤～黒色	内面剥落著しい
SI 7	第78図の９	土師器甕	口頸部１/６残存	22			0.5㎜前後の砂粒多量に含む	鈍い橙色	薄手、整形粗雑、歪み著しい
SI 7	第78図の10	須恵器甕	肩部片				ザックリとした感じ異物含む	灰白色	かなり硬質、外面自然釉付着
SI 7	第78図の11	須恵器蓋	端部１/３が欠損	13.2		3.9	１㎜前後の砂粒を多量に含む	オリーブ灰	粘性が弱いためかひびが入る
SI 8	第79図の１	土師器杯	１/５残存	13	7	4.1	微砂粒含む	内面明赤褐色、外面灰色	底部回転糸切り、剥落著しい
SI 8	第79図の２	須恵器杯	体部１/３欠損	12.6	6.8	4.1	0.5㎜以下の砂粒多量に含む	赤褐色～赤色	底部回転糸切り、粗質
SI 8	第79図の３	須恵器杯	口縁１/２欠損	13.5	10.7	4	微砂粒多く気泡多い	灰白色	底部ヘラ削り後磨滅著しい
SI 8	第79図の４	灰釉陶器長頸瓶	口縁部１/８残存	20			少し砂っぽい、黒色斑点あり	内面薄い緑色（灰釉）、外面灰白色	火膨れあり
SI 8	第79図の５	須恵器高台付杯	底部１/６残存		11.3		非常に緻密で陶器質	鈍い褐色	底部回転ヘラ削り
SI 8	第79図の６	土師器甕	口頸部１/８残存	22			微砂粒と鉄分多量に含む	鈍い橙色	硬質外面ヘラ削り
SI 8	第79図の７	土師器甕	口頸部１/６残存	21.4			微砂粒多く鉄分含む	内面外面とも鈍い橙～黒褐色	内面剥落著しい
SI 8	第79図の８	土師器甕	１/６残存	15.2			微砂粒多く含む、鉄分含む	明赤褐色	硬質
SI 8	第79図の９	土師器甕？	口縁部１/８残存	24.1			微砂粒多く含む、緻密硬質	褐灰色	口縁部ロクロ目顕著
SI 8	第79図の10	土師器甕	口縁～体部１/６残存	16.3			微砂粒含み気泡あり	茶褐色～黒色	器面剥落著しい
SI 8	第79図の11	土師器甕	口縁部１/５残存	16.5			微砂粒気泡鉄分含む	内面灰褐色、外面赤褐色～黒褐色	内面剥落あり
SI 8	第79図の12	土師器甕	体部１/５残存	21			微砂粒多く含む、ザラザラしている	赤色～黒色	内面剥離著しい、薄手
SI 8	第79図の13	灰釉陶器瓶	底部１/６残存		14		0.5㎜～２㎜の砂粒を多量に含む	灰白色	外面回転ヘラ削り、外面自然釉？付着
SI 8	第79図の14	須恵器甕	口頸部１/４残存	20.4			0.5㎜～１㎜の白色砂粒多量に含む	内面橙～黒色、外面橙～黒褐色	口縁端外側に折り返す、平行叩き目
SI 8	第79図の15	須恵器甕	口頸部１/８残存	20.2			微砂粒多く含む	内面黒褐色、外面赤褐色	硬質
SI 8	第79図の16	須恵器甕	胴部片				大粒の砂粒含みかなり粗質	内面外面とも黒色	脆い、内面ナデ、外面平行叩き目
SI 8	第79図の17	土製円盤	土師器杯転用				微砂粒含む	鈍い褐色黒褐色	硬質
SI 16	第80図の１	土師器杯	底部１/２残存		8.8		１㎜以上の白色砂粒少々含む	内面外面とも鈍い橙色	
SI 16	第80図の２	土師器杯	底部１/３残存		7		白色砂粒多く含む、黒色吹き出しあり	内面明赤褐色、外面淡橙色	墨書「万所」
SI 16	第80図の３	土師器杯	２/３残存	12.4	8.5	3.8	白色微砂粒多く含む	赤色	全面赤彩
SI 16	第80図の４	須恵器杯	１/２残存	13.4	7.8	4.4	白色微砂粒多く含む	灰色	凸部磨滅
SI 16	第80図の５	土師器甕	口縁部１/３残存	18			１㎜以下の白色砂粒多く含む	黄灰色	硬質
SI 16	第80図の６	土師器甕	口縁部１/４残存	23.6			白色微砂粒多量に含む	橙色～褐灰色	
SI 16	第80図の７	土師器甕	胴部１/５欠損	15	9.4	19.3	白色微砂粒多量に含む	明赤褐色～黒色	薄手
SI 23	第81図の１	土師器杯	１/２残存	13.4	6	3.9	砂粒多量に含む、粘性弱い	灰褐色（底面黒色）	底部回転糸切り
SI 23	第81図の２	土師器甕	１/３残存	14.4			白色砂粒多量に含む、砂っぽい	内面鈍い赤褐～黒色、外面灰褐～黒色	硬質
SI 24	第82図の１	須恵器杯蓋	口縁端欠損				砂粒少ない、黒色粒子含む	薄い灰色	軟質つまみあり
SI 24	第82図の２	土師器甕	２/３残存	14.8			１㎜以下の砂粒多く含む	内面鈍い橙色、外面赤～黒色	比較的硬質
SI 24	第82図の３	土師器甕	１/３残存	20.5			１㎜前後の砂粒多量に含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～暗赤褐色	口縁端外面磨滅、薄手
SI 24	第82図の４	土師器甕	１/４残存	19			0.5㎜前後の砂粒鉄分多量に含む	内面赤褐～鈍い赤褐色、外面鈍い橙～黒褐色	歪みあり、整形は粗雑

第32表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代４）　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 24	第82図の５	土師器甕	１/２残存	19.8			白色微砂粒鉄分多量に含む	内面鈍い橙～黒褐色、外面橙～黒褐色	
SI 24	第82図の６	土師器甕	底部のみ完存		5.9		１㎜前後の砂粒多量に含む	内面暗赤灰色、外面赤橙～黒色	硬質、底部静止糸切り
SI 24	第82図の７	須恵器甕	胴部１/４残存				白色微砂粒多量に含む	内面灰褐色、外面灰褐～褐灰色	県内産、内面指圧痕
SI 27	第83図の１	土師器皿	完存	13.8	6.8	2.1	１㎜以下の砂粒多く含む	橙色	硬質、底部ヘラ削り
SI 27	第83図の２	土師器皿	２/３残存	14.6	6.4	1.8	砂粒多量に含む鉄分含む	鈍い赤褐色	部分的にボロボロ
SI 27	第83図の３	土師器皿	完存	13.9	5.9	1.8	砂粒多く含む	内面赤～暗赤褐色、外面赤橙～黒色	底部ヘラ削り
SI 27	第83図の４	土師器皿	１/２残存	14.2	5.6	3.3	鉄分塊砂粒多量に含む	浅黄橙色	底部ヘラ削り
SI 27	第83図の５	土師器杯	２/３残存	13.2	7	3.8	0.5㎜～１㎜の砂粒多量に含む	鈍い橙色	硬質
SI 27	第83図の６	土師器杯	２/３残存	15.6	8	5.2	白色砂粒多量に含む、鉄分含む	明赤褐色～黒褐色	焼成良
SI 27	第83図の７	土師器甕	９/10残存	12.9	7.7	14.1	0.5㎜前後の砂粒多量に含む	橙～灰褐色	焼成良
SI 27	第83図の８	土師器甑	口縁～胴部１/５残存	18.9			白色砂粒多量に含む	橙～黒色	内面横方向のナデ
SI 27	第83図の９	土師器甕	上部１/３残存	17.5			鉄分多量に含む、砂粒含む	内面淡橙～黒褐色、外面鈍い橙～黒褐色	硬質、内面ユビ圧痕
SI 27	第83図の10	土製紡錘車	完存						最小径3.1、最大径4.1、厚さ2.9、重量53.4g
SI 33	第84図の１	土師器杯	１/３残存	12.1	6.9	3.9	微砂粒鉄分粒多く含む	内面鈍い橙色、外面鈍い橙～黒色	底部回転糸切り、軟質
SI 33	第84図の２	土師器杯	口縁一部欠損	13.7	6.9	3.9	白色砂粒多量に含む、鉄分含む	内面鈍い橙～黒色、外面鈍い赤褐～黒色	ロクロ目顕著
SI 33	第84図の３	土師器杯	１/２残存	13	6.8	4	白色砂粒多量に含む、鉄分含む	内面鈍い赤褐色、外面鈍い褐色	底部回転糸切り、硬質
SI 33	第84図の４	土師器杯							
SI 33	第84図の５	須恵器杯	口縁１/３欠損	12.4	6	4	白色砂粒多く含む、大粒砂含む	灰色	粘性不足のため器面ヒビ割れ
SI 33	第84図の６	須恵器杯	１/２残存	12.4	5.6	4.4	白色微砂粒多量に含む	灰色	鋭利なロクロ目、硬質
SI 33	第84図の７	須恵器甑					微砂粒多量に含む	内面明赤褐色～黒色、外面鈍い赤褐色	
SI 33	第84図の８	須恵器甕片					１㎜以下の砂粒多量に含む	内面褐灰色、外面赤褐色～黒色	内面剥落あり、外面少々磨滅
SI 33	第84図の９	須恵器甕	底部１/３残存		15		１㎜以下の白色砂粒多量に含む	内面灰色、外面黒色断面鈍い橙色	底部ヘラ記号あり
SI 38	第85図の１	土師器杯	１/２残存	13	7	3.7	砂粒鉄分粒多く含む	黒色	歪みあり、粘土粗質
SI 38	第85図の２	土師器杯	１/２残存	11.4	5.7	3.9	１㎜以下の白色砂粒多量に含む	橙色	
SI 38	第85図の３	土師器杯	口縁１/６欠損	13	7.4	4.4	白色砂粒多量に含む、鉄分含む	鈍い赤褐色	器面ボロボロ
SI 38	第85図の４	土師器杯	体部３/４欠損	13.6	7.5	4.7	白色砂粒多量に含む、鉄分含む	内面黒褐色、外面橙色	
SI 38	第85図の５	土師器？杯	ほぼ完形	12.5	7.2	4.3	白色砂粒多量に含む、鉄分含む	鈍い赤褐色	硬質
SI 38	第85図の６	土師器杯	１/２残存	15.6	7.1	4.9	鉄分粒と微砂粒多く含む	内面橙色、外面橙色断面鈍い橙色	内面外面にヘラ記号あり
SI 38	第85図の７	土師器甕	口縁部なし体部１/２残存		5.7		白色砂粒多量に含む、鉄分含む	内面極暗赤褐色、外面赤褐色	肩部器面剥落
SI 41	第86図の１	土師器杯	１/２残存	13.7	7.2	4.2	微砂粒鉄分含む	鈍い橙色（部分的に赤色）	内外面とも赤彩？
SI 41	第86図の２	土師器杯	１/２残存	15.2		4.2	砂粒少ない、鉄分塊多量に含む	内面黒色、外面浅黄橙色	内面黒色処理
SI 41	第86図の３	土師器碗	底部２/３残存				砂粒少ない、鉄分塊多量に含む	内面灰褐色、外面鈍い橙色	軟質
SI 41	第86図の４	土師器高台付杯	脚部のみ		7.4		微砂粒鉄分粒多く含む	鈍い橙色	硬質
SI 44	第87図の１	須恵器杯	体部２/３欠損	14	7.4	4.4	鉄分粒と微砂粒多く含む	内面黒褐色、外面鈍い赤褐色～黒色	底部回転ヘラ削り、硬質
SI 44	第87図の２	須恵器杯	１/３残存	12.4	7	4	白色砂粒多く含む	灰色	硬質
SI 44	第87図の３	須恵器杯	１/２残存	12.5	7.9	4.3	白色砂粒多く含む	内面黒色、外面灰黒色	硬質歪み著しい
SI 44	第87図の４	須恵器甑	口縁から体部１/５残存	26			鉄分多量に含む	灰褐色（断面鈍い橙色）	口縁端外側に折り返し
SI 44	第87図の５	土師器甕	１/２残存	17.4			１㎜以下の砂粒多量に含む	明赤褐色～暗赤褐色	硬質

第33表　一本松遺跡土器観察表（奈良・平安時代５）　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 46	第88図の１	土師器杯	２／３残存	13	6.5	4.2	0.5㎜以下の砂粒多く含む	赤橙～黒色	硬質
SI 46	第88図の２	土師器杯	１／３残存	13.2	7.1	4.7	白色微砂粒多量に含む、鉄分含む	内面明赤褐色～暗赤灰色、外面鈍い赤褐色	内面砂っぽくザラザラしている
SI 46	第88図の３	土師器杯	体部１／６欠損	16.2	7.5	5.5	0.5㎜以下の砂粒多く含む、鉄分含む	鈍い橙～黒褐色	硬質
SI 46	第88図の４	土師器杯	３／４残存	16.7	8	6.2	白色砂粒多く含む	内面鈍い橙～灰褐色、外面赤褐色	内面なめらか
SI 46	第88図の５	土師器杯	体部１／４残存	21.6			白色砂粒多く含む	明赤褐色	体部墨書「所」
SI 46	第88図の６	須恵器甕	１／２残存	29.6	14.4	23.4	白色砂粒多く含む	暗赤灰色（断面橙色）	硬質、体部下半ヘラ削り、上半叩き
SI 46	第88図の７	須恵器甕	１／５残存	27.2	14.4	28.2	白色砂粒多く含む	内面灰赤色、外面暗赤褐色	硬質
SI 46	第89図の８	土師器甕	１／５残存	22			白色砂粒多く含む	鈍い赤褐色～黒色	硬質
SI 46	第89図の９	土師器甕	底部２／３残存		8.4		１㎜以下の白色砂粒多量に含む	内面橙色、外面鈍い橙～橙色	底部中心は糸切り周辺不明
SI 46	第89図の10	須恵器鉢		25.2	13.8	15.2	白色微砂粒多量に含む、鉄分含む	橙～灰赤色	
SI 47	第90図の１	土師器杯	１／３残存	12.9	7.9	4.4	鉄分多く砂粒少ない	明褐灰色～橙色	やや軟質
SI 47	第90図の２	土師器杯	１／２残存	13.8	6.1	4.8	鉄分多量に含む	明赤褐色	歪みあり、底部回転ヘラ削り
SI 47	第90図の３	土師器杯	７／８残存	15.8	7.1	5.1	鉄分の吹き出しあり	橙色	歪みあり、内面ヘラミガキ
ＳＢ２	第91図の１	土師器高台付杯	１／５残存	16.4	8.8	4.9	白色砂粒を多く含む、鉄分含む	にぶい橙色	内面ヘラミガキ、底部回転ヘラ削り後に高台付
ＳＢ２	第91図の２	土師器杯	１／６残存	21.9	10.6	7.5	白色砂粒を多く含む、鉄分含む	にぶい橙色～黒色	内面ヘラミガキ、静止糸切り後にヘラ削り
ＳＢ２	第91図の３	須恵器甕	口縁部破片				白色微砂粒と黒色粒子の吹き出しあり	灰色	外面櫛描波状文
ＳＢ10	第97図の１	土師器杯	完形	13	6	4	白色微砂粒と鉄分を多量に含む	にぶい橙色	底部手持ちヘラ削り
ＳＸ４	第104図の１	土師器杯	完形	7.8		3.3	鉄分塊含む	鈍い橙色	口縁部に煤付着、外面ヘラ削り手づくね
ＳＸ４	第104図の２	土師器杯	１／４残存	10.6		3.4	鉄分塊多量に含む	鈍い黄橙色	口縁部に煤付着
ＳＸ４	第104図の３	土師器杯	１／３残存	10.8		3.4	鉄分塊多量に含む	内面外面鈍い橙～黒色	内面に煤付着
ＳＸ４	第104図の４	土師器杯	１／３残存	10.6	6	4.6	砂粒多く含む	内面橙色、外面鈍い橙色	外面粗いヘラ削り
ＳＸ４	第104図の５	土師器杯	１／３残存	10.4			白色砂粒多く含む	内面薄い明赤褐色、外面鈍い橙色	内面部分的にヘラミガキ
ＳＸ４	第104図の６	土師器杯	底部１／２残存		13		１㎜～２㎜の大粒砂含む	赤色（黒色の斑点みられる）	底部にヘラ記号あり
ＳＸ４	第104図の７	土師器杯	１／３残存	13.8	9.6	3.7	微砂粒含む、鉄分含む	鈍い橙～灰褐色	
ＳＸ４	第104図の８	土師器杯	口縁部１／６欠損	13.2	8.6	4.1	２㎜の白色砂粒と微砂粒多く含む	橙色	底部墨書「幡」
ＳＸ４	第104図の９	土師器高台付杯	１／２残存	10.7	7.5	4.9	微砂粒多量に含む	赤褐色	全面赤彩、高台裏墨書「上」
ＳＸ４	第104図の10	土師器杯	１／４残存	14.8	7.4	5.4	１㎜以下の砂粒と鉄分多く含む	内面鈍い赤褐色、外面暗赤褐色	硬質、丁寧な作り
ＳＸ４	第104図の11	須恵器杯	１／２残存	12.6	6.2	3.9	白色砂粒多く含む	黒色（断面鈍い褐色）	硬質、歪みあり
ＳＸ４	第104図の12	須恵器杯	１／４残存	13	8.5	3.6	微砂粒含む、鉄分含む	灰色	内面火襷あり、硬質
ＳＸ４	第104図の13	須恵器杯	完形	13.4	9.8	3.6	微砂粒少々含む	灰色	内面火襷あり、軟質
ＳＸ４	第104図の14	須恵器杯	底部１／２残存		6.8		白色微砂粒多量に含む、鉄分含む	暗灰色（断面鈍い橙色）	硬質
ＳＸ４	第104図の15	須恵器杯	底部１／２残存		7		白色微砂粒多量に含む	黒色（断面鈍い褐色）	底部ヘラ記号あり
ＳＸ４	第104図の16	須恵器杯	ほぼ完形	12.4	7.1	3.9	白色微砂粒多量に含む	暗赤褐～明赤褐色	底部回転ヘラ削り、硬質
ＳＸ４	第104図の17	須恵器高台付杯	１／５残存	18.3	13.8	5.5	白色黒色微砂粒多量に含む	灰色	硬質
ＳＸ４	第104図の18	須恵器甕	１／２残存	19.8	6.8	25.5	１㎜以下の砂粒と鉄分多く含む	橙～暗赤灰色	体部上面に叩き目痕あり
ＳＸ４	第104図の19	須恵器甕	ほぼ完形	26.1	15.4	40.2		黒色	
ＳＸ４	第105図の20	須恵器甕片	口縁部破片				白色砂粒多く含む	灰色	硬質、櫛描波状文あり
ＳＸ４	第105図の21	土師器甕	口縁～胴部１／４残存	24			白色微砂粒多量に含む	黒色	口縁外面ユビ圧痕あり、薄手歪みあり

第34表　一本松遺跡土器観察表（遺構外出土土器）　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
遺構外	第111図の3	手づくね土器	1/4残存	7	4	3.6	白色微砂粒多量に含む	橙色	ヘラ削り
遺構外	第111図の4	土師器高杯	脚部のみ完存		9.6		微砂粒と鉄分粒多量に含みザラザラして粗い	杯内面にぶい橙色、脚部明赤褐色	底部内面ヘラミガキ、脚部ヘラ削り
遺構外	第111図の5	土師器高杯	杯身と脚の接合部のみ完				砂粒少なく鉄分多い、気泡含みやや粗い	脚部内面黒色、外面灰白色	脚部外面と底部内面ヘラミガキ
遺構外	第111図の6	土師器高杯	脚部端を除き脚部のみ完存				0.5mm～2mmぐらいの白色砂粒を多量に含む	杯部内面暗赤灰色、脚部内面灰褐色、外面橙色	脚部外側ヘラ削り、底部内面ヘラミガキ
遺構外	第111図の7	土師器杯	1/5残存	11.2			砂粒少なく鉄分粒多い、精選されている	内面にぶい黄橙～黒色、外面にぶい黄橙色	内面黒色処理、内外面ヘラミガキ
遺構外	第111図の8	土師器杯	2/3残存	16	11.7	4.9	白色微砂粒多量に含む	内面赤一部赤黒色、外面赤橙～黒色	内外面赤塗？静止糸切り後に回転ヘラ削り
遺構外	第111図の9	須恵器杯	1/3残存	13.3	7.6	3.6	白色灰色の砂粒を多量に含む	灰白色	底部ヘラ削り
遺構外	第111図の10	土師器杯	2/3残存	14.6	6.2	3.3	0.5mmぐらいの白色砂粒多量に含む	内面にぶい赤褐色～黒色、外面にぶい橙色	内外面にヘラミガキ
遺構外	第111図の11	土師器高台付杯	底部2/3残存		9.6		白色微砂粒と鉄分粒多く含む	橙色	ヨコナデ
遺構外	第111図の12	須恵器短頸壺	1/8残存				白色砂粒と黒色粒子の吹き出しが見られる	内面灰色、外面灰色	胴部に2条の沈線、肩部外面に自然釉
遺構外	第111図の13	須恵器甕	底部のみ完		11.1		微砂粒多量に含む、鉄分含む	表面灰黄褐色	底部外面に板目痕、下端部にヘラ削り
遺構外	第111図の14	土製紡錘車					微砂粒含むザラザラした感じ	にぶい橙色	土師器杯の底部を再利用
遺構外	第111図の15	土製紡錘車					胎土中0.5mm前後の砂粒多量に含む、ザラザラする	明赤褐色	重量感有り
遺構外	第111図の16	土製品					微砂粒含む	にぶい赤褐色	土師質、重量感有り
遺構外	第111図の17	土製勾玉					砂粒なく粘性有り	赤褐色	
遺構外	第111図の18	常滑片口擂鉢	口縁部破片				0.5mm～2mmの白色砂粒多量に含む	暗赤灰色～にぶい赤褐色	内面に自然釉付着

第35表　山田台No.6－2遺跡土器観察表　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 1	第114図の1	土師器杯	口縁3/4欠損	14.2	11.4	3.7	白色微砂粒多量、鉄分粒少々含む	褐色	ヘラによる「十」字の記号あり、底部体部ヘラ削り
SI 1	第114図の2	土師器鉢	体部1/4欠損	14.1	10	9.5	微砂粒を含む	うすい褐色～黒色	底部～体部に手持ちヘラ削り
SI 1	第114図の3	土師器甕	胴部破片				雲母細粒、0.5mm～1.5mmの白色砂粒を多量に含む	うすい灰褐色～黒褐色	外面にミガキ
SI 2	第116図の1	須恵器杯	口縁1/5残存	13.2			鉄分粒多く含む	黒褐色	横ナデ
SI 2	第116図の2	須恵器甕	口縁1/10残存	24.2			白色微砂粒多量に含む	茶褐色	外面に平行叩き、内面に無文の当て具痕跡
SI 2	第116図の3	須恵器甕	胴部破片				鉄分粒多く含む	内面灰色、外面茶褐色	叩き目が細かく、下半にヘラ削り
SI 2	第116図の4	滑石製紡錘車	完形						上面に「千」の刻書がみられる
SI 3	第117図の1	ロクロ土師器杯	口縁1/4欠損	12	6.9	4.1	鉄分粒多く含む	体部～内面黒褐色、外面底部橙色	手持ちヘラ削り
SI 3	第117図の2	ロクロ土師器杯	1/6残存	13.6			鉄分粒多く含む	茶褐色	内外面赤色塗彩
SI 3	第117図の3	土師器杯	体部1/6残存	14.2		3.8	0.5mm前後の白色砂粒を多量に含む	うすい褐色	手持ちヘラ削り、内面にミガキ
SI 3	第117図の4	ロクロ土師器杯	底部～立ち上がり3/4		6.8		1mm前後の微砂粒と鉄分粒多量に含む	うすい褐色	回転糸切り後底部外周及び体部下端回転ヘラ削り
SI 3	第117図の5	須恵器甑	口縁破片				微砂粒多量に含む	内面うすい褐色、外面灰色	平行叩き
SI 3	第117図の6	土師器甕	口縁1/5残存	20.6			5mm前後の鉄分粒を含む	うすい褐色	縦ヘラ削り
SI 4	第118図の1	須恵器杯	全体の1/2残存	13	8.1	2.5	白色砂粒・白色針状物質を含む	灰白色～うすい褐色	全面回転ヘラ削り、底部外面に「十」の字のヘラ記号
SI 4	第118図の2	土師器甕	口縁破片1/10				白色微砂粒と鉄分粒を多量に含む	暗褐色	縦ヘラ削り
SI 4	第118図の3	土師器甕	口縁～胴部にかけて1/4残存	24.8			白色砂粒と鉄分粒を多量に含む	褐色～黒色	縦ヘラ削り及び斜方向のヘラ削り
SI 4	第118図の4	土師器甕	口縁～胴部1/5残存	19.6			白色砂粒と鉄分粒を多量に含む	内面黒褐色、外面茶褐色	斜方向のヘラ削り

第36表　山田水呑遺跡土器観察表１　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 1	第128図の１	須恵器杯	口縁部１/２、底部完存	12.4	8.2	4.6	白色砂粒及び白色針状物質を僅かに含む	灰褐色	手持ちヘラ削り
SI 1	第128図の２	須恵器杯	口縁部破片				白色砂粒を含む	暗褐色	
SI 1	第128図の３	土師器杯	ほぼ完形	12.2	7.7	4.2	白色砂粒を含む	暗橙褐色	手持ちヘラ削り、内面にミガキ
SI 1	第128図の４	土師器杯	口縁部１/７残存	11.7			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
SI 1	第128図の５	土師器甕	口縁部１/４残存	21.6			白色砂粒を含む	明褐色	縦方向のヘラ削り
SI 1	第128図の６	須恵器甕	口縁部１/10残存	30			白色砂粒を中程度含む	内面灰褐色、外面黒灰色	平行叩き
SI 1	第128図の７	須恵器甕	口縁部破片				白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	暗いアズキ色	
SI 1	第128図の８	須恵器小型甕	胴部１/５、底部完存		9.3		白色砂粒を含む	明褐色	横方向のヘラ削り、内面無文の当て具痕
SI 1	第128図の９	須恵器甑	胴部１/４残存		15		白色砂粒を多く含む	内面灰褐色、外面灰色	平行叩き、横方向のヘラ削り、内面に無文の当て具痕
SI 2	第130図の１	須恵器蓋	鈕部のみ残存				白色砂粒を中程度含む	暗灰色	
SI 2	第130図の２	須恵器杯	１/３残存	13.5	8	4.2	白色砂粒を僅かに含む	内面暗灰色外面青灰色～暗灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の３	須恵器杯	１/５残存	13.4	8.8	4	白色砂粒を含む	灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の４	須恵器杯	口縁部１/５、底部１/２残存	13	7.1	4	白色砂粒を中程度、黒色粒子を少量含む	灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の５	須恵器杯	口縁部１/３	13.8	8.2	3.7	白色砂粒を含む	灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の６	須恵器杯	口縁部１/８、底部１/４残存	13.4	7.8	4	白色砂粒を含む	内面灰色、外面灰赤色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の７	須恵器杯	１/４残存	13	7.4	3.9	白色砂粒を含む	内面青灰色、外面灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の８	須恵器杯	１/３残存	13.5	8	4.2	白色砂粒を僅かに含む	内面暗灰色、外面暗灰色～青灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の９	須恵器杯	底部１/２残存		7		白色砂粒を多く含む	暗灰色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の10	須恵器杯	口縁部１/７、底部１/３残存	13	8.2	4.2	白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙色、口縁部外面は暗灰色	回転ヘラ削り、ヒダスキ有り
SI 2	第130図の11	須恵器杯	底部完存		8.2		白色砂粒、赤色スコリア粒、白色針状物	内面灰色、外面淡灰褐色	回転ヘラ削り、底部外面に「井」のヘラ書き
SI 2	第130図の12	須恵器杯	底部１/４		7.7		白色砂粒、赤色スコリア粒を少量含む	橙色	手持ちヘラ削り、底部中央に糸切り痕跡残存
SI 2	第130図の13	須恵器高台付杯	底部完存		7.6		白色砂粒を中程度含む	青灰色	貼付高台
SI 2	第130図の14	ロクロ土師器杯	口縁部破片、底部１/２残存	12	7.9	4.6	白色小石・黒色小石、白色砂粒を含む	橙色	静止糸切り、手持ちヘラ削り、底部に「大山」の墨書
SI 2	第130図の15	土師器杯	口縁部１/４、底部１/２残存	11.8	6	3.9	白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	にぶい橙色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の16	土師器杯	口縁部・底部一部欠損	12	7.2	3.9	白色砂粒を含む	にぶい橙色	手持ちヘラ削り、内面にミガキ
SI 2	第130図の17	土師器杯	口縁部・底部１/４残存	12	6.6	3.6	白色砂粒を少量含む	淡黄褐色	手持ちヘラ削り、内面にミガキ
SI 2	第130図の18	土師器杯	口縁部１/５残存	12.4	7	5	白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	にぶい橙色～黒褐色	手持ちヘラ削り、内面にミガキ
SI 2	第130図の19	土師器杯	口縁部１/３残存	11.2	6.8	3.8	白色砂粒を含む	橙色	手持ちヘラ削り、内面にミガキ
SI 2	第130図の20	ロクロ土師器杯	底部２/５残存		5.4		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	手持ちヘラ削り
SI 2	第130図の21	ロクロ土師器杯	底部１/３残存		8.4		白色砂粒、赤色スコリア粒、白色針状物	橙褐色	回転ヘラ削り
SI 2	第130図の22	ロクロ土師器高台付杯	高台部１/３残存		9		白色砂粒、赤色スコリアを多く含む	淡黄褐色	
SI 2	第130図の23	ロクロ土師器杯	口縁部破片				白色砂粒を多く含む	赤色及び淡黄褐色	内外面赤色塗彩
SI 2	第130図の24	ロクロ土師器杯	口縁部破片				白色砂粒、白色針状物質を含む	内面黒色、外面黒褐色～淡褐色	内面黒色処理
SI 2	第130図の25	土師器甕	１/３残存	19.4			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	褐色	縦方向のヘラ削り、黒斑あり
SI 2	第130図の26	土師器甕	口縁部１/４、胴部１/５残存	21			白色砂粒を含む	内面暗褐色、外面黒色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の27	土師器甕	口縁部１/５残存	22.8			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	内面褐色、外面にぶい橙色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の28	土師器甕	口縁部２/５残存	21.2			白色砂粒を多く、赤色スコリア粒を含む	内面暗褐色、外面橙褐色	縦方向のヘラ削り

第37表　山田水呑遺跡土器観察表２　　（単位：cm）

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
SI 2	第130図の29	土師器甕	口縁部４/９残存	19			白色砂粒を含む	褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の30	土師器甕	口縁部３/７残存	21			白色砂粒を含む	内面橙褐色、外面明褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の31	土師器甕	口縁部１/４残存	21.2			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	内面淡褐色、外面にぶい橙色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の32	土師器甕	口縁部１/４残存	17			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の33	土師器甕	口縁部１/４残存	17.4			白色砂粒を多く含む	淡褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第130図の34	土師器甕	底部４/５残存		8.4		白色砂粒を含む	橙褐色	横方向のヘラ削り
SI 2	第130図の35	土師器甕	胴部下端１/２残存		7.6		白色砂粒を含む	橙褐色	横方向のヘラ削り
SI 2	第130図の36	土師器甕	底部１/２残存		7.4		白色砂粒を含む	暗褐色	横方向のヘラ削り
SI 2	第131図の37	土師器甕	口縁部１/５残存	20.4			白色砂粒を含み、白色針状物質を含む	橙褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の38	土師器甕	口縁部１/７残存	17.8			白色砂粒を僅かに含む	内面淡黄褐色、外面橙褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の39	土師器甕	口縁部１/４残存	22.6			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の40	土師器甕	頸部～胴部上半１/６残存				白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の41	土師器甕	口縁部３/５残存	21.6			白色砂粒を含む	淡黄褐色	横方向のヘラ削り
SI 2	第131図の42	土師器甕	口縁部破片				赤色スコリア粒多量、黒色粒・白色砂粒	赤褐色	斜め及び横方向のヘラ削り
SI 2	第131図の43	土師器甕	口縁部１/９残存	20.8			白色小石（１㎜大）多量、雲母片を含む	内面灰赤褐色、外面灰褐色	
SI 2	第131図の44	土師器小型甕	口縁部１/３残存	11.6			白色砂粒、黒色粒子を含む	内面黒褐色～橙褐色、外面橙褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の45	土師器小型甕	口縁部１/５残存	15.2			白色砂粒を含む	淡黄褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の46	土師器小型甕	口縁部１/３残存	11.6			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	明褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の47	土師器小型甕	口縁部１/５残存	9.6			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	縦方向のヘラ削り
SI 2	第131図の48	須恵器壺	肩部破片				白色砂粒を含む	内面淡灰色、外面緑灰色	外面に自然釉付着
SI 2	第131図の49	須恵器甕	口縁部１/８残存	23.6			白色砂粒を含む	黒褐色	平行叩き
SI 2	第131図の50	須恵器甕	胴部破片				白色砂粒を僅かに含む	灰色	外面平行叩き、内面に細かな同心円文当て具痕
SI 2	第131図の51	須恵器甕	胴部破片				白色砂粒を僅かに含む	淡灰色	外面平行叩き、内面に細かな同心円文当て具痕
SI 2	第131図の52	須恵器甕	胴部破片				白色小石（１㎜～２㎜）を多量に含む	灰色	外面横方向の平行叩き、内面は無文の当て具痕
SI 2	第131図の53	須恵器甕	胴部破片				鉄分を多く含む	内面淡灰色、外面暗灰色	外面平行叩き、内面に粗い同心円文当て具痕
SI 2	第131図の54	須恵器甑	把部破片				白色砂粒を中程度含む	灰褐色	
SI 2	第131図の55	須恵器甑	底部破片				白色砂粒を含む	暗灰褐色	外面無調整
SI 2	第131図の56	須恵器甑	胴部下半～底部破片				白色砂粒を含む	灰色	平行叩き・横方向のヘラ削り、内面無文の当て具痕
SI 2	第131図の57	土師器高杯	脚部１/５残存				白色砂粒を含む	内面橙褐色、外面赤色	外面に赤色塗彩
遺構外	第133図の１	須恵器杯	底部１/２残存		8.3		白色砂粒、白色針状物質を含む	灰色	回転ヘラ削り
遺構外	第133図の２	須恵器壺	肩部１/５残存				鉄分を含む	内面明灰色、外面オリーブ灰色（自然釉）	
遺構外	第133図の３	須恵器甕	胴部破片				白色砂粒を僅かに含む	灰白色	内面に擦り面あり

第38表　山田新田III遺跡土器観察表１　　（単位：cm）

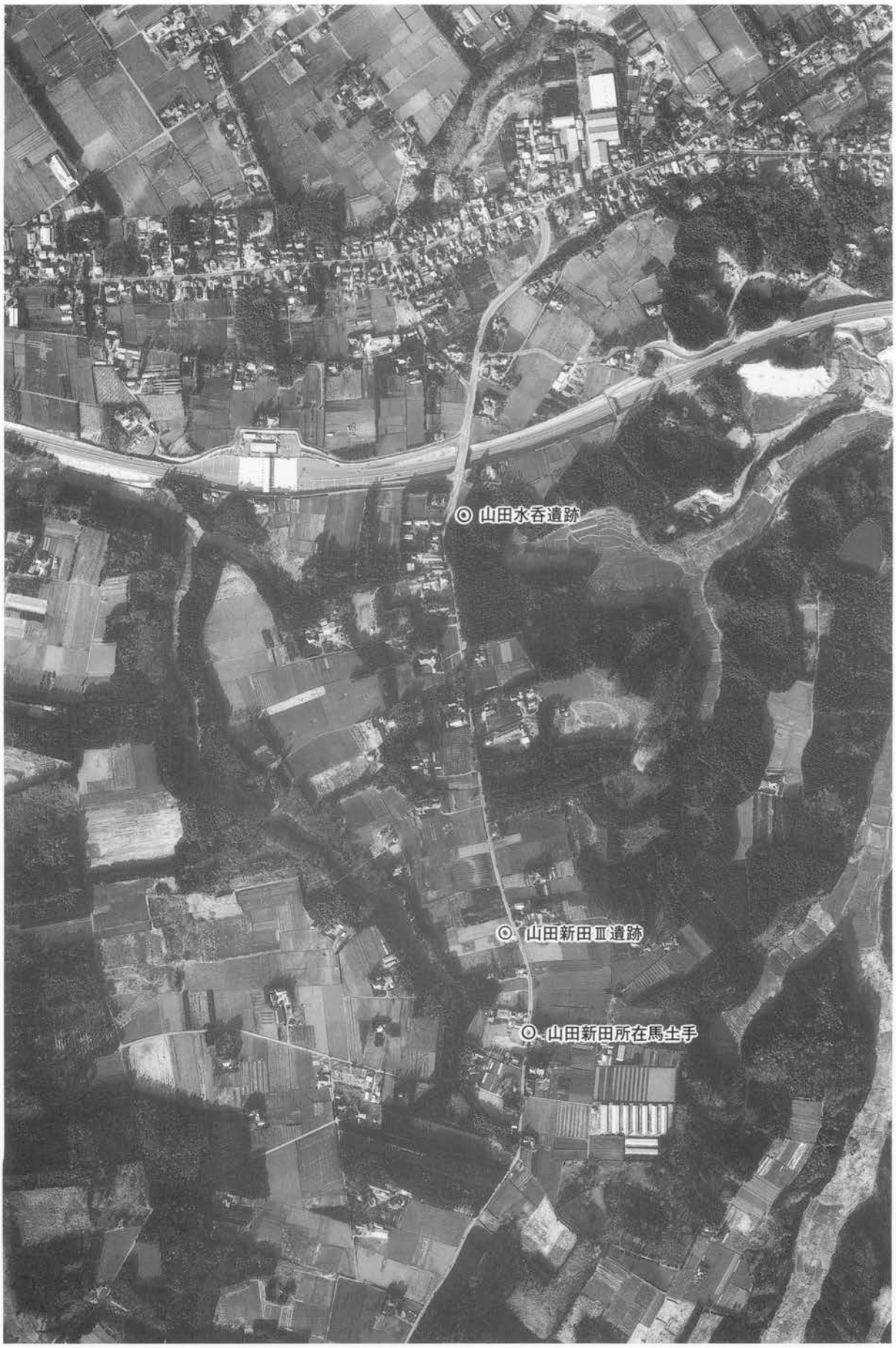
遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
ＳＸ２	第138図の１	須恵器杯	口縁部破片				白色砂粒を含む	灰色	横ナデ
３区	第140図の１	ロクロ土師器蓋	天井部１/５残存				白色砂粒を多く含む	赤褐色	天井部回転ヘラ削り
３区	第140図の２	須恵器杯	底部１/４残存		7.2		白色砂粒を多く含む	内面灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り
３区	第140図の３	須恵器杯	底部完形		7.4		白色小石（２mm）、白色砂粒を含む	黒灰色	回転ヘラ削り
３区	第140図の４	須恵器杯	底部１/２残存		7.3		白色砂粒を多く含む	暗灰色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の５	ロクロ土師器杯	底部ほぼ完形		7.4		白色砂粒を多く含む	淡褐色	回転ヘラ削り
３区	第140図の６	ロクロ土師器杯	底部１/４残存		8.4		白色砂粒を含む	淡黄褐色	回転ヘラ削り
３区	第140図の７	ロクロ土師器杯	口縁部１/５、底部４/５残存	14.5	6.8	5	白色砂粒を含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の８	ロクロ土師器杯	底部完形		8.3		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の９	ロクロ土師器杯	底部１/３残存		7.8		白色砂粒、赤色スコリア粒を僅かに含む	赤褐色	ヘラ切り後に手持ちヘラ削り
３区	第140図の10	ロクロ土師器杯	底部完形		8.8		白色砂粒、黒色粒を僅かに含む	橙褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の11	ロクロ土師器杯	底部ほぼ完形		8.2		白色砂粒を含む	内面淡褐色、外面橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の12	ロクロ土師器杯	底部１/２残存		7.8		白色砂粒を僅かに含む	内面淡黄褐色、外面橙褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の13	ロクロ土師器杯	底部１/２残存		5.9		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	赤褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の14	ロクロ土師器杯	底部完形		6.6		白色砂粒、赤色スコリア、黒色粒を含む	橙褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の15	ロクロ土師器杯	底部１/３残存		6.2		白色砂粒を含む	淡黄褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の16	ロクロ土師器杯	底部完形		6.8		白色小石、白色砂粒、赤色スコリア含む	橙褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の17	ロクロ土師器杯	底部完形		7.2		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の18	ロクロ土師器杯	底部完形		6.7		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の19	ロクロ土師器杯	底部２/５残存		6.8		白色砂粒を多く含む	内面暗灰褐色、外面暗黄褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の20	ロクロ土師器杯	口縁部１/２、底部完形	16	7	4.8	白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の21	ロクロ土師器杯	底部１/２残存		7.4		白色砂粒、赤色スコリア、黒色粒子含む	褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の22	ロクロ土師器杯	底部完形		6.8		白色砂粒、赤色小石、赤色スコリア含む	橙褐色	一定方向の手持ちヘラ削り
３区	第140図の23	ロクロ土師器杯	底部ほぼ完形		6.6		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	内面淡黄褐色、外面橙赤褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の24	ロクロ土師器杯	口縁部１/７、底部完形	14.2	7.4	5	白色砂粒を少量含む	内面淡黄褐色、外面黒褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の25	ロクロ土師器杯	底部ほぼ完形		7.2		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	内面橙褐色、外面淡黄褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の26	ロクロ土師器杯	底部６/７残存		6.6		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	黄褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の27	ロクロ土師器杯	底部１/５残存		6.8		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の28	ロクロ土師器皿	底部４/５残存		6.8		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の29	ロクロ土師器皿	底部完形		5.2		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	底部回転糸切り痕跡
３区	第140図の30	土師器杯	口縁部１/２、底部４/５残存	13.2	8.1	5.1	白色小石（２mm）、白色砂粒を含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の31	ロクロ土師器椀	底部４/５残存		8.8		白色小石（1.5mm）、赤色スコリア含む	橙褐色	手持ちヘラ削り
３区	第140図の32	ロクロ土師器椀	底部１/６残存		10.4		白色砂粒を含む	橙褐色	静止糸切り痕残存、内面にミガキ
３区	第140図の33	ロクロ土師器鉢	底部１/４		15.6		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	ヘラ削り、内面ミガキ
３区	第140図の34	須恵器高台付杯	高台部１/２残存		7.4		白色砂粒を多く含む	内面赤褐色、外面黒色	横ナデ
３区	第140図の35	ロクロ土師器高台付杯	高台部１/３残存		7.8		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	横ナデ

第39表　山田新田Ⅲ遺跡土器観察表２　　（単位：cm）

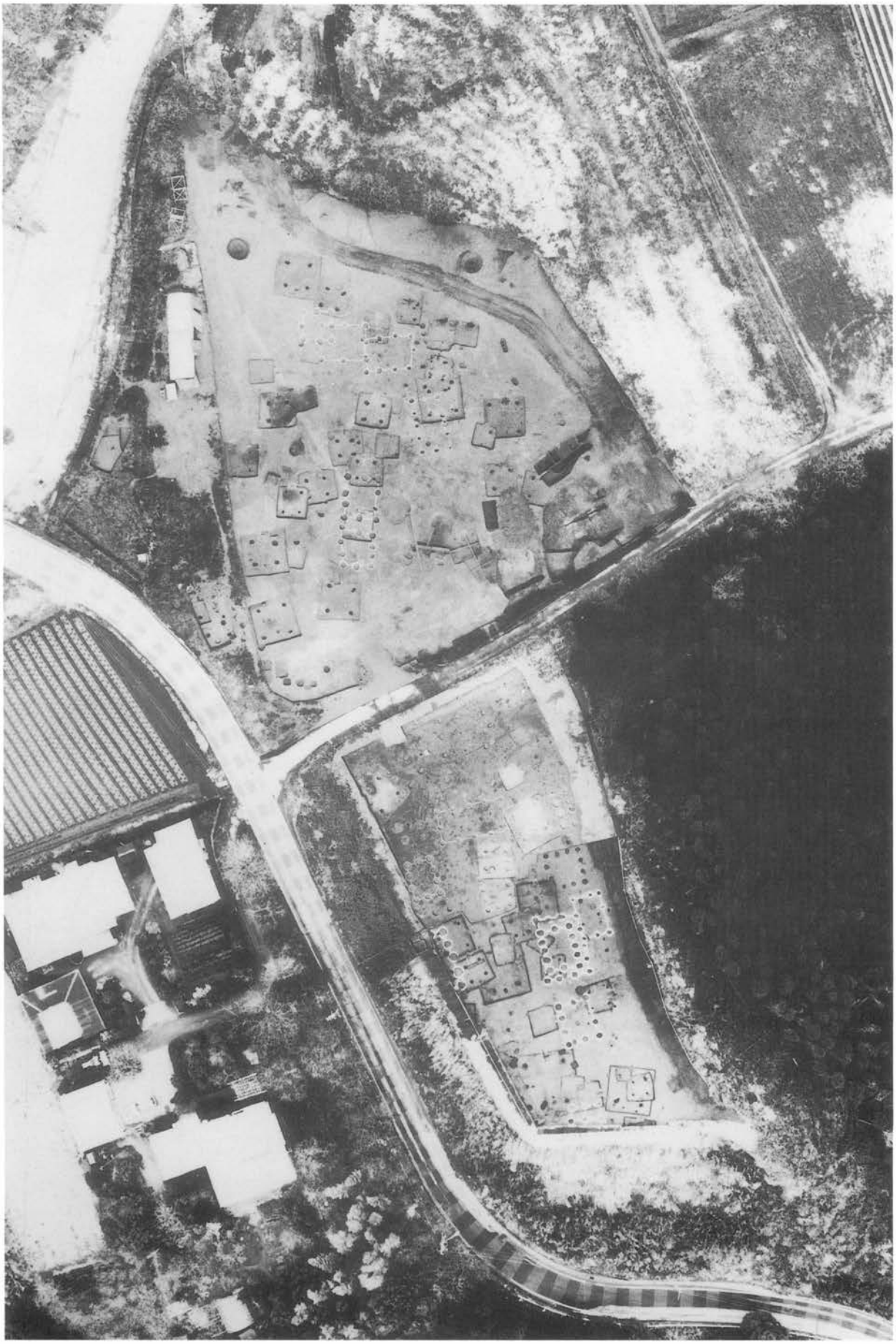
遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	胎土	色調	備考
３区	第140図の36	ロクロ土師器高台付杯	高台部２／５残存		6.8		白色砂粒を少量含む	内面淡黄褐色、外面灰褐色及び淡黄褐色	横ナデ
３区	第140図の37	ロクロ土師器高台付杯	高台部１／２残存		6.6		白色砂粒を含む	明褐色	横ナデ
３区	第140図の38	ロクロ土師器高台付杯	高台部ほぼ完形		7.2		白色砂粒を含む	橙褐色	横ナデ、内面ミガキ
３区	第140図の39	ロクロ土師器高台付椀	高台部４／５残存		9		白色小石（２mm）、白色砂粒を含む	内面灰褐色、外面橙褐色	回転ヘラ削り
３区	第140図の40	ロクロ土師器高台付皿	底部４／５残存				白色砂粒を含む	淡黄褐色	回転ヘラ削り、底部中央に回転糸切り痕が残存
３区	第140図の41	ロクロ土師器高台付皿	高台部１／４残存		6.6		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	淡黄褐色	回転ヘラ削り
３区	第141図の42	須恵器甕	胴部１／３残存	28			白色小石（２mm）、白色砂粒を含む	淡灰褐色	胴部外面平行叩き・横ヘラ削り、内面無文の当て具痕跡
３区	第141図の43	須恵器甕	口縁部破片				白色砂粒を含む	灰色	横ナデ
３区	第141図の44	須恵器甕	口縁部破片				白色砂粒を含む	淡灰色	横ナデ
３区	第141図の45	須恵器甕	頚部下部破片				白色砂粒を多く、赤色スコリア粒を含む	灰褐色	外面平行叩き、内面ナデ
３区	第141図の46	須恵器甑	取手部破片				白色砂粒を含む	灰赤色	
３区	第141図の47	土師器甕	口縁部１／２残存	21.8			白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	暗褐色	縦方向のヘラ削り
３区	第141図の48	須恵器甕	底部１／３残存		7.2		白色砂粒を含む	淡黄灰色	横方向のヘラ削り
３区	第141図の49	土師器甕	口縁部破片				白色砂粒を含む	橙褐色	縦方向のヘラ削り
３区	第141図の50	土師器甕	底部１／５残存		11		白色砂粒、赤色スコリア粒を含む	橙褐色	横方向のヘラ削り
３区	第141図の51	土師器甕	底部完形		6.8		白色砂粒を含む	橙褐色	横方向のヘラ削り
３区	第141図の52	丸瓦	破片				白色砂粒を多く含む	淡褐色	凸面ナデ、凹面布目、糸切り痕有り
５区	第142図の１	ロクロ土師器高台部片	高台部破片				白色砂粒を含む	淡黄褐色	横ナデ
５区	第142図の２	須恵器甑	底部１／６残存		14.9		白色小石（２mm）、白色砂粒を多く含む	暗灰色	横方向のヘラ削り、内面横ナデ
５区	第142図の３	平瓦					白色砂粒を含む	内面淡褐色、外面灰褐色	凸面布目、凹面糸切り痕有り
５区	第142図の４	丸瓦					白色砂粒を含む	灰色	凸面ナデ整形、凹面布目痕、布重ね痕有り

写真図版

一本松遺跡・山田台№6-2遺跡周辺航空写真（1/10,000）

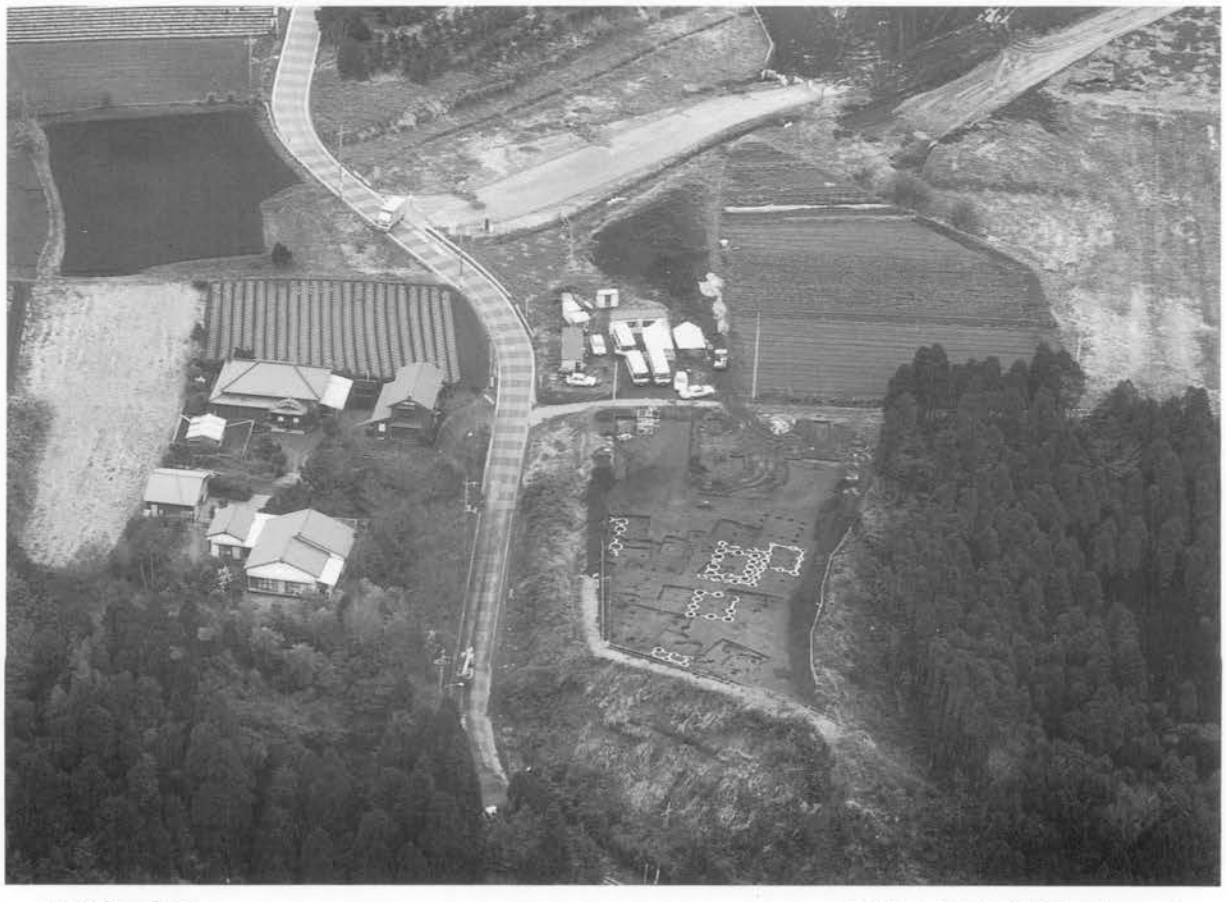


山田水呑遺跡・山田新田Ⅲ遺跡・山田新田所在馬土手周辺航空写真（1/10,000）



一本松遺跡空撮　　（平成３年度・４年度調査区を合成したもの）

（平成 3 年度調査区・北より）



一本松遺跡空撮　　（平成 3 年度調査区・南より）

（平成 3 年度調査区・西より）

一本松遺跡空撮

（平成 3 年度調査区・東より）

1

2

3

1　調査前

2　表土除去後

3　確認調査状況

1

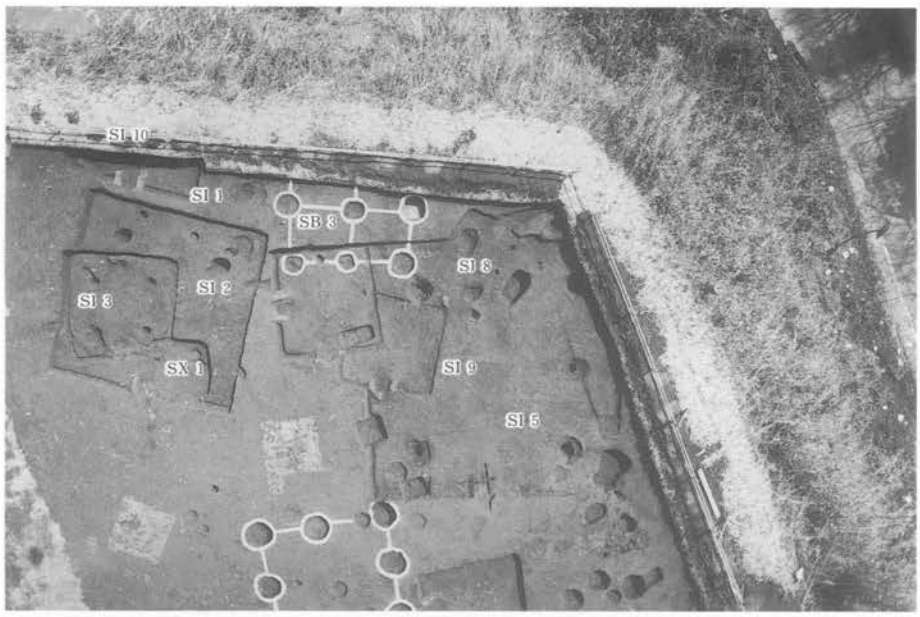
2

3

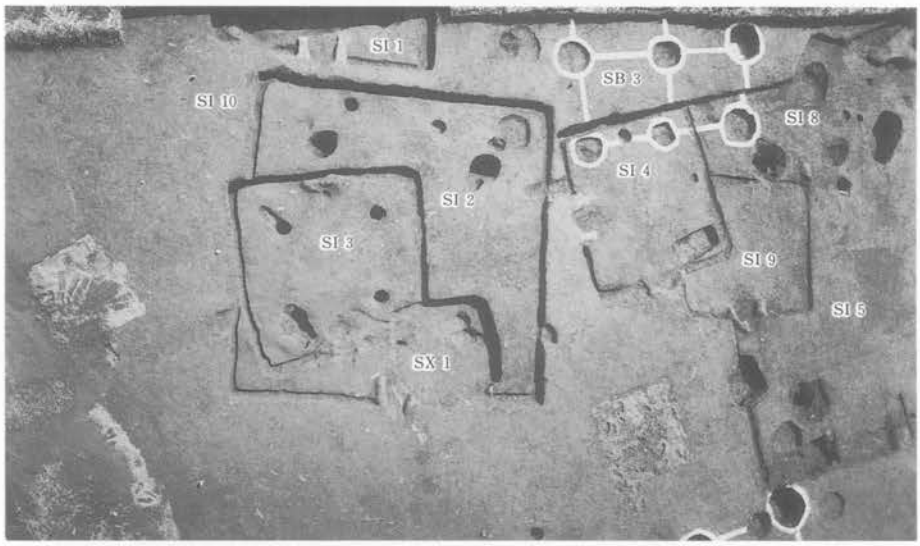
1　旧石器

2　旧石器、B 2—63グリッド周辺

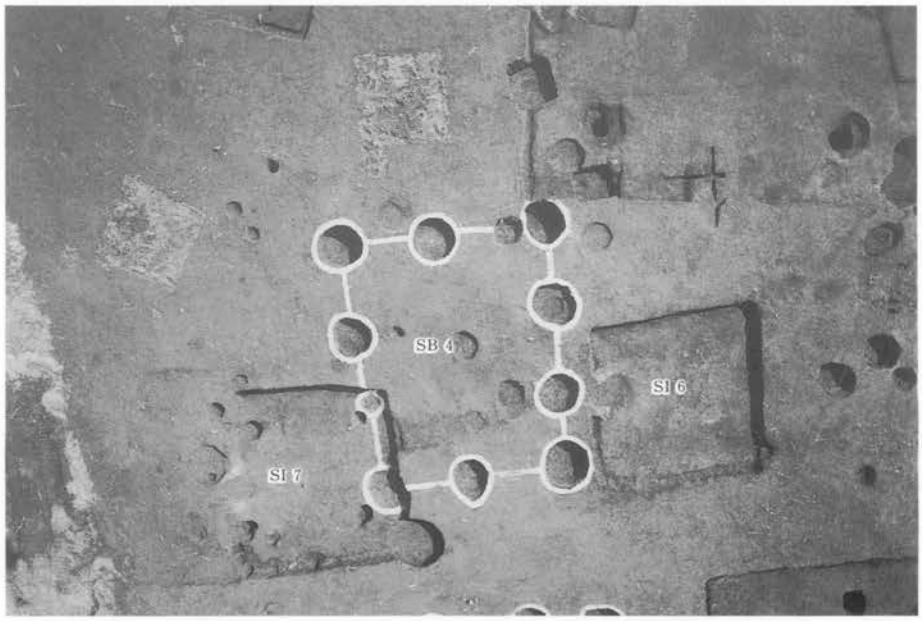
3　旧石器土層断面



1



2



3

1　SI 1～5・8～10、SB 3、SX 1

2　SI 1～5・8～10、SB 3、SX 1

3　SI 6・7、SB 4

1

2

3

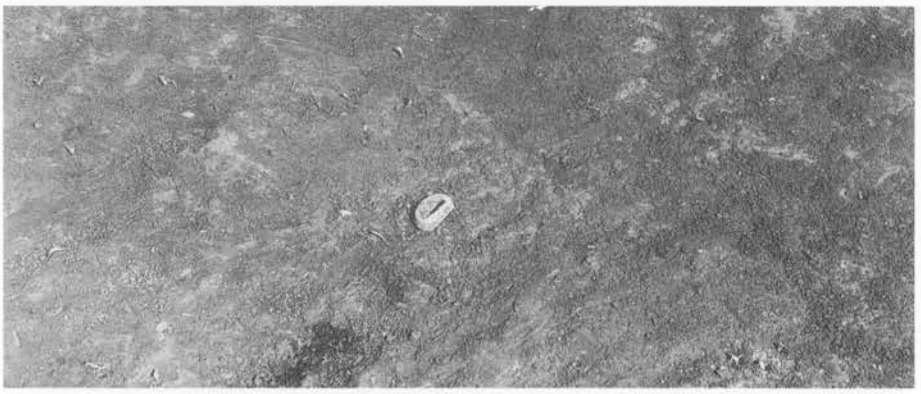
4

1　SI 5～7・11・13～20、SB 2・4～8

2　SI 2　　3　SI 4かまど　　4　SI 5

1

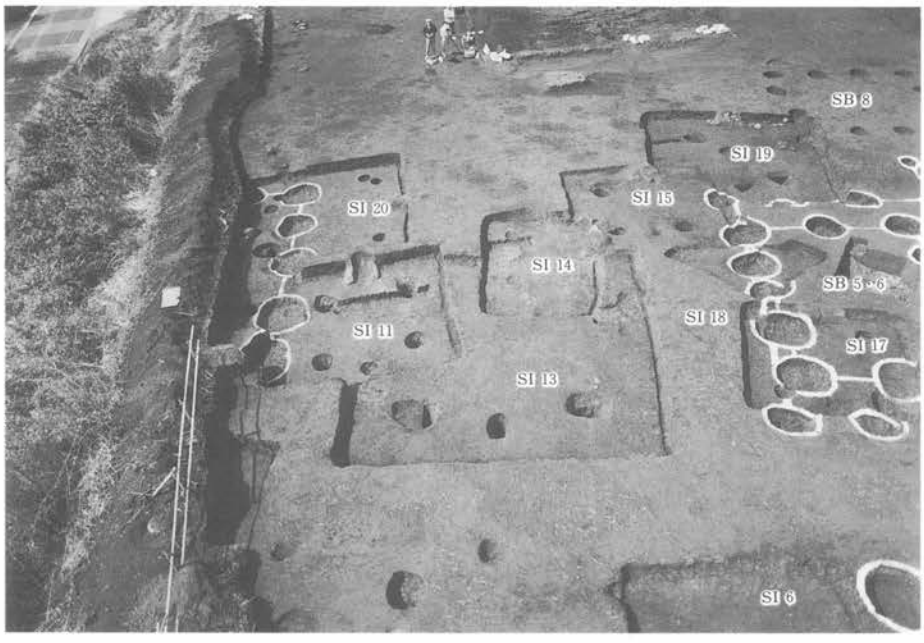
2



3

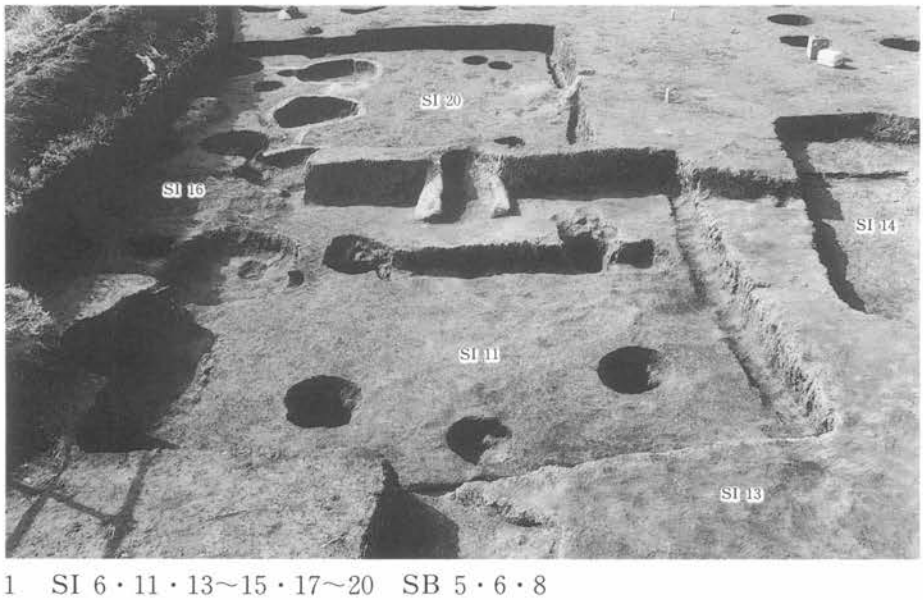
4

1　SI 6
2　SI 7　馬歯出土状況
3　SI 7　遺物出土状況
4　SI 7　かまど



1

2



3

1　SI 6・11・13～15・17～20　SB 5・6・8

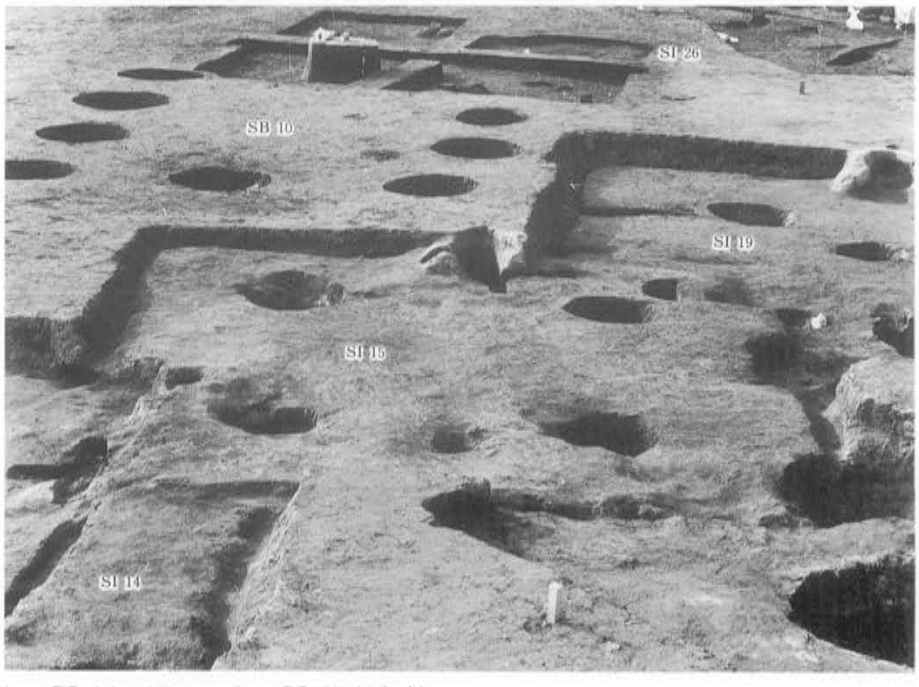
2　SI 6・11・13～15・19・20

3　SI 11・13・14・16・20

1

2

3

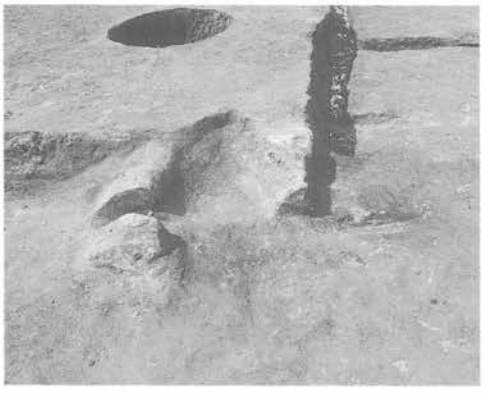


4

1　SI 14・15　　3　SI 15かまど

2　SI 14かまど　4　SI 14・15・19・26、SB 10

1



2

3

4

1　SI 11・16・20、SB 2　　3　SI 17かまど

2　SI 15かまど　　4　SI 18・19、SB 5・6

1

2

3

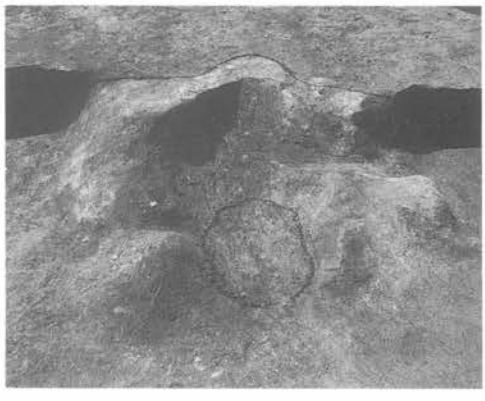
4

1　SI 19・22・26　　3　SI 19かまど内遺物出土状況

2　SI 19遺物出土状況　　4　SI 19かまど

1

2



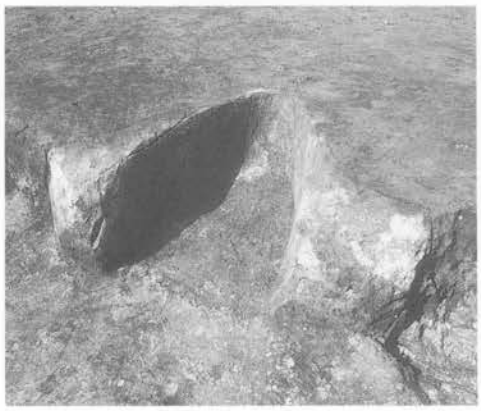
3

4

1　SI 11・20、SB 9　　3　SI 22かまど

2　SI 20かまど　　4　SI 22・23

1



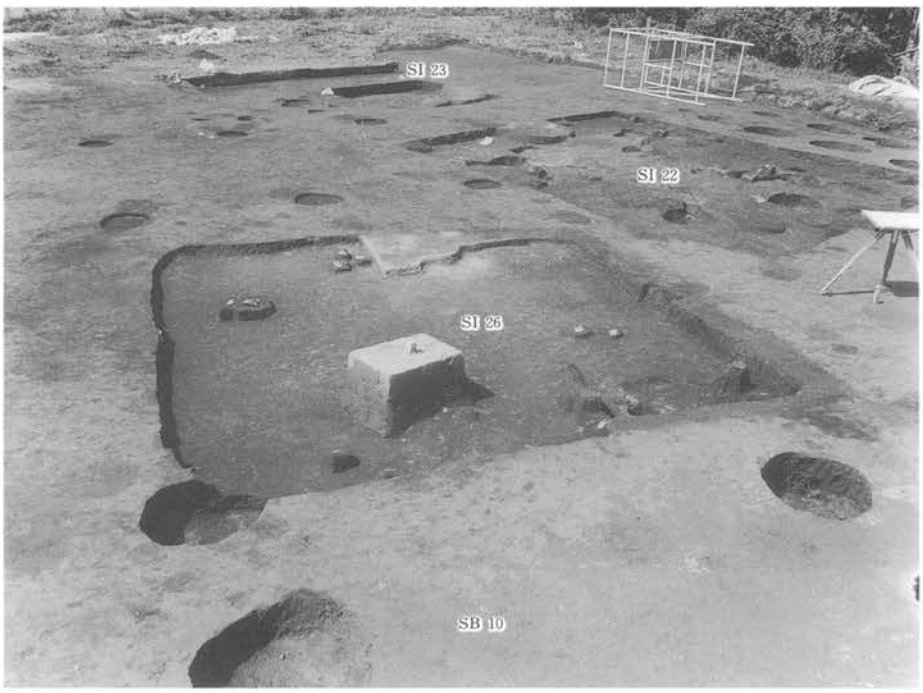
2

3

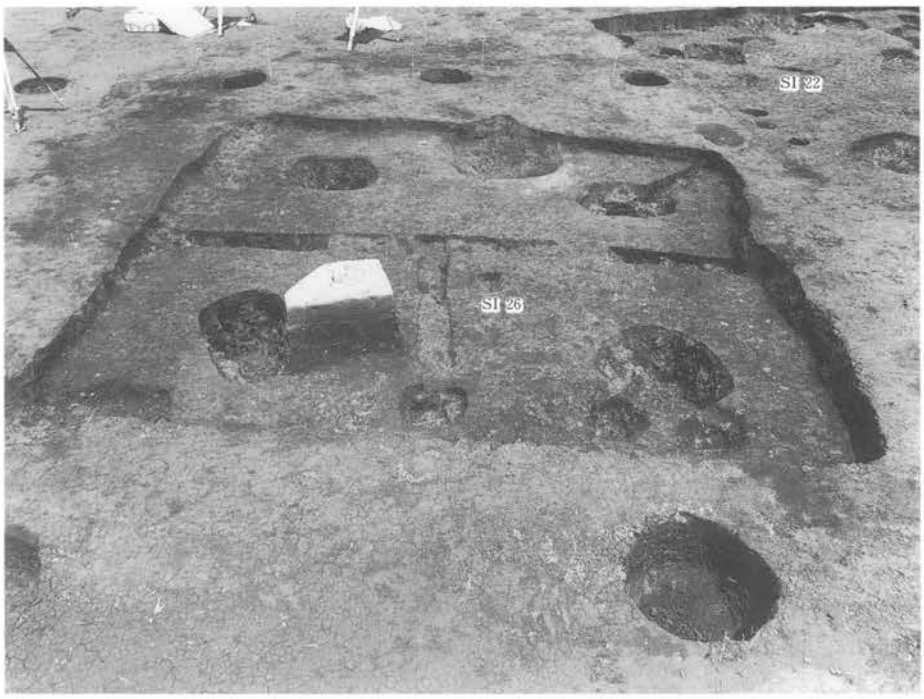
4

5

1　SI 23
2　SI 23かまど
3　SI 25かまど
4　SI 24かまど
5　SI 24かまど



1



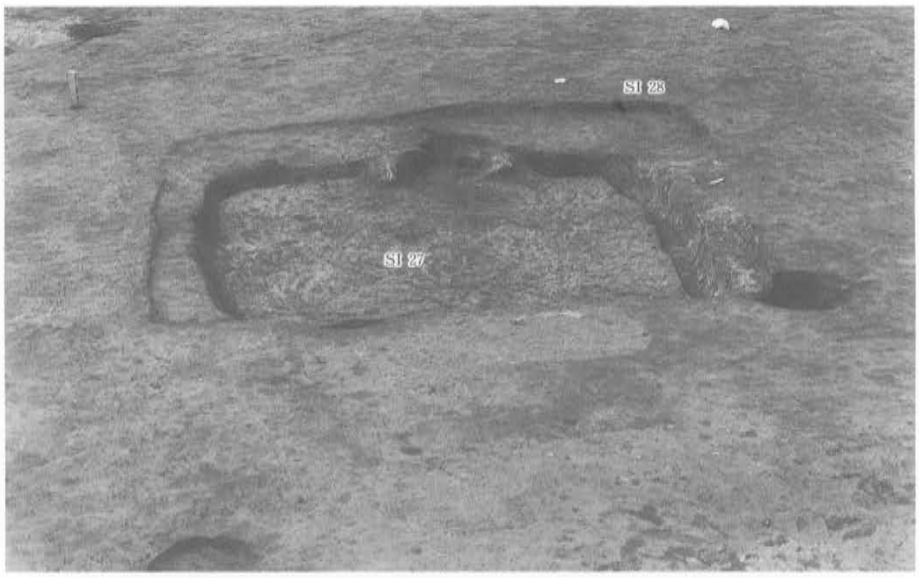
2

3

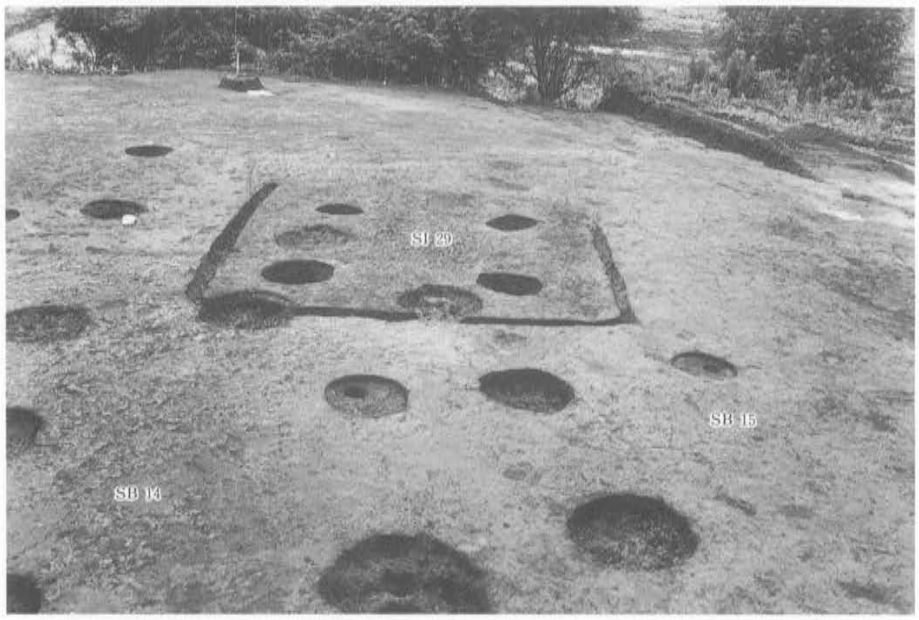
1　SI 22・23・26、SB 10

2　SI 22・26

3　SI 26かまど



1



2

3

1　SI 27・28

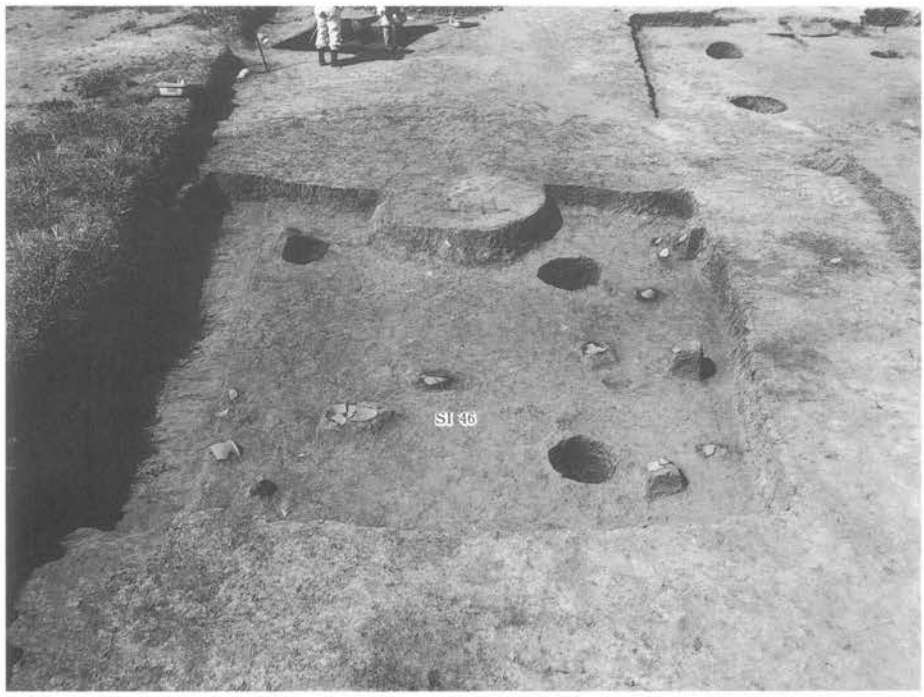
2　SI 29、SB 14・15

3　SI 29・30

1

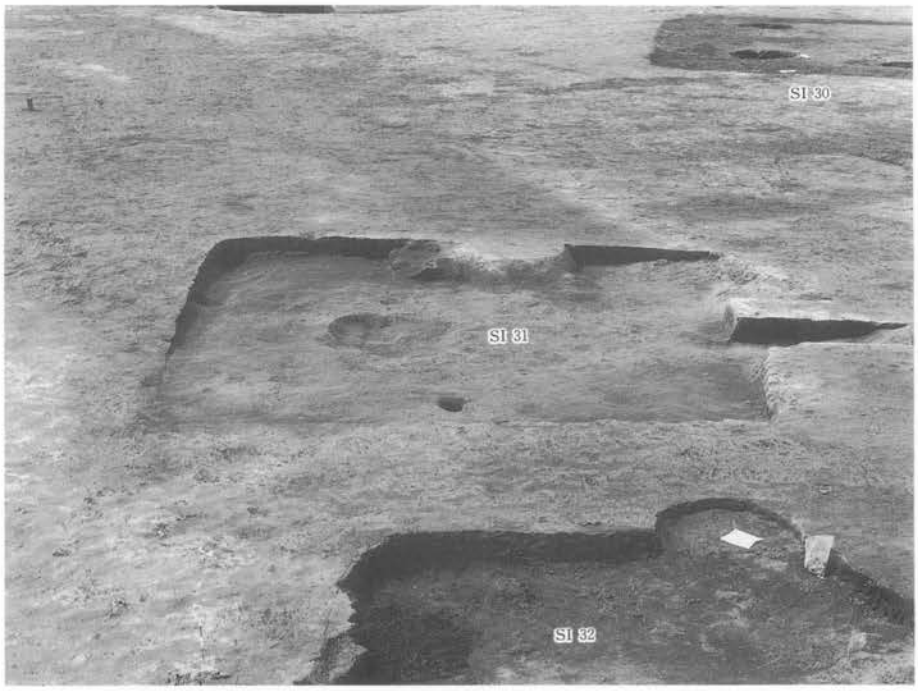
2

3



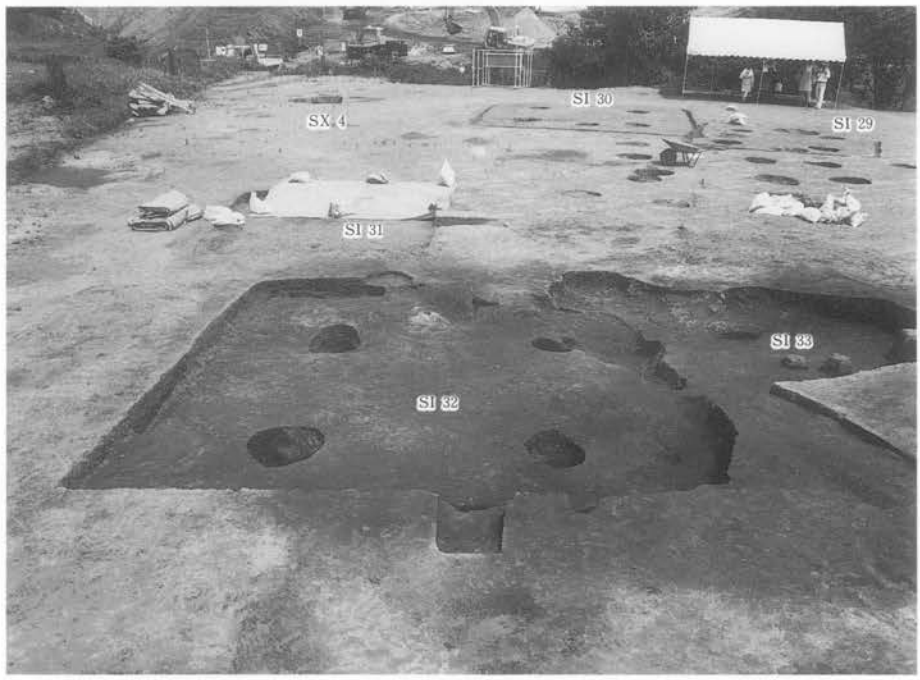
4

1　SI 35・36・43　　3　SI 46かまど
2　SI 44かまど　　4　SI 46



1

2



3

1　SI 30～32

2　SI 32かまど

3　SI 29～33、SX 4

1

2

3

1　SI 32・33、SB 15

2　SI 33かまど

3　SI 34、SB 15・18

1

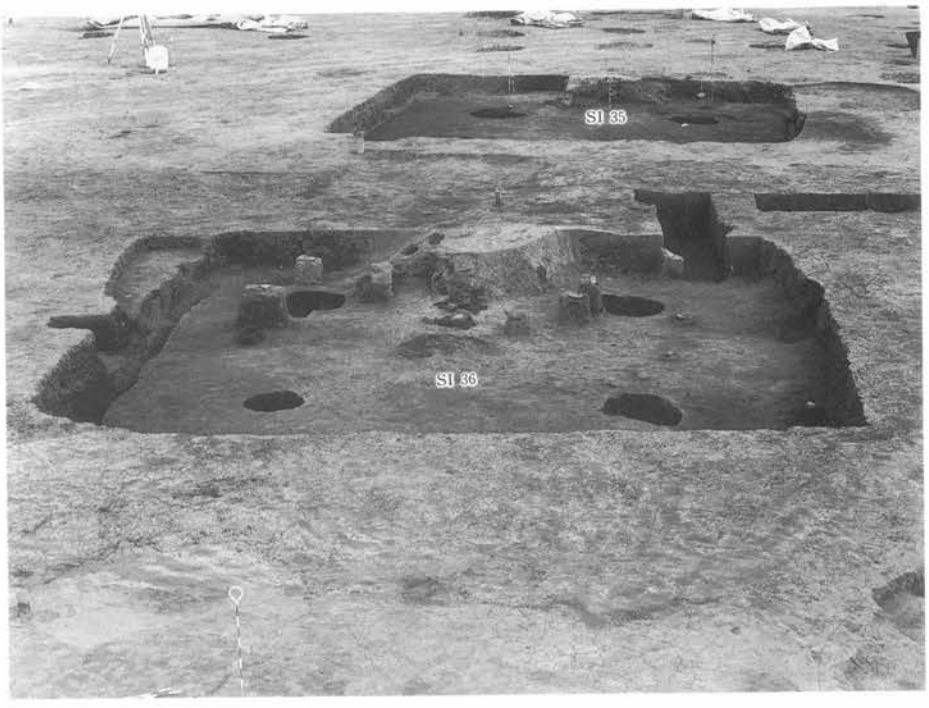
2

3

4

1　SI 34・35　　3　SI 35かまど

2　SI 35かまど　　4　SI 34・35・42・43、SB 18



1

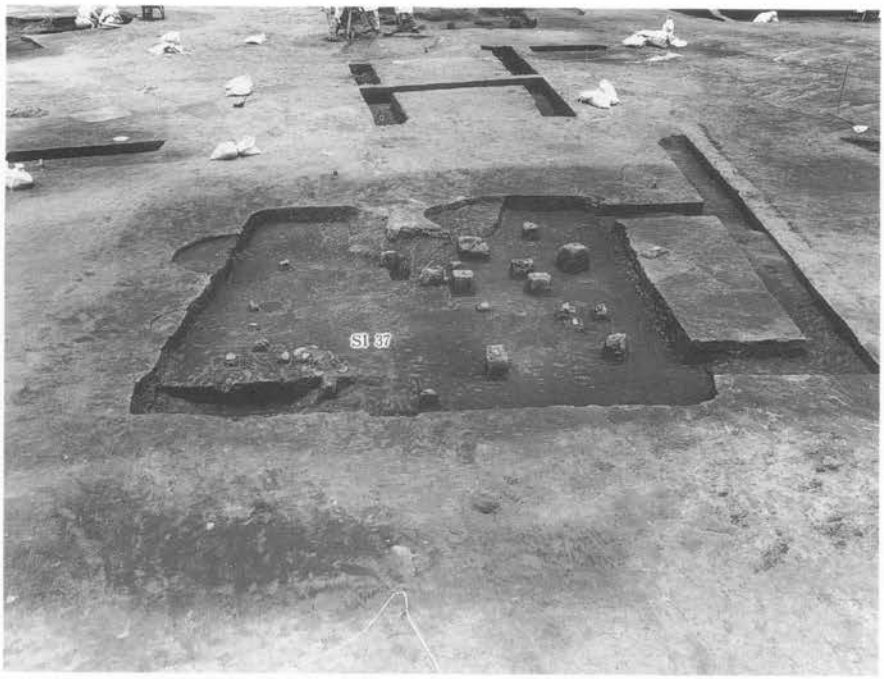
2

3

1　SI 35・36

2　SI 36かまど

3　SI 36・42・43



1

2

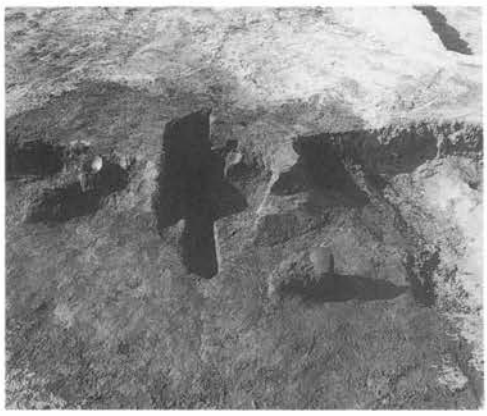
3

4

1　SI 37　　3　SI 38かまど

2　SI 37かまど　　4　SI 38

1



2

3

4

1　SI 40
2　SI 42かまど
3　SI 39かまど
4　SI 35・42、SB 18

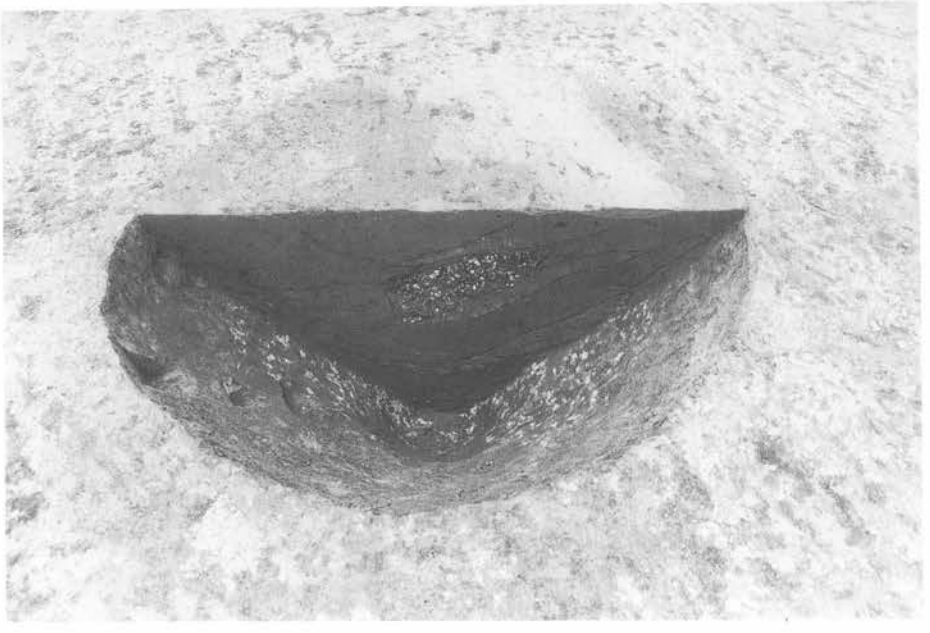
1

2

3

1　SI 47
2　SB 14
3　SB 15

1



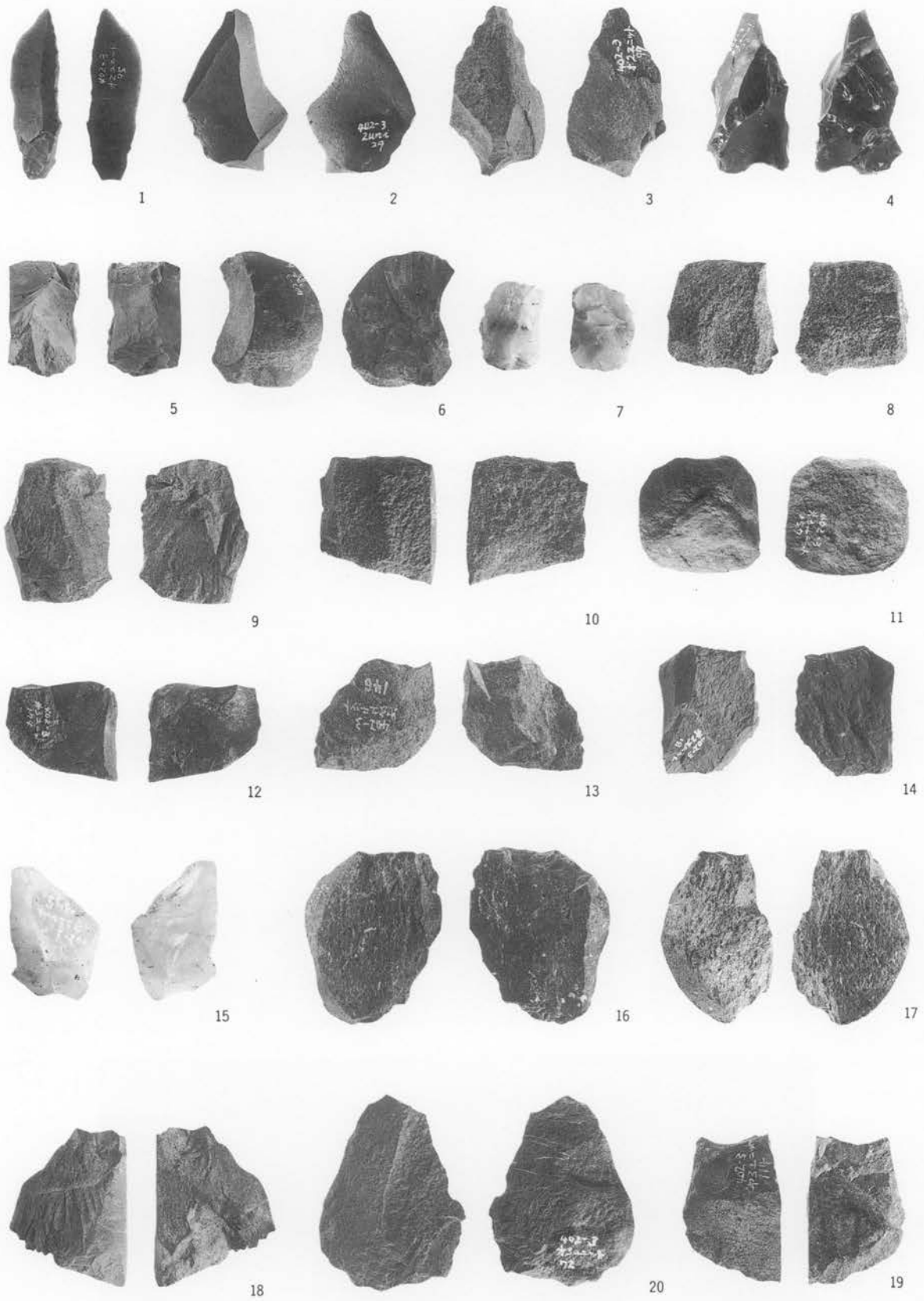
2

3

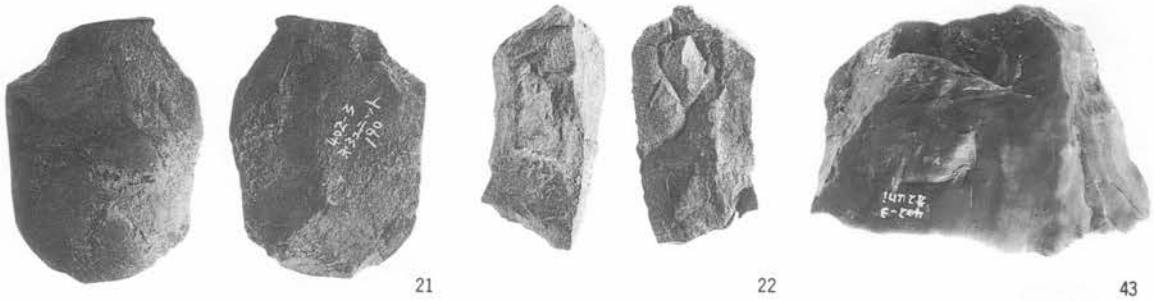
1　SB 10

2　SX 2

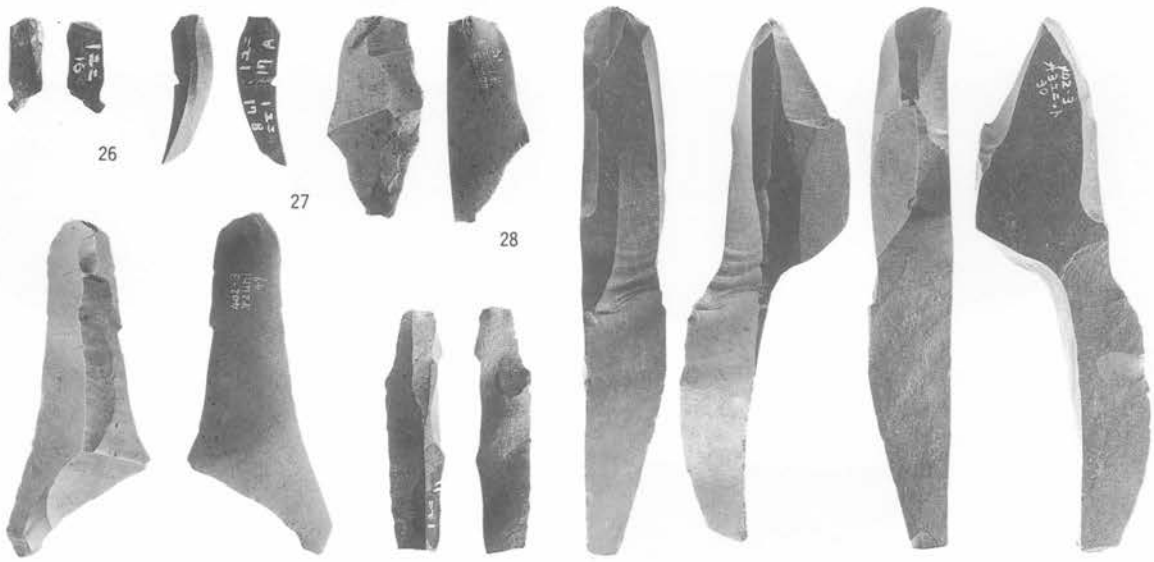
3　SX 6



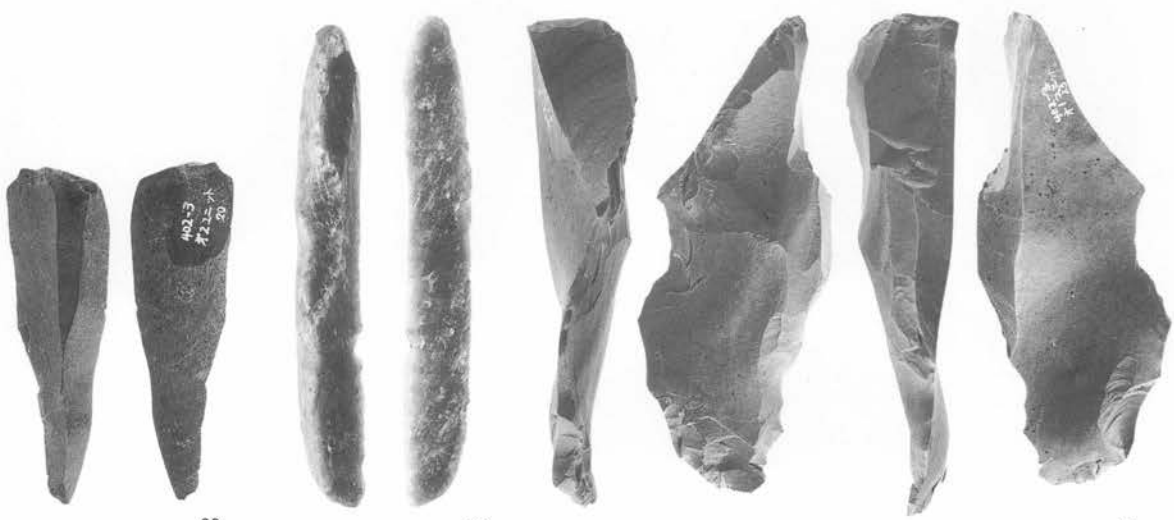
出土石器（1）



21　22　43

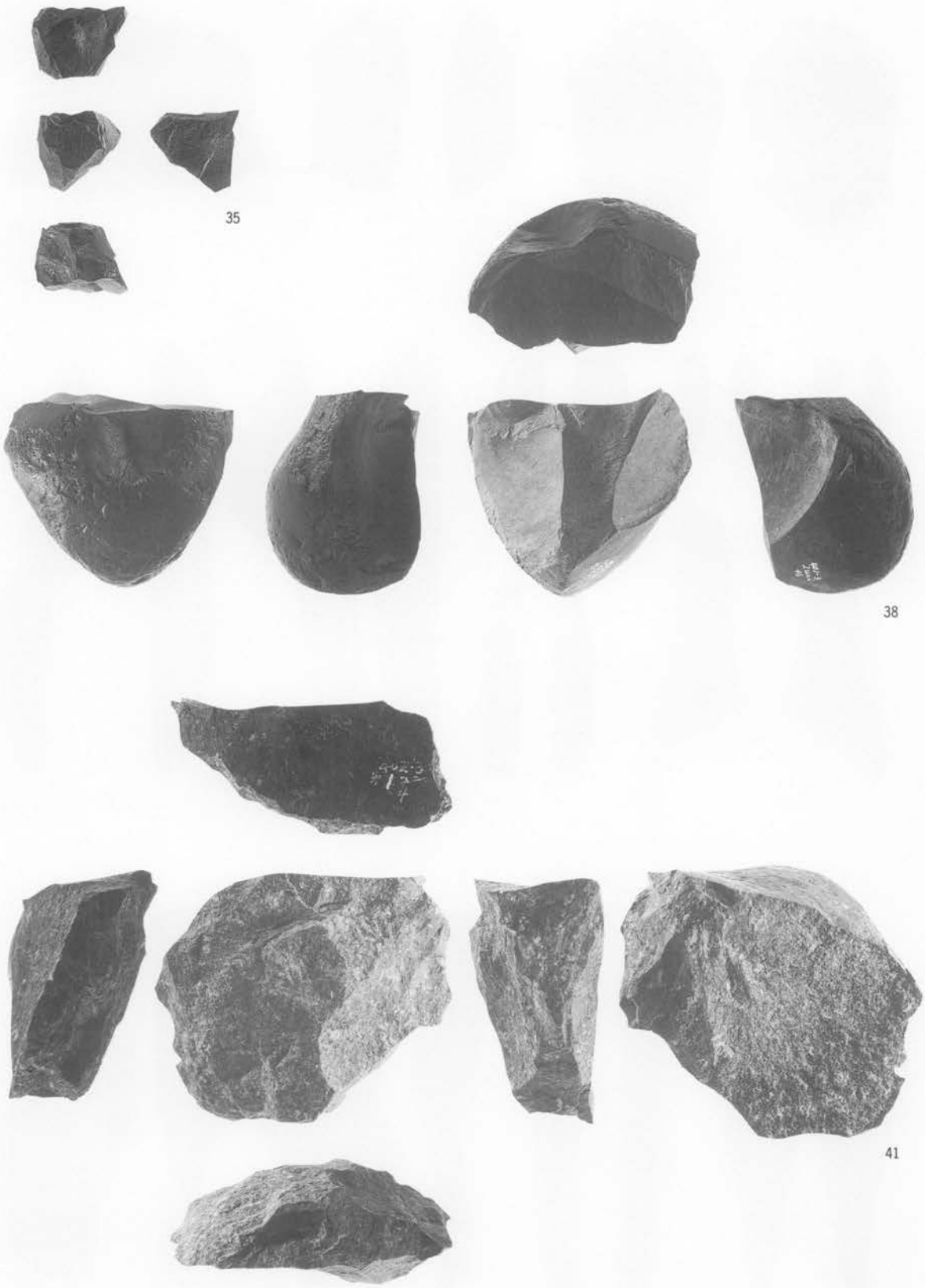


26　27　28　31　29　34

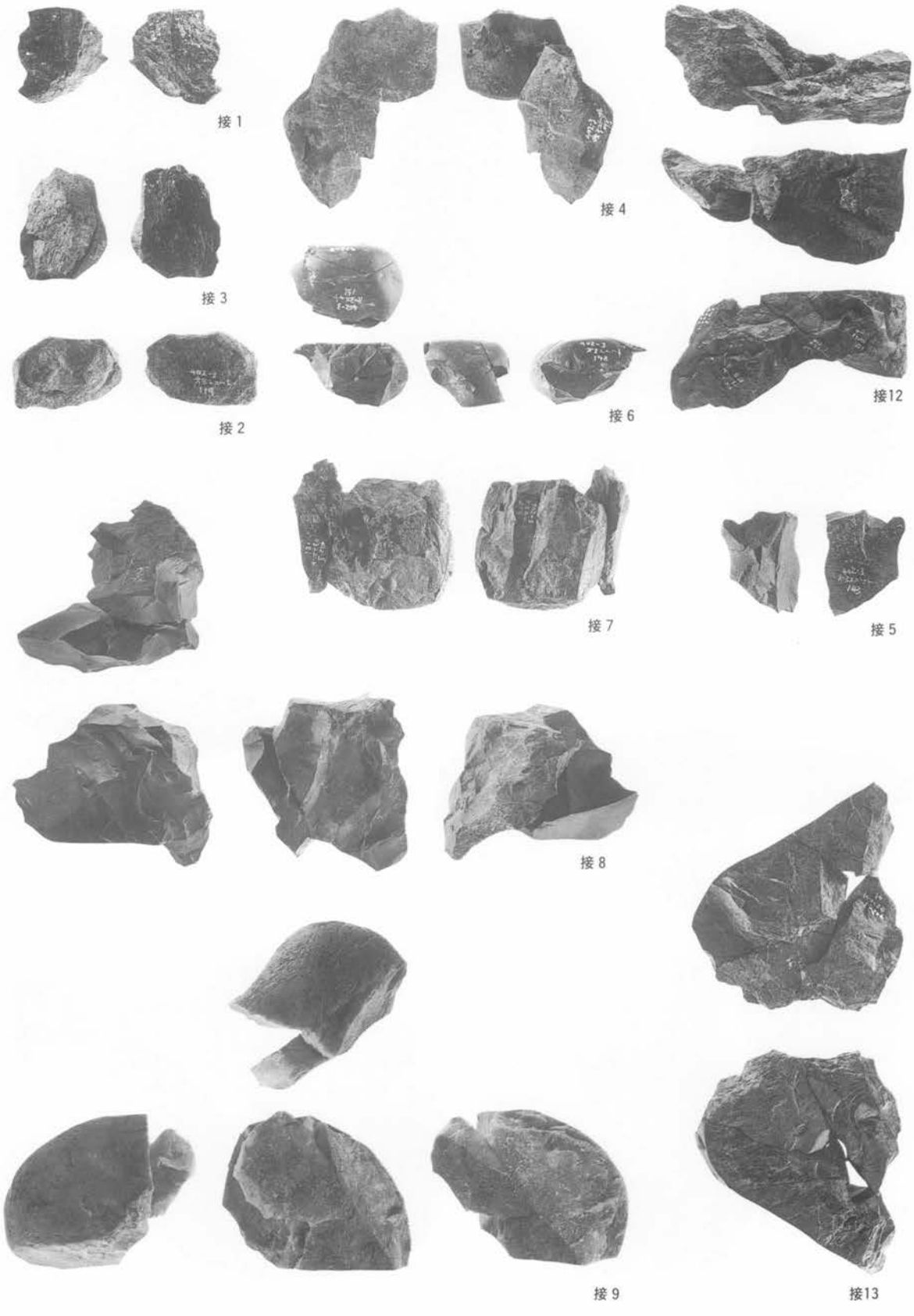


32　30　33

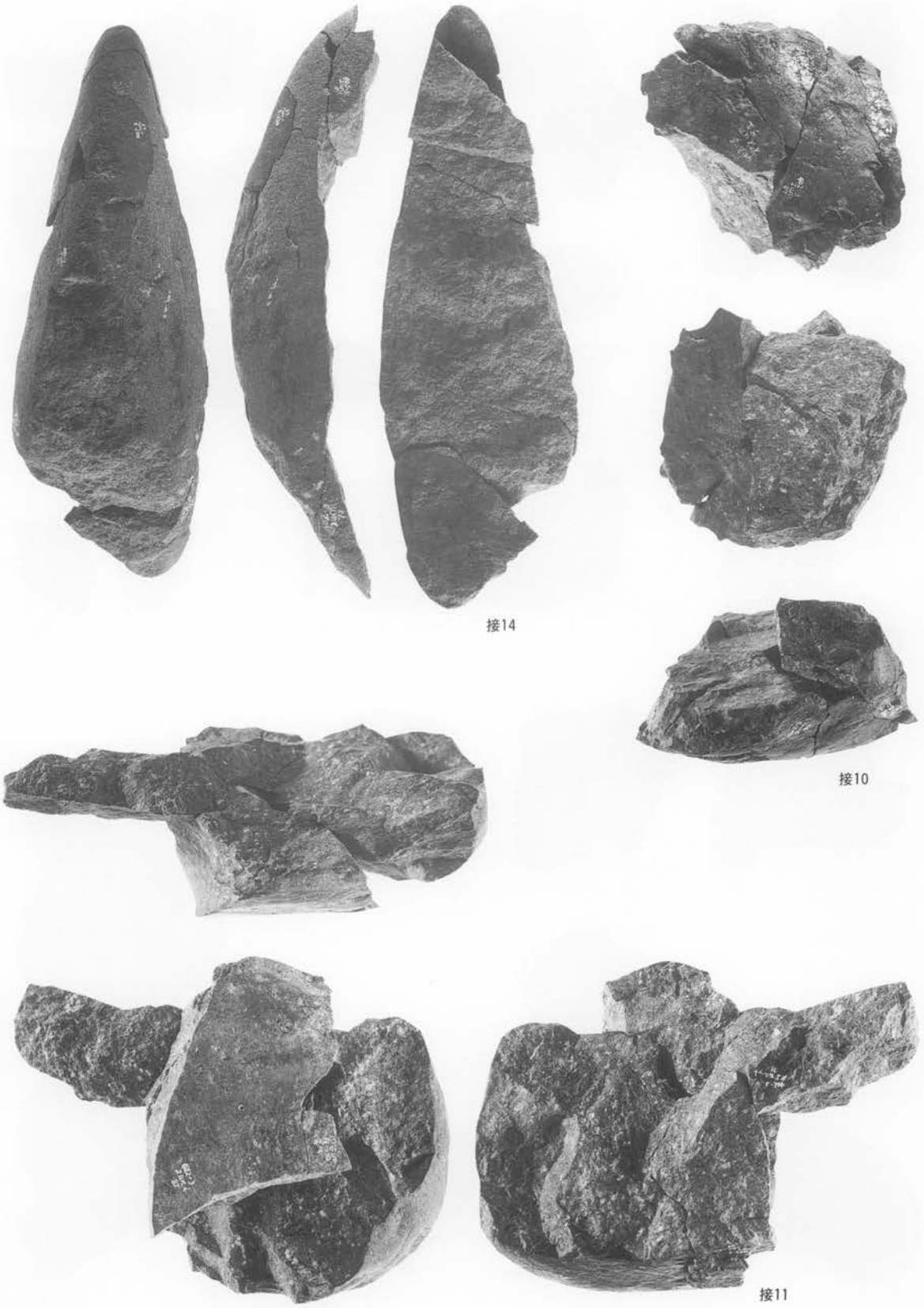
出土石器（2）



出土石器（3）

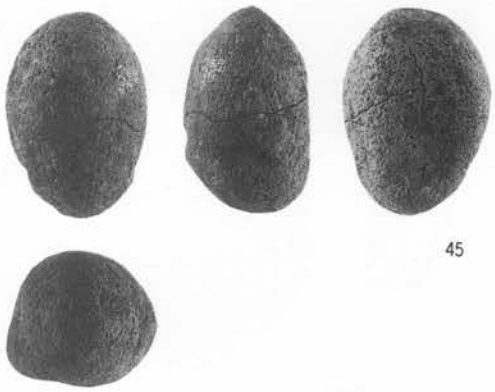


出土石器（4）

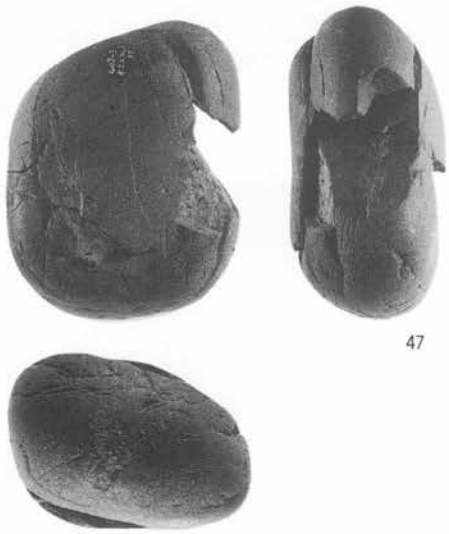


出土石器（5）

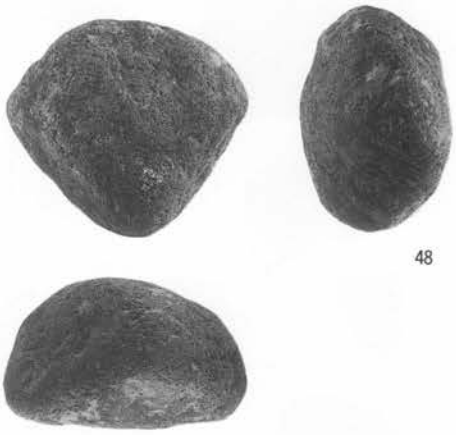
46



45

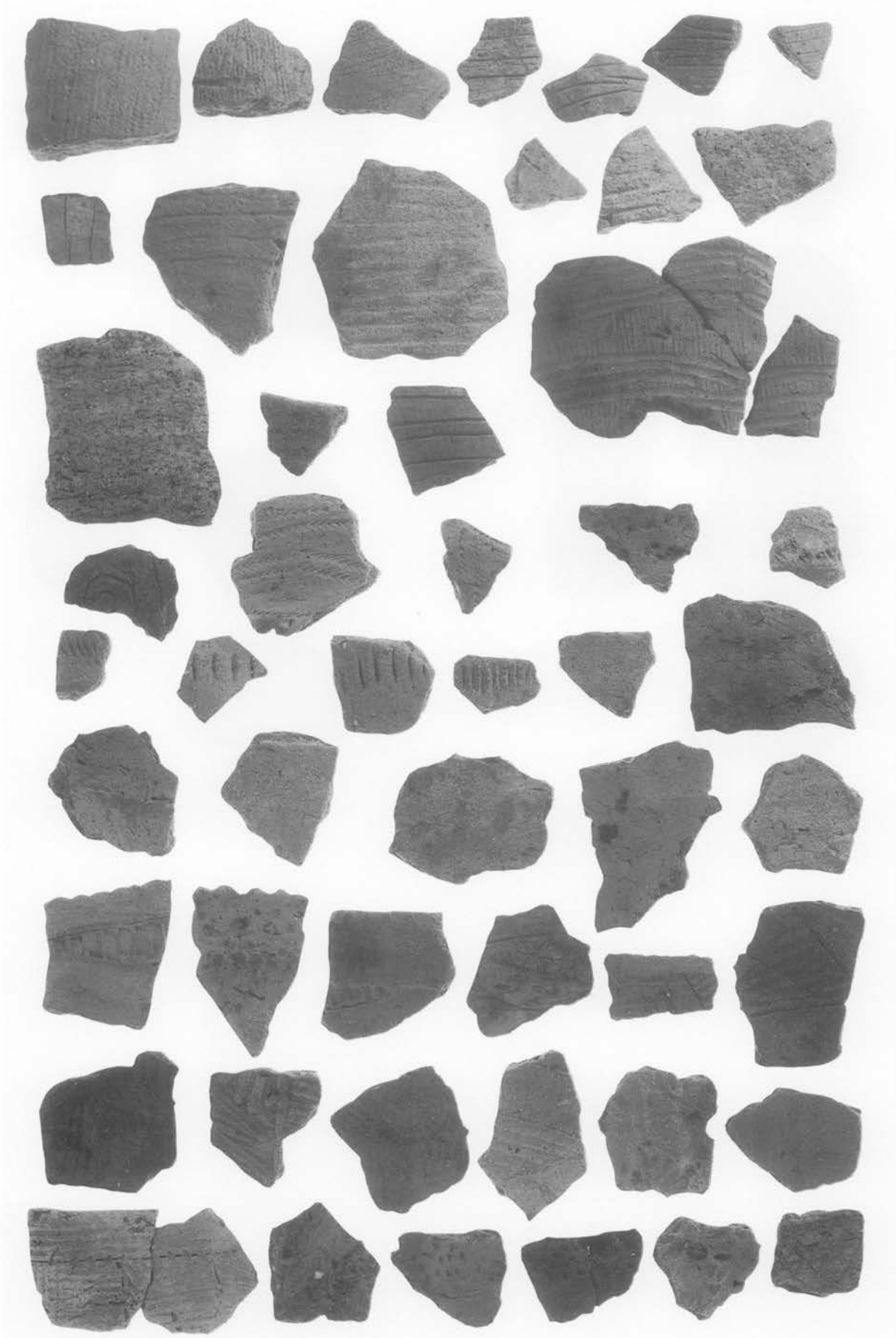


47

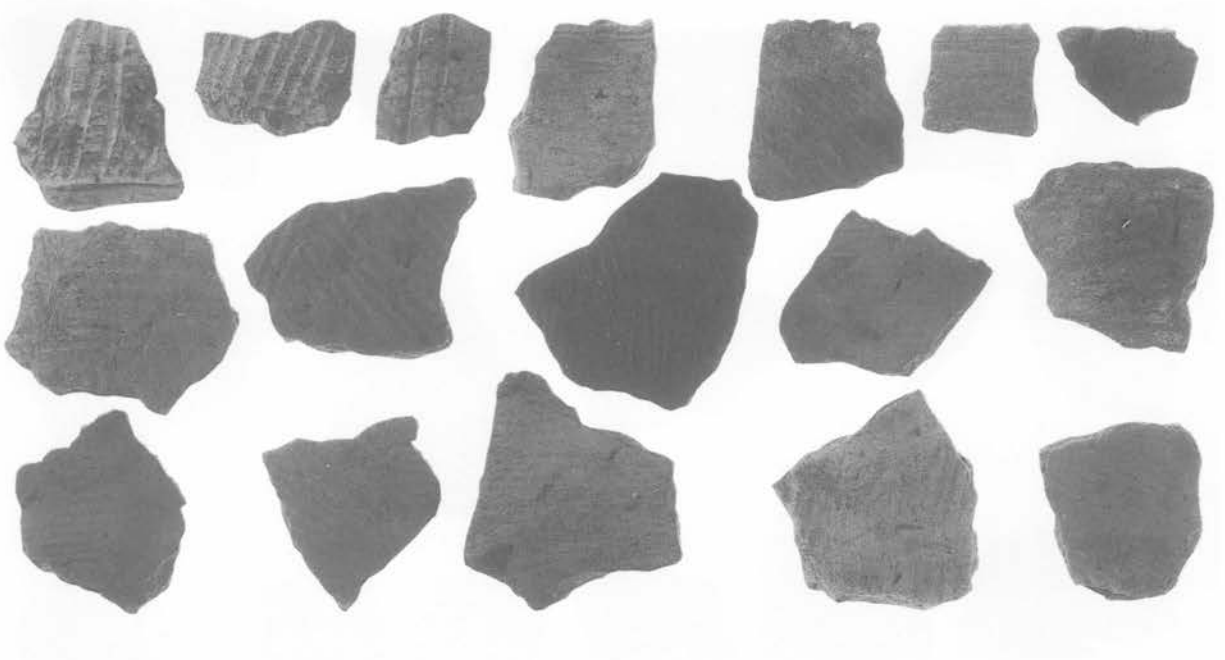


48

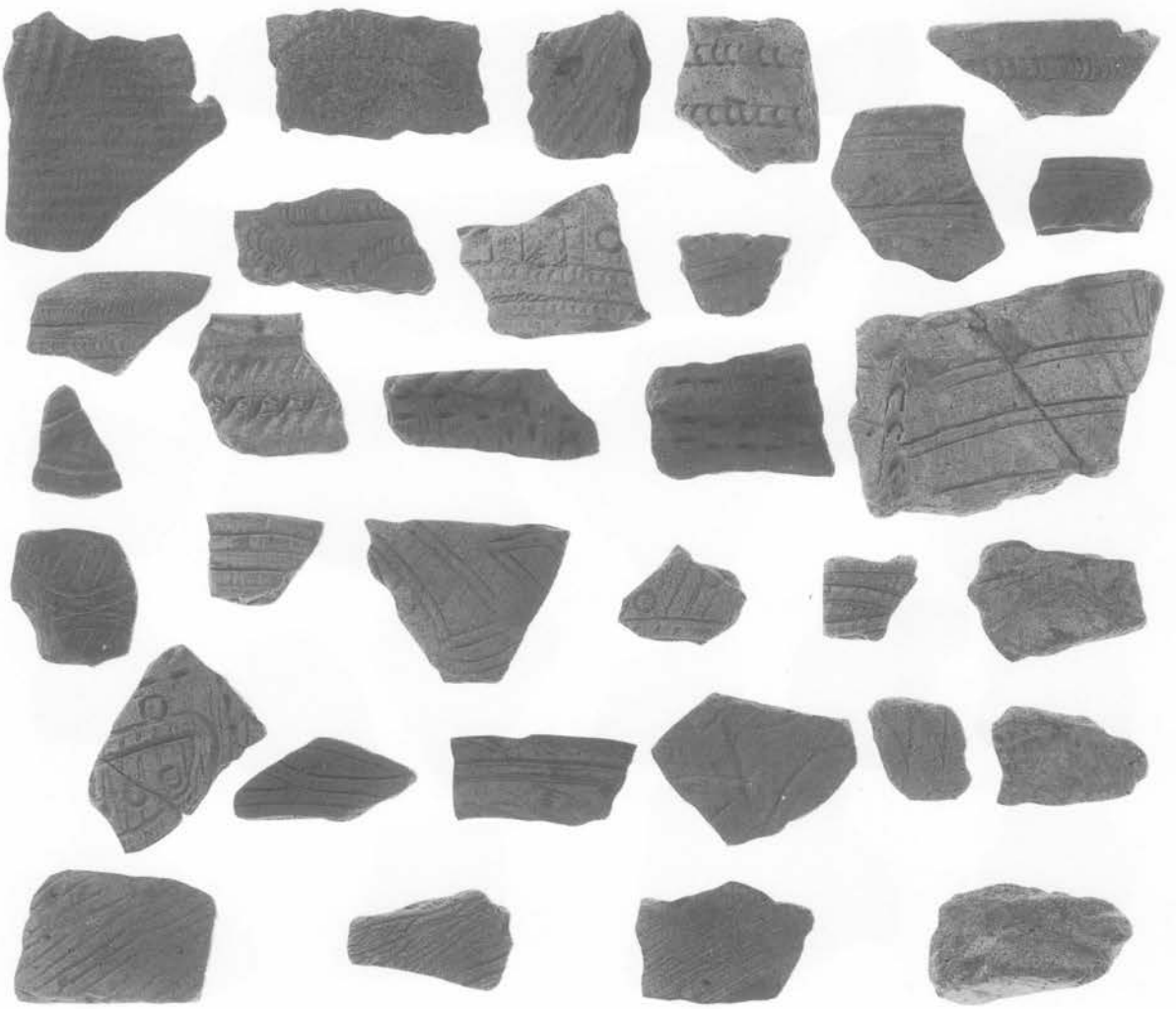
出土石器（6）



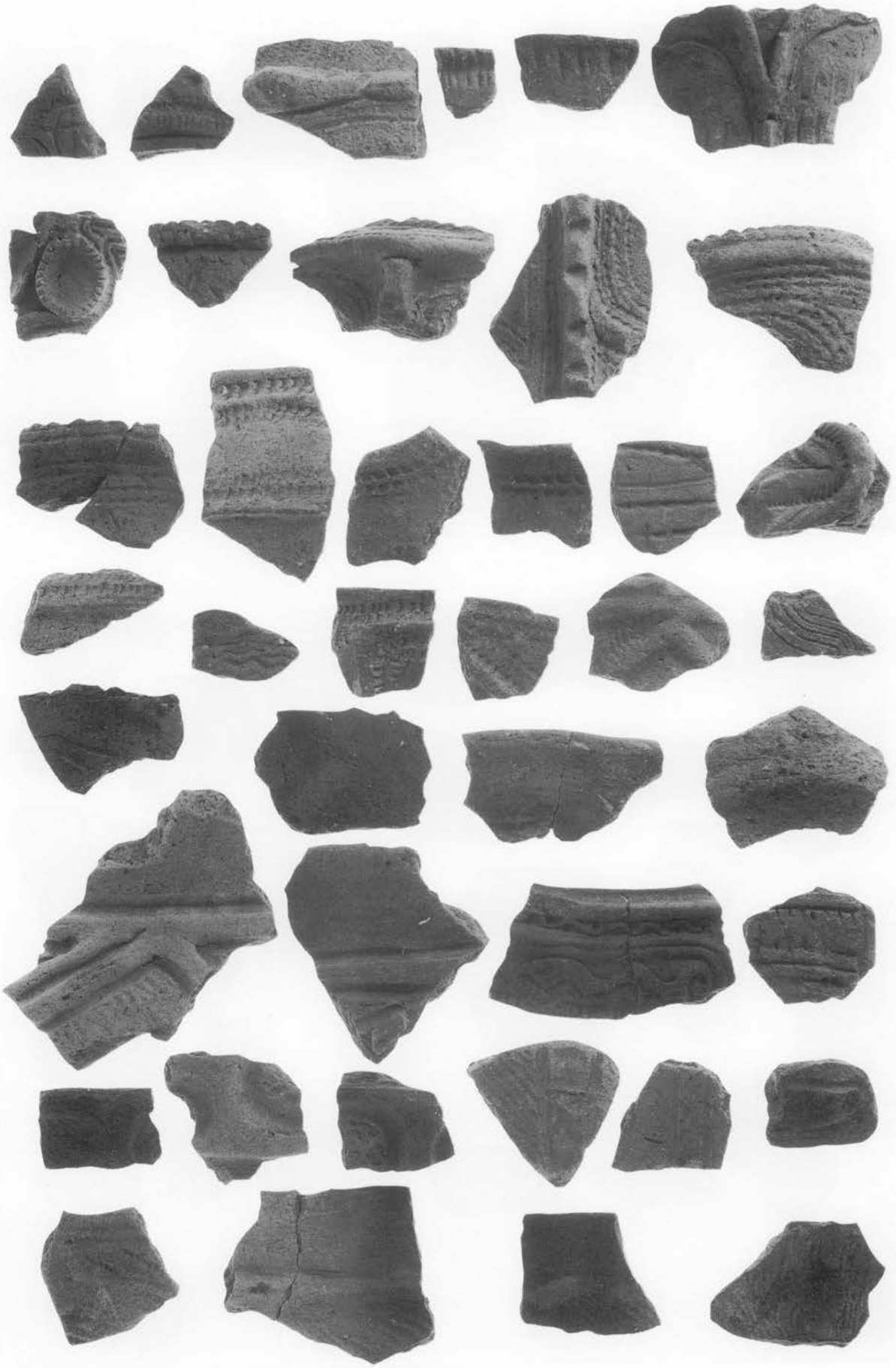
遺構外出土縄文土器(1)



遺構外出土縄文土器(2)



遺構外出土縄文土器(3)

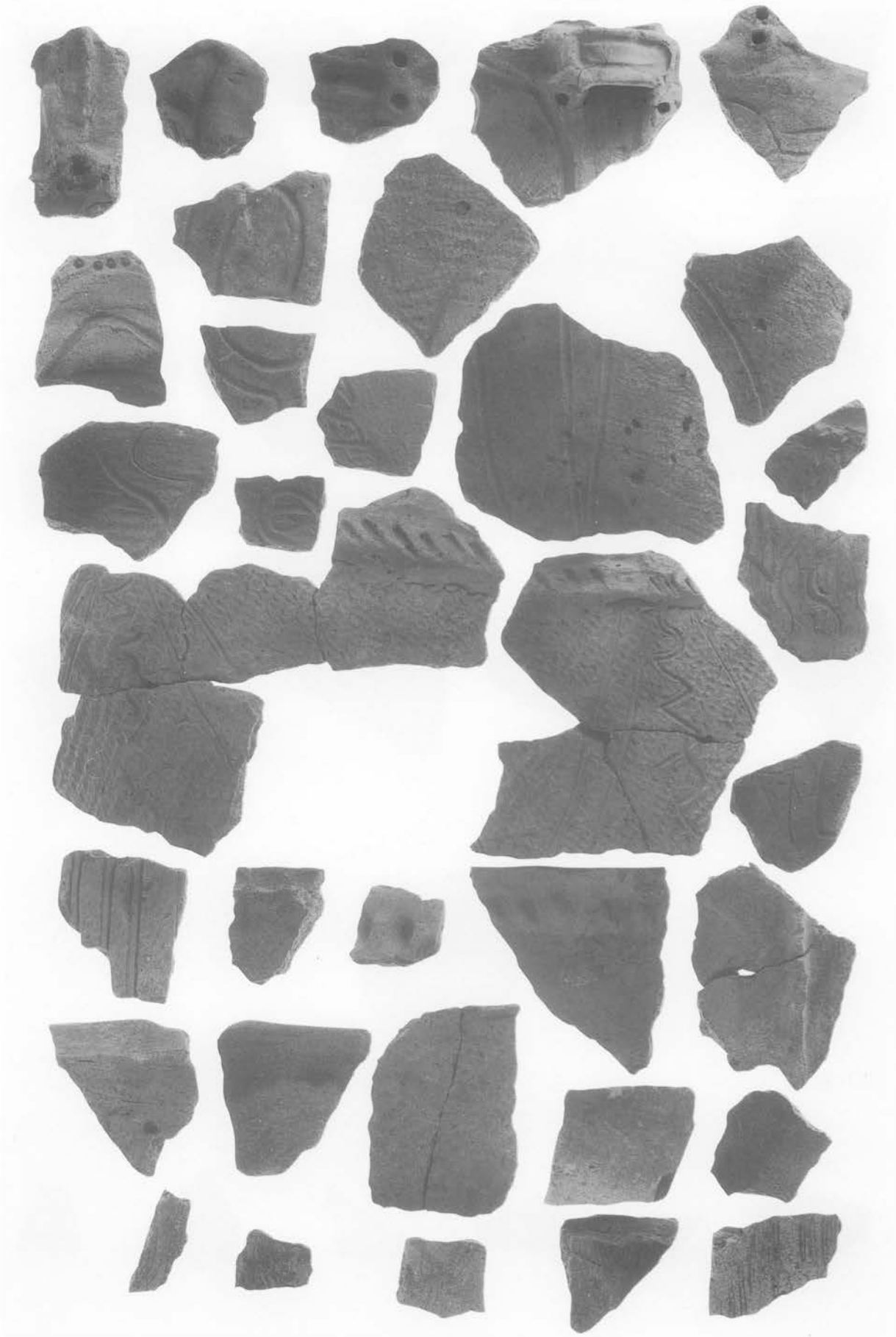


遺構外出土縄文土器(4)

遺構外出土縄文土器(5)

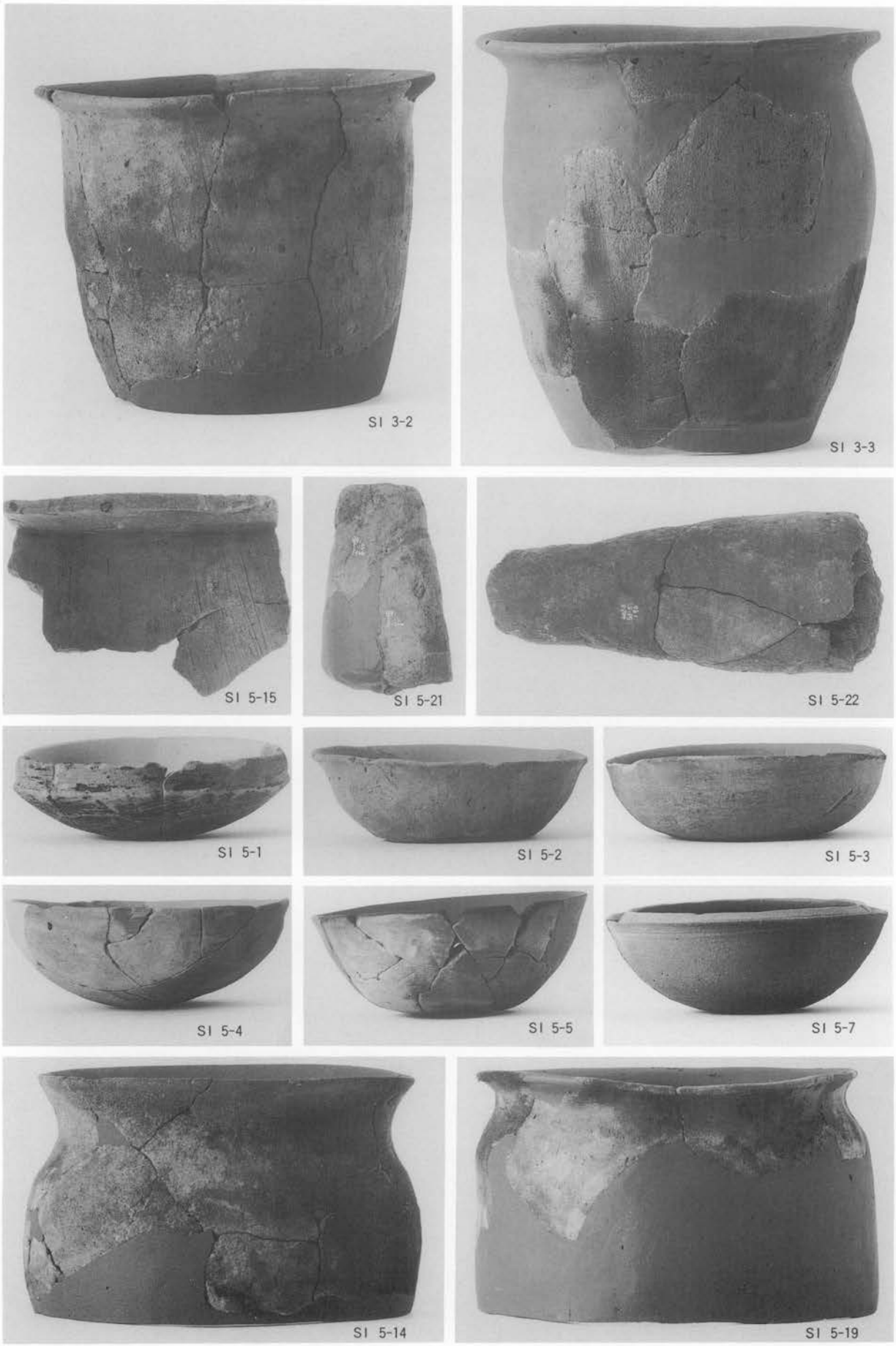
土器片錘

遺構外出土弥生土器



遺構外出土縄文土器(6)

SI 2出土遺物


SI 3-2
SI 3-3
SI 5-15
SI 5-21
SI 5-22
SI 5-1
SI 5-2
SI 5-3
SI 5-4
SI 5-5
SI 5-7
SI 5-14
SI 5-19

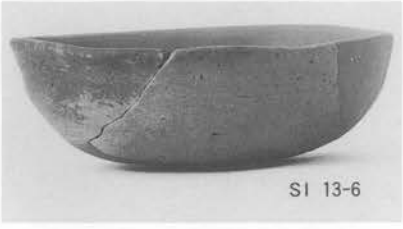
SI 3・5出土遺物

SI 5-16

SI 5-17

SI 13-51

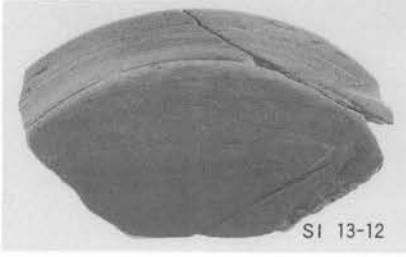
SI 13-1


SI 13-6

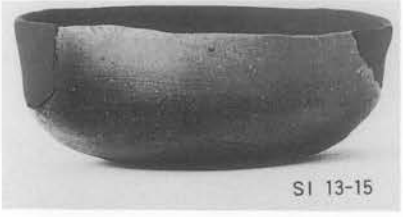
SI 13-7

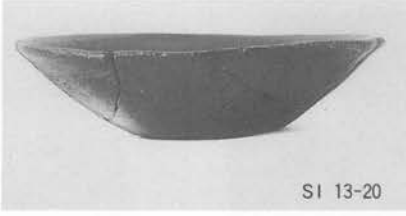
SI 13-9

SI 13-10


SI 13-12

SI 13-13


SI 13-15


SI 13-20

SI 13-21

SI 13-22

SI 13-28

SI 13-27

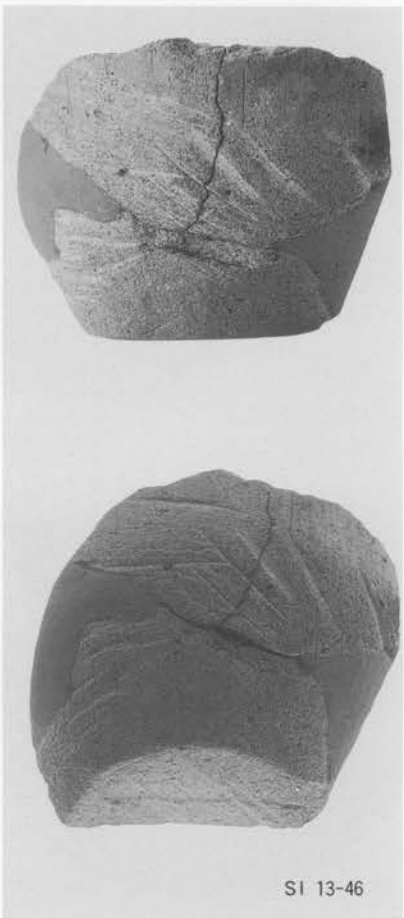
SI 5・13出土遺物

SI 13-23

SI 13-25

SI 13-26

SI 13-24


SI 13-46

SI 13-52

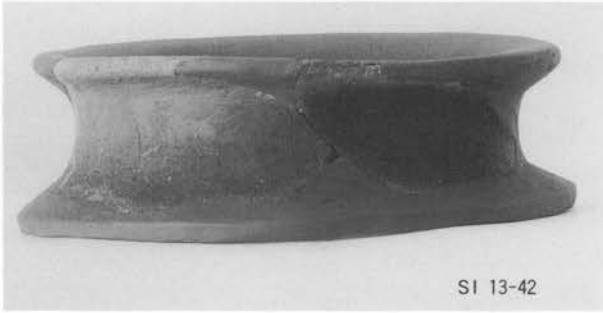
SI 13-30

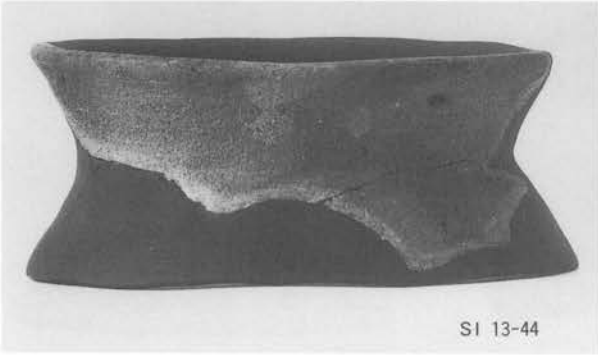
SI 13-31

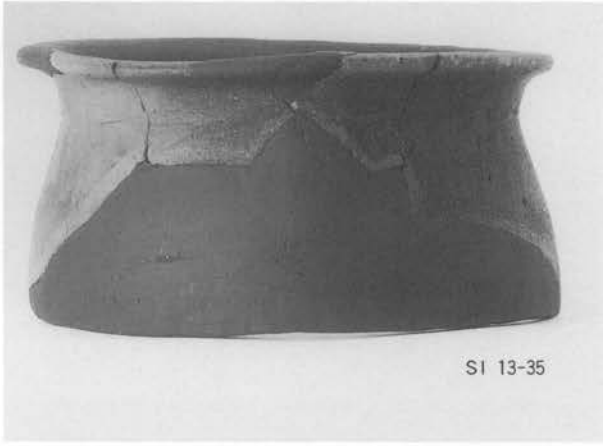
SI 13-39

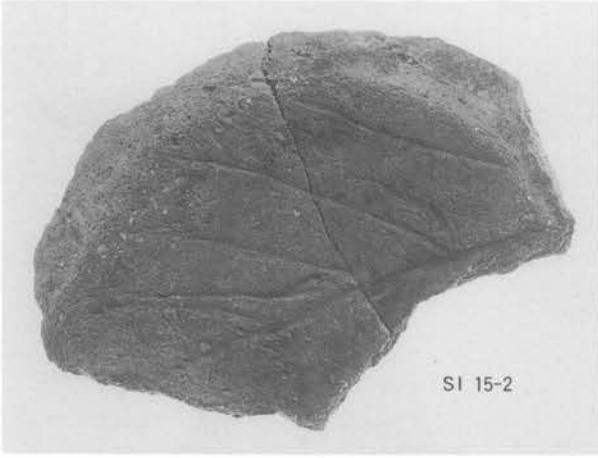
SI 13出土遺物

SI 13-27


SI 13-42


SI 13-44

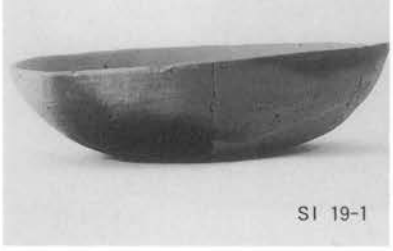

SI 13-35


SI 15-2

SI 15-1

SI 18-3

SI 18-4

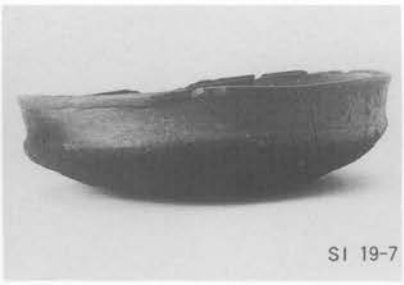

SI 19-1

SI 19-2

SI 19-5

SI 13・15・18・19出土遺物

SI 19-6


SI 19-7

SI 19-8

SI 19-15

SI 19-18

SI 19-19

SI 19-9

SI 19-10

SI 19-11

SI 19-12

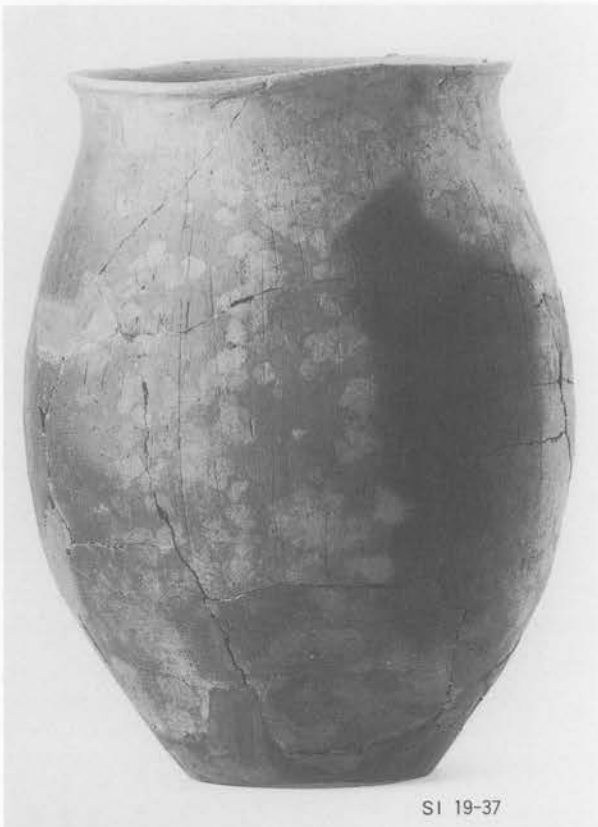
SI 19出土遺物

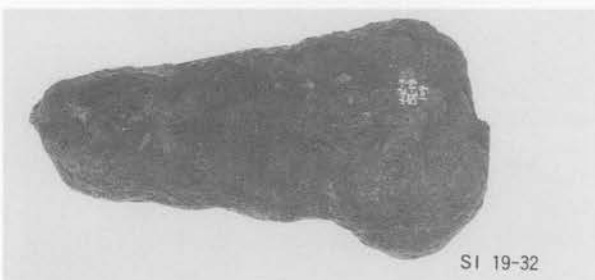
SI 19出土遺物

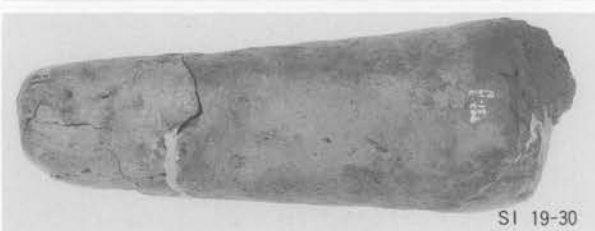
SI 19-33

SI 19-34

SI 19-36


SI 19-37


SI 19-32


SI 19-30

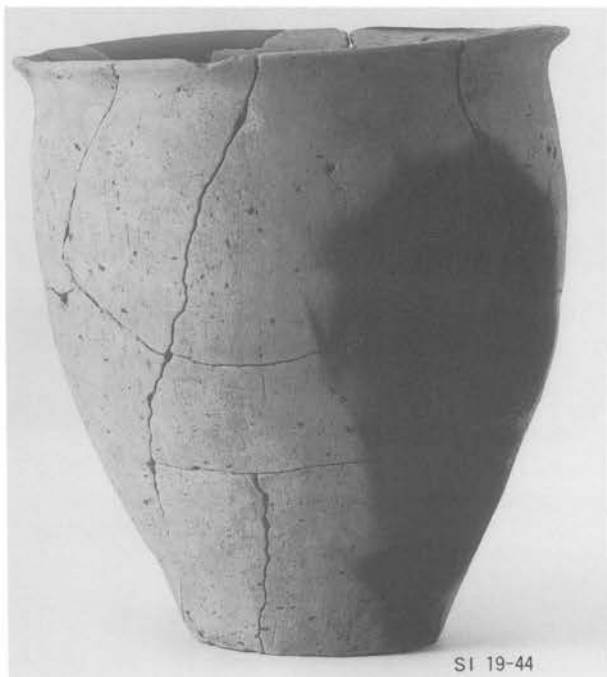
SI 19-31

SI 19出土遺物

SI 19-38

SI 19-39

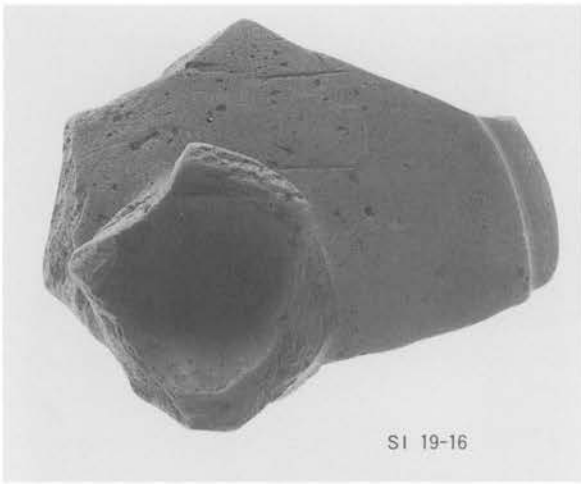
SI 19-43


SI 19-44

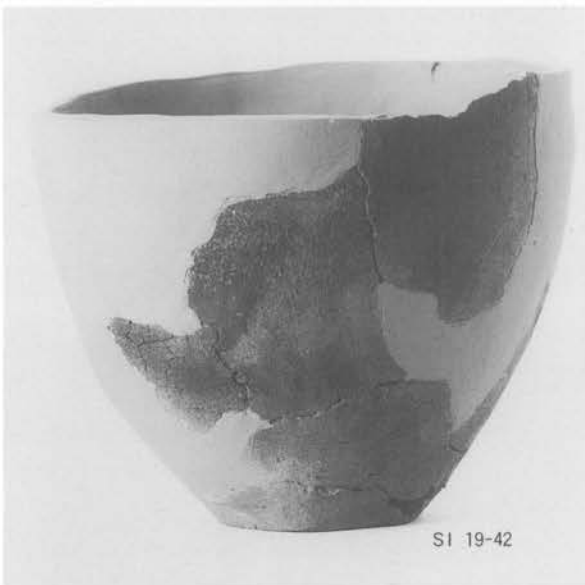
SI 19-40

SI 19-41

SI 19出土遺物


SI 19-16

SI 19-45


SI 19-42

SI 20-13

SI 20-1

SI 20-3

SI 20-4

SI 20-5

SI 20-7

SI 20-8

SI 20-17

SI 19・20出土遺物

SI 20-18

SI 20-14

SI 22-1

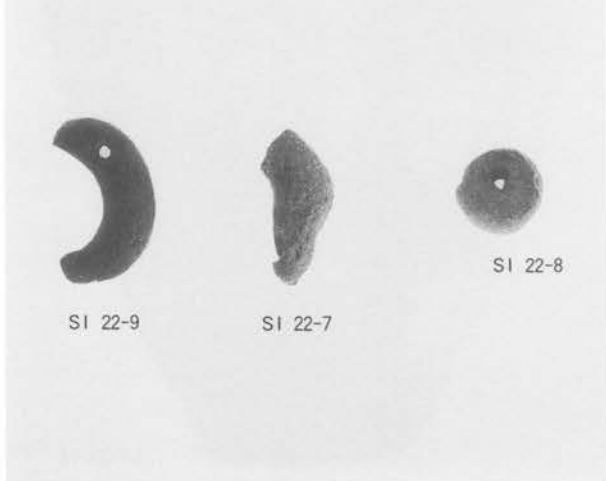
SI 22-2

SI 21-1

SI 22-4

SI 22-3

SI 22-6



SI 20～22出土遺物

SI 25-1

SI 25-2

SI 25-5

SI 25-7

SI 25-8

SI 25-16

SI 25-15

SI 25-12

SI 25-9

SI 25-14

SI 30-1

SI 25・30出土遺物

SI 36-1

SI 36-3

SI 36-4

SI 40-1

SI 42-1

SI 36-5

SI 36-6

SI 42-2

SI 42-3

SI 42-4

SI 43-1

SI 43-4

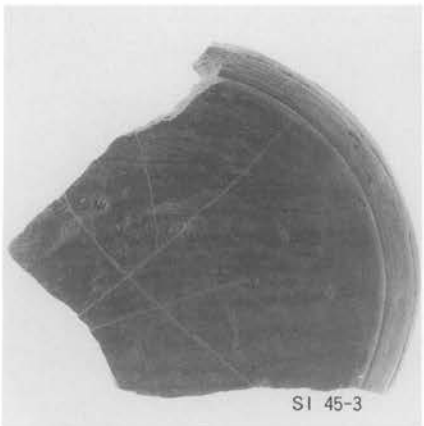
SI 45-1

SI 45-2

SI 45-4

SI 45-5

SI 36・40・42・43・45出土遺物


SI 45-3

SI 45-8

SI 45-7

SI 45-6

SI 45-9

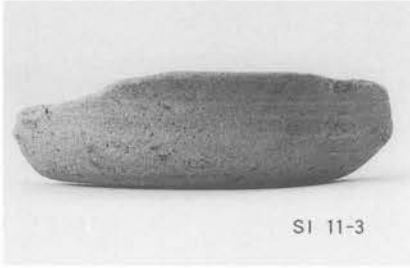
SI 45-11

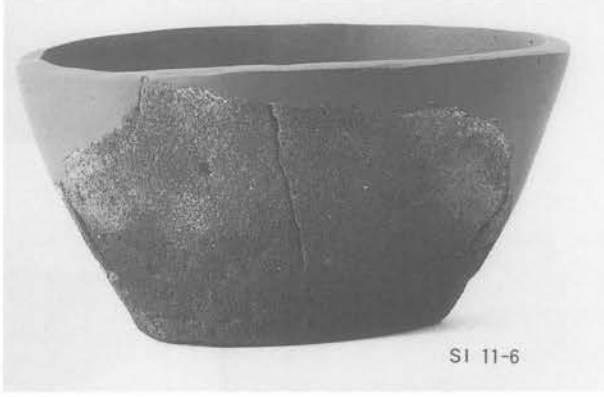
SI 45-12

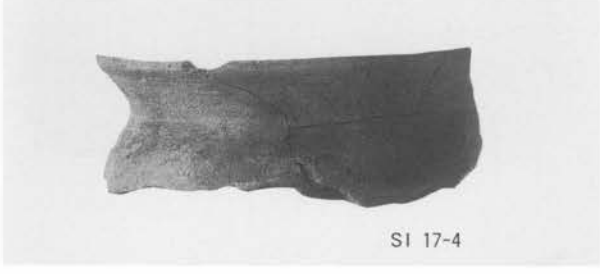
SI 45-14

SI 45-13

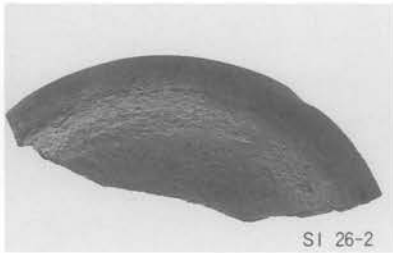
SI 45出土遺物



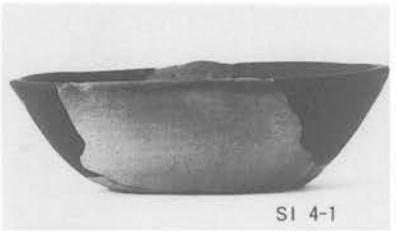




SI 11・17.・26出土遺物



SI 26・35・37・39出土遺物


SI 4-1

SI 4-2

SI 4-3

SI 4-7

SI 4-8

SI 4-11

SI 4-12

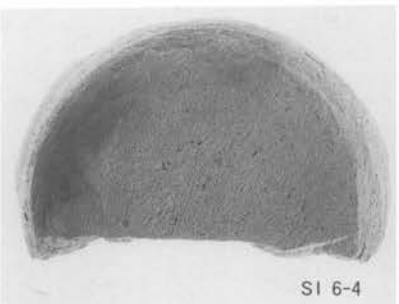
SI 4-14

SI 4-15

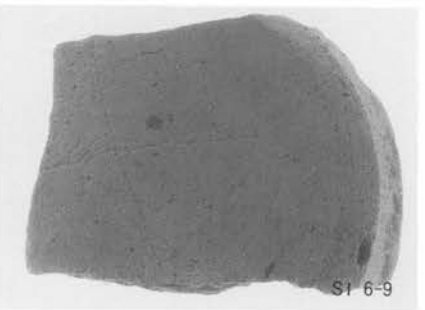
SI 4-17

SI 4-19

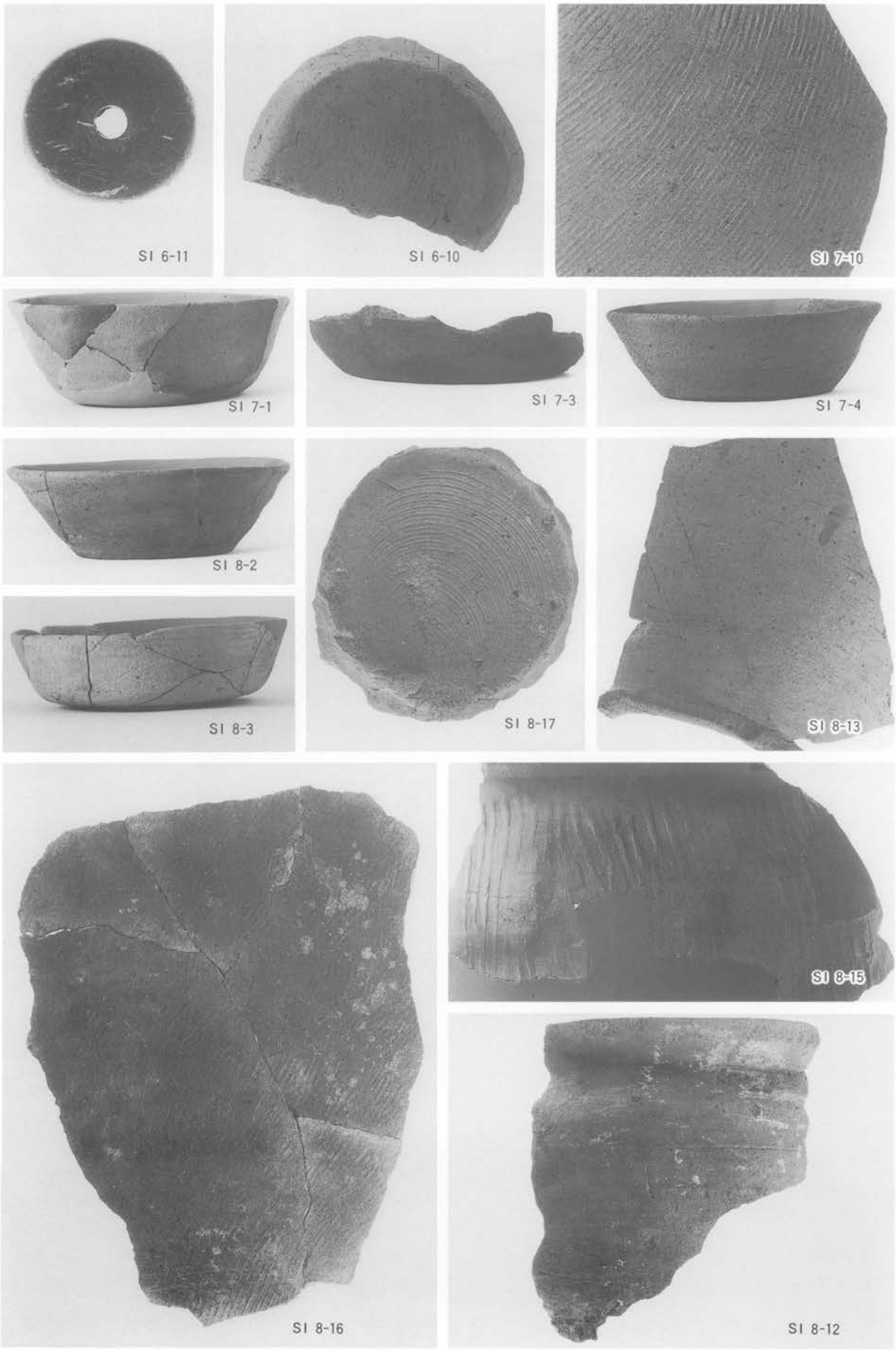
SI 4-18


SI 6-4

SI 6-7

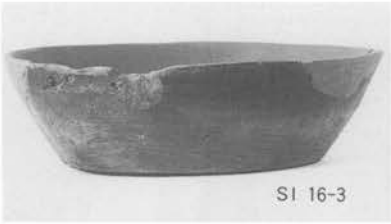

SI 6-9

SI 4・6出土遺物


SI 6-11
SI 6-10
SI 7-10
SI 7-1
SI 7-3
SI 7-4
SI 8-2
SI 8-3
SI 8-17
SI 8-13
SI 8-15
SI 8-16
SI 8-12

SI 6～8出土遺物

SI 16-1


SI 16-3

SI 16-4

SI 16-7

SI 16-10

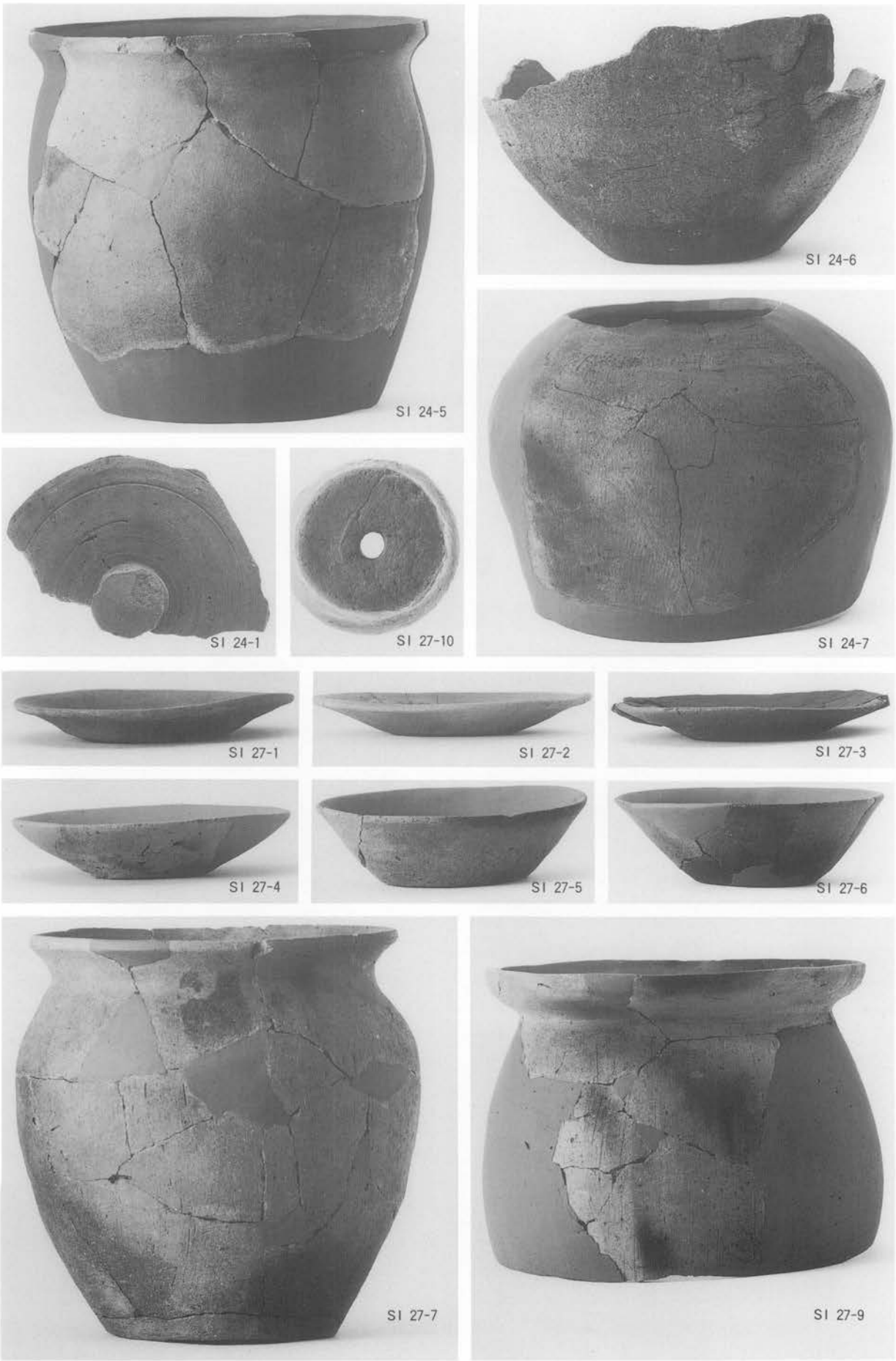
SI 23-2

SI 24-2

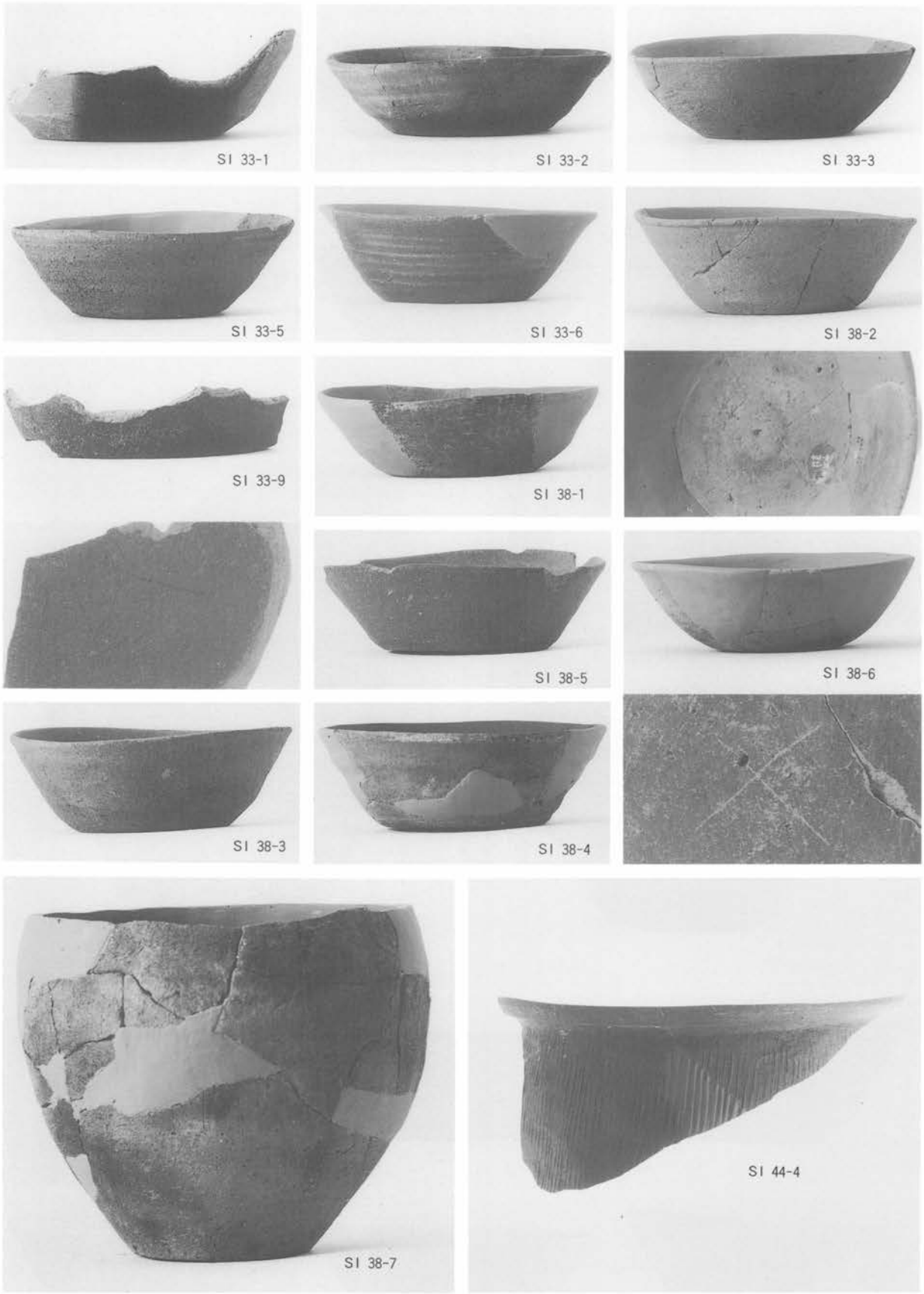
SI 24-3

SI 24-4

SI 16・23・24出土遺物


SI 24-5
SI 24-6
SI 24-1
SI 27-10
SI 24-7
SI 27-1
SI 27-2
SI 27-3
SI 27-4
SI 27-5
SI 27-6
SI 27-7
SI 27-9

SI 24・27出土遺物



SI 33・38・44出土遺物

SI 41-1

SI 41-2

SI 41-3

SI 41-4

SI 44-1

SI 44-3

SI 44-5

SI 46-7

SI 46-2

SI 46-3

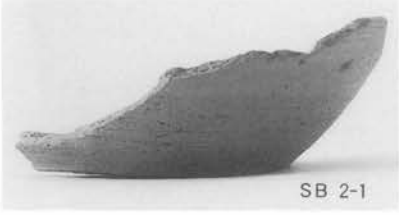
SI 46-4

SI 47-1

SI 47-2

SI 47-3

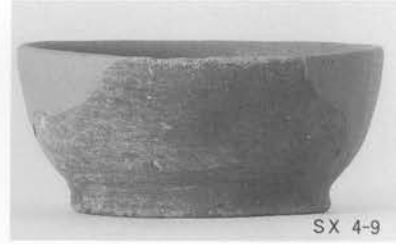
SI 41・44・46・47出土遺物



SI 46、SB 2・10、SX 4出土遺物

SX 4-6

SX 4-8


SX 4-9

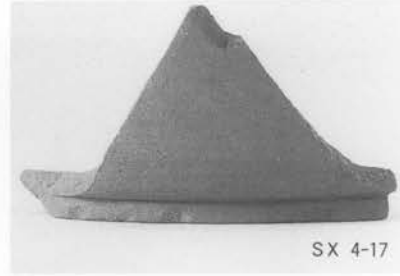
SX 4-10

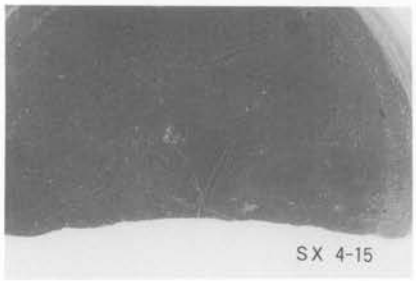
SX 4-11

SX 4-12

SX 4-13

SX 4-16


SX 4-17


SX 4-15

SX 4-18

SX 4-19

SX 4出土遺物

遺構外-8

表採

遺構外-9

遺構外-10

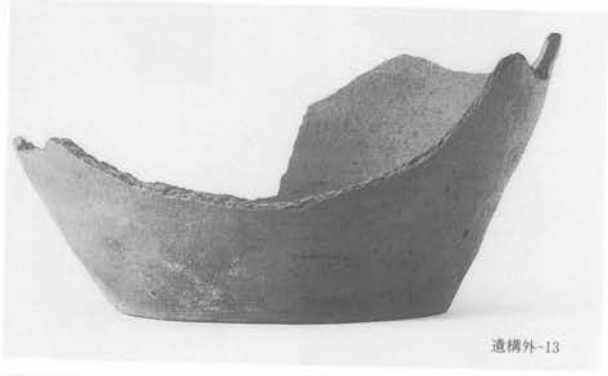
遺構外-1

遺構外-11

遺構外-4

表採

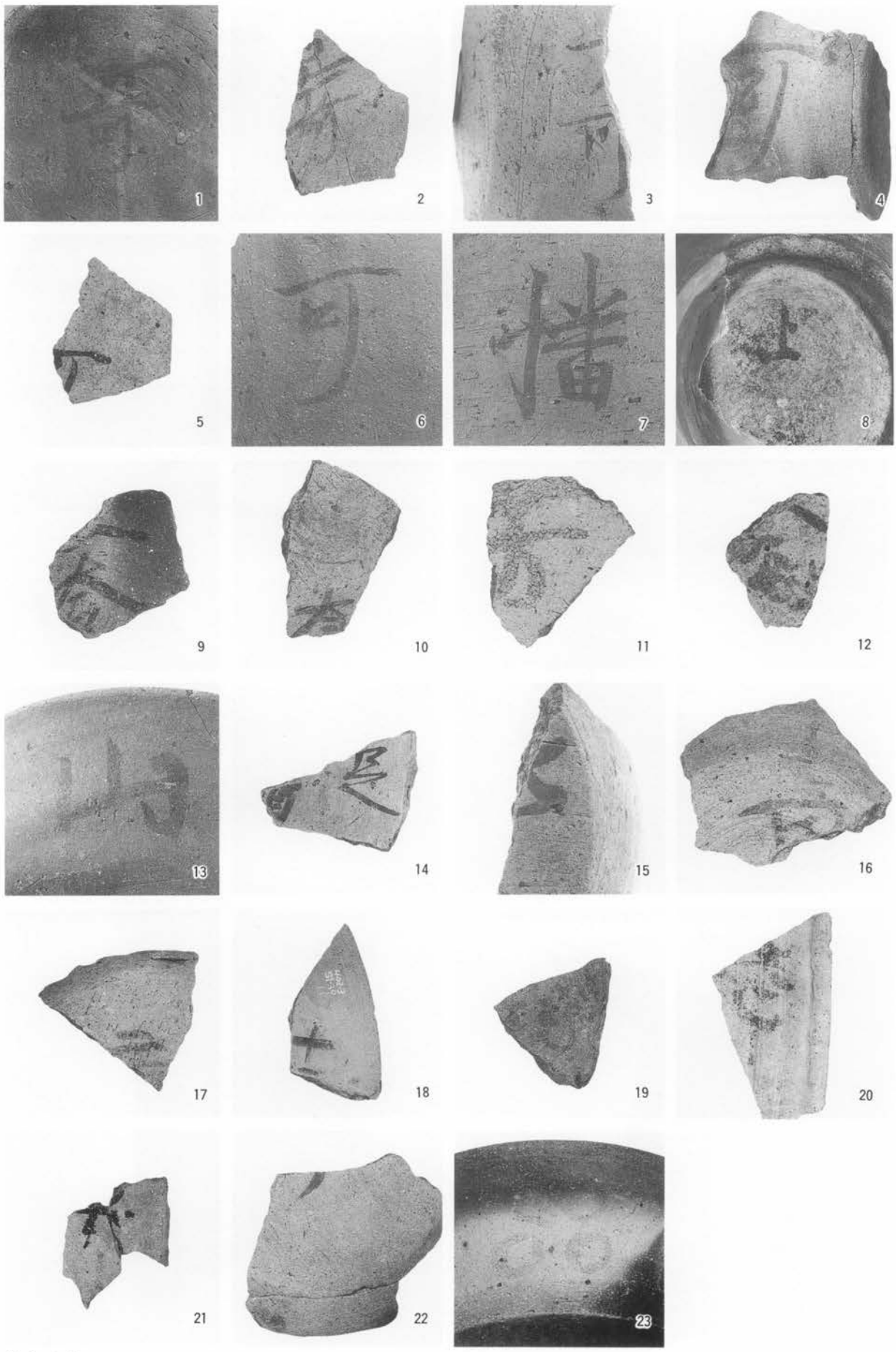
遺構外-12


遺構外-13

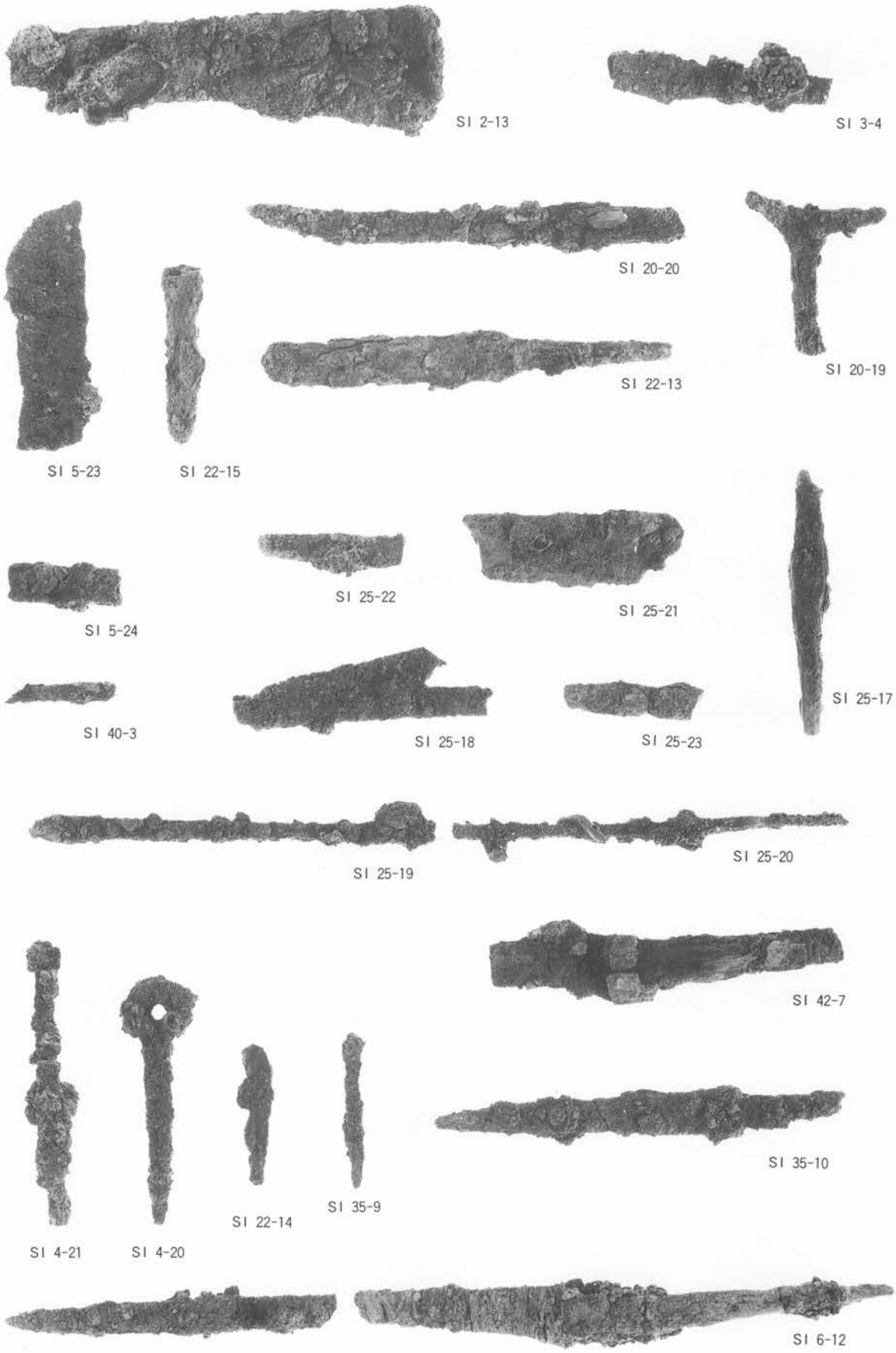
遺構外-6

SX 4-20

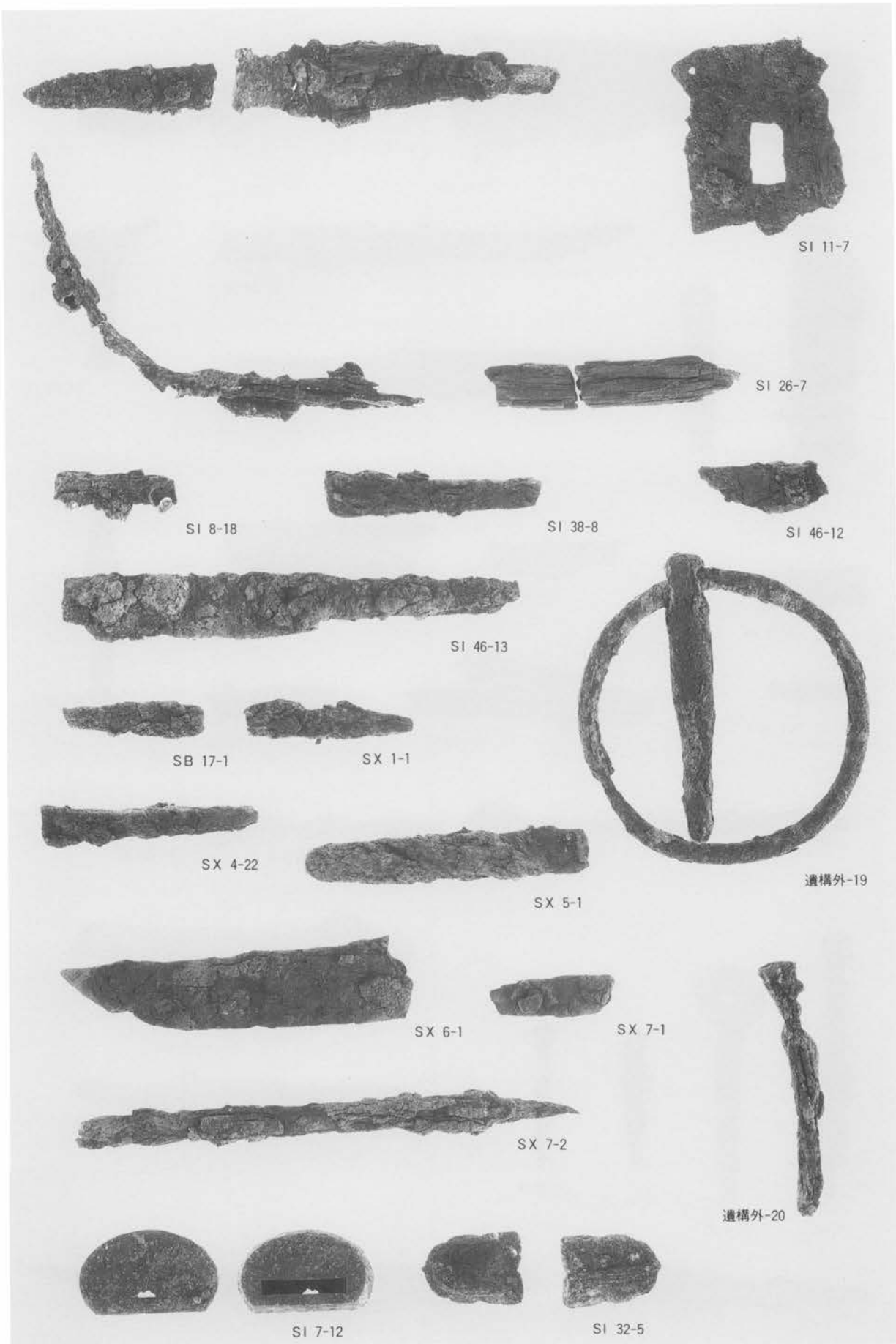
遺構外・表採遺物



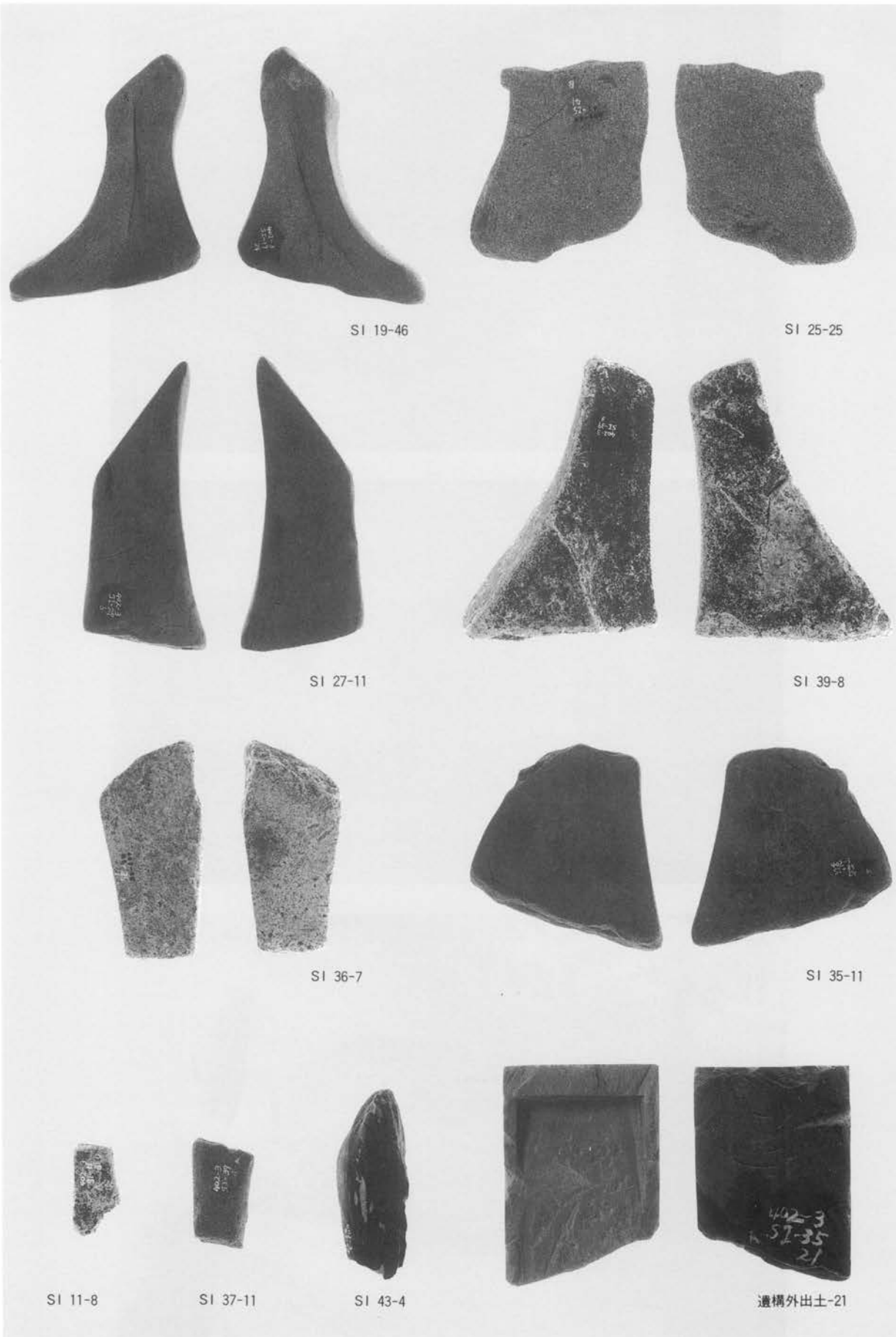
墨書土器


SI 2-13
SI 3-4
SI 20-20
SI 20-19
SI 22-13
SI 5-23
SI 22-15
SI 5-24
SI 25-22
SI 25-21
SI 25-17
SI 40-3
SI 25-18
SI 25-23
SI 25-19
SI 25-20
SI 42-7
SI 35-10
SI 22-14
SI 35-9
SI 4-21
SI 4-20
SI 6-12

金属製品


SI 11-7
SI 26-7
SI 8-18
SI 38-8
SI 46-12
SI 46-13
SB 17-1
SX 1-1
SX 4-22
SX 5-1
遺構外-19
SX 6-1
SX 7-1
SX 7-2
遺構外-20
SI 7-12
SI 32-5

金属製品


SI 19-46
SI 25-25
SI 27-11
SI 39-8
SI 36-7
SI 35-11
SI 11-8
SI 37-11
SI 43-4
遺構外出土-21

砥石・硯

1

2

3

1　SI 1　　3　SI 2

2　SI 1かまど

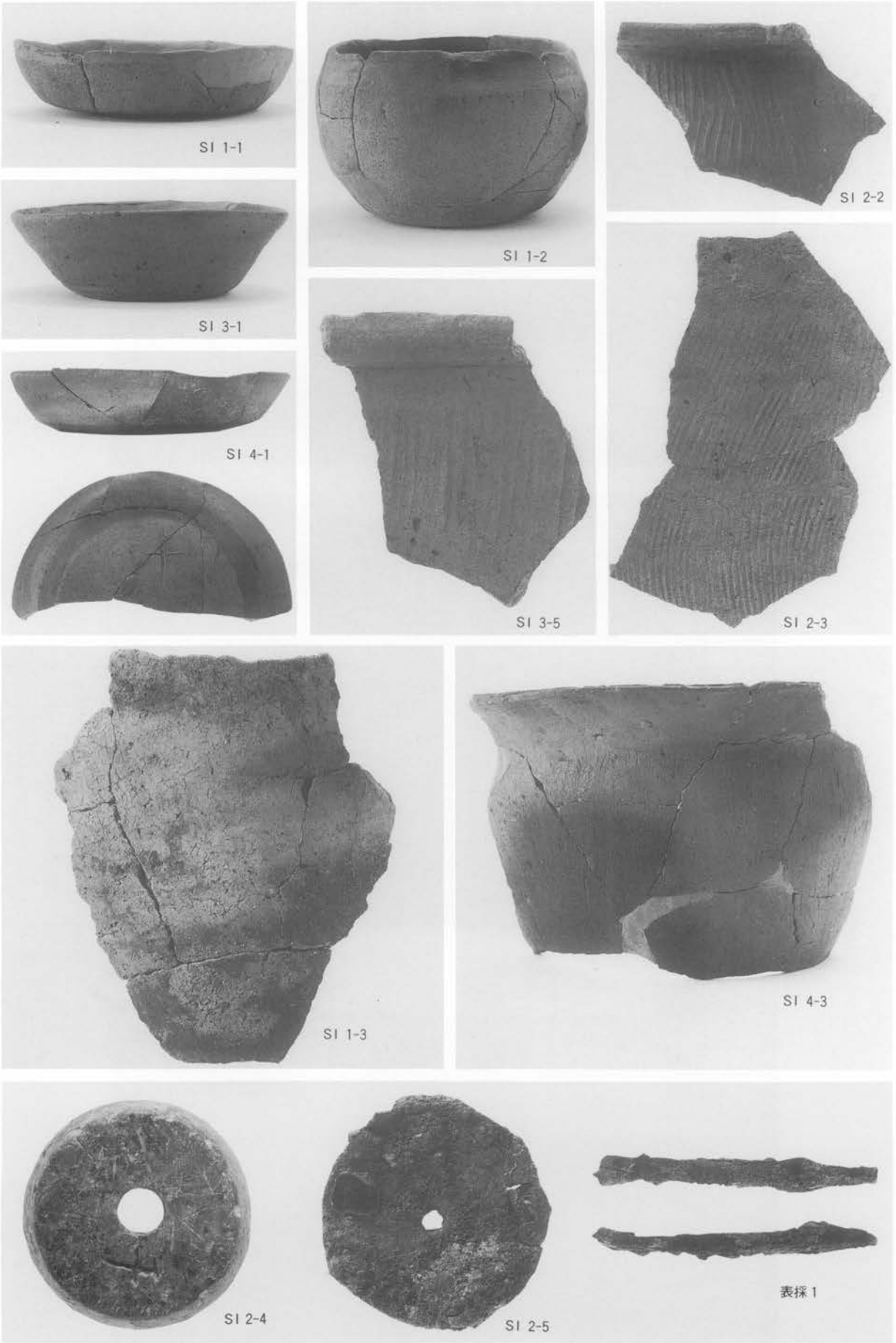
1

2

3

1　SI 3　　3　SI 4・5

2　SI 4



SI 1～4出土遺物・表採遺物

1

2

3

1　発掘調査前風景

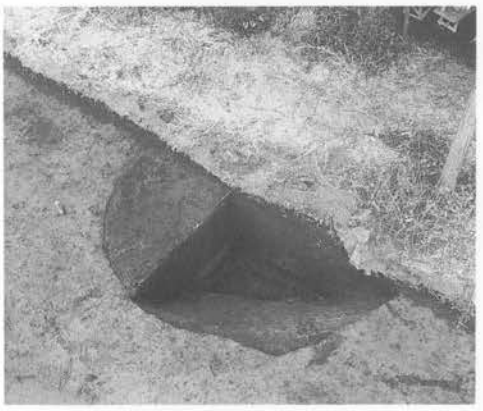
2　旧石器時代石器集中地点全体　東から

3　旧石器時代石器集中地点西地区　北から

1

2

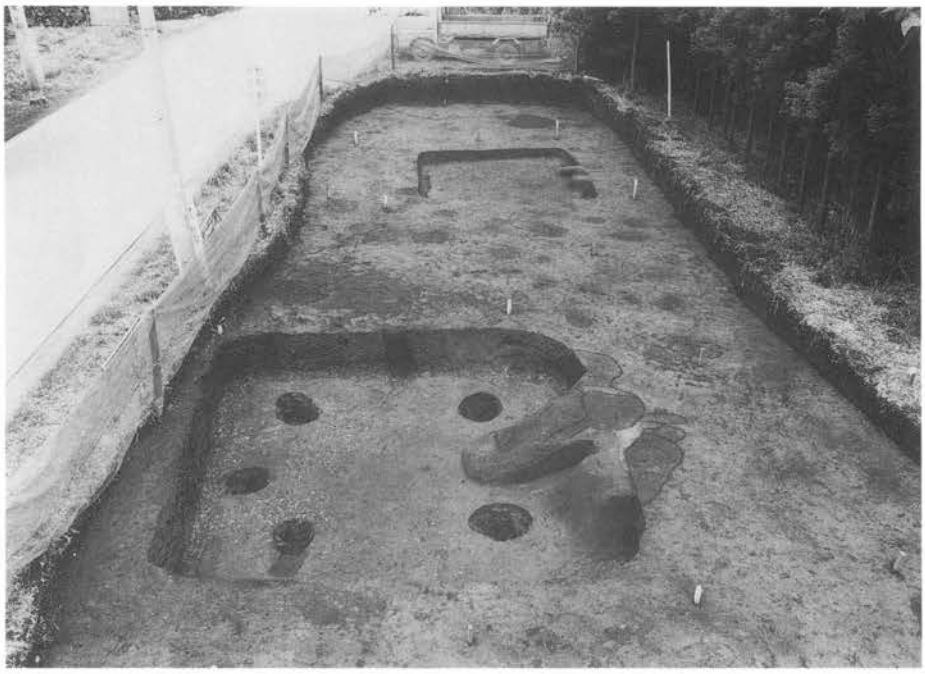
3



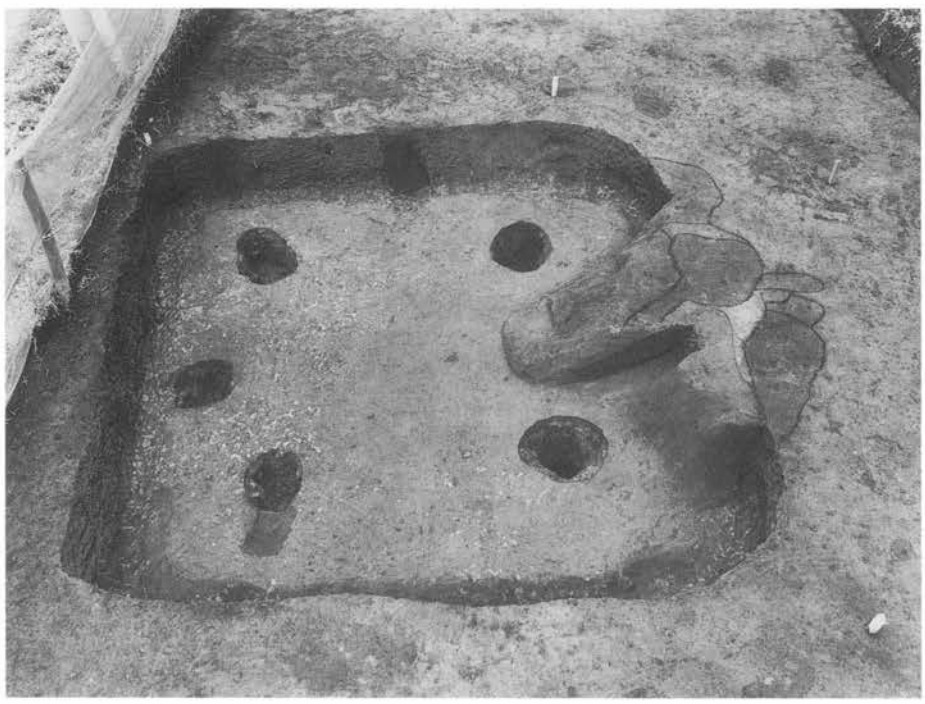
4

5

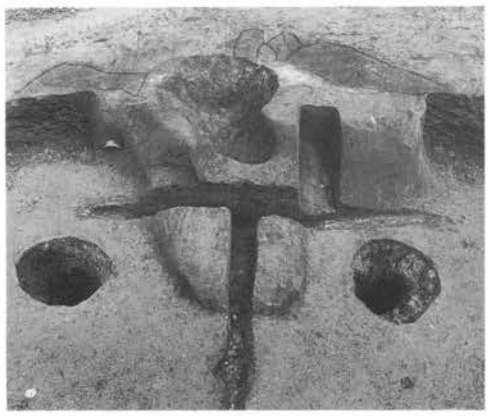
1　旧石器時代石器集中地点東地区　北から
2　SX 2
3　SX 3
4　SX 1半裁
5　SX 1



1



2



3

4

1　SI 1・2

2　SI 2

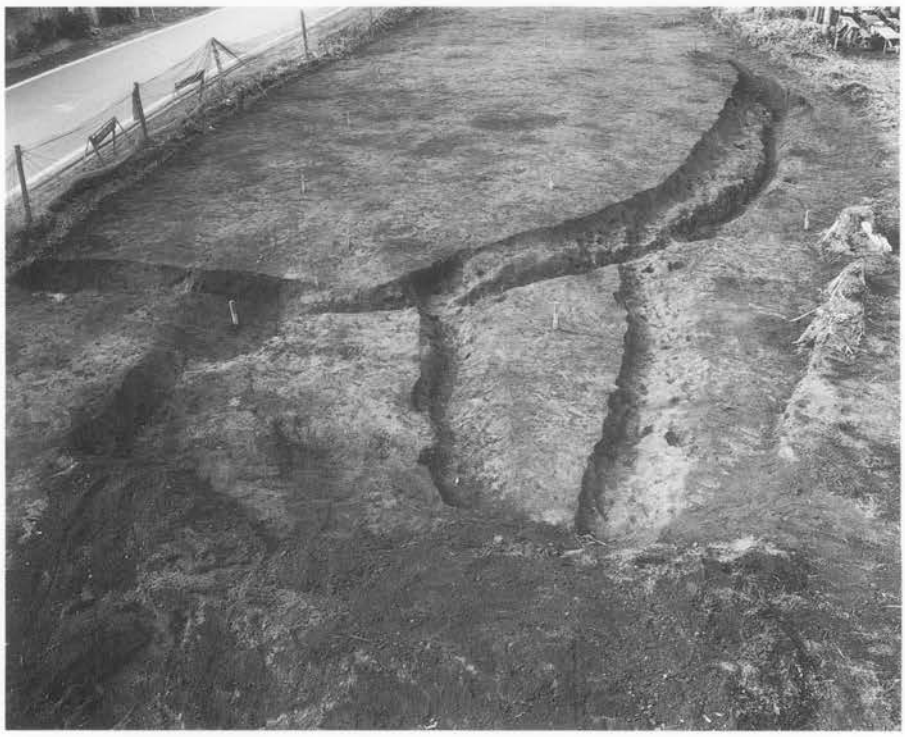
3　SI 2かまど

4　SI 2鉄製紡錘車出土状況

1

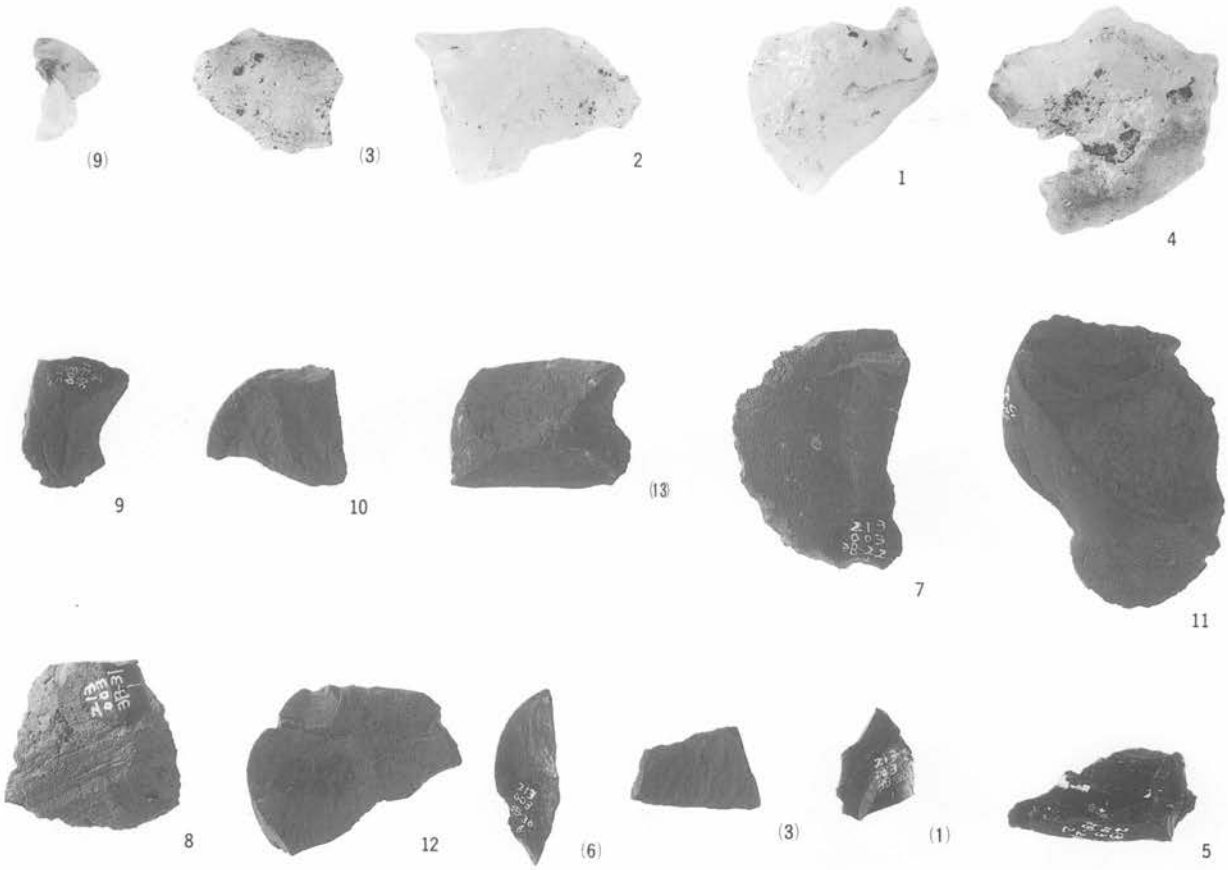
2

3



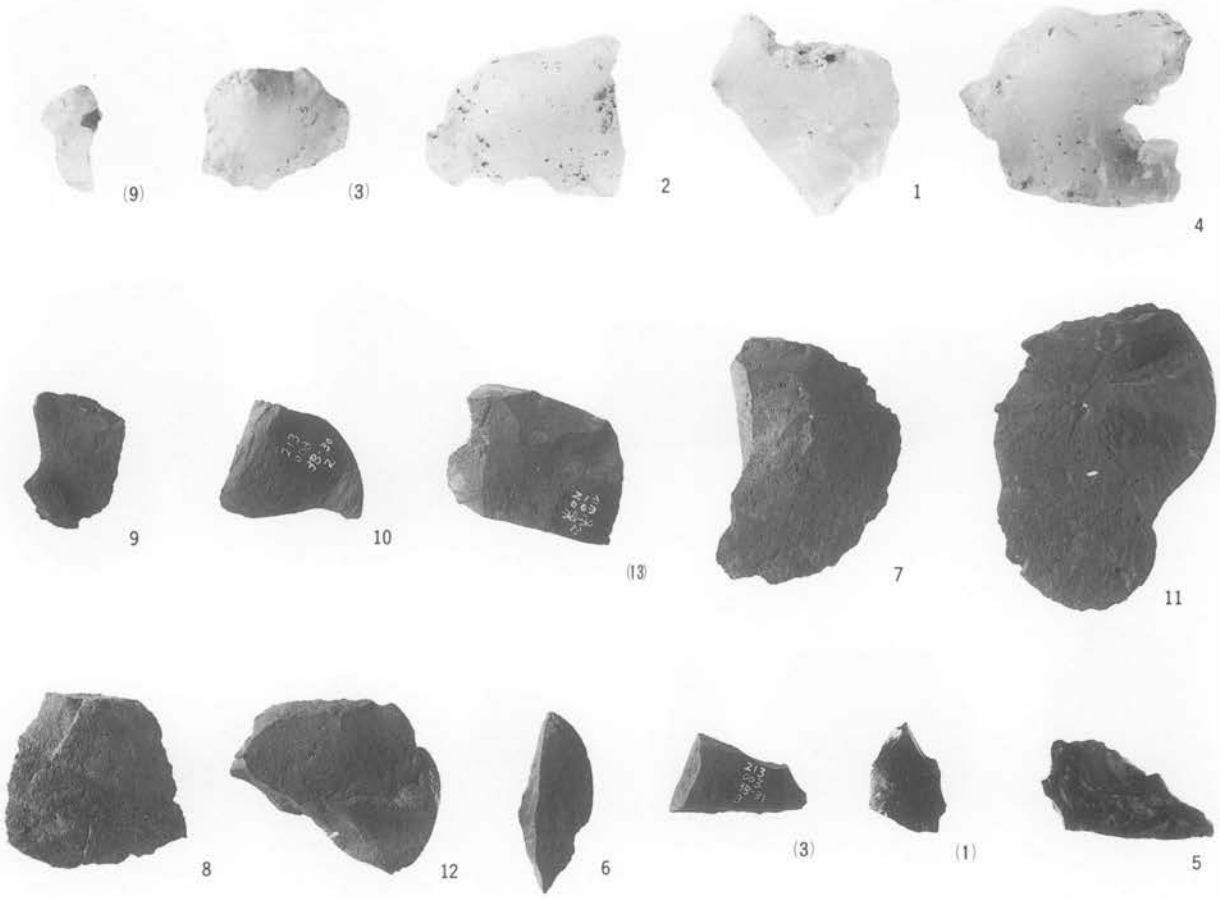
4

1　SI 1
2　SI 1かまど
3　SD 2
4　SD 1



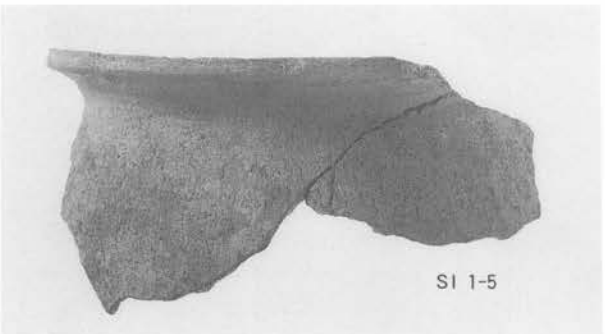
出土石器（1） 正面

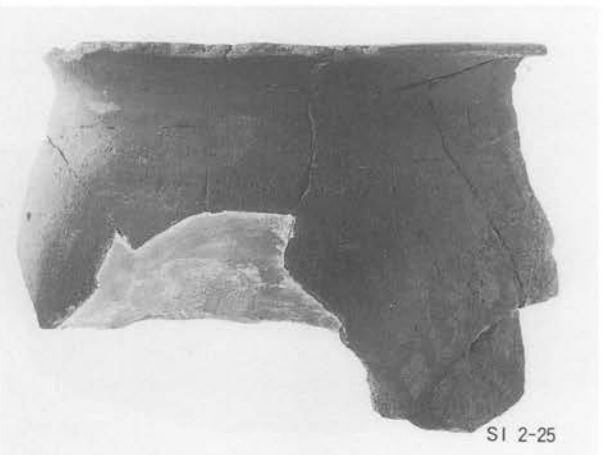
出土石器（2）

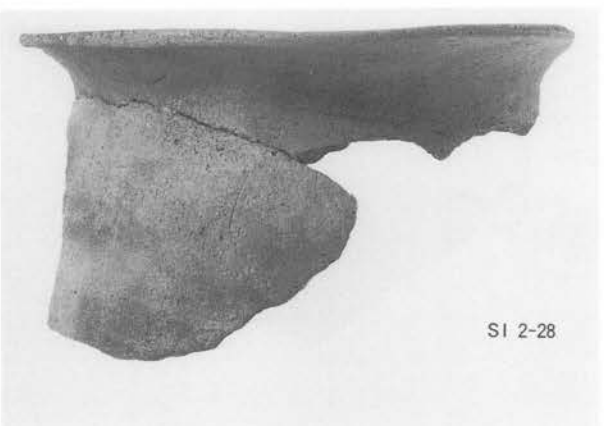


出土石器（3）裏面

出土石器（4）

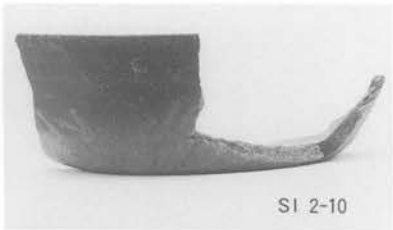






SI 1・2出土遺物

SI 2-8


SI 2-10

SI 2-11

SI 2-13

SI 2-15

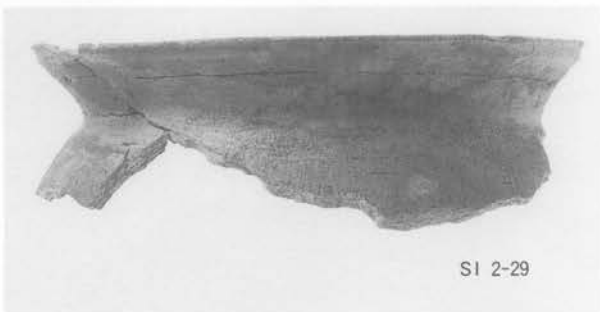
SI 2-16

SI 2-17

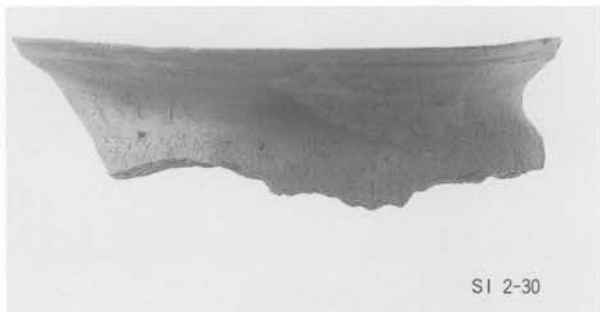
SI 2-19

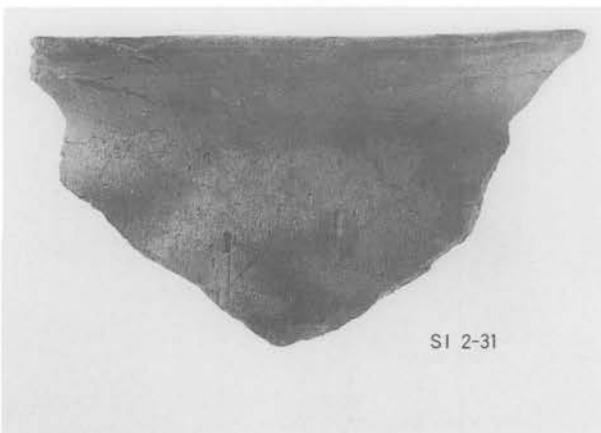
SI 2-44

SI 2-26


SI 2-29

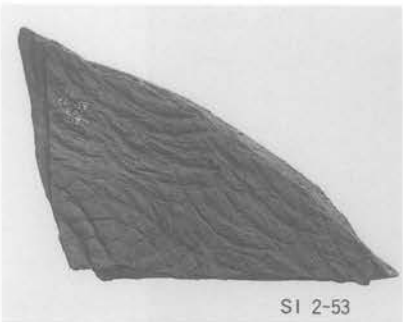
SI 2-52

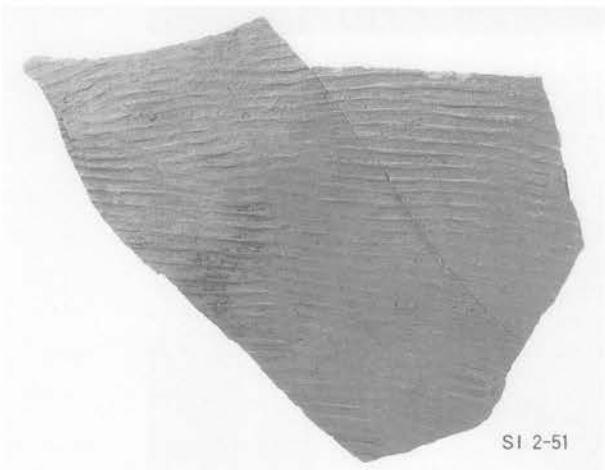

SI 2-30

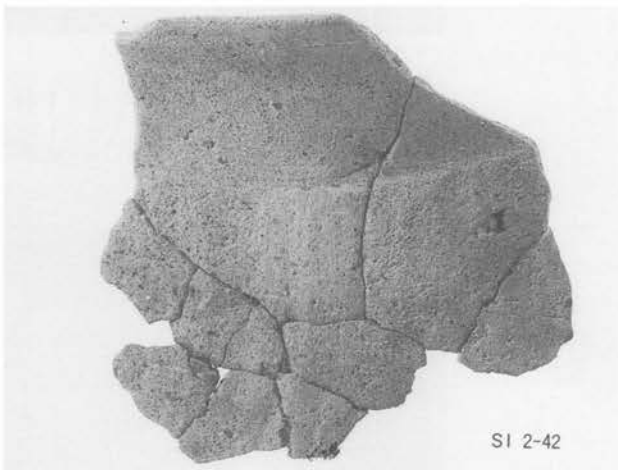

SI 2-31

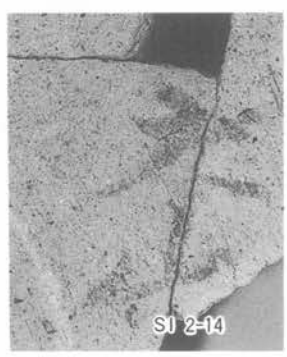
SI 2-41

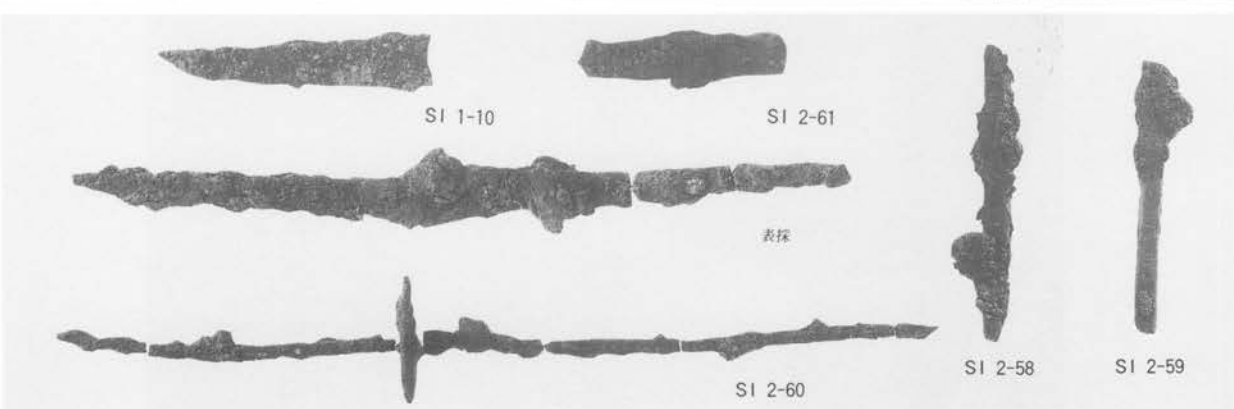
SI 2出土遺物











SI 1・2出土遺物・金属製品

1

2

3

1　発掘調査前風景　　3　SD 1

2　SX 1・2

3-1

3-3

3-14

3-7

3-30

3-39

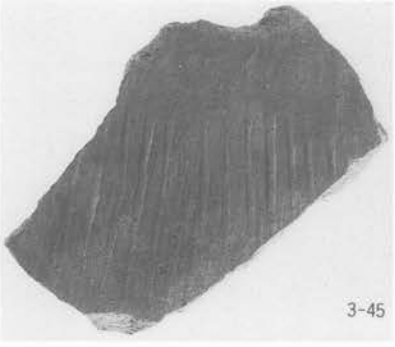
3-22

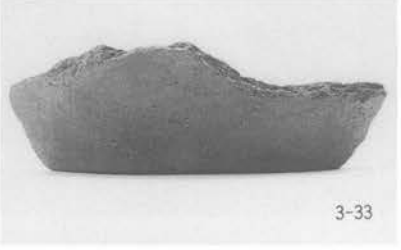
3-24

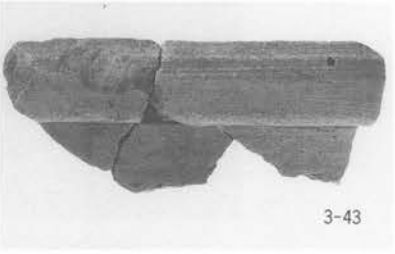
3-34

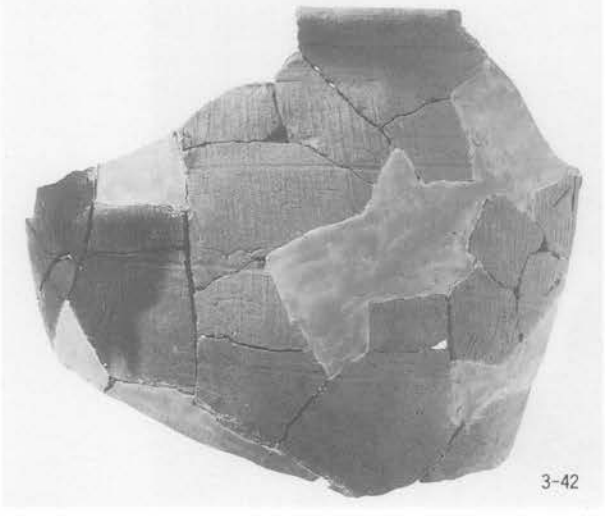
3-20

3-36


3-45


3-33


3-43

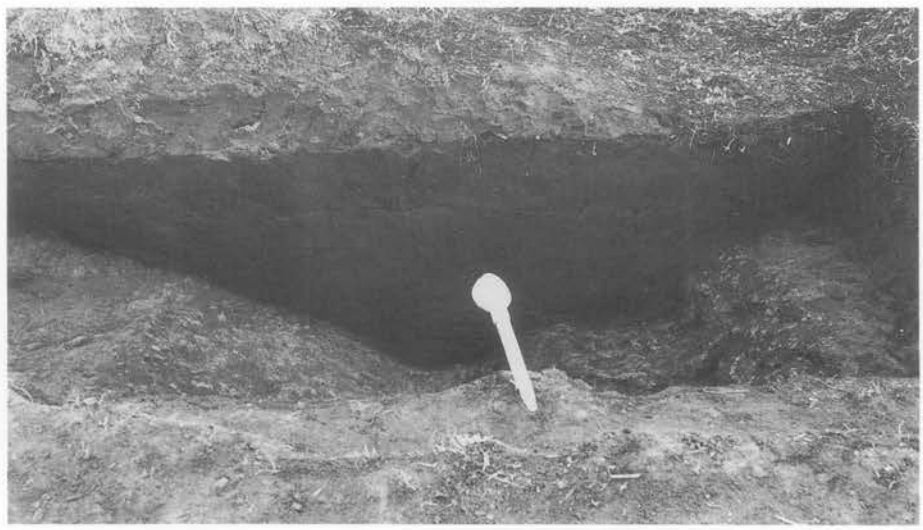

3-42

5-4

3区・5区出土遺物

1

2



3

1　発掘調査前風景
2　溝検出状況
3　溝断面

報告書抄録

ふりがな	けんどうやまだだいおおあみしらさとせんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょいち
書名	県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書1
副書名	大網白里町一本松遺跡・山田台No.6－2遺跡、東金市山田水呑遺跡・山田新田III遺跡・山田新田所在馬土手
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第300集
編著者名	鳴田浩司、小林信一
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809番地2　TEL　043(422)8811
発行年月日	西暦　1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
一本松遺跡	千葉県山武郡大網白里町大字餅の木字八幡台541-1ほか	12402	003	35度32分24秒	140度18分13秒	19920107～19920330 19920601～19920930	5,500m²	道路建設に伴う事前調査
山田台No.6－2遺跡	山武郡大網白里町大字小西字一本松	12402	005	35度32分34秒	140度18分11秒	19930108～19930129	172m²	同上
山田水呑遺跡	東金市山田水呑台1,217-6ほか	12213	003	35度33分58秒	140度17分49秒	19880701～198880729	580m²	同上
山田新田III遺跡	東金市山田新田1,155ほか	12213	018	35度33分38秒	140度17分52秒	19921201～19930129	1,700m²	同上
山田新田所在馬土手	東金市山田新田1,155ほか	12213	009	35度33分34秒	140度17分54秒	19921214 19921225	50m²	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一本松遺跡	集落	旧石器	石器集中地点9か所	ナイフ形石器・楔形石器・小石刃・削器・石核・剥片	小石刃生産を特徴とするVII層段階の石器群
		縄文		早期の撚糸文系土器・条痕文系土器前期・中期・後期の土器、土器片錘石器	縄文後期の所産と考えられる石剣出土
		弥生		後期の土器	
		古墳～平安	竪穴住居後 45軒 土坑 3基 奈良・平安時代の掘立柱建物跡 18棟 井戸 1基	土師器、ロクロ土師器、須恵器、鉄製品	「万所」・「所」・「幡」・「上」・「大立」・「山」等の墨書土器が出土
		中世	土坑墓 1基 溝 1条		
山田台No.6-2遺跡	集落	奈良・平安	竪穴住居跡 5軒	土師器・須恵器、石製紡錘車	石製紡錘車に「千」の刻書が見られる。
山田水呑遺跡	集落	旧石器	石器集中地点 2か所	削器・石核・剥片	VII層段階の石器群
		縄文	陥穴 2基		
		奈良	竪穴住居跡 2軒	土師器・須恵器、鉄製刀子・紡錘車	「大山」と書かれた墨書土器が出土
		中・近世	土坑 1基 溝条遺構 2条		
山田新田III遺跡		平安	包含層	土師器・須恵器、平瓦・丸瓦	
	土坑	中・近世	土坑 2基 溝状遺構 1基		
山田新田所在馬土手	野馬土手	近世	野馬土手及びそれに伴う溝1条		

千葉県文化財センター調査報告第300集

県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書1

大網白里町一本松遺跡・山田台No.6－2遺跡
東金市山田水呑遺跡・山田新田III遺跡・山田新田所在馬土手

平成9年3月31日発行

編　　集　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　千　葉　県　土　木　部
千葉市中央区市場町1丁目1番

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印　　刷　株式会社　弘報社印刷
千葉市緑区古市場町474-268